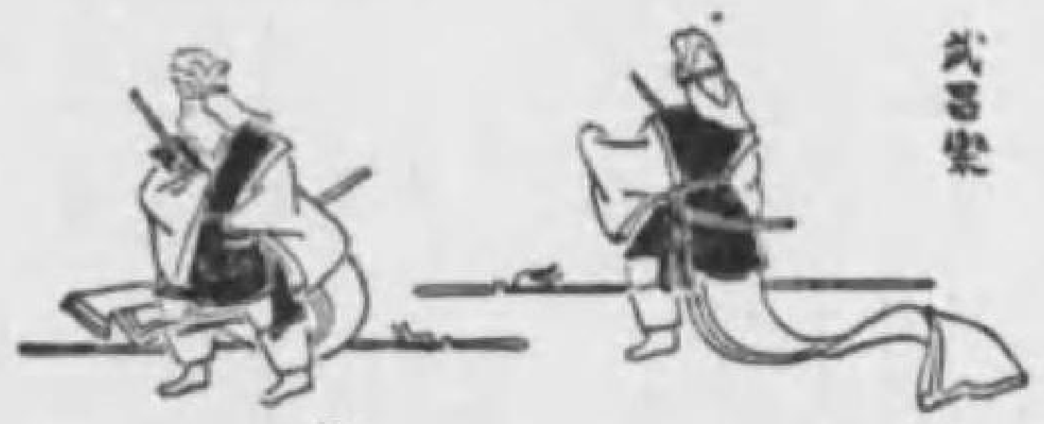
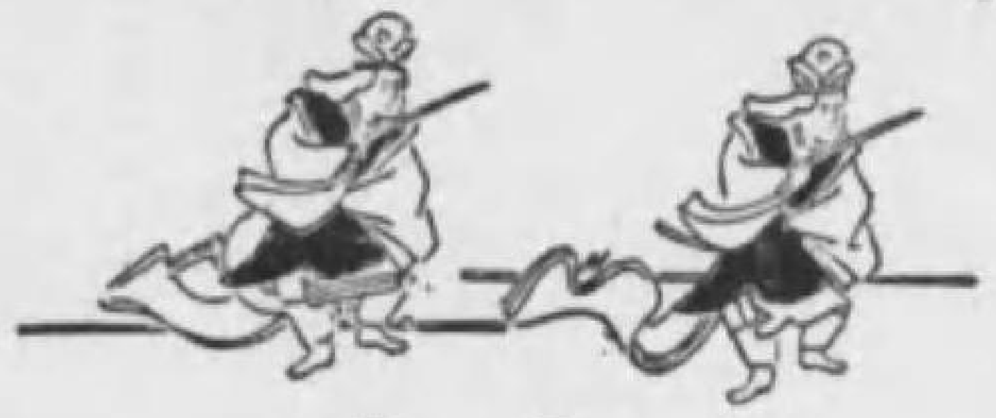
するもの二篇、蛇に關するもの二篇、鯛に關するもの二篇、熊に關するもの二篇、猩に關するもの二篇、龜に關するもの一篇、蜘に關するもの一篇　正體の解らぬ動物に關するものの三篇。次に天狗說話五篇がある。幽靈說話と見るべきものは十篇を數へる事が出來る。怪婚說話としては、一の八、調介姿繪の女と契りし事、三の三十、小青妾の幽靈と物語せし事（白狐の靈）の二篇がある。その他、ろくろ首に關するもの、技藝說話・實話、鬼に關するもの各一篇がある。目次の終に「以上前編終、後編後より出し申し候」とあるが、後編は出版せられてゐない。強ひて百物語の數を揃へようとした爲め說話の構成が單純となり、座談的形式を持つやうになつてゐる。これは百物語系の說話が假名草子式小話より漸次小說的構成へと展開して來た徑路を逆に元へ戾らうとする傾を示してゐるものである。それだけ藝術的には價値の低いものとなつてゐる。（小澤）

太平樂（たいへいらく）　雅樂舞曲【名義】天下太平を祝ふ樂の意か。【異稱】武昌太平樂・項莊鴻門曲・巾舞・秦平樂・武將太平樂【性質】唐樂。新樂の中曲。太食調曲に屬する。道行に朝小子（拍子十二、夾四拍子加）を用ひ、破に武昌樂（二結拍子二十）を用ひ、急に合歡鹽（拍子十六）を用ひる。舞があり四人で舞ふ。舞人は金の鎧を着、甲をかぶり、劍を帶び、鉾をとり、魚袋と稱する魚形の弓袋を左腰より背に負ひ、右腰に胡籙をつけ、破陣に臨んだ有樣にて舞ふ。初めは鉾をとり、後には鉾を地に置いて劍をぬき、これを打ち振りつつ舞ふ。非常に勇壯なものである。答舞には「倍臚」を用ひ、或は「狛桙」を用ひる。近來は新帝陛下の御卽位禮に際し、「萬歲樂」と共に必ずこの舞を行はせ給ふ例となつてゐる。【沿革】「太平樂」と稱すべきものは、支那に多くある。唐の「武德太平樂」は、「五方獅子舞」とも稱し、五方の獅子がその方の色に從つて毛を綴つて衣として舞ふといふが、この「太平樂」は、それとは全く別種である。又公莫舞卽ち巾舞と混じ、漢高祖鴻門の會で項莊の劍舞した事を以て、この樂であると稱する說もあるが、それは單にその舞容の似た所から出た附會の說であらう。



武昌樂



太平樂

我が國には古く「武昌太平樂」として傳來したのを、仁明天皇の頃、樂制改革に際して「朝小子」「武昌樂」「合歡鹽」の三曲を組合せて一曲とし、これを「太平樂」と呼び、「皇帝破陣樂」の如く、常裝束に劍を帶び鉾を持つて舞うたのであるが、近代に至りその服裝を改め、「秦王破陣樂」に於ける服裝をその儘用ひて、鎧・甲冑を用ひるやうになつたものである。（田邊）

太平樂卷物（たいへいらくのまきもの）　洒落本　一册【作者】天竺老人（風來山人）【畫工】峰雨【名稱】一名「お千代の傳」、太平樂は唐樂、江戶時代に勝手な言を吐くのを太平樂と云つたから兩義を掛けた寓。お千代は篇中の女主人公の名。【刊行】單行本は未詳。「風來六々部集」（安永九年）にも入つてゐる。【讀本】風來山人傑作集（帝國文庫）・風來山人集（有朋堂文庫）・狂文俳文集（近代日本文學大系）等所收。【題材】明かに山岡明阿彌作の「跖婦人傳」（別項）の構想に據つたものである。該作は三浦屋高尾が自分の妹女郎青柳の姉おせきが、入江町の夜鷹になつてゐるのを吉原へ連れ行かうと說服にかゝり、却つておせきの氣焰にやり込められると云ふ筋である。本篇中の船饅頭（船中の賣春婦）のお千代は寶曆頃實在した婦人で、この女の乘つた舟をお千代舟と稱した。【梗概】茲に、ぼちや〳〵のお千代舟と稱する船饅頭があつた。頃しも夏の最中、橫町の藝者二人、仲間の小まきと舟で歸る途中、咄の種にとお千代を船へ呼んで、「あつたら器量を持ちながら、いやしい商賣、せめて色里の河岸へなりと出なさる方がよくはあるまいか、もし又藝者になる氣なら私の妹分にしてひき廻して上げやんせう」と云へば、お千代はふき出して逆に大氣焰を吐いて、「昔から變らぬものは廓の風俗、年中行事、變り果てたのは女郎衆の體たらく」と、遊女の心のさもしさを罵り、次に「偖お前方は高い衣裳持物を身につけて、十八九兩が物はある。お前方晝夜のつとめが二人して三歩づつ、分けた所が一歩二朱、月三十日賣りつめても十兩あまり、それでそんな衣裳が出來ようかえ、うはべ許りは娘でも、裏は賣女からつりを取るお前方の身の上」と、藝者を舌頭に罵殺して悠々と去る。【構想】「跖婦人傳」では、一流の遊女も夜鷹も稼ぎに變りのない事、表面を飾らねばならぬだけ遊女に苦しみがあると、夜鷹のために萬丈の氣焰をあげたのであるが、本篇は一轉して遊女の金を貪るきたなさから、踊子の表面は美しく見せても、やはり賣淫婦に過ぎないことを、お千代の口を借りて罵倒した作者の氣焰なのである。作者は、「蛇蛻青大通」（別項）で、遊客を嘲り、本書で當時の遊女踊子を嘲つてゐる。（山崎）

大寶律令（たいほうりつりやう）　國史　律六卷　令十一卷【編者】刑部親王・藤原不比等・粟田眞人等十九人【成立】大寶元年【諸本】完本は傳はらない。しかし養老律と見做すべき律疏（群書類從本・日本古代法典本）、養老令の註釋書たる「令義解」（慶安板本・寬政板本・國史大系本）、「令集解」（明治五年刊本・國書刊行會本・皇學叢書本）の二書及びその他の古書に引く律令の逸文より大部分はこれを類推する事ができる。【解說】【律令の沿革】律及び令は、古く支那に於て共に法律を意味した言葉であつたが、魏晉の頃から意味が分化し、律は主として禁止法たる刑法を指し、令は命令法たる行政法・訴訟法・民法などを指すやうになり、爾來兩者相竝んで編せられ、國家統治の根本法典を成した。我が國では天智天皇七年に編された所謂近江令を以て令編纂の嚆矢とする。この時律は未だ編せられるに及ばなかつたが、天武天皇の御代に律令共に編せられ、文武天皇に至つて更に又大規模の編纂が行はれ、大寶元年に出來上つたのが大寶律令である。而も元正天皇の養老年中には三度その編纂が行はれ、今日に傳はるものは實にこの最後の律令に外ならぬのであるが、大寶律令を以て劃時代的のものとする考はその當時より行はれてゐた事、養老律令の編纂後も天平勝寶九年までは大寶律令が施行せられてゐた事、及び養老律令の內容は大寶律令とさのみ大なる差異なかつたと考へられる事等の理由より、普通には大寶律令の名が最も流布し、便宜上養老律令の名に代つて用ひられることも亦甚だ多いのである。【內容】養老律は、名例・衞禁・職制・戶婚・廐庫・擅興・賊盜・鬪訟・詐僞・雜・捕亡・斷獄の十二篇に分れ、養老令は官位・職員・後宮職員・東宮職員・家令職員・神祇・僧尼・戶・田・賦役・學・選敍・繼嗣・考課・祿・宮衞・軍防・儀制・衣服・營繕・公式・倉庫・廐牧・醫疾・假寧・喪葬・關市・捕亡・獄・雜の三十篇に分れ、各篇多くの條文より成つてゐるが、大寶律令も亦これと同じ組織であつたと考へられる（職員が、官員とあり、考課が考仕とあつたやうな篇名の差異はある）。そしてこの組織は、概ね支那のそれに據つたものであるが、法令の內容に至つても彼に準據してゐる所は頗る多い。中には彼の條文をその儘移植した如き所も見うけられる。併し概していへば、支那律令に向つて一應の批判を加へ、その不合理を修正し、國情に適せざるを變改してゐるのであつて、編者の識見乃至苦心はこれを隨所に看取することができるのである。【價値】次に篇目によつても知られる通り、律令の規定する所は統治組織・國民生活のあらゆる方面に亙つて居り、且つ奈良朝や平安朝初期にはかなり嚴格に施行せられたと考へられるから、當代の社會狀態を論ずるには、まづこれによつて基礎知識を得る事が最も肝要である。又その後も近世まで朝廷を中心として行はれた法は、律令法及びそれから派生したものであつたから、廣く國史一般の理解に於ても、律令の知識を輕んずべきではない。【註釋書】現今に傳はる註釋書は、養老令に關したものばかりであるが、次に主要なものをあげる。令義解（淸原夏野等）○令集解（惟宗直本）○令抄（一條兼良）○標注令義解校本（近藤芳樹）○令義解講義（小中村淸矩）【參考】律令考（佐藤誠實「國學院雜誌」五・六）○法制史之研究（三浦周行）○法制史論集（中田薰）○律令の研究（瀧川政次郞）（坂本）

大菩薩峠（だいぼさつたうげ）　小說【作者】中里介山【發表】明治末年頃起稿、大正二年九月初めて都新聞に發表、斷續約十年間に及ぶ。一時絕筆し、數年讀書沈思の後續稿、その一部分を東京日々新聞、國民新聞に揭載した。【刊行】大正七年春、文選植字印刷とともに自力にて「鈴鹿山の卷」まで二卷刊行、翌八年十月から同九年十月までの間に「伯耆の安綱の卷」十二卷を自費出版。同十年五月、新たに書肆（春秋社）によつて、第一卷から刊行され、第十册第二十卷「禹門三級の卷」に及んで一先づ完結。大正十二年、縮刷版刊行。續稿後册數追加、昭和二年普及版刊行、續後普及版型のまゝ第十册に及んで、現在なほ完結してゐない。【卷名】未曾有の長篇ゆゑ、今普及版によつて各册の卷名を舉げて置く。

第一「甲源一刀流の卷」○第二「鈴鹿山の卷」○第三「壬生と島原の卷」○第四「三輪の神杉の卷」○第五「龍神の卷」第六○「間の山の卷」（以上第一册）○第七「東海道の卷」○第八「白根山の卷」○第九「女子と小人の卷」○第十「市中騷動の卷」○第十一「駒井能登守の卷」○第十二「伯耆の安綱の卷」（以上第二册）○第十三「如法闇夜の卷」○第十四「お銀樣の卷」○第十五「慢心和尙の卷」○第十六「道庵と鯔八の卷」（以上第三册）○第十七「黑業白業の卷」○第十八「安房の國の卷」○第十九「小名路の卷」○第二十「禹門三級の卷」（以上第四册）○第廿一「無明の卷」○第廿二「白骨の卷」○第廿三「他生の卷」（上）（以上第五册）○第廿三「他生の卷」（下）○第廿四「流轉の卷」○第廿五「みちりやの卷」（以上第六册）○第廿六「めいろの卷」○第廿七「鈴慕の卷」○第廿八「Ｏｃｅａｎの卷」（以上第七册）○第廿九「年魚市の卷」（第八册）○第三十「畜生谷の卷」○第卅一「勿來の卷」（以上第九册）○第卅二「弁信の卷」（第十册）。

【梗概】普及版第十册には、著者撰定の精細な梗概がある。時代は德川の末。机龍之助は武州御嶽山の奉納試合に、相手の宇津木文之丞を打殺す。その背後にはお濱なる女の擬像が絡んでゐる。文之丞の弟兵馬少年は龍之助を仇と狙ふ。龍之助は女と共に江戶に立ち退いて潛伏すること三年、荒んだ氣持からお濱との生活が氣まづくなり、遂に女を斬つて新徵組の浪士と共に京都に向ふ。だが京都にも落つかれず大和路に入り、故あつて江戶へ歸る途中、妙な機緣から天誅組の浪士と十津川に立て籠る。戰敗れた落人の龍之助は、火藥で盲目となつた不自由な身で、紀州龍神の溫泉に隱れてゐるうち、ある女の助けを得て、伊勢に渡り眼の療治をする。この間兵馬は俠盜七兵衞の助力を得て影の如く龍之助を追ふ。龍之助は江戶に歸るつもりで、東海道を下るとき、七兵衞の知るところとなり、いつしか三保松原で兵馬と出合ふ羽目になるが、七兵衞の敵役破落戶百藏なるものの惡戲から、思はぬ山の娘達の手引で遂に甲州に入る。とど甲府勤番の旗本神尾の邸に身を潛め、夜々幽鬼の如く市中に彷徨して辻斬りをする。兵馬と七兵衞も龍之助を追うて甲州入りをする。神尾が喰物にしようとした土豪藤原家の女お銀樣を助けた龍之助は、この女と神尾の邸を出て先妻お濱の家に落ちる。併しお濱の一念で又血に狂ふことになる。二人は緣あつて江戶に出で、染井の化物屋敷とよぶ神尾の邸に隱れる。龍之助の惡血はまだ鎭まらぬ。この頃から龍之助の生活に辨信なる小法師が伴ふ。龍之助はおわかとの新たな關係から武州高尾山の蛇瀧に參籠して眼を養ふ。次いで月見寺に寓してお雪ちやんに侍づかれる頃から、いつとはなく時々心境が和らぐ。お雪ちやんの勸めで信州白骨の溫泉に赴き冬籠りをする。だがお雪ちやんの遣瀨ない心の痛みから新たに二人だけの隱家を求めようとして加賀の白山に向ふ。その途中飛驒の高山で計らざる珍事に捲き込まれる。兵馬は龍之助を、辨信はお雪ちやんを、それ〴〵種々樣々な目にあひつつ尋ねもとめて來る。【附言】この作が日本文學史上、比較を絕した長篇であり、一代の讀書界を風靡した大作である事はいふまでもないが、嚴密な意味の史的批評を下すことは作品未完の今日控へるを是とする。ただこの作の理解に役立つキイを二三述ぶれば、第一この作は全部一時の宿構になるものではなくて、著者と共に生長した小說なること、從つて最初はともかく、後には著者の心境が卽ち小說の趣向となること、又所謂主人公なるものが置かれてないこと、第二にこの作が、從來の日本文學上の、否國民生活上の傳統を集大成した感じを與へること、第三に著者は、所謂文壇とは接觸をもたず、文壇的イデオロギイを離絕してゐること、第四に著者の藝術とは卽ち宗教的光明の謂ひであること等である。（柳田〈泉〉）

臺本（だいほん）　「臺帳」を見よ。

代名詞 だいめいし　文法　【名稱】中金正衡の「大倭語學手引草」に始めて見える。西洋文法の譯語から來たものである。「指詞」と稱けたものもある（草野氏「日本文法」の如き）。【解說】事物の名をいはず、事物そのものを直に指していふ體言である。【種類】通常、これを人代名詞と指示代名詞とに分つ。人代名詞は人をさしていふもの。指示代名詞は事物・場所・方向等をさしていふもので、人代名詞には自稱（談話者自ら言ふ）・對稱（對手をさしていふ）・他稱（談話者及び對手以外のものをいふ。或は一人稱・二人稱・三人稱ともいふ）を區別し、指示代名詞には、近稱（談話者に近いもの）・遠稱（談話者にも對手にも遠いもの）・中稱（對手に近いもの）を區別してゐる。【特徵】國語に於ては指示代名詞は簡單であり、人代名詞は複雜である。それは人代名詞が待遇に支配される結果から來てゐる。われ〳〵は談話をなす際に、常に對手が同等であるか、同等以下か、同等以上かと云ふことを意識においてゐる。代名詞に於て、それが最も著しく顯はれる。對話に於ける話す者の態度は三通りに分けられる。話す者と對手とが同等の間柄の場合（常體）、話す者が對手に對して目下である場合（敬體）、話す者が對手より目上である場合（侮體）である。殊に使ひ慣れた語は、次第に敬意が失せるから、それに代る者が、次第に補充されて愈々その數を加へる。「貴樣」の如き、敬體にあらはれる敬稱も、元祿時代には侮度の敬稱にかはり、寧ろ親愛の意味を含めて云つたが、今では甚だしい卑稱になつて侮體にのみあらはれる。かくして一の敬稱が卑稱に墮ちると、これに代つて敬稱を現はす新しい語が必要になり、新しい代名詞が生れる。又同時に卑稱になつたものは、從來の卑稱の地位を奪ふ。これが國語の人代名詞の變化し、生滅する所以である。これに反して、指示代名詞は待遇上の支配を受けることが尠く、殆ど古い形をそのまゝ今日に踏襲してゐる。これが指示代名詞の極めて單純なる所以に外ならぬ。又他稱の人代名詞は、普通「かれ」「あれ」だけを擧げるが、もと他稱はみな指示代名詞を轉用したものであるから、指示代名詞と同じく、「かれ」「あれ」があれば、又「これ」もあり、「それ」もある。古典文學は、皆この例に從つてゐる。現代語に於ては、外國語の影響を受けるやうになつてから、純粹の人代名詞としての「彼」「彼女」を用ひんとする樣子が見えるが、まだ雅馴なる國語と成り切つてゐない。普通は「この人」「あの人」「この方」「あの方」などを用ひながら、同じく他稱としては固有なものは無いと云つて差支ない。「この人」「あの人」「この方」「あの方」などが純粹な代名詞と感ぜられず、單語としての意識の弱いことは、現に待遇の意味を加へる時、「この」「あの」の下に、「御」を添へて「この御方」「あの御方」など云ふのを見ても分る。（小林）

題目踊 だいもくをどり　佛教舞踊　【名稱】題目卽ち南無妙法蓮華經を唱へつつ踊る所からいふ。【解說】古來、京都市外松ヶ崎の涌泉寺に行はれて名高い。この寺は、もと歡喜寺と云ひ、天台宗に屬してゐたが、日蓮の法孫日像が德治元年七月、この寺に來て宗旨を改めた時、歸依した村民が歡喜踊躍したのが初めと傳へる。【參考】京都の地誌各種○民俗藝術一ノ二・七（小寺）

鯛屋貞柳 たひやていりう　「油煙齋貞柳」を見よ。

太陽 たいやう　雜誌　【刊行】明治二十八年一月創刊、昭和三年三月廢刊。博文館。【解說】博文館は明治二十年六月創業以來、諸雜誌の論說を抄錄して「日本大家論集」と名づけ、月刊として發刊してゐたが、これが案外に成功した。後、他の小雜誌をも合併して、その後身として生れたのが「太陽」で、創刊は「文藝倶樂部」（別項）「少年世界」と同年であつた。當時の博文館は、出版界の鬼才大橋又太郎（乙羽）を迎へて編輯部を統率せしめ、當時なほ大學に在學中の高山樗牛は、文藝部主任として筆を執つてゐた。樗牛はその後三十年四月以降は全く編輯部內の人として活躍した。當時の「太陽」編輯主任は坪谷水哉で、その下には、鳥谷部銕太郎（春汀）、長谷川誠也（天溪）なども入社して多士濟々、宛然雜誌王國を築いてゐた。「太陽」は元來が政治社會雜誌で、創刊の當初から天下一流の名士を包容してゐたが、文藝方面に於ても、才華煥發の樗牛が美學の研究、文學批評に健筆を揮ひ、創作家の側に於ても篁村・紅葉を初め眉山・花圃・南翠・小波・露伴・漣水・一葉・[illegible]等の順で漸次誌上を飾つて行つた。兎に角三十餘年に亙つてゐるので、大抵の作者が一度は紹介されたのであつた。明治三十年六月は創業十周年に當り、「太陽」の第三卷第十二號を臨時增刊（菊判大）として、過去十年間の代表的名作を以て全頁を埋めた。それは次の七篇であつた。

當世書生氣質（坪內逍遙）・當世商人氣質（饗庭篁村）・浮雲（二葉亭四迷）・浮城物語（矢野龍溪）・大詩人（森田思軒）・埋木（森鷗外）・二人女房（尾崎紅葉）

外に高山樗牛は「明治の小說」なる三十頁に亙る論文を發表した。後、明治四十年六月の創業二十周年には、第十三卷第九號を「明治名著集」と題し、明治初年からの著名な著述を複刻して、約五百頁の記念號を出し、續いて四十二年二月の臨時增刊には、「明治文藝史」を刊行し、更に昭和二年六月の創業四十周年記念增刊には、「明治大正の文化」を紹介した。その間、三十九年から四十一年にかけての自然主義運動、主として舊套打破の方面に全力を注いだ本誌の熱狂的態度は、本誌として前後に餘り例のなかつた程で、「早稻田文學」（別項）と共に、この運動の急先鋒であつた。當時「太陽」には、主筆として長谷川天溪がゐた。天溪は自然派の闘將で、本誌上へ發表した「現實暴露の悲哀」は、當時の有名な論文であつた。外に天溪は、文藝取締問題、文藝院設立問題に就いても論じてゐた。平出修の創作「逆徒」を揭げて、大正二年の九月號は前後にただ一回の發賣禁止を食つた。【備考】「太陽」は四六倍判で、頁數も分厚く自ら雜誌界の王者を以て任じてゐたが、前記四種の記念號の內、第一・四のものは菊判であつた。なほ一二年、菊判に改めたこともあつたが、大體には四六倍判であつて、創刊當初の定價は僅かに金拾五錢であつた。（齋藤（昌））

太　陽（創刊號）

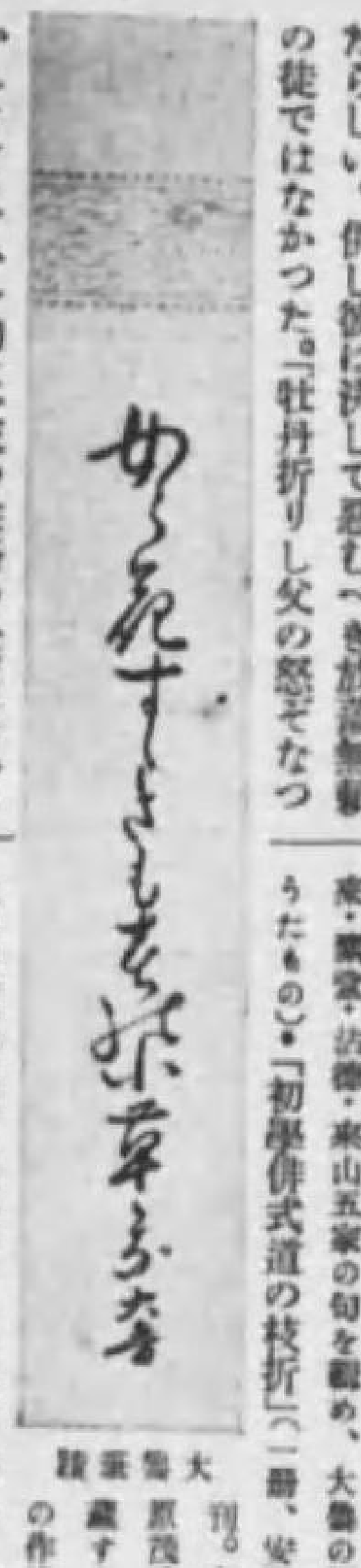
太陽神話 たいやうしんわ　神話　【解說】太陽神話は、神話學と神話學說史とに於て相異なる意義を有してゐる。神話學の上では、太陽神話は太陽の發生・運行・形體・光熱及び太陽神の素性・行動等を說く說話の總稱であつて、太陰神話及び星辰神話に對立する稱呼である。これに反して、神話學說史では特定の意味に限られてゐる。卽ち獨逸の言語學者マックス・ミュラー（Max Müller 1823—1900）が、比較言語學を神話學に適用し、一個の「太陽神話說」を樹立して、日出から日沒までの太陽を中心とする自然現象によつて、すべての神話を解釋しようと試みた。彼の學說に從へば、凡そ神話なるものは、盡く太陽の行動を說くもの、卽ち太陽神話である。この學說の誤謬は、人類學派の神話學者アンドリュー・ラング（Andrew Lang）によつて指摘せられた通りであるが、兎に角神話學說史上の所謂太陽神話は、かうした特殊の意義を含むことを知らなくてはならぬ。【參考】比較神話學（高木敏雄）○神話學概論（西村眞次）‖ Max Müller: *Comparative Mythology.* ‖ Max Müller: *Contributions to the Science of Mythology.* ‖ Lang, A.: *Modern Mythology.*（松村）

平將門 たひらのまさかど　戯曲　四幕五場　【作者】眞山青果【發表】大正十四年一月「中央公論」【刊行】同年三月、「眞山青果戯曲集」（新潮社）第一編所收【初演】昭和二年一月本鄕座、井上正夫一座【題材】大體に於て「將門記」に據り、「本朝文粹」「扶桑略記」を參照したと自註してゐる。【梗概】（一幕）將門一族の土着した下總豐田の鄕は、川一筋を距てて常陸と對してゐる。そこには源護父子がゐて前大掾の權柄を笠に將門一族を威壓した。（二幕）將門は、護の橫道を憤り、襲つてその館を燒いた。その際害に敵方に通じその館に籠つてゐた伯父の國香を誤つて殺した。で將門の館ではその寄手を待ち受けてゐる。だが從弟の貞盛には急に復讐する樣子もない。貞盛の心を量りかねた將門は、意を決して單身貞盛の館を訪ねる。貞盛は將門の氣質も知りその力を恐れてもゐるので、彼との和睦を心から望んでゐる。が二人の叔父に妨げられて、折角訪ねて來た將門に逢ふことも出來ない。將門は深く失望して歸る。（三幕）叔父等は貞盛を語らつて將門を討つたが、却つて散々に破られた。その後彼等は病中の將門を襲つた。將門は慘敗し、妻子は謀叛人のために敵手に落ちる。（四幕）謀叛人への憎惡が將門を奮起させた。將門は大勝し、妻子も貞盛の計ひで無事に歸る。この戰捷を將門は祝はうとしない。貞盛の心が解らない、今は謀叛人への憎惡も消えた。そこへ貞盛が都路へ向つたとの知らせが來る。追ふのだ、後患を除くのは今だと弟の三郎がいふ。將門は促されて悄然と立ち上る。【解說】この作は眞山氏の作品中、最も大部なものである。彼の戯曲はその構成の緊密と性格描寫の精緻深刻な點で何人も及び難い長所を持つてゐる。主人公將門の偉大な性格が如何にして周圍と葛藤を釀成するかといふ點から見れば、又一篇の運命悲劇であるとも言へるのがこの戯曲である。史實については十分な調査研究が行はれてゐる。恐らく大正末期に現はれた戯曲の內、最も傑出したものであらう。同年の「叛逆の將門」と共に二部曲をなす。その前篇をなす本作には私闘時代の將門が描かれてゐる。後篇は將門の勢力漸く強大となるところより筆を起して、環境と時勢とに激せられて遂に叛する迄の徑路を描寫してゐる。本作は所謂作者十年の雌伏より起つて世に問うたもので、當時世評嘖々たるものがあつた。なほこの作の上演は、藝術的には異常の成功を贏したにも拘らず、興行的には甚だしい失敗を招いた。（長田）

泰里 たいり　「古友尼」を見よ。

大漁踊 たいれふをどり　舞踊　【解說】漁村に於ける大漁踊は、農村に於ける田植の神事や豐年踊に對照せられる。大漁踊の行はれる機會は二通りあつて、第一に魚が少しも取れぬ時に祈禱の意味で行はれる。「八江萩名所圖會」に記された長州玉江の浦にこれがある。惠比須と大黑の舞があり、次に十人ばかりが刀を下げて天狗拍子の舞を踊る。かくすれば大漁ありと信ぜられてゐる。第二には大漁の時に行はれる。これは漁夫の歡喜を示すと共に、魚の供養及び魚の復讐を避けるためのものと解釋せられる。演劇史上に一つの地位を占める風習である。（小寺）

大魯 たいろ　俳人　【姓名】吉分爲虎。又司氏（俳諧家譜拾遺）・今田氏（大魯頭）等とも傳へてゐる。併し安永三年自筆の秋興八首に、「大坂吉大魯」と署してゐるから、吉分（吉別）氏に從ふがよからう。字は君威。【別號】月下庵・芦陰舍【生歿】安永七年（二四三八）十一月十三日京都の旅寓に歿す。享年五十位。【墓所】洛北金福寺。又別に神戸柴島寺境內にも墳がある。【閱歷】大魯は、阿波國德島の藩士であつた。公務の餘暇、風流の志深く、初めそこの寺島なる一社中に屬して俳諧をやり、當時南阿州地方に遊歷してゐた二柳等とも相識つた。後、致仕して明和三年（推定）鄕國を辭し京都に出た。「俳諧家譜拾遺」に據れば、最初は望月宋屋と號し、釜座通下立賣上町に住んでゐた。その蕪村に歸したのはいつ頃からか明かでないが、寺村百池の許に藏された蕪村社中の句稿に據れば、明和七年七月一日の句筵に始めて彼の名を見る事が出來る。卽ち蕪村が夜半亭を繼承した當時、几董等と相前後して入門したものと思はれる。爾來その俳才は人々に認められ、就中几董とは最も相許してゐたらしい。安永元年の秋から播州の方へ行脚し、翌二年夏歸京した。そして几董と一夜相會して大に氣焰を揚げつつ、「明烏」（別項）卷頭の兩吟歌仙を興行した。この夏、彼は剃髮して號を大魯と改め、秋の頃又東武に志して京都を去り、浪華に立ち寄つたが、遂に此處に足を留めて、過書町に暫く居を定め、長月庵と呼んだ。當時嘗て鄕國で相識つてゐた二柳も大阪に住んでゐたので、共に力を合せてこの地に蕉門を弘めようと約したが、故あつて大魯は別に芦陰舍と號し、一社を結ぶ事になり芙蓉花・東篁・志慶等を初め、來り屬する者も多かつた。就中一本亭芙蓉花は最も能く彼を支持した。かくて安永五年の秋には更に吳服町に新居を卜して移り住み、芦陰社中の基礎も漸く堅くならうとした。又その間几董や蕪村とは相變らず往來し、大魯の一生中、當時は最も得意時代であつたらしい。然るに彼の一種の性格的缺陷から、社中の人々にも疎外されるに至り、遂に安永六年五月住み馴れた浪華の地も去らねばならなくなつた。當時



大魯墨蹟

彼の作つた感懷八句を讀めば、愛慾悲戚の狀態に惱むべきものがある。かくて妻子と共に殆ど路頭に迷ふ有樣であつたが、兵庫に漂泊の旅の暫しの舍を求め、そこに三遷居を結んだ。而も運命はなほも彼を惠まず、翌七年秋頃から病に犯され、京都に上つて病を養つたが、遂に復び起たずして歿した。【批評】大魯は蕪村に最も深く師事し、蕪村も亦我が門の重鎭であるとその才を賞した。而も彼は、師蕪村の單なる追隨者に終つたのではなかつた。彼の藝術的素質は寧ろ蕪村のそれとは全く違つたものであつた。元來大魯の性格は、直情徑行、物に激し易く、且つ放縱不羈であつたらしい。併し彼は決して惡むべき放蕩無頼の徒ではなかつた。「牡丹折りし父の怒ぞなつかしき」といふ一句に、彼の性格の全面は見られると思ふ。表面だけは强くて、裏面は涙脆い彼であつた。大魯の藝術は要するに彼のこの性格に根ざしてゐる。隨つて蕪村のやうな絢爛とか高雅とか評すべき所謂藝術の香の高い作は彼には求められない。激した體驗した儘さうして悲しんだ儘の僞らない生活記錄が大魯の俳諧であつた。蕪村のやうな手の込んだ技巧は固より全く見られない。ただ直截明快、言はうとする所をその儘に言ひ下してゐる。それは稍もすれば平板な凡作となり終る事もあるが、而も直に讀者の胸を打ち、心に觸れる點に至つては、蕪村の句に求め難い特質を持つてゐる。彼の世に狹ばめられた心と感傷的な嘆きとが、彼の作の中には深く滲んでゐる。少くとも蕪村門にあつて最も異色に富む作家として、彼の作品は十分に鑑賞するに堪へるであらう。只惜しむべきは、彼の句は「芦陰句選」に傳へるもの僅に二百句、更に逸句を集めても合計三百句に滿たないことである。【作品・編著】作品は、彼の歿後、門流が遺稿を集め、蕪村の序と几董の跋とを得て、安永八年「芦陰句選」と題して出版した（河東碧梧桐が解說を附して大正十三年十二月に出した模刻本があり、又名家俳句集（有朋堂文庫）・天明名家句選（俳書大系）等の中に翻刻されてある）。なほ彼の編に成るものに、「俳諧五子稿」（一冊、安永四年刊。浪花の書肆石原茂兵衞が晋水・去來・蘭家・浩擧・來山五家の句を輯め、大魯の閲を乞うたもの）・「初學俳式道の枝折」（一冊、安永三年刊。書肆石原茂兵衞の藏する俳諧の作法書を大魯の校閲を經て出版したもの）などがある。

【門流及子孫】大阪の田邊百堂が芦陰舍二世を繼ぎ、百堂の子竺齋（又竹齋）が更に三世を繼いだ。文政三年大魯五十回忌追善として竺齋の編した「芦陰集」に依つてその傳統は明かである。竹齋は又文政九年にも、大魯追善「名月帖」を撰んだ。但し百堂・竹齋等は大魯から實際に俳系を承け繼いだものでなく、自ら勝手に芦陰舍の號を冒したものらしい。大魯には男子がなかつたと見え、その歿後、吉分晴吉といふ養子が跡を相續した。晴吉は春沓と號して俳諧も聊か嗜み、寛政六年には兵庫八棟精舍（俗稱菊鳥寺）の境內に、「花鳥の編へば春の暮るゝかな」といふ句を刻して父の墳を建てた。なほ大魯の遺弟青彥は、文化七年大魯の三十三回忌に「霜月十三日」を撰び、嘗て蕪村から大魯に送つた手紙と大魯の遺句四章とを掲げ、門友の生き殘つてゐる人々の追悼句を添へて出版した。

【參考】評大魯若尾瀾水（ホトトギス五ノ五）○芦陰舍大魯 穎原退藏（同人五ノ五）○大魯雜記 穎原退藏（同人五ノ七・一二）○大魯の交友 穎原退藏（同人六ノ五）○俳人大魯（大魯の生涯）西田勢之介（早稻田文學二五二）　【穎原】

第六天 だいろくてん 「佛說物の謠曲」を見よ。

田植歌 たうゑうた 歌謠 【名義】早少女が田に苗を植ゑる時に謠ふ歌の意。【沿革】起原は有史以前で、耕田播種の業の起ると殆ど同時に起つたのであらうが、これに用ひた歌は、「枕草子」に賀茂詣の途で、時鳥に關する歌を早少女の謠ふのを聞いたとて、「時鳥をれよかやつよ、をれなきてぞ我は田に立つ」と擧げてあるのを最古とする。いろ〳〵の歌が歷代農民の間に謠はれて來た。近年農作改良の行はれてから大きに減退したが、それでもまだ僻遠の地では、古來から傳唱の歌を謠つてゐる。【種類】事に臨んで作成したものと、年々實際に用ひたものと、神事用のものと三種ある。臨時作成のものは、「榮花物語」治安三年の條、藤原道長が上東門院に田植の樣を御覽に入れた時、奉行の者が新作した歌、「五月雨に裳裾ぬらして植うる田を、君が千とせの御秣にせむ。植うるより數も知られず大空をくらにぞ積まむ御秣の稻」の二首を、最古の例とする。年々實地に用ひたものは次第々々に作り出したもので、早少女たちが手もと足もとに氣をつけて、苗の根鬚を折らず、深過ぎず淺過ぎぬやうに植ゑるやう、擧動の緩急に調節させた曲節が附けてある。歌の形は長短不定で、所によつては幾十句に及ぶものも謠ふが、最も多いのは七七七五形のもの。歌意は前程を祝して、豐穣の樣を述べるもの、田主の繁榮を讃歎するもの、戀の歡をうたふもの、嫁姑の不和を述べるもの等が多く、處によつては田主の酷使を怨んで勞苦を訴へる歌もある。野趣の横溢は通有の性であるが、中國地方の山地や北陸東山兩道あたりの交通不便な地には、鎌倉時代あたりの古體を存するものがある。二三の例を示す。

○此の田で千石とれたら、藏を立てます米藏を。お藏の番には誰がよかろ、一に鼠、二に雀、三に鶯時鳥。（埼玉縣）

○今日の田植の田主樣は、大金持と聞えた。奧の奧州、南部や津輕まで聞えた。外が濱までもナ聞えた。（新潟縣）

○今日の田の家主の嫁はどれがそぞ、錦の小袖襟の帶。（神奈川縣）

○わが子になさけかけるよりも、舅さん嫁御に情をかけなさい。（山梨縣）

○あまり植ゑたれば腰がやめ候。お暇申す御亭主樣。（山形縣）

○梶原殿が富見て、弓はぐ、矢はぐ、眺めす。（神奈川縣）

○昔の業の物の上手には、飛驒の匠に、たてたり番匠、先づ一番に京の清水、六波羅堂や三十三間堂、御堂も立てし。出雲の國では大社やひのみさきはら、能義の清水、宇賀の庄で雲樹寺、伯耆の國で大山の地藏堂檜皮葺。檜皮葺、黃金のたるき檜皮。（鳥根縣）

○大阪の城が落ちたぞ、弓と矢と旗竿が流れくる。（新潟縣）

神事用のは多く舊曆の五月に、神田に田植の行事をした時に謠つたもので、住吉・諏訪・鹿島その他諸國の由緖ある神社に行はれた。これも多くは舊態を保存してゐる。又各地に御田といふ行事があつて、田の耕耘の樣を演じ出すが、その中の田植歌も勿論この部類に屬する。次に例を示す。

○敦賀殿原は弓は上手なるもの、空たつ鳥を射て落いたり。まても上手や中舞ふ鶴を落いた。若い殿御がかけ鳥射たる弓手は、まても射たなう。見事や弓の姿は。（廣島縣山縣郡新庄村鴨社田植神事用）

なほ大嘗會に用ひた田歌（別項）も、この類と見るべく、正月萬歲が謠つた田植も亦、田植歌として扱ふべきである。

【參考】古謠集 別田寬 ○古事類苑 神祇部雅樂部○俚謠集文部省○俚謠集拾遺高野斑山・大竹紫葉○田植草紙（日本歌謠集成所收）　（高野）

田植の神事 たうゑのしんじ 「御田植祭」を見よ。

田歌 たうた 歌謠 【名稱】田植歌と同じ意味で、平安時代の雜藝（別項）の中、風俗歌の一種。【田儛】天智天皇紀十年五月に、田儛を奏した記事のあるのが初見である。次いで「續日本紀」天武天皇天平十四年正月十六日に五節田儛があり、その後に女踏歌が行はれ、同じく光仁天皇寶龜八年五月、渤海使節來朝の際田儛を行ひ、「三代實錄」光孝天皇元慶八年十一月、大嘗會の際多治比氏田儛を奏す等の記事が見える。雅樂寮にも田儛師四人が置かれた（令義解）。弘仁十年の太政官符には、田儛師一人となり、嘉祥元年の太政官符には、田儛生二人と見える（類聚三代格）。「儀式」「北山抄」・「江家次第」等によれば、大嘗會の田儛は多治比氏の舍人が供奉し、舞人十人とある。「皇太神宮儀式帳」には、二月に田を耕し、田植歌を歌ひ田儛を奏する式が行はれた。かくて田儛は大嘗會及び神事に行はれたが、室町時代以後中絶し、天明七年十二月二十七日の大嘗會に再興せられて（歌舞品目）、今日に至つた。大嘗會には田儛を先づ奏し、次いで大伴・佐伯兩氏の久米舞、安部氏の吉志舞、內舍人の倭舞、夜に入つて五節を奏する例であつた。この田儛に歌はれる歌が田歌である。

【大嘗會田歌】上古の田儛は俚謠より出たものであらう。平安朝初期の田歌は、大嘗會に悠紀主基の奏する風俗歌が官人の新作である如く、新作歌であつたらしいが、平安朝後期の田歌は、當時の民間の俚謠が用ひられた。その歌を集めたものに、「大嘗會田歌」と題する寫本があり、その他に傳寂蓮筆と傳へる田歌、その他の田歌切が若干今日に殘されてゐる。美濃田歌、筑紫田歌、陸奧國田歌、尾張田歌、五節田歌（天平十四年正月十六日初めて奏せられた）、その他國名不明の田歌がある。歌詞は、神樂の前張や早歌、催馬樂・風俗歌（各別項）等と類似した所があり、囃子詞が多い。歌の形式は大體七七の調子で、囃子詞が入つて複雜な形となつてゐる。また短歌形式の歌も稀にある。而して全部を諷・急・返の三部に分つものが多い。卽ち初めに普通の調子で出で、中途で急速の調子となり、更に初めの調子に返つて終ると云ふ組織になつてゐるのであらう。但し返は轉調の意で、調子を變へて繰返し歌ふ意かとも思はれる。近世再興の大嘗會の田歌は、律で、平調で歌はれる。この大嘗會田歌は、また民間、貴族の間に流行して雜藝の一となつた。「傀儡子記」や「新猿樂記」に云ふ田歌とは、この類であらうか。この田歌は、もと民間の豐年を祈る神事の田植歌に出でたものと思はれるところがあつて、後世諸社で行はれる田植の神事歌と基を同じうし、田樂（別項）ともこの點に於て若干の關係を持つてゐる。（復活興歌參照）

【田植神事歌】諸社の田歌中、伊勢太神宮田儛の田歌は審かにせぬが（「建久內宮年中行事」によれば、田歌は古くよりなかつたらしい）、春日若宮の田植神事の田歌は、今日も傳存せられてゐる。今は御田植祭（別項）は、毎年三月十五日に行はれる。もと二條天皇の長寬元年正月に始まつたもので、田儛の歌四首より成る（明治七年刊、春のしなひ）。卽ち苗種・白玉・福萬石・栗の四首で、中にも白玉の如きは、大嘗會田歌の一節、「若苗取る手やは白玉、法華經書く手こそ白玉なゆらや」と歌詞が似てゐて、大嘗會田歌と源を同じうしてゐることが明かである。鎌倉時代に入つては、磐梯神社所傳の御田植歌は、建治元年二月の奧書ある古寫本も存してゐて、その由來の古きことが察せられる。また住吉神社の御田植式は、毎年陰曆の五月二十八日に行はれ、今日も六月十四日に行はれてゐる。遊女が參拜し、八乙女の田儛がある。その田歌は、

みましもしけや若苗取る手やは、白玉取る手こそ
白玉なゆらや
郭公をれよかやつよをれ鳴きてぞ我はよ田に立つ
よ我はよ田に立つ

の如きもの六首より成つてゐるが、これは春日神社御田植祭の田歌、及び「枕草子」に出た田植歌を取り用ひて作りなしたものらしい。但しその起原は、この時代にまで溯ると思はれる。就中、第一歌の白玉は、天明七年再興の雅樂の田歌と歌詞が全く同一である。その他諸社に御田植歌は多い。

【田植草紙】かく題する古寫本が二三存してゐる。その歌詞を見るに、室町時代以前の田植歌で、中國地方の中部に行はれる歌なる事が知られる。朝歌四番、晝歌四番、晩歌四番、晝歌の間に酒來る時の歌と酒呑んで後の歌があり、最後に、あがり歌がある。その歌詞は現在もなほ行はれてゐるもので、「俚謠集」所載廣島縣の田植歌、橋津銀書の「東石見田唄集」と類似の歌詞が多く見出される。例へば、「田植草紙」の朝歌一番に、

けさ卯の時に山の端を見たれば、霧やら霞やら、山の端を見たれば、霧が深うて瀧山の腰を立ち舞ふ、朝の霧は照らうが霽めの霧か、雨が降らうとて瀧山の腰の霧、霧笠は霽いてお立ちあれ、あれ霧は晴れ行く。

とあるものは、「東石見田唄集」の朝歌の中、小唄の苗取唄に、

今朝卯の時にやこそ、山の端を見れば、霧やら霞やら、山の端を見たれば、朝霧や照らうが霽めよ、植ゑ來て見よかし瀧仙の霧を、霧が舞ひ候、瀧仙の霧が。

とあり、廣島縣安佐郡の田植歌の朝歌に、

今朝夜のほのぼのに山の端を見たれば、霧やら霞やら、山の端を見たれば。
霧やら霞やら、山の端を見たれば、霧が深うて、麓に入が。
今朝の霧は照らうが霽めの霧よ、照らうとてやら、霧は晴れて行くもの。

とあるのと、同源なることが分る。卽ちこの地方に行はれる古代の田植歌の殘存したもので、平安朝の田歌とは全然趣が違ふが、近世田植歌の根源として、當代の民謠を知るのに大切な資料である。日本歌謠集成卷五所收。室町時代の田歌は舞の本の「伏見常盤」にも五首出てゐる。（田植歌・小歌參照）　（藤田）

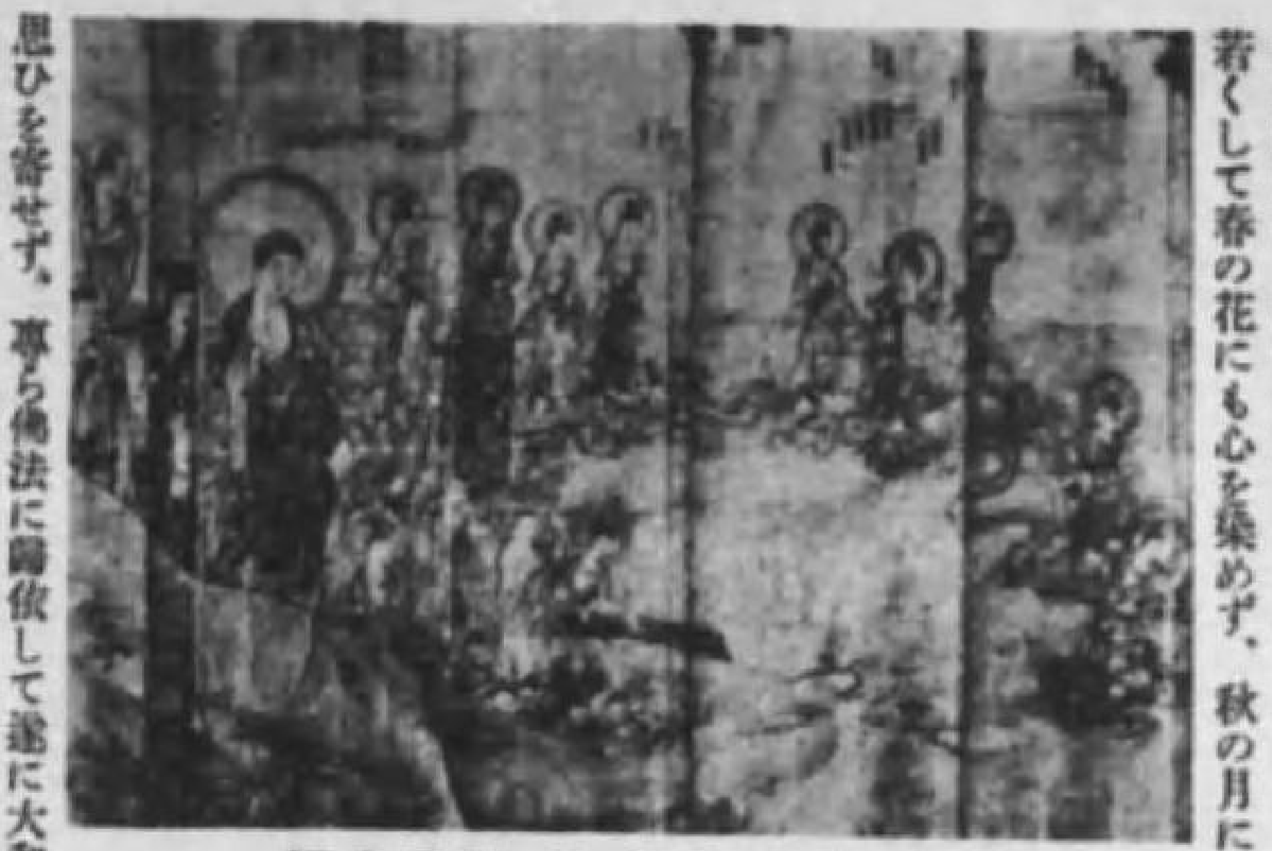
【參考】陸奧國田歌解 黒川春村（冠註文藝叢書俚謠部）○尾張田歌解 黒川春村（古謠考）○擬

後錄（佐佐木信綱 増訂歌謠抄）○日本歌謠類聚下卷神事歌大和田建樹○日本歌謠史高野辰之○古事類苑樂舞部○國史大辭典田儛の項○田植神事及田歌（菅原田和三郎（皇典講究所講演集））○素樂掛源資貝（田歌）（鴨島春松（知識社話卷三十二））○日本宗教風俗志（加藤咄堂三郎）

當麻　たへ　「佛說物の謠曲」を見よ。

當麻曼陀羅緣起　たへまのまんだらえんぎ　繪卷

【解說】鎌倉光明寺所藏二卷。詞書によれば、奈良朝の昔、橫佩の大臣なる人の姫君が、年若くして春の花にも心を染めず、秋の月にも思ひを寄せず、專ら佛法に歸依して遂に大和國當麻寺に入り、生身の阿彌陀如來を拜まむことを祈念した。七日の後一人の比丘尼が來て百駄の蓮の莖を集めさせて絲を取りこれを五色に染め、やがておのが侍女をして大きな綠樂淨土圖を織成せしめた。これが即ち當麻曼陀羅であつて、姫はこの圖によつて親しく淨土の莊嚴を觀想し、やがて臨終の際には來迎引接されたが、この比丘尼が即ち阿彌陀の化身で侍女は觀音であつたといふ。この時織成したと傳ふる原本は今なほ當麻寺の寶藏に納められてゐるが、腐朽修補が甚しく原狀を摸索するのも困難な程である。この曼陀羅の緣起物語は後世次第に修飾され、遂には中將姫雲雀山の物語にも轉化して行くのであるが光明寺の繪卷は「古今著聞集」所載のものと相並んで物語としても最も古樣を存するものである。その畫樣色彩共極めて典麗で自由奔放の趣は乏しいが、描寫の飽くまで愼審で整頓してゐる點は、鎌倉繪卷の中でも平治物語繪卷（別項）等の系統に近いものであり、その筆者も同じく住吉慶恩と云はれてゐるが、元來慶恩とは「新因果經」の筆者法橋慶忍を後世に誤まり傳へたもので、而も慶忍がこの緣起を畫いたといふ根據も素よりない。蓋し鎌倉中葉頃の製作であつてその典麗優雅な點に當代繪卷の特色を見るべきものである。（田中（一））


當麻曼陀羅緣起（光明寺藏）

田岡嶺雲　たをかれいうん　評論家

【本名】佐代治【生歿】明治三年十月高知市外に生れ、大正元年九月歿す。享年四十三【閱歷】最初水產講習所に學び、次いで東京帝大文科の漢文選科に入り、支那文學を專攻した。卒業後、「江湖文學」「日本人」「帝國文學」「六合雜誌」などに筆を執つた。彼の特色を發揮したのは「青年文」（別項）誌上に於てであつた。「青年文」は二十八年の創刊で、嶺雲が主として筆を執り、奇警痛切にして情熱ある文章を以て、當時の文壇を論ぜるものは、常に作家の間に大なる波紋を作つた。その論文を集めた「嶺雲搖曳」は、三十二年三月新聲社より刊行されて非常なる歡迎を受け、當時論文集としては稀有の賣行きを示した。後、大日本圖書會社の「支那文學大綱」に、王漁洋・屈原・高青邱・蘇東坡などを傳した。彼は直情徑行、よく人と爭ふので、同じところで一つの仕事をすることが出來ず、常に東西に放浪して、或は作州津山の中學教師となり、或は水戶の茨城新聞主筆となり、或は前後二回、支那蘇州の學堂に教鞭を執り、或は北淸事變に當つて、九州日報特派員として渡支し、更に中國民報主筆となつたりした。中國民報時代に當時の知事等の私行を訐發したといふので、官吏侮辱の罪に問はれて下獄した（三十四年四月）。その時書いたものに「下獄記」一卷がある。後、東京で創刊した日刊東亞新報の主筆となつたが、幾ばくもなく廢刊した。四十二年頃激しい脊髓病に罹り、療養に力むる傍ら、雜誌「黑白」に「明治叛臣傳」を書き、また「和譯漢文叢書」（全十二冊）を著した。それから「中央公論」に「數奇傳」と題する自傳を書き、一部に愛讀された。そのうち病は益々進み、日光に轉地して療養したが、大正元年遂に歿した。【著書】前記の外に「雲のちぎれ」「靜思錄」「壺中觀」「石川丈山」等がある。（高須）

鷹　たか

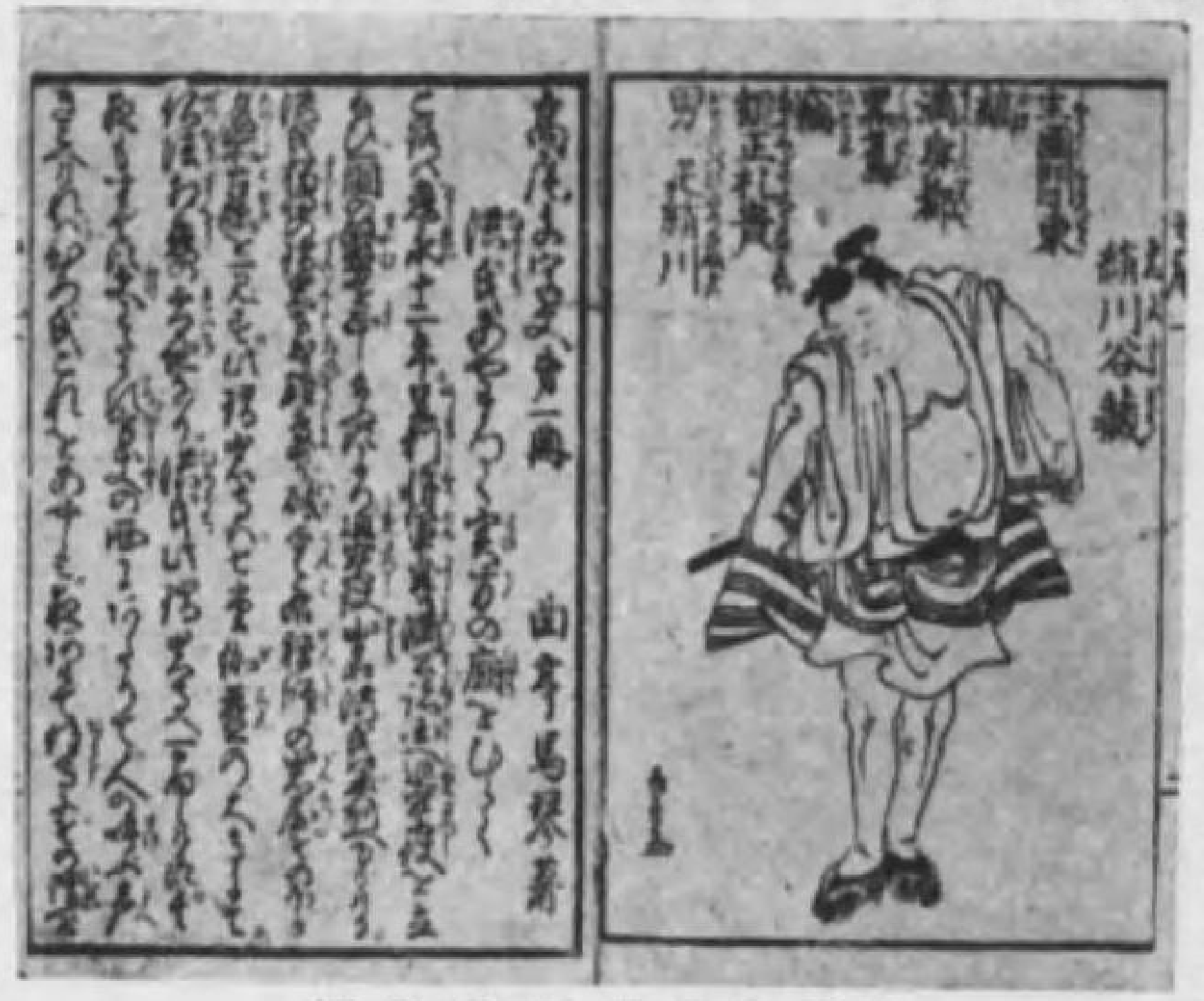
【總說】「貞丈雜記」卷十五鷹類之部、「古今要覽稿」卷六人事部放鷹の條、「武家名目抄」卷三百七十七職掌部十一、「古事類苑」遊戲部十四放鷹等に、その大體が記されてある。【沿革故實】弘仁九年五月、鷹所より撰進した「新修鷹經」（群書類從三五六）を初めとして九條流には、九條良經の跡といふ「後京極殿鷹三百首」（群書類從三五七）、二條流には、二條良基の「嵯峨野物語」（群書類從三五六）、「後普光院殿鷹百首津歌」（續群書類從五五〇）、西園寺流には、西園寺公經の「鷹百首」（群書類從三五七）、持明院流には、藤原基春の「鷹經辨疑抄」（續群書類從五四二）、「基成朝臣鷹狩記」（同五四二、丹鶴叢書本には基成を基盛に作つてゐる）、「鷹口傳」（同五四三）、「責鷹似鳩拙抄」（同五四六）、又藤原定家撰といはるゝものに、「鷹三百首」（群書類從三五七）、「小倉問答」一名「定家問答」（續群書類從五四二）がある。この他「根津松鶴軒記」一名「根津家鷹書」（續群書類從五四三）、「鷹祕抄」（同五四三）、「養鷹秘抄」（同五四四）、小笠原政淸著「鷹書」、小笠原長時著「當流鷹方口傳」「齋藤朝倉兩家鷹書」（續群書類從五四五）、「荒井流鷹書」（同五四八）、「諏訪流鷹書」「吉田流鷹書」「白鷹記」（群書類從三五六）、「養鷹記」（同上）、慈鎭和尙作「鷹百首」（同三五七）、「求眞鷹往來」（續群書類從三六五）、近衞龍山公作「鷹百首」（同五四九）、「養鷹鷹飼百韻連歌」（同五五〇）、「鷹和歌文字抄」（同上）がある。又江戶時代の御鷹野留書類を集めたものに、小宮山杢之進著「御鷹野舊記」一卷がある。（石村）

高尾船字文　たかをせんじもん　讀本　五冊

【作者】曲亭馬琴【畫工】榮松齋長喜【刊行】寬政七年刊、蔦屋重三郎板。「江戶作者部類」（別項）には、明年辰の春とある。【諸本】寬政七年刊本は中本で、各冊長喜の口畫一葉あり、後天保六年蔦屋重三郎・榮屋文七合板にて、歌川國貞の畫を插み、半紙本として翌年再版刊行さる。赤松庄太郎・中村屋勝五郎版【題材】世界を歌舞伎の「伽羅先代萩」（別項）から取つて、「忠義水滸傳」（別項）の飜案に撮合したものである。「江戶作者部類」には、「狹梨錄」「今古奇觀」等からも飜案したと云つてゐる。【梗概】（一）足利義滿の命を受け、奥羽の巡察使に立つた山名洪氏は、松島瑞巖寺で藤中將

實方の廟を發き、雀の形した石を埋めて葬つた。墳を開くと白氣上りて數十羽の雀飛び出で忽ち白練と化し、中央に十八といふ二字が現はれた。これが後に珍事の起る兆であつた。その後義政が將軍となり、弟賴兼を奥羽の太守に任ずる。賴兼の叔父典膳鬼貫は輔佐として臣列にあつたが、執權仁木佐衞門と心を合せて奥州の押領を謀る。或る日鬼貫の使者仁木への密書を携へ、謀つて智鶴之介を訪ふ。爲めに雷より嚴しき詮議を受け、遂に鎌倉細川勝元を賴りて行き、淺草川の渡りに宿つて力士絹川谷藏と知り、義弟の約をなして暫らく止まる。（二）雷が鎌倉へ赴きし後、谷藏は曲者藏匿の訴で所の代官に捕まれる。話變つて奥州の、賴兼の奥方萩の方は才色兼ね備つた貞女である。春の一日庭上にゐると、何處よりか六尺餘の白練に十八といふ二字を書いたのが飛び來つてその肩にかゝる。鬼貫仁木は奥方を陷れる考へで奥用人渡會銀兵衞、局沖の井に密計を與へ、萩の方の短冊を得て、道具屋の手から井筒女之助に買はせる。翌日女之助は奥方が短冊の一見を望まれると聞き不審ながら伺候し、沖の井に導かれて御寢所に入ると、忽ち密通の疑を受けて獄に下され、奥方はかの白練に縊れる。實方の靈魂の祟りで、年さへその文字に因んだ十八であつた。（三）捕手に圍まれた谷藏は、漸く逃れて岩手山を越える時、偶然狼を打殺して勇名が賴兼に聞え、近習格として召抱へられる。奸臣の計は漸々進んだ。賴兼は空閨の淋しさに放埒を盡し、花街の放生會に丫鬟三十人を放ち、遂に遊女高尾を身請けした。家督に定められた若君鶴若丸は或る日追鳥狩を催した。[illegible]の鷹が榎の梢にかゝつたので、近習頭荒獅子男之介は榎を根こぎにして鷹を捕へる。若君は殊の外滿足されて酒を命ぜられる。渡會銀兵衞のさした酒には、しびれ藥が入つてゐたので、男之介は全く自由を失ふ。時に叢の中から火を發して四方に燃え擴がる。姆の政岡は若君を抱いて途方に暮れるが、黑龍といふ狆が流に身を浸して男之介の額に注いだので毒氣を散じ、男之介は若君の守刀源家重代の名劍で、火を追ひ散らし難を遁れる。（四）賴兼は、芝川から滿又の高尾の許に通つてゐたが、高尾は情夫玉田十三郎を慕ひ、賴兼の持つた密書を盜み出して、十三郎と諮ふ手がかりとしようとしたので、賴兼は怒つて高尾を斬る。高尾の母は娘の仇を報いんと、鬼貫仁木に密告し、高尾の初七日の夜賴兼を船に招きて討取らうと計つたが、かねて釣人となつて樣子を窺つてゐる男之介が泳いで來て大敵を引受け、賴兼等を義兵の籠る金華山の水寨に逃がす。（五）落ち延びた賴兼等は浮世渡平が酒店に休んだが、惡漢の彼は毒酒を以て谷藏を倒し、燃えさしの木で賴兼に打つてかゝる。賴兼、蘭奢待の下駄で受け止めたが、火は下駄に移つて香煙立ち、谷藏の毒氣は解かれる。かくて遂に渡平は賴兼の刄に刺された。信夫の館には、男之介と政岡とが若君に仕へてゐた。政岡は父渡邊外記が臨終の折、事急なる時は細川殿に見せよとて、與へた都鳥の一軸の謎の解けぬのを取出して思案してゐると、大鼠現はれて一軸を何處へか銜へ去る。緣の下で打合ふ物音がして、隱れてゐた男之介が曲者の手からかの一軸を奪ひ取つて出て來た。政岡今はと遺言に從ひ、軸を携へて細川の館に赴く。勝元は軸を開いて忠臣外記が志を知り、なほも思案の末表具を剝すと、惡人一味の連判帳が現はれる。外記に救はれた女之介に命じて金華山の義士の輕舉を誡めさせ、自身上洛して東山殿に言上して、事の落着をはかる。

【構想】お家騷動說話に、道德的敎訓を含めて構成したものである。併し先代萩を骨子に水滸傳の飜案を附會したことは、無理なことで、事件の發展に緊密な關係を缺いてゐる。實方の靈魂の怪異、毒氣を解く不可思議な力等は、餘りに方便的な幼稚な趣向である。【史的地位】馬琴の讀本の處女作であり、山東京傳の「忠義水滸傳」（別項）等、讀本に多く行はれた水滸傳に歌舞伎を合せた趣向の最も早いものである。「江戶作者部類」に、當時は滑稽物が流行して時好に協はず、大した評判が無かつたと傳へる。この書の卷末に「後編 水滸累談子近刻」とあれど遂に出版されなかつた。（笹野）



高尾船字文（口繪・初頁）

隆國　たかくに　「今昔物語」を見よ。

高崎正風　たかさきまさかぜ　歌人

【生歿】天保七年三月鹿兒島に生れ、明治四十五年二月二十八日東京に歿す。享年七十七【閱歷】家世々島津氏に仕へ、父を溫恭といふ。父は藩主齊興の繼嗣を定める際、姦黨のために謀られ罪を獲て自刄した。當時十六歲の正風も士籍を剝がれて大島に謫せられたが、讀書三年、苦心を重ね、釋されて歸藩した。少壯にして學を好み、早く八田知紀に就いて歌道を學んだが、幕末多事の際には藩命を帶びて國事に奔走した。即ち文久二年の伏見寺田屋の變、同三年の七卿落等には彼の力が與つて大であつた。明治元年征討軍宮の參謀となり、四年少議官に任じ、尋いで歐米諸國を視察した。七年大久保利通が全權辨理大臣として淸國に赴くに隨ひ、九年御歌掛を、十九年御歌掛長を命ぜられた。次いで二十年男爵を授けられ、二十二年宮中顧問官に任じ、二十八年樞密顧問官となり、正二位勳一等に叙せられた。正風性虛懷、特に明治天皇の寵遇を受けた。【著作】進講筆記○たづがね集○千種の花○埋木晒花○歌がたり（別項）。【歌風】桂園派の流れをくみ、「古今集」のなだらかな調を理想としてゐるために、その傾向も溫雅流麗である。同時に桂園派の有する纖細な傾向をも繼承し

てゐる。左にその例を擧げる。

うぐひすのこゑはかりしてあらし山霞しづかなる花の陰かな（嵐山にてよめりし中に）

秋風にふきやぶられてくさかげの入江のはちすまたき葉ぞなき（晩秋江）

（用巣）

高砂 たかさご　「住吉物の謠曲」を見よ。

孝標女 たかすゑのむすめ　歌人・物語作者　【姓名】菅原氏、本名未詳【生歿】寛弘五年生れ、歿年未詳。但し康平元年、夫俊通の歿した時に五十一であつた。【閲歴】父孝標は、菅原道眞の子孫で、上總介・常陸介等になつたが、不遇な人であつた。兄定義は、大學頭・文章博士等になり、學問の人であつた。母は藤原倫寧の女で、文學の才能があつたらしい。母の兄の長能、姉の道綱母等は、いづれも有名な藝術家である。又繼母は上總大輔とよばれた人で、これも有名な歌人である。孝標女の文學的才能は、かうした環境の中に成長した。（少女時代）十歳まで京で暮した。その當時、「源氏物語」は既に成立して、一般に愛讀されてゐたらしい。十歳の時、父が上總介に任じられたので、繼母・兄姉等と共に、父に從つて任國に下つた。任地にあつては、等身の佛像を作り、その前にぬかづいて早く京に上り、物語のくさぐさを讀むことを祈つてゐた。寛仁四年の秋の終り、十三の時、京に向つて出發した。その年の十二月二日に、やうやく歸京して、一品脩子內親王邸である三條の宮の西に住んだ。まもなく繼母は離緣して家を去つた。四年の間、馴れ親しんだ彼女は、繼母と別れるのが悲しかつた。十四の年に、疫病が流行して乳母がなくなり、更に侍從大納言行成の姫君がなくなられたので、いたく悲しんだ。彼女は、その淋しさを物語によつて慰めてゐた。十六歳の時、火災にあつて家が燒け、姫君の身替りとして、可愛がつてゐた猫も燒け死んでしまつた。（中年時代）二十五歳の時、父は六十の老齡をもつて常陸介となり、はる〴〵任地に下つた。やがて父は歸つてきたが、家庭はうらさびて、しみ〴〵と現實を凝視する機會が與へられた。彼女は家庭の事情で已むを得ず祐子內親王に御奉公することになつた。橘俊通と結婚したころは、少女時代のやうな華やかな空想は、現實の冷たい色でぬりかへられてゐたやうである。やがて一子仲俊が生れ、母性に目ざめる日が來た。後冷泉天皇即位の大嘗會の御禊の日、一人、京を後に初瀬に思ひ立つたのをはじめとして、石山に、初瀬に、太秦に、屢々參詣した。物語をあこがれる心は、一度現實の洗禮を受けて、今度は神佛と夢とを追求するやうになつた。（老年時代）天喜五年七月三十日に、夫俊通は信濃守に任ぜられ、八月二十七日に任國へ下つた。仲俊も父と共に出發した。然るに、その翌年四月には、夫は任國から歸つてきて、九月二十五日に發病、十月五日、五十七歳でこの世を去つた。彼女は、ただ一つの夢を、せめてもの希望として淋しい生活を送つた。「更級日記」その他によつて、知ることの出來る孝標女の事蹟は、こゝまでである。【著作】孝標女の著作として疑ひのないものは、「更級日記」（別項）である。なほ、彼女の作とされてゐるものに、次の數書がある。「濱松中納言物語」「夜半の寢ざめ」（各別項）「みづからくゆるあさくら」（物語參照）【人物】孝標女は、きはめて幻想的な人であつた。少女時代から物語や傳說を好み、夢や幻を愛し、神や佛を信じた。實生活と夢幻の世界とが、區別する事の出來ないくらゐ密接な關係をもつてゐたことが、「更級日記」によつて知ることが出來る。彼女の作と稱せらるゝ「濱松中納言物語」「夜半の寢ざめ」も、共に等しく幻想的な傾向を持つてゐる。歌人としての孝標女は、非常に優秀な作家ではないが、勅撰集中に十四首入つてゐる。【參考】御物更級日記複製本解說　○校註更科日記（佐佐木信綱）○改訂更科日記略解（關根正直）○更科日記講義（大塚武太郎）○更級日記錯簡考（玉井幸助）○更級日記新註（同上）○更級日記評釋（宮田和一郎）　（徳田）

高須梅溪 たかすばいけい　評論家【本名】芳次郎【閲歴】明治十三年四月、大阪船場に生れた。十七歳にして大阪天神橋の貯蓄貯金管理所に勤務。同僚中に、中村吉藏・山川智應などがゐた。その際、文學上の同志を糾合して浪華青年文學會を組織し、雜誌「よしあし草」を發行した。同三十一年の冬、東上して新聲社（別項）に入り、主筆佐藤橘香（義亮）を助けて「新聲」を編輯した。爾來、同三十四年、早稻田大學文學科に入るまで、主として文藝時評に執筆、その當時の評論を集め、社中同人と合著で「三十棒」「沙上偶語」等を刊行し、それと前後して、論文「青年觀」及び美文集「暮雲」を公にした。同三十八年、早稻田大學卒業、間もなく有樂社創刊の雜誌「世界的青年」の主幹となり、一年の後、「東西南北」を主宰した。四十年、國民新聞社に入り、一年間在社の後、東京每日新聞に入つて、社會部長兼文藝・家庭部長となつたが、更に二六新報に轉じて家庭部・文藝部を主宰した。これ亦一年前後でやめ、爾後、全く著作生活を續けた。同四十五年「平家の人々」「源氏の人々」「日蓮聖人及其周圍」等を出版、大正三年、雜誌「新評論」を刊行し、社友土田杏村等の助力を得て、文明批評の新開展に盡した。同四年、「十八世紀史」「十九世紀史」各二卷を執筆。同九年、「中央公論」に始めて「酒中の天地」を發表して以來、諸雜誌に寄稿。十年、オリエンタリズムを提唱し、十四年五月、同志と共に新東方協會を創立して、雜誌「東方之星」を刊行。又昭和三年九月、雜誌「日本時代」を出し、爾後、兩雜誌を主宰してゐる。【著書】前記の外、「國民之日本史」の中の「平安時代」「鎌倉時代」各一冊、「江戸時代」三冊（以上早稻田大學出版部）。「日本現代文學十二講」「日本近世文學十二講」「東洋思想十六講」「東洋文藝十六講」「日本思想十六講」（以上新潮社）等を公けにした。その他、學藝に關する編著が多い。異色あるものに、「大隈公八十五年史」（全三冊）がある。　（金子）

高瀨舟 たかせぶね　小說【作者】森鷗外【發表】大正五年一月號「中央公論」【刊行】大正七年短篇集「高瀨舟」春陽堂。鷗外全集第四卷・現代日本文學全集第三卷所收。【梗概】德川時代に、京都の罪人が遠島を申渡されると、親類が牢屋敷で暇乞をすることを許され、そこから罪人は高瀨川を下る小舟に乘つて大阪へ廻された。それを護送するのは京都町奉行配下の同心だつたが、罪人の親類のうち重立つた一人を同船させる事が默許される慣例になつてゐた。或る春の夕、三十歳ばかりになる喜助といふ弟殺しの罪人が、住所不定の男とて送つて來る親類もなく只一人舟に乘つた。態度がいかにも神妙な上に晴れやかな面持で目には微かながら輝きさへある。これまで護送した罪人とあまり違ふので、同心羽田庄兵衞は、不思議に思つて泣きも悲しみもしない理由を訊ねた。喜助はにつこりして、「成程世間で樂をしてゐる人には島へ往くのが悲しい事でせう。しかし京都といふ結構な土地でも私は言ふに言はれぬ苦しみをして來た。それから、これまでどこと云つて私のゐていゝ所とてはなかつたのに、お上で島にゐろと仰しやつて下さるのは誠に有り難い。それさへあるに今度御手當として鳥目二百文下さつた。これは私が今日までかうして懷に入れて持つことの出來なかつたものです。いくら根限り働いても、右から左と人手に渡さなくてはならなかつたが、お上の食物を戴いてゐる以上、いつまでも二百文を持ち續けることが出來る。仕事の元手にもされると樂しみです」。かういふ意味のことを答へた。庄兵衞は扶持米で足らぬ自分の暮しの事を今更に考へさせられ、鳥目二百文を貯蓄と見て喜んでゐる喜助の、足るを知る心に感心させられた。それから弟殺しの事情を包まず聞かせてくれと云ふと、喜助は「早く兩親に別れた二人は助け合つてこれまで生きて來たが、去年の秋弟は病に倒れて、北山の掘立小屋に寢つき、私は仕事歸りに食べ物を買つて歸るのを常としてゐた。或る日歸つて見ると、弟は血まみれになつてゐる。驚いて聞きただすと、どうせ癒らない病氣だから早く死んで兄さんに樂をさせたい。剃刀で切りそこねたから、どうか手を借して拔いてくれ。さうすれば死ねるからとの事だつた。私が醫者を呼ばうとすると、苦しいから早く拔いてくれ賴む賴むと、弟はしきりに催促する。早く早くと、怨むやうに憎むやうに目でせがむので、とう〳〵その言ふ通りにしてやつた。剃刀の柄を引くと弟はすぐと息が切れたが、その時丁度近所の婆さんが來て、その樣子を見たのです」。庄兵衞は、どうせ自殺を企てた弟を、早く苦から救つてやらうとして命を縮つたが、果して罪であらうかと疑つた。自分の上司の判斷に從ふより外ないといふ念と共に、まだ腑に落ちぬものがその心に殘つた。——次第に更けて行く朧夜に、沈默の人二人を載せた高瀨舟は、黑い水の面をすべつて行つた。【解說】この作に就いては作者自身「高瀨舟緣起」の一文を草してゐる。初め、この作の話材を「翁草」で讀んで二つの大きい問題が含まれてゐると思つた。一は財產の觀念で、所有慾には限界が見出されない筈であるのに、二百文を財產として喜んだことに興味を感じた。今一つは死にかゝつて苦しんでゐる人を死なせてやる——醫學上のユウタナジイ、樂に死なせる事の可否を考へさせられる事にひどく興味を惹いたと書いてゐる。不思議な罪人の心情と、庄兵衞の感銘とを、作者は簡潔な而も柔い筆致で趣深く語つてゐる。近年、脚色上演されて好評を博した。　（小島）

高田早苗 たかたさなへ　評論家・教育家【號】半峰【閲歴】萬延元年二月、江戸深川に生れた。明治九年大學豫備門に入り、同十一年東京大學文學部に學び、十五年卒業。直に東京專門學校の創立計畫に參し、その講師となつた。專攻せる科は政治であつたが、文學に深い興味を持ち、造詣また深かつた。「中央學術雜誌」（別項）に、數號に亙つて連載した「當世書生氣質」の批評は、泰西の文藝論の旨趣に基いて明徹せる觀察を下したもので、明治に嚴正なる文藝批評の出た嚆矢とも言ふべく、續いて東海散士の「佳人之奇遇」、田口鼎軒の「日本開化小史」（各別項）の批評を試みて、著者との間に論難を交換した。明治二十一年、森田思軒・岡倉覺三等と共に演劇矯風會を起し、朝野の名流、劇界の有力者の贊助を得て、劇の革新のため大に努力した。その頃、坪內逍遙・饗庭篁村の勸誘によつて、讀賣新聞社に入つてその主筆となり、紙面を改良して新聞と民衆との接近を圖ると共に、同紙を文學新聞となすの方針を樹て、坪內逍遙を客員となすと共に當時の青年作家中最も有望なる者を物色して幸田露伴・尾崎紅葉の二人を得、同時に聘して社員とした。露伴は幾くもなく去つたが、紅葉は殆ど同紙と終始し、その關係で、硯友社（別項）の同人悉く讀賣新聞に關係し、文學新聞としての光彩を放つことを得た。二十三年埼玉縣より選ばれて代議士となるや讀賣新聞を辭し、爾來政治に專心し、或は外務省通商局長・文部省參與官兼專門學務局長となり、大正四年大隈內閣に入つて文部大臣となつた。彼の業績は教育上の施設に見るべきもの多く、早稻田大學に關係すること四十年、大隈重信歿後、總長の椅子に就いたが昭和六年六月辭職。現在貴族院勅選議員。【著書】明治二十二年に刊行した「美辭學」（別項）は、この種の著書としては始めての系統だてるもので、斯界を裨益せるところ多かつた。その自叙傳とも見るべき「半峰昔ばなし」の外、政治に關する著書が多い。　（高須）

高田早苗

高館 たかだち　幸若舞曲（三十六番の一）二卷【作者】不詳【成立】室町期【諸本】古板本は寛永十二年板（十行本）。舞の本（上田萬年校訂）・舞の本（名著文庫）（富山房）・新群書類從第八舞曲部等所收。又節附本は、全曲ではないが越前幸若家元藏のものを、日本歌謠集成卷五に載せてある。【題材】判官物（義經傳說）。「和泉が城」（別項）と姉妹篇の形を成す舞曲中の大物。義經の衣川敗滅を寫す壯烈の曲。辨慶立往生の傳說をも含む。「義經記」（卷八）と同材。義經自刄の事は、謠曲「現判官」「義經」等にも作られ、鈴木三郎の事は、謠曲「語鈴木」「追懸鈴木」、狂言「生捕鈴木」等と素材上交渉がある。古淨瑠璃「高館」（寛永二年板）、金平本「義經記」等は本書から出てゐる。【梗概】鎌倉殿の命を受けた長崎四郎は、藤原泰衡の一族と合して義經を討たんため奧州へ下り、文治五年四月二十七日着到、翌日を期して高館御所に押寄せる手筈である。折柄、紀州熊野藤代の住人龜井六郎の兄鈴木三郎重家は、義經に拜謁を志して遙々下向、この日高館へ着し、辨慶・龜井・片岡等十人と名殘の宴を催してゐた義經に謁し、歸郷を勸められたが、生死を共にと强ひて留まつた。翌日、鈴木・龜井は奮戰して討死し、武藏坊辨慶も力鬪したが、信夫小太郎の放つた矢に中つて重傷を負ひ、義經に最後の暇乞をした後、行年三十八、衣川に於て華々しく立往生を遂げた。　（島津）

鷹筑波集 たかつくばしふ　俳諧集　五冊【編者】山本西武【名義】宗鑑の「新撰犬筑波」（別項）に對した題名で、貞德の跋の末に、題號の理由を詠んだ狂歌が三首あつて、その中の一に、「よき犬のさぐりにつけて取あつめかりに名づくるたかつくばかな」とある。【成立】寛永十五年五月【刊行】寛永十九年初秋【諸本】貞門俳諧集（俳書大系）所收【解說】貞德

の跋によると、貞德が三十年來自ら合點した發句・附句を取集め、西武に淸書して出版させたものである。發句・附句、凡て二千七百六十二句ある。編輯の體裁は、何等の分類法をも取らず人別に並べたので、跋に、「鬮取に次第をさだむ」とある如く、作者の順序にも殊更な位次がない。各人の作は、少きは一句から多きは百句以上に及んでゐる。また俳人一般に俳號を用ひない時期のものであるから、作者名は凡て實名であるが、姓通稱を頭記してある。僧には寺名が記してある。甚だ稀に職業等を記したものがあるが除外例である。第五卷の初めに、秀吉（發句一句、附句二十四章）・由己・利休・紹巴・兩齋その他の作を特に載せてある。【價値】三十年來と云へば、慶長十四年頃からの作がある譯で、貞門初期の作が本集によつて窺はれることが、先づ本集の價値である。少數ではあるが秀吉等の作の載せられてゐるのも珍しい資料である。作者の姓通稱をも記したのは、初期の人々であるだけに周到な用意で、研究上の利便を與へる。「崑山集」（各別項）の前に接續する代表的撰集として注目すべき集である。（志田）

鷹筑波集（松宇文庫藏）

隆璉 たかてる　國文學者【姓】榎並（えなみ）【通稱】助之丞（或は助之進）【生歿】安永四年生れ、弘化元年（二五〇四）五月歿。享年七十【閱歷】京都市室町中立賣西に住み、富士谷御杖に學んだ。著書數百卷ありと傳へられるが明かでない。【著書】雅言通載二卷八册（雅言の辭書であるが、未完成のものである。城戸千楯の「雅言通載抄」（四卷、文久元年刊）は、本書を抄出し補訂したものである）○源氏物語藻袋三册（源氏物語の註解である）○國史類函二百五十册。（龜田）

高尙（小野氏）諱　「溫古隨筆」を見よ。

高尙 たかなほ　國學者【姓名】藤井氏。通稱初め忠之丞、後小膳【號】松ノ屋、松齋【生歿】寶曆五年、備中國賀陽郡宮內に生れ、天保十一年（二五〇〇）八月十五日卒す。享年七十七【靈號】三寸鏡靈神【墓所】宮內の隣村板倉の向山【閱歷】高尙の家は、大中臣氏の末、宮內の吉備津宮の社頭格であつた。父は但馬守高久、號蒔齋。高尙、初め國學と歌とを同國笠岡の小寺淸先及び京の人栂井一室に學び、後、本居宣長を師とし、最も文を作るに長じた。寬政十一年從五位に叙せられ、長門守に任ぜられた。天保六年社家頭の職を嫡孫高起に讓つた。子高豐は父に先だつて歿した。その著書の刊記されたもの十五部三十二卷、何れも廣く行はれてゐる。【著書】伊勢物語新釋六卷（文政元年刊）○大祓後々釋一卷（文化十年成）○日本紀の御局の考一卷（文化九年成。紫式部を日本紀の御局といふ所以の考）○みつのしるべ三卷（文政十二年刊。道のしるべ、歌のしるべ、文のしるべを合す）○淺瀨のしるべ一卷（俳諧をいひ戒めた歌詞書。刊）○おくれし雁一卷（文化八年刊。廣澄等の消息文を集めた「雁のゆきかひ」の續篇に擬したもの。例は皆高尙の作）○消息文例二卷（文化二年刊。中古風の消息文）○さき草一卷（享和三年成。歌の言葉、書の書き樣を示したもの）○源平拾遺二卷（天保七年成。源平時代の武士の言行を雅文にうつしたもの。國文全書所收）○ひきものゝさだめ一卷（文化十一年刊。樂器の優劣を評す）○神の御蔭の日記二卷（寬政十一年江戸と京とに赴きし日記。刊）○歌のしるべ（別項）○出雲路日記一卷○松屋文集二卷（文化八年序）○松屋文後集三卷○松の落葉四卷等。（以上森）

【業績】高尙の文章は、自由暢達で淸新味があり、鈴門中その右に出づるものがないと言はれてゐた。歌は文章に比しやゝ劣つてゐて、溫雅ではあるが眼立つた味ひがない。常識的であるため、魅力に乏しい憾みがある。「新古今」に心醉して居りながら、「新古今」の寫實味がなく、著しく後世風だと言へる。ただ宣長ほど厭味がなく、その佳作は平淡で、さらさらとした所に一種の面白味を有してゐる。これには多少桂園流の影響もあるであらう。

山遠の霧のまよひに旅人のおくれし友を呼ぶ聲ぞ
する

はれて後竹の葉風に散る露は雨にまされるまどの
うちかな

等、一例である。家集には「松屋自撰歌集」があり、「神の御蔭日記」「出雲路日記」などにも歌がある。（歌のしるべ參照）（以上龜田）

【參考】藤井高尙傳　井上通泰（南天莊雜筆の內）

高ねおろし たかねおろし　隨筆　二卷【著者】穗井田忠友【諸本】國書刊行會本百家隨筆第二册所收。【解說】茅原定（虛齋）の著「茅窻漫錄」（別項）三卷を非難したもので、同書の語法・用語の錯誤から、內容各項の荒誕無稽を指摘し、遂に著者を目して噓齋と稱し、惡罵嘲呵至らざるなく、「漫錄」一部はこれによつて完膚なき有樣である。學者の態度としては寧ろ顰蹙すべきものであつて、虛齋に對して何かの復讐に出たのではないかと想はしめる。但し言ふところは事實で、考據も正確である。「茅窻漫錄」を繙く人は、必ず本書を比照すべきである。卷頭に、「穗井田藝莪翁論本　門人梅川重高校」とあるのを見ると、忠友が一時門人等に講說した事があつたとも思はれる。（和田）

高橋氏文 たかはしうぢぶみ　歷史書【成立・由來】高橋氏は宮內省の內膳司に仕へ代々供御の事に携はつたが、同僚の阿曇氏との間に自然と勢力の爭を生じたので、延曆八年兩氏は各々その家記を進めて、由緒を奏上した。所謂「高橋氏文」とは、この時提出された高橋氏の家記とその附帶文書とを指すやうである。【諸本】完本は傳はらない。逸文が「本朝月令」「政事要略」「年中行事秘抄」に見える。伴信友の「高橋氏文考注」に、それ等の逸文が集錄されてゐる。【內容】完本が傳はらないから、完全なる內容を知ることはできないが、現在の逸文よりすればほぼ三つの部分に分れる。第一は高橋氏の祖磐鹿六鴈命が景行天皇の東巡に從駕し、上總國に於て堅魚及び白蛤を得て調理して獻つた所、痛く御意に適ひ數々の賞賜があつた事の物語である。第二は六鴈命薨去の物語であつて、その時賜はつた宣命が載せられてゐる。第三は附帶文書ともいふべきもので、兩氏の爭論を裁決して高橋氏の優先を認定した延曆十一年の太政官符である。【價値】六鴈命の話は、「日本書紀」「姓氏錄」等にも見えるが、かくの如き委曲を記されたものは外にはない。又景行天皇の如き古い時代のものとせられた宣命も、外には傳はらない。卽ち高橋氏に古くより傳承せられた家の物語は、如何なる他の古書よりも、こゝに最も詳細に見られるので、この意味に於て、本書は古代史の史料として獨特の位置を占めるのであるが、唯現在の形に整理せられたのは延曆年間に降り、又成立の由來が必ずしも純粹とは言はれぬから、これを史料とするには十分の吟味を要する。（坂本）

【參考】高橋氏文考注　伴信友（伴信友全集第三）

高橋阿傳夜叉譚 たかはしおでんやしやものがたり　小說八編二十四册【作者】假名垣魯文【畫工】守川周重【刊行】明治十二年二月。明治名著全集（東京堂）所收。

【梗概】暴惡なる父と、淫蕩の母の血を分けた阿傳は、上州の農家に育て上げられて、十六の時、既に親の目を忍んで賭博場に出入するうち、同じ仲間の高橋波之助と契を結ぶ。玆に端なくも十七年振で佐渡から刑期を終へて鄕里へ戾つた博徒鬼淸と呼ばるゝお傳の實父が現はれて、何時もお傳夫婦に難題を言ひ掛けては金の無心を迫つた。そこで夫婦は鬼淸に隱れて何處へか逃げようと決心し、一先づお傳俗緣の同國藤川村光松寺に身を寄せてゐる間に、夫波之助は癩病に罹る。お傳は夫の治療代を稼ぐため、人を介して當地柳町樓屋といふ女郞屋から身の代金五拾圓を詐取して病夫と共に出奔したが、山中で波之助は追手のために谷底に突き落されて生死不明となる。一方お傳は色仕掛けで虎口を逃れ、死んだと思つた波之助に再會し、橫濱の知己を訪ねて、身の窮狀を訴へて救ひを求め、病夫の看護に手を盡すうち、市奴といふ破落戶と懇意になり、それより病夫が邪魔になり、遂に殺害して病死と言ひ觸らし、姦夫と共に淫樂に耽つた。そのうち市奴の惡事露顯に及んで、兩人は手に手を取つて逃れ、お傳の鄕里に向ふ途中遂に捕縛されたが、養父九右衞門の證言でお傳だけは免れて二年振で鄕里に歸つたが、淫蕩と放恣な生活に馴れた彼女は、二ケ月目には養父の貯金二十圓を懷中し、夜に紛れて東京に走つた。途中恩人の家を賴り、又もや恩を仇に金子を盜み去る。旅中相宿で懇意になつた尾張の士族小川市太郎が無妻でゐるを幸ひ、一緒になつて東京神田に居酒屋を營み、間もなくそれを廢業し、兩人相談の上又もやお傳の鄕里に歸つた。養父死後は亡夫波之助の兄代助が家財その他を管理してゐると聞き込み、難題を持ち掛けて家財を奪ひ取り、それを金に代へて再び東京に舞ひ戾り、夫婦相談の上、山カン的な商法に手を出して失敗した。そこでお傳は又もや骨董商の黑川仲藏なる者と懇意になり、一策を按じて金三百餘圓を卷きあげた上これを毒殺し、更に情夫熊谷在の豪農濱次郎をも毒殺しようと謀つたが果さなかつた。本夫小川の旅行から歸るのを待ち兼ね、お角といへる密賣女の引手婆の勸めるまゝ淫賣を內職としてゐるうち、當時日本橋檜物町の古着商佐藤吉藏と深くなり、色と慾との二筋道で金二百圓を詐取せんとして殺害したのが惡運の盡きで、それより間もなく捕へられたが、容易に實を吐かなかつたので、三年の間未決にゐたが、遂に罪狀明白となつて死刑となつた。

【附記】本書と殆ど同時に出た岡本勘造の「東京奇聞」七編もお傳を綴つたもので、筋は可なり異つてゐるが、主人公の多淫多情で、殘忍强慾な點は兩書共に一致してゐる。（石川（巖））

高橋五郎 たかはしごらう　飜譯家・評論家【本名】吾良と書く方が正しいといふ。【號】在一居士【閱歷】安政三年三月二十日、越後國柏崎に生る。家世々庄屋を勤め、佐州附きとて、佐渡金山の庶務に關係してゐた。父を三左衞門といひ、土地の利け者であつた。十四歲鄕里を出て、高崎の碩儒市川左近（佐藤一齋の高弟）に漢學を、田中毛野（又太郞）に就いて國學を學ぶ。田中氏の紹介で近鄕龍門寺の住職牧野再龍（又再生龍）を訪ひ、佛書を讀む。更に洋學修業のため上京したが、適意の學校が見當らなかつたので、直ちに洋行を決心して橫濱に到つた。が、旅宿で緒方惟孝に會つてその無謀を誡められ、緒方塾で始めて洋學を學んだといふ。後、假名垣魯文から植村正久（別項）に紹介された。正久は當時米人ブラオンの學校の學生だつたので、彼をその師ブラオンに託した。これ明治七八年の交であるといふ。彼はブラオンの許にあつて、異常な忍耐と苦心を以て英・佛・獨の諸國語を修めた。當時、聖書（別項）邦譯の事業が既に始められてゐたが、譯文の字句を修正する人の無いのに苦しんでゐた。ブラオンはこの邦譯事業の委員長であつたが、彼が和漢の學に達し、文章の才あるのを識り、助手として參與せしめた。この聖書飜譯事業についての彼の功績は、周知の事實である。明治十三年「佛道新論」を公にするや、好評嘖々、彼の名が始めて世に知られた。この後「六合雜誌」に、次いで「國民之友」に、哲學文學に關する論文を寄稿して、批評家として名を文壇に馳せた。明治二十五年、井上哲次郎博士が「敎育と宗敎の衝突」（別項）と題する論文を公にして、基督敎を排擊するや、植村正久・大西祝・本多庸一・横井時雄等は皆筆を揃へて駁擊した。彼も亦奮然起つて、「僞哲學者の大僻論」（國民之友）などを公にしたが、これは最も多く注意を引いた論文で、井上博士に對する痛烈な巨彈であつた。民友社との關係を絕つと共に、時文批評の筆を捨てて敎鞭を執り（ただ三十一二年の交、雜誌「小天地」を主宰したが暫時にして止んだ）、國民英學會に關係すること四十年に及んだ。この間その究理癖から心靈學の研究に耽つて幾多の著書を出し又希臘・羅典・英・佛等の古典を飜譯して讀書界を益した事が少くなかつた。現に駒澤大學に英文學の敎鞭を執つて後進の誘掖に努めてゐる。飜譯界の故老、批評界の先驅として、彼の足跡は大なるものがある。【著譯書】（哲學・宗敎）佛道新論○釋迦論○世界三聖論○宇宙觀○人生觀○新哲學の曙光○一元哲學○戰爭哲學○神祕哲學○排僞哲學論○基督活殺論○社會主義活辨○一年有半と霜式の唯物論等。（心靈學）心靈萬能論○靈怪の研究○心靈哲學之現狀○靈媒術講話○幽明の靈的交通○レイモンド等。（文學書）チヤイルド・ハロールド江湖漂泛錄○ファウスト○カーライル論說集○ゲーテ感想錄○皇帝アウレリアス瞑想錄○ベーコン論說集○ラ・ローシフユー寸鐵○プルターク英雄傳○カーライル佛國革命史○杜伯品讀等。（柳田（泉））

高橋太華 たかはしたいくわ　小說家・雜誌記者【本名】高橋七郎【別號】太華山人【閱歷】文久三年、岩代二本松に生れた（舊藩士）。小學卒業後、東京に出て岡鹿門の塾に學び、又重野安繹の門に遊んだ。同門下の西村天囚とは文

酒の友として頗る親交があつた。當時又同縣人たる東海散士（柴四朗）に知られ、屢々そのために文章を草したことがある。明治十八年刊の東海散士の政治小說「佳人之奇遇」（別項）は、實に柴氏の立案によつて太華及び天囚が草したものであるといふ。二十一年、雜誌「少年園」（別項）の編輯主任となり、少年子弟の啓蒙教育に盡すところがあつた。この頃から漸く文壇の人となり、饗庭篁村・森田思軒・幸田露伴等と交り、詩酒徴逐の風流を試みて謂ゆる根岸派（別項）の一人と目され、小說家として少年文學者として世間に名を知られたのもその間のことである。三十年の交、友人石井研堂を助けて「小國民」（別項）の編輯に當り、三十三四年に及んだが、爾後文筆社會から隱退した。嘗て支那に遊んだことがある。【人物・作品】太華は別にこれといふ學歷もないが、よく和漢の古典に通じ、殊に繪畫・美術に精しく、江戸時代の戲作文學及び浮世繪についても深い造詣がある。小說の名を知られてゐるものは、極めて少く、「舞衣」「有馬竹」「雪おろし」「實はなし」等に過ぎない。少年文學には、「河村瑞軒」「太閤秀吉」「新太郎少將」「子供のてがら」等がある。太華の名が一時文壇に聞えたのは、作品の價値によるよりも、寧ろその博識の力であつた。ただ文學によつて、少年の啓蒙教育に盡した功は認むべきである。（柳田（泉））

高橋連蟲麻呂之歌集（たかはしのむらじむしまろのかしふ） 歌集【著者】高橋蟲麻呂【成立】未詳。ただ彼の生きてゐる中に編まれたものと思はれる故に、彼の生存してゐた確證のある天平年間の末頃とすべきであらうか。【內容】本書は現存しない。ただ「萬葉集」中所々に本書から歌をとつた由が記してあるので、かゝる歌集が存在して「萬葉集」編纂の折その原本となつた事を知り得るのである。今日「萬葉集」中に見ゆる本書の作品は、卷九雜歌部に長歌十首、短歌十三首。同相聞部に長歌一首、短歌一首。同挽歌部に長歌二首、短歌三首。總計長歌十三首、短歌十七首である。この外に、卷三雜歌部「不盡の嶺を」の歌の次、及び卷八夏雜歌部「筑波根に」の歌の次に、共に「右一首、高橋連蟲麻呂之歌中出ヅ」と云ふ註がある。これは、「歌」の下に「集」の字の有つたのが筆寫などの際に脫落したものと解されてゐるが、これは誤脫ではあるまい。「笠朝臣金村歌集」にも「歌中出ヅ」とある所が三ケ所ある。これ等を悉く「集」字が脫落したと見ることは出來ない。故にこれは故意にか偶然にか、「歌集中出ヅ」と記すべきを「歌中出ヅ」と最初から書いたものであらうと見ておきたい（笠朝臣金村歌集參照）。高橋蟲麻呂の作品は本書を除けば、僅に卷六天平四年の、藤原宇合をおくる長歌・反歌各々一首のみである。本書中には、異色ある傳說歌人たる高橋蟲麻呂の姿を窺ふに足る浦島傳說の歌、筑波山嬥歌會の歌、菟原處女の歌等の多くの秀作が見られる。（蟲麻呂參照）【參考】和歌史の研究 佐佐木信綱 ○萬葉集新考 井上通泰 ○萬葉集九卷考 森本治吉（國語と國文學 昭和三ノ一一）（森本）

高橋振（たかはしぶり） 上代歌謠【名稱】高橋曲の意味で、高橋と云ふ歌句を持つ本歌の特歌であるから、かく名づけたのであらう。催馬樂の律歌の澤田川には「高橋渡す」と云ふ語があり、「琴歌譜」所載の阿遊陀扶理も「高橋の」と云ふ語で始まつてゐる。これ等と關係があるであらうか。【出典】「琴歌譜」に一首出づ。【歌詞】同書の和琴の譜を附し、引琴の符を記した歌詞を分り易く書くと次の如くなる。

道の邊の、榛と櫟と、品ムめくも、ナアイヨ品めく
イヤ、品めくも、言ふなるかもよ、榛と櫟と、榛と櫟と

形式は短歌體で、二段に分つて奏せられるのである。（藤田）

高畠素之（たかばたけもとゆき） 評論家【生歿】明治十九年一月、群馬縣前橋に生れ、昭和三年十二月二十三日、東京に歿した。享年四十三。【閲歷】前橋中學卒業後、堺枯川の經營する賣文社の社員となつて、初期社會主義運動に參加してゐたが、後、同志と別れて國家社會主義を旗幟として、別個の運動をはじめ、上杉愼吉博士とともに經綸學盟を起し、大化會にも關係して、急角度を描いて反動化したが、諸事意の如くならず、晚年には、主として著述に從つてゐた。【譯著】カール・マルクスの「資本論」の全譯をはじめ、カウツキーの「資本論解說」、リウイスの「社會主義と進化論」、ラファルグの「財產の進化」、モルガンの「古代社會」等多くの飜譯の外、「社會問題辭典」（新潮社刊）、「論・想・談」「社會進化思想講話」等の著述がある。わけても「資本論」の飜譯は、彼の半生の心血を注いだもので、最初大鐙閣から出版されたものを三度び稿をかへて成つたのが、現在行はれてゐる譯本である。彼自らは修正派社會主義に共鳴し、所謂マルクス主義運動に對しては反對してゐたが、マルクスの大著を日本語にうつしたことは、日本の社會主義文獻史の上から見て、最も大なる功勞者と言へるであらう。（平林）

高畠藍泉（たかばたけらんせん） 小說家【本名】瓶三郎、後、求德と改め、又酒吉と稱し、戊辰の頃、政（ただす）と名乘つたが、維新後、雅號の藍泉を通稱とした。【別號】柳亭種彥（三世）・柴薪山房・甘々坊・一葉舍・轉々堂・轉々堂鈍々。【生歿】天保九年五月十二日下谷世俗鴉組といふ所に生れ、明治十八年十一月十八日淺草千束村に於て病歿（神經病・動脈瘤）。享年四十八【閲歷】高畠家は世々幕府の御坊主で御本丸奥勤の役であつた。少時から和漢の稗史・小說を好み、殊に種彥の作を愛した。若くして博く雜書に涉り、戲文・俳諧・茶湯・書畫等皆善くし、一方で、親類・同僚に疎まれたといふ。慶應の初め頃、若隱居して綺筆三昧に暮してゐたが、時勢が時勢だつたので、持前の氣概から多少公事に奔走した。維新後は再び綺に

高畠藍泉

隱れてゐたが、明治三年、弟の死に會つて沼津に赴き足掛三年を過した。明治五年東京日日新聞の創刊に際し、招かれてその記者となり、同八年平假名繪入新聞の起るや、その編輯となつたが、翌九年辭して讀賣新聞に入つた。饗庭篁村はこの頃藍泉の引立を受けたのだといふ。十一年京阪に遊び、歸後、「假名讀新聞」「芳譚雜誌」等に雜報・續物の筆を執つて文名漸く揚つた。十五年一月初代柳亭の門弟の勸めによつて柳亭の號を嗣ぎ、爾後柳亭種彥と稱した。この年七月大阪の大東日報に聘されて下阪し、翌十六年歸京、「芳譚雜誌」「歌舞伎新報」「東京繪入新聞」「繪入朝野新聞」等に續々續き物を載せ、一時文壇の牛耳をとつたかの觀があつた。十七年健康漸く衰へたので日本橋から淺草千束に移り、養生旁々依然執筆してゐたが、病癒えず翌年歿した。【人物】藍泉は花柳界の遊を好んだだけ、交際家でもあり世話好きでもあつた。又戲文に劣らず開化人で舊弊頑固を嫌つた。學問も出來漢文も一通りは書け、好んで源氏を讀み、西鶴・其磧を研究したといふから、當時の戲作小說家では第一流であつた。その文學觀は、諧謔主義・勸懲主義であつて、當時の一般文人と大して變らぬが、その小說は、趣向・文章とも可なり苦心したものであり、種彥を追うて而も幾分の清新味をもつてゐた。【著作】怪化百物語○小說總道ばなし○五月雨物語○梅柳新話○巷說兒手柏○三巴里奇說○楓時故鄉の錦木○岡山紀聞筆命毛○夐夜帶○加茂川染○蝶鳥筑波裾模樣○怪談深閨屛○春色黄金花○花見饗丹腕○女夫龍操鏡○御伽話手遊八景○黒白染分繩○柳亭叢書 ○短篇集「對模樣萩と尾花」等。【史的地位】明治初期の文壇で、代表的に舉げられる名は假名垣魯文（別項）であるが、魯文及び假名垣派と相對して一敵國をなしてゐたのが、藍泉卽ち柳亭種彥と柳亭派とであつた。だが魯文の全盛期は大體明治五六年から十年前後までと見てよく、これに代つて十一二年から十七八年頃までの文壇に主盟の位置をもつたものは藍泉であつたといへよう。從來の文學史では藍泉を見ること輕きに失してゐるが、見直す必要がある。前田香雪・南新二・饗庭篁村（各別項）を客將とし、柳淵亭藍江・柳條亭南彥・柳塢亭寅彥・柳葉亭繁彥を門下とし、柳下亭種員・四方梅彥を後援とした柳亭派の文壇的活躍には、誠に華々しいものがあつた。【備考】藍泉は高畠氏の出でなく、金座役人辻某の庶子だつたともいふ。また生地も淺草七軒町相屋敷とも傳へられる。（柳田（泉））【參考】寫實主義以前の小說 石川巖（日本文學講座）

高屛風くだ物がたり（たかびやうぶくだものがたり） 假名草子 二卷二冊【作者】未詳【名稱】高屛風は、俠客など六法肌の無頼漢の異名。「をいてみろ、とかくろくにはたつまいやつじやとの、高屛風の見たて」とある。【成立】「萬治三年の春云々」の發語あり、卽ち萬治三年がこの書の成立の年と推定される。【諸本】流布本は、大正四年京都佐々木華月氏の覆刻したもの一種のみで、原本は小山曉杜氏藏、中形本で挿繪十四面あり、山東京山の藏識自筆の書入あるもの。【梗概】六法肌の男が四人、吉原を見物する事に筆を起し、遊女の美しい姿を見て、傍の人にその名を聞く。通りすがりの常樂書といふ通人の曉者が、一々精しく話して聞かせる。先づ三つ木瓜の紋は吉田樓。巴の紋は勝山樓。蔦の紋はときは樓。三枚の松は千歲樓。これを當今四天王と持て囃す。この外三浦の采女、新丁のげい、角丁の若俠、二丁目の小太夫など何れ劣らぬ太夫だと云ふ。そこへ又二人優れた美人が現はれる。あれは誰かと言へば、「これこそ今の世のわかての御太夫、四天王にもかたをならぶる此所の七君のずい一」、高島屋のよし野、三浦屋の高尾だと答へ、これより二人の品評に移り、次に、よし野（いほりの下に桐の紋）、高尾（紅葉の紋）、長門（地紙の內に桐の紋）、かほる（蔦の紋）、からさき（一ツ松の紋）、ふじへ（山形に一ツ巴の紋）、初山（花もつかうの紋）など七君の紋所、品評に興を添へる。嫖客四人は假號を用ひ、こてふ・岩つゝじ、秋のしか、そせつと稱して、各々勝山・ときは・よしだ・千歲に馴染を重ね、しげ〳〵通つてをるうちに、ときは承應三年八月三日に、よしだは同十月廿六日に、ちとせは同十二月十七日に身請けされた。それより四人は勝山・からさき・高尾・よし野に親しんで、又一しきり通ふうちに、明暦三年の大火に遭遇して元吉原は燒け、新吉原に移轉する事となつた。その當座は見すぼらしい有樣で、萬治となつても、未だはか〴〵しく復興しなかつたが、同二年の春頃はさすがに、昔にまして繁華の地となつた吉原の光景を敍し、「花やかなむかしにまんぢ二年哉」といふ名妓よし野の句を記してゐる。その年の十月二十六日、よし野は身請けされ、十二月五日に高尾は病死し、同廿六日に、ときはが身請けされて三名花が散つて了ひ、その翌三年の春の如きは、吉原は一時火の消えたやうに淋しくなつたといふ。【解說】この物語は、その頃の巷談を扱つた小說的作品とも見られるが、實は小說的作品と見せかけた吉原細見が本體で、四人の嫖客は種々話題の端緒を引き出す傀儡に過ぎぬ。殊にこの書を著名にしたのは、京山の「歷世女裝考」「高尾考」及び小山氏藏本の書入にもある通り、京山が高尾の事蹟研究中、偶然この書を得て、例の高尾の三又斬殺の謬說を否認する典據としたところから、本書は單に高尾の事のみ記したもののやうに世に思はれてゐるが、內容は當時吉原における有名な女郎等の品評である。その中でも高尾は才色勝れてをり、又他の女郎は多く身請けの幸運に浴したのに、高尾だけは、十九歲の全盛中に歿したので、殊に同情せられて、比較的記事が多いと云ふだけで、高尾のためにこの作が出來たとは信ずる事が出來ぬ。さればその作者についても、高尾の客の何人かが書いたやうに、京山などは言つてをるが、作者が高尾の馴染でないことは、高尾歿後、茶屋の噂が、全盛當時に [illegible] と騷いでゐたものが、病氣となつてからは、一人としてこれを引取り、養生させる [illegible] 者のなかつた事を述べて、馴染客の [illegible] つてゐる所を見ても、嫖客側ではなく、むしろ當樂書などの版元が、新吉原宣傳のため、小說的に當時の事情を面白く綴つたもので、一種風變りの案內書と思はれる。【參考】歷世女裝考 山東京山 ○高尾考 同上（燕石十種第二）（[illegible]）

幸文（たかぶみ） 歌人【姓名】木下氏、通稱民藏、初名義質【號】朝三亭・亮々舍・無塵居士・風顛道者【生歿】安永八年、備中國淺口郡長尾村に生れ、文政四年（一八二一）十一月二日歿す。享年四十三【墓所】長尾村 [illegible]【家系】父は木下八郎右衛門義韶、兄一人、姉二人、弟一人があつた。先祖は、同村の小野氏の家宰であつたが、後に獨立した。[illegible] いふ處にあつたので、小野氏を [illegible] に對し、ないざの侘屋と言つてゐた。幸文はその家を、風顛亭と名づけてゐた。【閲歷】十二三歲の頃から和歌を詠み文章を作つてゐた。この頃は木下多見誼義詳と言つて [illegible] の歿したのは、寬政十年、幸文十七歲の時である。幸文が澄月に學んでゐたのは [illegible] 以前である。幸文はこの頃から既に名があつた。澄月の歿後、慈延の門に入つた。寬政十二年頃、慈延を通して有賀長敏 [illegible]

まれたこともある。又彼は、慈延の門にある頃から、道の上の先輩として景樹を敬し、その門を訪れてゐた。幸文が景樹を師とする念は、日に日に深くなつて行つた。慈延は、そのために、いたく力を落してゐた。文化元年二月、幸文は遂に上岡崎村に移り、景樹の家の近くに居を構へた。この年三月、赤尾左京の紹介で、桂園の門に入つた。これは幸文が二十三歳、景樹が三十四歳の時のことである。この事が桂園門の人々を驚かし、慈延を怒らせた。桂園門に入つてからの幸文は、深く景樹に力とされ、また幸文も深く景樹に傾倒してゐた。上岡崎にゐる時は、家を朝三亭と名づけてゐた。文政二年難波に移つてからは、前栽に竹を植ゑ、亮々舍と號した。京都に出た初めの頃は筆耕を業とし、後には專ら和歌の師匠をしてゐた。著しく貧しかつたのは、作品に「貧窮百首」のあるのを見てもわかる。禪を誠拙和尚に學び、無際居士と言つてゐた。詩と畫とを良くし、畫は釧路雲泉に學び、この方の號を風篁漁者と稱してゐた。前後に二妻があり、嗣子はなかつた。同門の熊谷直好と親交があつた。【著書】亮々草紙○亮々遺稿（各別項）。【作風】その歌は放膽な心の持つ自由と、純眞な心の持つ弱さとを併せ持つてゐる。かうした作品は、今少し強くなるべきであらうが、幸文はそこに達せずして歿した。（亮々遺稿參照）　〔鎌田〕

高天原（たかまがはら）　神話　【名義】「たかま」は、「たか」（高）と「あま」（天）との約であり、「はら」は國原・海原の「はら」で、廣く平かなるところを意味する。併し記紀その他の古文獻に現はれた高天原は、特殊の意義を有し、天上界にあつて神々の居住地をなし、而してその地の形態・情勢、及びそこに於ける生活等は、下なる國土のそれと相同似してゐたと考へられた。【解說】諸民族に見出される垂直的宇宙觀の一產物である。即ち宇宙は神々の住む處、人間の住む處、死人の住む處より成ると觀じ、而して三者を垂直的に想定し、最上層に神々の棲所を置いたのが高天原である。從つて一種の理想鄕であるが全然空想的なものでなく、古代日本民族が人間世界を高貴化し、昇華した姿であること、なほ希臘の宗教及び神話に於ける神々の天界の居住地オリムポス（Olympos）が、同國のオリムポス山の高貴化であるのと趣を同じうしてゐる。切言すれば民衆の思考を支配する Continuance theory の一發露である。從つて高天原の實際的所在地を尋ねて、常陸となし（新井白石）、豐前となし（多田義俊）、若しくは日向・肥後・近江等となし、更にまた海外の或る地となすが如きは、宗教政治的理想鄕と皇宗發祥の地とを混同するものでなくてはならぬ。その觀想には、皇室の御祖先の鄕土の意味があり、また實際生活の反映投出があるとしても、史實そのものではない。　〔松村〕

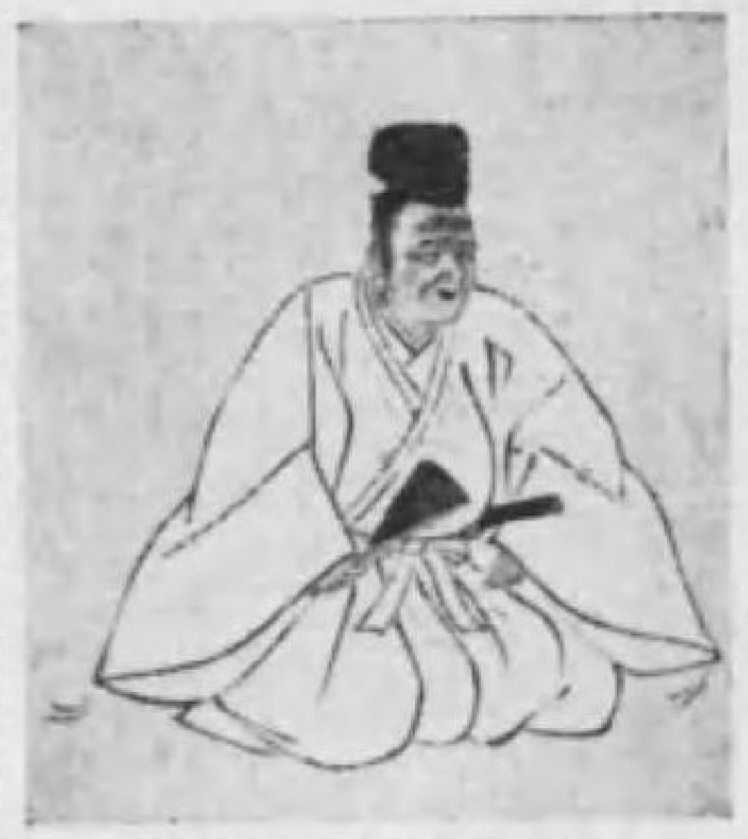
高天原系神話（たかまがはらけいしんわ）　神話　【解說】また天孫系神話とも呼び得るであらう。高天原に坐すと信ぜられた神々及び高天原から葦原ノ中國に降臨した神々とその子孫とに關する神話群を意味する。我が國にはその國土的地位の關係から、古く多くの民族が混融してゐる。從つてその精神文化的產物の一として神話も亦互に異なる民族文化を母胎として若干の系統が、密接に抱着してゐる。而して吾人はその主要なものを三つの大きな說話圈に分つことが出來る。高天原系神話はその一であり、出雲系神話はその二であり、筑紫系神話はその三である。高天原神話は、所謂天孫民族が有した說話群で、その大きな特色は、北方民族の宗教である薩滿教（シャーマニズム）の色調を可なり濃厚に內存させてゐること、皇祖神の政治的觀念と太陽神の宗教的觀念とがその主流をなして、しかも兩者が不可分離的に融合してゐること、呪術宗教的（マジコレリヂアス）及び政治的な權能を有した女司祭の要素が、その底流をなしてゐること、建國的政治的精神を統一原理としてゐること等である。　〔松村〕

高政（たかまさ）　俳人　【姓】菅谷氏（すがのや）（菅野谷ともある）。【號】惣本寺・伴傳連社（ばんでんれんしや）【生歿】不詳。但し元祿十五年（二三六二）に、轍士の「花見車」の出た頃にはまだ存命してゐたことが知られる。【閲歷】京都に宗因の俳風を樹立した京談林の中心人物で、自ら惣本寺伴傳連社と號し、惣本寺といふ額を打つてゐた。惣本寺は京談林の惣本寺であるとの意であるが、伴傳連社は大阪の西鶴の阿蘭陀流と對抗する意のものであつたらう。「誹諧破邪顯正」（別項）によると、延寶五六年頃、既に每年の歲旦に惣本寺引付とて板行してゐたといふが、伴傳連社も同時頃から稱してゐたものらしい。然るに延寶六年の夏、師宗因を自亭に招いて一會を催した時、宗因が「末茂れ守武流の惣本寺」と祝したので、彼の地位は愈々搖ぎなきものとなつた。この勢に乘じてか、翌年自己及び如風・春澄・春惠・正長・政定・定之・一方・清風・鶴一・信德・如泉・仙庵等の獨吟、兩吟、連吟等を集め、「惣本寺誹諧 中庸姿」（別項）と題して公にしたので、これが端なくも貞門との論爭を捲起する動機となつたのである。事實又彼の作風は自らバテレンと名乘るほど談林中でも怪奇に過ぎるものであつた。又彼は同じ上方でありながら、大阪の中堅の西鶴・惟中とは却つて反撥し、延寶五年には西鶴の「大句數」（別項）の向ふを張つて、多武峯の紀子の「大矢數」（別項）の後楯をしたので、西鶴と不和となり、かくて翌六年、江戶の松意が上洛して西鶴と「虎溪の橋」（別項）の三吟をした時には、彼は加はらなかつた。惟中も、延寶八年隨流に對して「破邪顯正返答」を書いた時、高政の攻擊されるのを却つて是認し、惣本寺の額を打つたことを排擊してゐる。併し高政は作及び行爲にその態度が示され、言說を以てしないのが彼の態度であつた。かくて彼は元祿末年頃迄も存命しつつ、蕉風に對して談林としての運動をすることもなく、蕉風と交涉を持つこともなくして終つてゐる。「花見車」によると、相當の連衆を擁して氣樂な點者生活をしてゐたらしく、要するに、俳壇的隱者となつてゐたらしい。【著作】誹諧吟合二册（延寶三年刊）○同後集○惣本寺誹諧 中庸姿（別項）○是天道一册（延寶八年刊）○談林三百韻一册○江戶蹕　〔志田〕

【參考】誹諧破邪顯正（中島隨流）○仙臺大矢數（誹諧 大淀三千風）○誹諧破邪顯正返答（岡西惟中）○貞德永代記（中島隨流）○花見車（高島轍士）○歷代滑稽傳（森川許六）○誹諧家譜（草川丈石）○俳家奇人談（竹內玄々一）○誹諧名家錄（雲舍白雄）○誹家大系圖（生川春明）○俳諧人物便覽（三浦若海）

隆正（たかまさ）　國學者　【姓名】姓は山本・今井・野々口・大國。名は秀文・秀清・隆正。字は子蟒。通稱・中衞・一造・匠作・仲。【號】戴雪・天壁・如意山人・佐紀之屋・葵園・居射室・眞瓊園【生歿】寬政四年十一月二十九日、江戶外櫻田津和野藩邸に生れ、明治四年八月十七日、東京大名小路德大寺家家舍邸に歿す。享年八十。【墓所】赤坂靈南坂陽泉寺【閲歷】隆正は、石見國津和野藩士今井秀馨の子。十五歳平田篤胤に就いて國學を修め、次いで昌平黌に入つて漢籍を古賀精里に學んだ。十九歳、昌平黌を辭して藩邸に歸つた。すでにして本居宣長の學風を慕ひ、その門人村田春門に音韻學・國典等を學んだ。文化十四年家を嗣ぎ、ついで長崎に遊んで蘭學・理學を學習し、傍ら梵書を涉獵したが、文政十一年、藩に在つては本志の遂げられないのを患ひ、亡命して江戶に出で、また京都に赴き、天保十二年以後は、京都に家塾を開いて勤王の大義を鼓吹し、鷹司政通・阿部正弘・德川齊昭、その他の知遇を受けて國典を講じた。嘉永四年藩侯より諭告されて原籍に復し、藩の養老館の教授となり、京都より津和野及び江戶の藩邸に赴いて子弟を教へた。明治維新後徵士となり、次いでまた內國事務局權判事、神祇事務局權判事、宣教使御用係等を勤めた。門人中最も顯れたる人々に、福羽美靜・玉松操などがある。大正四年、維新の際の功績により從四位を贈られた。

【著作】（語學書）（一）活用手爾波に關するもの。○通略延約辨一卷（天保五年成。刊。眞淵の「語意考」（別項）の通略延約の說、及びこれに關する諸說を評論したもので、注意すべき說がある。もと、「ことはのすみなは」と題して、語編したものの第一集である）○人天合轉剤格一卷（寫）（用言に「人語」と「天語」とあつて活用が異る事を述べたもので、「詞の通路」（別項）の詞の自他の說を承けたものである。「ことはのすみなは」の第二集）○言葉の正みち一卷（天保七年八月自序。刊。國語は萬國の語に勝れてゐるが、それは活語がある故である事、國語の法則は、萬世に渡るべき理法が具はつてゐる事、音韻、五十音、指辭（代名詞）等の事を記してゐる）○神理入門用語訣二册（刊。主として動詞の活用を述べたもの）○活語活法活理抄三卷或は四卷（寫）（用言に「本行」「借行」「被ことば」の三種があると云つて、それ等を說いたもの）。（二）文字五十音に關するもの。○音圖神解卷數未定（百餘卷もあつたやうである。五十音圖に依つて、語義・音義を說いたもの）○神字箋一帖（刊。「神字日文傳」（別項）に依つて、神代文字を五十音圖に擬ひて解說したもの）○神字小考一卷（一名「神字字源考」。刊。神代文字は太卜の兆から作つたもので、諸外國の文字も太卜から出たと說く）○矮屋一家言一卷（刊。この中の一部分の修辭談現存）。なほ「嚶々筆語」の中にも小論文が收められてゐる。（神道書）本學擧要二卷○本教神理說一卷○神代校異傳五卷○古傳通解九卷○眞語新釋二卷○昇降氣轉一卷○倘眼者二卷。（歌集及雜著）眞瓊園翁歌集（續日本歌學全書・校註國歌大系に收む）○宇田日記一册（天保中刊）○歌學入門（やまと靈語第八の內）。



大國隆正（羽倉子爵家藏）

【業績】（國學者として）隆正は篤胤の思想を承け、更に西洋の天文學・哲學等を參酌し、以て古傳を解し、その神道說を立てた。世に國學習合の神道といふ。（國語學者として）村田春門に音韻學を學び、その學說に於ては、皇國尊崇の思想のために、獨斷に走つてゐるものが多く、卓見もないではないが、全體としては、學術的價値は餘り高くない。（歌人として）その歌集「眞瓊園翁歌集」は約二千の和歌を收む。學者を本領としてこれだけの歌數は珍しい。その詠み口は師篤胤よりもずつと碎けた所があつて、大體溫和を特長としてゐるらしい。新味には乏しいが、嫌味が少いので、時人の鑑賞には叶つたやうである。思想歌は概念的ではあるが、氣吹舍の正脈を受けて純日本主義を唱へて止まなかつたらしい。

國の爲わがつく息のかひなくて世の醜風を拂はずありけり

人ごとにやまと心をかためなばえみしの千艘なにか恐るべき

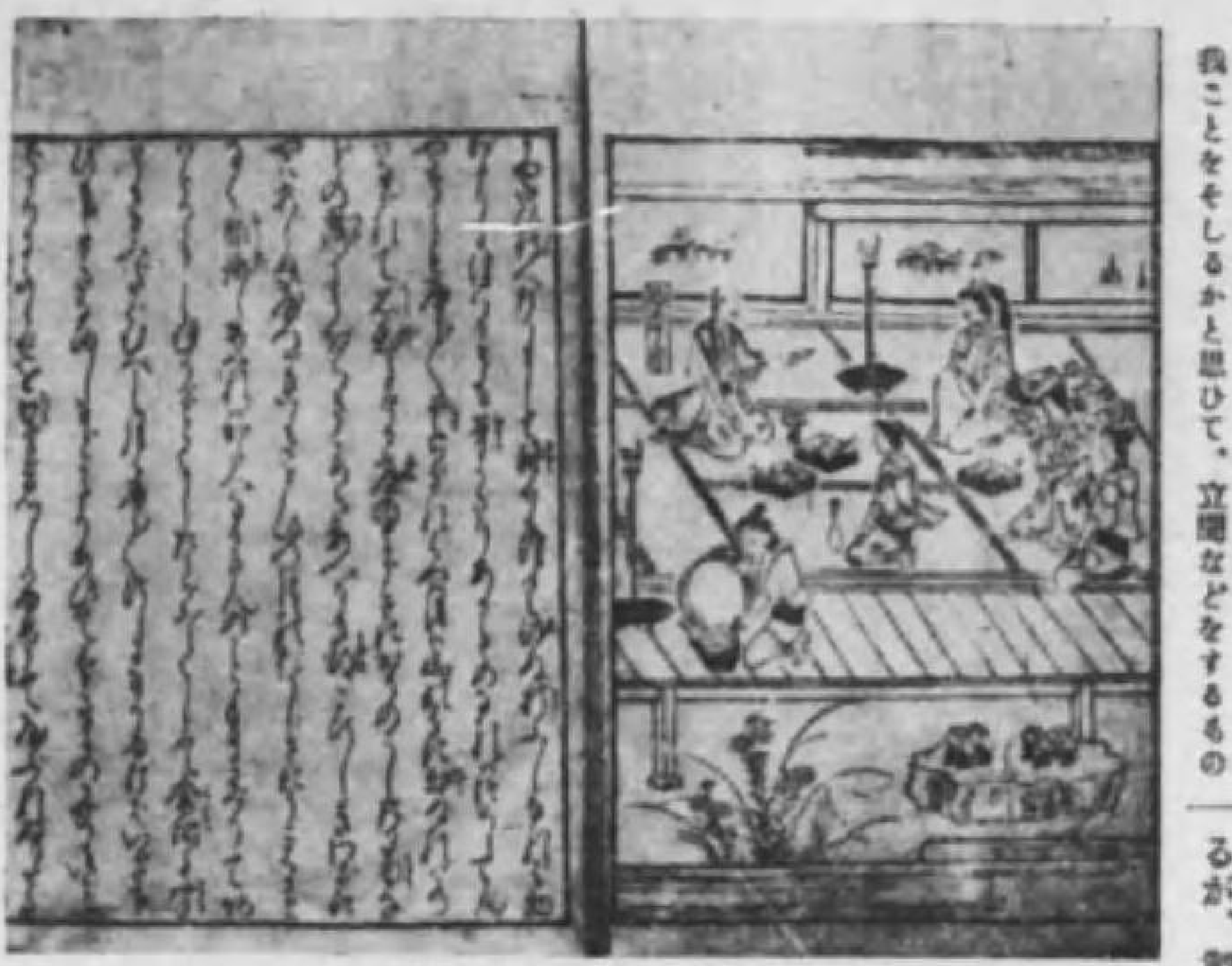
【參考】津和野藩士寮公事蹟（井上瑞枝）○大國隆正（[illegible]）○大國隆正の事蹟（大森金五郎）（歷史地理五一ノ一・二・四）　〔森・飯田・鎌田〕

高光（たかみつ）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】藤原【別稱】多武峯少將入道【法號】如覺【歿年】正曆五年（一六五四）三月【閲歷】師輔の八男、母は雅子內親王。天德四年右近衞少將に任じ、五年從五位上に敍し、備後權介を兼ねた。天曆三年三月晦日、宮中に召されて「花も鳥も春のをくりす」といふ題にて詩を作り、大和歌をそへた。八年母の薨去、天德四年父の薨去、康保四年村上天皇の崩御にあつて、それぞれ哀悼の歌をよんだ。父の寵愛を受けてゐたが、世の中をはかなくのみ覺え、應和元年十二月遂に妻、女、同腹の妹愛宮、乳母を初め、多くの兄弟姉妹にそむいて比叡山に登り、增賀上人に就いて入道した。初めは橫川に住み、應和二年多武峯に草庵を結び、極樂房と稱した。「多武峯少將物語」（別項）は、彼の出家が周圍のものを悲しませた事を取扱つてゐる。【作品】家集「高光集」。群書類從卷二五一所載本と歌仙家集本とは全く同じく、歌の數四十三首である。出家を思ひ立つた頃月をみて詠んだ歌、「かくばかりへがたく見ゆる世の中にうらやましくも澄める月かな」（拾遺集）は、本集では、「村上の御門かくれさせ給ひての頃月を見て」とあり、「撰集抄」では、「つかさ申しけるにかなはで歎きに沈み給ひけるころ、九月十三日の夜に月前述懷といふ題にて、內裏に歌合の侍りしに」とある。○勅撰集に入る歌は、拾遺四、その他凡そ十九首、合計凡そ二十三首。「多武峯少將物語」中にも歌がある。○高光日記一卷（本朝書籍目錄）「多武峯少將物語」と同書ともいふ。【參考】歌仙傳○尊卑分脈○榮華物語（月宴）○大鏡○多武峯略記○大日本史二二五○國文學全史平安朝篇○河社。　〔西下〕

高光日記（たかみつにつき）　「多武峯少將物語」を見よ。

他我身之上（たがみのうへ）　假名草子　六卷【作者】山岡元隣【成立】明曆二年【諸本】初版は、明曆三年正月、寺町通圓福寺前の町秋田屋平左衞門刊行。享保十三年正月再版。近世文藝叢書第三所收。【解說】この書は、漫筆的短文集で、世俗を警め、人の心得になるべきことを說いたものである。卽ち平常誰も口癖にする卑近な俚諺などを擧げて、これを解釋し、それに就いて世人の行動を評し、可否を論じ、誤りを指摘し、正道に導かんと努めたものである。例へば、卷之三、五「うり言葉にかい言葉の事」として、

世話に賣言葉に買言葉、けんによなければはむぬ



他我身之上（問觀假）

> はがすとあるは、おかしげなる事なれども能理にかなひし事也。古語於レ我善者我亦善レ之、於レ我惡者我亦惡レ之、我慢於レ人無レ限、人能於レ我有レ限識。上の句の心は別に理にもおよばず、さて我すでにといふ下の句心は、本より我すとしも人にあしき心をもたねば、人も我にわるいがはあるまじきとの心也。當今の世の氣のまはりたるものは、我ことをそしるかと思ひて、立聞などをするものに、我心さへよくもちたらば、人も我ことをそしるまじきのしめし也、けんによなければむねさはがずといふによくかなへり。

とあり、その他瓜のつるにはなすびはならぬといふ語を引いて、因果の理を說き、我が身つみて人のいたさをしるで、恕の字を解き、傾城狂ひのいけんには、樂しき庄屋の一番息子太郎八といふが、初めは世間見ずのうち鼠であつたが、遊女狂ひをはじめて家産を傾け、人の意見も聞き入れなかつたが、ふと角力の話から悟る所あり、翻然として正道に歸したといふ話など、すべて教訓的である。當時作者は二十五歲の青年で、意見は頗る老實であるが、製作上まだ十分修養のつまぬ所があつて、兎角生硬を免れず、且つ漢文をその儘引用するなど、興味にはやゝ乏しい憾みがある。併し教訓主義物興の時に當り、その先驅として出た作であるから、世人の注意を惹き、相當行はれたものである。浮世草子中には、多少本書の感化を受けたものもある。凉花斧樹の如きその一人で、元隣の作風を慕ひ、「當世誹身上」を作つた。

【參考】假名草子　永谷不倒　（永谷）

高皇産靈神 たかみむすびのかみ

【名稱】高皇産靈（日本書紀）は、また高御産巢日（古事記）・多賀美武須比（古語拾遺）・高彌牟須比（新撰姓氏錄）・高皇魂・高御魂（延喜式祝詞）とも書く。「たか」と「み」とは美稱とするのが通說であるが、「たかま」（高天）の音便とする說もある。「むす」は、生成を意味し、「ひ」は靈妙な物を表はす。從つて「むすび」は、産靈の義であるとするのが普通の解釋であるが、また「むすび」を「たま」と同義語となし、靈魂の義となす者もある。一名を高木神ともいふ（古事記・書事紀）。【解說】天地初發の時、天之御中主神・神産巢日神（神皇産靈神）と共に、高天原に出現した神である（古事記・古語拾遺・日本書紀一書）。併し日本書紀の本文及び五つの一書には見えてゐない。更に「舊事紀」では、伊弉諾・伊弉冊二神と同世代の別天神とせられてゐる。これは神皇産靈神に於ても同樣である。本質については種々の說がある。（一）神皇産靈神と共に宇宙の生成力を神格化したもので、天之御中主神の力の表現であるとなす說、（二）天之御中主神の荒魂が高皇産靈神で、その和魂が神皇産靈神であるとする說、（三）高皇産靈神は天之御中主神の活動的方面の顯現であり、神皇産靈神はその靜止的方面の顯現であるとなす說、（四）高皇産靈神は高天原に於ける高御魂であること、なほ國土に國魂神があるが如くであり、神皇産靈神は天つ神の祖靈であらうとなす說、（五）古代人の靈魂觀の一の現はれで、分化して魂となる作用を持つ靈が、宇宙の生々發現の方面に活動すれば産靈となる。それが火産靈・興台産靈であり、また高皇産靈・神皇産靈などであるとなす說、（六）高木神の名から推して、高皇産靈神を一種の宇宙樹となす說の如きこれである。宇宙の創成を說くためには、創成の原動力が考へられるのが自然である。吠陀時代の印度アーリヤ族は、これをカーマ（Kama）と觀じ、古代希臘人は、これをエロス（Eros）と觀じた。高皇産靈神及び神皇産靈神も、かくの如き意味の生成力であつたらう。從つて强ひてこれを天之御中主命の力若しくは活動と結びつけて考へるにも當らず、また靈魂と交渉させる要もなからう。ただその生成力が二元的になつてゐるのは、支那の陰陽說のやうに生成が兩性によつて行はれるからであるか、或は本來別個に考へ出された生成神があとで二柱に對立させられたからであるかは確言し難い。神話に於けるこれ等二神の活動には、自ら相異なつた特徵が存してゐる。高皇産靈神は、葦原中國に使を遣る時、天若日子の心の正邪を試す時、天孫を降臨させる時のやうに、政治的場面に活躍するに對し、神皇産靈神は、大國主命が八十神に苦しめられる時のやうに家族的場面に活躍してゐる。もし前者を男神後者を女神とするなら、この差異には古代社會の生活が反映してゐるといふことが出來るであらうし、「出雲風土記」に神々の血統を述べるとき、甚だ屢々神皇産靈神だけを舉げてゐる事實の如きも、女系制の臭を帶びて來るであらう。　（松村）

篁 たかむら　歌人・漢學者【姓】小野朝臣【通稱】野宰相（古今集眞名序）・野相公（扶桑集）、共に小野參議の意【生歿】延曆二十一年に生れ、仁壽二年（一五一二）十二月二十二日歿す。享年五十一。或は貞觀五年十月二十二日歿ともいふ。【家系】遠祖は、孝昭天皇の皇子天押帶彥命である。敏達天皇の時代に小野臣妹子が近江國滋賀郡小野村に居り、小野氏を稱した。父岑守はその後裔である。【閲歷】弘仁六年正月、父陸奥守に任ぜられ、篁もこれに從つて任地に赴いた（十四歲）。同十一年（十九歲）父が阿波守となると共に歸京した。この間ただ乘馬を事として學業を顧みなかつた。嵯峨天皇はこれを聞き給ひ、岑守の子にしてなほ一介の弓馬の士となり終らんとするかと歎息遊ばされた。彼はこの御言葉を拜して大に慚愧し、翻然として學業に志したといふ。弘仁十三年九月（二十歲）初めて文章生に補せられ、天長七年（二十九歲）藏人となり、又式部少丞となる。この年四月父を亡つた。同九年從五位下に叙せられ、太宰少貳となつた。勅によつて任地に赴かず。同十年、清原夏野等と共に「令義解」の撰に與つた。この年仁明帝に御讓位あり、翌承和元年遣唐副使となつて一旦出發したが、暴風に遭つて還り、同四年再び出發した。然るに再び暴風に遭ひ、正使藤原常嗣の船破損し、常嗣の奏請によつて副使の船を正使の乘用に充てることに決し、翌五年出發したが、篁は大に憤り、病と稱して乘船せず、西道謠を作つて遣唐使のことを諷刺した。このこと嵯峨上皇の逆鱗に觸れ、國法を枉げた條によつて、絞刑に處せらるべきところを、罪一等を減ぜられて、隱岐國に配流された（十二月十五日）。この時の作、謫行吟七十韻は當時人口に膾炙したといふが、今は傳はらない。「古今集」の「和田の原八十島かけてこぎいでぬと人には告げよ蜑のつり舟」（卷九）、「思ひきやひなの別におとろへて蜑のなはたぎいさりせむとは」（卷十八）の二首は、この時の作である。同七年四月赦されて召還され、翌年九月勅によつて本爵に復され、十月刑部大輔となつた。翌年五月陸奥守、八月東宮學士を兼ね、同十四年參議に任ぜられた。かくて仁壽二年病重りて朝せず、錢穀を賜はり、十二月從三位に叙せられた。【著作】（和歌）勅撰集に入つてゐる歌は、古今集六、新古今二、續古今一、玉葉二、新千載一、計十二首。私撰集に入つてゐるものは、新撰和歌四、金玉集二。○外に「小野篁集」（一卷、圖書寮藏）と稱するものが傳へられて居り、「篁日記」（河海抄・花鳥餘情）「篁物語」などとも呼ばれてゐるが、篁の自記ではなく、後人の作つた物語である。內容は、篁がまだ大學の學生であつた頃、異腹の妹に書を教へてゐるうち親しくなつて通じた。親はこれを知つて妹を一室に閉ぢ込めて篁を遠ざけようとした。篁は部屋の外に來つて妹を慰め飲食を運んだ。妹は魂となつて男の身に添はうと誓ひ、食を絕つて死んだ。その夜篁が泣き悲しんでゐると妹の姿が現はれ、悲しいことを語つたが手にも觸れなかつた。三七日の間は亡靈が鮮かに現はれ、篁は悲歎の淚にくれた。依つて淚を集めて硯の水とし、法華經を書寫し、これを比叡山に收めて供養に資した。三年もたつと亡靈の出現も僅かになつたので、時の右大臣の三の君の聟になつたといふ筋を取扱つてゐる。物語化の程度は低く筋の變化や表現力は貧弱である。篁は三人稱で描かれてゐるが、篁を題材としてゐる事は明瞭である。妹との關係は「古今集」卷十六に妹の死を悼む歌があるのに依つたものであらうし、右大臣の聟になつた事は「本朝文粹」卷七に右大臣の娘を妻に乞うた文があるのに依つたものであらう。書中には三十一首の歌があり、その內九首は篁の作その他として「新古今集」以下に採錄されてゐる。而して三十一首は短歌としての獨立性が乏しく、二人以上の作者があるとも明瞭には考へられないから、本書の文と共に假作ではないかとも考へられる。書中には「古今集」の歌を引歌とするやうな文が二三あるが、「古今集」中の篁の歌を用ひてゐないのは不思議である。構想の上から亡靈の出ること、人間の執心を强く描いてゐること等の宗教的色彩は、平安朝末期の思想ではないかと考へられる。本書の成立は、「新古今集」以前ではあらうが、さほど古いものではなく、書中の和歌が弘仁期の作であらうなどとは到底考へられない。〔詩文〕野相公集五卷。「本朝書籍目錄」詩家の部にこの名が見えるが今は傳はらない。その他「經國集」「和漢朗詠集」「扶桑集」「本朝文粹」等に見えてゐる。【人物・作風】夙に博識英才を以て重んぜられてゐたが、自ら持すること高く、狷介不羈であつた。遣唐副使として常嗣の下にあるを潔しとせず、遂に配流されるに至つたのも、その一つの現はれである。勿論その反面には多感多情な詩人的性格を多分に有してゐた爲めであるが、この故に野狂とさへ稱された。併し文才最も高く一世を壓し、帝寵を一身に集め、殊に詞藻の富膽は人を驚かすに足るものがあつた。嵯峨天皇、嘗て篁の才を試みさせ給ふとて「白氏文集」の中から「閉閣唯聞朝暮鼓、登樓空望往來船」の句を拔き、わざと空を遙と改めて篁に示させ給ふと、彼は直に、誠に佳作であるが遙を空に改めたなら一層よくなると申上げた。當時「白氏文集」は未だ民間には流布されてゐなかつたので、天皇は篁の詩情が白樂天のそれと相通ずるものがあるのに驚かせ給うたなどとさへ傳へられ、篁に關するこの種の傳記は外にも多々ある（宇治拾遺・大日本史・古事談・江談抄等）。これ等は要するに傳說であつて信じ難いが、その名聲を覘ふには十分であらう。「扶桑略記」（卷二十）には「小野篁は詩家の宗匠なり」と記してゐる。併し、氣格は盛唐に迫るも、遣語に疎漏があるとも許せられてゐる。又彼は書に通じ、草隸共に拔群で、二王（王羲之・王獻之）の風があつたといふ。又古來下野の足利學校（別項）は、篁の家塾であつたとも傳へられてゐる。　（山岸・西下）

【參考】續日本後記（卷五・六・七）○文德實錄卷四○古今集目錄○公卿補任○國文學全史平安朝篇　藤岡作太郎　○新たに知られた小野篁日記　松尾丹治（國語と國文學昭和二ノ一二）

高村光太郎 たかむらくわうたらう

詩人【號】初め碎雨と號した。【閲歷】明治十六年三月、東京に生る。東京美術學校彫刻科を卒業して歐米に遊び、歸朝して彫塑・繪畫・詩歌の創作に從事した。その父は、帝室技藝員高村光雲である。夙く與謝野寬に歌を學んで「明星」及びその後身「スバル」にその作歌を寄せたが、恰もその歸朝した際は「スバル」の享樂主義文學全盛の砌で、彼も亦その有力な一員として參加し、「白樺」「三田文學」と相結んだ「スバル」及び「朱欒」が、その詩文勢力を以て自然主義的「早稻田文學」を驅逐した潮流に乘つて、諧謔・カリケチュア、詩及び散文に都會人的敏感を基調とする世紀末的味噌を試みた。が、後に「白樺」の人道主義的文學が全文壇の勢力となるや、感受性の强い彼は直ちにその感化を受けて、さきの享樂的步調を棄て、清敎徒的人道主義的文學に走つた。その後の詩作は、多く「白樺」及びその亞流の小同人雜誌に揭げられた。【作品】詩集「道程」（大正三年）一卷に一九一〇年から一四年に至る作詩を收め、その以後の作及び「道程」は、「現代詩人全集」第九卷（昭和四年十月、新潮社）に收められた。なほヱルハアレン譯詩集「明るい時」（大正十年）一卷の外、譯物及び「ロダンの言葉」等がある。【批評】三十年代の「明星」の亞流に發足し、明治末期の世紀末的享樂詩に活躍して、人道主義的文學に轉移する間、彼の諧謔とディレッタンティズムとは、隨所にその横顏を示してゐる。「道程」は大正初期詩壇の佳著で、これだけの迫力と想像力と、敏感と情緒との底力があれば、當然第二の「道程」に素晴らしい大展開が來なくてならぬ筈だが、それが無かつた。人道主義的不融通性が彼の都會人的本質を束縛しすぎた爲めであり、又その本業とする彫塑

の精進に調ぐ餘力をその詩業に表はすだけの熱心を缺いた爲めでもある。「ロダンの言葉」「續ロダンの言葉」等の彫刻文學に表はれた熱情の十分の一もが、そのヹルハアレン譯詩に表はれてをらぬ。が、大正詩壇の民主々義文學運動の、詩歌方面に於ける唯一の代表詩篇は、專門詩人の劣作の雲集の間に在つて、この彫刻家詩人の手によつて彫り出されたのであつた。その後の彼は、長き冬眠の狀態に在ると見てよい。　〔日夏〕

篁日記　たかむらにつき　「篁」を見よ。

孝盛　たかもり　雜學者【姓名】姓森山。通稱源五郎【號】閑窓【生歿】元文三年生れ、文化の初年歿。【閲歷】旗本で祿四百俵を食み赤阪清水谷に住んでゐた。寛政年中小普請組頭から御徒士頭となり、後御目附御先手組頭となり盜賊改加役を兼ね、循吏の聞えがあつた。國學に通じ、和歌をよくした。【著書】賤のをだまき一卷（享和二年成。燕石十種第一輯。少時から見聞した事歷を記したもので、たよさし、日本左衛門、鬢捲頭、表太夫節、文金風、延享・寛延頃の風俗、女の帽子揃さへ、カヅキ、女の雪笠、朱ぬりの櫛、花かんざし、風鈴染、傳九郎染、市松染蔵小紋、小六染、觀和染、田舍歌行、頭巾販賣、女形舞等五十餘項、悉く當時の風俗を知るに足るものである）○蟹の燒藻○閑窓新語等。　〔石村〕

高安月郊　たかやすげつかう　詩人・劇作家【本名】三郎【別號】落風吟客【閲歷】明治二年二月十六日大阪市東區瓦町に生る。家は代々醫を業とし、彼もその修業のために、十三歳の時郷を出たが、後政治に志し、又轉じて文學に入つた。二十二年頃より抒情詩を作り、又劇作に志し、二十六年初めてイプセンの「社會の敵」「人形の家」を譯した。三十一年より京都に寓居、「大鹽平八郎」その他飜案劇等が關西の劇場に上場された。三十六年、その出世作「江戸城明渡」（別項）が、東京明治座に上演され、好評を博し、續いて「櫻時雨」（別項）が大阪南座に上場され劇作家としての地位が確立された。以上の二作はその後も屢々上演されて彼の代表作となつた。四十二年東京に移つたが、大正十二年震災に遭つて大阪に歸り、その後再び東京に移つた。【著作】詩集には「夜濤集」（明治三十三年刊）、「春雪集」（同三十六年刊）、「寢覺草」（同三十九年刊）、「月郊詩集」（大正七年刊）があり、戯曲には處女作「重盛」の外、「大鹽平八郎」（明治三十六年一月刊）、「江戸城明渡」「櫻時雨」（同三十九年五月）の外十數篇がある。その代表作は現代戯曲全集（國民圖書株式會社）及び日本戯曲全集現代篇に收められてゐる。その外、イプセン、シエクスピヤの飜譯、及び「東西文藝評傳」「東西文學比較評論」「日本文藝復興史」等の著書がある。

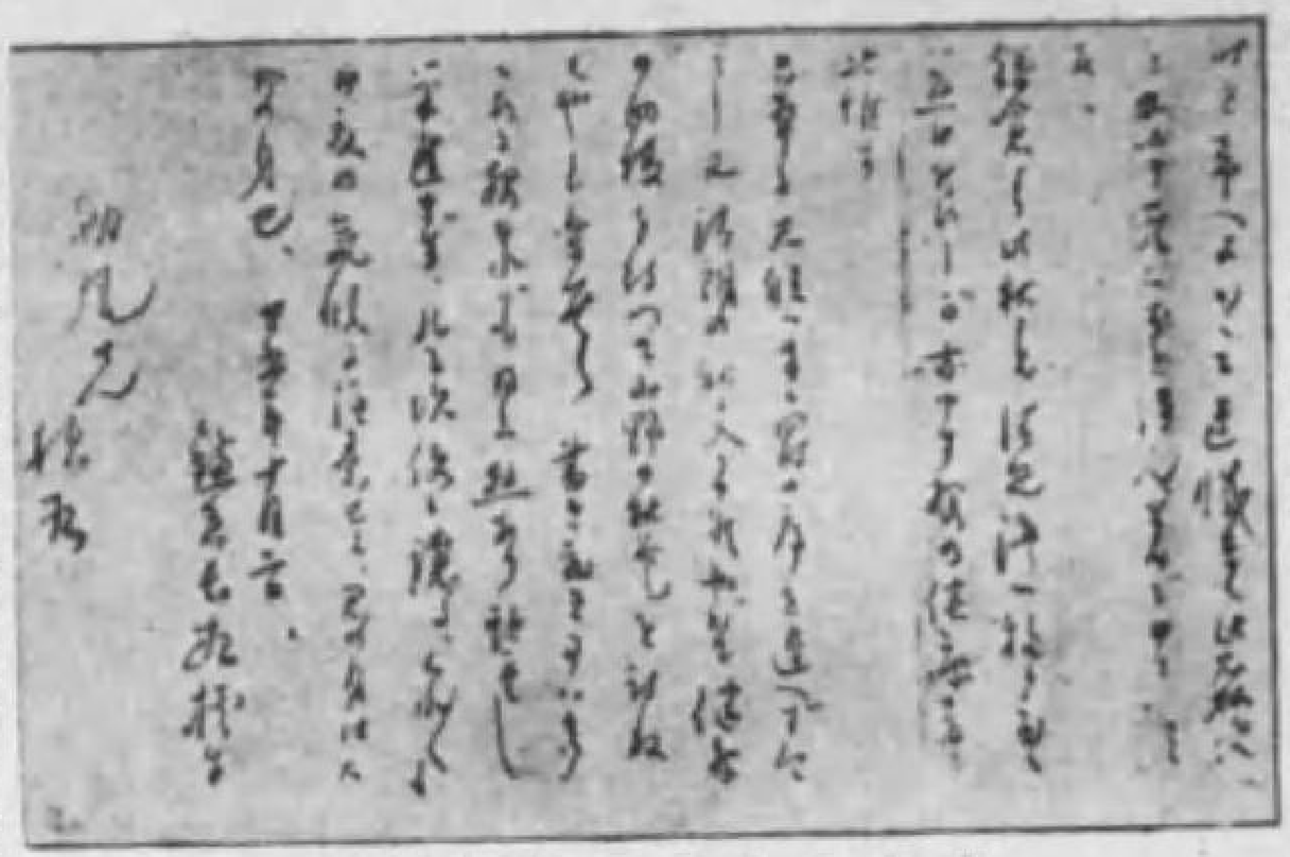
【批評】詩人としての彼は、明治三十年代及び四十年代に活躍した。その作品は多く「明星」に發表され、その題材を史上の人物に求める點などは彼の劇作と共通してゐる。併しその作は必ずしも新しい史的感興とか人物心理とかを有するものではなく、用語は華やかで、飄逸と閑雅ではあつたが、詩は在來の詠史に過ぎない。「月郊詩集」にその殆ど全作品が收められてゐる。劇作家としての彼も史劇に得意で、「江戸城明渡」「櫻時雨」などの佳作を殘したが、それも當時の沈滯した劇界に一抹の清新味を投じたのみで、その他特に注目すべきものはなく、寧ろ彼が明治二十年代に於て、早くもイプセンを我が國に紹介した功績は認めらるべきである。　〔河井〕

高山樗牛　たかやまちよぎう　評論家【本名】林次郎【生歿】明治四年一月、羽前莊內鶴岡に生れ、同三十五年十二月歿す。享年三十二。【法名】文高院樗牛謙光日瞻居士【墓所】駿河龍華寺【閲歷】父は齋藤親信、莊內酒井家の藩士、母は芳子、伯父高山久平の養子となつた。明治十年、養父に從つて山形・酒田・福島と轉任して、十七年、福島中學に入學。十九年上京、本所の酒井邸內に起臥した。間もなく、東京英語學校に入學。二十一年、仙臺の第二高等學校に入學した頃から、文學に心を寄せ、文學會を組織して「文學會雜誌」を刊行する傍ら、近松巣林子の戯曲についての新研究を始めた。二十六年、再び上京して東京帝國大學哲學科に入り、その年、歷史小說「瀧口入道」（別項）を二十日間で書いて「讀賣新聞」の懸賞に應募し、翌年四月、一等入選を發表されて、樗牛の名が東都文壇に知られた。翌二十八年一月、文科の先輩友人と共に「帝國文學」（別項）を發行し、二月「巣林子の人生觀」、四月「巣林子の女性」等を發表、外に「太陽」に「近松の戯曲に於ける人物性格」を書いた。それ等によつて文名愈々高く、その年七月、大橋乙羽の斡旋で、「太陽」の文藝評論を擔當すること爾後一年半。二十九年七月、帝大卒業と共に、第二高等學校教授として仙臺に赴任したが、教師の職業が性格に合はないので、間もなく辭職。三十年四月、博文館に聘せられて、「太陽」主幹となり、

高山樗牛

執筆の傍ら、早稻田大學、帝國大學に出講した。この年十二月、法學博士杉享二の女、里子を娶つた。三十年五月、井上哲次郎等と共に、日本主義の叫びを揚げ、國民性に基づく文化乃至文藝思想の歸一を主張すると同時に、クリスト教、佛教を非國民的宗教として攻擊し、宗教家と盛んな論戰をした。日本主義に關する見解は、三十一年から三十二年の初めに亙つて、續々「太陽」誌上に公にせられたのである。その後、專攻の美學についての所見を時々「太陽」に掲げたが、三十二年十月に發表の「歷史畫の本領及び題目」では、坪內逍遙の反駁に會ひ、論戰すること三度に及んだ。その中に、樗牛の上に思想的の轉機が來た。それは、三十四年一月發表の「文明批評家としての文學者」に於て窺ふべく、ニイチエの哲學思想を讃美し、煩瑣學風を非難すると同時に、風俗道德を攻擊するに至つたので、坪內逍遙は、教育家としての立場から、ニイチエズムを論難すべく、「馬骨人言」（別項）を書いた。併し歷史畫論に於けるが如き論戰を見ずに終つた。三十四年八月、「美的生活」の一文を「太陽」に掲げて、本能滿足の趣旨を高調するに及び、一部の青年はこれに共鳴して、樗牛の人氣は一層加はつた。併し彼自身は次第に內省を加へ、深く人生の歸趣に思ひを潜めた結果、日蓮の人物・精神に傾倒し、その新研究に成る日蓮觀を「太陽」に掲げた。これより先き、樗牛は三十三年六月、文部省から美學研究のため、獨伊佛に留學すべき命を受けたが、病に罹つて果すことが出來ず、靜養のため最初興津に轉地し、次いで鎌倉に移つた（三十四年十月）。日蓮研究の志望が、彼をして鎌倉に移らしめたのである。その後、彼の思想生

活は次第に深みを加へて來たが、病は快方に向はず、到頭留學を斷念しなければならなかつた。三十五年一月、文學博士の學位を授けられ、その年の暮、遂に世を去るに至つた。生前の希望で、駿河の龍華寺に葬られた。【著作】殆ど全部が、樗牛全集全五册に收められてゐる。明治三十六年十二月第一卷博文館より出版、三十八年、全部完結した。その後、大正三年六月に至つて縮刷版六册が刊行せられた。改版を期として增補訂正をなし、論文草稿數百頁を加へ、少年時代の日記、[illegible]の悲哀及び書簡二百通を附加した。舊版の分には、單行本として出た「世界文明史」「論理學」「近世美學」「倫理學教科書」の一部を收めてあつたが、縮刷版では、全然削除した。更に大正十四年改訂註釋樗牛全集七册が刊行された。



高山樗牛書簡（姉崎正治氏藏）

【批評】樗牛は、三十二年の短生涯で世を去つたので、今日生存してゐたら、どう云ふ風に展開したか、豫測し難い。或は樗牛は、あのまゝで完成したのではなかつたかとも思はれる。總じて彼は批評家を以て終始したが、一方、多感多恨の人で、詩的情熱を深く中に湛へてゐた。そして晩年には、病のためもあらう、その詩的感傷性が最も顯はになつて來た。詳しく云へば、彼の生活は、美學者、文學批評家、文明批評家、思想家、そして卓越した文章家等多角に分れるが、どの方面でも、何等かの迫力を當時の人に與へた。美學者としては規範的であるよりも解說的であるが、彼は他の四つの方面で、殊にその天分を發揮した。彼の批判は、指導的意識と破壞的情熱に滿ちてゐたが、建設者としては、緻密な理論の構成を缺き、その土臺たるべき基礎研究に乏しい憾みがあつた。大ざつぱであつた。後半生には思想家として急速な轉換を重ね、日本主義からニイチエズムに、更に日蓮主義といふ三つのエポックを作つて、その目まぐろしさに人を驚かしたのも、よい意味では敏感であり、惡い意味では、思想に固定性の無いことを語つた。しかし、いつもその變換を勇敢に宣言して、大した矛盾を感ぜしめない所に彼の強味がある。詳說すれば、日清戰爭の勝利によつて、國民的自覺が高まつた時代の、日本文化の優越を意識する思想傾向を代表したのが日本主義であり、天才主義・個人主義・本能滿足主義のニイチエの哲學に接し、形式主義一方の時代に對する不滿に逢着して爆發したのが日蓮主義である。これは西歐流の天才主義・個人主義だけでは、根本的の安心決定を得難いとて、人生の光明を求むるため、國家尊重の精神解決を日蓮の上に見出したものである。樗牛の思想生活は以上の如くであるが態度に矛盾があり、非論理的な點があるのは、本質が詩人的であつたからである。而もその表白が明快で、情熱的なため、その矛盾や非論理的なところが一寸分らない。深味には乏しいが直觀に於て最も優れ、時勢に對する觀感が強く動いてゐたのが、優に彼の大づかみな理論の缺點を或る點まで救つてゐた。殊に批判、抒情、いかなる場合においても、その韻律的な詩的散文と、剴切な用語と緊張した文體と、朗々として耳に快よい諧調的な句法とは、何人も眞似られない美文家としての價値を證明するものがあつた。一般文學及び思想に對する彼の影響は可なりに強い。鬪爭的な批評家として最も強く時代を印象したが、その外、彼の親友たる姉崎嘲風・笹川臨風などが、彼の日蓮研究から刺戟を受けて、共に日蓮に關する著述をなすに至つたことなどに見ても、感化力の強さがわかる。殊に當時の青年は、樗牛の論文が出る毎に、共鳴したものが多く、「本能滿足」とか「美的生活」とかいふ語が流行したくらゐである。要するに、ロマンチシズム思潮の勃興は、樗牛に負ふところが少くない。與謝野晶子なども、當時樗牛の影響を受けた一人だつた。　〔高須〕

爲寶　たから　書家【姓】關根【字】提卿【號】江山・趙齋・輝月堂【生歿】未詳。但し文化・文政・天保頃の人。【閲歷】未詳。天保頃に江戸下谷御徒町に住み、書道の教授をしてゐた人で、最も行書に巧みであつた。【著書】假名類纂一卷（天保十一年刊。佛足石歌碑等を初め、古名蹟から平假名の諸字體を蒐集して刊行したもので、書道鑑定の參考書、習字の手本として編製した平假名研究の好參考書である）○音韻假字格一卷（萬葉古人の作といふ音韻略、僧安然作といふ音韻略に依つて、字音假名遣を說いたものであるが、學術的價値は餘り高くない）。　〔藤田〕

寶競べ　たからくらべ　說話【名義】以前旅をする遊藝の徒によつて、長々と語られてゐた長者譚は、ただその中の最も解し易く、又最も深く民衆の胸を動かしめた部分だけが、破片となつて土地毎に留まつてゐる。さうして一方には記錄の上にも、もはやその完形は保存せられぬものが多いのだから、僅かにその切れ切れの傳說の蒐集によつて、ありし日の姿を想像して見るの外はないのである。大體に長者の語りごとは、榮華の盛りと沒落の物悲しさとの二つに分れ、曾ては淨瑠璃御前の草子にも見るやうな、富貴萬福の光景を描き出すために、話者の空想を傾けた時代もあつたらしいのだが、何しろ眼前は既に離々たる草の原であるのだから、聽手の感動は自然に盛者必衰の理に引寄せられて來たかと思はれる。それが所謂佛乘の趣旨に合し、兼ねては貧しく乏しき人々に對して、一種間接の慰藉にもなつたことは想像し得られる。寶競べの昔話は、丁度この榮枯二つの部分の堺目として、必ず說き立てられてゐた重要な一節であつたやうで、これを傳說の形にして記憶することは、やゝ困難であつたらうと思はれるにも拘らず、今も民間の傳承に折々は殘つてゐる。通例の形は二人の長者が地を接して住み、一方は米俵を境に築き、又は金銀を路に布いて、それを踏みながら出會したところが、他の一方はただ十二人の男を引連れて出て來た。これより以上の寶は、この世の中にはあるまい

と、一方の子を持たぬ長者が、初めて人生の寂寞を感じたといふ風に語つて居り、肥後ではその口碑を受け入れ易くするために、蒲山といふ地名を援用した傳說もあつた。これは子を持つて苦勞する貧窮の農民に、心强い一種の教訓を與へたかと思はれ、長者が子無くして神佛に祈願を掛けたといふ話は、後には會津の鶴塚のやうに、鶴を子として淋しく終つたといふやうな言ひ傳へにも移りかはつてゐる。しかもこれはただ後々の新しい傾向であつて、最初は恐らく「吉備志略」の、箕作翁と寳鏡翁との寳競べの如く、長者の富の力の無邊際を敍說した、花やかなる語りに興じたものであらうと思ふ。今日その痕跡のなほ殘つてゐるのは、若狹の八百比丘尼が幼少の頃に、人魚の肉を食べたといふ話の前段だが、これなどもやはり、人間の福分には限りがあつて、あたら不老長生の術の眼の前に存するのを、多くの長者は知らなかつたといふ寓意が窺はれる。次には壹岐島などの百合若物語に、二人の長者が寳競べをしたことを發端としたものもあるが、これも賢き兒を持つてゐた百合若の父の方が勝ちであつた。日本は要するに子を愛し、家の持續を珍重する說話が次々に成長し、展開して行くべき國柄であつた。その傾向が、今もきれぐの傳說の上に、僅かな例證となつてその跡を留めてゐるのである。（長者屋敷參照）　（柳田（國））

寶田壽助　たからだじゆすけ　脚本作者【別號】向榮樓桐堂・東峰山人【生歿】寛政九年、江戶に生れ、天保九年（二四九八）二月十九日同地に歿す。享年四十二。【閲歷】神田の質屋の子で、操淨瑠璃の作者となつて松川寳作と云つたが、二代松井幸三に引立てられて歌舞伎の作者となり、三代尾上菊五郎附となつてゐたが、長島壽阿彌に勸められ、寶田壽來の跡をついで壽助と改めたのが天保四年正月の河原崎座。立作者に昇進したのは天保六年十一月の森田座であつた。【著作】契比翼艷褄（天保八年九月河原崎座。小さん金五郎）○世界平氏梅額鏡（天保八年十一月河原崎座。嫐通ひの景淸）○花櫓劇陣取（天保六年十一月森田座。松山のお辰眞）○菅原遺驕字曾我（天保七年三月森田座。曾我の世界へ「忠臣藏」と「菅原」の趣向を加へしもの）○八犬傳評判樓閣（天保七年四月森田座。江戶に於ける最初の八犬傳劇）。

【參考】作者店卸　（渥美）

寶田壽來　たからだじゆらい　脚本作者【本名】鈴木和八郎【俳名】閑雅【別號】劇神仙【生歿】元文五年江戶に生れ、寛政八年（二四五六）八月十七日同地に歿す。享年五十七。【閲歷】神田の住人である。狩山金八の門に入つて劇界に名は出したが、立作者にはならなかつた。初代瀨川如皐や、中村重助を助けて一齣づつを執筆するのみであつたが、それでも非常に有名なのは、常磐津淨瑠璃「積戀雪關扉」（關の扉參照）を作つた爲めであつた。當時の劇壇での博識家で、芝居の方は一種の道樂であつたともいはれてゐる。

【參考】名人忌辰錄　關根只誠　（渥美）

薪能　たきぎのう　能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同四日東金堂で行はれた薪宴（敎訓抄）から起つたもの。初めは風俗歌を謠ひ舞つたものであるが、至德の頃には猿樂を演じ（至德二年記）、世阿彌の時から二月に勤めることに定まつた。爾來猿樂四座（別項）、殊に金春座の重い勤めとして每年演じて來た。

【參考】能樂盛衰記上卷　池內信嘉　（佐成）

瀧口入道　たきぐちにふだう　歷史小說【著者】高山樗牛【刊行】明治二十七年二月讀賣新聞（懸賞新選）。後、單行本として春陽堂より出版。樗牛全集・現代日本文學全集所收。【梗概】齋藤瀧口時賴は、小松內府重盛に仕へて當年二十三、身の丈六尺に近く、武骨一邊の勇士であつたが、治承三年の春、平相國淸盛が、西八條の花見の宴に列り、その日の餘興に、「春鶯囀」を舞つて衆目をあつめた少女、中宮の曹司橫笛の艷姿を見てから戀に惱み、夜每に書を橫笛に贈つたが何の返事もない。思ひ餘つて父茂賴に橫笛を妻に迎へたいと言ふと、頑固一徹の父は世にも人にも知られた人の娘を貰へ、御室邊の鄕家の娘など以ての外だと叱りつける。さらば出家を許されたいと乞ふと、父は怒つて親子の緣を斷つとまで言ふ。決心した時賴はそれとなく重盛に暇乞ひに行くと、その子維盛の行末を賴まれた。時賴出家の噂が中宮へ傳はると、橫笛は自分のために武士をすてさせた罪の深きを思ひ、一夜嵯峨野の奧の往生院に時賴を訪ね、夜中戶の外に立つてゐたが、彼は戶を開けようとはしない。橫笛は遂に髮をおろし、深草に庵を結んだが、幾ばくもなく世を去つた。それを聞いた時賴は、憐れを催し、墓とは名ばかりの彼女を葬つた土饅頭の前に後世を弔つた。そのうちに平家は西國に沒落する。時賴が都へ來て見ると、平家の榮華の跡は見るよしもない一面の焦土だ。彼は竊かに重盛の墓を訪うて、賴まれた責を果さない罪を詫び、高野に登つて山深き草庵に籠つた。そこへ都の妻子に心ひかれた維盛が訪ねて來る。時賴は屋島での最後の一戰を勸めたが、その勇氣のない維盛は、和歌の浦に身を投じて死んだ。この悲痛な出來事に打たれて時賴も、同じ浦べに腹搔き切つて維盛の後を追つた。時に年二十六であつた。【批評】結構は大體「平家物語」（別項）により、平家の文章に馬琴調をまぜ、散文詩といへるほど流麗で韻律的だ。初めから、この題材を詩として描いたので、抒情味の勝つた詠嘆的なものになつて、人物の性格や、心理の動きが型に入つた傾きがある。この作が讀賣新聞の懸賞小說の一等入選と決した時、匿名なので、何人の作であるかが問題となつたが、當時大學在學中の二十三歲の青年の手に成るものと分つて更に世人を驚かした。樗牛の出世作として、また後年の樗牛と併せて考へるべきものであるが、彼はその後再び小說の筆を執らなかつた。（高須）

瀧口橫笛　たきぐちよこぶえ　「祇歌加留多」を見よ。

たきつけ　假名草子　一卷【作者】未詳【刊行】延寶五年【諸本】江戶時代文藝資料第四所收【內容】「もえくひ」「けしすみ」（各別項）と共に三部作といふべきもの。三十歲前後の男と老人との二人の遊客が島原歸りの道すがら、話し合ひうなづきあつてゆく。後をつけて聞いて見ると、それは老年の男が色道の蘊を語り聞かせながら行くのであつた。そこで耳を欹てて聞き得たところを書きつけたといふ形になつてゐる。二人の會話が主であつて、間々說明の文を挿んである。丹波口の茶屋より廓へ通ふ情趣を敍したあたりの文章は、「枕草子」の筆致に倣つてゐるあとが見える。【批評】明曆・萬治・寛文頃から擡頭し來つた狹斜文學の系統に立つものであつて、所謂粹啼し、色の諸分を骨子としたもの。當時の通人の色道修養書であり、また次いで現はれた好色本のために路を拓いてゐる。「もえくひ」「けしすみ」と共に、この種著作中にあつて注意すべき作品である。（小泉）

瀧本流　たきもとりう　「書道」を見よ。

打毬樂　だきうらく　雅樂舞曲【名義】毬を打つ樂の意。【異稱】打球樂。これを黃鐘調にて奏する時は、「ちやうぎうらく」と訓む。【性質】唐樂。新樂。中曲。太食調曲に屬する。七帖（拍子各十二）。舞があり四人で舞ふ。舞人は特別の裝束を用ひ、鋼鐵の冠をかぶる。毬打の棒を持ち、中央に毬玉一個を置き、舞人はこれを廻つて順次にこれを打つ態をなして舞ふ。答舞には「埴破」又は「狛桙」を用ひる。【沿革】「敎訓抄」「體源抄」には黃帝の作とあるが、信ずるに足らぬ。「體源抄」には胡國馬上曲とある。白石の「樂考」には「唐敎坊樂宋朝女舞にあり」とあり、「大日本史」禮樂志には、「一按、羯鼓錄、曲名有打毬樂、其爲唐曲明矣」とある。要するに唐の樂曲であらう。我が國へ傳來した年代等は不明。平安朝にては、競馬・相撲等の會に於てこの樂を奏した。（田邊）

濁音　だくおん　國語學・漢語學【解說】音の種類の一つで、淸音（別項）に對立する。假名文字では、ガザの如く「゛」符（濁音符）を附して書き表はす音節。その初めの子音は、凡て有聲音である（併し有聲の子音で始まる音節は、凡て濁音であるのではない）。濁音は、ガ行ザ行ダ行バ行の如く、これに對する淸音のある音節にのみ存する。日本語では古くは濁音で始まる語はなかつたやうであり、また複合語に於ては、語の最初の淸音が濁音になる事がある（「かさ」が「ひがさ」となる類）。かやうな點からして、日本語には本來濁音がなかつたものとし、甚しきは延喜・天曆の頃までも、淸音のみであつたと說くものもあるが（金石書主の古音本音考など）、容易に信じ難く、少くとも歷史時代に於ては、濁音の存在を否定する事は出來ない。【本濁と新濁及び連濁】古く漢字音に於て、本來濁音である音を本濁と云ひ、本來淸音であるものが、他音との連結上、濁音となつたものを新濁と云つた。新濁は又連聲濁とも云ひ、連濁ともいふ。純粹の國語に於ても、同樣の現象がある。「はし」（箸）が「ひばし」（火箸）となり、「たる」（樽）が「さかだる」（酒樽）となる類である。これをも連濁といふ。（淸音參照）

【參考】淸濁音　上田萬年（帝國文學一ノ六）○國語音聲學　神保格　○連濁音の發生　山田孝雄（國學院雜誌一〇ノ八）○ライマン氏の連濁論　小倉進平（國學院雜誌一六ノ七・八）○濁點源流考　吉澤義則（國語說鈴所收）　（橋本）

卓池　たくち　「天保四老人」を見よ。

田口卯吉　たぐちうきち　經濟學者・史論家【本名】鉉、字は子玉、卯吉は通稱【號】鼎軒、又嘗て黃東山樵・畠山擴知・牛鍋逸士等の別號を用ひた。【生歿】安政二年四月二十九日、江戶目白臺に生れ、明治三十八年四月十三日本鄕西片町に歿す。享年五十一。【閲歷】田口家は德川家の徒士で、祖父愼左衞門は佐藤一齋の長子。田口家に入り、旗本西山氏の子樫郎を養子として長女町子に配す。鼎軒はその子。五歲の時父を喪ひ、十二歲幕府に出仕して徒士見習となつたが、間もなく明治維新に會つて家祿を失ひ、橫濱の商家に寄寓した。十五歲靜岡藩に復仕して、沼津小學校・沼津兵學校等に學び、軍醫を志願して靜岡病院生徒となり、醫學研究のため上京したが、尺振八氏の共立學舍で英語・經濟學等を修め、明治七年（二十歲）大藏省に屬となる。その頃より記者生活に興味を持ち、報知新聞・橫濱每日新聞等に投書し、その主著の一つである「日本開化小史」（別項）も、同十年大藏省御用掛在任中に第一卷を公にしたのであつた。同年官を辭して沼間守一等と嚶鳴社を起し、翌年經濟學者としての處女出版「自由交易日本經濟論」を著し、畢生の事業であつた「東京經濟雜誌」は同十二年に創刊し、千數百號を重ねた。又これと前後して經濟談話會を起したが、それは後に東京經濟學協會と改め、保護主義の國民經濟會に對立して自由主義の機關として活躍した。又同二十四年「史海」（別項）を創刊し（二十九年まで續刊）、歷史の近代的再生產を主唱し社會的にも又專門家に對しても大なる刺戟を與へた。その間、國家及び自治體の政治に活躍し、東京市・府・區會議員の公職に就き、二十七年、東京市第八區選出衆議院議員に當選し、爾後每回當選を續けた。又常に所謂言論文章の徒たる事を屑しとせずと云つてゐたので、自由主義經濟の實践のため、自ら兩毛鐵道を起し、又花岡鑛山を經營し、その他諸會社・銀行等に關係し、二十三年には東京士族授產金を以て南島商會を起し、帆船天祐丸を貿易船に仕立てて自ら南洋諸島を巡航した。編纂事業としては、經濟雜誌社を創設し、當時殆ど官省の獨占であつた大部の編纂事業を民間で企てる端緖を開き、大日本人名辭書・日本社會事業・國史大系・續國史大系・續德川實紀・群書類從・續群書類從、その他を出版した。【學風・人物】鼎軒は、維新後、日本に侵入した外國勢力であつた英・佛・獨の對立に於て英派を代表した先覺者の一人で、アダム・スミス、ミル、スペンサー、バックル等の影響を受けたが、決して祖述的態度をとらず、マンチェスター派などと云はれることを嫌ひ、自己一流の自由主義・實證主義・現實主義の經濟論・政治論・史論を立て、而も英國流に、何處までも社會的實際と接觸を保たうとする態度をとつた。併し先進資本主義國の標本的歷史過程から生れた理論の上に立つて日本の現實を批判した點で、實際家であるよりは學者であり、評論家であつた。元來、多能多才で、政治・經濟・社會・文學の各方面を涉獵した外に、紡績機・人力自動車・不顚船などの考案を試みた。科學者的頭腦と、都會人的洒落の性格とをもち、天才的であると同時に常識的で、直情徑行と溫厚篤實との兩面をもつてゐたので、敵味方から敬慕された。【著述】鼎軒田口卯吉全集（八卷）に網羅されてゐる。○日本開化小史（別項）○支那開化小史○日本外史と讀史餘論○日本開化の性質○日本の意匠及情交○古代の研究○樂天錄○自由交易日本經濟論○經濟策○續經濟策○內地雜居と居留地制度○條約改正論○時勢論○讀藤長論○帝國財政管見○地租輸否論○財政と經濟○破黃禍論○商業史歌○大英商業史○經濟哲學○手形之心得（以上三書は飜譯）。

田口卯吉

【參考】鼎軒田口卯吉全集　○田口鼎軒先生傳

鹽島仁吉（明治四十五年經濟雜誌社）○文明史家並に社會改良論者としての田口鼎軒　森戸辰男（我等昭和二ノ六）　（長谷川）

田口掬汀（たぐちきくてい）　小說家　【本名】鏡次郎【閱歷】明治八年一月十八日、秋田縣仙北郡角館町に生る。父は人形師であつた。小學校を出てから商家の丁稚となり、十八九歲から二十二歲頃までは洋服の註文取をやつたり、郡役所の雇になつたりした。それから秋田新聞の通信をした。二十五歲の時、新聲社（別項）社長たりし佐藤義亮に拔擢されて、「新聲」記者となり、編輯に從事した。明治三十四年金港堂の懸賞小說に應募「人の罪」當選、單行出版となる。翌年大阪毎日新聞に、小說「新生涯」を連載。明治三十六年新聲社を退き、萬朝報に入る。小說「女夫波」を同紙に揭げ、翌年「伯爵夫人」（別項）を揭げた。明治四十年萬朝報を退き、佐藤紅綠・柳川春葉と共に、川上音二郎の經營する大阪帝國座々附作者となつた。明治四十年の秋、大阪毎日新聞社に入り、專ら新聞小說に筆を執つて「第一人」「仕合者」「北の國」「綾富伯爵夫人」等を發表した。大正三年同社を退き、同四年「中央美術」を創刊した。この間大阪朝日新聞に「ふたおもて」「まごころ」の二長篇を揭げたが、大正五年以來創作の筆を絕ち美術批評に從ふ。大正五年鏑木清方・平福百穗・結城素明・松岡映丘・吉川靈華等と邦畫研究の團體金鈴社を起し、毎年一回同人の制作を展觀した。大正八年中央美術展覽會を創設し繼續十ケ年に亙り、新人飛躍の機關として、美術運動史上の一存在となつた。また大正十五年以來東京府の囑託となつて府美術館の經營に參畫してゐる。新聞小說の外新派劇の脚本として川上音二郎が上演せし「祖國」（サルヅウ作）「天風組」、伊井蓉峰上演の「熱血」（トスカの飜案）、帝國劇場女優劇の「國境」「粹なおさばき」「留守宅」の外、喜劇「嘘の世界」「見得くらべ」「泣男」等がある。（城戸）

綺天情仙　「寝齋」を見よ。

拓本　「法帖」を見よ。

詫磨派（たくまは）　繪畫【解說】詫磨の文字は託摩・詫摩・宅間・宅磨など用ひられてゐるが、藤田男爵家所藏の國寶十六羅漢圖には、詫磨法眼榮賀筆と落款されてゐる。詫磨派は藤原時代に興り鎌倉末期まで佛畫家として世に榮えた。この派の祖ともいふべき爲氏は天曆頃の人と稱せられ、次いで白河天皇の頃、爲成が出て、宇治平等院の壁畫を作つたといはれて殊に有名になつた。鎌倉時代には澄賀・勝賀・良賀等の名手が出て、その末期には榮賀が出た。元來詫磨派は在來の佛畫の手法に宋畫の筆法を加へて、著しく畫風を變じたのである。要するに鎌倉初期に於ける佛畫界の一新派であつたのである。この派の畫人として名高いのは、爲氏・爲成・爲遠等に次いで勝賀が傑出し、爲行・成忍・榮賀・了尊等である。（[illegible]）

たけくらべ　傳說【名義】地名のタケクラベが、多くは以前の國郡の堺の峠に存することは、夙に旅人によつて注意せられてゐる。傳說の或はこれを說明するのではないかと思ふものも、次々採集比較せられるやうになつた。その中でも殊に有名なる一つは富士の東南面に橫はり伏す愛鷹山であるが、これは大昔富士と背競べをしようとして、こゝまで步んで來たのを、足柄明神が憎んでその頭を蹴飛ばした爲めに、根張りは雄大であるが、たけは至つて低いのだと、語り傳へてゐたさうである。九州では阿蘇の一隅に立つてゐる猫岳が、これも主山を凌がうとしてその神の怒りにふれ、竹の笞を以て散々に頭を打たれた。それ故今もこの山ばかりは嶺に多くの凹凸が有るのだと謂はれる。山陰の方でも伯耆大山の隣に在る韓山は、「からくら」といふ國から長競べに來た山で、大山の神樣に木履で踏まれた爲めに、その頂が今なほ少しばかり傾いてゐるといふ。以上三つの實例の中で、富士の場合だけは兩山の間に通路があつた。今の大宮の町よりやゝ下の方を斜めに、十里木といふ峠を越えて、須山から足柄の方へ行く路が、寶永の噴火以前までは、盛んに使用せられてゐたのである。だからこの筋を通る旅客が、左右に二つの山を仰ぎつつ、屢々この傳說を聽いてゐたことは想像せられるが、果してこれと同樣の奇拔なる口碑が、曾て他の諸國の長競べといふ峠にも附隨してゐて、後に忘却せられたものと見てよいかどうかは、さう手輕には決し得ない。山が高さを競うたといふ傳說は、多分は古來の說話の土着したものと思はれるが、弘く全日本に分布してゐる。富士を相手としたものでは信州淺間、これは文獻の上にもくりかへし利用せられた昔話であつた。常陸の筑波山は、高さでは爭はうとしたのでないが、これも富士の山より立ちすぐれてゐたといふことが、古くからの語り草である。伊豆の半島の山々にも、やはり山の姿の美しさを比べたといふ神の嫉みの物語があつた。高さの爭ひとしては、加賀の白山が富士の噂をすることを忌むといふ話があり、越中の立山は又その白山と競うてゐた。東北では出羽の鳥海山が、背競べに負けて口惜しさの餘りに、飛んで海上に出て飛島となつたと謂ひ、津輕の岩木山も南部の岩手山も、富士と爭うたといふ話はない代りに、同じく附近の山の頂を斬つて飛ばせたといふ言ひ傳へは殘つてゐる。大和では三山の爭ひはただ舊記に錄せられるのみであるが、伊勢の境に立つ高見山が、多武峰と高さを競うて、負けてその頭が飛んだといふ話があり、更に一方が藤原鎌足を祀るといふに對して、これは蘇我入鹿の祭場であるかの如き解釋さへ起つた。その他三河の本宮山と石卷山、さては九州にも所々の高山に、かういふ半ば笑話化した傳承は數多く、本來は一時に双方の山を望み見る平地で、言ひ始めたことであつたかも知れぬが、今は主として何れか一方の山の麓での傳說として行はれてゐるのみである。それが各自の鄕土を鎭護する名山の崇信と結び附いてゐたこと迄は想像し得られるが、これによつて直ちに我が土地の境の山に、タケクラベの名を附與することは難かつたらう。多くの峠路には二つの峰、若しくは長高き二柱の岩があつた。道路は往々にして迂回してこの中間を過ぎるやうに設けられてゐた。これが我が國固有の守護思想に基くもので、神の認諾なき者の容易にその並び立つ間を通り得なかつた信仰を利用したらしきことは、必ず男女を以てその二つの神を喚んでゐたのを見てもわかる。それをタケクラベと謂ふに至つたのは、恐らく轉用であつたらう。卽ち遠近の山々が高さを競うたといふ物語が普及し、一方に男女相對する峰又は大岩が、異鄕人の接近を禁止するものだといふ信仰が、一旦衰へ亡んでから後の、第二の變化であつたらうと思ふ。（柳田(國)）

たけくらべ　「四十二の物爭」を見よ。

多氣競（たけくらべ）　人情本　七編　二十一卷

【作者】三亭春馬【畫工】歌川國貞・芳晴【名稱】（松竹梅登龍談）と角書がある。書名は三人の娘の生立を描き、戀の競爭の意味で丈競の音を借りたものである。【刊行】初・二・三編天保十年、四・五編同十三年、六・七編嘉永年間【題材】松・竹・梅を名のる三人の姉妹の復讐談が講釋種にある。これ等を思ひ寄せたのであらう。その他、「東海道名所記」「北郭通引節用」「尤の草紙」等を引き、吉原の古風俗を描かんと努めてある。

【梗概】吉原遊郭を田舍者が、大勢でひやかし歩き松葉屋の前に佇み、常盤木と云ふ遊女が、十五年前大地震に死んだと噂される新田の太郎助の娘お松に酷似してゐると口々に言ひ騷いで去つた。實際この遊女がお松であつた。彼女の父太郎助は大地震で、家族散り〱になり、お松・お竹・お梅の三人姉妹は隣家の惡者敬太に連れられ、別れてしまひ、お松は遊女となり常盤木と云ひ、お竹・お梅は共に吉原藝者になつてゐるのだが、幼時別れた事なので互に顏に見覺えがなかつた。常盤木はお梅の情人とは知らず、富家の若旦那勇次郎を見染め、自ら茶屋蓬萊屋に呼びて契を結び、自分の實妹と知らず、お梅がその馴染と知つて妬心からお梅は浮氣であると告げる。勇次郎はこれを信じお梅と喧嘩をする。常盤木は思ひの儘に勇次郎と逢へず、お梅と勇次郎とが仲直りしたと聞き嫉妬に耐へず、藝者お竹を煽動して勇次郎を橫取りせしめんとした。お竹が勇次郎と仲睦じく語る樣子を聞き、お梅は夢中になつて乘り込んで行つた。三人は姉妹であるとも知らず、勇次郎をめぐつて戀の爭鬪を續けてゐる。その間に太郎助は妻お作に死なれ後妻を連れて江戸に出て來る話、お梅の抱主花笠屋榮來の義俠などが出てゐる。

【解說】この戀の四角關係が、如何に解決するか、何時姉妹が名乘り合ふか、其處に興味の中心があり、作者の山があつたのであらうが、結末に至らず作者は歿した。しかし筋が可なり散漫で、要旨を摘出するに困難であるのは上乘の作とは云へない。本書の評判のよかつたのは別に理由が存する。卽ち「戲作者小傳」に「多氣競、小本天保十年刊行當り」とあり、讀書界に多少歡迎された事がわかるが、それはこの書に吉原の生活が比較的精細に描かれてゐるためで、作者は吉原に生れて吉原に成長し、吉原で營業した。隨つて吉原通である（三亭春馬參照）。妓樓の隱語、入船帳（客帳）の寫し、俳の物ざらひ等、土地つ子でなければ到底書けぬ廓內部の樣子が描かれてゐる。この點が斬新で好評を博したのであらう。吉原研究の好資料が、國貞の濃艶な口繪と相俟つてこの書に於ける注目すべき點である。又本書は春馬の出世作代表作でもある。本書の續編を松園梅彥が綴り、第八編（安政二年）・第九・十編（文久元年）で結末をつけたが、單に筋をたどつたに過ぎない。何等の生彩もなく愈々低下したのである。（山崎）

たけくらべ　小說【作者】樋口一葉【發表】明治二十八年一月―十二月「文學界」。翌年「文藝俱樂部」に轉載。【刊行】一葉全集・現代日本文學全集等所收。大正七年十一月眞筆版單行（樋口邦子編）。

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄子供までが一體にませてゐる中に、頭の長吉は橫町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさうと、篤實で人望のある龍華寺の信如を味方に賴んだ。一方正太と仲好の大黑屋の美登利は全盛の遊女を姉に持つお俠な少女で、我儘一杯に振舞つてゐた。華やかな祭禮の夕、美登利は正太が一寸歸つた後に遲れていつもの遊び場へやつて來た。其處へ踏み込んだ橫町組は、正太の代りに憎れな三五郎を袋叩きにし、美登利に草履を投げ付け、引上げてゆく。後から正太に慰められるが、思はぬ屈辱に彼女は、何となく冴えない。今度の事も信如の指金ではないかと、元來彼に好意を感じてゐただけ美登利は口惜しかつた。さんざめく周圍にもいつか淋しい秋の訪れる前後から彼女は次第に變つていつた。通りすがる信如の後姿を見送つて立ち盡すやうな事もあつた。風まじりの雨の日、美登利の家の前で信如が下駄の鼻緖を切つて困つてゐる時にも、彼女はいつになく氣おくれして、綺麗な布切れを手渡し得ないで了つた。やがて西の市の賑ひが來たが、美登利はやはり浮き〱しない。正太達とも殆ど遊ばないやうになり、何となく物思はしげに引籠り勝ちだつた。正太も、長吉も、三五郎その他も相變らずだつたが、美登利の姿を失つては、彼等の世界は火の消えたやうになつていつた。或る霜の朝、門の扉に差し入れてあつた水仙を、彼女は懷しく眺めた。それは信如が修業の庭に立ち出でる前の日に當つてゐた。

【批評】主人公美登利を中心に、それ〲の特色ある性格を持つ信如・正太郎・長吉等の對立、物のあはれを知り初める頃の惱み、大門と見返り柳に象徵された特殊の環境、それ等の交響樂的な表現の中に、子供の世界の純美な氣分を釀し出し、其處に實人生の一局を浮き上らせてゐる。殊に美登利の描寫は際立つてゐる。彼女が性的變化の微妙な局所を、心理的に描破してゐる邊、さすが女性の筆である。また雅俗折衷の自在な名文で、吉原情調を美しく活寫してゐるのも鮮かな手際である。尋常な題材であるが、巧みな構想と、暢達な文章と、寫實的な描法と、詩的な情緒と、それ等が有機的に結合されて一分の隙もなく、作者の藝術の最高潮に達した代表作たることを示してゐる。而して露はな主觀を出さず各人物の流轉相を客觀的に眺めてゐるが、美化された詩情の基調はロマンチシズムで、其處に深い人生相の一端を暗示してゐる。【附記】なほ本篇は、岡田八千代の脚色で、大正十四年四月芽生座によつて築地小劇場で上演された。眞山靑果脚色のものは脚光を浴びずに終つた。

【參考】眞筆版「たけくらべ」（樋口邦子編）○雲中語鷗外・露伴（普及版鷗外全集二卷）（鶴見）

竹越三叉（たけごしさんさ）　史論家【本名】與三郎【閱歷】慶應元年十月、越後に生る。慶應義塾の出身。明治二十二年、大阪公論（今の朝日新聞の前身）の論說を擔任し、初めて新聞界の人となつたが、一時、時事新報記者として社說を擔當した。その後民友社に入つて、「國民之友」及び國民新聞記者となる。史論を得意とし、二十四年、「新日本史」を公にして名を知られた。次いで二十六年、「十二文豪」（別項）中の「マコウレー」を著はし、新史家としてその特色を認められたが、眞にその地位を史壇に確保するに至つたのは二十九年五月、新しい意味の、啓蒙的國史として先驅した「二千五百年史」を公にしてからである。三十一

年頃、西園寺公望・陸奧宗光等の援助により、雜誌「世界之日本」を發行し、世界主義を鼓吹した。同誌上、社論を執筆し、殊に人物評に於て一異彩を放つたが、それ等を集めて、「萍聚絮散記」と題して發行した。「世界之日本」は西園寺公の所論、陸奧宗光の隨筆などを收め、文藝趣味に富み、「芝居見たまゝ」といふやうな形式も、この雜誌で始められたものであり、雜誌界に一異彩を放つたが、數年ならず廢刊した。三十三年、文部省勅任參事官に任ぜられ、翌年衆議院議員となつて政界に活躍した。その間、讀賣新聞を主宰したことがある（四十二年）。大正四年大隈内閣時代の衆議院議員總選擧の際、前橋で落選するや、心機一轉して修史の事に從ひ、「日本經濟史」の編著に從事した。それが完成して公刊せられたのは大正九年である。全部八卷菊判五千六百頁の大冊で、經濟史として國史を見た最初の纏まつた大著である。同年、宮内省臨時帝室編修局編修官長となり、大正十二年、貴族院議員に勅選せられた。昭和元年、大阪毎日・東京日日の顧問として入社、時々隨筆の類を執筆し、昭和三年「西園寺公傳」を同紙上に掲げ、數ケ月で完成した。

竹越三叉

【著作】新日本史○マコウレー○日本經濟史○西園寺公傳○南國記○支那論○三叉書簡○人民讀本○惜春雜話○臺灣統治志（英文）○三叉文集等。（日本經濟史は、昭和五年に英文に譯して刊行した）【批評】時事新報時代には、翻譯式の平易な文章も巧みであつたが、後マコウレー等の英國文章家の影響を受けて、高雅で流麗な三叉一流の文體を樹立するに至つた。明治時文界の一人としては有力であり、その清新さが當時の讀者を惹きつけた。併し彼の文體は、全く彼獨自のものであつて、思想として特殊なものがないために、時代に影響するほどのものはなかつた。（高須）

竹崎順子（たけざきじゆんこ）　傳記　【著者】德富健次郎（蘆花）　【刊行】大正十二年四月、福永書店。蘆花全集第十五卷所收【内容】竹崎順子は矢島忠左衞門の三女に生れ、十六歳の時竹崎律次郎に嫁し、結婚後あらゆる辛苦を嘗めて三十八年間貞節を盡し、五十三歳にて夫律次郎に死別した。夫の死後十年間子女の教養に心を碎いたが、六十三歳の時基督教を知つて受洗し、六十四歳で熊本女學會の主任となり、六十六歳で熊本女學校の校長となり、明治三十八年三月七日、八十一歳にて死するまで、同校の校長を勤めとほした女傑である。順子の妹久子は、德富一敬の妻で、著者の母である。久子の妹つせ子は、横井小楠の妻、つせ子の妹は、日本婦人矯風會を創設した矢島楫子である。【解說】著者が同志社在學時代、失戀の結果、死を欲して鹿兒島に走つた時、これを慰撫してその心に平和を與へたのがこの書の主人公竹崎順子であつた。故に著者は、「生みの母と共に、竹崎順子、横井つせ子を合せて、我に三人の母上あり」と云つてゐる。明治三十八年三月、順子の病むを聞き、著者は熊本に往いて最後の對面をした。その時順子より傳記の編成を依頼された。併し著者はこの餘りに淸く且つ堅實なる老教育家の傳記を書くに、自己の不適當である事を思うて容易に筆を執らなかつた。然るに順子の歿後十五年にして、著者は自己を以て基督の再現であるといふ自信を得、世界一周の旅より歸來して後、順子の墓を訪ね、その苦心經營せる女學校にて講演し、こゝに初めてその傳記に筆を染めたのである。著者は自ら「詩と豫言と審判と大觀と渾然として融け合ふ不思議な生命の書、現前にして永劫、日本の書にして正に世界の書なり」と公言せる「日本から日本へ」を書いた後、再臨の基督が第一の事業として、死者竹崎順子とその父母兄妹一族を、墓中より再生せしめたのがこの著である。著者はこの書を發行するや、順子の校長たりし女學校に對して二千部を寄附した。この書は單なる一女史の傳記でなく、明治維新の裏面史であり、日本に於ける基督教東漸史であり、肥後文明の側面史である。本書の發行さるゝや雜誌「開拓者」は、「德富健次郎氏の他の一切の著述がこの世の中から全く無くなつても、この一冊さへ殘ればそれで遺憾はあるまい」と評した。著者が人物史傳の著書中、最も優れた著である。（沖野）

竹崎季長繪詞（たけざきすゑながゑことば）　「蒙古襲來繪詞」を見よ。

竹柴其水（たけしばきすゐ）　脚本作者【姓名】岡田氏、幼名鐃之助。一時竹柴新藏ともいふ。【生歿】弘化四年十月、京橋區本材木町六丁目に生れ、大正十二年二月七日歿。享年七十七。【墓所】東京府下大崎町高德院【閲歷】材木問屋の長男で、幼少から芝居を好み、先代守田勘彌を頼つて寄食し、守田座に出勤し、三代櫻田治助の門弟格として狂言作者の課程を踏み始め、熨斗進三と稱してゐたが、明治六年四月から默阿彌の弟子となつて竹柴進三と呼んだ。同十七年、新富座に於て立作者に進み、同二十年、師の俳號其水を襲いだ。同二十七年、明治座成るに及んで、同座の立作者として、先代市川左團次のために續々新作を發表し、傍ら師默阿彌歿後に於けるその遺族並びに著作脚本の保護に任じてゐたが、明治四十年頃劇場を引退し、爾後は時々新作を發表してゐた。【人物・著作】人物は極めて篤實寡默な性質であつた。その點は師默阿彌の一面を反映してゐたと傳へられてゐる。著作の脚本は九代市川團十郎を對象としたものもあるが、五代尾上菊五郎、先代市川左團次等を中心として執筆上演されたものが多く、全著作の數は、時代・世話・淨瑠璃等にわたつて約七十種に上つてゐる。左にその主なるものと初演年月とを摘記する。

千石船帆影白濱（仙石騷動）明治二十一年六月新富座
那智瀧誓文覺（文覺勸進帳）同二十二年三月中村座
神明惠和合取組（め組の喧嘩）（別項）同二十三年三月新富座
皐月晴上野朝風（上野戰爭）（別項）同年五月同座
一刀流成田掛額（松田の仇討）同二十五年十一月市村座
遠山櫻天保日記（遠山左衞門）同二十六年十一月明治座
名高秋田義民傳（義民傳之助）同三十一年六月同座
三人片輪（所作事）同三十一年十月同座
山田長政譽軍配　同三十二年一月同座
夢物語盧生容畫（高野長英）同年九月同座
櫓太鼓出世取組（谷風の名譽）同三十三年一月同座
水澤瀉騷擾唐犬（唐犬權兵衞）同三十四年十月同座
日本晴露領雪解（近藤重藏）同三十五年六月同座
墨塗女（所作淨瑠璃）同四十年六月同座
享和春南國紀聞（お妻八郎兵衞）同四十三年一月同座
百組出世鳶（鳶の者出世鑑）大正四年三月市村座

元祿陣羽織（義士傳）同年十月明治座
鱗形鎌倉權五郎　同年十一月新富座

右の中「文覺」は九代團十郎の演じた活歷劇の一であり、「め組」「上野戰爭」等は五代菊五郎を中心としたもの、「松田の仇討」「遠山櫻」等は先代左團次の當り狂言であつた。【作風・史的地位】作風は初期に於ては師默阿彌の作風を完全に追つたものであつたが、明治三十年前後からは、文學者達の醸す機運に導かれてか、半ば活歷がかつた新作を可なり發表したが、世に迎へられるといふところまでには至らなかつた。從つて餘り明治演劇史上に特筆すべき價値を持つてゐない。狂言作者としても三代河竹新七（別項）と共に、その殿待役を勤めてゐるのであるが、其水の歩んだ道は、半活歷式であつたところに特色があつたと言へる。過渡期の作物として見れば、或る研究の對象にもなり得るが、獨立して見る時には歌舞伎劇の上からも、新派劇の上からも、取出して論議すべき價値をあまり持つてゐない。

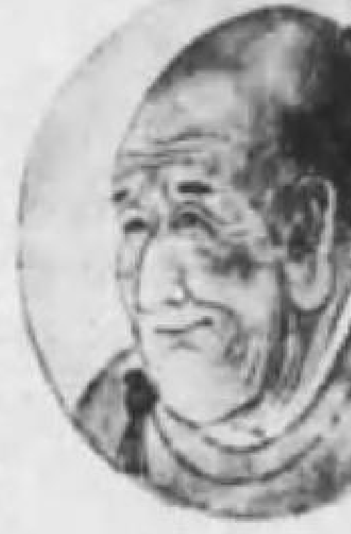
【參考】續々歌舞伎年代記（田村成義）○明治劇壇五十年史（關根默庵）○河竹默阿彌（河竹繁俊）○日本戲曲全集第三十二編　（河竹）

武島羽衣（たけしまはごろも）　詩人・歌人　【本名】又次郎【閲歷】明治五年東京に生る。同二十九年東京帝國大學文科大學國文學科卒業。東京音樂學校教授・東京女子高等師範學校教授・御歌所寄人等に歷任した。所謂赤門系の擬古派詩人である。【著作】花紅葉（桂月・雨江と合著）（別項）○霓裳微吟（明治三十六年）○文學概論○修辭學○新撰詠歌法○霓裳歌話等。【批評】擬古派詩人としては優雅は雨江に劣り、勁拔は桂月に劣つたが、「詩神」「ぬれ燕」「魂まつり」「小夜砧」等の佳篇あり、「小夜砧」は獨逸の詩人ビュルゲルのレノオレの換骨奪胎で、批評家高山樗牛はこれを賞してスコットの英譯詩以上の出來榮えと云つた。が、感情も微温的で措辭の特に巧みなるものもなく、ただ佳麗の詩情に於て成功したといふにとどまり、樗牛の稱讚は過褒であつた。後、短歌に轉じたが、その方面にも著しき創意はない。併し新詩壇開拓者としての功績は認めらるべきであらう。

【參考】明治文學史（岩城準太郎）○明治大正詩史卷上（日夏耿之介）　（日夏）

竹塚東子（たけつかとうし）　落語家・戲作者【號】風水坊と號し、別號を柔演齋又は東榮といふ。【生歿】生歿は明かでない。文化十四五年頃歿す。【閲歷】千住在の竹塚の農夫であつたが、戲作の才があり、天明頃俳諧を法橋越谷吾山に學び、戲作は山東京傳の門人となつたらしい。狂歌にも巧であつた。落語家としても一家を成した。鶴遊亭東里はその門人である。その後、鶴遊亭・鶴屋亭を名乘る落語家も二三出るに至つた。【著作】噺のいろは　三卷（文化九年刊。同六年刊の「春陽著名狂言」の書と外題を改めて再刊したものである）。（小島）

竹田出雲（たけだいづも）　淨瑠璃作者【諱】淸定【別號】千前軒、俳號は千々【法號】文明院寒松立願居士【歿年】寶曆六年（二四一六）十一月四日。享年六十六【墓所】大阪生玉寺町靑蓮寺【家系】元來大阪道頓堀に機巧の竹田芝居（別項）を創めた竹田近江の家から分離した名であるが、初代近江は萬治元年に出雲掾を受領したので、近江大掾を再び受領したのは翌二年である。併し爾來、竹田芝居の名代は近江を以て代々相續いだが、一族の中には別に出雲を襲いでゐたものもあつたので、竹田家としては何代目かの出雲が、竹本座の座本をつぎ（竹本座參照）、初代出雲と名乘つたのである。作者出雲はその伜で、竹本座として二代目に當る。伜は小出雲とて、共に作道に從つたが、寶曆三年七月歿した。【閲歷】父出雲が筑後を助けて座本の位置に坐り、竹本座の復活を計つた關係や、累代竹田芝居の機巧の脚色に經驗を持つた事實がある上に、作者近松門左衞門が作道にかけては青年時代から親切に薫陶を垂れた。かくして座本兼作者たるべき修養時代を經たので、やがて享保の初め頃、父から出雲の名を讓られたらしい。近松から教を仰いだのは、二十歳臺の正德の頃からである。その後十年、享保九年七月、「諸葛孔明鼎軍談」の發表に於て、初めて獨自の作名を現はした。近松はこの年歿したが、爾來死に至るまで座本たる傍、作者として特殊な技量を發揮し、竹本座を再興したのである。彼の門弟は中々多い。爲永太郎兵衞・二歩堂・竹田正藏・竹田瀧彥・竹田因幡・竹田和泉・竹田伊豆・竹田平七・竹土丸等が傳へられてゐる。【作品・作風】彼の署名ある正本によると、三十餘年間に三十餘篇を綴つた。但し寶曆初年の頃、竹田外記と署名されたもの四篇を出雲作と認める說もあつて、これを加へれば約四十篇程になる。そのうち單獨作は、享保年中に十篇ほどが算へられ、他は合作物である。主な合作者は、長谷川千四・文耕堂・三好松洛・並木千柳・吉田冠子等である。彼の單獨作は、比較的早い年代になされたが、「大内裏大友眞鳥」「三莊太夫五人孃」「蘆屋道滿大内鑑」（各別項）の如きは、改作種ではあるが、彼の脚色の特徴たる舞臺を活かした效果が十分判斷せられる。延享から寬延に亙つて、千柳・松洛との合作の下に、一代の名作が相續いて現はれた。延享三年の「菅原傳授手習鑑」、同四年の「義經千本櫻」、寬延元年の「假名手本忠臣藏」「双蝶々曲輪日記」（各別項）等がこれである。但し、「双蝶々」は操では不成功で、歌舞伎に輸入されて好評を得た。この頃、彼の作劇は最も油が乘つた時代であつて、取材の排置、一曲の整理、舞臺裝置の活用に於て、筑後時代の缺を補ひ、全く前代未聞の完成を示したと言ひ得る。また戲曲の構想法を利用して近松の作意以上に、義の精神を具體的に強調して了せた。今日の歌舞伎に彼の名篇が殆ど原形に近く、まで傳存する所以のものは、右の如き内容と樣式との、巧みなる戲曲的統整にあつたかと思はれる。彼の生涯の作中、世話物は極めて尠い。徹していへば、時代物作者とすべきであらう。


竹田出雲
（木谷蓬吟氏藏）

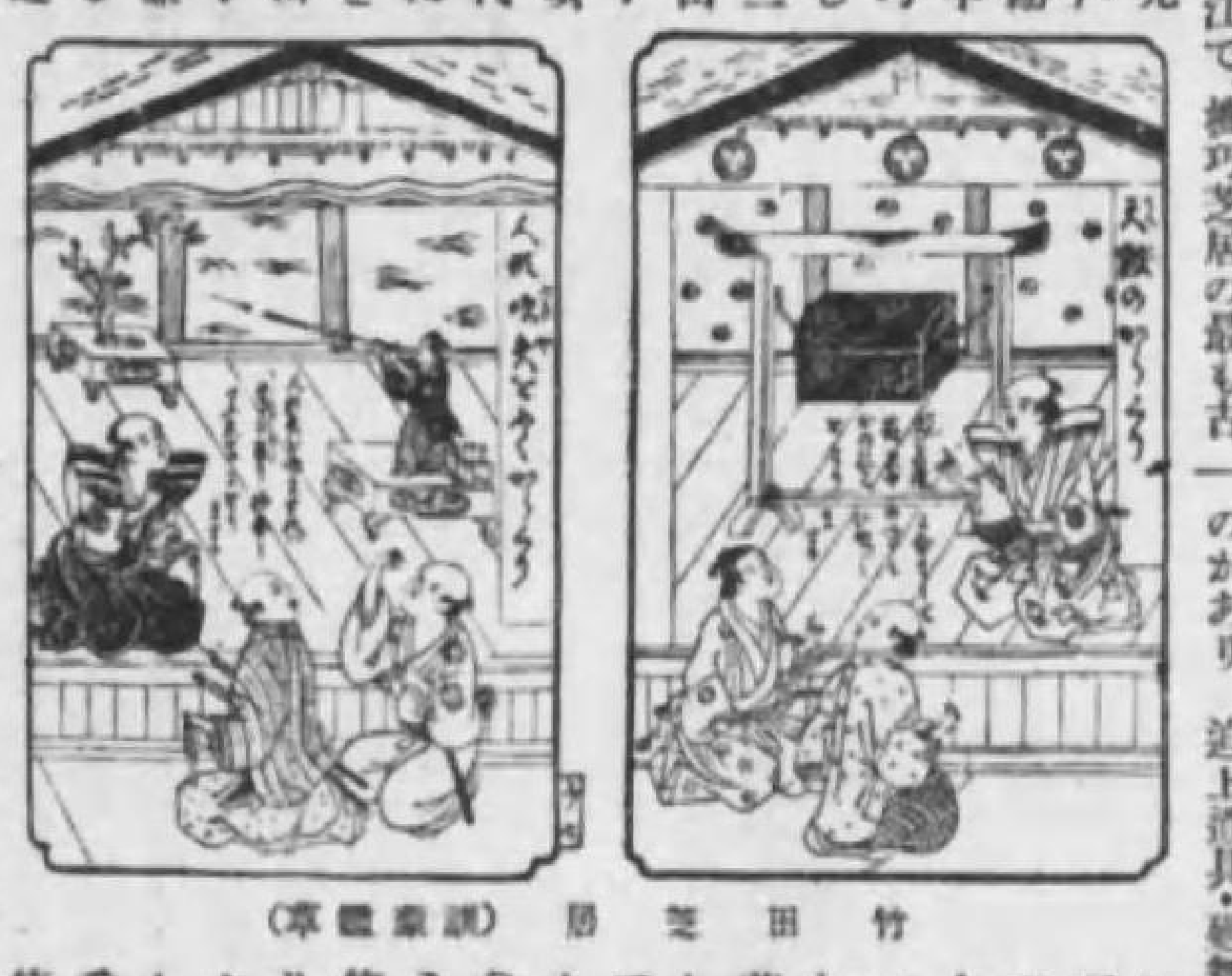
【參考】竹田出雲掾の傳（西澤一鳳（傳奇作書初篇））○歌舞伎事始（爲永一蝶）○竹田出雲と其作品（黑木勘藏（近世演劇考說））○竹田出雲および竹田近江（前島春三（近代國文學の研究））○海音出雲半二（守隨憲治（岩波講座日本文學））○竹田出雲淨瑠璃集解說（帝國文庫）　（守隨）

武田仰天子（たけだぎやうてんし）　小說家【本名】穎【生歿】安政元年七月生、歿年未詳【閲歷】大阪堂島中二丁目に生れ、漢籍を高木越橋に、

漢詩文を近藤南州に、南畫を水原梅屋に學び、又堺の縣立河泉學校に學んだ。明治二十二年「都の花」に「三都の花」を發表して以來、渡邊霞亭（碧瑠璃園）と共に關西文壇の重鎭となり、大阪朝日新聞に小說を連載し、傍ら二十四年から二十五年にかけて大阪の雜誌「なにはがた」に「寒念佛」その他數篇の小說を寄せた。三十年頃、東京朝日新聞に關係し、「諏訪の都」「川越合戰」「弓矢八幡」等、主として興味中心の歷史小說を連載し好評を得た。健筆にして多作なことは渡邊霞亭に讓らなかつた。その代表作には「明智光秀」「天晴才二」等がある。（高須）

竹田交來（たけだかうらい）　戲作者【本名】武田勝次（治）郎【別號】山閑人・松阿彌【歿年】明治十五年歿。享年五十六。【閲歷】東京の人。深川に住して筆耕を業とし、明治十二三年頃合卷草双紙及び芝居筋書様の三冊合卷物を多く出してゐる。【著作】明治十三年六月—十一月刊「霜夜鐘十時辻筮」五編十五冊は默阿彌の原作を合卷草双紙に抜萃改作したものであるが、原作が有名であつたのと、一つは大蘇芳年の挿畫に表紙畫などが本書をより以上に價値づけたものらしく、當時好評を博した。同じく同年作で、相州眞土村の農民暴動事件を扱つた「冠松眞土夜暴動」二編六冊も、當時の時事問題を扱つた點で有名である。これ又芳年の挿畫・口繪・表紙繪などが特に光つてゐる。その他十四年作「俠洋妾横濱美談」三冊讀切合卷物がある。これも當時東京繪入新聞に連載された横濱居留地商館英人コレンスとその洋妾二人との三角關係を綴つた一種の勸懲小說であるが、ただ描かれた場所が新開港地であり、外人をモデルとした點が、好奇的興味を惹き、文化史的に見て多少の意義があらう。合卷草双紙は以上の三種に過ぎないが、他は十一年から十五年頃までに、芝居草双紙三冊物約十二三篇を出してゐる。【參考】寫實主義以前の小說 石川巖（日本文學講座）○新舊時代（三ノ五）○明治文化全集（時事小說篇）（石川（巖））

竹田治藏（たけだぢざう）　脚本作者【姓名】本名は未詳。次藏とも書く。通稱、讃岐屋治藏。【閲歷】正確な家系に就いては、所傳がない。人形遣吉田字藏を弟に持つてゐたといふ說がある。初め竹田出雲の門に淨瑠璃の作を學んだが、當時漸く操芝居の衰へ、歌舞伎芝居の繁榮に乘じて淨瑠璃作者の歌舞伎へ轉向する者が續出したが、彼もこの趨勢に乘じたと見えて、やがて並木正三に就いて歌舞伎脚本の作に志した。但し正三との交渉は完全な師弟關係ではないらしい。併し彼の苦心は現はれて寶暦初期には既に名作者と謳はれた。主として大阪中の芝居にゐた。ただ作者生涯は短かつたらしく、寶暦年代を最盛期とした。【作品】「淸水淸玄六道巡」（寶暦十二年七月、大阪中の芝居、淸水淸玄の書替）と「秋葉權現廻船話」（寶暦十二年十二月同座、二の替り狂言。日本左衞門）とが、彼一代に最も名を揚げた名作である。又何れも中村歌右衞門の出世藝となつた。「淸玄」は、近松半二によつて更に作り替へられ、「秋葉權現」は、その儘の筋が書き替へられて後世に傳はつた。その他「銀閣寺新始」（寶暦九年同座）や、「假名草紙國性爺實錄」（寶暦十年、同座）等も右に次ぐ彼の傑作と言はれた。彼は、舞臺技巧には極めて優れた觀察があつた爲めに、歌右衞門の如き實惡方の役を益生かすべき作家としては、最も勝れてゐた。並木正三の作と較べては、自然味が遙かに濃く流れてゐる。彼は作法の態度として、第一氣轉、第二大膽、第三上掛、第四記憶、第五堪忍の五條を擧げられたと傳へられてゐる。（守隨）【參考】戲財錄 並木五瓶○傳奇作書初編下、續編上・中 西澤一鳳○當世芝居氣質 宇井無愁


竹田芝居（讀叢畫亭）

竹田芝居（たけだしばゐ）　演劇【名稱】竹田近江の芝居の意である。代々座本は竹田近江を名乘つた。【沿革】大阪道頓堀立慶町太左衞門橋南詰東入ル濱側に在つた。寛文二年の創設、座本は初代竹田近江で、繰巧芝居の最も古い座であつた。寛保元年には三代近江が江戸へ下り、堺町の中村勘三郎座の向ひで、同年三月から九月まで繰巧並に子供芝居を興行した（我衣）。なほ、この三代近江と共に、竹田出雲（千前軒）も江戸へ下つたのである。この頃が竹田芝居の全盛時代であつた。寶暦年間には三代近江は道頓堀を資本的に席捲して竹田芝居を初めとし、出羽・中・竹本の四座本を兼攝するに至つた。然るに寶暦十一年十二月近江は忘年會に贄を遣した廉で入牢した。これは當時に於ける綱紀肅正による收賄與力同心の檢擧に連坐したもので、近江は彼等の賄金を四座經營に利用してゐたのであつた。かくて資金の道は杜絶し、一方、寶暦十三年出羽芝居から出火し、竹田芝居も類燒の厄に遭ひ、一時竹本座で、操・繰巧の合併興行をなし、後、座本の居宅地へ移轉、辛くも再興したが、繰巧座としては衰滅の運命を辿つた。これは一面に於て繰巧そのものの持つ弱點からでもあつた。卽ち繰巧は珍奇を眼目とするものであるから、觀衆の眼が高くなると共に、繰巧のみでは見物を引附けなくなつた。然るに一方には歌舞伎の異常な興隆を見、殊に作者に鬼才並木正三が出て、舞臺の改良、眼を驚かすものがあり、追上道具・廻舞臺・宙乘などの案出に對しては、到底繰巧の子供騙しの舞臺では拮抗すべくもなく、且つ名優の輩出によつて全く壓倒された。そこで、竹田芝居は觀覽料を廉くし、子供芝居を演じて餘命を保つた。卽ち狂言の建て方は、（一）踊り、（二）前からくり、（三）狂言—笑劇、（四）大からくり、（五）同上、といふ如き組方を常法としてゐた。尤もこの番組は後世の事で、第一期は繰巧專門、第二期は踊り・子供芝居・からくりの三段組とし、後にはこの五段の番組を編成してゐたが、これとても操淨瑠璃と共に、益々衰へて行くばかりであつたが、明和五年三月、遂に退轉の餘儀なきに至つた。近江の退轉後は、大塚

に壓せられて、化政度には歌舞伎の中芝居となり、天保十三年には市內劇場五座と限られた內で、漸く「竹田近江」の名代のみを殘した。【座本】〔初代〕諱は淸房、阿波國美馬郡半田町に生る。江戸在住時代に子供の砂遊びを見て砂時計を工夫し、又京都にて繰巧人形を製造し、雲上に調進して、萬治元年十二月、竹田出雲掾藤原淸房と受領した。翌二年近江大掾に改めた。この時、或はその後、近江系と出雲系の二軒の竹田家系が成立した。そして初代近江の名で寛文二年に道頓堀に竹田芝居を願ひ出で、免されて興行した。この初代の歿したのは寶永元年七月三日、享年八十一。この間、受領の萬治元年から四十七年に及んでゐる。〔二代〕諱は淸孝、正德二年に受領し、享保十四年九月十九日歿した（二代と初代との歿年が、從來混淆されてゐた）。初代との血緣關係は未詳。〔三代〕諱は淸英、元文五年十二月二十四日受領し、寛保二年九月二日に歿した。近江系の人で出雲系には關係がない。〔四代〕諱は淸一、明和四年二月十六日に受領した。近江の受領はこの四代までである。五代以降は竹田縫殿之助を名乘つた。そして五代・六代・七代は四代目淸一から父子直系相續で、八代目だけは四代淸一から分派した出雲系の孫が相續してゐる。（石割）

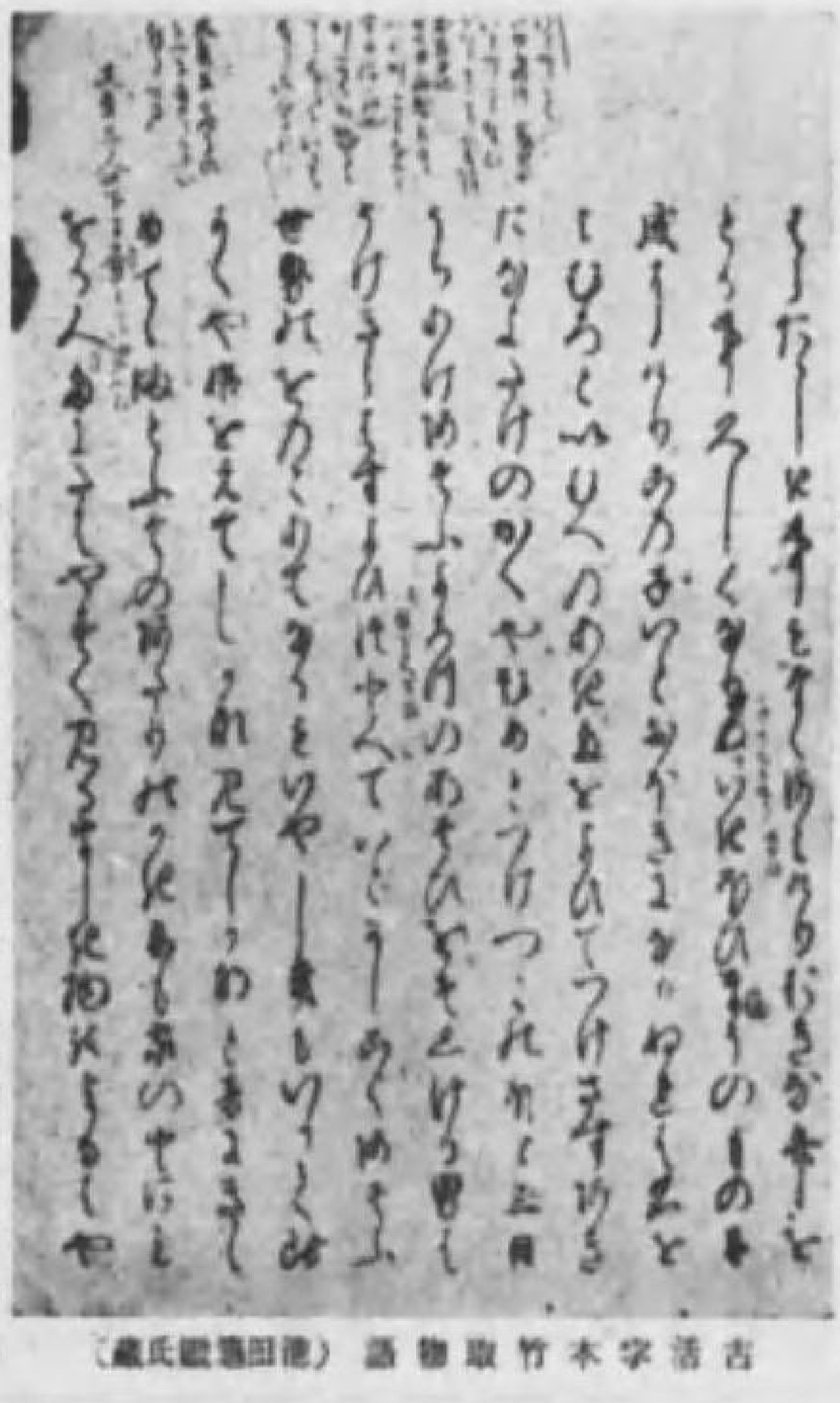
竹友藻風（たけともさうふう）　詩人【本名】虎雄（竹友虎雄）【閲歷】明治二十五年七月大阪市に生る。京都同志社を經て、京都帝國大學英文選科に學び、上田敏の教を受く。後渡米、スタンフォード大學に入り英文學を專攻、歐洲を廻りて歸朝す。詩は一時三木露風の指導をうけたことがある。又「明星」「スバル」等にその作を發表した。現在東京文理科大學教授。【作品・作風】處女詩集「祈禱」（大正二年）は、上田敏の序を附して出版。典雅な調句に充ちた詩集で、その趣味には著しく古典的な整然さがある。第二詩集は「浮彫」（大正四年）、第三詩集は「時の流に」（同九年）で、彼の渡米以後の作と、前集「祈禱」「浮彫」を收めたもの。上田敏・與謝野晶子の序及び序歌、與謝野寛の跋を添へてある。ダンテについての研究及びヱルレーヌの詩の飜譯その他「文學論」の著がある。彼の詩の全集として「竹友藻風詩集」がある。智性の豐かな冷たいが典雅な抒情詩が見られる。（川路）

竹取翁物語解（たけとりのおきなものがたりかい）　註釋書　五卷首卷一卷【著者】田中大秀【成立】小山儀の「竹取物語抄」（寫本）に、自らの考說を加へて置いたものを基として、文化九年秋、一わたりの註釋を終り、翌年春、本居大平に見せ、同年秋よりなほよく考正して、十一月完成した由を首卷に自記してゐる。この年版下を書き始めたらしく、文政十一年三月淨書の功を畢つた。同年十一月附の本居大平の序がある。なほ五卷の終りに、天保元年春鈴木朖の自筆にかゝる漢文の跋がある。【刊行】天保二年。明治二十八年、新に坪內雄藏の序を加へ、名古屋の書肆矢野平兵衞が再刊した。【內容】この書は、首卷に於て「竹取物語」を讀む心得、書名・時代・作者・出據・凡例などに就いて論證し、一卷より五卷までの間に、詳細なる註解が試みられてゐる。讀む心得に就いては師宣長の「玉の小櫛」の說を祖述し、物のあはれを知るべきたよりとして、この物語をよむべきであると說き、書名に就いては「たかとり」とよむべしといふ「抄」の入江昌喜の說を紹述し、「たけとり」と通はして用ひるも害しからずと云ひ、著作時代に就いては、宣長が延喜以後のものとなせる（玉の小櫛）に對し、「源氏物語」中の記事を引いて、延喜以前のものとし、昌喜が「松浦宮物語」の奧書によつて、自觀の比より古きものとせるに對し、右の奧書が疑はしいと云つてゐる。作者に就いては、源順とする說の非なることに就いて、「河海抄」「花鳥餘情」「弄花抄」の記事により考證した昌喜の說を引用してゐる。出據に就いては、この物語は唐土天竺の故事傳說に基けりとしたのに對し、宣長の排外思想の影響を受けたる大平が、他國の書に材料を取りたるにあらで、我が國の舊記に見えたる事實によりて書けるものなりと云へる說を紹介してゐる。次に凡例に於て、古典の本文に誤脫ある所以は、卷子本又は列帖、或は胡蝶裝等製本の形式にあること、この物語にも異本多ければ、校合の際、同種のもの多き方に從ひ、又たとひ同種のもの多くとも、どうかと思はるゝものは從はず、又何れも通じて誤脫なりと思はれるものは、私意によつて改めたること、私意によつて加除改變を企てたる場合には、委細にその由を斷りおきたること、但し、てにはの誤りを正したる場合は一々斷らずとて、校定上の用意について述べ、次に諸本について、「小山氏が抄、普く世に行はるゝ板本を始として、佐野春樹といふ人の寛政十二年に校合たる本、是は寫本にて橋本稻彥より御園常言といふ人の寫傳たる本なり。其は古き寫本を本行として、安永二年武村益伎が古寫本、林崎主が古寫本、上田百樹が平信之と校合たる本、又活板本など悉く書入たる本なり。又健多が越中高岡にて得たりとて貴たりけるは、甚古き板本にてよきこと多かり。又羣書類從の本、又文政四年の春難波にて得たる一寫本などを參考按定して取て本文となしつ」と云つてゐる。この中、高岡にて得たりといふ古板本の正體は、今なほ不明である。次にこれ等の諸本に、內題あるもあり、無きもあり、抄本・古板本になく、寫本に「竹とりの翁の物語」とあり、今はこれを取つて外題とせし由を斷り、この書に引用せる諸本の性質及び略號に就いての注意を述べ、「竹取物語」の特殊なる語法、訓み方に就いて、古色あることを說き、本書の結構に就いて、全文を九段に分け、五卷に配當した次第を述べてゐる。次に竹取翁物語附錄とて、この物語に關係あるらしき故事にして、考證を要すべき長文のものを集めてある。次に、「今昔物語に載たる此物語幷諸書の異說」として、「今昔物語」及び「詞林採葉抄」の本文をあげ、古書を引いて考證し、最後に、「不死藥」の條に、「本草和名」卷十六を引いて說明してゐる。次に本文は、先づ「竹取物語」の全文を九文段に分ち、その後に二字づつ下げて解釋を試みてゐる。解釋中には諸本との考異を示し、語句の解釋は精細をきはめてゐる。廣く古書中に引例を求め、師說を紹述し、同門の朋輩の說、門弟の說等、苟くも參考すべきものはすてず、ことごとく集成網羅した。眞淵・宣長・道麻呂・駿・士淸等の說は多くこれを擧げ、自說を附してゐる。【價値】「竹取物語」研究として、最も詳密なるものである。廣く和漢の古書を參考引用し、物語の典據を考證し、作者・時代を考へ、諸本を比較し、語句の解釋を精密にして、諸說を集成統一した。主觀的なる獨斷をさけ、諸說を折衷調和する點に努力してをり、奇說のない代りに、甚だ正確である。併し網羅主義である所から、近世諸家

の通弊たる冗漫・繁雜に陷れる點はまぬかれない。併し概して穩健精密で、この物語研究者の必ず一讀すべきものである。（池田）

竹取物語（たけとりものがたり）　物語　二卷　【作者】不詳。傳說には源順の作となつてゐるが、「源氏物語」繪合の卷に「竹取物語の繪はこせのあふみ、手は紀貫之かけり」とある記事について年代を考證した結果、この說の當を得ざる事が、已に古人によつて明かにせられてゐる。【名稱】詳しくは「たけとりのものがたり」又は「たけとりのおきなのものがたり」。別に「かぐやひめのものがたり」。【成立】（一）本居宣長は延喜以前となし（玉の小櫛）、（二）田中大秀は延喜以後となし（竹取物語解）、（三）藤岡作太郎は、貞觀より延喜まで三四十年の間となし（國文學全史平安朝篇）、（四）入江昌喜は、貞觀以前となし（竹取物語抄）、（五）井上賴文は弘仁二年から同十四年までの間となしてゐる（竹取物語虛實辨）。今はその何れとも斷定し得る確證がない。【諸本】一般に流布してゐる繪入の刊本は、上・下二卷になつてゐる。この外に寬永頃の活字本、群書類從本、小山儀の「竹取物語抄」等の刊本があり、田中大秀の「竹取物語解」（別項）によれば、以上の諸刊本の外に五種の異本の本文をも知ることが出來る。なほ現存の寫本中注意すべきは、內閣文庫・宮內省圖書寮・彰考館・靜嘉堂文庫・東北帝國大學・前田侯爵家等の藏本であつて、各々相當の異同がある。就中、三手文庫藏の今井似閑本は最も異同が多い。國文大觀・日本文學全書・有朋堂文庫・日本文學大系等所收。

【梗概】今は昔、竹取の翁といふものがあつた。ある日、山に行つて筒の光る竹を見出したので、それを切つて見ると、內に三寸ばかりの美しい人がゐた。手に入れて家に歸り、籠に入れて養ふ中に、三ヶ月ばかりで立派な女になつた。家の中も光りみちるほど美しい子で、なよ竹のかぐや姬といふ名をつけた。その頃から竹取の翁は、節に黃金のある竹を屢々見つけたので、家はたちまち富み榮え、かぐや姬の評判は間もなく國中に擴がつた。若い男たちは、かぐや姬を得んとて熱心に求婚したが、それ等の中で、とりわけ色好みといはれる五人の貴公子があつた。石作皇子・車持皇子・右大臣阿部御主人・大納言大伴御行・中納言石上麿の五人で、姬の結婚條件を履行する誓約を結ぶ事になつた。卽ち石作皇子は天竺にあるといふ佛の御石の鉢、車持皇子は蓬萊島にあるといふ白銀の根と黃金の莖とをもつて白玉の實を結ぶ木、阿部右大臣は、唐土にあるといふ鼠の裘、大伴大納言は龍の首にあるといふ五色の玉、石上中納言は燕の持つといふ子安貝を、結婚の代償として姬に渡すことを約した。五人は、めい〳〵策謀をこらして姬をあざむかうとしたり、眞實探しに出かけてひどい目にあつたりしたが、結局失敗して引下つてしまつた。五人の熱心な求婚者も、つひにかぐや姬を得ることが出來なかつたが、この事はいつとはなく帝の上聞に達した。帝は如何にもして姬を宮中に召さんものと、懇ろなる御使を遣はされ、また御自らも姬の家に行幸されておすゝめになつたが、いづれも失敗であつた。ただ御文だけが通ふ中に、三年の月日はたつた。八月十五日に近い夜、姬は月を眺めてしきりに泣くので、親たちが何事かと聞くと、自分は月の世界のもので、十五日の夜あの世界から迎ひの人が來ると云ふ。やがてこの事が帝の御耳に入り、二千人の武士を竹取が家に遣はし、築地の上に千人、屋根の上に千人、弓矢を帶して守るやうに命ぜられる。竹取の翁は、塗籠の戶口を固めて番をし、嫗は戶の內で姬を抱いて守る。その中に宵がすぎて十五夜の月があか〳〵と上る。まもなく大空から天人が雲に乘つて下りて來て、地上五尺ばかりの所に立ちならぶ。武士たちは物におそはれるやうで、力萎え氣屈し、今は戰ふ心さへ起らない。やがて飛ぶ車の中から、王とおぼしき人があらはれて、「かぐや姬は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許に、しばしおはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、はや返し奉れ」といふ。立てこめた戶も格子も、人なくて、ただあきに開く。かぐや姬は淚にぬれながら、「この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで、侍らで過ぎ別れぬること、かへすがへす本意なくこそおぼえ侍れ。脫ぎ置く衣をかたみと見給へ。月の出でたらん夜は、見おこせ給へ。見すて奉りてまかる空よりも、墜ちぬべき心地す」と書き殘す。天人は、羽衣を入れた箱と、不死の藥を入れた壺とをさし出し、早く藥をのみ、羽衣を着よとすゝめる。かぐや姬は、しばし待てと押しとどめて、眞心をこめた最後の文を認めようとする。この仙女が、人間の世に殘す最後の美しき感情は、彼女が、この世に於て最も愛した帝に向つて捧げられたのである。この間も、天人たちは、しきりに遲い遲いと心もとながる。かぐや姬は、「物知らぬ事な宣ひそ」と、人情を解せぬ天人達を制し、靜かに文をしたゝめ、その奧に、「今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれとおもひいでぬる」と歌をそへ不死の藥の壺と共に頭中將に與へる。かくてかぐや姬は、人間界に於けるあらゆる愛着を忘れ、天の車に乘り、地上から天上へと歸つて行く。帝は後に頭中將を召して、ありし事の由をこまごまと聞召し、御文を御覽じていたくあはれがらせ給ひ、「あふことも淚にうかぶわが身にはしなぬくすりも何にかはせん」といふ歌と、不死の藥の壺とを勅使月岩笠といふ人に託し、天に最も近いといふ駿河の國の山のいただきにて煙にせよと勅命がある。それから、この山をふじの山と名づけられ、その煙は今なほ雲の中にたちのぼるといひ傳へられる。


古活字本竹取物語（德田淨氏藏）

【解說】この物語が、如何なる事實・古書・傳說等によつて書かれたかについて、契沖の「河社」、儀の「抄」、大秀の「解」等に詳しい考證が試みてある。殊に「解」には、「竹の中に人を得たる」「物の變化して人になれる」「妻あらそひ」「佛の御石鉢」「龍の珠とりし事」「南海」「男せざりし人」「月のみやこ」「天の羽衣」「天に昇れる」「不死の藥」等について、和漢天竺の故事傳說を詳細に比較考證してゐる。勿論、作者がこの物語の細部まで、一々原典に據つたとは云へないけれど、本居宣長のやうに、梵漢の書の影響を全然否定する態度も公平ではない。現今では、比較說話學上の研究に基く新說が發表せられたが、それ等の中で松村武雄・島津久基等諸氏の說は注目すべきであらう。この物語は、妻爭ひ式說話である。女主人公「かぐや姬」といふ怪奇的な一女性と、幾多の貴公子との戀愛事件を取扱ふことによつて、一面に神仙的女性の淸淨と驕慢とを示し、他の一面に人間世界の無智と術策とを示して、對立し得ざる二つのものの對立の中に「笑ひ」を描いてゐる。この物語は、全體としては求婚失敗の中から生れて來るユーモアを興味の中心とするが、部分的には、神仙的女性に人間的感情を許すことによつて、悲劇的效果をもをさめてゐる。又この物語は、妻爭說話の典型的な形を有してゐるが、所々說明神話的なものや民間信仰的なものも含んでゐる。文學的作品としての「竹取物語」は、國文學史上注意すべき名作の一であつて、假名によつて表現せられた物語文學の最初のものである。この物語は、平安朝の浪漫的精神の先驅となり、幾多の宮廷女流文藝を生み出す動因となつた。「宇津保物語」「源氏物語」を初めとして、平安時代の文學作品は、この物語から浪漫的感化を著しく受けてゐる。又中世近世を通じて、この物語を題材とする文藝が盛んに生れたのを見ても、後代への影響の少くない事が分るのである。

【參考】竹取物語抄 小山儀　○竹取物語解（別項）田中大秀○竹取物語俚言解 佐佐木弘綱　○竹取物語伊佐左米言（寫）狛毛呂成　○竹取物語類標（寫）岸本由豆流　○標註竹取物語讀本 鈴木弘恭　○竹取物語 和田武雄○校註繪入竹取物語 星野忠直○竹取物語折義 島居忱○竹取物語新釋 春山雅母・井上賴文○竹取物語講義 今泉定介○竹取物語講義 井上賴文○竹取物語考 加納諸平○竹取物語異解 五十嵐篤好　（德田）

竹取物語（たけとりものがたり）　合卷　十八編　各四冊合二冊　【作者】山東京山　【畫工】國貞・國輝・房種・芳虎　【刊行】天保九年より安政三年。森治板　【諸本】京山全集（續帝國文庫）に第十六編迄の本文を收む。【題材】「松梅竹取物語」（山東京傳作、文化六年刊）の先蹤を踏んで「竹取物語」（別項）の輪廓に、謠曲「隅田川」「雙生隅田川」（別項）等を盛つたものである。

【梗概】〔初編〕昔、伏見の里、竹取の翁六兵衞は、貴き美女が、光り輝く女の嬰兒を我に授けると夢みる。後、立派な貝桶に入れ、金百兩と和歌とを添へた女の捨子を拾ふ。丁度同時刻に、都、北白河、吉田少將惟貞の北の方は、梅若丸を產む。宮參の節、庶腹の松若丸が大鷲に攫はれ、長臣直名胸之進は切腹する。松若丸は丹波の狩人兼五郎に救はれ、妻のお房に育てられる。胸之進の一子鳩太郎は若君搜索に出で、遂に丹波國で搜し當てる。兼五郎夫婦も元は吉田家の牛飼犢平と、お末の關屋であり、三人して若宮を奉じて歸る。惡人橫島久根利は、關屋がお末であつた時から戀慕してゐ、これを機會に手に入れようとする。〔二編〕兼五郎が歸鄕の暇乞に、佛の鉢助方へ行つた歸り道を、橫島は家來の蟹澤・猿二郎等と殺害する。お房は橫島に欺かれ、敵討の援助にとてその妾になる。お房の弟、勘當されて今は非人の蝉吉は、兼五郎が殺害されたのを目擊したので、樣子を姉に語り、手懸りの小櫛を贈る。六兵衞に拾はれたなよ竹は二八の春を迎へ、その美しさに、石作の皇子・倉持の皇子・阿部のみむらじ・大伴の御行・礒上の師方の五人は命を賭けても契らんとする。石作の皇子には佛の石の鉢、倉持の皇子には蓬萊の白銀・黃金・白玉を根・莖・實とする樹の一枝、みむらじには唐土の火鼠の皮衣、御行には龍の首の五色に光る玉、師方には燕の巢にある子安貝を要求する。みむらじ・御行は、難題に戀心も褪めて立ち去る。他の三人も皆失敗する。なよ竹は梅若丸を見染める。〔三編〕梅若丸は惡漢猿島屋惣太の怒を買ひ、竹取の翁方へ逃れ、なよ竹に口說かれる。吉田少將の弟桃貫がなよ竹を戀慕する。なよ竹と梅若丸との關係を知つた母の班女の前は、二人を結婚させる席上、桃貫が、二人は双生兒であると言ふ。人々は誠と信じ、梅若丸は出家の目的で、班女は發狂して家出する。なよ竹は桃貫が妾にせんとするを、初音婆に助けられて逃げる。〔四編〕富士田左門は父の敵を尋ねて遊女玉の枝に馴染む。お房が見せた敵の小櫛を、お局の初瀨は、殿から橫島が賜はつた品だと言ふ。橫島の腹心猿二郎は、色と酒とで誘はれて兼五郎殺害の事を語る。橫島はお房の心を悟り、僕の角介に殺させようとしたが、角介は橫島を父の仇と狙ふ左門で、お房と共に橫島を討ち、彼の懷中の吉田の系圖都鳥の一卷を持つて立退く。〔五・六編〕少將は病氣、松若丸は白痴を幸に桃貫は我が子桃丸に吉田の家を繼がせんとする。壬生の小猿に少將殺害を命じたが、不死身の大力女の淸川は小猿を捕へる。左門は元通り大內の伶人となる。玉の枝が鱗大盡に身請されると聞き、身請金の足しに入質した都鳥の一卷は惣太に奪はれる。淸川は惣太から都鳥の一卷を買ひ戾す。左門の叔父渡海屋金右衞門、實は鱗大盡で、身請した玉の枝を左門に與へる。少將死去と聞き、松若丸に切腹を迫つた桃貫は却つて自滅する。少將は無事。松若丸は白痴を裝つてゐたのである。〔七・八編〕隅田川の渉りまで來た梅若丸は惣太に騙され、女裝して四ツ原の月花屋へ賣られる。月花屋の主淸兵衞は淸川の兄で、淸川の文によつて双生兒は事實無根と知れる。淸兵衞の娘於仙は梅若丸に戀を拒絕され、死なうとするのを海賊葉實の三吉が救ひ、親の情で梅若丸と契る。三吉の兄は吉田家の忠僕鉢助で、漸く梅若丸に廻り會ひ、今日までの事情を語る。初音婆はなよ竹を伴ひ、鎌倉に下り、難產を取り上げて名人と呼ばれる。〔九・十編〕淸兵衞の知らせで、吉田家から淸川が迎ひに下る。狂つた班女の前は非人共に嬲されようとした處、落雷で非人は死し、班女の前の狂氣はなほる。鉢助は班女の前を搜し當て、梅若丸と絕えて久しき對面を喜ぶ。關白殿から、賴朝公の北の方の御產見舞に下つた丹後の局が、なよ竹は柳瀨大納言行光卿の娘君と語る。〔十一・十二編〕同じ鎌倉から、全く知らずに、丹後局となよ竹は木曾路を、梅若丸・班女の前・於仙は東海道を經て同日に上京する。善心に立ち歸つた惣太は勘當を許される。遊女小安は彼の妻で、猿島屋

の手代義介の妹である。〔十三・十四編〕綾瀬家の老女瀧川の話によれば、なよ竹は侍女腹で、子の無い北の方が嫉妬の餘、殺さうとするのを、具足櫃に入れ、百両と歌とを添へて捨てたとの事である。鉢助の留守中、女房お蓮は仁平次と密通する。劍客山中熊五郎の助太刀で女敵を討つ。山中は吉田家へ抱へられる。瀧川は盜賊火鼠の皮五郎を討ち、女御御秘藏の香盒、玉の枝を取りかへす。〔十五・十六編〕石作の息子等の五人は、梅若丸を戀の仇と怨み、女御の香盒詮議を申付ける。瀧川の差出す香盒を献じて御褒美に預る。なよ竹が大内の丹後の局の部屋にゐる事を梅若丸は知る。熊五郎と故郷で契つた緊飾風田朗庵の娘おせんの亡魂が、於仙に乘り移り、熊五郎方へ駈込む。朗庵は娘おせんを尋ねて上京の途中で、娘が殺害された事を知る。熊五郎を下手人と思つたが、事情を聞いて疑も晴れ、於仙を我娘として熊五郎と結婚させる。〔十七・十八編〕梅若丸となよ竹とは文を通はせる。丹後の局がこれを知り、梅若丸を綾瀬家へ婿入させる事に取決める。綾瀬家では竹取の翁の行方を搜索する。鎌倉で碁會所を營む浪人白野伊四郎の妻は、竹取の翁の只一人の姪である。巡禮姿で尋ねて來た竹取の翁夫婦は、多額の金を惠む。翁はなよ竹姫に對面する。願かなつて梅若丸は婿入をする。

【解說】古典飜案の潮流に棹し、對女性的の態度から、「偐紫田舍源氏」（別項）に對立して、先蹤の「絲櫻竹取物語」に、より多く「竹取物語」の色彩を附ける考へだつたらしい。梅若丸を帝の位置にすゑ、悲劇的の終局をお目出度に結ぶ。その初めは幾何の自信もあり、興味もあり、梅若傳說なども詮議したらしい。併し高齢と十九年の歳月とは、漸次に興味を消磨して、後半は接足し接足し創作してゐるに過ぎぬ。この點は作者も自覺してゐた。各編を悉く十何段に分つたのは、「隅田春妓女容氣」（別項）を更に進めた所で珍しい。「竹取物語」より得た所は、五人の公卿、主人公、僅かな人物名、文章の極一小部分に附燒刄風な模擬のあとを見るのみである。第四編以後は、殆ど「竹取物語」の色彩はなく、第十五編に於て、思ひ出した如くそれに觸れてゐる。梅若丸はやゝ武家風に取扱ひ、なよ竹は市井の小娘に等しく、公卿や息子なども、それらしくない。大力で男まさりの女傑瀧川が光り、「松梅竹取物語」の今井才の延長である。說話に重複・矛盾があり、文章に誤謬があるが、七十歳からの創作であり、合卷の事であるから責むべきでもあるまい。寧ろ古典「竹取物語」の飜案として老作者の努力を認むべきであらう。（小池）

竹取物語抄（たけとりものがたりせう）　註釋書　二卷

【著者】小山儀【名稱】「竹取物語抄」又は「竹取物語補註抄」ともいふ。【成立】上卷のはじめに、「天明癸卯秋八月望藝園獺祭完實于須磨蓬廬之下」とある漢文の序があり、次に「入江まさとし」の假名の序がある。下卷の終りに、著者の母なる人の跋があり、その次に、「天明三年癸卯九月、弟稱仲嗣謹識」とある漢文の跋がある。これ等によつて、この書は、儀の病中に執筆せられ、空しく遺稿となれるを、入江昌喜が取りまとめ、頭註を施し、校正を加へ、やうやく天明三年、儀の死後九年にして功を終へたことが分る。【刊行】天明四年四月【內容】先づ本文を小節に分けてかゝげ、簡單なる註解をその次に加へ、頭にやゝ詳密なる考證を附してある。頭註は昌喜の說である。下卷の終りに、「竹取物語緣起」と題して、竹取の作者、竹取の名義、たかとりとよむ事、竹の中に人ある事等について、契沖の說、「萬葉集」「大和物語」「寶樓閣經」等を引き、「詞林採葉抄」「國名風土記」等に類似の說話のあることをのべ、「寶樓閣經」以外にも似たる事ありとて「采女者要經」を引き、更に「博物志」を引いてゐる。また物語の中にかぐや姬が帝に仕へさせなばきえうせなんと云へることにつき、支那の類似せる故事を引き、最後に淺間大明神とかぐや姬との關係、熱田明神と白鳥、白鳥と楊貴妃との關係を、土俗民譚の方面より說明してゐる。而して昌喜は篇頭に於て、作者が源順にあらざることを「河海抄」及び「花鳥餘情」を引いて考證し、「松浦物語」の奧に、「貞觀三年四月十八日云々」とあるよりして、物語の祖たる「竹取」は、少くとも「松浦物語」成立以前、即ち貞觀の頃より古きものなりと云ひ、タケトリ、タカトリの稱呼について、六百番歌合の記事を引證して、タカトリとよぶ方古體なりと論じ、この物語の名を一名「赫夜姬物語」ともよぶことを、源氏蓬生の卷を引いて述べ、天智天皇近江宮に崩じ給ふにあらずとなす「詞林採葉抄」の誤なることを論じ、舊本「今昔物語」卷二十八の記事を揭げ、その記事と「うつぼ物語」又は「源氏物語」中、「竹取物語」と關係ある個所を比較して、これ等が、今の「竹取物語」の本文と同じきが故に、この本が正本にて、「遊仙記」の發端並に「風土記」の說信用すべからずと論じてゐる。また「風土記」に、「馬ヲ心ニイレテ飼ヘレシユエ、飼ノ國ト云ヒシヲ、カナガキニ甲斐ト書」と云ふ說を「本朝遯史」「古事記」等によつて考證し、飼の國と書ける事なしと、「風土記」の信ずべからざることを論證してゐる。【價値】「竹取物語」の註釋書として最初にあらはれたもので、和漢の書を引證すること、可なり詳細であるが、語句の解釋は少く、註釋書として、さしてすぐれたものではない。ただ篇頭に加へられた昌喜の說には新說があり、考證も亦詳細に亙つてゐる。

【著者小傳】著者字は伯風、半兵衛と稱した。儒者。國學者。浪速の人。實業を業とした。讀書を好み、和漢の奇書を集めて一々讀破した。故事出典等多くこれを記憶し、叩けば響の應ずるが如く、時人目して奇怪としたといふ。幼時より多病。安永三年十二月二十九日歿した。年二十五。墓は、大阪谷町八丁目重願寺にある。本書及び「玉餘魚」「鹽說辨」等の著がある。（濱田）

竹の木戸（たけのきど）　小說【作者】國木田獨歩【發表】明治四十一年一月「中央公論」【刊行】同四十一年八月、「第二獨歩集」收載。獨歩全集後編・國木田獨歩全集第三卷等所收。

【梗概】大庭といふ會社員の家は、或る郊外地であつた。その隣りに植木屋夫婦が住んでゐた。その女房はお源といつて氣丈な女であつた。大庭の家のお德といふ女中とは喋り仲間だつた。二つの家は生籬で隔つてゐたが、植木屋には井戸がないので、大庭の家から貰ひ水をしてゐた。所がその間の生籬を切り開いて木戸をつける事を植木屋から申込んだ。そして竹の木戸をつくる事にした。女中のお德は不服だつたが、それでもお源とはよく喋り合つてゐた。そのうち冬になつて炭が入用な時期が來た。植木屋は仕事が思ふやうに行かず、それに怠け勝ちで、炭も十分に買へなかつた。大庭の家の軒下の佐倉炭が、お源の氣をひく事は度々だつた。時々はこつそり持ち歸りもしてゐた。お德はそれに氣がついて、最初から竹の木戸に不服だつた事の理由を見出した。つひに炭は女中部屋へ藏される事となつた。お源は亭主へ泣き立てると、亭主は何處からか一俵の炭を貰つて來たといつて持ち込んで來た。お源はほつとした。けれど翌朝、竹の木戸から井戸端へ行つて見ると、隣の家の軒下の佐倉炭は、家の中へ取り入れられてゐた。彼女はひどく氣を打たれた。それに炭屋の小僧は、昨夜炭が一俵盜まれたといふ話をするので、お源は家へかけ込んで、亭主の持ち込んだものを開けて見ると、佐倉炭であつた。——彼女はぼーつとなつて、その炭俵を踏臺にして土間の梁へ細帶で頸をくゝつてしまつた。二日後に、竹の木戸はもとの生籬に直されてしまつた。

【批評】家の內の描寫、人物の性格の書き分けなど簡潔で明確で、たしかに傑作の一つである。二つの家の對照がまた生活相をはつきり浮ばせてゐる。生活苦といふ問題が、現實味をもつて考へさせる點まで到達してゐる。植木屋の女房の死はあまり突然で、不自然であるといふ批評が當時多かつたが、それは獨歩の從來の作を通じて、常に死が突如として來る表現の常法である。作者の晚年の作の一つである。（吉江）

竹子集（たけのこしふ）　加賀節段物集　大形本一冊【刊行】延寶六年、二條通寺町西へ入北側山本九兵衞開版（久原文庫藏）【解說】最初に淨瑠璃を語る心得方法を說き、「淨るりに師匠なし、只謠を親と心得べし」「祝言・幽玄・戀慕・哀傷・此四音工夫の第一なり」「物語音曲は身がまへ第一なり」「ふし所を四轉と云事、一には調子、二には拍子、三にふし、四には時の轉、四音の位をかんがへかたるをもつて四轉といふ」「口舌心の音曲といふ事、口したよく叶ひ心のきゝたるをいふなり、此三つひとつもかけては有べからず」「物別音曲は聲にちからを忘れ、こゝろに力をもつべしとあり、尤なり、歌に音曲はただ大竹のごとくにてすぐに清くてふしすくなかれ」など親切に敎へ、次に地・地色・詞・ふし・しやうについての心得方を說き、それより各種の段物に精細な節付を施して揭げてある。本書の題名に就いては洛東野夫造化軒といふ人の跋文に次のやうにある。

「こまかなるふしぐ〜はロづからうたへてなに、たやすくうたひと・のひがたし、只淨るりのねずしをみせめとて、此竹のことぐさを催し、手づからみづからふしをさへくはへて、先覺のいまだ發せざるを竹子集につゞりてきづけ給ふ、やつがれ是を綸とし糸とし……たらちねのおやなるうたひよりはじめて、何の音曲にかかゝる事やは侍る、されはゝ子のおやまさりといふ世話にたよりて名付たるにも、又あまたのふしのこもれる心にも物まぎらはしふあめれど、うたひを親とせるなん淨るりの命なれは、おやまさりのたはふれやなをちかくは侍らん」（藤井）

竹の里歌（たけのさとうた）　歌集【著者】正岡子規（竹の里人）【解說】生前、明治十五年頃からの自作の長短歌を盡く記入し、「竹の里歌」と題簽してあつたのを、歿後、門人伊藤左千夫・香取秀眞・岡麓・長塚節・蕨眞・安江秋水・森田義郎等が選し、長歌十五首・旋頭歌十二首・短歌五百四十四首を以て、子規遺稿第一編として、明治三十七年十一月、東京俳書堂から出版になつた。然るに、不幸にして子規自筆の「竹の里歌」は水害のために失くなつたので、古泉千樫・齋藤茂吉の二人が、その全歌集編輯を志し、齋藤茂吉編「正岡子規選集」（大正十年、アルス）、齋藤茂吉・古泉千樫共編「竹の里歌全集」（十二年、アルス）がやうやく世に出でた。これは俳書堂版の「竹の里歌」を增補したもので、公にされた子規の歌を大體輯め盡した觀もあつた。即ち明治三十年以降、短歌千三百四十一首・長歌十六首・旋頭歌十二首である。ついで、「子規全集」（アルス）の發刊となり、その第六卷中（大正十五年四月）に、明治十五年からの作を輯めた。これは「竹の里歌全集」よりも、もつと增補したものである。ついで、子規全集刊行會編輯で、「定本子規歌集」（昭和三年、アルス）が出た。この「定本」が今のところ一番多くの歌をあつめてゐる。その他、選抄本としては、岩波文庫本「子規歌集」（同年、岩波書店）・現代短歌全集本「正岡子規集」（五年、改造社）等がある。（子規・根岸短歌會參照）（齋藤(茂)）

竹の里人（たけのさとびと）　「子規」を見よ。

竹杖爲輕（たけのつゑかろしとなす）　「森羅萬象」を見よ。

竹雪（たけのゆき）　「親子物の謠曲」を見よ。

武林無想庵（たけばやしむさうあん）　小說家・飜譯家【本名】初め盛暉、後、盛一【閱歷】明治十三年二月、北海道札幌に生る。東京府立一中・第一高等學校を經て東大文科に入り、中學以來の親友小山內薰等と共に、雜誌「七人」を出し、以後小說戲曲に筆を執つた。大正に入つて雜誌「モザイク」に據つて以來は、主として飜譯に從事し、ドオデの「サフオ」、アルチバセエフの「サァニン」等を上梓したが、後者は文壇に行はれて一部にサアニズムの唱道を見た。當時問題の女たりし中平文子と結婚後、渡歐して漂泊の生活を始む。大正の末年一時歸朝したが、再び佛蘭西に赴き引續き滯在中、雜誌「改造」に多くの創作を寄せた。その作品は概ね彼地に於ける窮乏と、愛慾の生活を主題とせるもの、作者の抱く虛無的情懷が獨自の風格ある筆致に依つて敍べられ、以て一個特異なる文學を成してゐる。著書に「結婚禮讚」「文明病患者」「飢渴信」等あり、飜譯にバルビユスの「耶蘇」、シュウの「巴里の祕密」、ゾラの諸作等がある。（水木）

建御雷神（たけみかづちのかみ）　「國讓神話」を見よ。

建御名方神（たけみなかたのかみ）　「國讓神話」を見よ。

竹本義太夫（たけもとぎだいふ）　「竹本筑後掾」を見よ。

竹本座（たけもとざ）　操座【沿革】〔義太夫評譽時代〕貞享二年（一說に元年）二月一日竹本義太夫（竹本筑後掾參照）、大阪道頓堀吉左衞門町もとの井上播磨の芝居の跡に竹本座の櫓を擧げ、近松門左衞門の舊作「世繼曾我」を上演した。位置は戎橋南詰、南側であつた。義太夫を後援したのは、當時の興行界の利け者、京の竹屋庄兵衞で、初め宇治加賀掾（別項）と結んでゐたが、藝道と興行上のことから不和となつて、義太夫の藝に囑目し、彼を使嗾して獨立の旗揚げをさせたのであつた。この旗揚げの翌年、京の加賀掾は下阪して九郞右衞門芝居（後の中芝居、當時の京四郎芝居）に於て、西鶴作の「曆」（別項）を以て義太夫の竹本座に挑戰したが、義太夫は近松の「賢女手習并新曆」で對抗した。土地つ子の强みと、新藝風の新鮮味は、義太夫の竹本座に勝利を齎した。加賀掾は「曆」を中止して近松作の「凱陣八島」で二の矢を繼いだが、焦り氣味で立ち遲れの上に、興行半ばに火災に遭つて歸京して了つた。この競演が却つて竹本座の人氣を煽り、その基礎はいよ〳〵確立した。貞享三年近松の新作「出世景淸」（別項）を得て益々名聲揚り、元祿十四年義太夫は竹本筑後掾と受領した。併しそ

の後の竹本座は必ずしも好成績を舉げ得ず、伊藤出羽の操、竹田の水機巧の大衆的な興行に壓せられて經營難に陷つた。恰も元祿十六年四月、曾根崎天神の森で北新地の遊女と醬油屋の手代の相對死があり、直にこれを淨瑠璃に仕組んで翌月「曾根崎心中」（別項）を上演した。この興行が非常に成功して筑後掾は十八年間の興行の不成績による負債を淸算することが出來た。續いてその後日「遊女誠草」を出したが、寶永元年秋、筑後掾は長年の興行上の疲勞から閑地に就くべく座本を引退した。〔竹田出雲の座本時代〕竹本座の座主であつた（操年代記）、當時の興行界の才物竹田出雲（別記）は、筑後掾の藝を惜しんで再勤を勸め、座本を自ら引受ける事を申し出た。即ち寶永二年十月兩者の提携成り、筑後掾は再び舞臺に復活した。かくて竹本座の興行が竹田出雲の手に移つたのは、寶永二年三月興行からで（但疑難說）、表面へ出雲が出て來たのは同二年十一月の顏見世興行の「用明天皇職人鑑」の時からである。近松門左衞門が作者として竹本座に抱へられ下阪したのもこの時であつた。かくて出雲が座本となつた後の竹本座は、「用明天皇職人鑑」に於て、出語り・出遣ひといふ人形舞臺の劃期的革命を遂げ（操芝居の舞臺參照）、人形の衣裳道具等次第に華美に赴きて面目一新し、舞臺上の技巧は機巧を應用し、作者近松は圓熟期に入り、人形劇新興の機運に向つた。かくて正德四年九月竹本座は筑後掾を喪つたが、竹本政太夫が二代義太夫と改め、正德五年十一月興行の「國性爺合戰」（別項）の大成功はいよ〳〵竹本座に幸運を齎らし、元祿十六年の豐竹座（別項）の櫓揚げによる兩座の對立は、操の全盛時代を招來した。そして人形の進歩發達は、竹本・豐竹兩座による工夫の結果と見るべく、延享年代には、「淨瑠璃譜」の筆者をして、「操の流行その極に達し、歌舞伎は無きが如し」と言はせた。〔衰頽時代〕かくて竹本・豐竹兩座の對立時代は、かなり長く續いたが、竹本座は寶永三年、女形人形の名手辰松八郎兵衞を豐竹座に引拔かれ、延享四年三月には、名人吉田文三郎の父で、竹本座創立當時からの立役人形の名手竹本三郎兵衞を喪ひ、かくて竹本座に殘つた唯一の人形の名手文三郎は、父の歿後漸く我意の振舞多く、寬延元年「忠臣藏」書卸上演の際に、紋下竹本此太夫と衝突して、事每に專横募り、內部的に破綻を生じた（吉田文三郎參照）。搗てて加へて寶曆元年には作者並木宗輔（別項）歿し、續いて同六年座本竹田出雲（千前軒）も歿した。出雲の歿後は、竹本座の座本は竹田芝居の座本三代竹田近江が兼攝するに至つたが、その近江も、同十一年、豪奢を極めたといふ理由の下に入牢失脚し、竹本座も機巧の竹田芝居と共に漸く衰運に向つた（竹田芝居參照）。この間吉田文三郎は新座本近江の怒りを買ひ江戶に下つた。一方當時に於ける歌舞伎の異常な興隆に壓せられ、人氣を完全に失つてしまつた。その上、二代目政太夫、竹本大和掾と相次いで歿した爲め、竹本座は明和四年十二月、遂に中絕した。跡座は歌舞伎芝居となつたが、操淨瑠璃は大阪の名物であるとして、明和六年七月・十二月と屢々再興を企てたが成らず、竹本・豐竹兩座合同を計畫したが、これも水泡に歸し、明和八年正月、近松半二の舞臺本位の作「妹脊山婦女庭訓」（別項）を上演し、江戶より文吾の二代吉田文三郎を迎へ、座本は竹田新松で蓋を開け、四五年來の不入を一時に取返へしたが、これを最後の興行として竹本座の實質は潰滅した。初代義太夫が櫓を揚げて以來實に八十七年に及んだ。尤も竹本座は流祖の名に因んで「筑後芝居」と呼ばれてゐたが、寶曆九年に、「大西芝居」と改めてゐるから（大家興作外題年鑑）、文三郎の退座と共に、竹本座は事實上、退轉したものと見ていゝ（竹本筑後掾・竹田芝居參照）。〔石割〕

竹本攝津大掾（たけもとせつつだいじよう）

竹本攝津大掾

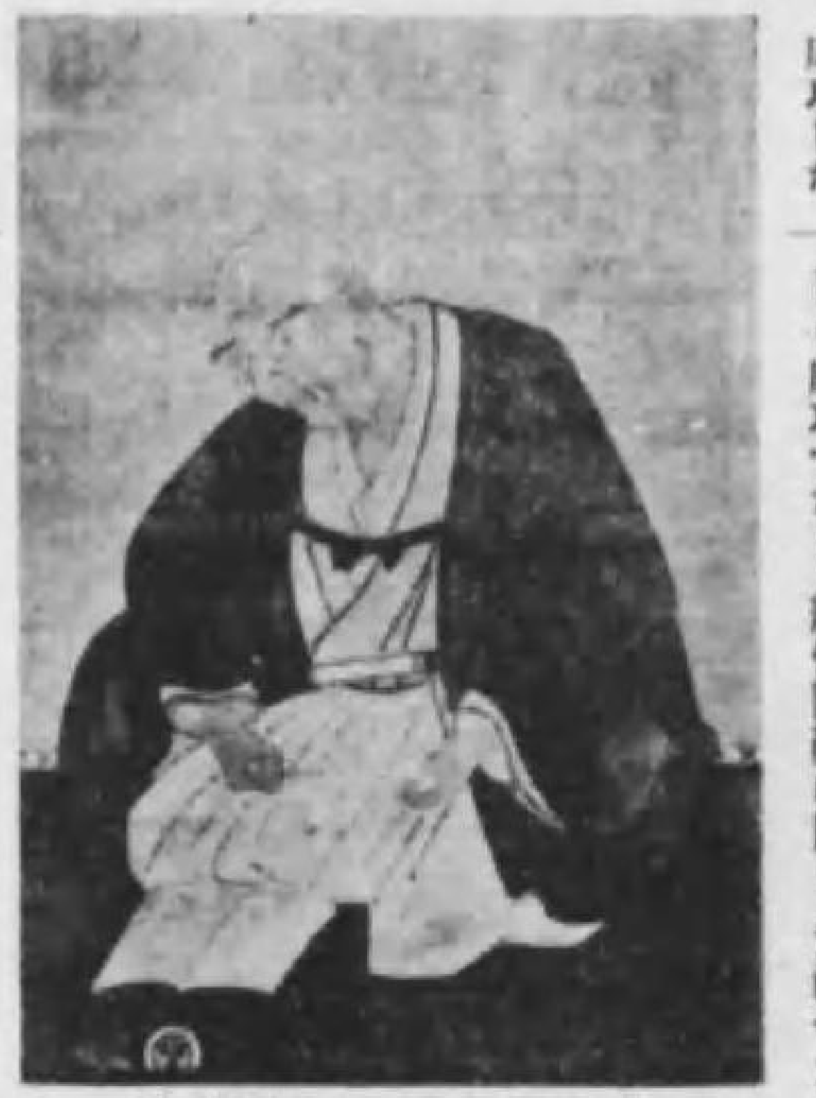
淨瑠璃太夫【姓名】二見金助。幼名吉太郎【藝名】竹本南部太夫・二代越路太夫【生歿】天保七年三月十五日、大阪順慶町三丁目唐物問屋伊勢屋に生れ、大正六年十月九日歿す。享年八十二【法名】春曉院殿越峰攝翁居士【系統】竹本筑後の弟子、大和掾の系統に、竹本春太夫がある。五代竹本春太夫が、三代野澤吉兵衞を伴うて弘化元年江戶に下つて名を成した。この二人に育てられたのが、後の攝津大掾の二代越路太夫である。五代春太夫は、久しく江戶に修業したから、江戶肥前の餘風は豐竹脈を引く事及び文樂座の櫓下は、一時春太夫系で占めたものが、津太夫父は綱太夫系に移つたといふことをこゝに見遁してはならぬ。【閱歷】父は森七郎、母は故あつて森家から離別されたので、母と共にその實家に歸つた。後釣鐘町上の町大工大和屋事二見伊八に貰はれた。養父伊八は素人淨瑠璃の好者であつた所から、十一歲の頃から三味線を學び初め、二十歲で養父の許しを得て藝人として起つ事に決心し、三代野澤吉兵衞の門へ入つた。野澤吉兵衞は初代竹本越路太夫の子である。その頃の吉兵衞は自ら一座を組織して地方興行を企ててゐたので、その高弟五代春太夫の門に入れられ、竹本南部太夫と名乘つた。吉兵衞は萬延元年南部太夫が二十五歲の時、彼を誘打にして江戶に下り、各所の寄席を打つた。この時吉兵衞の父越路太夫の名を嗣いで、二代越路太夫と改名したが、吉兵衞も亦克く導いた。攝津一代の修業時代であつた。文久二年七月吉兵衞は江戶で歿したので、大阪に歸り、慶應元年三月稻荷文樂軒芝居へ春太夫と共に出勤した。これが文樂座（別項）と結んだ最初である。この時各太夫に缺勤多く、彼が代役して好評であつた。初代豐竹古靱太夫が唯一の競爭者であつたが、明治十一年二月二十四日暗殺された。一方世間は王政復古の大變動の際に九州の旅へ出た。文樂座も不運が續いた。かくて明治十六年四月、越路太夫は名實共に文樂座の櫓下となつた。そして文樂座が御靈社內へ新築移轉したのが同十七年九月。越路は全盛期を續けた末、同三十五年九月十日、兼ねて寵遇を辱うしてゐた小松宮殿下から「攝津大掾」の名を賜つた。大正二年四月、「楠昔噺」德太夫住家を語つて引退し、靜かに餘生を送つた。【藝風】ほぼ五代春太夫と一致した語り口で、「艶物」に得意であつた。「先代萩」の御殿、「中將姬」の雪責、「廿四孝」の十種香、「朝顏」の島田宿、「合邦辻」の合邦住家等が最も得意で、度々繰返した。併し「吉田屋」の如き、明治三十五年一月に僅かに一度語つたものだが絕妙の許がある。恐らく三代長門が得意の語り物であり、團平の三味線で最も有名な「志度寺」、或は五代春太夫が皮肉物とした「帶屋」の如きは、彼の不得意とする所であつたらう。攝津の短所はこの悲壯淋漓な語り物にあつた。壯大味をその最も得意とした三味線の豐澤團平と攝津との分離の根幹は、內面的にはこゝに原因があつた。【門系】越路の高弟は三代竹本越路太夫である。本名は貴田常次郎、泉州堺の人。大正十一年二月、「大文字屋」を限りに病氣のため休座、遂に起たず、同十三年三月十八日、六十歲で歿した。これで文樂座の櫓下に春太夫系が絕滅した。〔石割〕

竹本賴母（たけもとたのも）

「竹本筑後掾」を見よ。

竹本筑後掾（たけもとちくごのじよう）

淨瑠璃太夫【本名】五郎兵衞【藝名】清水理太夫・竹本義太夫【生歿】慶安四年大阪東郊天王寺村南堀越の農家に生れ、正德四年（二三七四）九月十日大阪千日前法善寺東門東入ルの自宅に歿す。享年六十四。【法名】釋道喜【墓所】天王寺南、土塔山超願寺【閱歷】五郎兵衞は生來美音で、當時流行の淨瑠璃を好み、聲柄大音で爽かに、甲乙も備はつてゐたといふ。初め清水理兵衞に就いて修業した。理兵衞は安居天神の南隣り、逢坂の清水を取込んだ天神山にあつた。天王寺八軒の內と言はれた料亭德屋の主人で、當時、大阪を風靡してゐた井上播磨掾の弟子であり、又從弟の間柄であつたとも傳へる。理兵衞は勸められるまゝに芝居へ出ると、「清水々々」と持て囃されたので、藝名を清水理兵衞と名乘つた。五郎兵衞はこの理兵衞の淨瑠璃を聽き覺え、遂に入門したのであつた。貞享二年播磨の歿後は、その口傳奧義を五郎兵衞に傳へ、剃髮して竹西と號し、餘生を淨瑠璃で送つたが、「今播磨」と呼ばれた。五郎兵衞は二十三四歲の頃、理兵衞が道頓堀で新作「上東門院」を語つた時、そのワキを語つた。これが後の初舞臺である。後延寶の頃大阪戎屋喜太夫芝居を勸めた。その後上京して延寶五年正月宇治嘉太夫芝居で「西行物語」を語り、始めて世間から認められた。これに力を得て、清水理太夫と名乘り、同年十二月（二十六歲）、京四條河原に櫓をあげ、その後竹本義太夫と改め、再び興行したが、成功しなかつた。「神武天皇」「松浦五郎」などがこの時上演された。この頃、宇治加賀掾（別項）から離れた興行師の竹屋庄兵衞は、義太夫の藝に望みを囑し、一座を組織して西國筋へ旅興行に出た。安藝宮島の市の季節を當込んだ興行を打止めに歸阪し、道頓堀戎橋南詰に操の櫓を揚げた。これが竹本座である。この時期を貞享二年二月、義太夫三十五歲の時とするのが通說であつたが、義太夫が櫓揚第二次興行の「藍染川」や、六回目の興行の「賢女手習鑑」及びこれと競演した西鶴の「暦」等の正本の刊記によつて、貞享元年二月說もある。かくて義太夫は、宇治加賀掾の正本「世繼曾我」「藍染川」「以呂波物語」「一心五戒魂」「賢女手習鑑并新暦」などを矢繼早に上演した。そして彼の櫓揚と同時に播磨の弟子で、盲人の法師で歌三味線を彈いてゐた尾崎權右衞門が、竹澤權右衞門と改名して、義太夫節（別項）の三味線の始祖となつた。而して「世繼曾我」が義太夫節樹立の第一步であつた。櫓揚の翌年京の宇治加賀掾が、大阪に下つて京四郎芝居で西鶴作の「暦」（別項）を提げて義太夫に挑戰したが、結局加賀掾の失敗が（竹本座參照）、却つて義太夫の人氣を煽つた結果になつた。こゝに於て彼は、新進作家近松門左衞門に新作を乞ひ、その作「出世景淸」（別項）を以てその前途を祝福された。元祿十四年五月受領して竹本筑後掾藤原博教と稱し、受領祝ひには「蟬丸」（別項）が上演された。時に五十一歲、名實共に上方淨瑠璃の覇者となつた。併し興行的には必ずしも成功でなく、經營困難に陷り、元祿十六年五月、「曾根崎心中」（別項）の大成功によつて、過去十八年間の損失を漸く回復したのを機會に、翌寶永元年秋座本を引退して、念佛三昧の生活に入つた。蓋し興行的に惠まれなかつたので、寂寞の感を深くした爲めであらう。時に彼五十四歲。翌二年、竹田出雲（外記）がこの竹本座の狀態を見て、筑後の藝を惜しみ、座本を引受けたので、筑後掾は座本に抱へられた形式で再び竹本座に現はれた。近松が作者として竹本座に抱へられたのもこの時である。かくて竹本座は主として出雲の力によつて興行も順調に進み（竹本座參照）、筑後は專ら藝道に精進したが、正德四年八月、「娥歌加留多」を最後の舞臺として世を去つた。



竹本筑後掾（木谷蓬吟氏藏）

【藝風】五郎兵衞時代は、野良聲の大音であつたらしい。「西行物語」の夜盗の修羅を語つた時のことに就いて、「元來大音にて甲乙ともに揃ひ、俎板に釘かすがひを打つたる如く、何程の大入にても屆かぬといふ事なし。字どめ字頭の文字消えず、文のあやよく聞えければ、見物悅ぶ事限りなし」（操年代記）と傳へられてゐる。併し理太夫と名乘つた當時の不成績を見ると藝もいまだ若かつたものらしい。義太夫時代の彼は、播磨に枕を碎き、自信もつき、「世繼曾我」は甚だ好評であつた。「聲曲類纂」に「播磨が流は地節長うして音を表とし、節を裏にこめて語り、又京都の宇治嘉太夫（加賀掾）が流は地節短うして音を裏に隱し、節を細かに語り、兩流いまだ節章句全からず、いでや播磨の長きを縮め、宇治の短きを伸ばし、音定め一流を立てんと日夜に工夫をこらし、終に自ら得る所有りて語り出しければ世擧つて賞美しける」とあるのは、創始期の義太夫節の要を盡したものである。義太夫が「當流」と言ひ、當時の民心に共鳴を見たのは、在來の古淨瑠璃その他の曲節を持つ音の總てを集大成した點にある。即ち集大成であると共に、當流の新節であつたところに、義太夫節の新興藝術としての創作的價値と、民衆的である一面とを併有してゐる。古きを溫ねて新しきをも捨てず、囚はれざる自由にして自然なる民衆の聲であつたところに、當時の民衆の支持を得た。筑後掾が民衆詩人と呼ばれる所以は、この點に存し、新興藝術としての義太夫

節の眞生命も亦こゝにある。從つて彼の樂壇に於ける功績は、その一代に近松の作約百篇、その他の新作凡そ四十篇を作曲上演したといふその事實よりも、寧ろその美音に豐かな藝術を盛つた元祿期の代表的な民衆詩人であつたといふ點に認めらるべきであらう。「鸚鵡が杣」（別項）の序は、彼の藝術觀を知るに重要な文獻である。【門系】筑後掾歿後の後繼者では、二代義太夫の竹本政太夫（竹本播磨少掾參照）を中心として遺弟竹本頼母・竹本喜内・内匠理太夫・竹本文太夫などが竹本座の本據を守つて、義太夫節を大成した。以上のうち、竹本頼母は、古くからの高弟で、新町西口に住まつてゐて、油屋渡世であつたが、生來美聲の上、その語り口華美で、座敷をも勤めた。筑後歿後は、よく後進政太夫を助けた。殊に聲音に缺けてゐた政太夫に取つては、頼母の助力は缺くべからざるものであつた。（竹本座・義太夫節參照） （石割）

竹本長門太夫（三代）（たけもとながとだいふ） 淨瑠璃太夫【本名】佐久間傳次郎【別名】松長軒（作者名）。初め、藝名を竹本實太夫といつた。【生歿】寛政十二年九月二十二日に生れ、元治元年（二五二四）十月十九日歿す。享年六十五。【法名】長秀院仁譽義傳頼家門【系統】竹本筑後掾の門葉で榮えた竹本播磨少掾（別項）系統の外に竹本大和掾系統がある。大和掾の門から長門太夫系・彌太夫系・春太夫系・咲太夫系などが出て大名手を生んだ。初代長門太夫は寛延元年の吉田文三郎の忠臣藏騷動の折（吉田文三郎參照）、豐竹座から竹本座へ移つた名手である。而してこの三代は天才といはれた名人である。四代長門は文樂座の櫓下太夫ではあつたが、故實考證を好み、三代竹本筆太夫の「淨るり大系圖」三册二十二卷（天保十三年十月刊行）を增補して著はした。【閱歴】大阪島の内宗右衞門町、更紗屋佐久間傳兵衞の子。後、父傳兵衞が天王寺河堀口なる杜若の名所若松屋を買つて料亭を營んでゐた緣故から、長門も後に河堀口の廣大な座敷と庭園を持つて住んでゐた。故に仲間では、「河堀口の太夫」と稱し、附近ではこの邸を「太夫のお城」と呼んでゐた。彼は、初めは慰みに淨るりを語つてゐたが、漸く本職たらんとして修行し、文政五年二十三歲で、淡路小林六太夫座の四枚目となり、「薄雪」の鍛冶屋を語つて出藍の譽あり、翌年四代染太夫に入門して、竹本實太夫を名乘つてからも、屢々名聲を揚げ、遂に認められて竹本長門太夫を名乘り、義太夫以來の大立物となつた。武道によろしく、チヤリによく、艶物によく、廣く而も深い藝を持つてゐた。されば天保の改革以來、大打擊を蒙つた人形淨瑠璃界を、衰弊の極から救ひ、明治期の更生に導いたのは、全く三代長門の大きな藝と、不撓不屈の精進の力とによつてである。故に彼の周圍後輩には七代目咲太夫、五代彌太夫、四代長門太夫、初代長尾太夫、初代古靭太夫、六代目綱太夫、四代目住太夫等の直系の名人上手を數へることが出來、又人形としては初代吉田玉造を淡路から起用し、三味線には二代豐澤團平（別項）を拔擢したのも長門である。眞に彼は人形淨瑠璃中興の祖といふべきであつた。嘉永五年に道頓堀竹田芝居で、竹本多滿太夫と合作の「花雲佐倉曙」宗五郎住家の段を自作自演して大當りを取つた。元治元年八月稻荷東小屋で興行中、病を得て終に斃れた。天保八年、文樂座へ突如說經語座なる者が現はれて、恐喝した事件も、彼はよくこれと戰つて、勝訴を得た如き功勞者であるが、その語るところの古名作に自由に入嗣を施したことは、非難さるべきである。（石割）

竹本播磨少掾（たけもとはりまのせうじやう） 淨瑠璃太夫【姓名】水原氏、通稱中紅屋長右衞門。幼名長四郎【號】文正齋【藝名】初め若竹政太夫・二代竹本義太夫【生歿】元祿四年大阪島の内三津寺町に生れ、延享元年（二四〇四）七月二十五日歿す。享年五十四【法名】不聞院乾外孤雲居士【墓所】天王寺六萬體町天瑞寺【閱歴】中紅屋は資產家であつたが、長四郎は、前髮立の頃から稀に見る淨瑠璃の巧者で、勸められて竹本筑後掾（別項）に入門、技の進むと共に芝居出勤を願つたが、許されぬので、西澤一風を仲介として豐竹座（別項）が京興行の寶永七年、始めて若竹政太夫と名乘つて豐竹座の芝居を勤めた。豐竹座が京から歸阪後は、曾根崎芝居などで舞臺の修業を積んだ。その工夫鍛錬を聽いた筑後は、正德二年、丁度三年目に手許に呼戻し、同三月竹本座の「丹波與作」道中双六の段を、和歌竹政太夫で語らせた。正德四年、筑後の歿後、座本の竹田出雲と作者の近松門左衞門は、櫓下太夫としては、筑後生前の意を忖度し、政太夫を推した。同年十月筑後の跡を嗣ぎ、竹本政太夫と改姓し、「嵯峨天皇甘露雨」を上演した。頼母・理太夫以下よく後進の政太夫を助けた（竹本座參照）。翌正德五年十一月「國姓爺合戰」（別項）上演には、三段目獅子城を政太夫、四段目九仙山景事を頼母が勤め、古今の當りをとつて竹本座の經濟も持直され政太夫の人氣も高まつた。彼は聲量は非力ではあつたが、淨瑠璃は聲によらず、腹による事を案じ、加ふるに「東風」の華やかなツボに工夫があり、華麗の竹本節の功、與つて筑後の創始した義太夫節をこゝに大成したので、彼の史的地位は牢乎たるものがある。近松晩年の圓熟した名作、殊に世話物の多くは、政太夫によつて曲中の人情・情景を專ら描出する事に成功した。享保十九年二月一日、推されて二代竹本義太夫を嗣いだ。翌二十年十一月、受領して竹本上總少掾藤原喜教と稱した。受領祝の出語りが「天神記冥加松」で、この時、芝居表へ祝道物を飾ることが初まつた。元文二年正月二十八日、「御所櫻堀川夜討」の時、再び竹本播磨少掾と受領、「冥加松」を改めて、「菅丞相冥加松梅」を祝に語つた。この床本は自書章で、播磨少掾の嗣子中紅屋長右衞門喜治から、播磨少掾七回忌の寛延三年に、二代政太夫に讓られて今日に傳はつてゐる。延享元年三月、「見源氏道中軍記」興行中、病氣にて休場、遂に歿した。【人物・藝風】天王寺納骨堂なる穗積以貫撰する「播磨少掾碑銘」に、「業伍紛戲、而射不屑與商、踽々涼々、木訥自守、前徵厓幅不事雕飾、相其貌則隗々然野人、蓋天賦之所使然、可以想見其爲人也」と、よく彼の風丰を盡してゐる。播磨が生前門弟順四軒に口授したといふ「音曲口傳書」（別項）に、わが音に腑して語る事を修行せよと述べてゐる。【門系】（二代）播磨少掾晩年の弟子。鐘喉場の產とて鐘喉場重兵衞とも呼ばれ、後、大阪新町西口にゐたので「西口の政太夫」とも呼ばれた。（三代）天性の上手と言はれた名人で、通稱播磨屋利兵衞、靭町筋元靭四郎町にゐたので「靭町の政太夫」と稱された。文化年中門人氏太夫に四代政太夫を讓つた。なほ播磨少掾の門葉で、別に竹本染太夫の系統がある。

初代は攝津西成郡傳法村の產、通稱傳法屋源七で、「傳法屋風」といふ一流を殘した名人である。この初代から染太夫系九代までと竹本組太夫五代まで、及び竹本綱太夫七代までを出した。（義太夫節參照） （石割）

竹本祕傳丸（たけもとひでんまる） 義太夫節段物集枕本一册【解說】最初に「竹本祕傳丸淨瑠璃口傳書」と題して、初段之事 凡鳴、二段目の事 凡しゆら、三段目之事 凡愁歎、四段目之事 凡道行、五段目之事 凡問答、はまる拍子違拍子と云事 素淨るりの事、四步六步至極の祕傳、地詞ふしの事、節章祕傳書の小見出しを設きて說明し、末に「口傳あらまし如此 竹本氏」と署し、次に「淨るり作者」として「京近松門左衞門（さやうゆん作る）」、「大坂錦文流（今は京都の作者）」、「同只丸（はいかいの點者）」を列記し、竹本筑後掾門弟として新町西口竹本頼母以下十八人、なぐさみ淨るり總名寄として、安堂寺町桑屋彥十郞以下四十九人、法師三味線總名寄として、新町北中町茶や町今川以下三十五人、新町にて名有法師として、くるはの内 利都以下十人、芝居を勤給ふ引手衆として、心齋橋清水だに竹澤權右衞門以下五人を列記し、末に西澤氏與志集と署す。

淨瑠璃總目錄

（一）甲賀三郎 〽諸天づくし、（二）同二段目 〽かねいゑみち行、（三）同四段目 〽あふみ八景、（四）十二段之二段目 〽うつゝのわたし守、（五）信田小太郎 〽神おろしの段、（六）同二段目 〽おとこしなさため、（七）同三段目 〽小ぎくひめみち行、（八）新板腰越状 〽若衆袖みち行、（九）藍染川 〽初段海の名寄、（十）同三段目 〽娘の君道行、（十一）百日曾我 〽けいせいたいないさがし、（十二）淀君三世相 〽二段目さんげ物語、（十三）同三段目 〽みとのロよせ、（十四）同四段目 〽はるひめ道行、（十五）同段 〽よみぐるまの段、（十六）曾我五人兄弟 〽とらせう〲矢立の杉、（十七）天智天皇 〽三段目三社のたくせん、（十八）以呂波物語 〽いろはの前道行、（十九）世繼曾我 〽みかりせいぞろへ、（二十）同三段目 〽とらせう〲十はん切、（廿一）同五段目 〽ふうりうのまひ、（廿二）盛久 〽げんじ大けいづ、（廿三）悅賀樂平太 〽大名の役目づくし、（廿四）虎が石三段目 〽とらおもひぶみ、（廿五）根元曾我 〽兄弟のはゝみち行、（廿六）薩摩守忠度 〽きくの前みち行、（廿七）大曾我 〽おにわうどう三郎みち行、（廿八）一心五戒魂 〽もんがく上人[illegible]まひ。

以上の二十八章を十五行本に收錄し、奧付は「右此本者依爲懇望文句音節等悉校合加證候令開版者也 竹本筑後掾、大坂上久寶寺町三丁目正本屋九左衞門板開」とある。刊年は未詳であるが、元祿中か寶永の初め頃であらう。本書と同形同類の書に、「淨瑠璃見取丸」「淨瑠璃小菊丸」の二種が、これより前に發行されてゐる。この三書は互に內容の重複しないやうに編集されたものである。（藤井）

竹本政太夫（たけもとまさたいふ） 「竹本播磨少掾」を見よ。

田毎月丸（たごとのつきまる） 狂歌師【本名】平野邦慶。通稱六左衞門【別號】爽振亭・鈴蔭山人。書號隨宜軒素寛【生歿】元文五年三月生れ、文政元年（二四七八）三月廿一日歿。享年七十九【法名】瑞照院心月自性居士【墓所】信州上田大輪寺【閱歴】信州上田藩主松平侯の家臣で、同城下鍛原口で生れた。天明の初め江戸藩邸詰の頃より朱樂菅江に就いて狂歌を學び、又蜀山・橘洲・木網等とも交遊し、歸藩の後大に斯道を興隆し、門下生數十名を養成するに至つた。されば上田に狂歌の地盤を作つたのは月丸の力で、文化頃は月丸の社中か六樹園側の作家かで、全盛の狂歌界を占領した。遺稿に「田毎の月」一册があつたが刊行するに至らず、今寫本で傳はつてゐる。又門人諷々亭音近（鈴木周太）が師の號を襲いで、二世爽振亭月丸となつた。（野崎）

田澤稻舟（たざはいなぶね） 小說家【本名】錦子【生歿】明治十一年に生れ、同二十九年九月歿す。享年十九【閱歴】稻舟は山形縣鶴岡の醫師田澤清の女。文學修業のため上京、緣あつて山田美妙の妻となつた。彼女はその當時の新しい女といふべき型を備へ、殊に感情が强く、神經質であつた。些細の事から離別となり、淋しい思ひを抱いて歸鄕し、催眠劑過量服用のため十九歲を一期として世を去つた。死因につき種々の噂を生み、美妙の冷酷を憤つて服毒自殺したとも云はれるが、石橋思案・丸岡九華等はこれを否定してゐる。いづれにしても稻舟の死は美妙にとつて少からぬ打擊で、一時非難の聲喧しかつた。作家としての稻舟は、明治二十八年から二十九年にかけて、「白ばら」「峰の殘月」「五大堂」等を公にしたに留まつた。その死後、明治三十年一月に「唯我獨尊」の一篇が公にされた。（高須）

多識篇（たしきへん） 語學書 二卷 二册（別本五卷）【著者】林道春【成立・刊行】慶長十七年起稿、寛永七年刊（活字版）、慶安二年再版。【諸本】二卷本と五卷本とあるが、內容に於ては殆ど變りはない。後に「改正增補多識篇」と標したものが出てゐる（五卷五册）。內容は原本よりは勿論豐富になつて居り、漢字には凡て假名を付け、組織も整理されてゐる。【解說】分類體の漢和字書である。先づ部門を水・火・土・金・玉・石以下二十七部に分ち、部に從つて漢語を出し、これに漢字で和訓を註し、異名を附したところもある。卷末に木綿について記した漢文の一篇がある。金石・草木・禽獸・虫魚・服器などの漢名をあつめて漢詩文を作るに資したもので、必ずしも通俗を目的としたものではないやうである。（龜田）

但馬皇女（たじまのひめみこ） 歌人【生歿】生年未詳。和銅元年（一三六八）六月薨ず（日本書紀）。【御墓】大和國城上郡の吉隱の猪養の岡（萬葉集卷二挽歌に據る）。【系圖】天武天皇の皇女、御母は氷上娘（藤原鎌足の女）。【閱歴】經歴は殆ど知れない。唯一の資料は、「萬葉集」卷二相聞部にある三首の皇女の歌の題詞で、これを寄せ集めて見ることによつて、青年時代の皇女の戀の一部を知り得るのみである。三つの題詞とは、「但馬皇女、在高市皇子宮時、思穗積皇子御歌一首。秋の田の云々」「勅穗積皇子遣近江志賀山寺時、但馬皇女御作歌一首。後れゐて云々」「但馬皇女、在高市皇子宮時、竊接穗積皇子、事既形而御作歌一首。人言を云々」。以上の三つは、事柄の實際の順から云ふと、第一・第三・第二の順に見るべきで、穗積皇子と密かに婚されたことが發覺したから、皇子に勅命が下つて近江へうつされたものである。何故この二人の結婚が裂かれたかは明かでない。二人は異母兄弟である故、當時としては近親結婚として引き分けねばならなかつた、とは考へられない。或は、二人の母系が、藤原氏と蘇我氏との對立抗爭からではないかと思はれる。その後の皇子皇女の關係は不明である。併し二人の戀が、隨分永く熱烈に續いたことだけは推察出來る。上記の三首の皇女の歌は、卷二の持統天皇朝の部に入れてあつて、歌柄から見るも持統天皇時代の作として支障がない。而

して卷二挽歌部の、穗積皇子の「但馬皇女薨後云々。零る雪はあはにな降りそ云々」の歌は、皇子の思慕が皇女の死後も、なほ如何に深かつたかを示す。皇女の方からも同樣であつたと思はれる。二人の戀は、皇女の薨ずるまで、尠くとも、十一年間は持續してゐたことが知れる。【作風】「萬葉集」卷二相聞部に、三首の短歌。卷八秋雜歌部に、「但馬皇女御歌一首」と題詞のある短歌一首、計四首である（最後の一首は、題詞の下に小字で「一書云子部王作」とあつて、果して皇女の作か疑はしい）。皆、穗積皇子に對する戀歌である。「後れゐて戀ひつつあらずは追ひ及かむ、道の隈みに標結へ吾が夫」の一首には、近江へやられた夫の君を慕ふ強い熱情が歌はれてゐるが、他の三首には「秋の田の穗向きの依れる片依りに君によりなな」の如く巧みに喩へを用ひて、なりふりかまはず突きつめた戀情よりも、精神的な戀の境地を現はしてゐる。故に、人を根柢から感動せしめるやうな強さが無いかはり、あくどさや、しつこさが見えず、歌品のある如何にも身分重き皇女にふさはしい歌風が、自然に現はれてゐる。　〔森本〕

太政官牒 だじやうくわんてふ　「牒」を見よ。

太政官符 だじやうくわんぷ　「符」を見よ。

多情多恨 たじやうたこん　小說【作者】尾崎紅葉【發表】明治二十九年二月二十六日以降讀賣新聞連載。【刊行】紅葉全集第六卷・現代日本文學全集第六卷所收。

【梗概】最愛の妻、類さんに死なれた鷲見柳之助は、每日亡き妻の事を思つては、何をする元氣もなく涙と溜息とに遣瀨ない寂しい日を送つてゐる。二七日の今日は雨に暮れて、夜となると寂しさに堪へられぬ儘、酒で心を紛らさうとする。そこへ親友の葉山誠也がやつて來て、色々元氣をつけて慰めようとするが、柳之助はその言葉の尾について、又しても返らぬ歎きを繰り返す。お坊ちやんで少し變物で人見知りをする柳之助には、女では類さん、男では誠也、天下にこの二人より外好きな人はなかつたのである。さて類さんにはお島と云ふ妹があつて、姉の跡に直す下心から母親は、お島を柳之助の許へやつて家事の始末をさせるが、柳之助はその心を籠めた親切な世話振りがうるさくてならない。仕舞には堪らなく厭になつて、勤先の學校から歸ると家を外に類さんの墓へばかり行くのだつた。今日も墓參りをして更に新しい涙を絞つた。家へ歸るのが厭で葉山の許へ行つたが、そこには矢張り大嫌ひな葉山の妻お種がゐる。お種は古風な窮屈な女で、どうしても親しめないのだが、葉山だけに逢ひたくて訪れて行つて、お島の一件を話すと、通人の葉山は母親の意を察して一緒になれと勸める。柳之助は腹を立ててお島が歸らぬなら自分が家を飛び出すと無茶を云ふので、葉山は仕方なく策を授ける。その結果お島は憤つて歸り母親も來なくなつて、もとの火の消えたやうな寂しい生活になつた。それを見て葉山は、自分の家に同居させて元氣をつけようとし、お種は何やかや煩るので、柳之助は次第にお種に懷しみを持つやうになり、姉のやうなあしらひに依つてその寂しさが少しづつ慰められた。その時葉山が旅行に出たので、柳之助は二階に一人ゐる寂しさに堪へないで、お種の針仕事をする茶の間に入り浸りになつて勉強までするやうになつた。勿論類さんへの愛慕が薄らぐどころでなく、二階に一人寢なければならぬ夜となると寂しさが沁々と身に迫る。その思ひの堪へ難さに、或る夜更けにお種の部屋へ這入つて行つた。勿論他意のない事なので、お種は迷惑ながらもその心のいぢらしさに曉まで話相手となつて慰めた。柳之助のこの非常識な行爲は葉山の老父の疑ひを呼んだ。夜はお種の傍に寢、晝は病氣と稱してお種を隱居所に置く事にし、葉山が歸るや、柳之助の同居を斷れと言ひ出した。葉山は柳之助を信ずるもののまた老父の心を惱ませるに忍びず、さりとて親切に呼んだものを今更出てくれとも言ひ難かつたが、思ひ切つて事情を柳之助に語つた。柳之助は憤激して泣いたが、遂に事を分けた葉山の言葉に、得心して近所の下宿に越して行き、又もとの寂しい生活に返つた。床の正面にお類の肖像を掲げ、お種の寫眞を床柱に懸けたばかり、幅もなければ花もなしに。

【批評】この作では、筋が主でなく亡妻に對する纏綿たる愛慕の情を抱く人間が主で、柳之助の性格を丸彫にしようと懸命に努力して、興味中心の小說を書かうといふ態度を捨ててゐる。眞劍に迫つてゐるが、殊に柳之助が兄タイプの誠也に甘える心理や、段々お種に好意を感じて行く徑路やは、就中生彩を帶びて、殆ど至れり盡せりである。多少の不滿はあつても、柳之助の如き人間は、一個の新しい性格描寫であるし、愼重な四つ相撲をとつて、而も作品に悠然たる風格を生じてゐる。更にその文章に至つては、言文一致の時代的模範文と云つてよからう。作者自身も、「我家の米の飯」を以て任じてゐたやうに、彼一代の傑作である。　〔水木〕

多情佛心 たじやうぶつしん　小說【作者】里見弴【發表】大正十一年十二月より、翌年十二月まで時事新報に連載。【刊行】大正十三年四月（前篇）、同八月（後篇）、新潮社。現代日本文學全集第二十九卷・明治大正文學全集第四十三卷所收。

【梗概】冒頭に、少年期・青年期の戀を歌つた「あさ」「よる」の二節から成る序詩がある。役者の萩原灘十郎は料理屋よし野の女將おもんの病氣見舞に文士の三好を誘ひ、又おもんの義妹お澄が會ひたがつてゐたので藤代信之をも無理に誘つた。信之は嘗て自分が芝居で卒倒した時、一方ならぬ世話になつた人がおもんであつたことを知る。おもんは信之の初心な態度に堪らなく心を惹かれるが、信之は却つてお澄の方に好意を持つた。灘十郎の妹で今は橫濱名うての不良少女鈴江が仲間の西山普烈と一緒に信之をゆすりに來た。その後すつかり深くなつて了つたお澄が、父信策の一生の敵であつた窪井金五郎の愛妾であることを知つて、自棄になつて飲み、更にカフエー黑猫で飲んで、女將の美津枝に好感を持つたが、それは友人三好の情人であつた。信之はお澄の所で父の遺傳らしい痼腫のための吐血をした。三好は灘十郎から美津枝を取持つやうに頼まれたのを機會に、美津枝との間の倦怠に刺戟を求めようとして二人で灘十郎を誘ひ出した。そして三好だけ別れて二人は赤坂の待合に行つた。吐血して後の信之はともすると死の不安に脅され、自分の生き方を吟味する氣持になつたが、やつぱり、眞心のまゝ生きるといふ從來の考へ方を訂正する氣にはなれなかつた。そして相變らず他所目には放蕩無賴とも見える生活を續けた。或る日、又普烈が信之をゆすりに來たが、その心持の汚さを信之から責められて、普烈は泣いて悔いた。かうして信之はわけもなく東京の生活に執着してゐたが、花の便りを聞く頃になると、嘗て京都で、愛の最高標示である金鵄勳章即ち死ぬ時には必ず逢ふといふ約束の標を與へてある里奴が、今大阪で胸を病んでゐるのを見舞ひたい氣持もあつて旅に出た。その旅の最初の宿で、偶然窪井に伴はれたお澄と會つた。きつぱり話をつけるつもりで窪井に會つたが、意外な好意を示され、却つて出端を挫かれた。お澄は急に窪井から暇をとると言ひ出したが、信之にはそれに對する何等の彈力ある氣持も起らなかつた。旅も中止して東京に歸つて見る。三好が妻の朋子から記入のない小切手を受取つて行つたといふ話を聞く。やがて二三日して三好から手紙が來て、以前から信之等のやつてゐた雜誌の金を誤魔化してゐたこと、美津枝と二人で灘十郎を瞞らうとした惡戲から、却つて嫉妬と熱愛とを感ずるやうになつたこと、朋子から受取つた小切手で、千圓だけ餘計に金を引出して美津枝と關西へ出奔したことを告げて來た。信之は戀によつて眞心に生きることを知つた三好を密かに祝福すると同時に、自分とお澄との間が省みられて恥かしかつた。その後信之は、おもんが或る不動堂の住持に夢中になつて財產は捲上げられ、女中同樣に虐使されながら、戀に殉じてゐるといふこと、又お澄は宮岡といふ華族に二人の子供さへある妻を離緣させて嫁入つてゐることなどを聞いた。辯護士であつた信之は、その頃或る人妻との問題から殺人罪を犯した西山普烈のために辯護に立ち、法廷で倒れて以來、病氣がぐつと惡くなつた。幾度か吐血した信之は、すべての人を許し、そして逢ひたがつた。彼を去つて行つた人達は急を聞いて涙を流して駈けつけた。信之のまごころは、すべての人達のまごころを呼び起した。信之は、子供達にしたいと思ふことをするやうになれと遺言して、安らかに息を引取つた。

【批評】想は、複雜な戀愛の諸態樣を描き分けようとする意圖を孕んでゐる。が、この作に於けるより重要な作者の意圖は、さうした戀愛の諸態樣の描破を通しての、その抱懷する所謂まごころ哲學の具現である。だから凡ての戀愛諸態樣は、やがて主人公のまごころ主義の發展成長を語るかに排列されてゐる。かういふ些かの無理さからか、やゝ不自然な作爲と、それ故、その眞摯さの稀薄にされた感じとが生じたことは爭へない。のみならず作品全體に亙つて、餘りにも通俗小說的な偶然が多過ぎるとは云へ、作者のまごころ主義への熱意が掘りさげた觀念形體は、兎に角限界的な境まで盡されてゐる。彼の代表作の一つとするに足る作品である。　〔片岡〕

【參考】里見弴氏とまごころ　片岡良一

黃昏に たそがれに　歌集【作者】土岐哀果【刊行】明治四十五年二月、東雲堂【內容】第一歌集 NAKIWARAI に次ぐもので、すべて一首を三行に記し、三百餘首を收めてある。自然主義時代における青年の現實生活感を率直痛切にうたつた作風を特色とする。石川啄木にデヂケエトしてある。　〔金子〕

たそや行燈 たそやあんどん　小說【作者】ちぬの浦浪六（村上浪六）【發表】明治二十七年十二月、東京朝日新聞。【刊行】浪六全集所收。

【梗概】吉原久喜萬字の花魁小太夫は、旗本の青年武士田邊紋彌と深い戀に落ちる。財間彌市は、勘當された紋彌の窮境を見かねて我が家に匿まひ、小太夫との仲の圓滿な終局を取計らふために種々苦心する。某藩の家老川田兵庫も小太夫を戀して通ひつめるが、小太夫は言ふことを聞かぬのに立腹して落籍させようとする。露寺は大に驚いて久喜萬字の主人に談じ、五日間日延をして貰ひ、小太夫の身の代金五百兩の才覺に奔走する。だが種々な手違ひがあつたので日が遲れ、漸く紋彌の兄に泣きついて金を調達して駈けつけると、一足違ひに川田が約束通り落籍してしまつたと聞いて悲憤する。且つ川田を憤るばかりでなく、小太夫がおめ〳〵と落籍されたことを憤る。だが小太夫は遂に紋彌への操を立て通して川田の手に死ぬ。紋彌は川田を斬るつもりで誤つて伯父の家に忍び込み、伯父の意見に發心して出家する。露寺は獨りで川田を仇と狙つてゐたが、或る霜の朝、吉原土手で見事眞二つに斬られてゐるのを人が見たといふ。

【批評】よく纏まつて、物語の筋が緊張して終りまでたるみのないところは、浪六の時代小說中有數のものであらう。露寺の性格、その意地と俠氣が、聊か冗いやうにも思はれるが、先づよく描けてゐると思ふ。殊に財間相當の凡人型なところに面白味がある。小太夫と紋彌は、あまり明瞭な印象を殘さないが、川田兵庫の方が割にはつきりしてゐる。結末の邊に人の意表に出たところが、浪六流といへばいへるが、矢張り讀者の心に殘る。浪六の時代物に通有な缺點が、幾分にもせよ伴つてはゐるが、當時としては先づ佳作と目すべきものであらう。　〔稻田(襄)〕

ダダイズム　藝術論〔英〕Dadaism

【名義】歐洲大戰中、戰線から逃れて瑞西のチューリッヒの酒場に集まつた一群の作家が、その寄席の歌女に與へた名を以て、直ちにその一派の藝術運動の主義の名としたもので、意味はない。獨佛辭書で偶然見出した小さい木馬を意味するダダ (Dada) といふ言葉が、單に形が短小で、而も暗示性をもつ語として選ばれたに過ぎぬ。【解說】近代藝術上の一樣式の名稱。歐洲大戰中、歐洲各國の所謂危險思想家・自由思想家の避難所であつた瑞西、殊にそのチューリッヒで、一九一六年の春カバレー・ヴォルテール (Cabaret Voltaire) といふ小寄席風の小さい酒場で、ドイツから逃れて、その情人のエンミー・ヘンニンクス (Emmy Hennings) と共にこの酒場を經營してゐるフーゴー・バル (Hugo Ball) と、ルーマニアから逃走したトゥリスタン・ツァラー (Tristan Tzara)、マルセル・ヤンコ (Marcel Janco) の二人、ドイツから逃れて來たリヒアルト・ヒュールゼンベック (Richard Huelsenbeck)、フランスから逃げて來たアンス・アルプ (Hans Arp) の五人によつて、ダダイズムといふ團體が作られた。バルはカンディンスキーの友達であるが、ミュンヘンで表現主義の劇場を起さうと企てたことがある。ツァラーとヤンコとは、ルーマニアの浪漫的なコスモポリタンであり、ヒュールゼンベックはドイツの表現主義者であつたが、戰線から逃走して來た作家であり、アルプは開戰當時愛國運動に熱中したが、パリでピカソ・ブラックと識り、立體主義の運動に加はり、後こゝに逃げて來た作家である。彼等はこの寄席で自分の作品を展覽したり、歌ひ踊つたり、詩を朗讀したりした。バルとツァラーとは、チューリッヒで、「ダダの畫室」を建て、抽象藝術、又は最新藝術と稱し、ツァラーは又ダダの新聞を發行して

各國へその主義を宣傳した。又初め立體主義で後にオルフィズムに轉じたピカビアは、パリに於てダダイズムに加はつたが、アポリネールの死後、ニューヨークに歸り、その主義を宣傳した。ドイツでは、ヒュールゼンベック、ラオウル・ハウスマン（Raoul Hausmann）等が一九一七年歸國し、ベルリンにダダイズム革命本部を置いて政治運動を始め、共產主義的思想を宣傳し、又表現主義が藝術の世界に止まつて實生活に出でない事を攻擊した。又ダダは未來主義の同存主義を取入れ、同時に多くの詩を朗讀したが、これも未來主義に於けるとはその意味を異にして、彼等の求むる主觀表現のために用ひる。かやうにダダイズムは、未來主義の方法の一部を取入れ、その客觀主義的態度を排斥してゐる。又ダダイズムは立體主義のピカソの影響により、畫面に砂や毛髮や切手・新聞などを貼り附けるが、この點に於てもダダイズムは、立體主義の方法の一部を取入れて、その客觀主義の態度を排斥してゐる。ダダイズムの三つの原理は、喧騷（Bruitismus）・同時性（Simultaneität）と繪畫上の新材料であるとダダイストは言明する。ダダイズムの運動は、繪畫・音樂・舞踊・詩歌の上に亙るといふよりも、寧ろかゝる限界を意識的に破壞するのみならず藝術と生活との限界をも認めない。ダダイズムの藝術上目的とするところは、未來主義・立體主義等の表現方法を取入れ、表現主義の直接表現の方法によつて實生活を表現するにある。ダダイズムの詩人としてはヴァグネル（F. V. Wagner）がある。實際のその作詩上に於ては、單に破壞的・肉體的題材を斷片的・感覺的に表現するに過ぎぬ。

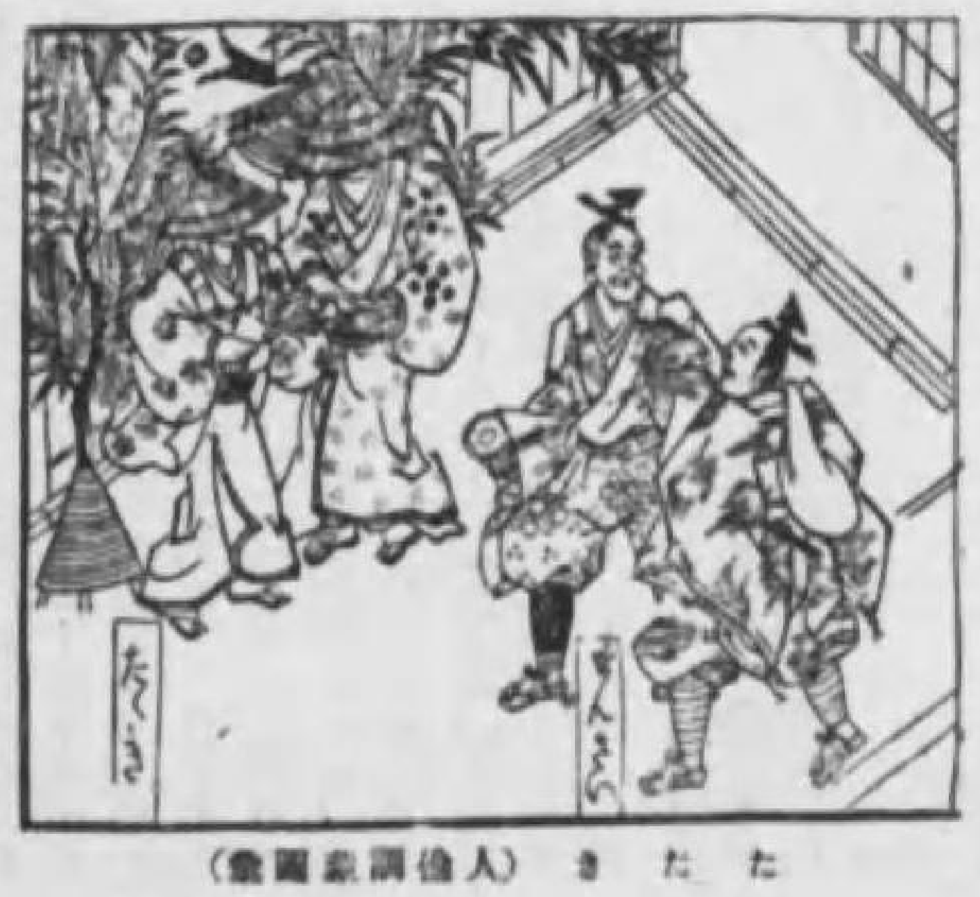
【參考】Huelsenbeck, R.: *En avant Dada.* Leipzig, Wien, Zürich. 1920.　（淺尾）

忠臣 ただおみ　漢詩人　【姓】島田朝臣　【字】達音　【生歿】天長五年生れ、寛平三年（一五五一）の七八月頃に歿した。享年六十四　【家系】遠祖は神八井耳命である。忠臣以前の人々には、島田臣宮成・島田朝臣清田（日本後紀の編纂にも關與した學者である）・島田朝臣清子・島田朝臣惟上・島田朝臣貞繼・和泉守善長・因幡守善宗等が知られてゐる。弟良臣は、「文德實錄」序中にも見え、元慶二年には從五位下行大外記で、「文德實錄」の編纂にも携はつてゐた。【學統】菅原是善に師事し、又大內記菅原宗揺の門にも入つてゐた。但し家は累代儒家であるから、父祖の庭訓も少くないと思はれる。【閲歷】十六歲、五律一首を作つた（家集上）。貞觀元年（三十二歲）、能文の故を以て假に加賀權大掾となつて（當時越前少掾從七位）、渤海國の副使周元伯と唱和した。三十六歲文章生となり三十九歲少外記に任ぜられた。四十二歲の春從五位ノ下、二月因幡權介。元慶二年（五十一歲）八月、皇弟貞保親王が、披香舍で始めて「蒙求」を讀み給ふ時、終つて忠臣等に詩を賦せしめられた。十二月、櫻日宮の詐宣を奏上して、新羅の來寇に備ふべきを說いた（當時大宰少貳從五位ノ下）。翌年從五位ノ上。元慶七年四月、假に玄蕃頭の事を行つて渤海國大使裴頲に對した（實は美濃介）。寛平元年（六十二歲）十月十九日、「周易」の御讀をなし、翌年仲春、釋奠に「論語」を講じた。時に典藥頭である。同四年六月十三日「周易」の講を畢り、七・八月の頃逝いた。家集中には交友多く、互に唱和の詩を殘してゐる。晚年には無量詩閣に住した事も家集にうかがはれる。【著作】百官唐名抄（拾芥抄中、官位唐名部第三に、島田忠臣撰也と見える）○田達音集十卷（通憲入道藏書目錄）○田氏家集三卷（別項）。【詩風・人物】詩人として道眞とよく、その詩に白氏の風が多いのは當時一般の風潮であらう。詩を通して見る人物は篤實謙讓、眞の學者らしさを想はせる。「延喜以後詩序」に、「當代之詩匠」と評した言葉は、溢美ではない。道眞の如き才氣は無かつたやうに思はれるが、詩の體製は深重とも稱すべきであらう。ただその詩の傳はるものは僅に三卷二百二十餘首に過ぎない。

【參考】三代實錄○江談抄卷二（雜事）○菅家文草（卷一ー五）○雜言奉和○類聚古詩　（山岸）

直香 ただか　國學者　【姓名】橋本氏。初名熙雄。通稱鶴松、後彥八。【號】蘆園　【生歿】文化四年、上野國山田郡境野村に生れ、明治二十二年七月、東京に歿した。享年八十三。【法名】指月院直心淨香居士　【墓所】東京本鄉區駒込蓬萊町大林寺　【閲歷】直香、屋號を島屋といひ、代々の飛脚問屋であつた。直香に至つて傍ら樽業をも營んだが、不幸にして家道振はず、つひに意を決して江戶に出で、文學を以て身を立てんとし、橘守部の門に入つて、國典和歌を學んだ。時に年四十餘。なほ若くして黑川春村の教を受けたこともあつたといふ。爾來、守部の愛重するところとなり、ます〳〵研鑽倦まず、つひに一家を成し、ことに畢生の業として「萬葉集」を研究した。初め赤坂一ツ木町辨天山に卜居し、後、赤坂氷川神社洞畔に移つて子弟に教授した。その門に入る者極めて多かつたといふ。直香資性溫雅にして恭儉、頗る君子の風があつた。【著作】萬葉集私抄二十卷（內三卷刊）○上野歌解二卷○歌仙部類女房歌 二冊（三十六歌仙部類抄十八卷の內）○姓氏錄補闕四十卷○作者部類傳○國史雜傳抄○百人一首小倉梯○鶴原私抄十卷○旋頭歌解三卷（別項）○諏訪詞之記二卷○題詠復葉集六卷。【業績】先づ「萬葉集」の研究を擧ぐべきであらう。「上野歌解」の如き、眞淵が「萬葉集」の遠江歌の解を行つたのと相並んで注目すべく、「旋頭歌解」もまた旋頭歌論として最も詳密なものである。その他全體に、その研究は質實なる研究態度が見られる。

【參考】上野人物志（岡部福藏）○群馬縣史第三卷（群馬縣教育會編）　（森）



たたき（人倫訓蒙圖彙）

敲（叩） たたき　歌謠　【名義】室町時代から胸叩とて、裸體で、頭に編頭巾を被せ、腰に餅鍵をつけ、手で胸を叩いて、早口に歌つて物を貰つて步いた者があつた。その曲風から出たので、この名があるらしい。【沿革】江戶時代に入つては、叩の與二郎といふ頭が京都の悲田寺內にゐて、春秋二季の彼岸又は所々の祭禮の頃に口早にしやべり廻つて物を乞うてゐた。元祿三年板の「人倫訓蒙圖彙」には、萬歲と組み合せて、編笠をつけた者が門松の前で、つれ歌で、扇で拍子を取つてゐるところを描いてあるのを見れば、正月にも門附をしたのであらう。歌の古いものは知られないが、延寶四年に成つた「淋敷座之慰」には、吉原太夫浮世たたき、吉原太夫紋盡のたたきの二首が載せてある。何れも長篇で、物貰歌の語調を存してゐる。すなはち、

面白の浮世遊や、夕べ〳〵にぬめり町を上から下へ見渡せば、誰ても見事や美しや、數多の上臈衆がござんす。主は知らねども格子からちよいと覗く。しかも鶴の子の、やんど蜜氣よしが。ナゴノチヨイトシヨ。先づも名高き吉野様、外山に咲きしお姿を、一目見しよりも鐘が心もうか〳〵となり果てて、コトバやりてが袖をせつつとひく。年は幾つと問うたれは、（下略）（吉原太夫浮世たたき）

の如きもの。やゝ後れて行はれた「早口うたせ」はこれから出たらしい。元祿の頃にはさう下品なものと思はれなかつたか、「諸國遊里好色由來揃」に、「鳥羽の三四郎は中にもたたきといふ事すぐれし也」と見えてゐる。又近松門左衛門作の「天鼓」の中に、「やんらめでたや千町や萬町の鳥追が參りて、稲の神いはひこめ、しらげの米やろ、眞白げの米やろ、米やろが定には、稲と繭と參りて……」の鳥追歌の肩にタヽキと記してあれば、鳥追歌（別項）をも語つて廻つたことが知られる。「人倫訓蒙圖彙」のタヽキの說明に「千町萬町の鳥追と自ら名のるなり」とあれば、鳥追は京都では叩のなす業であつたのでもあらうか。　（高野（辰））

忠友 ただとも　國學者・考古學者　【姓名】穗井田（穗北）氏。通稱、秋負・總助・久間次郎・源助　【號】鄰長　【生歿】寛政四年、備中に生れ、弘化四年（二五〇七）九月十九日京都に歿す。享年五十六　【墓所】京都誓願寺　【閲歷】忠友は小原東作雄英の第二子。出でて穗井田氏を名乘つた。雄英、初め笠岡の代官に仕へ、後江戶に出でて幕府に仕へた。文化八年、忠友は父と共に平田篤胤の門に入り、同十年、江戶から京に上つて香川景樹の門に入つて和歌を學んだが、殊に心を考古の學に潛め、好んで國史を讀み、最も奈良朝の事物に精通し、景樹から「忠友はわが書笥なり」と敬重された。人々からは「奈良屋」と異名されたりもした。文化十三四年には大阪にも住んだ。一時奈良奉行梶野良材の屬吏となつて、正倉院の御物を調査し、その文書を整理したことなどもある。知友には、松岡辰厚・鈴鹿連胤・赤尾可官・八田知紀・貴名梅屋・伴信友・西田直養の諸人があり、信友、また忠友を稱して「英才の仁」と云つた。直養はその隨筆の中に、奈良に忠友を訪ふことなどを書いてゐる。【著書】穗井田忠友集 一冊（正宗敦夫編（觀古雜帖・埋麝發香家集を收む。日本古典全集所收）○穗井田忠友家集 一冊（鶴宮蒼雨編）○中外錢史二卷（天保元年成。日本經濟叢書所收）○文氏墓誌考實一卷（天保二年十月成。甲子夜話續編）○高根おろし二卷（天保五年成。國書刊行會編百家隨筆第二所收）○續日本紀問答一卷（天保十一年成。續史籍集覽所收）○埋麝發香 印本一卷（天保十一年成）○觀古雜帖第一卷一卷（天保十二年成）　（以上五）

【歌風】師風を受けて平明清新、その佳作は、「古今集」中の佳作を見るかの感がある。ただ平明なだけに、中には一般的に陷つた卑俗な作がないでもない。古語の使ひやうなども手に入つたもので、流石にその學者としての位置を辱めないが、而も學者的臭味は比較的少い。これも忠友の天分を語るものであらう。

朝日かげさすまでまたぬ鶯のこもれる聲に目はさめにけり

行き通ふ貨船の舞の杉群の數知るはかり日數へにけり

比較的速吟の方で、即興・即詠を直ちに短冊に書くと云ふ風であつたらしい。それだけに、歌風としては淡泊で、ひねくり、こねくりせずに滿足したやうである。今日から見れば、そこが却つてよいのであらう。　（以上穗田）

【參考】穗井田忠友小傳 鶴宮蒼雨（穗井田忠友歌集附錄）○穗井田忠友の墓像 井上通泰（南天莊墨寶解說の內）

齊名 ただな　「まさな」を見よ。

忠直卿行狀記 ただなほきやうぎやうじやうき　小說　【作者】菊池寬　【發表】大正七年九月「中央公論」　【刊行】菊池寬全集をはじめ、多くの選集、改造文庫等に收む。【梗概】越前少將忠直卿は、驍勇無双の秀康の子と生れ、幼い時の遊び事は勿論、圍碁將棋雙六にかけても、また弓馬槍劍の武術に於ても、嘗て引けを取つたといふことがなかつた。何を試みてもその技倆は忽ちに上達し、周圍の者に打勝つのが常だつたので、家臣とは異る我が稟質の優越さを年と共に確信するばかりだつた。而も元和元年大阪城を攻め落す際には、自ら率ゐる越前勢が拔群の働きをなして一番乘りの功名を收めるに及んで、遂に天下の諸侯一人もわれに優る者なしとの矜持と自尊とを禁じ得なかつた。祖父の家康がこの武勳を賞して初花の茶入を與へ「日本樊噲」とまで稱揚したので、彼の得々たる驕慢心はその絶頂に達した。そして福井なる居城に凱陣した後も、日每臣下を集めて武技を練り、彼等を散々に破つてはその誇りを養ふの糧としてゐた。然るに或る夜立ち聞くともなしに家臣の蔭口を耳にし、日頃の試合に僞りの勝利を媚びられてゐた事を知つた。彼は恥辱と激怒とに衝擊されると共に、今迄の生活と誇りの悉くに、凡て空虛を感じて堪へ難い淋しさに襲はれた。そして自分の本當の力量を確めたい烈しい焦躁から、翌日は眞槍の試合を挑んだが、家臣は命を賭しても嘘を守り續けるだけで、忠直は飽く迄も一人の人間として遇される事なく、深い絶望的な孤獨地獄に取り殘されなければならなかつた。彼の荒涼たる氣持が頻りに酒杯に親ませ、殺生と亂行とを募らせた。周圍の言行には猜疑と僻みを以て酬い、主從の感情に乖離を來たして國政日に亂るゝ有樣となつた。やがて彼は愛する侍妾の上にさへ新しい疑惑を持つに至り、彼女達が權力者たる忠直に對して、人間としての人情の代りにただ服從を提供する傀儡たる事を意識すると、紅艶脂粉の間に一層の索寞を痛感するのだつた。この上はせめて人間らしく反抗を示すやうな生きた異性を愛したいと、彼は家臣の娘を漁り更に許嫁ある女を求め、遂に人妻を犯す非業まで敢てしたが、彼女等とても徒に盲從する人身御供となり終るに過ぎなかつた。而して三十歲を僅かに越して六十七萬石の封城を追はれるまで、忠直卿の亂行は次第に殘虐を極めて行つたが、これは『多分臣下が忠直卿を人間扱ひにしないので、忠直卿の方でも、おしまひに臣下を人間扱ひしなくなつたのかも知れない。』――而も配所に於ける彼は、町人百姓とも親しみ興じて、昔の荒々しき振舞もなく安らけく暮して、五十六年の生涯を了へた。

【批評】短篇ながら、これは作者の文壇的地位

を確立した出世作たると共に、彼の創生にかかる所謂テーマ小說の特質を體した代表的名作である。史傳中の暴戾なる暴君を捉へ來つて逆說的な新觀察を下し、人間性の深き洞見と鋭い心理の剔抉に依つてこれを孤獨地獄に陷れられた權力者の苦惱の姿として現前し、以て主題を見事に生かして忠直卿の行實に人間的根據を與へてゐる。取材の奇警多彩に加ふるに自家の人生的解釋を盛り、しかも簡勁明確なる手法で描き出したこの作は、當時平俗巧緻を事とした文學に飽いた人々に異常な悅びを以て迎へられ、更に一世にこの流風の作品を流行せしむる端緒となつた位である。作品的價値の優秀さを以てしては勿論、作者にとつても更に文壇にとつても一期を劃した歷史的作品としても、大正文學中銘記せらるべきである。なほこの作は脚色されて大正八年三月、文藝座第三回公演に上場され、以來守田勘彌の當り藝となつた。（水木）

忠央 故實家【姓】水野氏。幼名鍵吉。通稱、藤四郎【號】丹鶴・黄菊齋園・鶴峰【生歿】文化十一年に生れ、元治二年（二五二五）二月廿五日紀州新宮に歿す。享年五十二【墓所】紀伊國東牟婁郡新宮本廣寺【閲歷】對馬守忠啓の子、代々紀伊侯御附家老の家で、紀伊國新宮城主として祿三萬五千石を食んだ。文化十三年諸大夫となつて土佐守と稱し、天保六年八月十六日、父の隱居するに及んで、家督を相續した。萬延元年六月四日、新宮に隱居を命ぜられたが、元治元年特に免され、爾來鶴峰と稱した。忠央は文學を好み、有職故實に通じ、藏書數萬卷、その丹鶴書院に藏せしもの、皆稀覯の書のみであつたといふ。新宮城は別名を丹鶴城といふので、丹鶴書院又は鶴峰の名が命ぜられたのである。又篤學の士を招聘して、丹鶴叢書（別項）を編集刊行したが、その校正の嚴密、製版の精美は世の舉つて讚稱する所である。又丹鶴外書と稱し、史籍年表・十四卷系圖・同書引便覽等を刊行した。外に「朝野雜類」「千とせのためし」（寫）一卷等がある。（石村）

正述心緒歌【名義】「萬葉集」の分類法の一で、直接的に自分の思を表現する歌であつて「寄物陳思歌」及び「譬喩歌」（各別項）の二つに對立する。「毛詩」の賦・比・興に基く三分類だと言はれてゐる（賦が正述心緒。興が寄物陳思。比が譬喩）。而してこの名目の見える「萬葉集」十一・十二兩卷を見ると、この名目は「柿本朝臣人麿之歌集」からとつた歌群の中に二ケ所（卷十一に一所、卷十二に一所）と、「人麿歌集」の歌群以外の場所に二ケ所（同上）と、四ケ所に見えてゐる（萬葉の他の卷には見えない）。だからこの分類法は、武田氏も「上代國文學の研究」中で疑つてゐられるやうに、元來は「人麿歌集」にあつた名目で、それを卷十一・十二の編纂者が眞似て、「人麿歌集」以外から採つた歌群に同じ名目を用ひたものかも知れない。【用例】「萬葉集」第十一卷「たらちねの母が手離れ」の歌から同卷「戀ふる事慰めかねて」の歌まで四十六首——これは「柿本朝臣人麿之歌集」から採錄したもの。次に同卷「たらちねの母に障らば」の歌から、「月夜好み妹に逢はむと直道から」の歌まで九十一首。次に、第十二卷の卷頭から十首——これは、「人麿歌集」から採錄のもの。次に、同卷「吾が背子を今か今かと」の歌から「白たへのたもと纏けく」の歌まで、九十九首。以上四ケ所、二百五十六首。【性質】前述の如く卷十一・十二だけにある名目である。然るに、この兩卷は、卷頭に「古今相聞往來歌類」（卷十一には「歌類之上」、卷十二には「歌類之下」とある）と題してある。古や今の相聞往來の歌と云ふ意味だから、この「正述心緒歌」も、相聞往來歌の一種と見られてゐたのである。その相聞歌のうち、譬や序詞を含まないで、自分の感情をそのまゝ言ひ現はしたのが、「正述心緒歌」である。「何時はしも戀ひぬ時とにあらねども夕方まけて戀ふはすべなし」（卷十一・人麿歌集）「我が背子が朝けの姿よく見ずて今日の間を戀ひ暮らすかも」（卷十二・同上）の如くで、他の卷の「相聞歌」と言ふのと同性質の歌である。但し實際に於ては、「寄物陳思歌」と見るべき作も、この部目の中に混入されてゐる。例へば「石上振の神杉神さびし戀をも我は更にするかも」（卷十一・人麿歌集）「綠兒の爲こそ乳母は求むと言へ乳飮めや君が乳母求むらむ」（卷十二）の如きで、これ等は、當然「寄杉」歌「寄乳母」歌であつて、直接に思をのべた歌ではない。これ等は、「人麿歌集」の編纂者や、卷十一・十二の編纂者が、誤つて混じ入れたものと見做すべきである。同時に「寄物陳思歌」の中に、「正述心緒歌」と見るべき作が混入してゐる反對の例も亦ある。要するに「正述心緒」の分類は、表現態度の上から來た進んだ分類法である。（森本）

忠信 「判官物の謠曲」を見よ。

忠度 「平家物の謠曲」を見よ。

忠度 歌人【姓】平【歿年】壽永三年（一八四四）二月。享年四十一。【家系】忠盛の子、清盛の弟【閲歷】左兵衛佐・薩摩守に任じ正四位下に敍した。勢力が人に勝れ源氏の軍と諸所に戰つたが效なく、一門と共に西海に走つた。平家の軍が一ノ谷に敗れて彼も戰死した。當時誰とも知られなかつたのを、箙に結びつけた歌に、「行き暮れて木の下かげを宿とせば花やこよひの主ならまし」とあつたので、忠度と判つたといふ。西海に走つた後、一度京に引返して、深夜俊成を五條の邸に訪れて詠草を託した。俊成は「千載集」に一首だけ、「さゞ波や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな」を入れ、朝敵の故に讀人不知としたといふ話は有名である（平家物語）。【作品】家集「平忠度朝臣集」一卷。群書類從卷二五七所載本、寛文七年刊の「忠度集」、內閣文庫藏の「平忠度詠草」（內題忠度百首）等があるが、何れも同系統にて、春二十・夏十・秋二十・冬十・戀二十・雜二十三（僧人の歌三首）である。但し類從本は戀が二首缺け、奧に「右之本者薩摩守忠度朝臣俊成卿のもとへ遣し侍りし自筆の本を大樹より出され云々」とある。「さゝ波や」の歌は「武家歌合」に故鄉花として春にあり、雜に盛方朝臣書き置きたりける「萬葉集」を返す時の歌がある。勅撰集に入る歌は「千載集」以下凡そ十一首。

【參考】大日本史一四五 ○參考源平盛衰記○平家物語○謠曲忠度（西下）

忠肅 國學者【姓名】野田氏、通稱善兵衛【號】その家を六見樓といふ。【生歿】慶安二年に生れ、享保四年（二三七九）歿す。享年七十一（或は七十二）【墓所】攝津武庫郡入江【學統】初め下河邊長流に從ひ、後契沖に學んだ。契沖との關係は、契沖の萬葉集講義も聽き、契沖の追悼歌も詠んでゐるから相當密接であつたと思はれる。堂上にも出入して歌は竹內惟庸に就いて學んだ。【閲歷】攝津武庫郡入江の相當の素封家に生れたが、遺稿による

と元祿十五年頃亡父相傳の田地を殘らず賣つたとあるから、學問に興味をもつて家產を傾けたのでもあらう。又氣概のある世才に乏しい人物であつたやうである。同十六年には娘も失つた。その著「萬葉集五句類句」は或る人を介して靈元上皇の叡覽に供へ、次に上皇の仰せによつて「三代集類礎」を撰んだと傳へられてゐる。これは竹內惟庸の盡力によつたものであらうか。晩年の述懷として「淵明が田園樂について官を辭して故鄉に歸る。泉郎（忠肅の號）は秋風に蓬を破られ、南江を去つて北京の乞食と成らんとは、天我を捨てめや」等あるのを見ると晩年は悲痛なる境遇であつたらしい。【著作】萬葉集類句十二册（寫）（元祿十一年成。萬葉集の短歌を一句から五句までの類句にしたもの）○萬葉集類礎三册（寫）（元祿十二年成。萬葉集の短歌の結末の字をいろは分にしたもの）○古今五句類礎五册（寫）（帝國圖書館藏）○後撰類礎五册（寫）（同上）○拾遺類礎五册（寫）（同上）○新古今類礎五册（寫）（同上）○新勅撰類礎五册（寫）（同上）○續後撰類礎五册（寫）（同上）（これ等の類礎の組織は各勅撰集の全歌を五道に書き、第一番は第一句の語尾（二字）を伊呂波順に排列して第一句類句となし、第二番は第二句の語尾（二字）を同じく伊呂波順に排列して二句類句を作り、かくして第五句までそれ〳〵に伊呂波順に排列して類句を作つてゐるのである）○萬葉集詞林類葉七册（寫）（竹柏園藏。全體の組織は萬葉集の短歌を春・夏・秋・冬・天・時節・木・草・獸・鳥・魚・蟲・食・衣・居所・雜物・地・天輪・天象・若人等に分ち、更にそれ〳〵を小目に分つて歌を舉げてあるのである。且つ上欄に卷數をあげ、下欄に作者を記してある。即ち萬葉短歌の分類である）○柏傳一册（八雲之秘傳と題署がある。八雲の柏の歌名及びそれ〳〵の證歌があげてあり、その他柏傳秘考として種々の事が記されてある。傳授的傾向が多少見えるのは堂上家に歌を學んだためであらう）。【人物】富家に生れて、若年時代を順境に成長した爲め、世才には乏しかつたやうで、そのためには產をも破つたのであるが、熱情的な氣概のある人物であつた。併し學問上には綿緻な研鑽の痕を殘してゐる所を見ても、相當に綿密な性格ではあつたらしい。要するに學に遊んだ人と見るべきである。【業績】忠肅の業績は「柏傳」の如きもあるが、主としては「萬葉集」及び勅撰和歌集の索引に、力を費した點を認むべきである。それ等の索引が、かなり早い時代にこれほどの成果を示したのは注意すべきである。（久松）

【參考】野田忠肅翁と其詠歌 吉川良秀（みをつくし大正一五ノ三・四・五・六）○野田忠肅のことども 西井大郎（國學院雜誌大正一五ノ五）○契沖傳 久松潜一（契沖全集第九）

忠見 歌人（三十六歌仙の一）【姓名】壬生。幼名、多多。後に忠實・忠見と改む（百人一首一夕話）。【閲歷】忠岑の子である。幼童の時、內裏に召されたが乘物がなくて參る事ができない旨を奏すると、然らば竹馬に乘つて參れと重ねて仰せ下されたので「竹馬は節がちにしていと弱し今夕かげに乘りてまゐらん」の歌に依つて、夕方に參る事を鹿毛に託して奏した（袋草紙三）。天曆八年「延喜の御時躬恒がさぶらひける例にて御厨子所にさぶらはせん」の宣旨を賜つた（歌仙傳、歌苑）。又同十年三月、麗景殿女御の歌合を左右一人でよんだ（袋草紙二）。天德二年攝津大目に任じ（歌仙傳）、同四年の歌合には特に召し上げられた。家集に、「京のたよりなければ津の國に住まんとて行く」「津の國に年比身を沈めて籠りゐたるをそのさきの帝きこしめして召し上げさせ給ひてけり」とあるのはこの時の事で、彼は田舍の裝束のまゝ上つてきた（袋草紙三）。歌合では、「戀すてふ我が名はまだき立ちにけり」が、兼盛の「忍ぶれど色に出にけり我が戀は」に負けたので、それが原因で發病し、兼盛の慰問を受けたが遂に歿したといふ。但し家集にはその後の歌もある（百人一首一夕話）。筑紫・伊豫・播磨に下つた時の歌もある。【作品】家集「忠見集」（別項）。勅撰集に入る歌は後撰一、拾遺凡そ十三、新古今集以下凡そ二十一、合計凡そ三十五首。【歌風】題材の上から見れば、自然の景物を詠んだものが多く、態度から見れば、力強く對象を凝視してゐる作が多い。（西下）

【參考】歌仙傳○袋草紙○大日本史（二二九）○百人一首一夕話○國文學全史平安朝篇

忠見集 歌集 一卷【作者】壬生忠見【諸本】（イ）群書類從卷二六二所載本、（ロ）歌仙歌集本。歌數は、（イ）百九十二首、（ロ）百六十八首、共通のもの凡そ百五十首で順序も異なるから別系統のものであらう。「袋草紙」に引用されてゐるものは、（ロ）の系統本である。【內容】（イ）本は初めに屛風・障子の歌五組五十七首、麗景殿の歌合の歌二十四首を揭げ、然る後各種の歌を載せてゐる。詞書中には、「おほやけより饒ふたつ給へるに」「綱二疋給はせて」「納め殿より夏衣給へるに」「伊豫に下るに由あるうかれ女に」「田舍なる家の燒けたるを」等の如く、生活を露骨に出したものが多い。（忠見參照）（西下）

忠通 歌人・詩人【姓】藤原【法號】圓觀【別號】法性寺入道前關白太政大臣【生歿】永長二年（承德元年）に生れ、長寬二年（一八二四）二月十九日薨ず。享年六十八【家系】父は忠實、母は右大臣顯房の女從二位源師子。弟に賴長あり、子に兼實・慈圓がある。【閲歷】嘉承二年十一歲にて元服、正五位下に敍せられ昇殿を許された。爾來逐年榮進して、鳥羽・崇德・近衛・後白河の四朝に歷仕し、攝政に任ずる事二度、太政大臣に任ずる事二度、從一位に陞り、宣旨によつて氏の長者となり、牛車を聽された。鳥羽天皇御卽位の初め、白河院は忠實の女泰子を以て后とされようと思召されたが、忠實は辭退した。後年泰子は入內したが、保安二年、院は忠實の關白を免じて忠通に命じ給うた。忠通は父が罪を得て免ぜられた執政の職に就く事は不孝であるとし、父の罪を赦された上父子の間に執政授受の儀を行ふ事を乞うて許された。これより彼は、關白・攝政・太政大臣たる事三十年に及んだが、弟賴長は心平かでなく、父忠實も賴長を愛して忠通を疎んじ、久安六年强ひて內覽と氏の長者とを賴長に讓らせた。仁平三年近衛天皇は御眼を煩はせ給うたので、位を後白河院の御子守仁親王に讓らうと思召になり、忠通をして御旨を鳥羽法皇に傳へさせ給うた。法皇は忠通に他意あるものと思召して御採用にならなかつた。然るに賴長の驕慢は日に募り、遂に鳥羽法皇の近侍を辱しめる事があつたので、法皇も賴長を疎んじ忠通を御用ひになつた。久壽二年近衛天皇崩御になり、皇位繼承について法皇は忠通に御下問になつたので、彼は斷然として御年長の後白河天皇を御立て申す事の順當である旨をもつて御答へした。間もなく保元の亂となつて賴長は戰死したので、再び氏の長者となり、忠實が罪に坐して配流されんとするや、子として到底闕に立つ事ができない旨を奏して父の罪が赦された。保元三年關白を辭し、應保二年別業法性寺で出家

して詩歌に自適した。【著作】勅撰集に入る歌は金葉十五、詞花七、千載七、新古今集以下凡そ三十五首、合計見そ六十四首○歌集「田多民治集」。宮內省本は一卷一冊、內題に「田多民治集、法性寺殿忠通公」とある。春夏秋冬戀雜の六部に分け短歌二百三十二首所載。本集に見えないで代々の勅撰集に見える歌が相當にあるから、忠通の全歌集とは思はれないが、部類の整頓してゐる事は類が少い。雜の中に法華經二十八品並に觀普賢經・無量義經をよみ、且つ經文の要旨を附記した歌が三十首あり、その終りに「是は近衞院に法華の心をしへたてまつらんがため云々」とある。最後は月の歌三十五首。代表作「わたの原こぎいでて見れば」は保延元年四月內裏歌合に詠んだものであるが（詞花集）本集にも見える。集の題「田多民治集」はタダミチ集と讀むのであらうが、誰が記したものか不明である。○詩集「法性寺關白御集」一卷（群書類從一三三）。「法性寺入道集」、又は「法性寺集」とも稱せられてゐる。類從本の奧には、「久安元年十二月廿三日云々」と記して、散位親房が奉じて入道中納言に送つた由が見えてゐる。惟ふに自作の集が一卷あつて入道中納言に合點せしめられたものなる事も知られる。內容は類從本によれば詩百二十首を收錄。その中百首は七律で二首は七絕である。五言は全くない。詩風も律體を得てゐるが氣魄が乏しい。○法性寺關白藤忠通公記一卷（歷代殘闕日記に收む）○ 法性寺關白類宴二軸（圖書寮所藏）○楚忽鈔二卷（本朝書籍目錄に見えるが今傳はらない）。その外に、「今鏡」三笠の松に、「白河院にも三卷の詩選びて奉り給ひ云云」とあるがこの詩集は傳はらない。又「其後の君にも唐大和のをかしき言の葉どもをぞ選びつかはさせ給ひける」とある。「新撰朗詠」などはこれ等から直接剽竊せられて成つたのかも知れない。但しこれも傳はらない。又、元永元年・同二年・保安二年、その家に歌合を催し、女房又は殿下として作者となつてゐる。【人物・業績】寬厚恭順、孝悌の道を盡し、事を行ふに仁義に因つた。ただ惜しむところは寬厚に過ぎて、積極的な點と政治家肌の術策のや〻缺ける風の存する點であらう。保元の亂に於ける忠通の行爲は孝悌の道を盡し、又讐に報ゆるに恩を以てしたものであつた。彼は佛教に傾倒して天台・眞言に通じ、詩歌を能くし、書法にも精巧自ら一家を成して法性寺流（別項）と稱せられてゐる。寺社の額も多く書いた。圖書寮にはその類の文字を寫したものが二軸存在する。要するに忠通は人物も學識才藝も共に秀拔であつたが、早く位を極めたので、盈虛を怖れて謙讓する點も多く、ためにその長所も一般に知られないものが少くなかつた。【歌風】彼の歌は平凡で、力強くはないが無理がなく能く整頓してゐる。大體の傾向は「詞花集」の傾向に似てゐる。恐らくは彼は地位からしても、性格からしても平和な歌を詠んだであらうが、彼の趣味が多方面に亙つてゐた事も、彼をして圓滿な歌を詠ましめたであらう。彼は基俊・俊賴の兩人を歌の師とし家の歌合の判者ともし、殊に元永元年の歌合の如きは、基俊・俊賴の兩人をして共に判を加へさせてゐるが、彼の歌風は最も顯季に近いであらう。

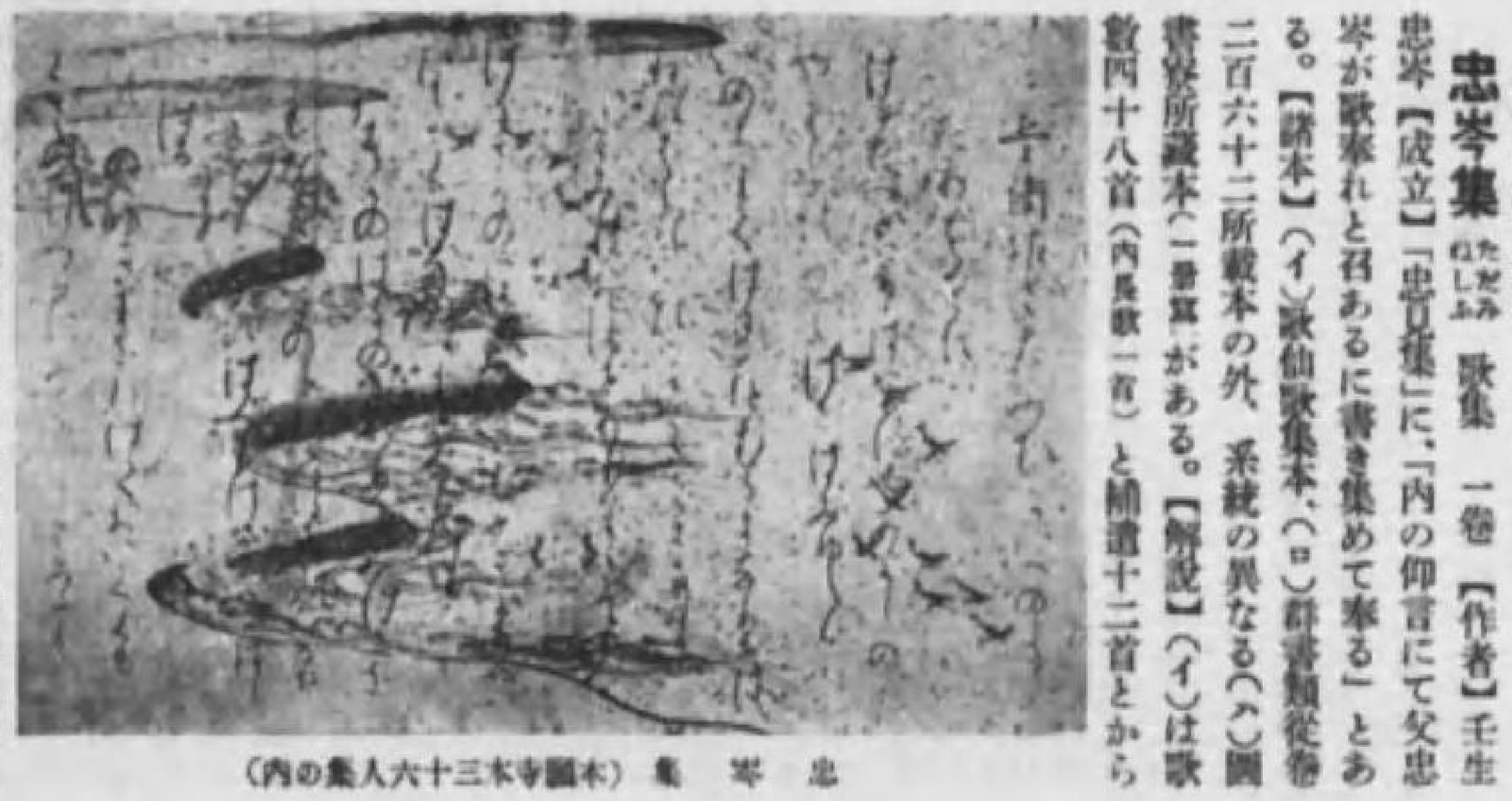
【參考】大日本史一四六○百人一首一夕話○尊卑分脈卷一○公卿補任○公卿傳卷一○保元物語異本卷三○愚管抄卷三○今鏡卷五○本朝無題詩○本朝一人一首卷六○日本詩史卷一○金葉以下新續古今集に至る迄各集○陽明世傳　〔山岸・西下〕

忠岑 ただみね　歌人（三十六歌仙の一）【姓】壬生【家系】安綱の子、忠見の父、女があり（大和物語）姉がある（古今集）。【時代】元慶より延喜。【閱歷】初め右大將定國の隨身であつた。嘗て定國が深夜時平の邸を訪れると、時平は驚いて何處へ行つた歸りかと問うたので忠岑は續松をかざし御階の下に跪き、「鵲のわたせる橋の霜の上を夜半にふみ分け殊更にこそ」と詠んで、主人がわざに訪問してきた旨を告げた。時平は大に悅び、徹夜酒を飲み、忠岑に祿を賜はつた（大和物語）。その後御書所に候し、左近衞番長・右衞門府生・左近將監・御廚子所預・攝津大目に任じ、六位に敍した。夙に陽成院の御使として甲斐に行き、寬平御時后宮歌合・是貞親王家の歌合の作者となり、延喜五年「古今集」撰修の事に與り、六年二月泉大將四十賀の屛風歌を詠み、同年六月日次贄使となり、七年法皇の大井川御幸に供奉して歌を奉り、貫之と同じく序を作つた。この頃旣に老齡であつた。躬恒・伊衡と三人で、問答歌五十一首（新撰集三十八首）を詠み貫之とも二三の贈答歌がある。【著作】家集「忠岑集」（別項）。勅撰集に入る歌は古今三十四（內長歌一首）、後撰十、拾遺十二、その他見そ二十五、合計見そ八十一首○和歌十體。「奧義抄」に引用されて居り、古寫本としては俊成祖父忠家の筆と言はれる卷子本が、安田善次郎氏に藏せられてゐる。九體を擧げ、例歌五首づつ擧げてゐるが、一體は闕けたのであらうか。【批評】歌風は溫和で多少概念的である。後鳥羽上皇が侍臣を召して、「古今集」中の秀歌を御下問になつた時、定家・家隆は共に彼の「有明のつれなく見えし別れより曉ばかりうきものはなし」を以てお答へしたといふ（大日本史）。

【參考】大和物語○大日本史（二二九）　〔西下〕

忠岑十體 ただみねじつてい　「忠岑」を見よ。

忠岑集 ただみねしふ　歌集　一卷【作者】壬生忠岑【成立】「忠見集」に、「內の仰言にて父忠岑が歌奉れと召あるに書き集めて奉る」とある。【諸本】（イ）歌仙歌集本、（ロ）群書類從卷二百六十二所載本の外、系統の異なる（ハ）圖書寮所藏本（一帖）がある。【解說】（イ）は歌數四十八首（內長歌一首）と補遺十二首とから成り、（ロ）は歌數百二十二首（內長歌二首）にて（イ）の四十八首を全部含むが、順序は異なる。（ハ）は歌數百八十四首（內長歌三首）にて、（ロ）と共通なもの凡そ百十八首であるが順序も異なる。この本には延喜七年九月十日大井川行幸和歌に附した序があつて、忠岑も貫之同樣に序を作つた事が分る。又この本には、「躬恒集」一本に見えるやうな忠岑・躬恒・伊衡の問答歌五十一首を一纏めとして揭げてゐる。終は「同じ忠岑の集の歌少きがあるに、又これに入らぬ歌のあるをえりいでて何となく□□□□書き入れたるなり」として十一首の補遺を加へてゐる。（ハ）本は初めに短歌、次に長歌、大井川行幸和歌序及び和歌、問答歌等を揭げ、再び短歌と他本の歌とを載せ、や〻整頓してゐる。これに對し、類從本は集團的な歌がすべて分散してゐる。（忠岑參照）　〔西下〕



忠岑集（本願寺本三十六人集の內）

爛 ただれ　小說【作者】德田秋聲【發表】大正二年三月、國民新聞連載。【刊行】大正二年七月、新潮社。現代日本文學全集（德田秋聲集）所收。

【梗概】お增は淺井に落籍されて家を持つた。淺井には書生の頃から何かと世話になつたお柳といふ女房があつた。お柳は淺井に二つ年上で持病の喘息の上にひどいヒステリーだつた。淺井がお增の方へ泊り勝ちになると持前の性分がだん〱と募つて行つた。お增は本宅に近い麴町に移されたが、そこがお柳に知れて、又赤坂の方へ移らなければならなかつた。淺井はお柳との別れ話を慾の深い田舍の兄貴を相手に金で片をつけてしまつた。お柳は田舍へ引取られて行つた。お柳の手元で育てられてゐたお節といふ貰子がお增の方へ連れられて來た。お增にはその子の馴染まないのが何となく寂しかつた。その少し前からお增の遠緣に當るお今といふ娘が來てゐた。淺井はお柳と別れてから仕事の方を相當勵んでゐたが、花などに託つけて遊びに行く女もあつたし、お今にも危險な好奇心を感じてゐるらしかつた。お增も薄々感付いてゐた。以前から割合に立ち入つた交際をしてゐた誰彼からもその事でお增は注意を受けた。それでも當分は平靜な日が續いた。一度お今が結婚の話で國元の兄から呼び戾され、又歸つて來てからはお增と淺井との間には妙に暗い影が漂ふやうになり、お今と淺井との間にも曖昧な機會が二三度も淺井によつて作られた。お增と淺井とが口喧嘩をする日も度々出來た。お增にはいら〱した日が續くやうになつて、どうかすると每朝お今がすることに決つてゐる淺井のお髭拵へを自分の手一つに引取つてこま〱と立ち働いた。その頃田舍へ引取られてゐるお柳が發狂して死んだといふ知らせが來た。色々と考へた揚句、お增は淺井が歸省してゐる間に辯護士の小林と相談して、お今を小林の妾の身續きへ隱してしまひ、お今を慕つて上京して來てゐる資產家の息子の室といふ靑年と結婚させてしまふやうに仕向けた。結婚の話は比較的順調に進み、淺井も身を入れていろ〱嫁入道具の心配までしてやつた。話が決つてからもお今は、一度お增に內證で淺井と遊びに出た。內祝言の二三日前になつて、お今はそつと淺井に、「私は本當に嫌な氣持がして仕樣がない」と言つて溜息を吐いた。男は仕方がないといふやうに默つてゐた。お今の結婚が決つてから、淺井は一層別な女の所へ入り浸るやうになつてゐた。お今の結婚式の後、夫婦の間には小康が戾つて來たやうに思はれた。

【批評】優れた中篇で、特に愛慾描寫の深刻を稱せられた。作者の爛熟期を示す作である。その渾然たる藝術味に於ては「黴」及び「足迹」（各別項）以上とさへ許される。作者の得意とする中の下、下の上ぐらゐの階級の生活描寫は、こゝにその極致を見せてゐる。　〔加藤〕

太刀奪 たちばひ　能狂言【別名】奪太刀（ばひたち）【解說】或る小名が供を連れて、北野へ參詣に行く。太刀が無いので通りがかりの者の持つてゐるのを冠者に取らせようと、家重代の小刀を貸してやるが、逆に小刀の方を取られてしまふ。そこで歸路を窺つて刀を取り返さうとし、小名が後から抱きつき冠者に縛らせるが、冠者は誤つて主を縛るので、通りがかりの者はうまく逃げ失せるといふ筋。寬正五年の糺河原勸進能の時にも演ぜられた。番組に「馬太刀」とあるのは、「奪太刀」の誤寫である。近年岡村柿紅が「太刀盜人」（大正六年七月、市村座初演）として歌舞伎所作事に利用してゐるが「茶壺」と同樣に、目代を配して作り替へてあるので、原作の結末とは大分違つてゐる。　〔篠田〕

橘の伊豆足が家の集 たちばなのいづたりがいへのしふ　「和田嚴足集」を見よ。

橘守部家集 たちばなもりべかしふ　歌集　三卷【成立】橘守部遺稿詠草を、その七回忌にあたり、遺子冬照が編纂したもの。【刊行】松浦皓侯序、門人中村正富の跋を加へて嘉永七年六月上木。橘守部全集（首卷）及び近代諸家集（國歌大系）所收。【解說】上卷春夏秋部、中卷冬戀雜部、下卷長歌部。歌數、短歌七百餘首、長歌四十數首から成る。作者は有數の古學者であり、特に萬葉研究者である。萬葉研究者の歌は、多く萬葉調なのが普通であるが、守部の歌風は全然異なる。而も彼は堂上歌人乃至鈴の屋派の人に師事したわけでもなくて、三代調に即してゐる點は珍しい。その遺詠は古學者であつた爲めに、皇國讚仰の歌に見るべきものが多い。

日の本つ大き皇國の光よりもうたし人も春やしるらむ
高千穗やあもりましけむ神の代をおもへばとほく霞引く

又次の如き表現上新味のあるものもある。

月あかしうの花しろしほとゝぎす鳴きてきわたる聲もさやけし
いかにして秋野はゆかむ赤駒のありきに花のちらまくをしも

彼の長歌は、短歌に比し、いくらか萬葉調の香味が存する。但し、「苗代」「かきつばた」「待郭公」「立秋」「水鳥」といふ類の題に依つても、彼がいかに「萬葉集」と別の世界を目指してゐたかが諒解される。（守部參照）　〔齋藤（清）〕

立廻り たちまはり　演劇【異稱】たて（殺陣）【解說】すべての芝居の、鬪爭の動きを舞臺化した時、廣く立廻りと稱する。柔道の試合の如く、單に投げたり倒したりする事すら、芝居では立廻りと謂ひ、江戶時代中期からの言葉である。どの座にも立廻りを受持つ師匠番のたて師なる者があつて、それが一應立廻りの順を考へて役者に敎へる。所謂「劍劇」も結局はこの立廻りの新工夫である。たて師は下廻り中の古老で、生來立廻りの巧みな器用者が拔擢せられて、それに當るのが例である。（花四天）常に木や刀の代りに、花の枝を持つて出るのでこの名がある。或る種の立廻りに捕り手として花の枝を持ち、染物の赤い派手な衣裳を着て、「やつ」といつて打つてかゝる連中をいふ。「忠臣藏」の「道行」のおかる勘平の捕り手などがそれである。陽氣な「捕り物」の場にしか出ない。　〔三宅〕

立役 たちやく　演劇【解說】古くは男方の語がある。時に男の役全體を立役といふ事もあ

るが、普通は、主要な男の役で、一狂言の主人公、準主人公を總稱する。女方から見ると立役に違ひないが、老け役・敵役は、立役とはいはぬ。（三宅）

辰岡万作（たつをか まんさく）　脚本作者【本名】未詳【歿年】文化六年（二四六九）九月三日歿。享年六十八。【法名】學海院境詮日課【閱歷】女方役者辰岡久菊の伜で、京都に住んでゐたが、傳によると、立役三桝大五郎の勸めによつて、作者に志したといふ。やがて大阪に下り、安永四年には、奈河龜輔（別項）の下に作名を現はした。以後龜輔の外に當代の新進作家たる並木五瓶（別項）にもついて、作道を修業した。立作者の地位についたのは安永七年であつたが、實際に獨自の筆を揮ふやうになつたのは寛政に入つてからである。主として大阪劇壇のために働き、寛政中、京を掃つて大阪島の內疊屋町に住居を定めたといふ。彼は幕末へかけて、上方作者界に一勢力を持つた辰岡系の祖となつた。有名な作のみを左に列擧する。【作品】（先行曲によるもの）忠孝譽二街（寛政四年九月）○けいせい楊柳櫻（寛政五年正月）○東海道驛路の關札（同年四月）○吉原稲見岡（寛政六年四月）○姉妹達大磯（別項）○艶競石川染（寛政八年四月）○闇矢數四十七本（寛政九年三月）○傾城忍術池（享和元年正月）。（實錄によるもの）けいせい青陽𪀚（別項）○當世寄族揃（寛政六年十二月）。（講釋說話によるもの）けいせい稚山櫻（寛政九年正月）○遠州中山染（同年九月）○[illegible]威谷（寛政十一年八月）等。【作風】右の分類でも知れる通り、何等かの形式に於て劇的成立を經てゐるものを利用し、その性質からいへば、傳記類が大部分を占めてゐる。「[illegible]威谷」の如きは、彼にしては極めて稀な作例である。且つ傳記的性質に限られた結果、所謂世界に於ては、時代を得意とすると解せられる。右の作中、現今まで傳存するものゝある所以も、優れた時代歌舞伎の脚色にあると思はれる。純時代歌舞伎の生命は、先輩並木正三や奈河龜輔等によつて成就せられたのであつたが、時代の趨勢が漸くそれ等の堅實味に一轉向を求めたので、万作は恰もこの機に乘じたのである。彼は、後輩近松德叟（別項）を引立て、或は屢々合作した事もあつた。これは己を知るところであり、事實德叟との合作の部分に、彼の獨作で見られぬ餘裕を示してゐる。早い頃の當り作、「姉妹達大磯」（別項）は、最も具體的にこの點を證明してゐる。脚色の取材選擇について講釋實錄を選んだ態度は、龜輔の末流と見られるが、世話を含めた所に彼の開拓の功がある。而して後世默阿彌に大きな影響を與へた。（守隨）

【參考】辰岡万作が傳 西澤一鳳（伎者作書）○狂言作者概略○近世日本演劇史 伊原敏郎

獺祭書屋俳話（だつさいしよをくはいわ）　俳話【著者】正岡子規【刊行】明治二十六年五月、日本新聞社（日本叢書の一）。初版は、菊判六十九頁の小冊子に過ぎなかつたが、同二十八年八月「歳晩閑話」「歳旦閑話」「獺祭り」「菊の園生」「古人調」「芭蕉雜談」等十餘篇二百十三頁を增補して再版を刊行した。なほ「獺祭書屋俳話正誤」が翌二十九年十月に發表せられ、それを附して第三版を刊行した。後、子規全集第四卷・現代日本文學全集（正岡子規集）・改造文庫（子規俳話）等所收。【內容】子規の著作中初期のもので、彼が日本新聞社入社以前、同紙上に連載したものを多少の補正を加へて一冊に纏めたものである。三十餘篇の俳話から成り、俳諧史・俳諧論・俳人俳句俳書に關する批評等で、子規の俳諧に關する史的研究、俳句に對する見方及び子規の復興俳句の立場やその文學觀等の窺はれるものである。左に目次を示す。

獺祭書屋俳話小序○俳諧といふ名稱○連歌と俳諧○延寶天和貞享の俳風○足利時代より元祿に至る發句○俳書○字餘りの俳句○俳句の前途○新題目○和歌と俳句○寶井其角○嵐雪の古調○服部嵐雪○向井去來○內藤丈草○東花坊支考○志多野坡○武士と俳句○女流と俳句○元祿の四俳女○加賀の千代○時鳥○撥はあの月がないたか時鳥○時鳥の和歌と俳句○初嵐○萩○女郎花○芭蕉○俳諧麓の栞の評○發句作法指南の評等。

【批評】本書は「俳諧大要」と共に、子規が囚はれざる見方を以て俳諧を見直したもので、子規の俳諧に對する新しい史的考察であると共に、俗化し無自覺であつた當時の俳壇に對して覺醒を促したものである。新知識を以てなされた俳諧の史的研究の第一歩として價値が認められ、同時に子規の俳句革新の理論的根柢や、文學として認められなかつた俳句を他の文學と同じ水準にまで引上げた理論的根柢を知らしめる點に於て、文學史上地步を占むべきものである。なほ再版に於て加へられた「芭蕉雜談」は、從來偶像としてのみ信ぜられてその眞正の價値の沒却されてゐた芭蕉を見直して、その眞面目を明かにしたものである。要するに時代が時代であるだけに、研究及び理論として啓蒙的なるを免れぬものではあるが、先覺的な點に於て、同書の價値と意義とがある。（水原・志田）

龍田（たつた）　「神事物の謠曲」を見よ。

殊舞（たつつまひ）　舞踊【解說】たつつまひは、立ちて舞ひ、居て舞ふ舞であるといふ解釋がある。殊は斷であつて、或る時は立ち、しばらくして坐るといふ解釋もある。「日本書紀」顯宗紀に見える上代の舞踊であつて、顯宗天皇が先づ長い室壽の詞を述べ、次に琴に合せて謠はれてからこの舞を舞ひ、あとで、一種の託宣の形式で言葉を發してゐられるところを見ると、この舞は神聖な神がかり式の舞かと思はれる。（小寺）

辰松八郎兵衞（たつまつはちろべゑ）　人形遣【本名】未詳【歿年】享保十九年（二三九四）五月九日江戶に歿す。享年未詳【閱歷】貞享二年竹本座櫓揚の最初より、櫓看板の立者であつた。元藤井伊十郎といひ、天和の頃から人形を遣つたとの說もあるが如何か。創始期の操芝居の悉くは、立役よりは、おやま人形を主とした事、おやま二郎三郎以來の事である。元祿十六年、「曾根崎心中」（別項）以來、彼は有名になつた。このおはつが操の劃時代的であつたことは、甚だ有名な事柄である（操芝居の舞臺參照）。その以前より獅子幻獺乃至は他の方法で、人形を遣ふ八郎兵衞の姿態をも、見物は見ることが出來、而もおやま人形の動きになれて、八郎兵衞の體に女の細態を示さなかつたことが評判となつた。更に寶永二年十一月「用明天皇職人鑑」（別項）の鐘入の段で、出遣を演じ、「近代世事談」（享保十九年刊）に記せる如く、益々名聲が揚ると共に、操史上における第二次の劃期的成功を收めた。かくて興行界の苦勞人河內屋加兵衞に見込まれて、寶永三年、豐竹若太夫の相座本として豐竹座の再興に參加したが、これは全く河內屋の興行政策であつた。正德五年十一月の「國姓爺合戰」（別項）には、又元の竹本座に返り咲いて、三年越しの興行といふ名譽の舞臺を踏してゐる。寶永元年の竹本座で歸文流の「高名大福

銀」では、「手妻人形」（操人形字本所載）を肩書にしてゐるから、山本飛騨掾の元祿末寶永初年にかけては、彼も差込手でなく飛騨の手法を遣つたのかとも想像されるが、正德五年の「國姓爺合戰」では差込手に返つた。かくて享保二三年の頃、江戶に下つて、堺町の半太夫座の枠を求め、辰松座の櫓を揚げた。こゝで興行を續けて享保十九寅年に歿したのである。【門系】彼は「辰松」姓の元祖で、その門葉は京阪江戶に亙り繁昌した。就中、寶永・正德にかけて竹本座に辰松源助・辰松文永・辰松文十郎・辰松友三郎などがあり、豐竹座には辰松小四郎があり、京の嘉太夫芝居には、辰松幸助がゐる。幸助は八郎兵衞の子で、加賀掾の婿であつたといふ。又江戶では二代辰松八郎兵衞滿張が、文化九申年五月九日、六十七歲で歿してゐる。江戶の弟子には、辰松六三・辰松六二・辰松三十郎・辰松六三郎などがある。その門葉が吉田一派の如く傳はらないのは、差込手の手法が、又三郎一派の三人遣の擡頭に壓倒された爲めである。

【參考】近代世事談○近代國文學の研究 向島春三（石割）

龍麿（たつまろ）　國學者【姓名】石塚氏、通稱安右衞門【生歿】明和元年、遠江國敷地郡細田村（靜岡縣周智郡南庄內村鶴和字細田）に生れ、文政六年（二四八三）六月十三日の朝同地に歿す。享年六十。【墓所】松林寺（今廢寺）【閱歷】龍麿は細田村の大庄屋を勤めた石塚司馬右衞門の次男として生れ、後に分家して安右衞門といつた。寛政元年二十六歲にして本居宣長に入門、以後屢々松坂にまで赴いて敎を乞ひ京都・大阪・江戶へも出た。大和・出雲にまで旅行したこともある。【著書】假名遣奧山路（別項）（日本古典全集第三期刊行の內）○古言清濁考三卷（享和元年刊）（以上森）

【國語學上の業績】龍麿は師本居宣長が「古事記」に於ける萬葉假名の用法を精査して、その特質を發見したが、「古事記」以外の文獻についてこれを委しく檢討するに及ばなかつたのを繼承して、廣く上代の諸文獻について研究したのであつて、その成果は「古言清濁考」と「假名遣奧山路」とに發表せられてゐる。卽ち一は清濁音の問題であつて、古代の文獻には、その假名に清濁をわかつて居り、各語に於ける清濁は、後世のと違つたものがある事を確めた。他の一は、同音の假名の中での用法上の相違に關するもので、同音の假名でも、語によつて一定の文字をのみ用ひて、他のものを用ひない事を宣長が見出したのであるが、龍麿は上代の諸文獻について精査した結果、かやうな同音の假名中での用法の別は、或る特殊の語のみに限るのでなく、その假名全體が二種に分れて、語によつて何れの種類のものを用ひるかが定まつてゐるもので、丁度假名遣と同性質のものである事、並にかやうな區別のあるのは、「え」「き」「け」「こ」「そ」「と」「の」「ひ」「へ」「み」「め」「よ」「ろ」の十三音（「古事記」ではなほ「ち」「つ」の二音）の假名で、その他のものはかやうな區別がない事を見出したのである。前者は、當時から反對するものが少くなかつたのであつて、なほ多少疑を容れる餘地があるが、後者は、近頃までその價値を認められなかつたが、實は上代の假名の用法上に於ける大なる發見であつて、上代日本語の音韻組織の問題も、これによつて從來の通說に大改訂を加ふべき必要を生じ、又從來の語源說語釋語法なども、これによつて再吟味を加へなければ用ひがたくなるのであつて、その影響するところ、極めて大である（尤も龍麿はそこまでは自覺してゐなかつたが）。宣長の研究から出發して、かく新生面を開いた龍麿の功は最も大きい。（以上橋本）

【參考】石塚龍麿に就いて 小山正（國語と國文學昭和五ノ七）○國語假名遣研究史上の一發見 橋本進吉（帝國文學二三ノ五）

辰巳巷談（たつみかうだん）　小說【作者】泉鏡花【發表】明治三十一年二月、「新小說」。【刊行】鏡花全集第三卷所收。

【梗概】洲崎の遊女お君は、さる大家の若樣鼎を慕つて、無理算段をして廓を出たが、却つて新造の惡計にかゝり、船頭宗平にさいなまれる身の上となる。鼎は一夜、お君の隱まはれてゐる深川の新造の家を訪ねたが、宗平に氣取られて逃げ歸るところを捕はれ、あはやといふ時、折よく通りかゝつた沖津に助けられ、その家に伴はれる。沖津は實は鼎の生みの親で、鼎の父と別れて後は、小間物行商をして儚い暮しをしてゐる。これが我が子とは心づかず、手引きをしてお君に合はせてゐたが、日を經るに從つて彼が實の子である事が分ると、行末を案じてお君との仲を裂いてしまつた。さうとは知らぬお君は、鼎に操を立てて宗平を愈々嫌ふので、或る夜空しく沖津の家から立ち戾る途中、橋の上で宗平に捉まつて無理心中を迫られ、出刄庖丁で胸を突かれる。其處へ馳せ附けた沖津は、始めて今迄の事情を打明け、同じ薄倖な運命を嘆いて、お君を抱いたまゝ自ら刄に伏し重なつて倒れる。

【解說】初期に見られた作者の現實主義的傾向と、持つて生れた浪漫趣味とが、この時代に至つて始めて渾然融合して作風を確立したものと云へよう。從つて作品も幅を增し、深味を加へて來た。この作品は「通夜物語」（別項）と同じやうに複雜な人生の葛藤を描いてゐるが、悲慘な境遇に沈んでなほ心意氣を失はぬ美しき者の讚美は、作者の天賦なる理想主義の一端と見る事が出來る。（通夜物語參照）【附記】この作は、根本吐芳によつて三幕九場に脚色され、藤澤淺次郎等により明治三十三年六月、東京川上座に上演された。（水上・平松）

辰巳之園（たつみのその）　洒落本　一册【作者】夢中山人寢言先生【名稱】江戶城の東南深川を背景とした書なのでかく名づけた。【刊行】明和七年、安永二年改修再版。【諸本】洒落本代表作集（近代日本文學大系）・洒落本大系第一卷・徳川文藝類聚第五等に收む。【題材】深川の岡場所を題材としたもの。洒落本で深川物の嚆矢である。

【梗概】通人志厚、日本橋茅場町藥師境內の茶店に休んでゐるところへ通人ぶつた武士如雷が來る。如雷は同藩の田舍侍新五左衞門と逢ひ、共に船で深川へ出かける。船中で如雷は盛んに深川の通をならべ、やがて八幡前に着くと小花屋に行く。同じ家に五郎兵衞と云ふ馴染客、大名の勝手用人らしき侍客を招待して來り、男藝者を呼んで賑しく騷ぐ。その隣座敷に例の如雷、何も知らぬ新五左衞門を相手に江戶中の通をひけらかす。ところが彼の相方お長は、馴染の志厚が來たので、そは〳〵として落ちつかぬ。如雷はこゝに地金を現はし怒り出す。船頭の仲裁で漸く收まる。志厚はお長といろ〳〵痴話があり、傍の座敷では同じく男藝者を呼んで騷ぐ。

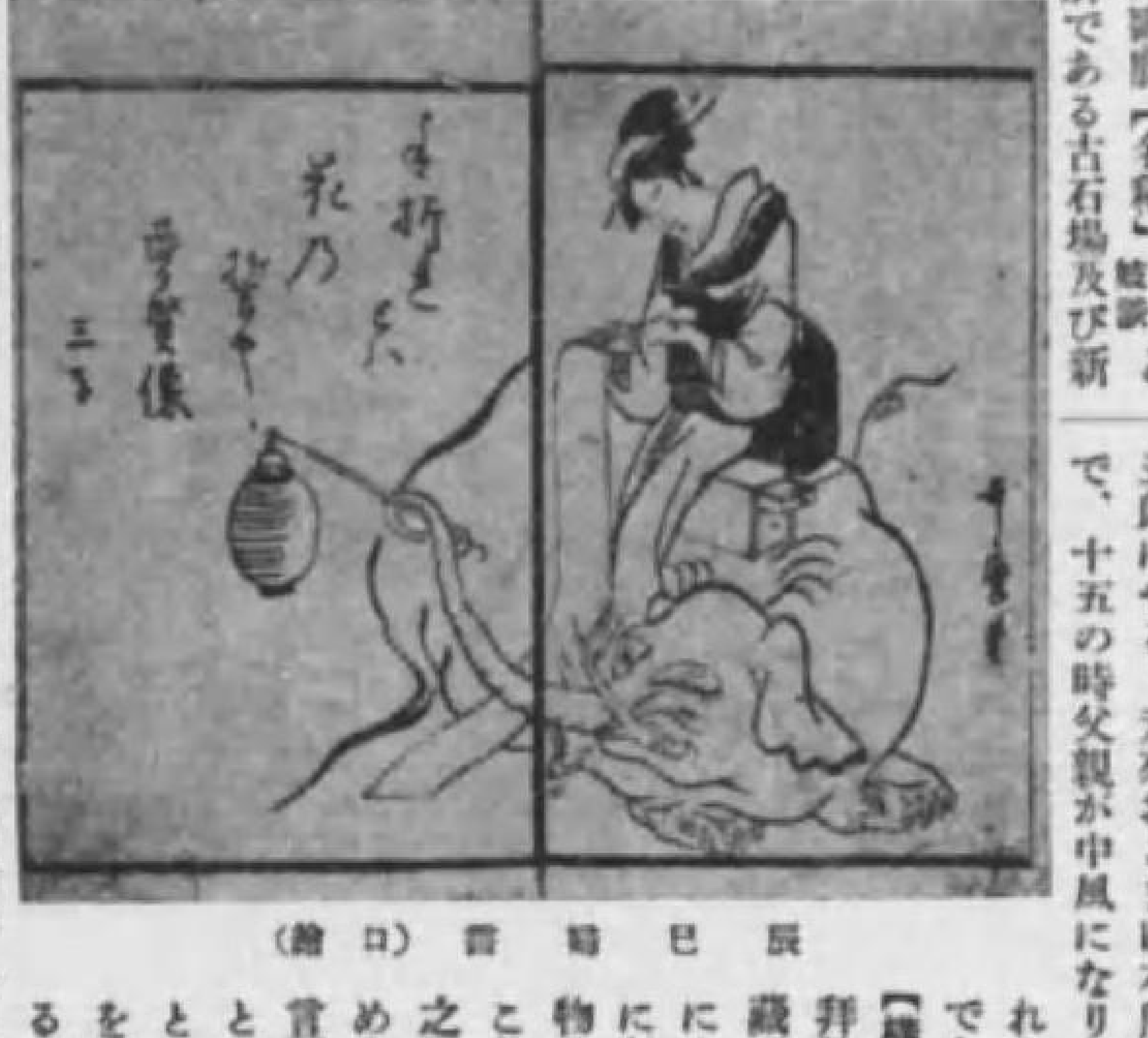
【解說】吉原に劣らず全盛で、しかも吉原ほどの格式氣品のない深川の情調と、客と遊女と

の對話に興味のある書で、半可通が冷遇されるなど洒落本初期の典型的な作品である。特に作者の努力は穿ちにあり、遊里の流行語を取り入れて當時の尖端を切つたものである。卷末に、通語とその說明・由來等を忠實に載せたのは、作者の創作態度を最も能く示してゐる。特に唐音と稱する挾み言葉の用例を文中に示し、卷末に說明してゐるのは、言語學上からも參考になる一文獻と見られてゐる。（山崎）

【參考】洒落本評釋　山崎麓

辰巳婦言 たつみふげん

洒落本　全一册【作者】式亭三馬【畫工】喜多川歌麿【名稱】石場と婦談　深川岡場所である古石場及び新石場を背景としたからである。婦言は口繪に今樣賢者の像がある點から見て、賢者のもぢりであらう。【刊行】自序に戊午春とあるので、寬政十年と推定される。【諸本】三馬傑作集（帝國文庫）・洒落本代表作集（近代日本文學大系）・洒落本大系第八卷所收。【題材】本書は蓬萊山人歸橋作「富賀川拜見」（別項）の構想及び行文をも踏襲用したのである。三人客の狂態中、騷話房香を喋々する醫學生を點出したのは、山東京傳作「繁々千話」（別項）中の客の脫化である。【梗概】鎌倉古市場二川屋の客、酒問屋の番頭藤兵衛は、馴染の遊女おとまに喜之助と云ふ情人ある事を知つて女に對し不服を云ふ。が結局おとまの術中に陷り、腕にある喜之と云ふ彫物を燒き消すことを條件に十兩やる事になつた。鳥居町の若旦那喜之助はおとまの部屋で、自分を突き出せと云ふ文面の手紙を見付け、顏色を變へて怒つたが、おとまのしんみりした辯解、又腕の彫物を消したのも金故起つた義理との說明で、漸く喜之助の心も和いだ。併しおとまには、仕事師の頭で長五郎と云ふ眞實の地色があり、彼の母親が病んで居るのを心配し、藤兵衛から取つた金を皆長五郎にやる。元來おとまは本所の紙屑屋の娘で、十五の時父親が中風になり、こゝに賣られて來てゐるのであつた。



辰巳婦言（口繪）

【構想】「富賀川拜見」では、十藏が遊女おたよに十兩やる代りに伊之の名の彫物を消させる。これを知つた伊之がおたよを責める。おたよは言譯に髮を切ると云ふ客と遊女との手管の魂膽を描いたのである。本書は十藏を藤兵衛、伊之を喜之助、おたよをおとまと替へただけで、作者の創意は更に眞實の情人長五郎を點出した事である。この人名は、「富賀川拜見」に現はれる船頭長五郎を用ひた。要するに爲めになる客、寄いろ、更に裏面に我儘も云へる地色に金を貢ぐと云ふ三樣の書き分けに、作者の得意さが見える。「富賀川拜見」は情調、肝膽の一場面だけで潤色がない。三馬のはこれを細緻したのだとも見られる。【影響】本書の後編を「船頭深話」、また續編を「船頭部屋」（各別項）と云ふ。洒落本の續編は、梅暮里谷峨の「傾城買二筋道」（別項）の續編と相俟つて、人情本に展開する徑路を示してゐる。（山崎）

立烏帽子 たてえぼし

御伽草子　一卷【名稱】女主人公の名に因づ。【成立】室町期か。【諸本】もと繪卷の詞書か。新編御伽草子下卷に收めてある。古い「庭訓抄」の註に文詞少異の同記事がある由、新編御伽草子の開題に見える。【題材】勇者求婚神話の痕跡を殘す怪物退治、特に素神の大蛇退治神話の系統並にそれと關聯した俵藤太傳說とも聯る武勇譚。「田村の草子」（別項）特にその上卷の終と下卷、及び同異本「鈴鹿の草子」の內容とは密接な關係を有し、阿黑王は「吾妻鏡」文治五年十月二十八日の條にも見える坂上田村麿に殺された奧州の賊主惡路王であらうし、又立烏帽子は荻野博士が、杉原本「保元物語」白河殿夜討の條、山田小三郎惟行の名告の詞に、先祖山田莊司行秀が鈴鹿山の立烏帽子を搦め取つたとある、それに出てゐるかとの推定が當つてゐると思はれる。鈴鹿山の盜賊の事は「今昔物語」（卷十九）に載せ、「古今著聞集」（卷十二、偸盜）には「鈴香山の女盜人」とも見えてゐて古くから有名であつたやうである。なほ「玉章」「引妻」等、「竹取物語」式の落語的洒落が注目される。【梗概】中頃、坂上朝臣田村五郎利成と云ふ者があつた。近江國鈴鹿山に棲んで行人を惱ます大化生の女盜立烏帽子追討の宣旨を蒙り發向したが、女賊は大池の中の蓬萊・方丈・瀛洲の三島に殿舍を構へ、船橋も絕えて無く、近づく術を知らず徒に歲月を經るうち、一計を案じて蟇目の矢文を射込むと、彼方からも射返す事度重なつた。立烏帽子の夫は陸奧國まりはた山の阿黑王（あくろ）と云ふ鬼であつたが、急に厭はしくなつたか或る時小島に文を銜へさせて田村の前に落させ、夫阿黑王を殺せば勅命にも從ひ御身にも契らうと言ひ送つた。田村は阿黑を惧り、蟇目で文通を續けてゐたが、鈴鹿の御前と呼ばれるこの立烏帽子には、仁鬪玉と云ふ奇代の寶があり、思ふ事を言ひ含めれば飛んで行つて傳達する通力のある明珠で、或る時この玉が飛來して、明崎島の面に出て阿黑王が御水を眺めるのを射殺せと利成に告げてよこした。その聲小蟲の鳴くやうで、これから忍びやかな事を玉章と言ひ慣はしたと云ふ。三度禮拜して玉を戴いた田村は、翌朝阿黑王が八つの頭に數眼を具へ、五色の體をした鬼の姿で、立烏帽子以下多くの采女を從へて池の汀に現れたのを竊み見て、角の弓に神通の鏑矢をつがへて放つと、矢は阿黑の肝を射通した。立烏帽子は田村を迎へ入れて夫婦の契を結び、その後太神宮參詣者も內裏への貢物獻上も安全になつた。鈴鹿を語らひ寄せるために田村が巧み出した矢だからとて、世に引妻と云ふさうである。

【參考】新編御伽草子開題○近古小說解題（田村の草子の項）○鈴鹿の山賊と田村將軍鬼退治の傳說　大西源一（參文大正一五ノ七）（島津）

伊達髮五人男 だてがみごにんをとこ

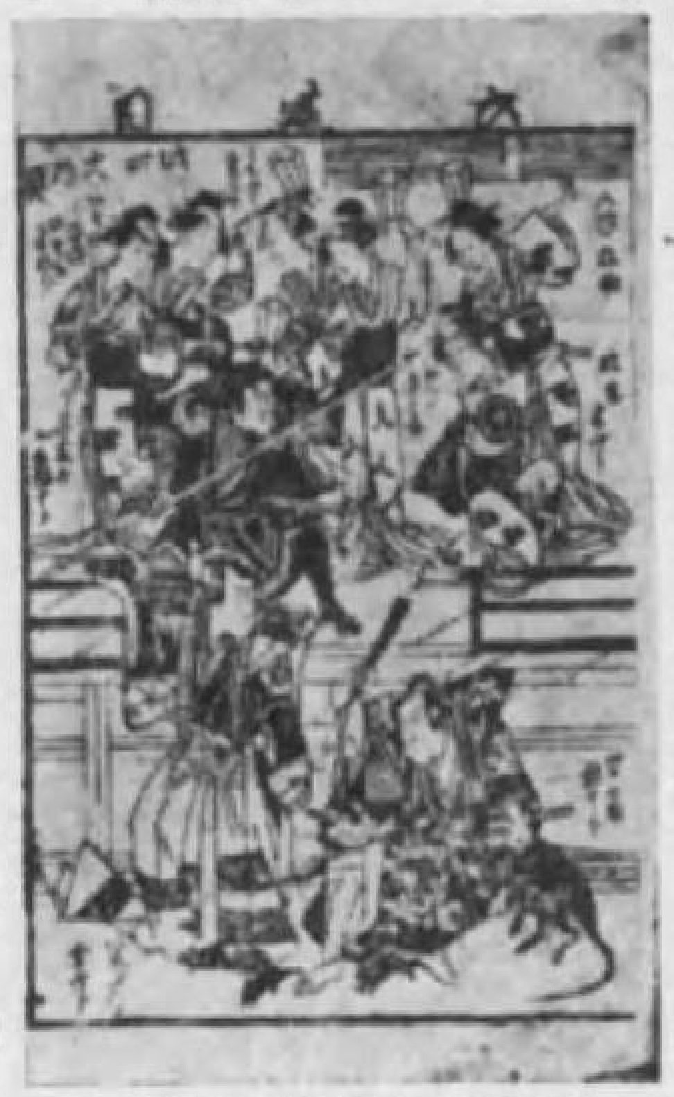
浮世草子　五册【作者】西澤一風【刊行】寶永四年京菊屋板【諸本】浮世草子集（近代日本文學大系）所收【解說】虎狼の如く、蛇蝎の如く世人に

惡まれた末、元祿十五年八年二十六日死罪獄門の刑に處せられた所謂五人男の雁金文七・極印千右衞門・庵の平兵衞・神鳴庄九郎・ほての市右衞門の事を材に取つたものである。この五人の事は、「元祿寶永珍話」「西澤文庫傳奇作書」「御色條鋒」等に見えてゐる。なほこの事件は、淨瑠璃・歌舞伎にも取扱はれてゐる。淨瑠璃には、文彌座の「雁金文七秋の霜」が最も古く、次に宇治加賀掾の「難波五人男」、竹本座の「雁金文七」等がある。それから竹田出雲の作の「男作五雁金」が最も有名である。歌舞伎では、名左衞門座で、染川十郎兵衞・荻野澤之丞等の所演が最も古いであらう。小說では本作は最も古いものである。文七と妓瀧川との關係を中心にして、五人の狼藉、瀧川が文七の身を心配して誡める實意、文七の母の母性愛等が書かれてある。而してこれを瀧川が三十三所觀音巡りの途に於ける夢中の懺悔話としたのは、例の一風の外面的な意匠を凝らしたものであり、なほ卷頭にかりがね文七三かつぶしを、音譜を附して載せてゐるのも、「御前義經記」（別項）などに見えてゐる一風が一種の意匠であらう。作品としては平凡なものである。（雁金文七秋の霜參照）（藤村）

伊達狂言 だてきやうげん　「先代萩」を見よ。

伊達競阿國戲場 だてくらべおくにかぶき

淨瑠璃十段　御家物【作者】達田辨二・吉田鬼眼・烏亭焉馬【初演】安永八年三月二十一日より江戸肥前座。正本の刊行は同年正月一日【諸本】江戸作者淨瑠璃集（續帝國文庫）所收。【由來・題材】前年七月中村座に興行された「伊達競阿國戲場」が好評であつたので、外題そのまゝ院本に改作したのである。（黑木勘藏）【梗概】〔第一〕落成した金閣寺で管領山名宗全と板桐志妻が、將軍義滿の弟賴兼の放埒を罵るのを、仁木彈正左衞門が反駁したが、管領細川勝元に制止される。〔第二〕島原三浦屋の高雄を相手に賴兼の遊興。逆心ある伯父大江國守鬼行（くにのかみおにつら）が高雄を身請しようと惡計を廻らすのを、賴兼に從ふ力士絹川谷藏が妨げる。仁木彈正は豫め妻冀藤を派したが更に自ら來つて賴兼のために高雄を身請する。これは仁木の策である。〔第三〕絹川は國家主君のためを思つて高尾を殺しその怨恨を受ける。〔第四〕等持院に押込められた賴兼が、絹川を供に島原通ひの途上を、鬼行の臣黑澤官藏等が襲つたが、絹川が引受け賴兼を先に落し官藏等を殺す。〔第五〕南禪寺門前の豆腐屋三ぶの許に絹川は匿まはれたが、高雄が三ぶの妹であつたのを知つて驚く。高雄の妹累はかねて見染めた絹川の來たのを悅ぶので、三ぶが粹をきかして二人を契らせる。絹川は遂に自ら名乘り、高雄を殺した實情を訴へるので、三ぶも聞き入れ累と配はす事にしたが、高雄の怨靈のため美貌の累は忽ち惡女となる。絹川はそれを知らぬ累を伴ひ、故鄕下總へ落ちる。〔第六〕大江鬼行は板桐志妻等と共に錄若君呪詛を計り、祇園社頭で仁木の娘河内と井筒女之助の色模樣を見附けて責めたが、仁木がこれを追拂ひ、志妻に大望を語る。錄若の乳人月岡（女之助の姉）に、志妻は濡れかゝつて失敗する。〔第七〕忠臣荒獅子男之助は、仁木の賴みで鼠に扮し、錄若を呪詛する修驗者貴鼠院を追ふ。月岡は男之助・女之助と共に錄若を守護し、膳部の毒を發見する。仁木は娘河内に妻冀藤を添へて女之助方に嫁入させ、小柄を贈つて大望の味方に附けようとしたが、女之助は父外記左衞門の心を察して切腹し、河内も自害する。仁木惡心の證據の箱が現はれたので、外記左衞門はこれを持つて上館へ急ぐ。〔第八〕絹川は累を伴ひ故鄕の下總埴生村に歸り、與右衞門と名乘つてゐたが、賴兼の許嫁歌方姬が尋ね下つて來たのを知り、これを迎へるための百兩の調達に苦勞する。累は自分の容貌の變つたのを知らぬから、尋ねて來た吉原の女郎屋に身を賣らうとし、初めて鏡を見せられて驚き、夫への申譯に投身しようと家を出る。〔第九〕累は歌方姬を夫の情婦と誤解して嫉妬のあまり狂ひまはるので、與右衞門が說明しても、高雄の執念の附いた累は聞かず、姬を切るので、與右衞門は累を鎌で殺す。姬は祐天の六字の名號で恙なかつたので、折から出逢つた三ぶにこれを託し、與右衞門は累の首を姬の身替りに代官所へ持參する。〔第十〕山名宗全の館で、仁木彈正・井筒外記左衞門兩人の訴訟對決がある。山名が仁木を贔屓の結果、井筒方は不利となつたが、細川勝元の出場により仁木方の惡事判明、井筒は自害したが仁木も亡び、又男之助によつて鬼行等も亡ぼされる。



伊達競阿國戲場（繪本番附）

【構想】本作の直接典據となつた前年興行の歌舞伎「伊達競阿國戲場」の脚本が傳はつてゐないので、確實には言ひ難いが大差あるまいと思はれる。文化五年三月市村座での再演臺本と本作を比較するに、大體の仕組み筋立ては、大なる違ひがない（再演臺本中敵興の鼠變きは「伽羅先代萩」（別項）から取つたもの）。即ち右再演臺本の序幕島原西川屋の場は、本作二段目の島原の段、高雄殺しの場は三段目に當り、二幕目伏見京橋の場、三幕目豆腐屋の場は、それ〴〵本作の四・五段目に當る。又、四幕目井筒外記屋敷の場は七段目の末に、六幕目決斷所は十段目、七幕目寶藏寺堤から八幕目與右衞門內、大詰鬼怒川の場は八・九段目に當るのであるが、全體として歌舞伎風であるのは當然である。【影響】「累」「伽羅先代萩」「先代萩」の各項參照。【參考】近世邦樂年表（義太夫節之部）○日本戲曲全集第十六卷解說（増田）

立三味線 たてさみせん

【解說】淨瑠璃や唄に伴ふ三味線を二人乃至三人四人で彈く場合、主なる三味線を「立三味線」その他を「ツレ」と稱するのが今日の一般稱呼で、「立三味線」といふ言葉は、標準語の如くに通用するが、義太夫節では、「立三味線」とは言はない。「立三味線」とは、主として江戸系統、關東の語で、義太夫節にあつては、主なる主席の責任の三味線を「芯の三味線」或は「三味線の芯」といふ。二人以上の場合は、「シン」の三味線以外「ツレ三味線」といひ、二枚目三枚目、それ以下を「豆喰ひ」といふ。普通は、太夫一人に三味線一人が原則。景事・節事に、三人以上の三味線を用ひ、又太夫が掛合の場合も、太夫だけの數の

三味線を用ひるが、これは別形式。二人以上の三味線を用ひる場合芯に對して連の言葉が生ずる。これは床における一段の語り場の三味線の名稱で、一座の三味線群に對しては、その一座の主席の三味線彈を「三味線紋下」といふ。「紋下」或は「櫓下」は同意義で、番付にある座本の紋の下に名を連ぬる一座のその業の責任者といふ意味から生れた言葉で、「櫓下」とは、同じく芝居の櫓の下に名を連ねる義である。併し三味線に「紋下」といふ位置が確保されたのは、明治十六年四月松島文樂座興行が初めで、それまでは人形淨瑠璃三業、即ち太夫・三味線・人形の內、三味線彈は太夫の女房役として獨立の位置がなく、太夫の支配下にあつた。この初代の「三味線紋下」は豐澤團平（別項）であつた。元來三味線彈は淨瑠璃の伴奏に過ぎず、義太夫節創始の當時は、殆ど世間的にも認められず、芝居番付或は招木看板に三味線彈の名を連ぬるに至つたのは、後世の延享元年以來、竹本播磨少掾歿後の事で、淨瑠璃義太夫節の三味線の始祖竹澤權右衛門の如きも、番付面には位置がなかつた。尤も淨瑠璃一篇中の景事・節事の場合には、太夫の傍に小さく僅かに三味線彈の署名を見るだけであつたが、この古番付は三味線彈の昔の位置を明示してゐる。（石割）

楯節儛（たてふしのまひ）　舞踊　【解說】武裝した武人が楯を持つて舞ひ、楯を伏せる型が眼目であるため、この名がある。楯臥舞・楯伏舞とも書く。持統天皇二年十一月、先帝の大葬の時、殯宮に於てこの舞を奏した。王者を葬ふための葬禮舞踊の一つで、楯を伏せるのは、死を意味するのであらう。後に天平勝寶四年の大佛開眼供養の時、他の歌舞と共に行はれたが、それは佛事供養の意味を含めての事であらう。（小寺）

伊達娘戀緋鹿子（だてむすめこひのひがのこ）　「八百屋お七」を見よ。

他動詞（たどうし）　「動詞」を見よ。

田中王堂（たなかわうだう）　評論家　【本名】喜一　【生歿】慶應三年東京に生れ、昭和七年五月九日歿す。享年六十六　【閲歷】十七歳、米國に留學した。評論家哲學者として嶄然頭角を現はしたのは、明治四十四年に出した「書齋より街頭に」及びその翌年の「哲人主義」（別項）を以てであつた。彼は哲學者であり哲學的の教養を有つてゐるが、從來の哲學者が單に書齋裡にあつて瞑想的の思想を構成してゐたに反し、彼は動的に街頭に立つて直ちに現實社會の時事問題を論評しようとした。彼は經濟學政治學の教養を有つてゐる。そして彼の時事的評論には、その經濟哲學的の立場が現はれて來る。我が國に於ける經濟哲學は、後に左右田喜一郎がこれを新しく建設したが、眞實にはその見地は既に早く王堂によつて樹てられてゐたので、彼の卓識は明治評論壇に特記せらるべきものであつた。所謂文明批評社會評論は、全く彼によつて建設せられた部分が多かつた。爾來明治・大正・昭和を通じ、彼は評論壇の元老として活動した。初め東京高等工業に、後早稻田大學・立教大學等に教鞭を執つた。併しとにかく彼の生活は、民間にあつて獨立の評論家として立つところに特殊の風貌を生ぜしめるものである。【著作】書齋より街頭に○哲人主義　○我が非哲學　○解放の信條○改造の試み等。（土田）

田中義廉（たなかよしかど）　國語學者　【生歿】未詳。【閲歷】信濃國飯田の人で、有名な博物學者男爵田中芳男（天保九年生れ、大正五年歿）の弟である。早く洋學を學び、殊に英語に通じてゐた。明治の初年、家塾を開いてゐたが、次いで文部省に入り、文部卿大木喬任の命により、大槻修二・久保吉人・小澤圭次郎等と共に、明治五年七月、「新撰字書」を編纂し、又小學讀本の編纂もした。「新撰字書」は漢字制限の目的を以て編纂したものである。後、東京師範學校に教鞭を執つてゐた。【業績】義廉は明治七年に「小學日本文典」（別項）を著はした。本書は、字學・詞學及び文章學の三篇から成立する豫定であつたが、公刊せられたのは字學及び詞學の部だけであつた。西洋文典、殊に英文典を模して編んだものであつて、西洋文典風の日本文典としては、明治時代に於て最初のものである。不備や誤謬は少くないが、その時代としては頗る整つた組織を有するもので、一時廣く行はれ、爾後の文典に少からぬ影響を與へたものである。この書に次いで「日本小文典」（一冊、明治十年十月刊）を著はした。この書は前の「小學日本文典」を、更に簡單にしたものであるが、字學・詞學・文章學の三部が揃つてゐる。この外に「日本文典外篇」「日本大文典」等を著はす豫定であつたが、それ等は出版に至らなかつた。（龜田）

棚さがし（たなさがし）　「俳諧棚さがし」を見よ。

たなばた　御伽草子　二卷　【別名】七夕の本地。七夕さうし。【諸本】古板本は明曆元年板・元祿十六年板（林正五郎板）・松會開板本等。【解說】「あめわかひこ物語」（別項）の異本。恐らくその改作であらう。彼の頭中將がこれに頭中納言、彼の一條萬里小路がこれに一條堀川とある外、多少異同があり、文章も俗化してゐる。內容は殆ど同じ。（あめわかひこ物語參照）（島津）

たなばた　御伽草子　二卷　【解說】「天稚彥物語」（別項）の異本。前揭同名の書とは別。いづれも原名が類似し、且ついづれも七夕の由來に關するといふところから、兩者とも「たなばた」の題名を與へられるやうになつて、互に頗る紛らはしくなつてゐる。（天稚彥物語參照）（島津）

七夕さうし（たなばたさうし）　「たなばた」を見よ。

七夕の本地（たなばたのほんぢ）　「たなばた」を見よ。

七夕の由來（たなばたのゆらい）　「天稚彥物語」を見よ。

棚機姬神（たなばたひめのかみ）　「天棚機姬神」を見よ。

田邊花圃（たなべくわほ）　「三宅花圃」を見よ。

谷行（たにかう）　「鬼神物の謠曲」を見よ。

谷崎潤一郎

谷崎潤一郎（たにざきじゆんいちらう）　小說家・劇作家　【閲歷】明治十九年七月二十四日東京市日本橋區蠣殼町二丁目十四番地に生れた。家業は商業であつたが、少年時代から好んで文學に親しみ、父が事業に失敗したので、一時修學を絕つの已むなきに至つたこともあつたが、周圍の人達の斡旋で辛うじて廢學の難を免れた。東京府立第一中學校を經て明治三十八年第一高等學校英法科に入學、後、文學で立たうと決意し、同四十年同校英文科に轉じた。翌年卒業、直に東京帝國大學國文科に入つたが、同四十二年九月退學し、同好の人達と「新思潮」（別項）を創刊した。その誌上に「刺靑」（明治四十二年）（別項）・「麒麟」（四十二年）等を、「スバル」に「信西」（四十二年）・「少年」（四十三年）を發表するや、忽ちにして文壇の視聽を集め、異色ある新進作家として華々しい出世振りを示した。時恰も新浪漫主義擡頭の時機に會し、その潮に乘じて大正五・六年頃までに、「颱風」（四十三年）・「秘密」（四十三年）、「惡魔」（四十五年）・「捨てられるまで」（大正三年）、「饒太郎」（三年）、「お艶殺し」（四年）（別項）、「お才と巳之介」（四年）、「神童」（五年）、「病蓐の幻想」（五年）、「人魚の嘆き」（六年）、その他の小說及び「恐怖時代」（五年）、「十五夜物語」（六年）等の戲曲をも作つて益々その特色を發揮し、中堅作家としての地步を占めた。以來發表した作品の數頗る多く、逐年進展の跡を示し、やがて自然主義以後の逸才として大正期の文壇に最も異彩ある獨特の地位を確立するに至つた。その間、大正四年五月石川千代子と結婚し、同九年には大正活映株式會社脚本部顧問となつて「アマチュア倶樂部」「葛飾砂子」「雛祭りの夜」「蛇性の婬」等の映畫を作つたが、翌年末同社と關係を絕つて後二三年間は、特に戲曲界に活躍して、「愛すればこそ」（大正十年）、「お國と五平」（十一年）（以上別項）、「本牧夜話」（十一年）、「白狐の湯」（十二年）、「愛なき人々」（十二年）、「無明と愛染」（十三年）等の力作を發表し、國民文藝會から表彰された。又それより前、大正八年、幼時から住み慣れた東京の地を離れ、小田原・横濱等に一時轉住し、更に大正十二年關東大震災以後は、關西に居を移した。なほ大正七年と同十五年の兩度支那に遊んだ。その後も、「蓼喰ふ虫」（昭和四年）、「盲目物語」（六年）等の力作を發表した。昭和五年八月、佐藤春夫との間に、所謂細君讓渡事件を起して世間を驚かしたが、翌年四月、古川丁未子と結婚した。

【著作】上記の外、主な小說としては「魔術師」（大正六年）、「異端者の悲しみ」（同六年）、「ハツサン・カンの妖術」（六年）、「兄弟」（七年）、「人面疽」（七年）、「二人の稚兒」（七年）、「金と銀」（七年）、「秦淮の夜」（八年）、「呪はれた戲曲」（八年）、「富美子の足」（八年）、「或る少年の怯れ」（八年）、「AとBの話」（十年）、「アヹ・マリア」（十二年）、「二月堂の夕」（十四年）等があり、長篇としては、「赤い屋根」（十四年）、「鬼の面」（大正五年）、「女人神聖」（七年）、「鮫人」（九年）、「神と人との間」（十二年）、「肉塊」（十二年）、「痴人の愛」（十四年）（別項）、「友田と松永の話」（十五年）、「黑白」（昭和三年）、「卍（まんじ）」（昭和三年より）、「亂菊物語」（五年）その他がある。又短篇集としては、「刺靑」「人魚の嘆き」「惡魔」「異端者の悲しみ」「金と銀」「AとBの話」「近代情痴集」。戲曲集「法成寺物語」等があり、その他の選集として「潤一郎傑作集」「谷崎潤一郎集」等があり、別に谷崎潤一郎全集十二卷（改造社版）がある。なほ右の外、「饒舌錄」「倚松庵隨筆」、その他の感想・評論がある。

【作風】作者は、その本質に於てロマンチストであり、好みに於て徹底的なデカダンで、都會人としての洗練された趣味と、近代人としての頽廢した氣分とを併せもつてゐる。これ等はそのまゝ彼の文學に反映してゐるが、その根本的な特色は人生を藝術化さうとする態度にあつた。卽ち彼は耽美派の作家として專ら官能の世界に沈湎してゐるが、しかもその官能たるや爛熟した病的なもので、その間に異常な現象を漁り、强烈な刺戟を求め、以て特異の官能美を描き出してゐる。これは彼の主要な特徵で、「刺靑」（別項）等その尤なるものであるが、浮世繪から脫け出したやうな若い女性の足の、匂やかな魅力を語つてゐる「富美子の足」や、橫濱の外人街を背景に異國人の白肌の美しさを述べてゐる「アヹ・マリア」の如きは、より精細に、且つ肉感的な筆致が躍如になつてゐる。同時に病的官能の飽くことなき追求は、作者を驅つて變態性慾の諸相をも好んで取扱はしめてゐる。女に愚弄されながらも却つてそれを悅び、女の鼻汁を舐めて秘かに快感を味つたりする變質者の官能生活を描いた「惡魔」、或る男が愛人を自分に對して暴君的に振舞はせようと仕向け、それが成功した爲めに、捨てられてゆく經緯を敍した「捨てられるまで」、女から虐使され度いために美しい娼を傭ひ、强ひて慘酷な鞭を當ててもらふ性慾倒錯者を主人公とした「饒太郎」等は、變態性慾物の典型で、何れも極端なマゾヒズムへの耽溺を寫してゐる。又頹廢の中に强烈な刺戟を求める傾向は、一方に於て所謂惡の華を讚美し、腐敗の中に新美を見出すと共に、毒婦型の女性や、不良性を帶びた靑少年等を好んで取扱つてゐる。前者では江戶の爛熟した情調の中に美しき者、强き者の勝利を謳つた「お才と巳之介」「お艶殺し」（別項）等が著名であるし、後者にも淺草公園の裏面に取材して樂屋に出入する人々を中心とした「鮫人」等にその一例が認められる。更に異常な事件に强い興味を抱く作者は、一面に於て怪異な幻想を弄び、「人魚の嘆き」「魔術師」「ハッサン・カンの妖術」「人面疽」の如き作を書き、摩訶不思議の世界を夢みると共に、他面に於ては人間心理の偏倚を探り、對人關係の奇異を描出してゐる。それ〳〵金と銀にも喩ふべき資質を有する二人の洋畫家の藝術上に於ける怖るべき心的葛藤を語る「金と銀」、殺人者として兄を疑ひ絕えず自ら戰き怯えてゐる少年の慘らしい不安を敍した「或る少年の怯れ」、惡と善と全く相反した二つの性格の物凄いまでの相剋の姿を暴いて、人間性の深處に觸れた「AとBの話」、友の妻を奪つた男と、彼の女を友に與へた男と、彼等の間に潛む奇怪な三角關係を描く「神と人との間」、或る有閑夫人を繞る遊戲的な變態戀愛の複雜した事相を綴り、彼女自身をして詳細に關西辯で語らせてゐる「卍（まんじ）」、いづれも常規を絕した世界の諸相である。それからこの作家の作には、「秘密」「友田と松永の話」「日本に於けるクリツプン事件」「黑白」等の如く探偵趣味の濃厚なもの、「少年」「神童」「兄弟」「二人の稚兒」の如く現實がそのまゝ夢幻と重なり合ふ少年の世界に取材したもの等が眼につくが、これ等も不可思議の領域を追ひ、夢幻境の詩美に憧れるところから來てゐるので、過去を描いても單なる追憶に終ることは殆どない。德川期や王朝時代に屢々取材するのも一特色であるが、彼は寧ろそれ等を近代化した未知の國として取扱つてゐる。それであるから外國を舞臺とし、異國の情調を背景とした作は勿論であるが、その他の作でも、彼のものには一般に幻想美の豐かな異國的な香氣が漂つてゐる。以上の如くその文學は、妖艷と怪奇と頹廢の夢幻的な交錯の中に、絢爛な姿態を發揮した耽美的・官能的色彩の濃厚熾烈なもので、この傾きは、耽美的なオスカア・ワイルド、怪奇的なエドガア・アラン・ポオ、惡の華を歌つたボオドレエル等の文學の影響を承けた前期に殊に顯著である。所謂惡魔主義（別項）と呼ばれた

時代で、當時の作には詩藝と作爲の跡が窺はれる。音や色の感覺にまで交響する藝術感の幻覺を記した「病蓐の幻想」等、その適例である。と同時に、智巧に走り過ぎる傾きのあるのも認められる。現實と空想の薄氣味惡い交錯に着想し、或る劇作家が作品の世界に託して、その妻を暗殺する事件を仕組んだ「呪はれた戲曲」等に、その一例が求められる。それが後期になると、遙かに落着きと自然さを生じ、風格の大を加へて來た。盲人の口を通して戰國時代の表裏を語らせてゐる「盲目物語」は、その尤なるものである。これを通じて見るに豐かな想像力と多面的な才氣と鋭い官能の働きと優れた構想力とによつて、強い個性を通して打ち出された精力的な文學で、その文章も亦その內容にふさはしく、瑰麗な辭句の間に放膽な筆勢が縱れ、而も獨特のねばり強さを持してゐる。かくの如き種々の特色は、その戲曲作品に就いても同樣であるが、唯美主義（別項）の立場に據つて近代の情痴を詩化した彼の小說の代表作としては、「痴人の愛」（別項）を擧げる事が出來る。戲曲家としての潤一郞は小說家大谷崎には遙かに及ばぬものではあるが、「愛すればこそ」（別項）を始めに、大正十一年から十三年にかけて、「お國と五平」（別項）「永遠の偶像」「本牧夜話」「白狐の湯」「愛なき人々」「無明と愛染」「腕角力」「マンドリンを彈く男」等を續續的に發表して、彼の戲曲時代を現出し、これ等は殆ど何れも上演せられ、文壇劇壇の好評を博したエポックの作であつた。由來、當時に於ける日本の戲曲は、常に小說よりも一歩遲れてをり、從つて彼の戲曲時代が我が戲曲界に投じた波紋も、決して小さいものではなかつた。當時問題劇・主題劇・自然主義劇、或は曖昧なる史劇の榮えた我が劇界に、心理劇の曙光を投じ、詩・象徵・超現實・新感覺・主觀・情緒・怪美の諸要素を齎らしたのは、彼の戲曲の大なる役割であつた。又大正末期の戲曲全盛時代を招來するに與つて力あつたことも認めなければならない。表立たぬとはいふものの、その影響は甚だ大なるものがあつた。【史的地位】明治末から大正へかけてその芳烈妖異な文學を展開し、下り坂に向つた自然主義の平板單調を打破した異數の作家として、又日本の文壇に比類のない耽美主義の旗幟を飜した最もユニイクな作家として、近代文學に重きをなす特異の地位を占めてゐる。【影響】新浪漫主義の大立物ではあつたが、その作風が餘りにも獨自偏奇なものであつただけ、思潮の上に於て隱約の間に脈絡あるものは少くないが、影響といふ程のものは、大正期の藝術派的傾向を含む作家達の一部に、部分的な僅かなものが認められる位のものである。（稻垣・角種）

【參考】饒舌錄（谷崎潤一郎）○倚松庵隨筆（同上）

谷崎精二（たにざき せいじ）　小說家【閱歷】明治二十三年十二月十九日東京日本橋に生れた。谷崎潤一郎の弟。早稻田大學文學部英文學科に入り、廣津和郎等の同期生として島村抱月・相馬御風等の指導をうけた。大正二年早大を卒業、間もなく同大學文學部講師となり、後、更に教授となつたが、作家としての生涯は、大正元年廣津和郎・相馬泰三・葛西善藏等の同人雜誌「奇蹟」の刊行された時、その同人となつた時に始まる。【著作】單行本には、短篇集「生と死の愛」「蒼き夜と空」「地に頰つけて」「靜かなる世界」「線路の上」「或る姉妹」「美しき人」「水のほとり」。長・中篇小說「離合」「結婚期」「戀愛損傷者」「歡樂の門」「別室」「誘惑」「明暗の街」「大空の下」「火を繞ふ」などがある。別に飜譯「先驅者」（メレジュコフスキイ）、「赤き死の假面」（ポオ）、「タイス」（アナトォル・フランス）、「女の一生」（モウパスサン）その他がある。【作風】上品に落着いた、言はば極めて御行儀のいい作風である。破綻も少い代りに、何時も定石通りといふ感じで面白味にも乏しい。（片岡）

田螺金魚（たにし きんぎよ）　洒落本作家【本名】未詳【別號】田水金魚、茶にし金魚【生歿】未詳【閱歷】神田三河町の町醫者の子と「戲作者小傳」「江戶作者部類」に見えてゐる外、閱歷等は全く不明。但しその號や、作品「十八大通百手枕」等に依つて、彼の號は十八大通の一人、藏前の富豪大口屋文魚に貰つたのか、或はそれに因んだのか、或は又、十八大通の一人として森羅萬象等と交通があつたであらうと推定される。彼の處女作は、洒落本「妓者呼子鳥」（別項）（安永六年）で、「多佳論」（別項）（安永九年）以後の作品は見えない。夭死したのか、或は別の匿名を用ひたのか、全く筆を絕つたのか不明である。【著作】前に擧げたものの外、契情買虎之卷（別項）安永七年○一事千金（同年）○十八大通百手枕（同年）○娼女皮肉論（別項）（同年）【作風・史的地位】彼の洒落本の傾向は、劃然と二分する事が出來る。一は「妓者呼子鳥」「契情買虎之卷」の如く艷色あり、遊女或は藝者と客との戀愛を濃厚に描寫したもの、他は「一事千金」「娼女皮肉論」「十八大通百手枕」の如き洒落を中心として、洒落本の在來の型をそのまま踏襲せるものである。而して彼の功績は前者に在るのであつて、この描寫、創作態度は、山東京傳・一世梅暮里谷峨・鼻山人等によつて繼承せられ、人情本の基礎をなすと共に、ひいては明治時代の戀愛小說の祖ともなつたものである。この點で彼の作品は江戶文學の一角に永久に一つの地步を占むるものと云ふべきである。（山崎）

谷千生（たに ちなり）　國語學者【生歿】生年未詳。明治二十一年九月八日、德島縣德島町に歿す。享年未詳。【閱歷】德島藩の鐵卒で、初め江戶に住んでゐたが、當時千生は狂歌・俳諧・川柳等を好み、その方面の書が本箱十個程あつた。時に近隣にゐた友人岡方豐武は藤屋春雄の門に入つて歌文を學んでゐた。この豐武が千生に歌文・語法の研究を勸め、先づ「紐鏡」（別項）を千生に貸したところ、一ケ月程の後返却し、更に「詞の玉緒」「詞八衢」「詞通路」（各別項）等を借りて一年ばかり獨學した。次いで豐武の勸めに依つて藤屋春雄の門に入つて、歌文・語法の事を學んだ。千生は天性學を好み、記憶力に富んでゐた。元治元年朝廷と幕府との關係が危くなつたので、千生も藩主に從つて京都へ赴いた。時に或る日豐武が千生を訪ふと、書籍五百卷ばかりを紙縒で結んで置いてあつたので、豐武が、かかる騷亂の際に書物など購入する必要はない。書物を購ふ金があつたら、それは肌身につけて一朝事ある時の用に供すべきであると言ふと、千生は有事の際に金を持つてゐても、それは自分のものにはならない、かかる亂世の時には書物の値が頗る安いから、自分は出來る限り多く購入して鄕里へ送つて置き、若し自分が命永らへたなら、生涯これを讀まうと思ふ。又自分は戰死しても、これ等の書が我が鄕里にあれば、誰かが讀むであらうと。千生はその後奧羽地方まで轉戰したが、暇があれば書を求めて鄕里へ送り、その數、數千卷に及んだ。後、千生は無事に鄕里に歸り、益々書を求めたので、萬を以て數へる程の藏書家になつた。明治維新後、德島の國幣中社大麻比古神社の禰宜になり、七八年勤めた。次いで同國の尋常師範及び中學校に教鞭を執り、又私塾をも開いて國語・文法を敎へてゐた。この塾生に敎へるために著はしたのが「言語構造式」であり、次いでこれを註解したのが「詞の組立」（別項）である。明治二十年、文部省は英人ビー・エッチ・チャンブレンをして「日本小文典」（別項）を編ましめて刊行したが、千生は、これを頗る不滿に思ひ、同年「ビー・エッチ・チャンブレン氏日本小文典批評」を出版し、更にこの事について文部省に陳情しようとして、翌二十一年夏、鄕里を出發し、少時大阪に滯在したが、その地で病氣に罹り（赤痢と云ふ）、八月中旬に鄕里へ歸つて、間もなく歿した。【著作】言語構造式一冊（明治十七年十二月刊）○ビー・エッチ・チャンブレン氏日本小文典批評一卷（明治二十年十一月刊）○詞の組立（別項）（一名「言語構造式註解」明治二十二年四月刊）○語格難論四卷（寫）。外に「日本小文典批評」の終りに、「五十音新解」（小本一册）、「國語事物理法論」（中本一册）が近刊として廣告してあるが、これは出版に至らなかつた。（龜田）

【參考】「詞の組立」跋文（岡方豐武・小杉榲邨）

谷間の姬百合（たにまの ひめゆり）　飜譯小說　四册【譯者】末松謙澄・二宮熊次郞（事實上の譯者は二宮氏といふ―孤松餘影）【原作】バーサ・エム・クレイ女史作「ドラ・ソーン」【刊行】明治二十一年二月（一卷）、十二月（二・三卷）、二十二年九月（四卷）、金港堂。【梗概】伯爵家の若殿有洲成人（ロ・ナルドアーユ）が低い身分の娘美虎子（ドラ・ソーン）と戀に陷ち、父母の戒めに背いて結婚し、伊太利に落ち延びる。初めは夫婦仲もよく綠（ビアトリス）・瑠璃（リ・アン）の二女を儲ける。ところが成人が妻の無教育に愛想を盡しかけてゐる矢先き、以前成人の妻になりかけた女性お伊太利漫遊の歸途に立ち寄る。成人は自然この女性と親しく交はる。それが虎子の嫉妬を生み、果ては夫婦喧嘩となり、虎子は二女をつれて英國の親許へ歸る。成人は母に子供二人の世話を頼み、放浪の旅に出る。十七年の後、有洲老伯は歿し、成人が襲爵する。成人は昔の自分の結婚の不成功を悔いる心から、今は極度に家名を重んずる人物となつてゐる。娘二人にも何れも人物と門地とを選んで結婚させようとする。ところが、姉綠は虎子の許にゐたうちに、樋口牛藏（ヒュー・ファンシリイ）といふ船乘と婚約してゐた。姉妹二人は有洲伯の愛孃として交際場裏の花と持て囃されるうち綠は更に入江伯（エイアリイ伯）といふ戀人を得る。一夕有洲伯主催の舞踏會があり、その際入江伯は正式に結婚を申込む。綠は嬉しさに眠れず、月明の庭を散步する。そこへ忽然樋口牛藏が現はれる。牛藏も綠の幸福のためにと一旦思ひきるが、綠のもつてゐる入江の寫眞から爭ひとなり、綠は庭の池に落ちて溺死し、牛藏は良心の責苦に堪へず懺悔文を殘して自死する。この悲劇が緣となつて成人と虎子とは仲直りし、瑠璃に夫を迎へさせて一家が榮える。【解說】この譯書は、昭憲皇太后の台覽を得た點で、特に記憶されてゐるが、飜譯文學の歷史からいつても、文體が一種の通俗文で大分言文一致に近い點で、內容が政治的・冒險的・好奇的でなしに、家庭的・心理的の分子が目立つてゐる點で、更に政治家の手に成つた恐らく最後の飜譯小說であらうと思はれる點で、注目すべきものである。尤も飜譯とは言つても全譯ではなく、地名・人名などは日本風に翻案されてゐる。【譯者小傳】譯者二宮熊次郎は、慶應元年五月十日、伊豫宇和島に生る。孤松又は猥堂と號す。父覺太郎は伊達侯に仕へ、山寨行を勸めた。初め藩校明倫館に漢學を學び、又中上川彥次郎に就いて英書を學んだ。明治十六年上京、同鄕の先輩末廣鐵腸によつて文才を認められ、鐵腸の主宰する朝野新聞に入り、傍ら私塾に英書を學び、大學選科に政治・經濟を聽講した。二十年退社、末松謙澄と共に時事通信社を創立した。二十一年獨逸に遊學、二十五年歸朝、歸後一時東京日日新聞に執筆し、又內務省囑託となつてゐたが、日淸役前後からは山縣有朋の祕書役として働いた。三十一年京華日報を起し、國家本位の賢良政治・軍國主義を主張し、議會政治・政黨政治に反對した。三十七年同新聞廢刊、雜誌「世界」發行。大正二年人心の荒怠を憂ひ、同志と謀つて桐花學會を起し、國體講明の機關とした。大正五年十二月十七日病歿、享年五十二。（神田（豐））

狸腹鼓（たぬきの はらつゞみ）　能狂言【別名】[illegible]・腹鼓【作者】春日禰宜・とつは【格式】各流共に一子相傳の極重習である。【梗概】或る山里の狩人が、狸を頻りに射取るので、一夜古狸が女に化けて狩人に會ひ殺生を誡める。狩人が思ひ止まると聞き喜んで歸り浮かれてゐる所を、狩人は怪しんで跡をつけて來て射止めようとする。狸は命を助けてくれと頼むので、腹鼓を打てば助けてやると言ふ。狸が腹鼓を打つ內に狩人は浮れ出す。隙を見て狸は弓矢を奪つて狩人を追ひ込む。【解說】寛正の紀河原勸進猿樂番組中にも「ハラツヾミ」と見え、「犬筑波集」にも、「下手狂言に似たる化物・拍子合はぬ狸の腹鼓」とある。筋は「釣狐」（別項）と同巧、大藏流に傳へた「狸腹鼓」とが、各流の「腹鼓」の原型らしく思はれる。今、大藏流に傳へてゐる狂言は、明治初年の改作である。「狸腹」には、「甲子夜話」續六十七に、「今年十月御能上御祝御能の番付を見るに、石橋の次の狂言に腹鼓[illegible]とあり。予曰、この狂言を知る人やある。皆曰、知らず。因て或人に問へば、答この狂言は大藏に傳ふ。されど容易にこれをなす事もあらざりしが、此度は格別に仰ありて、辭する事[illegible]官より度々[illegible]もならぬ時[illegible]て、實に珍[illegible]宅にて其藝[illegible]藝あり、その藝中にて、狸が腹鼓をうつことなりと、何ぞ仕組にや」とある如く、萩花をあしらつた瑞垣の作物が出され、狸は作物を飛び越えて腹鼓を打つ事になつてゐる。狸が腹鼓を打つとの傳說は古くからあつて、「夫木集」にも、「人すまで鐘も音せぬ古寺に狸のみこそ鼓うちけれ」とある。（龜田）

種員（たねかず）　「柳下亭種員」を見よ。

種彥（たねひこ）　「柳亭種彥」を見よ。

種彥諸國物語　「邯鄲諸國物語」を見よ。

種蒔く人（たねまくひと）　雜誌【解說】第一次と第二次にわかれる。（一）大正十年二月、秋田縣土崎港に於て創刊、三號にして休刊。同

人は、小牧近江・金子洋文・今野賢三・近江谷友治・畠山松治郎・山川亮等。（二）大正十年十月、東京に於て創刊、同十二年九月の關東大震災直前まで續刊。同人として、村松正俊・佐々木孝丸・柳瀬正夢・松本弘二、次いで平林初之輔・青野季吉・前田河廣一郎・中西伊之助・佐野袈沙美・津田光造・武藤直治等新たに參加し、執筆家として内外著名の進歩的思想家が名を列ねた。普通「種蒔く人」と稱する場合、第二次を指すのである。【業績】「種蒔く人」以前にも、反ブルジョア文學の萠芽はあつたが、反ブルジョア文學者・思想家を最初に總動員し、組織を與へ、また「種蒔く人」の事實上の創始者たるクラルテ運動の日本代表者小牧近江の、第三インターナショナルの解説・宣傳に早くも示されてゐるやうに、日本のプロレタリア文化運動に、インターナショナル精神と、アンチ・ミリタリズム精神とを植ゑつけた最初の名譽ある功績を擔ふものである。「種蒔く人」の出現のこの兩精神の宣布の役割を終へ、共産主義的・無政府主義的・民主主義的・自由主義的な混成を止揚し、自然發生的なプロレタリアートの文化欲求から、マルクス主義への理論的方向をもつ契機を作つた。（文藝戰線參照）　（小牧）

田神祭 たのかみまつり　舞踊【解説】元來飛驒下呂の氏神の祭をいふのだが、諸國の御田植祭と同じことである。（御田植祭參照）　（小寺）

田邊福麻呂之歌集 たなべのさきまろのかしふ　歌集【作者】田邊福麻呂【成立】福麻呂が己の歌を集めた私歌集と考へられる。成立年代は不明であるが、卷六の久邇の都の荒廢を悲む歌と難波の新都を讃美する歌は、少くとも天平十六年（この年久邇より難波へ遷都す）より幾年か經つて、久邇の廢都が荒れすさんだ頃の作でなければならぬ。よつて本書の成立も、天平二十年頃より前には、溯り得ないと思はれる。故に「萬葉集」に名の見える五つの和歌集（柿本朝臣人麻呂歌集・類聚歌林・高橋連蟲麻呂之歌集・笠朝臣金村歌集及び本書）の中、最も時代の新しいものである。【解説】本書は今日傳はらない。ただ「萬葉集」中の歌に、「田邊福麻呂之歌集出」と註記してあるのによつて、この本の存在してゐたことが推定されるのである。「萬葉集」中に、その作品の出てゐる場所と歌數は、卷六の最後の所に二十一首（長歌六首・短歌十五首）、卷九の相聞部に三首（長歌一首・短歌二首）、卷九の挽歌部に七首（長歌三首・短歌四首）。計、長歌十首・短歌二十一首。これが今日知り得るこの書の内容のすべてであつて、長歌の多い事は注目すべきである。この書の組織體裁は「萬葉集」の卷六と卷九の挽歌部に、本書から採つてある部分によつて推察出來る。それは、この二個所は原本の體裁を崩さずに原本のまゝの形で「萬葉集」に取入れられてゐる（同樣の例は集中に多い）。それによつて次の事實が知られる。（一）各詠毎に題と歌數とを揭げて次第してあつた事、（二）作者の名を記してなかつた事、（三）反歌の歌數を記すには、題詞中には「長歌何首并短歌」の形で記し、次に長歌と反歌との中間の所に「反歌幾首」と歸入して、こゝで反歌の歌數を明示する書法をとつた事、（四）反歌の事を短歌と記してゐる事等である。なほ今日見る所では、卷六のものは雜歌部、卷九所出のものは相聞部・挽歌部に收めてあるが、本書がこの三部に分れてゐたか否かは不明である。而して作品は全部明るい歌で充ちてゐる。卷九挽歌部に出づる弟を弔ふ歌ですら、己の感情を直寫せずに譬喩や序詞の類を多數に用ひてゐるため、強い悲歎は現されてゐない。他の部分は一層輕い調子のみで、惡く言へば重みがなく、上すべりの歌のみである。舊都の荒廢を痛惜しても、荒廢の情景が一通りはつきりと描寫されてゐるに拘はらず、廢れた都の樣が目に浮かんで讀者を心から動かすこと人麿の近江荒都の歌の如くでないのは、全くこの輕すぎ明るすぎる詠の性質によるのである。これは卷十八に見える田邊福麻呂の作も同樣で、全く福麻呂の歌の根本的特性だつたと見られる。　（森本）
【參考】萬葉集第九卷考　森本治吉（國語と國文學昭和三ノ一二）

旅人 たびと　歌人【氏姓】氏は大伴、姓は宿禰。「萬葉集」には、大納言大伴卿（卷三）、太宰帥大伴卿（卷五）、帥大伴卿（卷三）などと記してある。これは大納言以上には總て名を記さないのが「萬葉集」の通例になつて居り、且つ旅人の歌の出てゐるのは、彼の子家持の編纂したと思はれる卷のみであるから、家持が父を尊んで姓も名も記さず官と氏のみで現はしたものと考へられてゐる。「續日本紀」及び「公卿補任」には、數所に「大伴宿禰旅人」と明記してあつて、正式にはかく讀んだものと思はれる。【生歿】天智天皇の四年（享年より逆算）に生れ、天平三年（一三九一）七月薨ず。但し、その薨した日は傳へによつて小異がある。「公卿補任」には、七月廿五日とあり、「萬葉集」卷三の奥書には七月一日とある。享年六十七。【家系】大伴氏は「古事記」「日本書紀」に天忍日命に出づとし、この天忍日命は「姓氏錄」「古語拾遺」等に、高皇產靈神に出づとする。このまゝを信ずる事が出來ないとしても、神代以來の名家だつた。以後代々武將の家として兵馬の實權を握つて重んぜられ、金村（武烈・繼體天皇の朝）に至つて、天皇の御卽位をすら自由にする程の權勢であつたが、對韓策を誤つてより物部氏に乘ぜられ吹負等の壬申の功があつたに拘はらず、旅人の時代には名家としての名のみ高く、實權は漸く他氏に移りかけてゐた。【閱歷】「續日本紀」和銅三年の條に、「左將軍正五位上、大伴宿禰旅人」とあるのが、彼の官位の初見で、養老二年（五十四歲）中納言、養老四年、征隼人持節大將軍となつて太宰府の隼人の亂を平げて還る。神龜年間に太宰帥となつて九州に下る（萬葉集卷三挽歌部）。神龜五年そこで妻を失つた。後、天平二年秋（六十六歲）大納言に任ぜられ、同年冬十二月京へ向つて太宰府を去つた（萬葉集卷三挽歌部、卷六雜歌部にその折の作品が見える）。この太宰府に於ける三年間は、歌人としての彼には以前の六十年に數倍する價値ある年月であつた。彼の作の大部分は、この九州に於ける生活――宴飮、小さな旅、諸人との贈答などの間から生れた。當時筑前守だつた山上憶良との交りも、この時期の彼に影響を與へたであらう。歸京した翌年正月、從二位に叙せられ、七月薨じた。【人物】學識廣く殊に支那文學に通じてゐたと察せられる。「萬葉集」卷五なる「遊松浦河序」と歌とは「遊仙窟」に基づき、卷三の「讃酒歌」の全體の思想は老莊に出で、「七の賢き人」と云ふ言葉は「晉書」に、「價無き寶」は法華經に出づるが如き、その一例である。從つて思想に於ても外來思想の影響を受ける事が多かつた。併し政治的手腕にはたけて居らなかつたらしい。若し彼にその手腕があれば、大伴家昔日の權勢を挽回し得たであらう。性格は高い家柄と多幸な官歷、伸び〳〵した詠柄等から考へて、明るく朗らかであつたらうと察せられる。併し彼の「讃酒歌」を資料にして、直ちに彼の性格が享樂的だつたらうと結論するのは、甚だ危險である。【作品】彼の作品は、その子家持の編した卷、卽ち卷三に、短歌三十一首、卷四に短歌四首、卷五に短歌二十八首（これは最近の研究により以前認められてゐた數よりも增加した歌數である）、卷六に短歌九首、卷八に短歌四首。總計長歌一首、短歌七十六首。この外に、卷五に載する手紙及び散文がある（なほ澤瀉久孝氏は、卷五鎭懷石の長歌反歌をも憶良に非ず、旅人の作としてゐる）。而してこの家持の蒐集に洩れたものが必ずあつたと思はれる。それは旅人の作品で年代の明かなものは、神龜五年（六十二歲）以後の作に限つてゐるから、その青年・壯年時代の作品は恐らくは殆ど全部佚したものであらう。【作風】彼の作には、純客觀的な歌が全然ない。つまり彼は、天成の抒情詩人であつたと言へる。彼には所謂叙景歌なるものが一首もない。當然叙景的になるべき題材ですら、「我が苑に梅の花散る久方の天より雪の流れくるらし」（卷五）の如く、空想化し抒情化して現はさずに居れないのが、彼の特色である。天平の初年には、既に高市黑人・山部赤人（各別項）が出て、客觀的な作風を確立してゐるのに、彼に一首もさうした新歌風の浸潤が見えず、古來の記紀の歌謠以來の抒情歌の本脈から出てゐなかつた事は注目すべき現象である。かく純粹に抒情の歌境に沈潜した爲めか、彼の抒情歌には一讀人に迫るものが多い。「世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり」（卷五）の如く、突きつめた悲歎を太い線で歌ふ所に、最も彼の本領が發揮される。萬葉一方の代表作たる讃酒歌の、あの大まかな流るゝやうな歌調も、根本は彼の抒情的心境に根ざしてゐるもので、こゝから湧けばこそ理窟になりがちな歌材を能く詩化し得たのである。而してその表現は、殆ど技巧の跡を見出せない。ただ想の出づるがまゝに言葉を置いたといふべき姿で、彼の作品には、「心の聲」が太い線で、ありのまゝに描き出されてゐて、そこに細かな技巧の美しさは、探し出すことは不可能であるといつてよい。要するに彼は、飽くまで男性的な作家であつたと言ひ得よう。
【參考】萬葉集講座（作者研究篇）　（森本）

蓋霰論　「撫東問答」を見よ。

玉あられ たまあられ　語學書　一卷一册【著者】本居宣長【名義】自序の冒頭に「玉あられまなびのまどに音たてておどろかさばやさめぬ枕を」とある歌による。【刊行】寛政四年。天保十四年再刊【諸本】本居宣長全集第五卷・增補本居全集第九卷所收。【內容】雅文を作るための、正しい言語の用法を說いたものである。卽ち當時の人の歌や文章は、近世の人の作つたものをならふために、「よからぬ詞、えもいはぬひがごとども、世にひろごりて、さだまれることのごとなれる」を訂正しようとして、「常にみゝなれたることども、おもひ出るまゝに、これかれと書出て」、論じたものである。著者は正しい言語とは、勅撰集の言語であるとしてゐる。本文は「歌の部」と「文の部」に分け、歌の部六十六條、文の部四十五條を擧げて、語意上、又は文法上誤られやすい語について例證を擧げ、考案を附して詳しく論じてゐる。【影響】この書は、初學者に益する事が多いので、大に世に行はれ、隨つて本書を批評し研究した書も亦現はれた。小澤廣庵の「玉霰疑問」（寫本一卷）は冒頭の「さめぬ枕を」とある「枕」と云ふ語の不穩當であると云ふのを初め、數十條を擧げて論駁したものである。又俊蔭亭案山愷（加藤千蔭の匿名）の「玉あられ論」は、「玉霰」の數條について批評したもの、淺草の里人（村田春海の匿名といふ）の「玉霰附論」は「玉あられ論」の書き漏らした點について批評したもの。三井高蔭（宣長の門人）の「辨玉霰二論」は、右の二書を反駁したものである。以上の三部を併せて、「玉霰論辨」と題して天保元年に刊行せられてゐる。萩原廣道の「小夜時雨」（別項）は、「玉霰」にならつて詞の意味・用ひ方等を記したものであるが、附錄の「辨玉霰論評」「辨玉あられ論說漏」は玉霰の批評である。井上文雄の「伊勢のいへづと」（二卷。第一卷は安政六年刊、第二卷は文久二年刊）は、「玉霰」及び「小夜時雨」に就いて論じたもの。中島廣足の「玉霰窓の小篠」（前編三卷、後編二卷。前編は文久七年刊、明治二十一年に前後編共刊行）は、「玉霰」の補遺で、その說の證明とすべき歌文を多く集めたものである。　（龜田）

田儛 たまひ　舞踊【解說】田植の舞踊の義。田儛の文字が記錄に見えたのは、「天武紀」が初めで、後には雅樂寮で田儛の舞人も養成するやうになり、宮廷舞樂の一となつたが、本來は民間の田植に際して行はれた舞踊であらう。かの田歌（別項）は必ずしも凡てが舞踊を伴ひはしなかつたと見られるが、伴つたものもあり得る。後世は大嘗祭に行はれた。（田歌・田樂・田神祭・御田植祭參照）　（小寺）

玉勝間 たまかつま　隨筆　十四卷【著者】本居宣長【名稱】「言草のすゞろにたまる玉かつまつみてこゝろを野べのすさびに」とある歌の心である。【刊行】一卷から三卷までは寛政六年に、四卷から六卷までは同九年に、以下三卷づつ出版され、「玉かつま目錄」一卷を加へ、併せて十五卷が文化九年までに刊行。【諸本】本居宣長全集・日本古典全集所收【內容】宣長の隨筆集であるが、特殊な部門に限らず、彼の學問・思想の全般に亙つてゐて極めて範圍が廣く、且つ深い學殖を示してゐる。門人知友から聞いた珍しい地方の土俗に關する事もあれば、古書に載つてゐる記事の拔萃もある。古歌の解說もあり、諸說の考證ものべられてゐる。而して單なる知識の集成ではなくて、彼の古道の精神、人生觀、又その研究態度等、根本的な思想の窺はれる點に尊重すべきものがある。第一卷は初若菜、第二卷は櫻の落葉、第三卷はたちばな、第四卷はわすれ草、第五卷は枯野のすすき、第六卷はからあゐ、第七卷はふぢなみ、第八卷は萩の下葉、第九卷は花の雪、第十卷は山菅、第十一卷はさねかづら、第十二卷は山ぶき、第十三卷はおもひ草、第十四卷はつら〳〵椿と題し、十三卷までは彼の清書して置いたもの、つらつら椿は中途でかきさして下書のまゝであつたのを、うつして十四卷としたものである。卷名は內容とは關係がなく思ひのまゝにつけたものである。【價値】「古事記傳」の著者として近世國學者中、最大な學殖をもつてゐた宣長の隨筆として、知識的に尊重すべきはもとより、彼の學究としての眞摯な態度が深くあらはれてゐる。そして古道のすたれたのを歎き、物のあはれを說いた彼の思想は隨所にうかがはれる。彼の歌論・藝術論を知るためには見逃されないものの一つである。文章も平

鳥でおもしろい部分に富み、單なる學究たるばかりでなく、秀れた文章家としての彼に接することが出來る。（藤川）

玉鬘（たまかつら）「源氏物語物の謠曲」を見よ。

玉川日記（たまがはにつき）　人情本　七編　二十一卷【作者】二代南仙笑楚滿人（爲永春水）【畫工】溪齋英泉・春川英笑・歌川國丸・歌川國直【名稱】内題には（松月露讀）と角書、第六編から内題には「拾遺の玉川」とある。書名は武藏玉川を中心とした土地を背景としてゐるからで、角書は松露寺の事を用ひたからである。【刊行】初・二・三編は文政十年（推定）、四・五編は文政十二年、六・七編は天保元年（推定）【題材】「萬葉集」中の菟名負處女說話、下總眞間手古那說話、「大和物語」の生田川說話等に依つて作られた事が卷頭に斷つてある。又化政度以後、江戸で流行した和合神が採つてある。

【梗槪】武藏玉川の畔に、調布屋吝右衞門と云ふ分限者がゐた。妻を失ひお絹と云ふ美しい一人娘と暮してゐたが、附近の水呑百姓窮作に金を貸し、期日になつても拂へぬのを强く催促しその娘お糸を後妻に貰ひ受けた。この調布屋に子飼の手代染助と云ふ美男がゐた。お絹と後には夫婦にする吝右衞門の考へであつたが、お絹も年頃とて頻りに染助を挑む。後妻お糸も染助に戀ひし、お絹と戀爭ひを始めた。染助はお糸の情も嬉しくお絹も惜からず、進退玆に谷まり小心な彼は書置を殘し、玉川に投身して死んだ。染助の死を悲しんでお絹も間もなく死に、窮作も病死した。程なく吝右衞門も續いて死んだ。お糸は後家の身一つで家業を營み無事にその日を送つてゐた。玆に同業堀釜屋井兵衞と云ふ富豪があり、お糸は絶えず出入して家業の事をいろ〳〵相談してゐた。井兵衞は三十を越して子がなかつたが、中野の陰陽山和合寺の和合神に祈つて妻お汲は懷妊し、染次郎が生れた。同じ頃千代田村菅邊屋田鶴六にお貫と云ふ女子が生れた。この二人は生れながら不思議があつた。染次郎は掌に大黑天の像を握つて生れた。これはお糸が染助に與へたものである。又お貫は或る墓から釵を掘り出し愛玩した。これはお絹の遺物である。別の人には解らぬがお貫はお絹の生れ代り、染次郎は染助の生れ代りである事をお糸だけは薄々悟つてゐた。かくて染次郎は十六の美少年になつた。四十にならうとするお糸の美しい年增姿に戀ひして言ひ寄つた。そして旅に出た二人は沼津の片ほとりで偶然出會ひ、其處で深く契りを結んだ。玆に調布屋・堀釜屋兩家の得意屋敷、月本家の權臣高井戸右衞門はお糸に心を寄せて口說いたが聽かれないのを恨み、染次郎と譯あるを知り、堀釜屋に月本家を失敗させるよう企てる。お糸はこれを心配し高井戸を巧にあやなし、染次郎を洞房町お六の許に隱れさせる。その隣家の藝者島吉は彼を戀し遂に夫婦となつた。島吉の本名はお貫で、お絹の再生なのであつた。かくてこの二人は貧と病とに責められたが、遂に目出度く添ひ遂げる。お糸は色情の迷ひの恐しさを悟り、尼となつて松露寺に弟子となり、妙松尼と號し、九十餘歲の長壽を保つた。

【構想】本書に對する作者の興味は、生田川說話を逆にした二女に挑まれて一男が自殺する趣向と、十六の美少年と四十の年增女の爛れた戀の描寫とにあつたらしい。特に後者は可なり强い肉感を表出してゐるので、作者も憚つたのであらう、前世の因緣で說明し、最後は女の懺悔に終らしてゐる。春水の他の作品には見出せぬ興味ある構想であつたに拘はらず、時代道德に束縛され、結局は當時の人情本以上に飛躍出來なかつた。【備考】本書第四・五編は松亭金水の序があり、卷末に「爲永春水元稿、春水が舍友松亭金水補綴」とあるから、春水の作品によくある代作即ち金水の代作であらう。この兩編が目立つて拙くただ筋をたどるといふ筆致である。多少讀者からそんな批評が出たものか、第六編序に「今年は自筆を染たり」と斷り、門人友人の綴つたのは「初念にたがふ類のみ」と辯解してゐる。（山崎）

玉菊燈籠辨（たまぎくとうろうのべん）　洒落本　一册【作者】南陀伽紫蘭（窪田俊滿）【畫工】自畫【名稱】玉菊燈籠に關する說明の意。【刊行】安永九年【諸本】洒落本大系第四卷所收【題材】玉菊燈籠は吉原年中行事の一つで、毎年七月一日から三十日まで、仲之町引手茶屋の軒に點ずる盂蘭盆の燈籠である。これを角町中萬字屋勘兵衞抱へ遊女玉菊が、享保十一年三月二十九日に、大酒のために二十五歲で病歿したのと結び付け、玉菊追善のためと稱して、玉菊燈籠と呼ぶに至つた。本書はこれを題材としたもので、書中、「江戸太夫何丈が水でうしと云ふ淨瑠璃を作り」とあるのは、吉原の俳人岩本乾什をさし、「先生のお出しなされた古今靑樓咄之壽有多にも書ておきなさつた」とあるのは、この作者の黃表紙の宣傳で、安永九年の刊本である。

【梗槪】先づ最初に玉菊燈籠の由來を說き、やがて主人がひとり机に向つてゐると、玉菊の亡靈が現れ、昔の名妓の名を數へたて、「しかしこの頃のおいらんは」と眞芝屋の瀨川が金に轉んで盲人に身請けされた事を罵倒し、吉原の遊びの實利的になつた事を歎き、最後に王子の稻荷に自分の句を卷頭にした額の奉納されたお禮を述べると思へば夢は覺める。

【構想】本書は、玉菊の靈が現れて吉原の近狀を語ると云ふ異類物に近い變格的洒落本の一つであるが、作者の興味の中心は、この年の玉菊燈籠の趣向が例年と異なつてゐる事と、眞芝屋瀨川の盲人に身請された事とにあるらしい。これは松葉屋瀨川が鳥山檢校に身請された事實を指すもので、既に田螺金魚作「契情買虎之卷」（別項）の題材となつたものである。本書が瀨川と替名して罵倒してゐるのは、當時の通人間に大きな衝動を與へた事を示すものであらう。全體に過去の吉原を讚美し、現在の吉原に不滿をもつ態度は、保守的な通人の常套と言ふべきである。（山崎）

玉櫛笥（たまくしげ）　俳論　一册【著者】池田是誰。是誰は又是水ともいふ。播磨國姬路の人。落葉堂・秋風子と號した。一年上京して安原貞室の門に入り、「翠堂獨吟百韻」を遺し、後松永貞德の直弟となる。「玉櫛笥」の外に、「初元結」「破邪魔」「播磨姬路」「呂玖呂」等がある。【刊行】寛文二年二月、「初元結」（別項）の附錄として出版された。【諸本】俳諧文庫・俳諧論集に所收。【由來】著者が卷頭に記した所によると、本書は落葉堂を訪れた垂柳・夕柳の二子を相手として俳諧に關する不審の條々に答へた、その問答を集めたものといふ事になつてゐる。【内容】問答體を用ひて、俳諧初心者の注意すべき條々及び著者の俳諧に關する信念を十五條に分つて述べたものである。その條々は、一風に偏つてはならぬこと、心と身とを俳諧にすべきこと、學殖を必要とすることとの如き本質的な問題もあるが、附合の微細な點に亙つて實際家に說いた所も多く、最後に發句の例として著者の發句五十句を收めてある。以上の内容に、本書成立の由來を記した著者の言葉が卷頭にある。【批評】本書が世に出たのは、貞門・談林の論爭が漸く起らうとする頃で、坊間には徒に異を樹てる者が多かつた。その間に在つて、本書は一流に偏なるは宜しからずといふ態度で書かれた。ただ著者は貞門の秀才で、ために貞門の俳諧は一偏なる點がないなどと、貞門の流儀を顯揚した點があつて、その點から言へば、本書も一風に偏したものとも見られる。併し大體に於てその所說は、先づ中庸を得たものといつてよい。（各務）

玉くしげ（たまくしげ）　國學書　一卷【著者】本居宣長【名稱】「身におはぬしづがしわざも玉くしげあけてだに見よ中の心を」といふ卷首の歌詞による。【成立】天明七年十二月脫稿の「祕本玉匣」（別項）に添へて紀州公（德川治貞）に上つたもので、「道の大むね今の世の心得を書て奉れるなり云々」といふ端書がある。天明六年若しくはそれ以前に成立したものである。【刊行】板本には「寛政元年十一月刻成」とあるが、その板本が宣長の手許に屆いたのは、寛政二年三月であつた（宣長手記「著述書上木覺」本居家所藏による）。【諸本】本居宣長全集第六卷所載【内容】古道精神を基礎とした國政論で、まづ「まことの道」は、唯一普遍であるが、事實に於てはわが國にのみ正しく傳はり、外國にはその傳來を失つて「末々の枝道」しか存しないとし、「道の大むね」としての宇宙生成論及び人生論を試み、皇國の優越性を主張し、「今の世の心得」としての國政論に及んでゐる。【價値】本書は古道說を基礎として現實問題を說かうとしたもので、そこに古道說としての發展が認められる。因より國學者の考察は、その出發點からして、要求としては政治若しくは道德等の現實生活に對する熱情が基礎をなすものであつたけれども、本書に至つてそれが明かに體系化されて來た。かくて政治論としては「祕本玉匣」の如く具體的ではないけれども、古道說の發展としての政治思想を定位したものとして、本書は國學思想發展上、重要なる意義を有するものである。殊に古道によるために、强ひて現在を上古に立て直さうとするのは神意に逆ふことで、道の本旨ではないとし、今の世の國政は今の世の模樣に從つて、傳統を重んじつつ、而も機宜に執り行ふのが「神隨治め玉ひし旨」にあたるとしてゐるのは、神のはからひに對する絕對の信賴に出づるものであるとはいへ、一面には彼が現實に對する正しい批判を立證するもので、全篇の上に彼の古道說が人格化されて來た風韻が感じられると共に、そこに「直毘靈」（別項）以後の發展が確認される。

【參考】古事記傳○祕本玉匣○玉くしげ別本○直毘靈○玉矛百首○玉勝間（西尾）

玉櫛笥箱崎文庫（たまくしげはこざきぶんこ）　お家騷動物　脚本　十幕　二十四場【作者】勝諺藏（後の[illegible]）【通稱】黑田騷動・栗山大膳等【諸本】勝諺藏作演劇脚本集第四册目所收。【興行】明治十年九月、大阪戎座。

【梗槪】（大序）（箱崎八幡宮境内）黑田家の太守病氣平癒祈願のための護摩修行の當日である。（同大護院座敷）嫡子忠之は一徹短慮で癇癖が强く、家來を手討にしようとする。（柚ケ浦磯邊）獵師彌平次は元岐井谷安藝守の家臣であるが、主家沒落後山間に隱栖してゐる。その娘お秀は父の借財のために勤奉公に出なければならなくなつたのを、孝洞和尙に救はれる。そして男裝して安養寺の小姓となる。（この間五ケ年經過）（序幕）（安養寺門前供待）父筑前守法事の日。右衞門佐忠之は性格殺伐の非難はあつたが、嫡子として家督を繼承したのである。（同客殿）諫言に依り、忠之は有川駿河・數馬兄弟を手討にしようとするが、孝陽和尙（孝洞和尙の弟子）の調停で許される。そして小姓要人（お秀）の容姿を賞美し、城中へ召具して寵愛しようと言ふ。併し孝陽和尙は女犯の發覺を恐れて猶豫を乞ふ。（樋口天滿宮鳥居先）軍學者有川駿河は、傾城舟越身請けの金子に困惑してゐる。佞臣犬飼玄蕃それを融通し、代償に忠之の内命として一萬石軍船の製造方を强請する。幕府禁制のこと故一旦は拒否したが遂に内諾する。（二幕）（大野村山籠河原道）夜、獵師や所化が友千代丸とお秀を搜索してゐる。（正滿川原）故岐井谷安藝守の内室八重賴の亡靈は、子息友千代丸へ、黑田家のために滅された自分達父母の復讐を命ずる。（安養寺孝陽居間）前の二場は夢である。友千代丸の後身の孝陽は、彌平次、その娘お秀事要人と共に、夢に見た事を物語り合ひ、協力して黑田家を滅さうと約する。（同門前）間者を入れて安養寺の樣子を探つてゐた犬飼玄蕃は、要人受取のため出張して來る。（同裏門）短氣の忠之は、返答延引の孝陽和尙を手討にすると意氣込むを、家臣星野惣左衞門（駿河の伯父）に諫言される。鐵砲一發、彌平次が忠之めがけて射擊する。忠之・孝陽・彌平次・要人（お秀）・舟越・星野等のだんまり模樣。結局孝陽の所持する系圖は忠之へ、舟越の懷中する證文は星野へ。彌平次はお秀を連れて逃れ去る。（三幕）（福岡城下入口）要人の人相書が配布される。獵師仁太郎は隣人彌平次の態度に、何事か企む。（黑田家牢間孝陽拷問）孝陽の取調べ續行。遂に女犯の罪科發覺し、又系圖に依り友千代丸と判明する。この時仁太郎の訴人により彌平次父娘召捕の報至る。拷問に掛つた孝陽は怨みの言葉を殘して斬首される。一天かき曇り大雷雨となる。（有川駿河屋敷）駿河・舟越祝言の日。軍船の圖面作成の責任を感じて、駿河は胎内の一子出產後、切腹する覺悟である。玄蕃が貸金の返濟を迫るが、伯父星野は以前の證文に依り事情を推量し、家財を賣却して金子を整へる。そして駿河へ武士道のために切腹を勸める。（同奥座敷切腹）舟越は婚禮の祝宴が俄然切腹の席と一變して驚愕する。そして彼女は星野惣左衞門の娘なる事が分明し、奇しくも父娘の久濶の對面ありてその中に產氣附く。駿河は子供の朗かな產聲を聞きながら、伯父の介錯で切腹する。（五幕）（栗山大膳諫言）江戸表。忠之は愛妾お秀の方に耽溺し、奥方久姬を離緣しようとする。親戚松平隱岐守初め一同その理由を正す。急遽長崎より出府した家老栗山大膳は忠之に諫言する。大膳は前殿筑前守より水牛の兜と共に、忠之の後見役に任命されてゐた。事件は一先づ落着。毛谷主水はお秀の方を斷然殺害すべきことを主張する。（お秀の方寢所）主水、お秀の方を討たんと忍び込むが、その色香に迷ひ、遂に黑田家顚覆の陰謀に加擔して了ふ。（紅葉の間）主水、大膳を暗殺しようとする。が眉間に證據の疵を付けられて逃げ去る。（六幕）（周防灘の難風）軍船乾坤丸は大阪出帆、歸國の路である。忠之は本

國へ歸着後大膳を追放すると言ふ。李陽の亡靈のために大暴風雨となる。〔七幕〕（黒田家本城奥庭）忠之は軍船を大膳が燒失せしめたと聞き、蟄居の使者を命ずる。（奥殿居間割）敢然出仕して諫爭する大膳を、忠之は知行を召上げ追放し、主水を跡役へ命ずる。主水は大膳の額を扇子で破つて、紅葉の間の復讐をする。（栗山大膳退城）退城の大膳は、三萬石の家老となつた主水の下城に出會ひ、悲憤する妻子・若徒繼平を慰め、幕府へ出訴して五十二萬石を救はんと覺悟する。〔八幕〕（江戸鎌倉河岸）居酒屋で泥醉してゐる中間は、主水よりお秀の方への密書を、大久保彦左衞門に取上げられてしまふ。彦左は大膳の忠節を賞し後援者となる。〔大詰〕（阿部豐後守役宅）大膳の出訴に由る對決。主水初め奸臣等、巧妙に申開きをするが、事態が明白となり、惡人滅亡して騷動は落着する。

【解說】黒田騷動を記錄したものに、「盤井物語」「栗山大膳記」、その他の古文書がある。これ等を實錄小說化したものが「寛永箱崎文庫」であつて、本脚本はそれを脚色したものである。脚色物の弊害として餘りに原作の全般に忠實ならんとした所に、印象を薄弱にする缺點がある。近來上演される「栗山大膳」（中村福助郎主演）は、この脚本の五幕目以後を改修したものである。默阿彌作の「筑紫𧲸浪白縫」（明治八年十月新富座）及び「黒白論織分博多」（明治十五年十一月新富座）も、大略同巧異曲の脚色ではあるが、「黒白論」が最も要領よく他作を壓してゐる。

【參考】列侯深祕錄（國書刊行會本）○蓑軒全集第五卷○寛永箱崎文庫（近世實錄全書・帝國文庫）○黒白論織分博多（歌舞伎新報）　（尾澤）

玉篋兩浦嶼（たまくしげふたりうらしま）　戯曲

【作者】森鷗外【發表】明治三十五年十二月、雜誌「歌舞伎」【刊行】大正元年刊「我一幕物」に採錄。鷗外全集第四卷所收【初演】明治三十六年一月、市村座。伊井蓉峰・兒島文衞・市川久米八等。【由來】「ファウスト」の筋を伊井に聞かせたところが、座附作者をして中幕にそれを仕組ませようとしたので、その無謀をわらつて鷗外自身が代つて書き與へたものといふ。

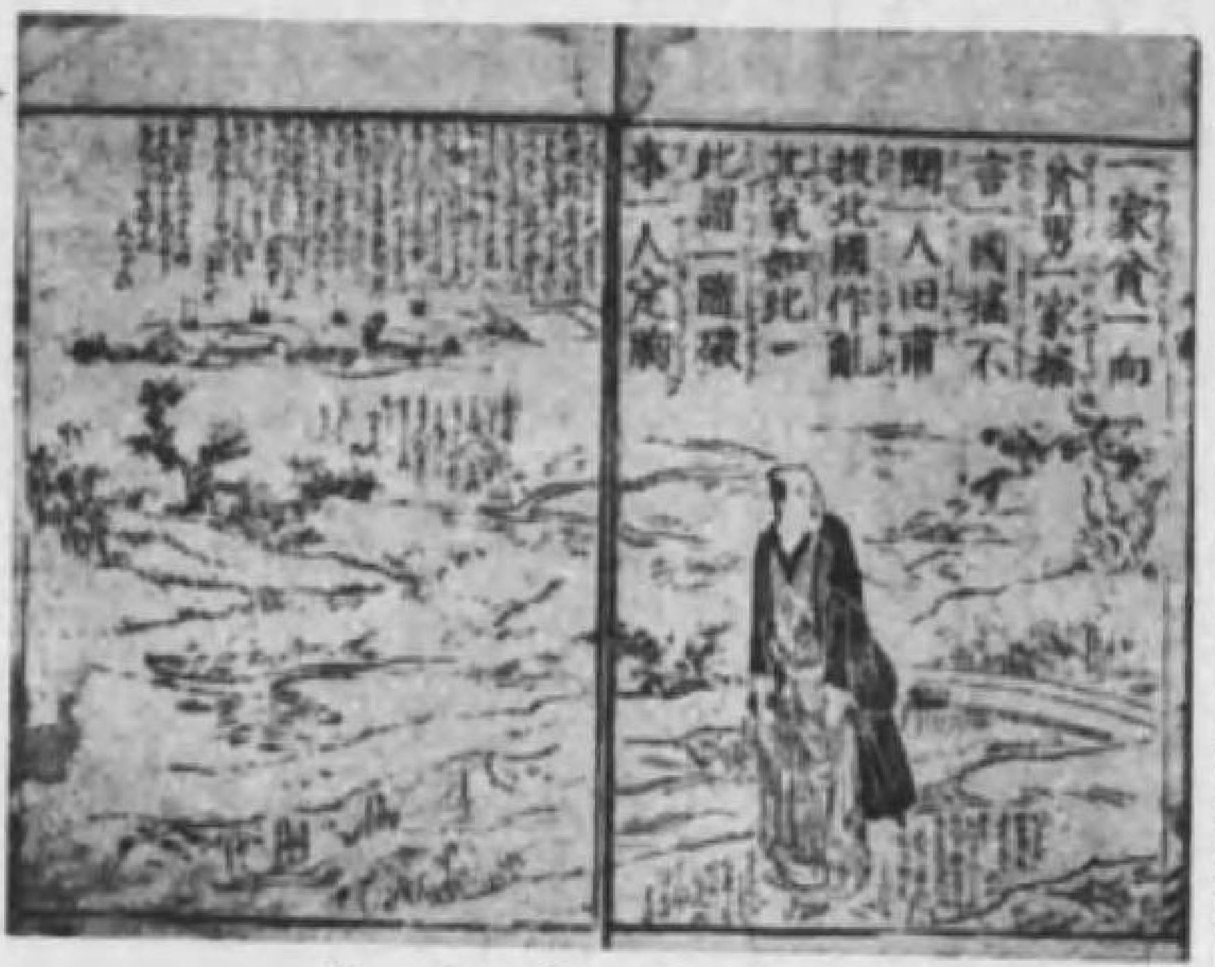
【梗概】上下二部より成る韻文劇。〔上の卷〕（龍宮城の場）享樂の夢醒めたる浦島太郎が、美しい乙姫と別離の悲しみを述べてゐる。浦島は安逸の生活に堪へかねて事業の事を念ひ元の郷土へ歸らうとする。鮫人の涙は化して珠玉となる。〔下の卷〕（住ノ江海岸の場）後の浦島太郎（浦島の子の子孫）が漁師大勢を引きつれて海外征服に出陣しようとしてゐる。そこへ立ち戻つて來た浦島太郎が、子孫の勇ましい事業を見て「思ふは祖先、行ふは子孫にこそあれ」といふ。そしてこれも一つの不老不死であると悟る。

【批評】この戯曲は、幽玄莊重の措辭を以て哲學的思索を表現したもの、作者の永生哲學がその基調となつてゐる。また獨逸文學の影響を逸することは出來ない。當時の文學に於てこれ程思想的な作品は他に類を見ない。本作と殆ど同時に坪內博士の舞踊劇「新曲浦島」（同頃）が世に出た。當時の文壇の二巨匠が同時に浦島の傳說を借りて、韻文的な戯曲を創作したのは面白い事實だと思はれる。　（長田）

玉子の角文字（たまごのかくもじ）　黄表紙　三册

十五丁二十二圖【作者】芝全交【畫工】北尾重政畫風【名稱】女郎誠心と角書。內題「大客」。女郎の誠と卵の四角は世にないといふ諺を、本書の「大學」を模擬した漢文の角張つたのに言ひ掛けてある。【刊行】寛政二年鶴屋版【諸本】江戸文學考異（尾崎久彌）、本文のみ所收。

【梗概】「大學」を大客とし、朱熹章句を猪氣上戸に、首の「子程曰。大學孔子之遺書云々」を「御亭子曰。大客格子先之遺言而云々」と、後の「右傳之十章。釋治國平天下云々」を「凡傳十章前四章繼論手管指南云々」とし、その中間に二十四章を插入して、裝、よく寢る女郎、遊女の部屋、以身賣爲本手の商賣、客と遊女とのいざこざ、若い者の給金、遊女の食事、地まはり、千住の遊里、料理番、身代分散、二日醉の小間物店、二朱店のかすり、指切り、夜鷹が富にあたる、せかれた客、山師客、馬鹿心中、手のある遊女、女房の嫉妬、夫は遊里妻は實家へ、落魄の樣などを大學模擬の文に附會し、且つその註解と補遺を兼ねて後に假名の書入をなし、挿繪の人物の詞書をも加へてゐる。


玉子の角文字

【構想】寛政の改革による漢學の擡頭は、黄表紙の世界に影響して、既に「孔子縞時于藍染」（別項）は儒教倫理を根柢として、理想の世界を實現せんとしてゐるに反して、本書は聖典「大學」を遊里生活中に投じて、俗の俗にかへしてゐる。この手法を、古狀揃の世界に移した「日永話御伽古狀」（寛政四年版、森羅亭萬寶作）もある。【史的地位】本書は大學を換骨して茶かした戯作の先行をなしたものの一つである。即ち類似の趣向を持つものには、同年版の「京傳予誌」（山東京傳作洒落本）巾の大樂があり、後年の作には「傾城情史」（天保三年版、調亭京鶴作洒落本）があり、「大學笑句」（天保年間版、秋調亭主人作滑稽本）等が見える。本書は重心が漢文の方面にかたよつて、繪組みの趣向などが多く顧られなかつたと見える。三馬選黄表紙名作二十三部の內。

【備考】（日永話御伽古狀）「今川了俊對愚息仲秋制詞條々」を眞似て、當饒辨而人家冥利住恩澤事の如く、二十項近くならべて不精者・猪尿伊賀守・夜鷹・いがみの權太・お半長右衞門・助六・難波五人男・助平・清貫・高師直・楠正成等の說話を附會してある。　（小池）

鎭魂の歌（たましづめのうた）　歌謠

【名稱】招魂とも云ふ。神樂歌の一種で、鎭魂祭の時に歌ふ歌である。鎭魂祭は天子の御魂の遊離するのを身體の中府に安んじ奉り、御壽命の長久なるを祈ふ祭祀である（令義解）【儀式】每年十一月中の寅の日に宮內省で行はれる。先づ笛工二人が一曲を奏し、次に琴師二人の奏する和琴に合せて歌者が鎭魂の歌を歌ふ。その間、御巫が、宇氣槽の上に立ち、桙（一說に鉾）で槽を十度衝き、その度毎に神祇伯が木綿鬘（一說に絲）を結んで葛筥の中に入れること十回、且つ女藏人が御衣筥を開いて振り動かす所作が行はれた。この神樂が終つて、御巫の舞・猿女の舞がある。これは、倭舞であつたと見える。次に神祇官、宮內丞以下舍人達の一人舞や、相舞があつて式を終る（貞觀儀式・延喜式・江家次第・北山抄・政事要略）。【由來】天の岩戸前で神樂をし、猿女の祖天鈿女命が宇氣を踏み轟かして、天照大神を招き奉つた故事により、且つ「舊事本紀」に十種の神寶を數へて、死人を生き返らせる事の記されてゐる等が、鎭魂祭の祭祀の緣由である。神武天皇元年十一月に、宇摩志麻治命が十種の神寶を齋ひ、帝后の鎭魂を祈つたのが最初で（舊事本紀）、天武天皇元年十一月にも行はれ（天武紀）、令制によつて中の寅の日と定まつた。平安時代には中宮の鎭魂祭も同日に行はれ、東宮の鎭魂祭は巳の日に行はれ、後代には上皇宮でも鎭魂祭が行はれた。室町時代に至り遂に中絶したが、寛政九年に再興せられた。【歌詞】「年中行事祕抄」に出づ。八首より成る。神樂の阿知女作法に類し、且つ採物の歌と酷似した歌がある。次に最初と最後の歌を二首づつ都合四首を揭げる。

あちめ 一度 おゝおゝ 三度 天地に、きゆらかすは、
さゆらかす、神我も、神こそは、神宜聞かう、き
ゆらならば（三字、一本かすは）。
あちめ 一度 おゝおゝ 三度 石の上、布留の社の、太
刀もがも、願ふその兒に、その奉る。
あちめ 一度 おゝおゝ 三度 魂筥に、木綿取り垂でて、
たまち取らせよ、御魂上り、魂上りまし・神は、今
ぞ來ませる。
あちめ 一度 おゝおゝ 三度 御魂上り、いまし・神は、
今ぞ來ませる、魂筥持ちて、去りたる御魂、魂返す
なや。

次に一二三四五六七八九十と稱へ、十度これを讀んで、中臣が玉を結ぶわざをするのである。その曲は田樂（別項）のやうだと「長秋記」に記してゐる。近世宮中で再興の鎭魂祭歌は、

あちめをを、天地に、きゆらかすは、さゆらか
す、上ります豐日孁かか神、わかも神こそは、禰
宜に聞かう、きゆらならはゝ。

と云ふ歌で、譜本も存してゐる。この外、鎭魂祭の日には、大直日歌と倭舞歌とが奏せられた。大直日歌は「新年」の歌であり、倭舞歌は「宮人の」の歌である。

【參考】鎭魂傳（伴信友）○古事類苑神祇部○古謠集（雅田寛）　（藤田）

鎭魂祭（ちんこんさい）（たましづめのまつり）

「鎭魂の歌」を見よ。

玉襷（たまだすき）　國學書　十卷

【著者】平田篤胤【成立】文化十年初稿成る（三冊）。文政七年一卷より九卷まで增補。【刊行】諸國の門人の板行を請ふ者が多かつたけれども許さず、文政十二年に至り、北川眞顏の勸めによつて初めてこれを諾した。天保三年、初秩の刻成る。後、嘉永三年神祇伯資敬王、天保二年本居大平の序及び文政十二年平田鐵胤の「玉襷のふみを板に彫れる由」等を卷初に附して刊行。【諸本】平田篤胤全集第四所收（未定稿なりし十卷をふくむ）。【內容】大體、「毎朝神祠拜記」（門生のために、日々拜すべき神々及び祖先の靈屋に白す詞を記したもの）を本文とし、更にその所以・方法等を詳說したもので、一卷・二卷が發題で、三卷から十卷までにそれぞれ、龍田風神・天日御國・月夜見國・伊勢兩宮・齊宮三社・出雲大社・大和三社・常陸兩社・伊豆雲見社・尾張熱田宮・二荒山大神・當國一宮・當所鎭守・家之神棚・祓戶神・塞神等・思兼神等・大宮能賣神・屋船神・御竈神・水屋神等・守間神・古學神等及び先祖靈屋を拜する詞を揭げ、更にその神々の由來、神拜の心得、先祖を祭る所以・方法等を說いてある。發題に於ては「玉手襷掛見斷離無世々能組於夜乃御組能神乃幸比手」「伊佐子等佐加斯良止且現人乃神須敬比且祖手齊加奈」の二首を揭げて歌意を解說し、兼ねて我が國は神國で國人は神の御末であること、儒・佛渡來以後、その影響によつて騷亂の世が續いたが、織田氏が出て朝廷を尊び、德川氏に至つて尊崇益々厚く、將軍は天皇の御手代として政道に當られ、諸大名は更にその手代として治世に盡されるのであるから、國民はよく政令に從はなくてはならぬとし、更に東照公を初め、尾張の敬公、水戸の義公が國體を明かにし、古道を究むべき學問の道を開かれた事を讚歎してゐる。又九卷の「拜古學神詞」の條には、この道の功績ある人々として東照公・敬公・義公を初め、歌學の茂睡、古學の契沖・長流を數へた後、特に大道に深く心を入れたのは東麿であるとし、眞淵・宣長による國學の發展を敍し、著者に至る迄の傳統を一々典據によつて述べてゐる。【批評】鐵胤の「玉襷附記」には、著者が本書の板行を許さなかつた理由として、その文章に雅言・俚語が打ち交つてゐるのみならず、戯言の卑近な譬喩などもあつて、改刪を要すべき點や、初學者のために有害と思はれる節があること等を擧げてゐるが、これは大意ものの缺點を著者が自省して來た結果であらう。「玉襷」も大意物と同じく講演筆記であるが、板行されてゐるものは、年所を經て著者が修正增補したものであるだけに、未修正の第十卷以外には、講本的性質は殆ど認められない。著者が學問的研究に於て古道闡明を期すると共に、實行に於ても亦、國民生活の指導者たらんとする自覺を以て成されたもので、所說は大體「古史傳」（別項）その他の摘要であるけれども、九卷の「拜古學神詞」の條は、國學史としての最初の系統的考察であつて、東麿によつて創唱された國家主義的な、隨つて國民的自覺體系の學としての、國學の性質をよく發展的に跡づけてゐる點に於て、後の研究の典據をなすものである。　（西尾）

玉造小町壯衰書（たまつくりのこまちそうすいしよ）　漢詩

【作者】寛永及び寛文の板本には、空海撰と記してゐる。類從本には作者名を署してゐない。空海撰とするものは、從來永襲して來た傳說であるが確證はない。序も詩も凡手の業ではないから空海の撰とせられたものであらう。或は又三善清行撰の如き傳もあるが、これも確證はなく、又本文の內容が源信以後の淨土教の思想を表現してゐる點からもこの說は疑はれる。要するに作者は未詳であるが學識ある僧であらう。【名稱】寛永二十年及び寛文三年板本には「玉造小町將衰書」とある。蓋し古來壯衰を將衰の如く讀んで來たものであらう。【成立】成立の目的は、末に「爲讚佛乘之因。聊作斯詩」とある點に歸着する。年代を見るべき記載は直接本文中に見えない。序文や詩の句を綜合すれば西方極樂淨土と無量壽佛即ち阿彌陀佛の記載を認める事が出來る。阿彌陀一佛の淨土思想は源信僧都によつて「往生要集」（別項）の著された永觀二年頃からの普及である。この思想を表現した本書が

源信以後のものたる事は明かである。なほ又序及び詩の字句の用法上に、物品やその他の名稱を羅列した形式は、既に「文選」の賦に於てその例を見るが、我が國には明衡の「雲州往來」（別項）の如きもの以來その例は少くない。本書にこの風の存する事及び「白氏文集」の影響を多く認める點で、或は明衡頃の作品ではなからうか。要するに、後一條・後朱雀・後冷泉帝前後、佛家の手に成つたものかと思はれる。【諸本】異本と稱すべきものはない。群書類從一三六・寬永二十年本（前川權兵衞）・寬文三年本（林甚左衞門刊）・弘法大師全集等。【内容】玉造小町の壯衰を記し、極樂往生を說きすゝめたもので、序と詩の二部から成つてゐる。詩は五言二百六十句、秦中吟と嗚上詠とに學んで創作してゐる。序は路傍に一老女に逢つた。その狀態は容貌顦顇身體疲瘦し、破衣壞裝、裸足で片足不自由な乞食老女である。その出身を問へば少女時代は倡家の子、良室の娘で榮耀榮華、化粧三昧、衣裳好みで立派な家に住み食べ物も贅澤の仕放題、山海の珍味を口にまかせて味つた。技藝も人並勝れてゐて結婚の申込は多かつたが、父兄は王宮の妃に獻る事を考へて凡家の妻たるを承諾してくれなかつた。然るに十七歲で母に別れ、十九歲で父に死なれ、二十一には兄、二十三には弟に遅れ、天涯孤客の悲しむべき境遇となつた。これから運命は急轉直下、落魄孤獨の境涯に下つた。その後、生きて恥を見んよりは、佛道に歸するに若かずと、六塵の住家を厭うて三寶の境に歸し、僧に從つて法を聞く事にした。これを聞いてこの作者は世の中の無常を思へば、榮枯盛衰も亦嘆息するに足らずと感じ、秦中吟の詩と嗚上詠の賦とに學んで、この詩を作つたと序に述べてゐる。詩の中には「嫁得一瘦倡、瘦倡有二賤、孤妾無一婢、二妻互呪詛、一身自憂悲、憂悲過日程、產得一男兒」等の語も存する。その他は概ね序文の如き意味と淨土欣求的の思想を歌つてゐる。【價値】詩序共に推敲の苦心は甚だ多いと思はれる。例へば、樂地秦中吟之詩に對して幸地嗚上詠之賦の如き、白居易の樂天に對して幸地を用ひたものの如く思はれる。又秦中に對する嗚上の如きを用ひたのはそれである。但しこの詩は佛教の經典中に見る偈と類した形態のもので、恐らく偈に摸倣する所があつたことは否み難い。詩としては長篇で勞作と言はねばならぬ。殊に平安時代の中期以後のものとすれば、一層主要な詩と考へられる。（山岸）

玉津婆喜 たまつばき　人情本　四編　十二册【作者】狂訓亭主人（爲永春水）【畫工】歌川國直【名稱】孝女貞婦と角書がある。初編序には「玉都羽喜」、内題には「貞婦玉都婆喜」、二編題簽には「多滿椿」、三編題簽には「玉都婆佳」とある。婦女の文章手本にある「玉椿の八千代」とある成句から採つたと初編序には斷つてある。【刊行】明記してないが、初編に蓮池堂とあり、第四編に神田居とあるのから推測して初・二編天保十一年、三・四編同十二年であらう。【題材】死靈の祟りで、戀せぬ女と戀に陷ちる說話は、戀愛を避ける讀本の作風を襲用したものである。

【梗概】德町邊に土藏二つも持つて豐かに暮した富田屋滿兵衞、賭博に耽つて零落し、深川の裏長屋に妻お浪、娘お增と侘しく暮してゐる。それでも賭博をするか酒を飲むかで、嫌がるお增を質屋に通はせてゐた。或る日お增は質屋から歸つて母に向ひ、「お役人が縛りに來たら私のした事と言つておくれ」と頼んだ。それは贓品の質入から惡者が捕縛されたのを見て、質入すれば咎めを受けると誤解して父を庇はうとしたのである。これを聞いて滿兵衞は涙を流して後悔し、全く改心してしまつた。玆に根岸の若隱居三嶋と遊女上りの妻お園は、まだ廓言葉のぬけぬを興じてゐる折柄、婦多川の男藝者和十が訪れる。酒宴など催す中、裏の井戸端で小娘が辷つて桶の米を零して泣く樣子である。これは母に病死され、父にも病みつかれたお增である。お園は憐れんで下女に命じて米二升を與へた。いつか大雪となつたので和十も泊る事となつた。裏の家には惡者が借金の催促に來て病父滿兵衞を連れ行く。嫁ならお增を抵當に取ると言ふ。泣いて詫びるお增の聲に、三嶋夫婦は堪らず、和十をやつて金を與へて惡者を返し、お增にも衣類を惠み、病父の療養費をも與へた。又こゝにお增のもと住んだ礫川の表通に萬屋といふ大商人があつて、お萬と云ふ娘があつた。女房お卷の威勢强く、好人物の主人はまかれてゐる。お卷は繼子お萬に本店の二男を無理に婿にしようとするが、お萬には友次郎と云ふ情人があるので承知しない。父は心配して密かにお萬に勸めて家出をさせる。お萬は兩國に水茶屋を出して友次郎と同棲してゐる。間もなく友次郎は惡い友人に欺かれて役所に連れ行かれる。父はお萬の樣子を見に來て、友次郎を救ふために金二十兩を惠んだ。お萬はそれで友次郎が助かると喜んでゐると、盜人に盜まれてしまつた。そこで衣類を賣つて四兩の金をつくり一時刑を延ばして貰ひ、殘金の工面を考へ〳〵歸る夜道で、惡漢に捉へられようとした。危い所を三人の男に助けられた。それは萬屋の店の者で、繼母お卷が急死したので、お萬の行方を探してゐたのである。そのまゝお萬は歸宅し、友次郎も赦され、父の計ひで二人は結婚する事となつた。ところが元の番頭由兵衞の女房お八重にお卷の死靈がのり移り、決して二人を無事には暮らさせぬと罵つた。根岸ではお增が三嶋夫婦に可愛がられ、お園を姉のやうにして事へてゐる。或る日彼等と和十とが雷音寺前の往春亭に行つた。香場の別莊に住む若旦那定之助も同じく同亭に行き、定之助お增は互に見染め合ふ。三嶋は或る日定之助の家で急病にかゝり、それが緣になつて、お增は三嶋の妹分となつて定之助に嫁し、病父もその別莊に引取られて、樂隱居となつた。友次郎・お萬は自分達が苦勞した折世話してくれた友人達をお禮のため料理屋に招いた。隣室で金の催促をされて困つてゐる青柳橋の唄女お玉を、お萬が救つてやつた。由兵衞の妻お八重に又繼母の亡靈が乗りうつり、お玉は自分の先夫の實子であるから、あれを世話してくれねば祟ると言つた。かくとも知らぬ友次郎は道でお玉に會つた。お玉はお禮のため青柳橋の船宿に連れ行き、戀を打明けて兩人は深い仲になつた。お萬もこれを悟つたけれど何とも言はぬ。三嶋が中に入りお玉の年季證文を取つてやり、萬屋の隣にお玉の家が建ち、友次郎を間にお萬・お玉は睦じく暮した。

【構想】角書に孝女貞婦とあるのは、孝女はお增、貞婦はお萬をさしたのである。春水の人情本中最も教訓の調子高い書であり、隨つて興味には乏しいもので、友次郎・お玉の戀も死靈のためとせる如き、まるで馬琴の行き方に似てゐる。晚年の作だけに人情本に對する諦

淫の誹りを顧慮したのではあるまいか。ただ當時の寄席・演劇に關する批評は、春水のこの方面の意見が知られて興味がある。（山崎）

玉井 たまのゐ　「神話物の謠曲」を見よ。

玉緒 たまのを　「詞の玉緒」を見よ。

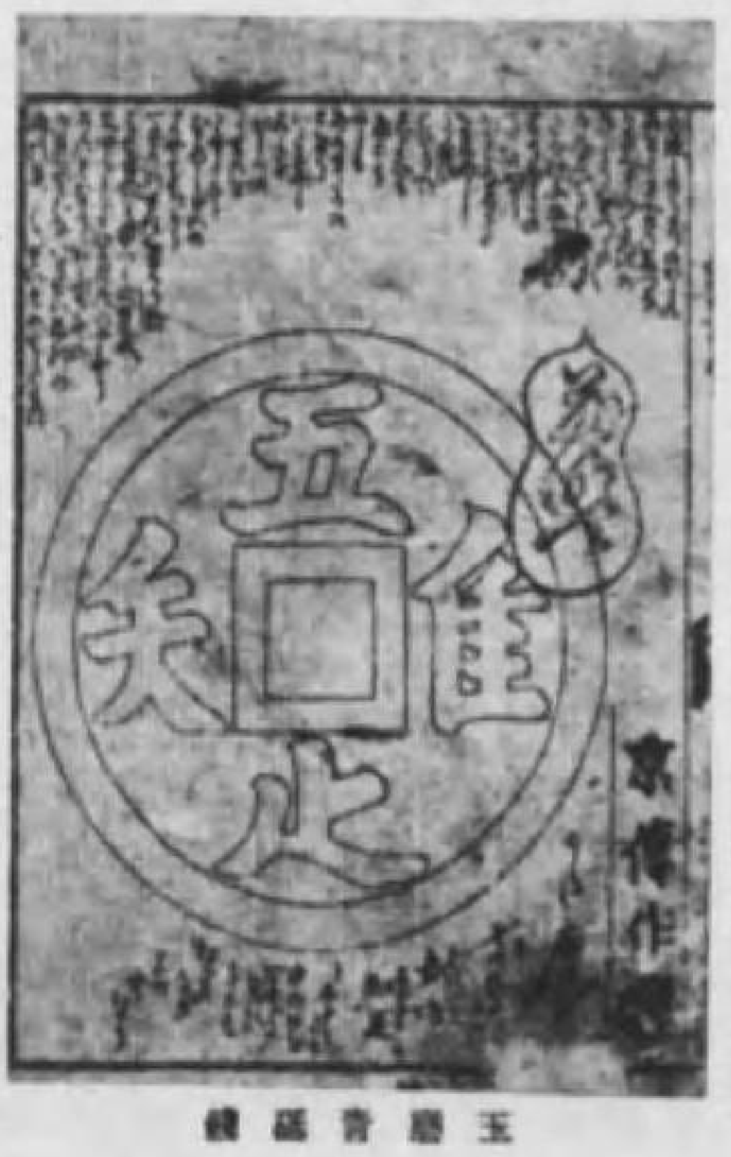
靈能眞柱 たまのみはしら　國學書　二册【著者】平田篤胤【名義】卷頭自ら「この築立る柱はも、古學する徒の大和心の鎭なり」と云つてゐる。【成立】文化九年十二月五日の奧書がある。【諸本】平田篤胤全集第二卷・有朋堂文庫所收。【内容】本書の根本精神は、眞の古道を明かにするためには、國學者が先づ大倭心を確立しなくてはならぬといふにある。而して大倭心を確立するには「靈の行方の安定」を得る事が必要であり、それには先づ天・地・泉の生成及び形態を明かにし、更にこの天・地・泉を天・地・泉たらしめてゐる「神の功德」及びわが國が「萬國の本つ御柱たる御國」であり、わが天皇命が「萬國の大君」に坐すことを熟知しなければならぬといふ立場から、主として宇宙開闢說及び靈魂論を說き、兼ねて國家的祖神教的な神道觀を述べたものである。【批評】本書が國學上注意せらるべき點は、第一には、その所說が國學の對象を考へ、方法を究める前に、まづその基礎として學者の立場を確立しなければならぬといふ主張に立脚してゐることである。勿論かくの如き思想傾向は、既に彼以前の國學にも存したところであるけれども、彼に至つてこの事が一層明確な意識を以て主張せられてゐる。しかし實績について見れば、その立場の確立は嚴密な意味に於ては學的でなく、むしろ宗教的であつた爲めに、眞に學的發展の基礎とはなり得なかつた。第二には、動もすれば、彼が宇宙生成論としての古傳の價値を、現在經驗の事實に合致する點に認めようとすることである。この傾向は、むしろ國學の立場を危地に導くものでさへあつた。第三に、彼は泰西の思想學說に關しては、その現實の觀察に精密である點に於ては漢學などの比でないとしたが、しかしそれは畢竟人爲の知的考察を出づるものでないから、これによつて人智の及び難い宇宙萬般の事象を知悉することは不可能であつて、到底產靈神から傳へられたわが古傳の如く有力なものではあり得ないとし、又これ等のうち、間々わが古傳と一致するものがあるのは、わが古傳が彼の地に訛り傳へられた結果であるとして、本地垂迹說を逆用してゐる。かくて彼が本書に於て成したところは、一見國學の大發展であるかの觀があるけれども、又社會的影響の方面から見れば、それも事實であるが、併しながらそれは眞に學としての國學の發展ではあり得なかつた。のみならず古道の佛儒附會を絕えず排擊し來つた國學が、こゝに至つて動もすれば泰西の宗教學說によつて（而もそれ等に對する眞の批判なくして）直ちにわが古道を說明しようとさへする傾向を生じた。これは畢竟彼に現實的社會的關心が深かつた爲めに、飽くまで古道を古代人の信仰として認識し、そこに國民文化の原理を自覺しようとする國學的制約の下にその發達を試みることが出來ないで、古道を以て直ちにあらゆる思想學說に君臨せしめ、これによつて自然及び社會のすべてを說明し盡さうとするに急であつた結果であるとしなくてはならぬ。

【參考】平田篤胤の哲學　田中義能　（西尾）

玉箒木 たまははき　浮世草子　六册【作者】文會堂（林義端）【刊行】元祿九年【諸本】德川文藝類聚第四怪談小說所收【解說】作者の自序に依れば、曩に淺井了意の「狗張子」（別項）の續集に擬して作つた「玉櫛笥」の拾遺として作つたものとある。第一卷四話、第二・三・五卷各三話、第四・六卷各二話、計十七話から成つてゐる。怪談を主としてゐるが、中には眞の怪談の性質を有しないものもある。而してその多くは、細川勝元・大內義隆・石川丈山・戶田一刀齋などの如き史的人物の名を假りてある。恐らく、作者が序中に「ただあやしく新たなる雜話小說を見およびては、心によろこび筆にしるして倦ことをしらず、ひとり書編に求るのみにはあらず、凡當時博識好事の人々、この堂に過れるには、先その郷里を問、その所に聞へし奇事をたづねてしるしとどめぬ」とあるのは眞實で、かくして蒐集した所の傳說口碑の一部から本書は出來たものである。怪談を主とした說話集で、ただ忠實に傳說を傳へようとしたのでなく、作者の藝術意識の相當働いてゐることは爭へない。そこに本書が文學として取扱はれる所以がある。（藤村）

玉松 たままつ　「宇津保物語玉松」を見よ。

玉磨青砥錢 たまみがくあをとぜに　黃表紙　三册十五丁十七圖【作者】山東京傳【畫工】喜多川歌麿【角書】太平記吾妻鏡【刊行】寬政二年、蔦屋版。【諸本】黃表紙百種（續帝國文庫）所收。【題材】「太平記」「吾妻鏡」に題材を得たやうに序文に書いてあり、角書にもそれを見せてゐるが、恐らくは假託であらう。よし「太平記」に據つたとしても、第三十五卷「北野通夜物語事附青砥左衞門事」のみであらう。多分藤綱の巷說に基いてゐるだけかと思はれる。



玉磨青砥錢

【梗概】北條時賴の時代に、諸人生眞面目となり、稼ぐを大通ともて囃す。役者は百姓となり、女形は忠五郎・庄次郎の田植唄で苗を植ゑる。不具者が役者、座頭が角力、狐が遊女、狸が幇間となる。又大磯の遊女は由井ヶ濱の汐汲となる。縮緬の古褌は出來合の頭巾に、早桶は蕎麥屋の箸、無駄な物は錢の穴と六道錢ばかりとなる。ところが藤綱は鎌倉の人々の、これ等の行爲を愚なりとし、諸事從前通りと命じ、唯これを忘るなと一文の錢を取出して人々に示す。錢の文は吾唯知足と讀まれる。

【構想】「富士人穴見物」（京傳作、天明八年刊）（別項）の辛辣な諷刺も、黃表紙的間拔けさと甘味とによつて巧妙に隱され、一見他意なき作品となり澄し、爲政者の監視の眼を危くも逃れた。京傳はこれに味をしめて、又今少しく現實に接近せしめて、この「玉磨青砥錢」を書いた。着々と進行して來た寬政の改革を、嘗て度を越してゐた通人を見た目で凝視した。「江戶生艶氣樺燒」（別項）の艶次郎、「三筋緯客氣植田」（別項）の梅枝、八重次郎が遊里の行き過

者として黄表紙種となる以上に、文武倹約の委縮者定信の施設は滑稽な戯画である。若し白河侯が偽政者でなかつたならば、「繁千話」（別項）の馬骨のやうに、辛辣な破綻を與へ得たであらう。京傳は白河侯をモデルにした藤綱から用心深く離れて想を構へ、一見民衆に力點を置くが如くに装つた。民衆の背後に在つて諷刺の矢の痛かるべき白河侯を、「富士人穴見物」の場合とは逆にし、更に催しの甘味を強め、捻つた趣向の裏に作者は莞爾としてゐる。最後の落は「照子浄頗梨」（京傳作、寛政元年刊）と同手法。【史的地位】寛政の改革を諷した作品の中「文武二道萬石通」（別項）は、天明八年に、「鸚鵡返文武二道」「天下一面鏡梅鉢」（各別項）は、寛政二年に出版され、それぞれ問題を惹起し、更に政演（京傳）が、「黒白水鏡」（別項）の畫工として過料に處せられた直後故、白河侯をモデルにした「仁田四郎」に、江戸ツ子の大きな尻の穴まで覗かせた「富士人穴見物」のやうな態度は減じ、諷刺の針は深く潜み、寧ろ「心學早染草」（別項）を動因として展開すべき教訓物に接續する兆候を匂はせてゐる。【價値】遊里と梨園とを中心として、誇張された無駄のない世界が、機智や洒落を鏤めてよく描かれ、全體に纏まつて一文錢の落に一氣に進み、輕く落ちるなど、凡手の及び難い所である。時事問題、就中特殊の一人物を取扱ふ黄表紙的方法として亦妙である。（小池）

玉水物語（たまみづものがたり）　御伽草子　一巻

【作者】不詳【名稱】主人公たる狐の化した姫の名に因る。異本の題名は、紅葉合の儀あるに基づく。【成立】室町期【諸本】古板本なし。御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷所收。「紅葉合」と題する文詞を異にする一本がある。【題材】異類婚姻物。怪婚説話の變種。葛の葉傳説や「木幡狐」（別項）の男女の位置を異にしたやうなものであるが、操を汚すに及ばぬ點が異とするに足る。

【梗概】中頃、鳥羽の邊に高柳の宰相といふ人があつた。中子に得た美しい姫を、ゆくゆくは宮仕にと望を掛けてゐた。或る夕暮、姫が乳母子の月さえといふ女房を御供に花園へ出ると、木蔭にゐた狐が姫の美しさに魅せられ、美男に化けて逢ひ度くは思ひながら、惜しい御身を徒にしてはと思ひ返したが、餌食も攝らず悶えた末、せめては朝夕御側近く仕へて慰めようと、十四五の美しい女に變じて、男の子許り持つ或る在家に頼つて養はれ、傳手を得て本意の如く高柳殿へ上り、名を玉水の前と頂いた。御手水参らせ、供御参らせ、月さえと共に御きぬの下に臥し、特に怖がる犬を御所中に置かれない事になつたり迄して他の妬みさへ受けてゐたが、玉水の心は暗かつた。三年を過した或る日、姫君の親しい方々が集つて紅葉合が催された。玉水は夜に紛れて元の宿所に行き、兄弟の狐によい紅葉を探して呉れるやうに頼むと、五寸程の枝に色は五色、葉毎に法華經の文字を揃つた[illegible]いたやうに鮮やかなのが届けられたので、姫君に奉ると、五度合せて五度姫の勝となり、この事、内にも聞召されて、その紅葉を、又姫君をも参らせるやう宣旨が下つた。玉水の前は感慨無量であつた。その頃、養ひ里の母が物怪に苦しむため、暇申して下り夜更けて一人起きてゐると、禿げた古狐が來て居り、よくよく見れば自分の伯父で、その子狐の咎もないのを病者の父が殺した報に、我もこの娘の命を取らうとしたのであつたが、玉水が心を盡して樣々に諫めたので、さしもの老狐も漸く退き、病者は本復した。霜月になり、入内の儀式は着々と運んだ。玉水も中將の君として召され、女房衆三十人の一の位に定められたが、鬱々として樂しまず、心を砕いた果に、總てを細々と書き記して小箱に籠め、我亡せて後開け給へ、人に見せ給ふなと泪ながらに姫に参らせ、當日車に乗るふりをして姿を隠した。殿では内へ御供したものと思ひ、内では常に氣分が勝れないと云つてゐたから居殘つたものと思ひ、二三日經つて何處にもゐないといふので、方々探させたが皆目知れなかつた。とある隙にかの箱を開けて姫が覽ると、文の詞の奥に長歌があり、なほこの箱は、人に開かれぬ箱なる由細々と記してあつた。姫君は畜類ながらも有難き志と泪に咽ばれた。（島津）

【參考】近古小說解題（紅葉合の項）

玉蟲の草紙（たまむしのさうし）　御伽草子　一卷

【作者】不詳【名稱】女主人公たる蟲名を取つて名づけたもの。【成立】古寫本に「天正十年水のへ午四月吉日」の奥書があるから、それ以前の作たる事が知られる（新編本「玉蟲の草子」解題）。【諸本】新編御伽草子下卷・日本文學大系第十九卷所收。平出順益の「天保四年渉獵書目」に、島津氏藏の古寫本一冊とあるは、玉蟲が最後に出家する條を載せてある本書の異本らしい（近古小說解題）。【題材】異類物。歌物語。擬人の戀愛物語で、戀書のいろいろな樣式を示さうとしてゐるのが注目せられ、後の「薄雪物語」（別項）から「新薄雪物語」「錦木」「小夜衣」（以上別項）、「好色錦木」「雲の梯」等の一系統を作つた戀書文學の先蹤をなしてゐる。異類戀愛物語としては、「のせ猿草紙」「かほよ鳥の草子」（各別項）等と同種のもの。なほ「蟲歌合」（別項）は、これと「こほろぎ草子」（別項）とを合せて作つたもののやうである。

【梗概】八月中の十日ばかり、野もせの花の色めく叢に、白練絹の十二單を纏うた輝く程美しい玉蟲姫がゐるのを、蟷螂の兵衛・蛙の雅樂助・蝗の宰相・鈴蟲の三位中將・ひぐらしの山蔭・蟬の右大臣・いほ蟲のへぼ入道・きりぎりすの帥のすけ蜂、代るがはる戀の歌を認めて玉章を贈ると、姫はそれぞれに返歌して體よく斷つた。松蟲の左大臣からの玉章だけには心を動かされ、情ある返歌を與へて遂に比翼の契を結んだ。その後蓑蟲から來た艶文は捨てて答へず、こえ蟲からの艶書には恥しめて返しばかりをした。以後、殘りの蟲共は主の定まつた玉蟲姫に玉章を贈る事を斷念した。（島津）

【參考】新御伽本解題○近古小說解題

玉藻集（たまもしふ）　句集　小本一冊

【編者】與謝蕪村【內題】俳諧玉藻集【刊行】安永三年八月京安藤八左衛門【諸本】蕪村翁全集（俳諧文庫）・校註蕪村全集（俳人編）・名家俳句集（有朋堂文庫）・蕪村一代集（俳書大系）所收。外に、河東碧梧桐所藏複製本がある。【解說】柏原の捨女、伊勢の國女、大津の智月尼、江戸の秋色女等を初め、女流の發句を四季に類別して集めたものである。千代尼の序と國女の跋があるのも、閨秀句集としてふさはしい。但しその編纂態度は寧ろ杜撰といふべく信憑し難い點が多い。勿論蕪村は自らかうした面倒な仕事など企てさうにも思はれないから、恐らく書肆が彼の名を借りたか、若しくは無理に頼んでやつて貰つたものであらう。併しとにかく女流の作だけを集めたものとしては、太田白雪の「三河小町」（別項）と、この書ぐらゐのものだから、その點に於ては珍重すべきものである。

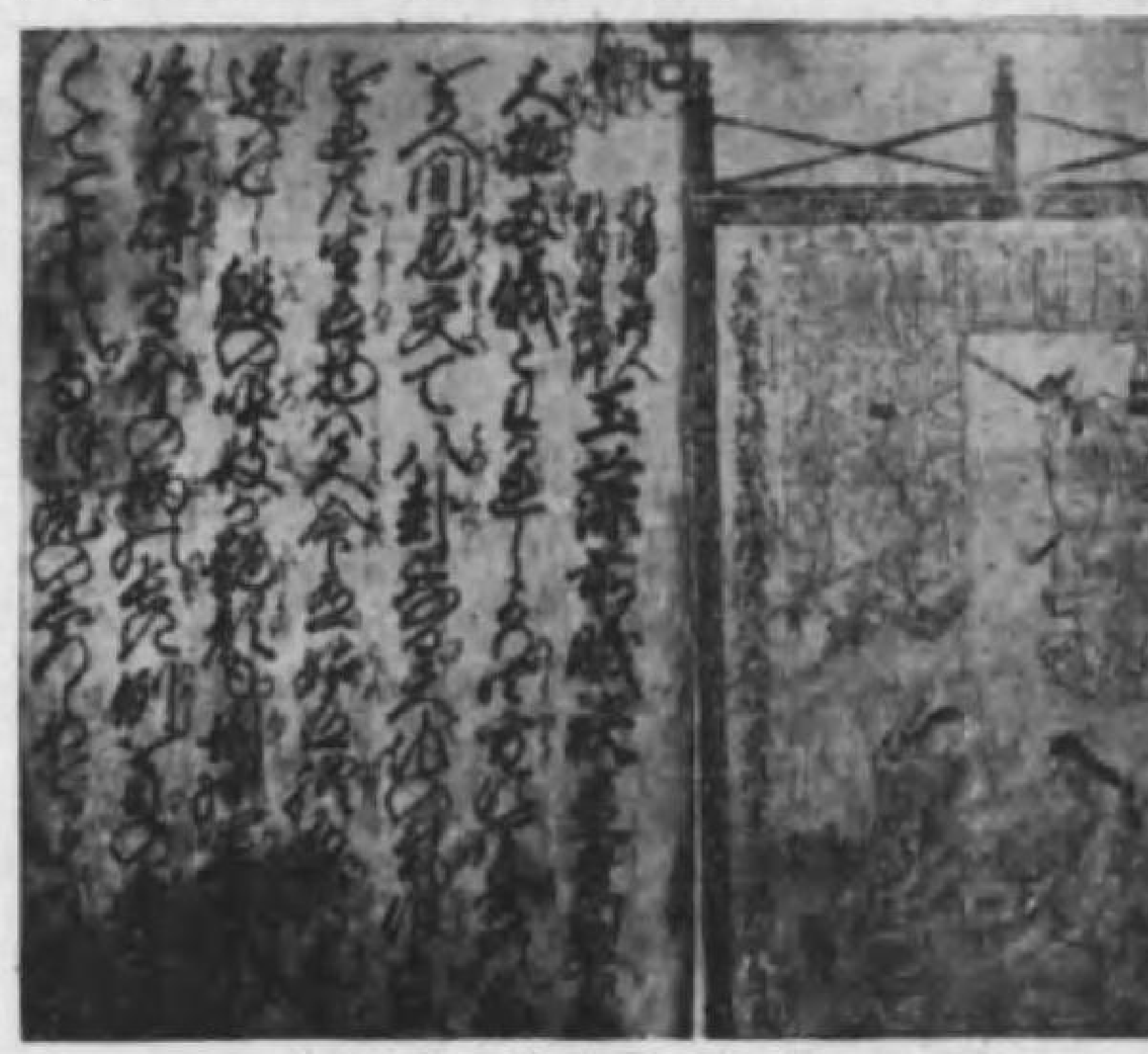
【參考】河東碧梧桐所藏玉藻集（複製本）○俳諧玉藻集（寶暦四ノ四）（穎原）

玉藻前曦袂（たまものまへあさひのたもと）　淨瑠璃　五段　時代物

【角書】（繪本增補）【作者】梅枝軒・佐藤太。【初演】文化三年三月二十六日より大阪御靈境內鶴澤伊之助座。【題材】謡曲「殺生石」に採られた玉藻前傳說を中心に、假名草子「鶴のさうし」（別項）等に據つてゐるが、本作は、寛延四年（寶暦元年）正月十四日初日、豐竹座上演「那須野狩人玉藻前曦袂」（浪岡橘平・淺田一鳥・安田蛙桂）を改作增補したものである。現行のものはこの增補の方である。

【梗概】〔初段〕天竺沙羅呂山麓の馬忠子といふ農夫、矢の立つてゐる鶴を助けたが或る時美しい女性が訪ね來りその請に任せて夫婦となつてゐる中、禁止された機織場を覗いた事から、鶴の姿となつてゐた妻は飛び去る。馬忠子は普明長者と共に、その衣を奪つた狐の大望の獨言を聞く。一方、南天竺の班足王は新に入輿した花陽夫人に溺れるが、普明の刀「獅子王」の威力で獅子が暴れこんだ爲め、花陽夫人が狐の本性を現はして逃げた。これを見た王は、自ら發心出家する。〔二段〕唐土殷の紂王の許に入輿する妲妃の行列に狐が乘込み妲妃を殺してその姿を借りる。紂王女に魅せられ惡政を行ふ。臣の文王は我が子の肉を食はされたりしたが太公望の智謀を借りて紂王を弑し、妲妃を名鏡の力で斬り殺したが、その尾から一脈の陰氣が立ち上り、金毛九尾の狐となつて東方に飛んで行く。〔三段〕京都清水の場で安倍采女之介と藤原道春の娘桂姫は互に見染める。鷲塚金藤次は薄雲王子の使として道春館に來り、懇望の獅子王の劍を獻ずるか、桂姫の首を渡すかと迫る。劍は奪はれてゐるので、後室萩の方の請に任せ、二人の娘の中、双六に負けた方を討つと約束する。桂姫が勝つたが、金藤次はその首を斬り、采女之介に刺されながら、桂姫はわが實の娘の拾子であつたと語り、獅子王の劍の所在を教へて絕命する。〔四段〕道春の妹娘初花姫は玉藻前と改めて入內したが惡狐はこれを殺してその姿を借り、薄雲王子と密通して謀逆を計る。女御達は玉藻前の狐なるを知つて斬りつけるが失敗する。一方、那須野原の百姓十作方では娘おやなの姿が二つとなり、入聟大六が贋の獅子王の劍を出すと一方が狂ひ出すので、狐の業と斬り殺すと、それが本當のおやなで、一人は顏のよく似た傾城龜菊であつた。入り込んだ十作が眞の劍を有つとにらんだ大六は、故意におやなを斬つたのである。三浦之助・上總之助と共に、十作に劍を渡せと迫る。十作は龜菊がおやなと双子のわが子であると覺つたので、切腹して劍を龜菊に渡した。大六は妻を殺した事から發心して玄翁と名乗る。〔五段〕玉藻前は、阿部泰成の祈で本性を現はして那須野原へ逃げ、薄雲王子は四國に流される。那須野原で、三浦・上總が惡狐を退治するが、石となつて生類を惱ますのを、玄翁の教化の力で石は碎ける。

【構想】原作では日本國內を舞臺とし、玉藻前の惡事とその退治とに那須與市などをとり入れてゐる。改作では序段及び二段目を唐天竺の世界とし、玉藻前の三國傳來を明示して構想を大にし、又觀衆の好奇心に訴へてゐる所も深くしてある。三段目「道春館」は原作二段目の切「通忠館」を改作したのであるが、舞臺面の技巧を加へ、又「東鑑御狩卷」の大藤內、「假名手本忠臣藏」（別項）の加古川本藏、「源平布引瀧」（別項）の瀬尾十郎などから系統を引いた金藤次の最期を加へたりして今日も歌舞伎に折々演ぜられる。四段目の切には「双面」を取入れた。概して技巧本位の改作ではあるが興行成績はこの方が勝つた。（福田・守隨）



玉藻前曦袂（豐竹座上演正本）

玉柳（たまやなぎ）　川柳集　一冊

【編者】五扁【刊行】天明七年【解說】初代川柳の點にかかる本で、牛込築土連の月次選句中から、編者が更に佳吟を拾録したものである。（西原）

玉依姫（たまよりひめ）　「火雷神」（ほのいかづちのかみ）を見よ。

蒼生子（たみこ）　歌學者・歌人

【姓名】荷田氏。民子とも書く。【生歿】享保七年に生れ、天明六年（二四四六）二月二日歿す。享年六十五【墓所】江戸淺草の龍寶寺【閱歷】蒼生子は、荷田在滿の妹。早く在滿に從つて江戸に來り、後某氏の妻となつたが、間もなく夫の死にあひ、歸來兄の家に在つて再嫁しなかつた。在滿に和歌・歌學を學び（伯父春滿にも學んだであらう）、後紀州公の女公子に仕へたが、四十九歲の時、仕を辭して淺草に住んだ。その學才を稱せられ土佐侯・姬路侯・岡侯その他諸侯の夫人女公子に招かれて教へた。蒼生子は性質明るく、俊敏で、女丈夫の意氣があつた。神官の家に生れて終世神を信じ、端嚴身を持した。【著書】歌集「杉のしづえ」（別項）○古今和歌集（校正集覽本、板行されてゐる）【業績】蒼生子は業績としては「古今集」の校正本を殘したに過ぎず、歌人としても格別にすぐれてゐるとも思はれないが、女性には珍しい聰明と博識と女丈夫的意氣とを以て、荷田派の學問の勃興のために氣を吐いた。さうして諸侯の子女の教育といふ方面に、より多くの功績を認めるべきである。（久松）

【參考】荷田東麿翁（大貫眞浦）

田宮坊太郎（たみやばうたらう）　「幼稚子敵討」（をさなごのかたきうち）を見よ。

田村（たむら）　「勝修羅物の謠曲」（かちしゆらもののえうきよく）を見よ。

田村松魚（たむらしようぎよ）　小說家

【本名】昌新【別號】入江新八【閱歷】明治七年、土佐國宿毛に生れた。初め上京して矢島六一郎の世話を受け、後、幸田露伴の門に入つた。明治

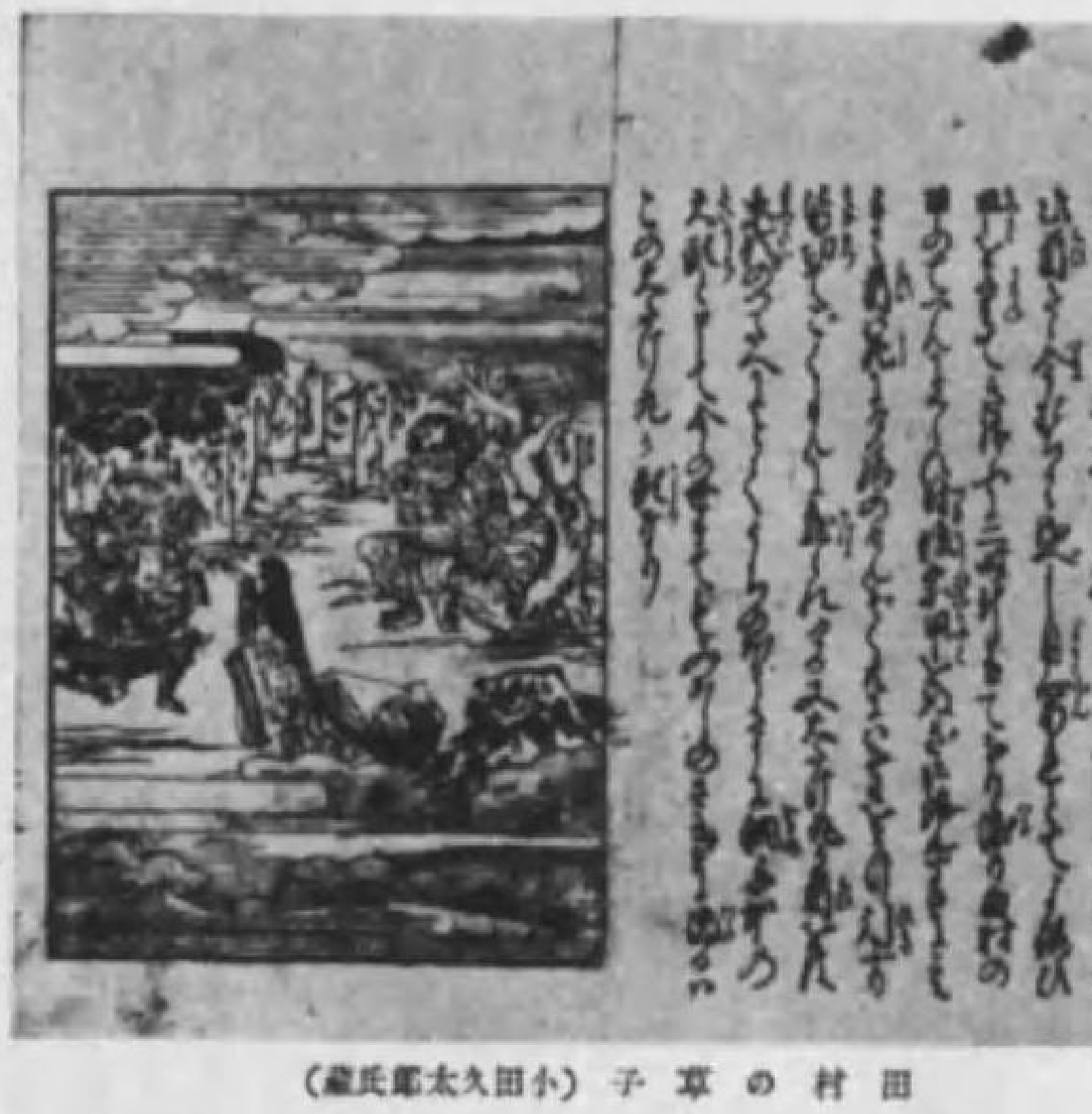
三十年、單行本「若旦那」を公にし、次いで三十一年二月の「新小說」に「礒馴松」、八月に「五月闇」等を發表するや、世評翕甚、「帝國文學」記者の如きは、天才として激稱した。これはもとより過褒であつたが、前途有望の作家である事は、一般の認むるところであつた。三十五年渡米、インデアナ大學に學ぶこと一ヶ年、四十二年歸朝、「北米の花」を公にした。この年、同門の閨秀作家佐藤俊子（露英）と結婚した。同年萬朝報社に入り、記者たること五年、次第に文壇に遠ざかるに至つたが、三十年よりその頃迄に公にせるもの長短六十篇を超えてゐる。十年前、俊子が彼の許を離れて單身渡米した後、骨董店を開いて今日に至つた。その間、通俗雜誌に二三の長篇小說を書いた外、多く言ふべきものがない。（高須）

田村俊子（たむらとしこ）　小說家　【本名】敏子　【別號】露英　【閱歷】明治十八年、東京淺草藏前の米穀商の佐藤家に生れた。第二高等女學校卒業後、女優市川久米八の門に入り、毎日新聞の文士劇に出演したことがあつたが、後、文學に志し、幸田露伴の門下となり、佐藤露英の名で小說を書いた。最初の作は、明治三十六年の「文藝俱樂部」に出た「露分衣」で、翌年同じ雜誌に「夢の名殘」「春の潮」を出した。四十二年に田村松魚と結婚。その後、中村吉藏の社會劇「波」上演の時、女主人公となつて東京座の文士劇に出演したことがあつた。四十四年、大阪朝日新聞の懸賞小說に應募當選した「あきらめ」によつて漸く頭角を現はし、爾後、その作風に一轉化を生じ、その纖細なる官能描寫に最も新しき技巧を稱せられ、「炮烙の刑」「木乃伊の口紅」「眞棒」「戀むすめ」等續々得意の作品を發表し、大正三・四年の頃はその全盛時代であつた。その後、情人を趁うて渡米してからは、杳としてその消息に接しない。【批評】彼の特色を示すものは、「あきらめ」の外、短篇集「誓言」「女作者」等がある。一葉とくらべると、幾らか解放せられた女性といふ感じが作品の上に現はれ、近代的香氣が漂うてゐるが、未だ在來の道德から離れ切らぬ日本的な味もある。（高須）

田村成義（たむらなりよし）　劇場關係者　【戲號】室田武里（むろたぶり）　【生歿】嘉永四年二月一日、江戶日本橋元大工町に生れ、大正九年十一月八日、日本橋區本材木町一丁目にて病歿。享年七十　【法名】釋晴良信士　【閱歷】幼名を猿之助といひ、實父は眼醫者福井壽仙。十六歲にして父を失ひ、囚獄石出帶刀組の同心鍵役田村金十郎の養子となり、囚獄見習・鎭臺府附・囚人前科取調係となつたが、明治三年辭職し、猿若町の芝居に刀劍を入れる事を思ひ附いて島佐太郎と變名したが、借金のため靜岡へ出奔、翌四年歸京、友人の勸めで代言人を志し、翌五年より神田小川町の法律學校に通ふ傍ら日々裁判所へ出頭し、十年司法省の試驗に及第、免許代言人となつた。十二年久松座々主の依賴で守田勘彌と中村翫雀の間を調停してから勘彌と懇意になり、新富座演劇會社の法律顧問となり、又五代尾上菊五郎とも親しくなつた。十八年勘彌と菊五郎の衝突に際し菊五郎に味方し、その出勤した千歲座に始めて太夫元となり、自家の記錄を提供して默阿彌に「四千兩小判梅葉」を脚色させ、大入を取つた。演劇改良會にも關係し、又二十年の天覽演劇にも盡力した。二十二年冬歌舞伎座落成に際し千葉勝五郎・福地櫻痴と共に入座、その後、歌舞伎座の組織變更等に伴ひ、相談役・場內取締等に歷任したが、四十一年十一月から市村座を讓り受け、若手俳優に六代菊五郎・吉右衞門を加へての興行を始めた。歌舞伎座の松竹移讓後は、市村座の經營と菊・吉以下若手俳優の養成に專念し、大正九年九月頃より腎臟炎再發に惱み、遂に逝去した。編著に「續々歌舞伎年代記」（別項）、「（劇壇秘史）無線電話」がある。

【參考】演藝畫報（大正九ノ一二）〇新演藝（同上）〇明治劇壇五十年史　關根默庵　（篠田）

田村の草子（たむらのさうし）　御伽草子　二卷　【作者】不詳　【別名】「鈴鹿の草子」と題する異本がある。【成立】室町期　【諸本】古板本は正保三年板（杉田勘兵衞開版）。室町時代小說集に收む。異本「鈴鹿の草子」は一卷の寫本にて傳存。【題材】英雄譚。怪物退治說話。觀音靈驗譚。本地物。俊仁・俊宗父子二代の武功を叙してゐるが、物語の中心は下卷の俊宗及び鈴鹿御前に關する神婚傳說的武勇傳說で、俊宗の亡妻を尋ねての地獄行も附加せられてゐる。俊仁は藤原利仁、俊宗は坂上田村麿に當り、共に史上の英雄で、特に蝦夷征伐で有名であるが、父子ではない。俊宗の名も史實の根據はない。利仁の新羅征伐の意圖の事は「今昔物語」（卷十四）、「古事談」（第三）等に見え、下野高座山の賊藏宗・藏安を討つたことは「鞍馬寺緣起」に載せ、又阿部高丸が田村麿に誅せられたことは「諏訪大明神繪詞」に記され、田村・利仁の將軍等が陸奧の惡路王を征した時の賊寨田谷窟の遺跡に就いては、「吾妻鏡」（文治五年十月二十八日）にも出てゐる。田村の鬼賊退治、特に大だけ丸の條は、「立烏帽子」（別項）の內容と共通する所があり、鈴鹿御前との關係は「あきみち」（別項）型をなし、又、淸水の靈驗譚である事と共に、謠曲「田村」の素材とも同じである。說話としては、直接には大江山傳說と關聯し、遠く大蛇退治神話からの流をも引いてゐる。俊仁の大蛇退治亦然りで、これは俵藤太傳說に交渉があらう。又地獄行は諾尊の黃泉行神話から、卷初の俊すけに關する怪婚說話は豐玉姬神話から來てゐる。本書史實に基づいた點もあるが、大體には空想的分子が濃い。「鈴鹿の草子」とは大體同じであるが、內容・詞章に異同があり、俊重を俊ゆうといふ源氏の將軍とし、田村の幼名ふせり殿をふせや丸、後、朝日殿、又改めて父俊仁の幼名を繼がせて日りうとし、りやうせん坊をこんさう法師とし、鈴鹿の賊は大だけ丸でなくて、天女の鈴鹿御前で、これを立烏帽子を着けた怪物とし、且つ田村と鈴鹿の組合せの事があり、たか丸を近江國蒲生山あくしの高丸とするなどの違ひがある。



田村の草子（小田久太郎氏藏）

【梗概】昔、藤原俊重將軍の子俊すけは嵯峨野の遊覽に出逢つた一美女を妻としたが、やがて出產に際し、禁を犯してその本體の大蛇である事を發見したので、妻は一子を日本の主としようとの本意は破れたが、天下の將軍となすべき事を語り、その子を日りう丸と名付け、且つ未來の出來事を豫言し、自身は益田ケ池の大蛇だと告げて去つた。果して日りう丸三歲の時父殺し、七歲の時近江國みなれ川のくらみつ・くらへのすけといふ二大蛇退治の宣旨を蒙り、相傳の角の槻弓・神通の鏑矢を帶して下り、七年の後遂に功を遂げ、將軍に任ぜられ、俊仁將軍と呼ばれた。その後、堀川中納言たかとをの姬君照日の御前に契を籠めたが、帝は歌合に託して姬を召し留められ、俊仁には伊豆配流を命ぜられたので、下向の途次彼の二大蛇の魂魄に命じて都を荒させ、ために間もなく赦免となつたが、返された姬は又も辻風に攫はれ、俊仁は靈夢によつて愛宕山に登り、それが陸奧國たか山の鬼惡路王に連れられた事を知り、鞍馬の毘沙門天に祈願を籠め、劍を授かつて發足し、同國はつせの郡田村郷に到つて賤女の許に一宿した後、目指す鬼の城を襲つて惡路王を平げ、姬を伴つて歸洛した。田村郷の賤女の擧げた男子はふせり殿といひ、十歲で都に出て父に對面し、田村丸と名付けられ、更に元服後は、いなせの五郎阪上の俊宗と名告つた。俊仁は五十五歲の時唐土征伐を企て勅許あつて船出したが、明州の津で惠果和尙の率ゐる不動明王等百千萬の大軍に阻まれ、奮戰の末遂に不動の利劍に斬り伏せられ屍となつて博多に歸つた。俊宗は十七歲で大和國奈良坂山の金飛礫（かなつぶて）を打つ怪盜りやうせん坊を討つべき宣旨を蒙り、發向して神通の矢で射伏せて捕へた功により、將軍を嗣いで陸奧のはつせの郡と越前とを賜つた。更に伊勢國鈴鹿山の鬼神大だけ丸討伐の命を受け、靈夢の告によつて天女鈴鹿御前と緣を結び、女が鬼の力を殺ぐために鬼の藏する怪劍三口のうち大とうれん・小とうれんを奪ひ取つた上に、千手觀音・鞍馬の多聞天の加護があつて大だけ丸を誅し、恩賞に伊賀の國を賜はつた。俊宗と鈴鹿御前との間にはしやうりん女といふ一女があつた。重ねての宣旨で俊宗が近江國のたか丸といふ鬼を攻め、信濃國ふせやが嶽・駿河國富士の山・率土ケ濱と逃れるを次々に追ひ詰め、更に日本と唐土との境の海中の巖窟を固守したのを攻め倦ねた時、鈴鹿御前の助力によつて誅戮したが、鈴鹿御前は前に三口の一つで天竺にあつた爲め奪ひ損ねたけんみやうれんといふ劍に、大だけ丸の魂が移つて再び陸奧のきり山嶽に籠る相があると言ひ、果してそれが事實となつて宣旨が下り、俊宗は用意して置いた駿馬に乘り、鈴鹿御前も飛行の車で馳せ附けて遂に討伐の本懷を遂げた。斬られて舞ひ上つた大だけ丸の首は、俊宗の甲に喰ひ附いたといひ、この首を末代の傳へにと內の寶藏に納め、千本の大頭といつて御輿の前に渡すのがこれであるといふ。やがて鈴鹿御前は病歿したが、悲歎にくれた俊宗が、自ら冥府に赴いて取り戾して來た。これを田村將軍鈴鹿御前二世の契といふ。大將軍は觀音の化身、鈴鹿御前は竹生島の辨財天女である。淸水寺建立の大願の尊さ、由緒深い田村堂の名と共に、今に傳へてこの將軍の記念として仰がれる。

【影響】近松作「田村將軍初觀音」、淺田一鳥・豐田正藏合作「田村麿鈴鹿合戰」（別項）がある。特に後者は構想上の密接な關係はなく、寧ろ「阿漕の草子」（別項）の方に交渉が深い。又謠曲に「鈴鹿」「淸時田村」「阿黑王」等がある。必ずしも本書からの影響とは斷じ難いが（田村からの影響は言ふまでもない）、同材或は類材の作である。（島津）

【參考】近古小說解題　〇室町時代小說集解題　〇廣益俗說辨卷九〇鈴鹿の山賊と田村將軍鬼退治の傳說大西象一（國文大正一五ノ七）

田村麿鈴鹿合戰（たむらまろすずかがつせん）　淨瑠璃　五段　時代物　【作者】淺田一鳥・豐田正藏　【別稱】勢州阿漕浦　【興行】初演は寬保元年九月十日より豐竹座。翌寬保二年正月江戶の肥前座で興行され、降つて安永六年十二月北堀江座で三の切まで、寬政八年三月道頓堀東の芝居で四段目を竹本綱太夫、文化五年正月御靈境內芝居で「勢州阿漕浦」の外題で濱邊の段、平次內の段を出し、これも綱太夫が語つてゐる。以後は度々の繰返しに常に「勢州阿漕浦」の外題を用ひて、今日ではこの外題で通つてゐる。因みに上記の竹本綱太夫は、當代の名人といはれた三代綱太夫で、人形芝居の興行年表を閱するに、「阿漕の平次」の淨瑠璃は、この人によつて復活されたもののやうである。

【題材】謠曲「田村」の系統を引く紀海音の作「坂上田村麿」（別項）と、山本土佐掾の正本「あこぎの平次」（別項）とを取合せて脚色したものである。

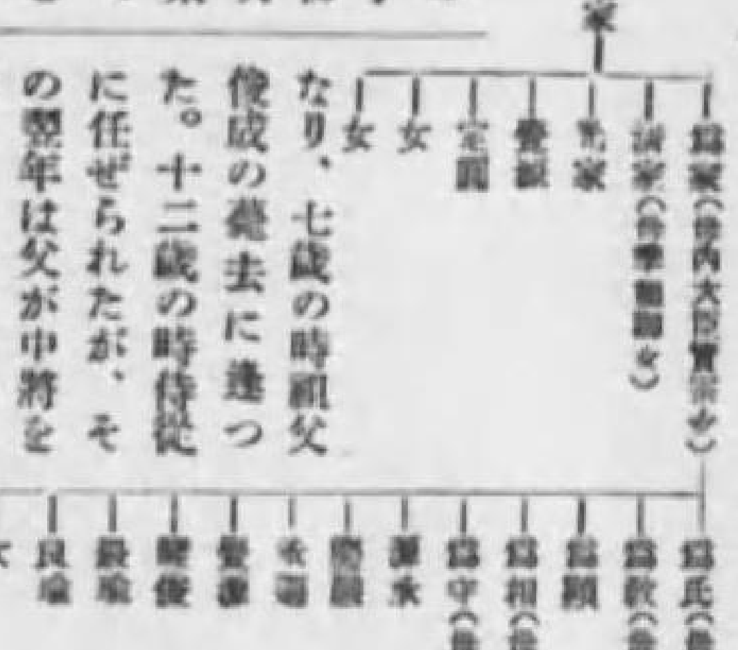
【梗概】天智天皇の御代の逆賊藤原千方、高國山に隱れ、妖術を學んで百八十餘歲の長壽を保ち、桓武帝の御代に及び隱者岡倉と稱し、火鬼・水鬼を驅使して三種の神器を奪ひ、皇弟水上王子及び藤原小黑丸を與黨として、柱石の臣坂上田村麿を滅ぼして天下を覆し、我が孫を帝位に即けようと企てた。尤も三種の神器は、これを奪取する際、十握の寶劍だけは伊勢海へ落した。一方に於て田村麿は兇徒の企を探知し、謀計を以て神器二種を奪還し、神鏡の威力によつて岡倉の正體を照破して逆賊の心膽を寒からしめたが、更に寶劍の搜索に心を碎いた。これより先、田村麿の近侍桂平次淸房は、田村麿の女春姬との戀に落ちた爲めに主君の不興を蒙り、且つ父平內兵衞岡房の勘當を受けたが、父の橫死後母と春姬とを伴ひ、阿漕浦に隱棲して阿漕の平次と稱へ、漁師となつて世を渡つた。母の難病平癒の料として鰐魚（やがら）を得ようとて禁漁區へ網を入れて一振の名劍を得た。これは先年妖賊が落した十握の寶劍であつた。併し巡檢者のために簑と笠とを押收され、その笠の文字が證據となつて處刑される事となつた。そこへ平瓦次郎藏が出て問答の末、自分が身代りに立つ事となる。次郎藏は實は三種神器の守護を命ぜられながら、それを妖賊に奪はれた笠縫の神職卜部友久の養子中川宇內といふ者で、平次の家來筋に當るが、父を救ふために寶劍を探してゐたものであつた。かくて平次夫婦は上京して寶劍を田村麿に差上げた。三種神器が揃つたので田村麿は、愈々逆賊を鈴鹿山に攻め滅ぼし、平次は小黑丸を討つて父の仇を報じるといふ

に終る。各段の場割を示せば、初段は宮中記錄所、樽井の田村館、笠置の宮舞樂の場。第二段は春日野藤の鳥居側の茶屋、桂平次館の口・切。第三段は高岡山狩場、岡倉庵室の口・切。第四段は「道行しるべの駒」、阿漕浦濱の段、平次住家の段。第五段は鈴鹿山合戰で大團圓となつてゐる。

【構想】原作たる山本土佐掾の「あこぎの平次」を飜案するために、田村麿が鈴鹿山の妖賊退治を題材とした淨瑠璃を綯ひ合せたので、筋は非常に荒唐無稽で複雜なものとなり、その間に色々の技巧も弄されてゐるが、それだけ原作に見るやうな統一性は失はれてしまつた。後になつて四段目の阿漕浦及び平次住家の段だけが引放して演ぜられるやうになつたのは當然で、當代の綯ひ交ぜ技巧の短所を暴露してゐる作の一例とも見られる。【附記】本曲は今日行はるゝ「勢州阿漕浦」（通稱、阿漕の平次）の原作である。「勢州阿漕浦」を割書にして「鈴鹿合戰」と題した正本もある。內容は同一で、後に改題されたものである。　（黒木）

爲顯（ためあき）　歌人【姓】藤原【法號】明覺【生歿】未詳。大略後嵯峨・後深草・龜山・後宇多諸天皇の御代の人。【系圖】祖父に藤原定家父に爲家を持つてゐる（爲家參照）。但し旣に兄として爲氏や爲教がゐたのみならず、老父が晩年鍾愛した繼母阿佛にも、爲相・爲守等の弟が生れて、彼の地位は顯著なものでなかつた。【閱歷】評傳を缺くけれど、兄弟の源承の書いた「和歌口傳」等によるも、その不遇なる生立の一般を推するに足る。父の編した「續後撰集」「續古今集」に、兄の爲氏や爲教はその名を並べてゐて、彼のみが除外されてをり、「續拾遺集」の成立を見た時も、甥の爲世や爲兼の名の出されてゐるに拘らず、爲顯の歌は申譯のやうに一首選出されたにすぎない。それも、相當歌才の存したことは、弘安元年に百首歌を奉つてゐることでも知られ、「和歌の浦に沈み果てにし捨舟も今人並の世にひかれつゝ」の述懷歌（新拾遺集）に依るも、ほぼ想像することが出來る。かくて五位の地位を得た若さで、決然、出離の身となつた。「いかにわが結びおきける元結の霜よりさきにかはりはつらむ」（續拾遺集）と云ふのは、その際の詠嘆である。その後、都をさすらひ出て、東路の方に庵を結ぶ日が多かつた。「東路の奥手の山田かりにのみ思ひし庵も住みなれにけり」（新千載集）と回顧の一端を洩らしてゐる。或る年、舊知の住吉神主津守國助が、偶然關東に訪れて來たので、同伴の上歸京することを內諾しながら、それも遂に實現しなかつた。その際も、「契ありてめぐりあひぬる同じ世に命のうちの道は隔つな」と心情の程を吐露してゐる（新後撰集）。要するに、淋しく虐げられた一生であつた。【作品】勅撰集に選入されたその作は、續拾遺集一首、新後撰集三首、新千載集一首、新拾遺集一首、新續古今集二首、計八首にすぎない。「竹園抄」（歌論書）の著者が爲顯であるか否かと云ふ事に就いては、「諾否隱顯」に假託說のある程の書である。「讀方深秘抄」とも呼ばれ、續群書類從第四六四に收載されてゐる。【作風】一般に作風が主觀的で、生の問題を取上げて題材にしたものが多い。「頼まじな賤の心を知らぬ間のうき身に深き思ひありとも」（新續古今集）可なり複雜な思想を簡約し得る手法の一例ともなるであらう。
【參考】和歌口傳　（齋藤〈清〉）

爲章（ためあきら）　國學者【姓名】安藤氏、初め爲明といふ。通稱右平、後、新介【號】年山【生歿】萬治二年生れ、享保元年（一七一六）歿す。享年五十八【學統】詠歌は中院內府通茂に、國學は契沖に師事した。【閱歷】丹波の人、父定爲、また朴翁と云ひ、初め伏見宮に仕へ、致仕の後、祖父の故址である千年山の麓尾口村に隱棲して老を養つてゐた。爲章はその子として兄爲實と共に同じく伏見宮に仕へたが、後、兄と共に水戸彰考館の寄人となり、「大日本史」や「禮儀類典」の撰にあづかつた。兄は七百石、弟の爲章は三百石を賜うた。爲章は單に儒學のみならず、國學和歌をも好み、その方面の研究にも從つたが、光圀が、「萬葉集」の註釋を企つるに及んで、その事業にも與り、屢々大阪の圓珠庵契沖（別項）の許に到り、その學に私淑すること深かつた。かくてその感化をうけて「萬葉集」のみならず、「源氏物語」「榮花物語」にも、獨自の研究を行つた。その故園、千年山にちなんで年山と號し、その歌集も「千年山集」と稱した。子もなく嗣子も養はなかつた。【著書】紫家七論（）榮花物語考 ○年山紀聞（各別項）○年山打聞（國學大觀第六所收）○千年山集○契沖行實。【人物・業績】爲章は儒敎的敎養を受けて謹嚴な人物であつたらしく、水戸風の史學的考證的學問を以て學界に多くの業績を殘した。「年山紀聞」に於ける斷片的な記述や考證も、種々の學說を殘してゐるが、殊に「紫家七論」及び「榮花物語考」の所說は注意せられる。「紫式部日記」によつて、「源氏物語」が赤染衞門の作でないことを考證した點に、その最も著しき點を見る。ただその儒學者としての立場のために、紫式部を道德的の人物とのみ解したり、「源氏物語」を勸善懲惡主義のもとに解釋したのは、從ひ難い點であるけれども、なほその整然たる論理的組織は、評論史上の偉觀である。
（久松）
【參考】近世畸人傳卷五　作家傳



爲家（ためいへ）　歌人【姓】藤原氏【法號】融覺・靜眞・中院禪師・冷泉禪門・民部卿入道など。【生歿】建久九年に生れ、建治元年（一二七五）五月一日（一說四月二十九日）歿。享年七十八【墓所】嵯峨釋迦堂附近、厭離庵の前【學統】歌學の家に生れ、父定家の敎養を受け、相傳の學を子息に讓つた譯であるが、その子孫の間に二條・京極・冷泉（各別項）三家の鼎立を惹起せしめた。【閱歷】父三十七歲の年に出生、五歲の時一品昇子內親王御且儀で從五位下となり、七歲の時祖父俊成の薨去に逢つた。十二歲の時侍從に任ぜられたが、その翌年は父が中將を辭して申請する所あり、左少將に昇つた。昇殿を許されるに及び、新帝順德院に近侍した。兄弟の中父の寵を獨專した彼は、かくて多幸な少年時代を經、二十歲（建保五年）には早くも中將に轉じ、近江權介に美作介すら兼ねてゐた。彼は若い時代は和歌よりも鞠道などを好み（明月記、建保元年條）、蹴道などをも好ん

だやうである。而も公家に於ける未曾有の大事件とも云ふべき承久の亂の勃發が、爲家二十四歲の時である。その翌々年出家を決意し、慈圓に諫止された事は有名な逸話になつてゐるが、この覺悟は歌才の不足を嘆いた外、順德院に殉じ奉るの心や世態に對する絕望の心も混つてゐたものと思ふ。ともあれ歌道に全力を傾注し、まづその年の八月に出來たものが「爲家卿千首」である。かくてその官職の方も、順潮に昇進し、藏人頭（嘉祿元年）、參議兼侍從（同二年）、更に右兵衞督（寬喜三年）、右衞門督（貞永元年）を經て、嘉禎元年には位の方も、父が建保三年平野行幸賞讓によりて從二位に敍された。父は七十一歲で漸く權中納言たり得たのであるが、爲家は三十九歲（嘉禎二年）早くも父の官に追付き、やがて權大納言に昇り（仁治二年）、民部卿となり（建長二年）、發病により五十九歲（康元元年）で出家した。而も千首を詠出した以後、彼の歌壇的活動甚だ微々たるもので、父が「新勅撰集」を撰した時も僅かに六首の選入を受けたのみ（時に三十八歲）。勿論父の薨後は、宗匠的地位を襲うたわけであるが、出家前の業績としては、寶治二年の百首歌と、建長三年の「續後撰集」の撰定位のものである。出家後（二十ヶ年）に於ても名の傳へられてゐる百首三度（弘長元年・文永二年・同八年）に過ぎず、その他歌學上の著述に「詠歌一體」（弘長年中）撰集に「續古今集」を數へ得るに過ぎない。その撰定にも他に四名の者が加へられ、大に悶々たるものがあつたらしい。晩年に於て餘還暦を越えながら、後妻なる安嘉門院四條（阿佛尼）の愛に溺れ、遺領所分の紛爭は、延いて歌壇の對立となつた。

【作歌・編著】爲家の作は「續拾遺集」以後の勅撰集にも甚だ多い。「續古今集」「續拾遺集」何れも四十首を越え、「玉葉集」に至つては五十餘首の選入を見てゐる。これには歌系上その地位の有利と云ふ事由を除外することは出來ない。彼には家集らしい家集が遺つてゐないほど、作歌の數も父祖に比して多くない。○爲家卿千首（中院禪門千首とも。貞應二年八月作者二十六歲の時の詠草。今の奥書に二十五歲とあるは誤記であらう。定家及び慈圓（家隆ならんかとも云ふ）の合點がついてゐる。（類從本第一六〇に收載、但し一千首中參部と雜部が一首づつ缺）○爲家集七卷八冊（元祿七年刊本。中院大納言集・中院詠草とも云ふ。圖書寮には顯本の古寫本が三本藏されてあるが、何れも部立を設け、歿後の編らしい）○爲家卿藤河題百首一卷（爲家が父定家の藤河百首の題、所謂百首和歌題で詠んだ歌集で、兩百首を合して藤河題百首とも呼んでゐる。類從卷三九〇）○爲家一夜百首一卷（未刊。立春水と題した作以下、一夜で詠んだ百首。圖書寮に寫本を藏す）○新撰六帖題和歌六卷（單に新撰六帖とも。爲家の外、衣笠內府（家良）・知家・信實・光俊の五人が寬元二年、古今六帖の題で詠み、相互に合點したもの。續々群書類從一四、歌文部）○詠歌一體（別項）（歌道の書・八雲口傳・三賢秘訣等何れも別名乃至抄本である）。（その他、爲家の歌論を窺知すべきものに、阿佛尼著の「夜の鶴」があり、「河合社歌合」（寬元元年、類從第一九九）の判詞、「百三十番歌合」（寶治二年院歌合とも。類從第二〇〇）、「後嵯峨院歌合」（寶治二年未刊）の判、「續後撰集序文」等が遺つてゐる）○「古今集抄三卷（「古今和歌集聞書」とも。爲家、父より傳へられた古今の註釋）○後撰集正義一卷（後撰集秘抄、後撰集聞書註とも。爲家、父より[illegible]「古今」及び「後撰」の口傳、嘉禎三年夏に別紙追を授けられた。これを本にして「後撰集」中主要なる歌につき、古說の誤を正し、定家の新解を掲げたもの。卷末に、「拾遺」以下「千載」に及ぶまでの集の批評、「後撰集」の諸本及び歌數等に關する附記がある。續類從四五四收載。文明時代の古寫、圖書寮藏）○三代集抄三卷（三代集に關しての爲家の說を輯めたもの。佐方宗佐筆本。神宮文庫藏）○萬葉集佳詞一卷（萬葉集中の名句を拔出し略註を添へたもの。父定家の業かとも云ふ。長祿四年の奥書本、竹柏園藏）○續後撰和歌集○續古今和歌集（各別項）

【作風】彼は歌道を家業とした始祖である。この點から彼は父定家の歌學の忠實な繼承者であり、從つてその歌風は法式的・保守的・類型的の傾向を持つ。彼の歌に、「垂乳根の道の知べの跡なくば何につけてか世に仕へまし」とあるは、彼に於て全く僞りなき告白であつたと云つてよい。この點より彼が「詠歌一體」の中に題詠を重視し、古語尊重の態度に出てゐるなど、十分說明がつく。「あだになぞ咲き始めけむ古への春さへつらき山櫻哉」（續後撰集）の詠の如きは、その得意としたものらしいが、彼の家集を綜覽すると、山櫻・五月雨等の諸作がいかに類型的であるか、その他表現の技巧にしても獨自性がない。この意味に於て彼は穩健な宗匠作者に自らを陷した憾がないでもない。又彼は作風の平淡化を主張した。「なだらか」「きよげ」「やすく」「わざとなく」等の評語がそれである。こゝにも彼は自らを努めて平易輕妙な作者に裝はしてゐる。但し彼の歌に多くの表象鮮明の叙景歌、句格高調の抒情歌も存する。

早瀨河なみの懸こす岩岸にこぼれて咲ける山吹の花（續古今集）

朝ぼらけ嵐の山は峯はれて麓を下る秋の川霧（續拾遺集）

[illegible]風さむき沙路にかゝり[illegible]（玉葉集）

旅衣つま吹く風の寒き夜に宿こそなけれ猪名の笹原（續拾遺集）

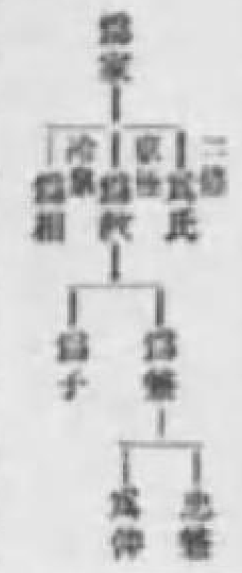
特に、阿佛尼と贈答した相聞歌に至つては、純情の漲るものが多い。此處に於て聯想するものは、「扶桑名賢傳」等に叙せられてゐる歌仙像や緣起繪詞類の畫家としての彼である。また「菟玖波集」に三十九句の入選を見た連歌歌人としての彼である。彼に對し大たる評價は與へられないまでも、自ら歌僊たり、宗匠に依つて自らを縛した彼であつたと云ふことは明瞭に云つてよい。

【參考】明月記○東常緣聞書○權大納言爲家卿五七日諷文○桐陰隨筆○橘窓自語○尾張家苞○扶桑名賢傳○公卿家傳○大日本史○類聚名物考　（齋藤〈清〉）

爲起（ためおき）　神道家【姓名】大山氏。通稱左兵衞【號】萃水【生歿】慶安四年生れ、寶永年中歿す。【閱歷】京都稻荷神社の神主松本爲殼の子、出でて大山正康に養はる。山崎闇齋の門に入り、垂加神道を學ぶ。貞享四年、伊豫松山侯の招きに應じ、味酒祠神職となる。門人來り學ぶもの數百人。その說、當時の神道の儒佛に習合し、巫覡に混雜せるを排斥し、天地無窮の正道を發揮せんと主張した。【著書】神道奧儀味酒講記○古語拾遺私考○稻荷私記○萃水草○唯一論等　（田中〈義〉）

爲兼（ためかね）　歌人【姓名】藤原氏。京極爲兼・冷泉爲兼。また入江爲兼とも稱する。【法號】蓮覺。後には靜覺と改めた。【生歿】建長六年に生れ、元弘二年（一三三二）三月二十一日河內に歿す。享年七十九。【學統】父爲教

の時、御子左（二條爲氏）、毘沙門堂（京極爲敎）、冷泉（爲相）の三兄弟が相鼎立する形となり、各子孫は、各流の傳統を固守する狀態に立ち至つた。但し京極派は、二條派に比して振はず、その門下にも特に揭げるほどの英才を見出だせぬ。



【閲歷】爲敎二十九歲の時の出生、母は修理大夫三善雅衡の女、三歲の時叙爵、五歲侍從、從五位上となり、十七歲すでに從四位上に進んだ。その年（文永十年）より祖父爲家に歌を學んだ。建治元年（二十二歲）の年、祖父を失ひ、更に弘安元年（二十五歲）父を喪つた。この事は彼の一生に大きい痛手となつた。その年右中將兼土佐介の官にあり、百首を奉つた事も「新後撰集」の詞書によつて知られてゐるが、なほ從兄弟の二條爲世の、大覺寺統の殊寵を享けてゐる事實が、何より彼の不遇を語るものである。彼は歌人であると共に、政治的才幹をも有してゐたらしい。弘安年中、八月十五夜などに內裏に行はれた歌合に名を列ねてはゐるが、その天賦の才を發揮し得ぬ不滿はなほ長く續いた。然るに弘安十年持明院統の伏見帝が御卽位あり、爲兼の官職も三四年の間に、鰻登りに進み、主上の信任を得て正應四年（三十八歲）七月には、正三位權中納言に拔擢され、宸記などによつても知られる如く、主上の顧問として才幹を發揮した。歌道の方も、永仁元年撰集の仰せを爲世と共に蒙り（但し實現されなかつた）、歌合の判者（永仁五年宮廷三十番の如き）ともなり、世の尊敬を一身に聚めたのであつたが、その策謀的行爲は、遂に辭官の上に佐渡配流の厄に遭遇するに至つた。これ實に正安元年のことで、越後寺泊の一遊女初君が、爲兼の運命を傷んだ歌が「玉葉集」に出てゐる。正安三年後二條帝の御卽位と共に、伏見上皇の御運は逆轉した。爲兼は、孤島で遠所詠歌三十三首を詠んだ（この歌により罪を輕んぜられたともいふ）。嘉元元年（五十歲）に召し返され、その四月の五十番歌合、五月の三十番歌合に出席してゐるのを見れば、歌道に於て特に重んぜられてゐたことは推察するに足る。而も再び花園帝御卽位につれ、伏見上皇院政を執り給ふや、爲兼の信任は更に厚くなり、權大納言に昇進、本座を聽さるゝに至つた（正和元年）。こゝに爲世との軋轢は愈々激しく、延慶三年に兩卿訴陳狀といふ事件を惹起した（延慶兩卿訴陳狀參照）。彼の勢力よく爲世を壓し、前判者にして撰集の勅を受けるにつき反對者があつたに拘らず、正和二年「玉葉集」（別項）を編した。これ、持明院側の諸帝、爲兼及びその一派の斬新な歌風に共鳴され、等しく萬葉振を謳歌されたのにも依るので、二條派の如何ともなし難い點であつた。正和二年伏見上皇の御出家あり、爲兼は御跡を追うて出離を遂げた。その翌々年の事、春日神社に一門願立と稱し南都に向つた。これ再び陰に謀る所があつた爲めで、結果は遂に同年の冬捕縛され、翌年二月土佐に流された。時に六十三歲。その後の消息は殆ど知る由もない。かくて大覺寺統の天下となり、爲世の重用されただけ、彼は都に歸ることを屑しとしなかつたものかも知れぬ。

爲兼筆跡（三十番歌合）

【作品・編著】勅撰集では、續拾遺・新後撰・玉葉・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今にその歌がある。○爲兼卿家集（別項）○爲兼卿家集補遺（同上參照）○爲兼卿遠所詠歌一卷（爲兼卿佐渡島詠歌・爲兼卿三十三首和歌）・爲兼卿三十一首附沓冠折句等ともいふ。圖書寮に古寫本があり、續類從四三二、入道大納言爲兼卿集にも附せられてゐる。自筆本は學治の寶藏に收められたと云ふ。歌數は三十一首であるが、三十一首の沓冠で綴る二首の歌が成立するやう續けられ、加へて三十三首とも稱される。且つ又上の五七五七は更に短歌ともなり、下の七文字は文字ぐさりともなるやう排列されて、全く精細な技巧によつて成立されてゐる。なほ、類從本には名號歌も加へられてその國觀せらる）○金玉歌合一卷（伏見院御製歌との歌合で六十番、續類從卷四一二に所收）○爲兼卿家歌合一卷（爲兼・爲相・爲顯・新大納言典侍四人の作、一番目に、「さだかには其色となき其色にもただ春めける今朝にぞありける」と云ふ爲兼の詠が出てゐる。類從八九六に含められてゐるが、二十八番以下のものは缺となつてゐる）○爲兼卿詠百首一卷（春日社奉納の角書あり、奧書によれば、爲兼春日參籠の際、夢想により一時に詠出の上奉納したものの由。春二十首、夏十四首、秋二十首、冬十四首、戀十首、雜二十首で、百首に二首缺けてゐる。續從九四七に收む）○延慶兩卿訴陳狀（別項）○爲兼卿和歌抄一卷（別項）○「玉葉和歌集」（別項）。

【作風・人物】彼の存在は、啻に二條派の主將爲世にとり大きい癌であつたのみならず、二條派歌風の存續問題に關しても、一大障碍であつた。卽ち彼は二條派の守舊的事大主義に對し、全然進步的革命的態度を採つた。その萬葉調讃美といひ、歌病無視の態度といひ、何れも當時にあつては非常の英斷と見ざるを得ないものである。「野守鏡」の筆者は、「萩の葉をよく〳〵見れば今ぞしるただおほきなる薄なりけり」の歌を爲兼の作として、指彈の好材料に宛ててゐる。彼を敵視する二條派歌人の例證は屢々捏造誇大されてゐるが、「仙人の菊賣る市か花の枝に露咬むる朝日さすなり」（鈔本）など、可なり大膽な取材を他に見せてゐることは事實である。その他斬新な用語に至つては頗る多い。落花の靜けさに對し、「さそふ風も情を知るや」と詠み、尾花の風情に豫兆された秋を、「尾花が末に秋ぞ浮べる」と表し、落陽籬間に映ぜるを、「赤き夕日をしばしうばひて」と歌ひ、風の動きを、「籬にくだる聲」「垣ほの竹に吹すてゝ」など種々に詠出せる如き、その修辭上に苦心の跡を窺ふことが出來る。その句法に至つては、初句止のもの多く、尾を名詞で切つたものが殊更目立つ。助詞少く簡勁で、印象的の味豐かなだけ、窮屈の嫌ひあるものも亦尠しとしない。「もりうつる谷の一筋日影見えて峯も籬も松の夕風」「澄みのぼる月のあたりは雲はれて山の端遠く殘るうき雲」の如きそれである。但し餘情もあり清新さも味はれるものにして、全く時流を脫してゐる秀逸少しとしない。

露のうへにうつる夕日の影はあれど遠つ小島は色くれにけり
小車の音聞くゆふべたれこむるすきかげ白き夕顏の花
枝にもる朝日の影の少きにすゞしさ深き竹の奧かな

要するに彼は、努めて因襲を脫し、赤裸のまゝ自然に對せんとした。「山里の垣ほの外の深がやに犬呼びこして入るゝ狩人」などの取材は、全く近世の作と區別がつきかねる新鮮味を持つ。これには、やはり彼の個性に根ざした反撥性を參考すべきだと思ふ。「徒然草」に、爲兼が六波羅武士に捕縛されて引き行かれる態度の雄々しさを見て、資朝が羨望賞嘆する一條が出てゐる。又彼の父は、危篤に際しわが子の性格に兆す災禍を憂ひ、「限ある命を人に急がれて見ぬ世の後をかねて知りぬる」とも詠んでゐる。かくて性格の生んだ歌壇の革新運動は、學統を組成し、影響を遠く後に及ぼし得なかつた嫌ひは多い。さりながら、持明院系統の人々を根強く打ち得た彼の新精神が、有形無形に後世に傳へられた力の絕大さは見逃されぬと思ふ。

【參考】藤原爲兼傳 北川眞顯（爲兼卿家集附錄）○大日本史 ○類聚名物考 ○花園院宸記（元弘二年條）○井蛙抄 ○老のくりごと ○徒然草 ○十六夜日記 ○歌苑連署事書 ○野守鏡 ○京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と 江見清風（國學院雜誌一〇ノ四） （齋藤（淸））

爲兼卿家集 ためかねきやういへのしふ 歌集 一卷 【作者】藤原爲兼 【別稱】入道大納言爲兼集（群書類從本）【諸本】本書には、內容の全く異なる二種の本がある。（一）文安元年奧書本。奧書に、「此一冊大納言爲兼以眞翰本令書寫、轉校合畢」とあるが、「于時文安元年甲子年三月下旬」とあるから、校合は爲兼の薨後約百年後である。この本は部立によつて、春二一七首、夏一二九首、秋一四〇首、冬八四首、戀一一三首、雜一〇六首、計七八九首で、諸本に比して歌數最も多い。續群書類從四三二所收、活版本は內閣文庫本と校合してある。（二）慶長三年奧書本。編者は不明であるが、爲兼自身の草稿本と見て差支ない。內閣文庫に寫本を藏する外、文政元年の版本、群書類從所收本等がある。何れも「爲兼卿家集補遺」を附してゐる。これには部立なく、歌數は內閣本二七五、類從本二七七、別版本二七四首である。補遺の奧書には、「此大納言爲兼卿集亡父妙壽院所持之處今懇望二日之內爲燈下寫留畢正本者中院大納言通勝卿御手跡也不可出窓前者穴賢々々 慶長三己亥八月二日 下冷泉藤原爲景」とある。【解說】この兩種の歌集は、當時の保守的歌壇に對する大反逆者京極爲兼の歌調を知るに最も貴重なものである。爲兼は多數吟に長けてゐたとも言はれ、その歌は更に多くあつたものと推察されるが、今外に傳へられるものがない。慶長三年奧書本に付いてゐる「爲兼卿家集補遺」は、北川眞顯の編で、その附錄の「藤原爲兼卿傳」の中に、編者自ら詳說してゐる如く、曾てより爲兼の詠草を蒐集し、自ら諸歌集より抄出し、新に得た慶長三年奧書本に對し、補遺として附したもの。上板は岸本由豆流の奬めによる由である。續拾遺集・新後撰集・新千載集・新拾遺集・新後拾遺集・新續古今集・玉葉集・風雅集等の各勅撰集入選の歌の外に、柳風和歌集のもの八首、仙洞五十番歌合（乾元二年四月二十九日）のもの四首、乾元二年五月四日歌合のもの三首、爲兼卿家歌合のもの十首、「十六夜日記」よりのもの一首及び佐渡島詠三十一首のすべてを網羅してゐる。なほ終りに「藤原爲兼卿傳」と、岸本由豆流の跋が附いてゐる。（齋藤（淸））

爲兼卿和歌抄 ためかねきやうわかせう 歌論書 一卷 【著者】藤原爲兼 【諸本】圖書寮に寫本があり、珍書同好會複製本がある。【解說】爲兼の歌論を述べたものである。二條家の平淡味を重んじた立場に對して、「萬葉集」を尊び、自由な立場にたつて歌を詠むべきである事を說いてゐる。「萬葉の比は心の起る所のまゝに、同事ふたゝび言はるゝをもはゞからず、憚りもなく歌詞たゞのことゝもいはず、心の起るに隨而ほしきまゝに云出せり」といふ言は、彼の「萬葉集」に對する理解でもあり、彼の立場でもある。併し「和歌抄」を見ると、單に素樸な自由な態度を尊んだのみならず、一面には官能美をも中心として、そこに自然に技巧の加はつてゆく事を重んじた結果、「心のまゝに詞のにほひゆく」といふことを「ことと葉にて心をよむ」ことと區別して尊んだ。前者を重んじたのである。彼は他の歌論書の如く、例歌を多く擧げることをしないで、只管に明快な論理的記述をなしてゐる。この爲兼の歌論が、鎌倉時代に於て注意すべきことは言ふまでもないが、本書は、爲兼の立場を最も明瞭に知り得る點で、歌論史上高い價値を有する。（久松）

【參考】爲兼卿和歌抄解題（珍書同好會本）○日本歌學史 佐佐木信綱 ○大日本歌學史 福井久藏

爲仲 ためなか 「六人黨」を見よ。

爲長 ためなが 漢學者 【姓】菅原 【生歿】保元三年生れ、寬元四年（一九〇六）薨ず。享年八十九 【閲歷】大學頭菅原長守の子である。元曆から正治までの間に、試驗を受けて秀才となり、次いで檢非違使に任ぜられ、式部少輔・大內記を經て文章博士となり、次いで侍讀になり、大藏卿に任ぜられた。嘉祿年間に參議に任ぜられ、勘解由長官を兼ね、位は正二位に至つた。【業績・著述】和歌に長じ、又宮廷の有職故實に通じてゐた。建保年間後鳥羽上皇のために「貞觀政要」を進講した。又平政子のために同書を假名書に書いた。又「字鏡集」（別項）は、その著作であると傳へられてゐる。この外、「文鳳鈔」（十卷）と云ふ漢文を作る資料として成句・故事を類聚した書がある。（藤田）

爲永春雅 ためながしゆんが 人情本作者・落語家 【姓名】未詳 【別號】狂言亭 【藝名】土橋亭しん馬・伊東莊流 【生歿】未詳 【閲歷】初め講釋師となり、伊東燕莊の門に入り伊東莊流と名乘つた。後、土橋亭りう馬（二世司馬龍生）の門に入り落語家となり、土橋亭しん馬と名乘つた。文筆の才があり爲永春水の門人となり、天保九年狂言亭春雅と稱した。春水も彼を推賞し、春雅作「春色雪の梅」第三編卷末に、「爲永の門葉多き中に春雅の作意最勝れたり」と云つてゐる。春雅の處女作は本書で、中に當時の事實をそのまゝ記載してある。例へば文政年間の美代吉殺し、春水の講釋師としての藝風、春水の娘の噂等で、人情本の形式化せぬ點に面白い所がある。【著作】春色雪の梅（天保九年）（別項）○春色初旭嶋田（天保十年）○自惚深雪松（刊年未詳） （山崎）

爲永春江 ためながしゆんかう 戲作者 【姓名】未

評、或は知久況堂と傳ふ。【別號】狂文亭【生歿】明治二十年（又二十二年）十二月二十六日（又二十日）歿。享年七十七（又七十九）【閲歴】初代春水の高弟で、年功より云へば、春江が二代春水を繼ぐべきであつたと傳へられてゐる。飯田町坂下に住し、又下總佐倉に住してゐたこともあると。晩年は小石川水道町に住してゐた。明治になつてからは、「芳譚雜誌」「吾妻新聞」に筆を執り、後には都々逸の選者などにもなつてゐた。家に三女一男あつて、みな文才があつたといふ。「粹文珍報」所載の「春窓硯學校」には、二女玄鶴女原稿春江補綴とある。【著作】大部分「芳譚雜誌」所載のもので、單行となつたものは殆ど見受けない。著作數約二十餘種。

【參考】早稻田文學（大正一五ノ四）○續明治全小說戲曲大觀○狂詠人名辭書　〔石川（巖）〕

爲永春笑　ためながしゆんせう　人情本・合卷作者【姓名】染崎久兵衞。後、延房と改む。【別號】狂仙亭春笑・柳北釣夫・鶴喜堂【生歿】文政六年に生れ、明治十九年九月二十七日歿す。享年六十四【墓所】下谷坂本一丁目受玉院【閲歷】對馬嚴原の藩士で、江戸下谷三味線堀の藩邸に住んだ。少年時代より文學を好み、初代爲永春水の門に入つて、狂仙亭春笑と號した。彼の名が書に見えるのは、春雅作「春色雪の梅」第四編に、春笑の名を以て序を書いてゐるのと春江作「春色初若那」の第三編（天保十二年）を彼が續つてゐる事とである。前書初編は天保九年刊であるが、第四編は刊行未詳、恐らく天保十二年頃と思はれる。卽ち彼が文壇に出たのは、この頃で彼が十九歲の時である。同じ年爲永春雅作「春宵月の梅」第二編を彼が續稿してゐる。彼の名を高からしめたのは、「いろは文庫」（別項）である。本書は、彼が生前に初代春水に代つて綴つた由を語つたといふが、實は第五編以下と見るべきである。三編迄は補助或は校正の名目で門人達の名を連ねてゐるに拘はらず彼の名が見えない。第四編（天保十一年）にも彼の名がなく、前述の如く十二年に至つて初めて彼は活動してゐると見える。弘化三年初代春水作「貞女八賢誌」の第三編以下を續稿して居り、その時既に春水を襲名してゐる。彼は性質素朴謹直で（名人忌辰錄）且つ春水門が多く町人であつた中に武家であり、他が凋落した中になほ若かつたので、自ら二代を繼ぎ得たのであらう。合卷に於ける處女作は、嘉永元年の「重井筒娘別小紋」（至安政六年刊、八編）と馬琴作「南總里見八犬傳」（別項）を通俗化した「假名讀八犬傳」（至嘉永五年刊、十六編）などで、後者は彼の思ひ附きと原作品の世評とが、かゝるものをも大に世に行はしめた。十編内外のもの、「椿說鬼魅談語」（自安政四年刊、九編）、「雜談南夜寶庫」（自安政三年刊、七編）などが彼の得意であつたらしい。長篇の「時代加賀見」（安政二年刊の初編より四十四編まで春水作。四十五編より明治十六年刊の四十八編まで柳水亭種淸作）、「黃金水大盡盃」（安政元年初編を刊行し、明治十三年に十八編を刊行した）等は、人口に膾炙してゐ、馬琴・種員・幽貫等の作風を摸し、明瞭に奪胎の痕跡をとゞめるが、末期の合卷としては見るべき作である。五柳亭德升の「月乃夜神樂」（文政十二年初編刊、天保二年二編刊）を增補續稿して、「西國奇談」（自安政三年至明治八年刊、二十編）とし、玉藻前の傳說に「八犬傳」を取合せて「新局九尾傳」（自慶應二年至明治九年刊、十四編）を、增補「執拗太郎」（寛政八年、初代楚滿人作、黃表紙）に「八犬傳」を綯つて「昔語室壁太郎」（自安政三年至文久三年刊、八編）を創作するなど、多くは綯ひ交ぜの手法である。併し初代春水より合卷に於ては優れ、畫面の美しさ、妙齡の美女、年少の美男の婦悅すべからざる活動が、當時の讀者の好奇心を滿足せしめてゐた。明治になつては、「厚化粧萬年島田」（自明治元年至同十年刊、二十編）、「東京開化膝栗毛」（明治八年刊、初編）等の如きもの、明治以前からの作の續稿、過去の自作品の複刻補綴等をなし、「近世紀聞」（條野傳平と合著。十二編）には特に努力の跡が見える。明治十一年頃、東京繪入新聞の記者となり、事實めかすが半ば以上空想によつた艷話を三面に書いて人氣をよび、後年の「續き物」の開祖となつたと言はれてゐるが、文名は高くはなかつた。江戸末期から明治への過渡期の一作者として、歷史的の見地からは認められるが、彼自身には獨自の創作は見られない。

【參考】人情本略史　村上靜人（人情本刊行會第一輯）○明治年代合卷の外觀（早稻田文學、大正一四ノ三、明治文學號）　〔山崎・小池〕

爲永春水　ためながしゆんすゐ　人情本・合卷・讀本作者【姓名】佐々木貞高、後、鷦鷯正輔と改む。通稱、越前屋長次郎【別號】金龍山人・狂訓亭・爲永正輔・爲永金龍・三鷲・人情翁・二世振鷺亭・二世南仙笑楚滿人等。【生歿】寛政元年生れ、天保十四年（一八四三）十二月二十三日神田多町一丁目の自宅で歿す（一說、同年十二月二十二日、又天保十三年七月十三日）。享年五十四。【墓所】東京築地西本願寺地内、紗傳院（震災後郊外に移轉）【閲歴】初め青林堂と稱する貸本屋を營み、後、鑵書商となつた。中頃講談師伊東燕晋の門人となり、寄席に出で、爲永正輔、或は爲永金龍と稱した。世にこの職は直ちに廢業したといつてゐるが、瀧亭鯉丈の「八笑人」（文政三年刊）に、正輔の名と池の端吹ぬき亭を詠み込んだ狂歌があるから、この頃（三十一歲）既に寄席に出てゐた事がわかる。又門人狂言亭春雅作「春色雪の梅」（天保九年）に春水が深川仲町の席亭に出演することが出てゐるから、少くとも十八年餘も勤めてゐたのである。彼は生活と名聲慾のために種々な事をした。卽ち馬琴の讀本の古版木を買つて新板の如く見せて賣つたり、鼻山人の洒落本を補綴して自分の名を入れて刊行したり、又式亭三馬の門人となつては三鷲と稱し、或は二世振鷺亭を繼ぎ、更に二世楚滿人を襲名したりしてゐる。但し二世振鷺亭の名で作品を發表したか疑はしい。ただ「風聲紙」（寛政四年）を天保四年に「曠世奇談」と改題し、振鷺亭と署名し、春亭三馬作の合卷本「十種香萩廼白露」（文政四年）に、その名で序文を書き、同じく「光明眞言榮化討」（同年）に、題詠をしてゐる位しか見當らぬ。振鷺亭作の「寒紅丑の日待」（文化十三年）の續編を文政九年に發表してゐるが、これにすら二世楚滿人の名を用ひてゐるのである。彼の處女作は二世楚滿人の名で發表した人情本「明烏後の正夢」（文政四年）（別項）であらう。爾來二世楚滿人の名で人情本と合卷本との中間を行くやうな作品を續々發表した。文政十二年に至り爲永春水と名乘つて人情本を發表したが、天保三年刊の「春色梅曆」（別項）が非常に讀書界の人氣を博した。今迄不安定であつた文壇の地位が漸く確立され、流石の彼にも自覺が生じたのである。されば天保八年、「英對暖語」「春告鳥」（各別項）を出すに及んで、東都人情本の元祖、或は江戸人情本一流元祖と名乘るに至つた。爾來十數種の人情本を發表し、江戸の若い男女に愛讀されたが、天保十三年、老中水野忠邦起つて風紀肅正をなすに至り、風俗に害ある書の作者として罪を得、六月十一日手鎖を命ぜられ、本は絕版せしめられ、晩年は不平憂鬱の裡に病歿した。彼は生涯の中、幾度か轉居した。日本橋樽町・通油町・赤坂辨慶橋・向島牛島・池の端・淺草寺内・神田多町等である。彼の家族に就いては、滑稽本作者瀧亭鯉丈（別項）は實兄であるが、池田家に養子となつた。馬琴の「著作堂雜記」に據れば、彼には子なく養女一人あり、某侯の妾に出たが、後、暇をとつて他家へ嫁したとの事であるが、「春色雪の梅」に據れば、彼の娘に淸元延津賀の弟子で延津多と云ふ師匠があつた。これが前述の養女であるか否かは不明である。「梅曆」その他の人情本の挿繪に爲永斐久・同津奈と見えるのは、妻と娘ではないかと想像される。

【著作】前にあげた外、人情本は、二世楚滿人時代には、「菊廼井草紙」（文政六年）、「三日月阿專」（文政八年）、「玉川日記」（文政十年）（別項）等、春水時代には、「貞操婦女八賢誌」（天保五年）、「出世娘」（天保六年）、「春色惠之花」（天保七年）（別項）、「春曉八幡佳年」（同年）、「黃金菊」（天保八年）、「英對暖語」（天保九年）（別項）、「春色戀の白浪」（同年）（別項）、「以登家奴」（天保十一年）、「淸談松の調」（同年）（別項）、「春色湊の花」（天保十二年）、「春色梅美婦禰」（同年）（別項）等がある。又人情本についで多く創作されたのは合卷である。當時の一流の作者に比しては遜色があり、且つごく短篇である。それも俳優の似顏、芝居めかした挿繪などによる芝居がかりのものと、普通の物との二種に大別され、前者には、「縁紫總角」（文政五年刊、歌川國直畫）、「絲衞謹言模樣」（文政十一年刊、春亭英泉畫）の如き、後者には、「國乃雪花魁」（天保二年刊、東嶺・國丸畫、春亭英泉畫）、「敵討孩の曙」（文政七年刊、國丸畫）等がある。先行の合卷、自家の講釋・演劇・傳說等を初め、時には黃表紙の燒直し物、「西遊記」などによつた作が見え、人情本風の物は少く、いづれも出來はよくない。「繫馬七勇綺傳」（自文政九年至同十二年、溪齋英泉畫）などは珍しく長篇である。西村與八の刊行が多く、上述の外に、「歸咲古鄕錦繪」（文政八年刊、溪齋英泉畫）、「長壁太郎譚」（文政十年刊、歌川國安畫）、「女西遊記」（文政十一年刊、歌川國安畫）、「稻花鶯寳車」（天保六年刊、五雲亭貞秀畫）等がやゝ注意をひく。讀本は曲亭馬琴などを摸倣し、早く「阿古義物語」（文化七年刊、式亭三馬作）を眞似て「阿古義物語拾遺」（文政九年刊、歌川國安畫）を、「梅花氷裂」（文化三年刊、山東京傳作）を眞似て、その後篇「梅本梅花春水」（文政九年刊、柳川重山畫）を創作したが劣つてゐる。「十杉傳」（自天保二年至弘化二年刊）は、大内多々羅の十本杉に趣向してゐ、且つ「好文士傳」（天保十一年刊、溪齋英泉畫）などと共に長篇である。併し「七國士傳」（天保四年刊、春水・金水合作）に先だつて、松亭金水の助力を得て創作してゐるが、同樣に凡作である。

【人物】彼は生來片目であつたので、通稱の長次郎から眼長と綽名された。其處に彼が世に受けた輕蔑と親みとがあつたやうに見える。彼が他人の書を勝手に改作拾遺して出版したのは、如何にも不見識、不德義を現はしてゐるが、これを生活のためと盛んに辯解してゐる所に、その好人物の一面を示してゐる。作中に實在の人物を點出した所から、交際も可なり廣かつたことが推察される。文亭綾繼の如き相當な地位の狂歌師とも親交があつた。弟子も可なり多かつた點から見ても、親み易い人物であつたらしい。併し作品から見ても高潔なところは見えない。やゝ教養ある下層の江戸町人と云ふところであらう。

【業績】人情本と云ふ一種の小說形態を創め、江戸町人の日常生活、青年男女の情痴世界を濃厚艷麗な筆致で描いて、この種の作品の先驅となしたのみならず、又人情本をして洒落本と相俟つて現代小說の形態の基礎を成さしめた功は、大といはねばならない。但し彼の作には代作があり、一部分を門人に綴らせ、或は腹案を授けて書かせたりしてゐる事を知らねばならぬ。【門系】彼の門弟には、狂言亭春雅・狂訓亭春鳴・狂文亭春江・狂花亭春鋒・笑訓亭春友・狂仙亭春笑・芳訓亭春發、その他、柳水・春英・春泉・春里等があり、皆爲永と稱した。中でもやゝ傑出してゐるのは、爲永春雅及び爲永春笑（各別項）であり、この春笑が二世春水を繼いだ。

【參考】列傳體小說史○戲曲小說通志○近世小說史○帝國文庫第十編（梅曆春告鳥解題）○人情本略史（人情本刊行會第一輯）○爲永春水研究　山口剛（日本文學講座）○日本文學講座第三期近世下○人情本の本質　山崎麓（國語と國文學、本質研究號）　〔山崎〕

爲永千蝶　ためながちてふ　「爲永太郎兵衞」を見よ。

爲永太郎兵衞　ためながたろべゑ　淨瑠璃作者・脚本作者【本名】未詳【別名】初め竹田正藏、後に劇作者として、又、歌舞伎作者として千蝶と號す。【生歿】未詳【系統】竹田出雲門かと想はれる。【閲歷】淨瑠璃作者として活躍したのは、元文年中から延享年中に至る約十年間であり、その後、數年間を歌舞伎作者として活動した。初め竹本座に於て、小出雲や文耕堂・松洛等の下に執筆したが、やがて作者無人の豐竹座に招かれたらしく、恰も竹本座の竹田出雲の奮鬪時代に當り、これに抗して、殆ど豐竹座唯一の作者たる觀のあつた並木宗輔（別項）に次いで、豐竹座擁護の地位に坐つた。合作者には、河田一鳥・豐岡珍平等がゐた。當時は歌舞伎脚本の拂底時代をうけてゐるので、操芝居の當り作が、多く歌舞伎脚本に翻案上演されたのであつたが、彼の作品も屢々歌舞伎芝居に興行された。彼は延享二年で淨瑠璃作の筆を絕つたらしいが、その後、主に歌舞伎作者として、大阪の劇壇に活躍するのも、それ等の形勢を看取した結果かと察せられる。但し歌舞伎作者としては、二流所の位置であつた。【作品】正藏時代の作は二種見える。元文五年四月、豐竹座上演「本田義光日本鑑」（善光寺御堂供養の改作）に立作者となつて以來、淨瑠璃では十四五篇の作品が算へられる。多くは改作物と認むべきであるが、舞臺技巧による成功の作が多い。左の諸篇は當り作である。○武烈天皇艤（元文五年九月、大文字村の忠節に松浦佐用姫の傳說）○本朝班女襲（寛保元年三月、雙生隅田川の改作、直に歌舞伎に上演される）○播州皿屋敷（別項）○百合稚高麗軍記（寛保二年三月、百合若大臣野守鏡の改作）○久米仙人吉野櫻（鳴神參照。寛保三年八月、雷神不動北山櫻の改作。大當り）○潤色江戸紫（延享元年四月、「八百屋お七歌祭文」の改作）等。　〔守隨〕

爲憲　ためのり　詩人・文人【姓】源【字】源澄（菅秀才宅詩合）とあるのは字であらう。【生歿】生年は未詳。但し爲憲の名が文獻上に見えるのは應和三年が最初である（菅秀才宅詩合）。寛弘八年（一〇一一）八月歿す（勅撰作者部類）。【家系】光孝天皇の後裔。筑前守源忠幹の男（尊卑

分脈）。源登平は、その子である（玄々集）。一說に登平は爲憲の甥とも云ふ。【閲歴】文章生出身で、天元二年の頃はまだ六位の內記で失意の境遇にゐた（續詞花和歌集卷下・源順集）。永觀・寛和の頃、三河權守となり（三寶繪詞序・圓融院御受戒記）、ついで遠江・美濃の國守に歴任した。伊賀守となつたのは、その晚年のことであらう。地方官として多少手腕もないではなかつた（本朝文粹卷六奏狀）が、その本領が文人たるに在つたことは勿論である。源順の門下で（江談抄・源順集）、文章をもつて廣く世に知られ、「山投ニ綠嶷ニ秋雲晴云々」といふ句は、一條天皇の御感を忝うし（江談抄）、文人としては大江匡衡・紀齊名等と共に「天下之一物」と稱された（續本朝往生傳）。その文學關係の逸話は種々傳へられてゐる（江談抄・十訓抄・今昔物語）。【著作】三寶繪詞（別項）○口遊（藤原爲光の長男のために著はしたもの。天祿元年十二月の序あり。續群書類從所收。國寶眞福寺本は古典保存會から出版）○空也上人誄（天祿三年頃の作。續群書類從所收。國寶眞福寺本がある）○圓融院御受戒記（寛和二年の記。群書類從所收。東大寺要錄九にも收載）○世俗諺文（藤原道長の子賴通のために編述す。寛弘四年作。續群書類從所收）○本朝詞林（江談抄に名が見えるが、現存せず）。【詩文】本朝文粹（卷六）・扶桑略記（天元二年八月二十八日の條）・本朝麗藻・和漢朗詠集・新撰朗詠集・類聚句題抄・善秀才宅詩合に多く見え、「法華經賦」といふものもあつた（往生要集）。「爲憲集」と云ふ詩文集も編述されたやうだが（江談抄）、今、傳はつてゐない。【和歌】拾遺集・源順集・玄々集・續詞花集等にある。なほ「扶桑拾葉集」卷三に「天祿歌合序並跋」（天祿三年源爲憲の東野別莊に於て行はれた）を載せてゐるが、これは「源順集」から抜萃したものである。

【參考】御堂關白記（共に長保元年十月十一日の條）○權記○小右記（共に長保元年十二月の條その他）○北山抄（十、吏途指南）○後拾遺和歌集卷八○二中曆（詩人歷）○日本詩紀卷三十二○大日本史卷二一七○日本文學者年表　赤堀又次郎○上宮太子御記の研究　橫川正　○史料綜覽卷一（後藤）

爲久 ためひさ　歌人【姓】冷泉【生歿】貞享三年京都に生れ、寛保元年（二四〇二）歿す。享年五十六【家系】定家より十五代の孫。父は爲綱、爲村はその子である。五代前の爲滿は、江戸時代の初めに出た冷泉家の俊才である。【閲歴】爲久は、父爲綱と共に歌名があつた。爲綱は早くより父を失ひ、中院通茂の指導を受けたが、彼はその父の教を受けた。彼の歌論は「詠歌金玉論」によつて知られるが、その說くところは、和歌の創作を安易なものとして心の鍛錬を怠つてはならぬ事、題詠にすがり古い心を借用し、古い言葉を借用して徒らに三十一文字を綴るのは無意義である事などである。官は大納言に至つた。享保年間江戸に下つた。門人には仁木充長や、幕府の書物奉行をしてゐた成島信遍があつた。（窪田）

爲村 ためむら　歌人【姓】冷泉【法號】澄覺【生歿】正德二年に生れ、安永三年（二四三四）歿す。享年六十三【閲歴】爲久（別項）の子。爲村は家傳の學を修めた外、靈元法皇より古今の傳授を受け、烏丸光榮から和歌の添削を乞うてゐた。饒かな天分をもつて作業を重ね、諸師匠家の凋落してゐる時に際し、一大勢力となつた。冷泉家の中興の祖であつて、その門に集まる者甚だ多く、「予が代になりて、いづれの國にも弟子なき所は候はぬ程に大勢になり候」と彼自身言つてゐる。諸國の大名、幕府の役人、その他名士多く、謂はゆる「ただごと歌」の一派を興した蘆庵の如きも、初めは爲村に學んでゐた。人麿を厚く尊び、柿の木を以て人麿の像百體を作り、知人に頒つたこともある。寶曆十一年二月八日には、五條烏丸の新玉津島明神に傳はつてゐる和歌傳授を記したものを開き見よとの勅命を受けた。彼は常に三昧に入る事に心懸け、兼題を試作してゐる時など、話しかけられても返事をしなかつた。作の人であつて學の人ではなかつた。官位は正二位大納言まで進んだ。【著作】花郛公月雪物語（一名、樵夫問答）（著者と樵夫との問答にことよせて、歌學を說いた書で、明和二年頃、即ち爲村五十四歲の著である。神の宮居等と同様、和歌の道は神道・儒道と結びつけられるものであるとし、時代の風潮をも取り入れ、人麿・赤人の尊ぶべきことを記してゐる。又四時の風物をよく眺め、古を尊び、身の愚かさを思はば、よい歌が出來ると說いてゐる。特色は誠を第一とすべきで、總ては之の誠一つに歸してゐると述べてゐることである）○義正聞書（爲村の歌論に關する說を、門人宮部義正が聞書したものである。理想の歌風を、正風體であるとし、「己が心より觀念し出だして、實意實情より風情を得て、言葉つづき優美に、心新らしくたけもある歌の直に聞ゆるを、正風と申すにて候」と說明してゐる。又この書では、作歌三昧に入るべきであることを說き、三昧に入る時、初めて眞の歌が出來ると說いてゐる）○市の口すさび○和歌出似聚要解○三藻類聚○三藻日記等。（窪田）

爲守 ためもり　「曉月房」を見よ。

爲康 ためやす　漢學者【姓名】本姓は射水、後に、三善爲長の養嗣となつて三善を冒す。【號】桃市老翁（朝野群載）。【生歿】永承四年に生れ、保延五年（一七九九）八月四日歿す。享年九十一【閲歴】越中の射水郡の人である。治曆二年（十八歲）、上京して算博士爲長に師事した。算道に精通し、紀傳・明經の二科にも通じ、省試に應じたが登第せず、斷念した。晚年少內記に補せられ、堀河院の代に、算術に精通せるの故を以て算博士に拔んでられ、次いで正五位下諸陵頭に任ぜられ、又越前權介にもなつた。時に八十二であつた。その後のことは明かでない。彼は幼い頃から佛教に歸依し、觀音を信仰した。五十一歲以後は全く色慾を斷つて、いよ〳〵念佛を修し、經論中の言葉で往生に關するものを抄出して、「世俗往生決疑」と言つた。又「拾遺往生傳」「後拾遺往生傳」各三卷を著した。金剛般若經を讀み、功德を感じて「驗記」一卷を作つた。晚年には毎日、心經三百卷、念佛一萬遍、阿彌陀經九卷、金剛般若經三卷、如意輪觀音の大呪千遍を以て終身の勤めとしてゐたといふ。彼の漢學者としての功績は「朝野群載」の著者として最も大きい。【著作】朝野群載（別項）○拾遺往生傳（往生傳參照）○後拾遺往生傳（同上）○續千字文一卷（長承元年成る。周興嗣の「千字文」に續々の著で、童蒙の勉學に供したもの。式部大輔藤原敦光から感銘を賜はつた。群書類從一三五所收）○童蒙頌韻一卷（天仁二年成る。童蒙のために平聲の韻字を四字句にして排列し記憶に便せしめたもの。群書類從一三七所收）○掌中曆二卷（源爲憲の「口遊」を更に擴張したもの。上卷は乾象部に始まり、官名以下都合八門に分れてゐる。下卷は散佚。續群書類從九三一所收）○世俗往生決疑（現存せず）○金剛般若驗記（同上）○三元九宮法（同上）。（山岸）

爲世 ためよ　歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋（明只ともかく）。

【生歿】建長二年に生れ、延元三年（一九九八）八月五日歿す。享年八十九【家系】定家の子爲家の代にその子等の間に確執を生じ、二條・京極・冷泉三家（各別項）の鼎立となつたが、その際、二條家を嗣いだ爲氏の子である。母は俊成門下の飛鳥井雅經の子敎定の女である。【閲歴】爲世の生れたのは、曾祖父定家の薨後僅か九年目。即ち祖父爲家は、時に五十三歲、はじめて「續後撰集」撰進の院宣を受けたと云ふ。歌の道にあつて最も油の乘つた時代、父爲氏も三十歲にならうとする正に意氣旺盛の絕頂であつた。從つてその少年期は、甚だ幸福であつたらしい。二歲にて叙爵、十二歲の時には、從四位左中將にまで陞進してゐた。十五歲より歌道の研鑽を始めたと自記してゐる。併し文永二年の白河殿七百首等の公會には未だ加はつてゐない。歌集には、右兵衛督になつた文永六年（二十歲）頃よりの作が傳へられてゐるが、この前後漸く公席に臨んだらしく、翌年八月十五夜の內裏三首歌の一つとして詠んだ「戀ど駒憂きにつけてぞ思ふかな云ふにも餘る人のつらさは」と云ふ詠なども出てゐる。祖父爲家は爲世の二十六歲の年に世を去り、それから次第にその子息等の確執が生じて來た。爲世は後宇多院に仕へて、弘安元年（二十九歲）には藏人頭として百首などものし、同六年には參議として內政に與るに至つた。弘安九年、父爲氏薨じ、その翌年は兩統迭立の遺詔より持明院側の伏見帝の受禪を見た年である。そして京極爲兼が爲世に代つて新帝に近侍し、大覺寺統展道のために種々畫策を弄した。かくて持明院側は、伏見・後伏見と相繼いで受禪され、その間十四五ケ年は爲世にとり、全然暗黑敗頽の時代であつた。形式的には權大納言にも昇り得たけれど、それも直ちに辭してゐる。永仁元年には、伏見院より爲兼と共に勅撰集撰定の仰せを蒙つたが、遂に實現を見ず、同三年內裏御會、同五年三十番歌合等、殆ど公會より除外されてゐる。ただ彼の業績として永仁三年伊勢新名所繪歌合判が傳へられてゐるのみである。然るに爲兼の流罪となり、後二條院受禪に及び、爲世の歌壇的活動は急に著しいものに復活してきた。御讓位の正安三年は爲世五十二歲の圓熟時代であり、內裏七夕歌や正安百首を成した外、「新後撰集」撰進の院宣をも蒙つた。常に院や內裏に出入して、「仙洞歌合」「禁中歌合」（乾元元年その他）の名を傳へてゐるが、それ等のうち、嘉元元年の「嘉元百首」と同二年の「竹園千首御會」をまづその筆頭とする。官職も民部卿に昇り、當時佐渡から漸くその罪を許されて上洛した爲兼を遙に壓する地位につき得た。その後、延慶元年（五十九歲）より十ケ年ばかり、再び持明院帝の時代となり、その間、彼は民部卿の職も辭してをり（正和元年）、歌道の方でも、延慶三年爲兼の橫暴を訴へた「延慶兩卿訴陳狀」（別項）と、正和四年「龜岡花下會」の十首歌を遺してゐるに過ぎない。爲兼が「玉葉集」（別項）を撰進し、京極家のために大に氣焰を吐いたのも實にこの間である。而も次に大覺寺統から即位さるべき後醍醐帝の宮人に、爲世の女爲子があつた。且つその腹には、尊良親王・宗良親王の如き英邁な諸皇子が御生誕あつたので、既に古稀に近い爲世には新帝即位の日が千秋の想で待たれた。かくて翌文保二年には院より「續千載集」撰進の宣旨を受けた。所謂二度の撰者たり得た得意さのうちに、「龜山殿千首」（元亨二年）、「龜山殿七百首」（同三年）と云ふ類の大歌會が行はれ、或は「月五十首」（同三年）、「七夕百首」（正中元年）と云ふ類の詠進歌集が編まれた。なほ當時京極爲兼は姿を隱して中央歌壇から逃避してしまひ、冷泉家の爲相・爲守も相次いで歿し（嘉曆三年）、二條家の勢力は隆々たるもので、爲世はその華やかな晚年を元德元年（八十歲）の出家を以て一先づ閉ぢた。「高野春秋」の說によれば、出家後は多く高野の蓮花谷に閑栖し、そこで薨じたと云ふ事になつてゐるが、元弘・建武の時代に都にゐた事も事實で、「九月十三夜內裏歌」（元弘三年）、「立后屛風歌」（同年）、「內裏千首歌」（建武二年）等にその歌が見えてゐる。但し都の亂れを避けて、高野に逃れざるを得なかつた世相は、折角、榮ある一生の大團圓を素されたものと云はざるを得ない。彼は血族以外の頓阿や淨辨等に對しても、濃厚な師匠であつたらしく、龜岡とか難波とか、吟行を共にした事實の斷簡なども遺されてゐる。【作品・編著】（和歌）家集は傳はつてゐない。勅撰集に載つた歌は、續拾遺六首、新後撰一一首、玉葉八首、續千載三三首、續後拾遺二〇首、風雅七首、新千載四二首、新拾遺二四首、新後拾遺一四首、新續古今六首、計一七一首に及んでゐる。その他嘉元百首、龜岡花下會寄歌、龜山殿七百首等にその詠が尠くない。（歌論書）延慶兩卿訴陳狀（別項）○和歌庭訓一卷（爲世七十歲以後の著述。嘉曆元年かと云ふ。內容は一、心は新しきを求むべき事。一、詞は古きを慕ふべき事。一、歌の道は遠く求めひろく聞道にあらずとの事。一、餘情事。一、題をよく心得よと申事。一、本歌の事の六項に亙つて說いてゐる。所說として別に斬新の點はないが、二條・京極兩家の論爭の生んだ一歌論として意味がある。珍書同好會刊。これは冷泉大納言爲相の眞筆を臨寫した都立館本を底本としたもの）。【撰集】續後撰和歌集（別項）○續千載和歌集（別項）。

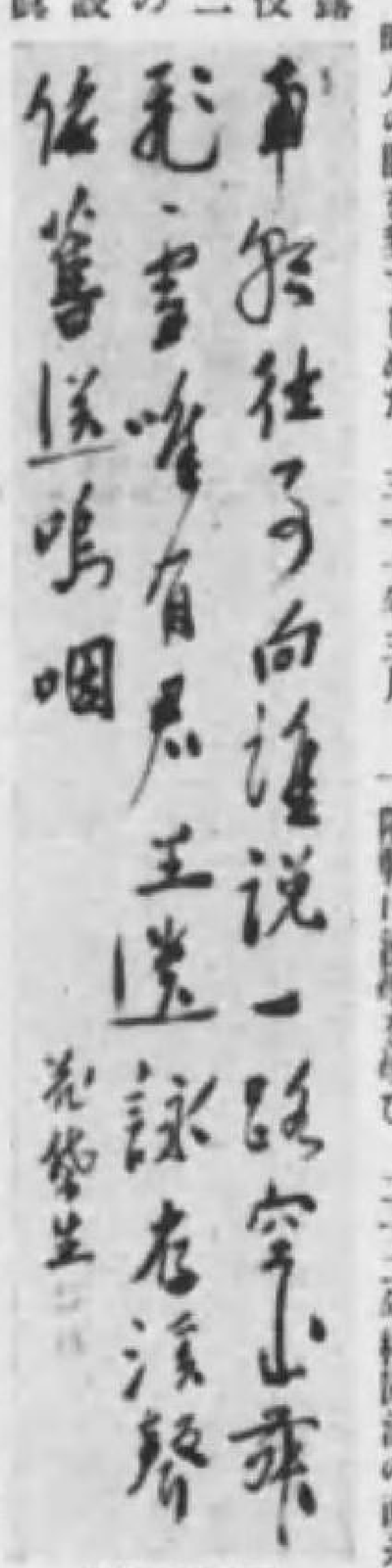
【作風】歌人としては、爲家は定家に劣り、爲氏・爲世は、更に爲家に劣るもののやうに思はれる。頓阿が「水蛙眼目」に爲世の詞として引いた中に「俊成は幽玄にて難及、定家は義理ふかくて難學、ただ民部卿入道（爲家）體を可學之由深相存也」ともある。以て氣概の乏しき程を知るべきで、保守的傳統的態度を持つた眞面目なる家法遵守者以上何者でもない。これは、他家との論爭の內容（例へば延慶兩卿訴陳狀）が、最も明確に說明してゐる點で、論點は家傳歌書の優劣、古今傳授の眞僞、撰者の資格論、撰集命名の適否等の皮相問題のみ。爲世に於てその穩健な態度により一般から或る程度の支持を受けた手腕は認むべきであるが、花園院が、「和歌之道自是癡鈍云々」（宸記）と評された中にも爭ひ難い眞理が籠つてゐる。かくて爲世の歌は平板無味の傾向を持つ。初心の者に細歌を勸めてゐる點（水蛙眼目）、ありの儘な主觀的表現を得意とするのもこの特色に合致する。叙景歌に於ても、幽玄的・象徵的表出のものより微妙なモメントを捉へた寫生的のものが多い。「行く先の雲は櫻にあらはれて越えつる峰の花ぞかすめる」「暮るゝより露と亂れて夏草の茂みにしげくとぶ螢哉」の如き、それである。彼は晴れの歌を詠む時は法輪の凄味ある境內を徘徊しつつ案じたとも云はれてゐるが、かゝる用意を必要とした程の崇高な想像歌はその作中殆ど遺つてゐない。（[illegible]）

【參考】和歌作者部類○續三代集作者部類○大日本史料（六ノ五）○公卿補任○尊卑分脈○冷泉家系圖○花園院宸記○水蛙眼目○高

野春秋○増鏡○東野州聞書　〔[illegible]（清）〕

田山花袋（たやまかたい）　小說家【本名】錄彌【生歿】明治四年十二月十三日、群馬縣邑樂郡館林町外、伴木城沼のほとりに生れ、昭和五年五月十三日、府下代々木の自宅で病歿した。享年六十。【閱歷】明治九年三月、母と共に東京に移つたが、警視廳に勤めてゐた父が十年二月、西南役で戰死したので、八月母や祖父に伴はれて故鄉に歸つた。少年期から青年期へかけての艱難淪落の生活はこの頃から始まつた。十四年二月更に上京、某書肆の丁稚となつたが、翌年兄に連れられて又歸鄉した。十九年、全家上京の際、彼も三度目に東京の人となつた。初め牛込富久町會津侯邸內に住み、後、牛込納戸町に移つた。二十三年、牛込甲良町に轉じた。二十四年、二十歲の時、尾崎紅葉・江見水蔭を訪ねた。又「千紫萬紅」に短篇「瓜畑」を掲げた。二十五年、ビクトル・ユーゴーの作を飜案して「山家水」を作つた。この頃、松岡（柳田）國男・太田玉茗と相識つた。二十六年、トルストイの「コザックス」を飜譯した。二十八年六月、中央新聞社に入社し、九月退社した。二十九年、牛込喜久井町に轉じた。八月「わすれ水」を「國民之友」夏期附錄に掲載した。この年、初めて島崎藤村・國木田獨步と交はつた。三十二年一月、太田玉茗の妹利佐子と結婚した。この年、新聲社より長篇小說「ふる鄉」を出版して好評を博した。八月、母死去。九月、博文館編輯部に入つた。三十四年四月、「野の花」を發表した。この頃までは、多感な、浪漫的な、戀愛小說の作家に過ぎないと世間から見られてゐたが、三十五年二月、「重右衞門の最後」（別項）を「アカツキ」叢書の一卷として發表するに及んで、西洋自然派の影響を受けた新しい作風は、時人の眼を聳てしめた。三十七年三月、日露戰役第二軍の私設寫眞班の一員として從軍し、滿洲の諸戰場を經て、九月歸國し、「第二軍從征日記」を公にした。三十八年、山崎・佐藤兩氏の「大日本地誌」の編纂助手となつた。生來、旅行好きである上に、この地誌編纂のために、屢々日本各地を遍歷した。三十九年、「文章世界」（別項）が博文館より創刊さるゝや、その主筆となり、その十二月、東京郊外代々木に家を新築して住んだ。四十年、三十六歲の八月に「蒲團」（別項）を發表した。蓋し、作者個人に取つても、日本の文壇全體に取つても、劃時代的の作品であつて、これが導火線となつて自然主義運動が起つた。この以後、精力絕倫の彼は、一方「文章世界」その他の雜誌などに自然主義鼓吹の論陣を張りつゝ、長短無數の小說を續々創作して、新興文學の先驅者の面目を遺憾なく發揮した。大正元年十二月、博文館を退いた。十年十月、德田秋聲と共に、彼の誕辰五十年を祝す會は、殆ど文壇全體（自然派を除く）によつて築地精養軒に催された。十二年に、花袋全集（十二卷）發刊に着手し、震災のために一時中止したが、十三年三月に至つて完成した。この間、滿鮮旅行を試みたり、「東京震災記」を著したりした。昭和三年十月、再び滿洲に遊び、歸後十二月、腦出血を病み、一時癒えたが、翌々五年終に歿した。彼は正規の學校教育は受けなかつた。明治十六年、藩儒吉田陋軒に漢學を學び、二十二年桂園派の直系、松浦辰男に和歌を學んだ外、すべて自學自習で、青年時代より壯年時代にかけては、ヨーロッパ近代文學、殊にフランス自然派の作家、フローベル、ゾラ、モオパッサン、ユイスマン等を研究した。また晚年には佛典の研究に沒頭した。

田山花袋



田山花袋筆蹟

【著作】（前記以外の主なる作を擧げる）○一兵卒（四十一年一月）（別項）○土手の家（同年同月「中央公論」）○生（四十一年四月より讀賣新聞）（別項）○妻（四十一年十二月）（生參照）○インキ壺（感想集）（四十二年）○田舍教師（四十二年）○緣（四十三年十月）（生參照）○髮（四十四年八月より國民新聞）○春雨（大正三年一月より讀賣新聞）○時は過ぎ行く（五年四月單行）○ある僧の奇蹟（六年一月より國民新聞）○一兵卒の銃殺（六年九月「太陽」）○殘雪（六年十月より朝日新聞）（別項）○再び草の野に（七年十月單行）○河ぞひの春（八年四月）○源義朝（十三年）○流矢（十四年）○通盛の妻（十五年）○道綱の母（昭和二年）等。

【人物・作風】彼は何よりもまづ熱情の人である。誠實、勤勉、率直、多感等の形容詞は、彼の人物に當てはまる。彼の初期の作風は、感情的・浪漫的であつた。自然主義運動の先驅者となるに及んでは、明かに理智的・客觀的の態度を取り、作風の上にも、それがはつきり現はれたが、それでも生來の熱情は屢々理智を裏切つた。後、宗教的傾向の強い作品を發表するやうになつては、幾分象徵的の作風を示した。即ち理智と情意との融合を狙つたらしく思はれる。更に轉じて「源義朝」以下の歷史小說に筆を染むるやうになつてからは、心境に一段の清澄を加へ、自然主義の極致、或は象徵主義の開眼、換言すれば主觀と客觀との渾一を思はせるものがある。我が國自然主義運動の先驅者の一人といふよりは、その第一人者の位置にある事は疑ふべからざる事實である。詩人としての花袋は「抒情詩」（別項）以後、遂に進展を示さなかつた。自然主義に到る迄の感傷小說は、即ち詩心の散文化であつて、「君をこひしは」の如き若き日の殉情調は、花袋詩中での整つた詩品であつたが、その詩魂がそつくりそのまゝ小說によつて散文詩風に表現せられたのが花袋の感傷小說である。彼はそれ以外に韻文的表白をば試みる事をしなかつた。【史的地位】ヨーロッパ近代文學、殊にフランス自然派の文學からの影響は著しいが、彼はロシヤやドイツの自然派の文學からも、深い影響を受けてゐる。そして彼自身は前時代の硯友社風の不徹底な寫實主義を壓倒して、ヨーロッパの科學的自然主義に近い實驗と觀察とを基礎とした新文學を導いたといふ意味に於て、逍遙・二葉亭以後の明治文學に一つの革命を成し遂げたのである。勿論、これは彼一人の力でなく、彼と力を合せて働いた作家や評論家も多かつたし、時代の傾向もまたさういふ革命を招來すべく準備されてはゐたのだが、それにしても、彼自らの力、彼自らの影響が、なか〱に大きかつた事は爭はれない。〔中村（星）・日夏〕

太夫櫻（たいふざくら）　俳諧集　一冊【編者】和氣遠舟【名義】攝津上野山須磨寺の觀音遠忌に當り、同寺に若木の櫻と呼ばれる名木の櫻のあるに因んで櫻の句を勸進した集で、且つ須磨は無官大夫敦盛討死の遺跡である關係から、太夫櫻と名づけたのである。遠舟の序の劈頭「此花は江南所無なり」とあるのは、若木の櫻に添へた制札の冒頭の語であり、序末に「所がら敦盛の遺迹に寄て太夫櫻と名のる物也」とある。【成立】延寶八年三月【刊行】延寶八年四月【諸本】芭蕉以前俳諧集（俳諧文庫）所收【內容】前述の如く五百年忌開帳に際し、廣く櫻の句を勸進して成つたもの。櫻の句が七百十二句、これを八分してその一部一部の最初と最後とに有名な俳人を据ゑ、その間々にさまで名のない俳人及び殆ど無名と思はれる俳人を並列させてある。今これ等八部の各最初、最後の人を拾つて見ると、梅翁・宗圓・重安・如見・益翁・宗貞・西鶴・來山・由平・宗岑・惟中・不琢・調春・友雪・保友・遠舟の如くなる。この次に追加一句がある。この八部の後に東柳軒遠舟が延寶四年に草庵で蕪萬句を興行した趣の序引があつて、その萬句の中から拔いた連句表三句四種、發句百一句、追加として表三句一種があつて終つてゐる。作者は大部分談林であるが、少數の貞門も加はつてゐる。【價値】本集の勸進に加はつてもゐる惟中が、本集と同年の八月に刊行した「續無名抄」の中に、「攝州須磨寺の開帳、ことし二月より四月の中旬に及び、老若男女群をなせり」と云つてゐる。同じ攝州玉作の遠舟がこの開帳を少し前に知つて、俳句勸進を正月下旬に始めて三月上旬に成就し、四月に出版してゐるので、開帳の終り頃に既に本集が出てゐる譯である。勸進の趣旨が觀音・敦盛・名所の三項にあつたことが序によつて知られるが、集つた俳句を見ると敦盛追懷のものが最も多い。以上によつて土地人の土地贔屓と判官贔屓の感情が窺はれるやうである。應募者に著名な俳人の少い點が物足りないが、敦盛諷詠を中心とする談林風の櫻花句集として、異色ある一集と云つてよい。なほ遠舟撰集の「蕪萬句」の一端を、本集によつて窺ひ得ることも注意してよい。〔志田〕

他律性（たりつせい）　「美的自律性」を見よ。

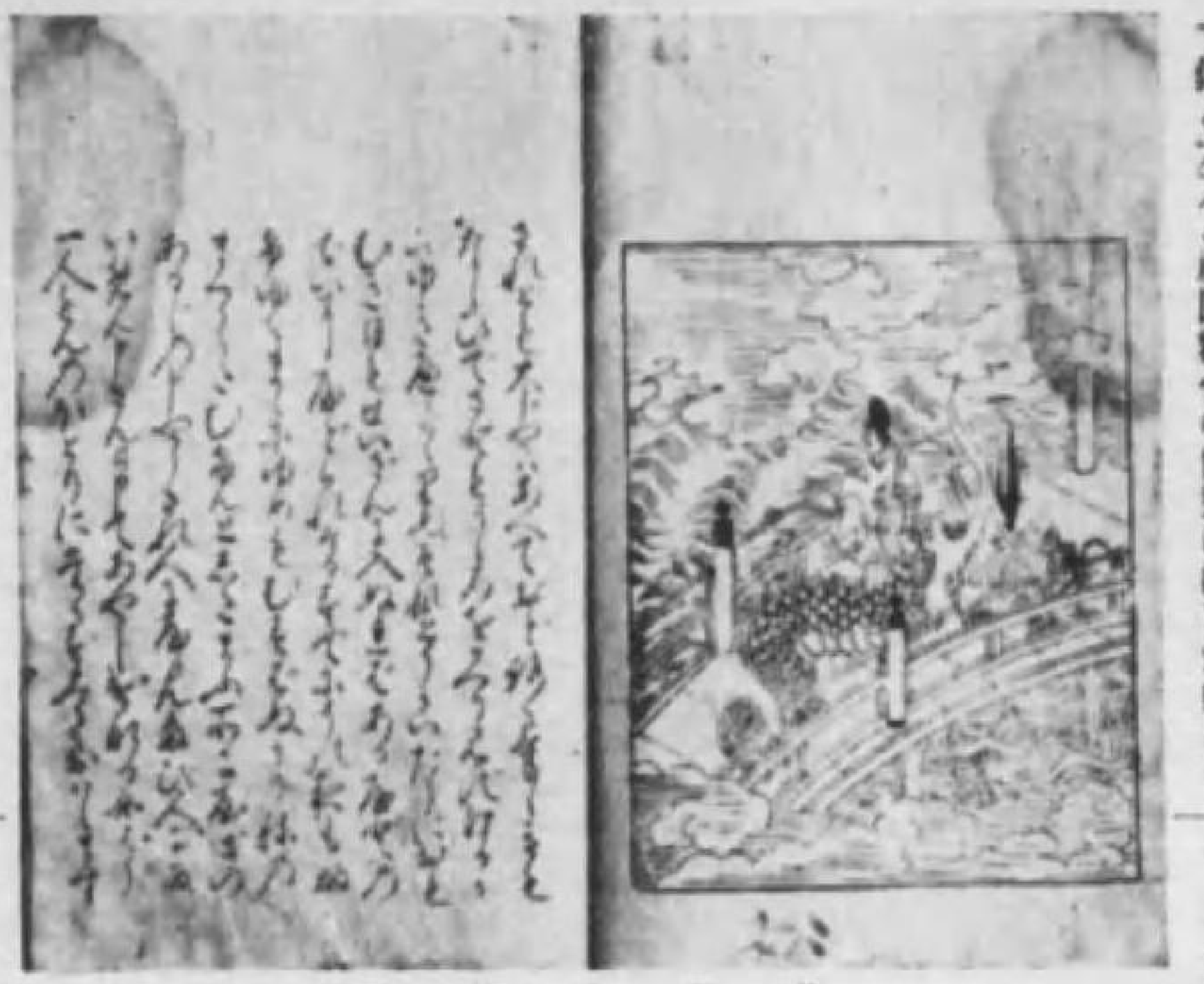
樽聟（たるむこ）　能狂言【別名】無緣聟・吟三郎【解說】或る男が、贈物の樽を擔いで聟入に出掛ける。途中知人のところへ挨拶に廻ると、花聟樣が樽を擔ぐのは宜しくあるまいと言はれ、辭退も出來かね吟三郎といふ者を供に連れて行く。所がいよ〱舅の家に行くと冠者が吟三郎を聟だと取違へて、聟には構はずに上へ請じて大に歡待するので、吟三郎も遂にはいゝ氣になつて引出物の刀まで貰つて立ち出る。聟は立腹するが、せめて刀なりとも吳れと下手に出る。吟三郎は相手にもしないので、聟も悄然として、「さて〱無緣の聟のはちを入れ」と言つて歸路につく、といふ筋。大藏流では今は行はれてゐない。〔[illegible]〕

太郎五百韻（たらうごひやくゐん）　俳諧集　合一冊【編者】岡本惟中【名稱】題簽には「一時軒會　太郎五百韻」「一時軒會　次郎五百韻」とある。【名義】五百韻づつを太郎・次郎と分けたのは「太郎五百韻」の春翁の序が、狂言の言葉を眞似てあつて、その中に「太郎冠者なんぞあるかやい。御前に五百韻」とある如く、狂言の太郎冠者・次郎冠者からの着想と思はれる。併しこの着想の本をなすものは、恐らく和歌の方の堀河太郎百首・同次郎百首であつたらう。【成立】延寶六年冬【刊行】延寶七年一月序であるから同年であらう。【內容】一時軒惟中の一座した百韻各五卷を收めてゐる。即ち「太郎五百韻」は、最初の卷は延寶六年五月十二日、一時軒大阪住宅初會興行で、連衆は梅翁・一時軒・益翁・由平・西鶴・如見・幾音・旨恕・貞因の九吟百韻、次は伏見西岸寺任口の序があつて、延寶六年三月、一時軒と任口との兩吟百韻、次は淀の木村三ケ叟を西岸寺の宿りに待ち受けて、一時軒・三ケ・任口の三吟百韻、次は一時軒自身の序があつて、一時軒と西鶴との兩吟百韻、次は同じく西鶴と一時軒との兩吟百韻、以上の五百韻である。「次郎五百韻」は、卷頭に春翁の戲記文を眞似た序があり、最初の卷は任口の序があつて、一時軒と任口との兩吟百韻（任口四十九、惟中五十）、次は前書のある朋之の發句で始まつて、梅翁・一時軒・益翁・由平・幾音・如見・旨恕・西鬼・保友との十吟百韻、次は延寶六年九月一時軒と貞因との兩吟百韻、次は一時軒と西海との兩吟百韻、次は延寶六年十二月十六日興行、江雲・一時軒・梅翁・益翁・由平・貞因・旨恕・如見の八吟百韻、以上の五百韻である。【價値】惟中の早期の俳風を知るべき代表的な集であり、同時に又惟中の交友關係その他を知り得る點に於て價値が多い。惟中が岡山から大阪へ移つた當初頃に親しく任口の所に宿つてゐることや、西鶴に千句の兩吟を望まれて、それは障る事があつて止んだけれども、兩吟で二百韻を試みてゐるなども、早口を得意とする西鶴と、早口をよい事としない惟中との微妙な關係を知るに參考とならう。而も後の兩吟の方で、一時軒の出した「金の御幣は握てはなさぬ」といふ句に、西鶴が「大矢數その日間に花の風」と附けてゐるのは、西鶴が「大句數」を試みて間もない時のこととして意味深長なものがある。又惟中・貞因兩吟百韻の前書に「自辰終至酉刻」と附合の所要時間の明記されてゐるなども參考とならう。〔荻原〕

俵藤太物語（たはらとうだものがたり）　御伽草子　二卷【作者】未詳【別名】俵藤太草子【成立】室町期【諸本】古板本は寬永整版本。御伽草紙（有朋堂文庫本）・日本文學大系第十九卷・御伽草子（名著文庫）に所收。【題材】武勇傳說。弓術說話。前半は怪物退治（三上山蜈蚣退治）の傳說、後半は將門征伐の史實に基づいて作られてゐる。謠曲にも「百足」「引鐘」がある。蜈蚣退治は、「太平記」（卷十五）と同材で、素盞大蛇退治神話の流れを受け、また粟津冠者大蛇退治の園城寺鐘の由來傳說（古事談第五）の變形でもあるが、この傳說の形成には（乃至は既に粟津冠者傳說に於て）、或は支那傳說の[illegible]の蛇退治傳說（[illegible]）の影響もあらう。朝鮮の高麗太祖に關しても類話が傳へられてゐる。且つ龍宮行は、彥火々出見尊神話及び浦島傳說の轉化、土產の米俵は如意寶で、「今昔物語」（卷十七）の生江世經（宇治拾遺卷十五には伊良縁世恒）や「宇治拾遺」（卷六）の叡山の貧僧に關して傳へられる奇瑞が附着して來たものであらう。又將門征伐には、七人將門の傳說と不死身モーティーフとを含んでゐる。

【梗概】朱雀院の御時、俵藤太秀鄉は瀨多の橋で大蛇を踏んで通つた日の夜、旅宿に大蛇の化した美女が現れ、湖水の主の龍女なる由を

告げ、三上山の蜈蚣退治を懇願したので、受諾して汀に立ち、二矢を空しくした殘り一矢の鏃には唾を吐き掛け、八幡を念じて射放つと手應へあり、射止めた怪物をずた〳〵に斬り捨てた。翌夜龍女再び來り、使つても盡きぬ俵と卷絹と鍋とを贈り、更に龍宮に請じ迎へて鎧と太刀と祇園精舍の供養に鑄た釣鐘とを引出物としたので、秀郷は鐘を三井寺に寄進して盛大な供養を行ひ、下野國で大に威を振つた。下總國相馬の平將門が、伯父國香を討つて自ら新皇と號し、都へ攻め上る用意ありと聞き、同心して日本の半分を發領し度く訪ねて行つたが、人物の輕卑なのを看、上洛して奏聞し、一方の大將に任ぜられ、三井寺に彌勒を祈念して出で立つた。討手の大將軍藤原忠文が駿河で休む間に、副將軍を承つた國香の嫡男上平太貞盛は、先陣の藤太一人に高名させては弓矢の瑕瑾と、急行して秀郷の軍と合した。最初の手合せは官軍方の負であつた。將門は身長七尺餘、而も五體は鐵で、且つ見分け難い六人の蔭武者あるを知つた秀郷は、貞盛と言ひ合せ、謀ひ降つて敵の館内に起居し、見染めて契つた小宰相の局に將門も通つて來るので、影の有るのが本體である事、顳顬だけは肉身である事を聞き得、終に一矢で射斃した。凱旋の後、貞盛は正五位上將軍に任じ、秀郷は從四位下、後に將軍となつて榮えた。[illegible]龍神の加護である。（島津）


俵藤太物語

田原船積 たはらのふなづみ　狂歌師【姓名】大竹氏。通稱高濱屋三左衞門【別號】大濤舍【生歿】生年未詳、文政三年（二四七九）十月十八日歿す。【法名】觀樂量壽信士【葬所】淺草島越西方寺【閲歷】江戸小網町の船積問屋の主人で、天明年間狂歌を詠み始めたけれど、師に就いて學んだでもなく、又いづれの社中にも加はるでもなかつた。その狂歌・狂文を集めた家集に、「夷曲ことし俵」（文政四年）二册がある。（野崎）

多波禮草 たはれぐさ　隨筆　三卷【著者】雨森俊良（芳洲）【刊行】寬政元年【解說】著者自身初頭に、「たはれたるもの丶言葉も、かしこきはえらぶといへるをたよりとし、見しきゝし、おもひし事どもを、そぞろにかきつゞけて、世のそしりいかゞとおそろしけれど、わがのちなる人の、にはのをしへともおもへかしと、たく火にやきもやらず、のこし侍るなり」と述べてゐる。和漢古今の事實を引いて衆人教誡の言をなし、交ふるに詩歌文雅の談等を以てしたもの。文體は平明なる雅俗折衷文で、多く假字を用ひ、婦幼にも解し易い事を旨としてゐる。但し條項の標題はなく、又目次もない。著者の親友室鳩巢の跋中に、朝鮮趙泰億が留別の贈詩を擧げて、「著者の身世ほゞ知るべし」と云つてゐる。（和田）

單音節語 たんおんせつご　「孤立語」を見よ。

單音文字 たんおんもじ　「文字」を見よ。

單音論 たんおんろん　「音聲學」を見よ。

短歌 たんか　和歌の一體【名稱】「みじかうた」とも。和歌（別項）の中心をなす一歌體。【成立】短歌は、五・七・五・七・七の五句體の歌體であるが、この形式の成立には長形式より短形式へ、偶數形式より奇數形式への二原則が基礎となつて居り、これが三の過程をとつてゐる。第一は四句形式の終りに一句が結びついて成立してゐる。これは古代の短歌の第五句が繰返してある場合が多い點からも推定される。第二は六句形式（旋頭歌）の第三句が脫落して五句形式となつたのである。旋頭歌は初め三句と後の三句とが結合したもので、第三句と第六句とは同じ性質の句が多く、第三句は脫落しやすいのである。第三は長形式の終りが獨立して反歌となり、更に反歌のみが歌體として短歌形式となる。この現象は記紀の歌謠や「萬葉集」の中にも見出される。この三の過程は短歌形式の成立の原因となつてゐると認められる。【性質】短歌形式が日本詩歌の主なる形態として存續したのは、日本人の有する感動を表現するのに最も適した形態であるためであらう。最も緊縮した中に純粹感情を效果的に表現し得るのである。短歌形式の表現としては、「萬葉集」から「古今集」「新古今集」に至るに從つて變化がある。句切の上で、二句切・四句切から初句切・三句切となる所から五七調から七五調への推移が見られ、また第五句の形式が終止形止から連體形もしくは已然形止となり、更に體言止に推移してゐる。又表現內容に於ても優美・壯美・靜寂美等あるが、何れも純粹感情の最も效果的に表現されてゐる所に、短歌の形式としての特質がある。【句の名稱】短歌の構造としては六人部是香の「長歌玉琴」（別項）に、詩の起承轉結の立場から五句を分解して、序辭・發辭・述辭・判辭・結辭といふ說明を與へてゐる。句の名稱としては初めの三句を上句、後の二句を下句ともいひ、また第一句を起句又は頭句、第二句を胸句、第三句を腰句、第五句を尾句又は落句といふ。（和歌參照）【參考】短歌撰格　橘守部○古風三體考　近藤芳樹○國歌の胎生及び發達　五十嵐力○短歌概說　阪口保　（久松）

譚海 たんかい　隨筆　十五卷【著者】津村正恭【諸本】大正六年國書刊行會で刊行したものがある。【解說】江戸の歌人津村藍川が、安永中四十歲の頃から約二十年間に、百般見聞の時事を筆まめに書き集めたもので、江戸時代後半に出た隨筆中の大部物の一である。公家武家の逸話、政事談、文藝談、名所舊蹟談、地理物產談、社寺緣起談、天災地妖談、醫藥靈驗談、珍玩名物談、衣服調度談、土俗談、怪異談その他、凡そ人事・世事に關するあらゆる說話を網羅してゐる。見方によつては近代の著聞集と稱すべきものである。內容が類別されてないのが缺點である。無年紀柳塘主人の序、寬政七年著者の跋がある。その跋文に曰く「予壯歲有㆑志㆓于四方㆒、而際㆑秩不㆑果、每聞㆓人談㆒及㆓四方之事㆒、亦不㆑爲㆑耿焉、遂記㆓矢口之言㆒、名㆓譚海㆒、其始也偶然筆㆑之、中則覺㆑於㆑樂、終則勇㆓於其成㆒、既而二十年成㆓十五卷㆒、亦復足㆑償㆓初志㆒耳、今也老矣、時々展玩、如㆑別閲㆓一宇宙㆒也、呵々」と。【著者小傳】津村正恭。通稱三郎兵衞、藍川又淙水と號した。鳴島錦江に學んで和漢の學に通じ、殊に和歌・和文を善くす。曾て國初以來の和文を輯めて「片玉集」百餘卷を作り、文化三年三月、その居宅附近よりの出火には罹災を免れたが、その後全本の所在が分らなくなつたのは惜しい事である。終身淸貧に安んじ、讀書著述に耽つたと云ふ。文化三年五月十六日歿、享年七十餘。（和田）

淡海閑筆 たんかいかんぴつ　「葎の跡」を見よ。

丹鶴叢書 たんかくそうしょ　七帙百五十二册【編者】水野忠央【名稱】忠央の居城紀州新宮城の別名を丹鶴城といふのに因んだ名である。【成立・由來】忠央學を好み、山田常典・內藤廣前・小中村淸矩等、當時の篤學者を招聘して編纂したもので、弘化四年林韑の序に、「鶴城侯平素搜㆓索本朝典故㆒、最韜㆓蟻子古書㆒、每㆑得㆓一部㆒、輒寄㆓編簡㆒、必加㆓校訂㆒、歲編㆓一帙㆒、紋㆓諸梨棗㆒、隨得隨刊、如㆑是者非㆑啻、安知其不㆑爲㆓然爲㆒鉅冊㆒邪、抑世之好㆑學尚㆑古者、徒珍㆓賞宋槧元刻㆒、而於㆓本朝古史㆒、芒無㆓辨識㆒、何其詳㆓乎彼㆒、而略㆓乎我㆒也、侯蓋有㆑慨㆓乎此㆒、乃成㆓是擧㆒、可㆑謂㆑知㆓其所㆒㆑先矣」とあるに依つても、編者の意志を推知することが出來る。【刊行】丁未帙は弘化四年、戊申帙は嘉永元年、己酉帙は嘉永二年、庚戌帙は嘉永三年、辛亥帙は嘉永四年、壬子帙は嘉永五年、癸丑帙は嘉永六年に刊行された。丁未・戊申・己酉・庚戌・辛亥・壬子・癸丑の帙名は、その刊行の年の干支である。【諸本】國書刊行會本に收められ刊行されたが、日本書紀・春記・今昔物語・草根集・萬代和歌集の外は、故實・歌集物語・繪詞史傳の三册に分類され、なほ又、東大寺要錄・侍中群要・風葉和歌集・風俗律達奈義物語は、續々群書類從に收められた。又丹鶴圖譜は別册として刊行された。この外に丹鶴外書の名で、史籍年表・十四卷系圖・同書引便覽等が刊行された。【內容】國史・記錄・故實・歌集・物語等稀覯の書を集めたもので、丁未帙は、正中御飾記・內宮御神寶記一册、後水尾院當時年中行事二册、九條右大臣集（藤原師輔）・御堂關白集（藤原道長）・藤原家經朝臣集一册、和泉式部續集二册、源重之女集・小侍從集・殷富門院大輔集一册、風俗律達奈義物語二册、春記（藤原資房）二册、以上十一册。戊申帙は、釋家供物圖（紀宗長）・諸陵雜事注文一册、雜筆要集一册、春記十册、室町殿春日詣記一册、拾弓爲割次第・諸輕日記一册、九條家車圖一册、西園寺家車圖一册、萬代和歌集十册、前參議教長卿集三册、濱松中納言物語八册、乙寺緣起一册、以上三十八册。己酉帙は侍中群要四册、信實朝臣集一册、草根集（釋正徹）十五册、繪師草紙一册、蒙古襲來繪詞三册、以上二十四册。庚戌帙は、三中口傳三册、忍音物語二册、今昔物語三十册、以上三十五册。辛亥帙は、日本書紀神代卷二册、東大寺要錄十册、風葉和歌集四册、以上十六册。壬子帙は、經信卿集一册、武藏國風土記一册、北山抄（四條公任）十三册、紫式部日記繪詞一册、以上十六册。癸丑帙は、和歌一字抄二册、古事談六册、基盛朝臣鷹狩記一册、丹鶴圖譜三册、以上十二册である。【價値】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜（新撰纂要抄參照）の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。（石村）

短歌撰格 たんかせんかく　歌論書　二卷【著者】橘守部【成立・刊行】文政二年より少しく後か。明治十八年松浦詮・鈴木重嶺の序、橋本直香の序歌、橘道守の跋を附して刊行【內容】上卷に於て先づ歌の諸體を、長歌・短歌・片歌・旋頭歌・混本歌に分けて、それ〴〵の歌の起原を示し、次に短歌の句格論に入つて、順直・四句絕・二句絕を正格とし、記紀萬葉の短歌に就いてそれ〴〵の統計を示した。又句絕に、直絕・倒絕の二種を分け、それ〴〵に就いて例を擧げ、更に三句絕・一句絕に就いても例を擧げてその劣れる所以を明かにした。次いで語脈斷續を論じて助辭・修句の位置を例示し、下卷に於ては、語を實語と虛語に分け、時候・處位・事態・物形を實語、然らざるものを虛句とし、古歌に實句多く、後世の歌には虛句が多く、且つ古歌は、上實・中實が多く、後世の歌は下實が多いとした。進んで古歌の實句どめの格を種々に分類して論じ、同じく古歌の連實及び光彩・數量・方處の例を示して、當代の詞の違へることを指摘した。【價値】守部は宣長一派の外に立つて、而もよく獨自の境地を開き、「長歌撰格」（別項）と共に優れたる創見が多く見られるのみならず、その說多く統計を基とし、科學的に優れたるものが多い。歌論史上もとより重視すべきものである。（相原）

短歌滅亡私論 たんかめつぼうしろん　歌論【著者】尾上柴舟【發表】明治四十三年十月短歌雜誌「創作」【解說】この論文はその當時かなりの反響を起したものであつた。柴舟の謂ふ所は、（一）近代の和歌は一首として獨立性に乏しく、五首なり十首なり一つのものとして一括して鑑賞せられるべきものである。從つてそれは分解した形で表はす必要はなく、初めから唯一つとして纏まつた形式のもので表はせば足る。（二）短歌の形式が今日の吾人を表現するには不完全であり力が足りない。特に日本語が五音七音と云ふ傾向を多く有つてゐた當時は知らず、自由な散文的な語を用ひる今日では、その形式は感じを述べるにふさはしくない。（三）用語が文語であつて口語でない所に、十分に自己を表はし得ない所がある。上記の理由で短歌の存續を否認する。國民的自覺の起つた時、短歌は滅亡すると云ふのである。この議論は、一つは連作的傾向が盛んになつて來た所より起り、一つは既に詩壇に於て自由詩・散文詩の唱道があつて、新體詩の定型の破壞せられつつあるところより起り、一つは口語詩運動が起つたところより起つてゐるが、歌壇に於ても口語歌問題、破調短歌の問題があり、又連作的傾向が、益々增加して行つてをり、それ等の風潮を透察し概括しての所論であつた。（石井（直））

談義 だんぎ　「說經」を見よ。

耽奇漫錄 たんきまんろく　隨筆　五卷又二十卷【編者】瀧澤解等【名稱】會を耽奇會と名づけたので、それに因んで書名とした。【成立】文化七・八年に亙つて、西原好和（松羅館）・關

思亮（海棠庵）・中村經隆（佛庵）・屋代弘賢（輪池）・山崎美成（好問堂）・瀧澤解（曲亭馬琴）・同宗伯（琴嶺）等、好事家の人數名、各々所藏の古書畫・古器財等を携へて一堂に會合し、耽奇會と名づけ、各々その圖本を作り、說明・考證を提供して談話交驩した。馬琴はやゝ後れて文政七年八月の會から出席し、同八年十一月に至つた。松靄館・海棠庵等は、文政七年三月の初會から出會し、八年十一月迄に二十卷を作つた。馬琴は十回分を五卷に纏めた。世に多く傳はる本はこの五卷本であるが、松靄館等の二十卷本もあるわけである。馬琴系の五卷本に天保三年の同人序が添うてゐる。【諸本】馬琴系の五卷本は久しく寫本で行はれてゐたが、日本隨筆大成卷十二に收められた。別に好問堂山崎美成の家に傳はつた二十卷本がある。これは前の五卷本に比べて內容の大きいのは耽奇會第一回からの集錄であるからである。察するに松靄館や海棠庵の家々の物も、ほぼこれと同じであつたらう。好問堂本は續隨筆文學選集（卷一—四）に收められた。元來會員各自の所好で編輯したものであるから、內容の排列方等に異同がある。【解說】名家の筆蹟、古文書、古圖像、彫刻物、文房具、珍奇なる動植物、その見取圖、地方の舞踊の圖、古時流行の器具、その他發掘品等苟も當時珍奇と目せられた物の限りを圖錄してある。（和田）

斷機 だんき 「敎誡」を見よ。

單語 たんご 文法【名稱】語とも詞ともいふ。〔英〕Word〔獨〕das Wort〔佛〕Mot【解說】言語を、その意味に從つて分析して得た一の單位で、一定の音に一定の意味の融合したもの。同じく、言語構成上の單位としては、これより大きなものに連語や文があり、これより小さなものに、語根や接頭辭・接尾辭・語尾などがある。これ等と明瞭に區別して單語を定義する事は甚だ困難であつて、西洋語に於ては、文字に書く時、一つゞきに書かれる習慣になつてゐるものを單語と認める外なしとするものさへある。日本語に於ては、單語每に離して書く習慣がない故、書き方の上から單語を定める事は不可能である。

【日本の單語の通有性】日本語の多くの單語に通ずる性質としては、（一）一定の意味をもつてゐる。（二）一定の音が一定の順序にならんでゐる。（三）各音節の音の高低の關係（アクセント）がきまつてゐる。（四）實際の言語に於て、中途で切つて發音することがない。（五）實際の言語に於て、その前と後とに切れ目をおいて發音することが出來る。以上の如きものを擧げることが出來る。これ等の條件に照せば、單語より大なる單位と、これより小なる單位とを單語と區別し得る場合が多い。例へば「花咲く」は「花」と「咲く」との間をはなして發音してもよい故單語でない。「月夜」（つきよ）は二つの單語のやうに見えるが、實際「つき」と「よ」とをはなして發音する事がない故單語ではなく、二つの單語から出來た一つの單語（複合語）である。又「私ども」も「私」と「ども」との間をはなして發音する事がない故、一の單語で、「私」といふ單語に「ども」といふ接尾辭がついて出來た一の由生語（語構成參照）である。「ほのか」「ほの〲」「ほのぐらし」の「ほの」は、「ほの」の後で切つて發音することがない故、單語ではなく、單語より小さい單位である（語根である）。前後に切れ目をつけて發音するといふことは、音としてそれだけで獨立すると考へることが出來る。即ちそれだけで獨立し得るか如何によつて、單語と然らざるものとを區別するのである。

【助詞・助動詞の特性】かやうに考へれば、單語と他のものとの區別は明確なやうであるが實際はさうでない。單語といはれてゐるもので、完全に以上の五つの條件にかなふのは、體言・用言及び副詞・接續詞・感動詞であつて、助詞と助動詞とは、その條件に缺けるところがあるからである。即ち「花が咲く」の場合に「花が」は、實際の言語に於て、いつも一つゞきに發音せられ、「花」と「が」との間を切ることはない。「行かない」「行つた」などの「ない」「た」も同樣である。これ等の單語は、（五）の條件を具へないのであつて即ち獨立しないのである。さうしてこれ等は、いつも上の語と一つゞきに發音するといふ點で、「私ども」「君たち」の「ども」「たち」と全然一致してゐるが、「ども」「たち」は接尾辭として、單語よりも小さい單位と認められてゐる。もし、いつも一つゞきに發音するものを單語とするならば、「花が」「行かない」「行つた」などは、實際の言語では決してその間を切ることがないから、これ等を一單語とし、「が」「ない」「た」は、單語の構成要素として接尾辭と同じものとしなければならない。かやうな取扱法は、最も明瞭であつて合理的であるが、その結果は普通の單語とはかなり趣のちがつたものとなる。しかし品詞分類に於て、單語を、詞と辭又は獨立詞と附屬辭のやうに從來の文法家が大別したのは、明瞭な自覺があつたか無かつたかは問題であるが、結局助動詞・助詞の類とその他のものとの間に、右の如き大なる相違があるのによるものであつて、吾々は、上述の五つの條件を具へたものを詞、（五）の條件を缺くものを辭と解すればよいのである。

【助詞と接尾辭の相違】助詞・助動詞の類をも單語と認めようとするには、これと性質の近い接尾辭の類との相違を求めなければならない。接尾辭の類を附けて出來た單語は、品詞の一つとして用ひられ、その點で、もとよりの單語と少しもかはる所がない。「私ども」は名詞、「花やぐ」は動詞である。然るに助詞の類の附いたものは、その性質は、どの品詞とも同じくない。「私が」「私より」「行けども」など、皆さうである。即ち接尾辭は一の品詞を作るものと見る事が出來る。隨つて單語構成の要素として、單語より小さい單位と見る。これに反して、助詞は單語を作らず、單語に或るものを加へるものであるから、一の單語と見る事が出來る。しかし助動詞になると、助動詞を加へたものは、一の動詞と同等になり動詞の資格を有つ。それ故、右の標準では單語と見る事は出來ない。かやうにして吾々は、山田孝雄氏の如く助詞を一の品詞とし、助動詞を複語尾として單語の一部分と認めることに對して一つの根據を見出し得るのである。（日本文法論參照）

【助動詞と接尾辭の相違】助動詞をも單語と認めようとするならば、なほ他の標準を見出さなければならない。接尾辭の類は、いくつかの語に附くけれども、その附く語は、多くは限られてゐて、何にでも附くのではなく、これまで例のある語に限る。然るに助動詞はあらゆる動詞につく。助詞も同樣で、或る品詞、又はその或る形には一般につく。その附き方が自由であり規則的である。接尾辭の類は不自由であり規則的でない。この點から區別する事が出來る。しかし接尾辭の內にも、

現代口語の敬稱の「さん」の如きは、可なり自由で、どんな人名にもつく故、右の標準によつて、十分明確に區別する事は或は不可能であらうが、大概は區別する事が出來る。

【單語の概念】要するに、普通いふ所の單語は單一なものでなく、實際の言語に於て前後に切れ目をつけて發音してよいもの、即ち獨立して用ひられ得るもの（詞又は獨立辭）と、さうでないものの中、用法が自由で規則的であるもの（辭又は附屬辭）とを含んでゐると見るべきである。しかし、この後の種類のものと接尾辭などとの差異は、單に程度の差に過ぎず、性質の差ではない。【單語の種類】文法上より觀たるものは、別項「品詞」を、一般的には「語彙」を見よ。

【參考】言語學概論（保科孝一）〇日本文法論（山田孝雄）〇新式日本文典原理（松下大三郎）〇國語法概說（安田喜代門）　（橋本）

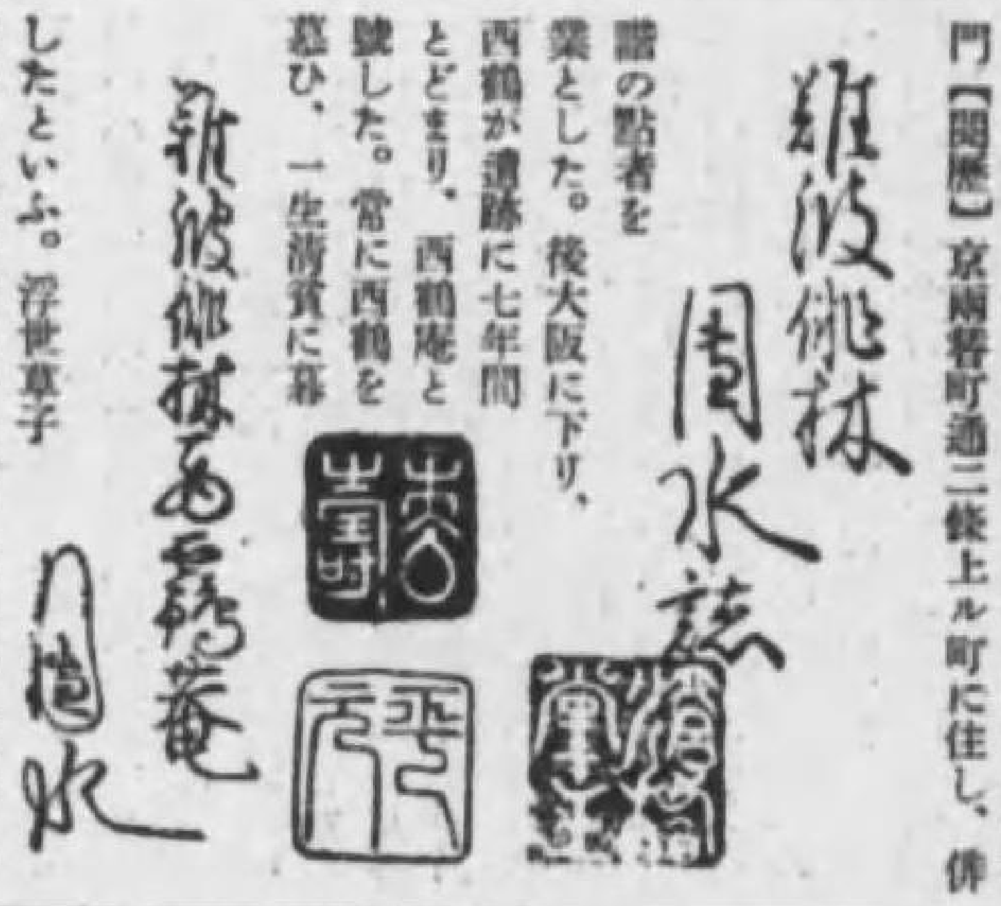
單語形式 たんごけいしき 文法【名稱】〔英〕word-form【解說】多くの單語（別項）に通じ、一定の外形が一定の意義を伴ふ部分ある時、この部分を單語形式といふ。例へば、英語「少年」といふ語の音聲〔boi〕文字boyは「少年」といふ意義に對する外形である。即ち〔b-o-i〕boy といふ三種の音聲又は文字が、この順序に列んだもの全體が外形である。この外形はこの一語だけに限る形で、他の語にこれと同樣の外形と意義とを有する例がない。然るに boys, trees, tables, names 等多くの語を集めると、その凡てに通じ、s（複數）といふ部分のあることを見る。s といふ一定の外形に、複數といふ意義を伴つてゐる。〔boil〕〔煮〕に於て、boi の部分は boy と音聲（外形）が同樣であるけれども、意義が全くちがふ故に、一定の外形一定の意義とは言へない。かゝる s（複數）といふ部分は、前掲の數語が有する單語形式である。その他 's（所有格）ed（過去）等は單語形式の例である。この意味で日本語の「見た」「取つた」「泣いた」等は「た」といふ單語形式を有するといへる。（單語形式參照）

【參考】Jespersen: *Philosophy of Grammar*, 1924.　（神保）

斷字 だんじ 「切字」を見よ。

丹州千年狐 たんしうせんねんぎつね 「天鼓」を見よ。

團水 だんすゐ 俳人・浮世草子作者【姓】北條氏【號】平元子と號し、薙髮して白眼居士と云ふ。【生歿】寛文三年に生れ、寶永八年（二三七一）正月四日歿。享年四十九（辭世）おぼろ〲引べく胸の月淸し【俳系】井原西鶴門【閱歷】京兩替町通二條上ル町に住し、俳諧の點者を業とした。後大阪に下り、西鶴が遺跡に七年間とどまり、西鶴庵と號した。常に西鶴を慕ひ、一生淸貧に暮したといふ。浮世草子作者としては、西鶴を摸倣し、西鶴と其磧との中間の時期を繫いでゐる一作家である。なほ西鶴遺稿の出版は大抵團水の手を經てゐる。


難波俳林
團水誌
新波郁林西鶴庵
團水

【著作】〔俳書〕未曾有格（貞享元年刊）〇俳諧團袋（別撰）一册（元祿三年）〇秋津しま一册（同上）〇特牛（こつとひ）一册（同上）〇住吉詣（元祿五年刊）〇俳笠一册〇彌之助一册〇獨吟鑑論〔戲作〕晝夜用心記（別項）六册（寶永四年刊、名著文庫・有朋堂文庫所收）〇一夜船（別項）（正德二年刊、別名日本新國之俳妙笠話師話語。享保十一年再版して怪談諸國物語といふ。帝國文庫珍本全集所收）〇日本新永代藏（今世長者鑑）（別項）六册（正德三年刊、帝國文庫西鶴全集所收）〇本朝智惠鑑五册（正德三年刊）。

【參考】〇誹諧京羽二重（端江林鴻）〇花見車（轍士）〇誹諧家譜（草川丈石）〇誹家大系圖（生川春明）（以上俳書大系談林俳諧集所收）〇列傳體小說史　（潁原）

丹前 たんぜん 所作事【解說】丹前の語は、「好色一代男」「洞房語園（異本考證）」「役者名物袖日記」「摩田知篇」等の諸說を綜合すると、承應・明曆の頃、江戸神田四軒町松平（堀田とも）丹後守の屋敷前に町風呂があり、勝山等の如き容色優れた湯女を置いて客に媚びたので、嫖客はその風呂屋へ足繁く通つたが、遂に評判となり、この風呂屋を指して丹前風呂と呼び、「丹前」とは即ち丹後守前の略稱である。而してその丹前風呂へ通つた嫖客の間に流行した派手な、而も遊蕩的氣分に滿ちた風俗を「丹前風」と稱へたのである。併し、歌舞伎に於ける「丹前」の語は、初め丹前風の扮裝、それ等が廓通ひをする動作等を意味してゐたが、後には動作が一つの型になり、その型を「丹前」と稱するに至つたのである。又「丹前」は江戸歌舞伎特有の語であるが、京阪ではこれを六法（六方とも）・振出し・だんじり・出端等と稱へた。【沿革】この扮裝・動作は古くから所作事に取入れられて重要な一系統をなしたが、「丹前」又は「六法」の創始者及びその年代に就いては未だ明かでない。即ち「戲場年表」には、延寶元年、江戸山村座で中村數馬が所演したと傳へ、「佐渡島日記」には、名古屋山三郎が出雲のお國と京北野の舞臺で、江戸山谷通ひの風俗を模したのに起るとも、また「舞曲扇林」には、山三郎が僕庭藏を佐渡島歌舞伎へ出して演ぜしめたのに起り、六方は即ち庭方の訛化であるともいふ。これ等によれば承應以前既に行はれたものの如く思はれるが、まづ明曆以後、立役多門庄左衞門によつて一風を創案されたと見るべきである。併し當初の扮裝は、素頭（すあたま）で頰に鎌髭を附け、袴の股立を高く取つた粗野なものだつたので、後に影響を及ぼしたのは、恐らくその動作のみと想像される。その後幾つかの丹前が生れたが、今日に傳存する「丹前」の源泉ともいふべきものは、初代中村七三郎の創出したやつし風の丹前、即ち「立髪丹前」である。次いで七三郎は、「紙衣丹前」をも創め、また初代中村傳九郎は、扮裝を奴にした「奴丹前」を起し、更に芝垣節を用ひた「芝垣丹前」をも創めた。京阪では、その後に作彌九兵衞・荒木與次兵衞等が演じてゐたが、初代嵐三右衞門が羽織着流しの華美な形式に改めて新機軸を見せて流行させ、大和屋甚兵衞・二代及び三代嵐三右衞門・佐渡島長五郎等、これを能くしたが、寶曆期に至つて殆ど廢滅した。江戸ではその後生島新五郎・同大吉・水木竹十郎・中村吉兵衞・八代市村羽左衞門等が、漸次改良工夫を加へ、種々の姿勢を案出して益々流行を極め、「丹前物狂」「猩々丹前」「雙丹前」「手くない丹前」などのやうな變態丹前をも生じた。これ等はいづれも獨立した丹前中心の舞踊であるが、寶曆期に至つては、主に舞踊の固定した分子として取扱はれ、他の所作事に取合せられるやうになり、後世に及んでは全

く成る所作事の中に加へらるゝに過ぎなくなつて、今日ではその俤を傳へるのみといつてよい。かく「丹前」が、他の所作事に取合せられたものでは「檜踊」（別項）が、その大部分を占め、その後半か、又はその適宜の箇所に挿入されてゐて、「丹前」と「檜踊」とは不離の如き關係に置かれた。その因は享保年代と覺しいが、元文五年十一月、市村座所演の「丹前檜踊」などが古い。その後、「丹前」なる名稱を帶びた所作事は、內容が華美なる武士や、奴の廓通ひの振を挿入したものに過ぎないのである。併し元祿以降、「丹前」の流行は舞踊大成期まで、毎年顏見世狂言に所演される慣例の如くなつてをり、且つその他の狂言にも屢々演ぜられたので、謂はゆる「丹前物」として、所作事中、「道成寺」「石橋物」（各別項）等と共に一大系統をなし、その數實に百數十を算へられ、長唄が大部分を占めてゐるが、各流派に亙つてゐる。

【傳存曲】今日に傳存するものは、極めて少數で、所作事としては「高砂丹前」（後出）があり、詞曲のみ存するものに「金谷丹前」（長唄。寶曆三年の作といふ）、「水仙丹前」（長唄。同五年九月市村座中村傳太郎所演）、「住吉丹前」（本名題、紅葉笠住吉丹前。長唄。同十三年十一月同座）、「縫丹前」（本名題、花錦繡丹前。長唄。明和元年十一月同座）、「姥丹前」（本名題、寒花摘立笠。長唄。安政四年五月末摘花舞踊會所演曲）、「寄丹前」（本名題、千代萬歳丹前。長唄。作曲年代未詳、但し天保四年から同十年までの作）等がある。また「丹前」の型は、「鞘當」（不破參照）の不破名古屋が花道の振、「戻駕」（別項）の次郎作と與四郎とが花道より舞臺にかゝる振、その他「奴俗」（別項）、「元祿花見踊」（花見踊參照）、「三つ人形」等の一部に、「奴丹前」の型は「供奴」（別項）、「三つ人形」等の一部に動作として殘つてゐる。

【女夫松高砂丹前】（通稱）高砂丹前、又は高砂（初演）天明五年十一月一日初日江戸桐座「男山娘源氏」第一番目三立目（作詞）瀨川如皐（曲節）長唄（作曲）杵屋正次郎（振附）二代西川扇藏（題材）最初の出は、謠曲の「高砂」に姿を借りてゐるが、直ぐに純舞踊に砕ける。（內容）初音姫の侍女此花（瀨川菊三郎）は姥の面、下部筆助實は源の采女丸（市川喜之助）は、尉の面を附けて「高砂」の振にて押出し、面を取つてクドキ模樣から兩人の槍踊になり、次いで艶な手踊、最後にまた兩人で槍を振る。曲は古風な俤を殘し、殊にクドキや手踊の件は、巧みな手が附いてをり、振も「丹前」「槍踊」等初期江戸舞踊を偲ばせる手があつて、唯一の傳存する貴重なものである。

【參考】役者全書（全盛葉歌舞伎實書）〇劇代集 二代櫻田左交〇近世邦樂年表（長唄・囃子部）〇江戸近世舞踊史 九重左近 〇日本歌謠集成卷九〇歌舞伎圖說　（秋葉）

團扇曾我（だんせんそが）　「百日曾我」を見よ。

丹前出端（たんぜんでは）　歌謠　【名義】歌舞伎劇に於て、丹前（別項）とて派手な姿をしたものが、出端とて、揚幕から花道を通つて舞臺へ來るまでの間の地に用ひたので、この名がある。【解說】江戸にも上方にも用ひられたが、寶永七年刊の「松の落葉」に、上方用のもの左の諸端が載せてある。

醜神出端（嵐三右衞門）藤内だんじり出端（同上）東寒齋之記出端（中村七三郎）這日金（同上）狐八幡詣出端（同上）綺久出端（大和屋甚兵衞）狐會出端（生島新五郎）

何れも二上りで通すものが多く、陽氣と派手とを生命とした。歌詞は必ず振を見せる利便を圖つてある。すなはち、

阿久出端

二上り　たどり行く。今は心もうかれそろ。霧かいく野を引抜きしよう。いつの間よりあひなれそめて、通ふ心の舞鶴の姫。忍び妻戸を、ほと〳〵と叩くは阿久か。きりとは〳〵受けうかの、忍ばうかの。そつこで顏出せ隱はくを。これ〳〵〳〵謡けたもの。あのや阿久はこれさ〳〵皺の皮か、なうはんえ、しんぞ心は、これさ〳〵、うちぬいたほんはんえ、しんぞならほんえ、とかく縁には身をやつす。

の如きものである。江戸長唄の丹前物、例へば枕丹前・吉原丹前・紅葉笠住吉丹前・寒紅梅行列丹前・御所風俗錦丹前・花錦繡丹前・金谷丹前・娘丹前等、丹前と題するものにはこの出端から、舞臺の所作にかけての地に用ひたものが多い。　（高野（辰））

淡窓（たんさう）　漢詩人　【姓名】廣瀨建、字は子基、一字は廉卿。通稱求馬。私諡して文玄先生といふ。【別號】苓陽　【生歿】天明二年四月十一日豐後の日田に生れ、安政三年（一八五六）十一月歿す。享年七十五。【閱歷】諸侯の用達を勤める商家に生れた。父貞恒は長春庵桃秋と號して俳諧をよくし、「絲木」の著もある。淡窓はその長子で弟に旭莊がある。伯父の貞高も春秋庵月化と號し、俳諧に長じてゐた。初め松下竹陰に師事し、神童の名が高かつた。寬政九年（十六歲）筑前に赴き、龜井南溟（別項）に學び、文化二年、日田に歸り、家を弟久兵衞に讓り、豆田町長生園に學舍を建てて桂林莊と稱した。又文化十四年更に堀田に移し、咸宜園と號して專心子弟の敎育に從つた。その敎育は詩に由つて人の性情を正し、進んで道義に入らしめる所謂情操敎育で、詩學を敎育に利用した卓見のある方法であつた。かくて次第に名聲擧り、敎を受ける者、毎年數百名に達し、私塾として盛んなること近古に稀れであると言はれた。幕府はその功を賞して苗字帶刀を許し、日田郡代の直轄とした。敎育の事に從ふこと實に五十年、門下は四千に及び、名を成した者も甚だ多い。大村・府内の二侯も賓師の禮を以て彼を遇した。天保二年以後は弟旭莊が代つて咸宜園を督した。大正四年正五位を追贈された。その詩風は平淡の中に自ら精彩があつた。【著作】析玄〇老子摘解二卷〇淡窓小品二卷〇遠思樓詩鈔四卷〇夜雨寮筆記〇淡窓詩話〇懷舊樓筆記。　（佐久）

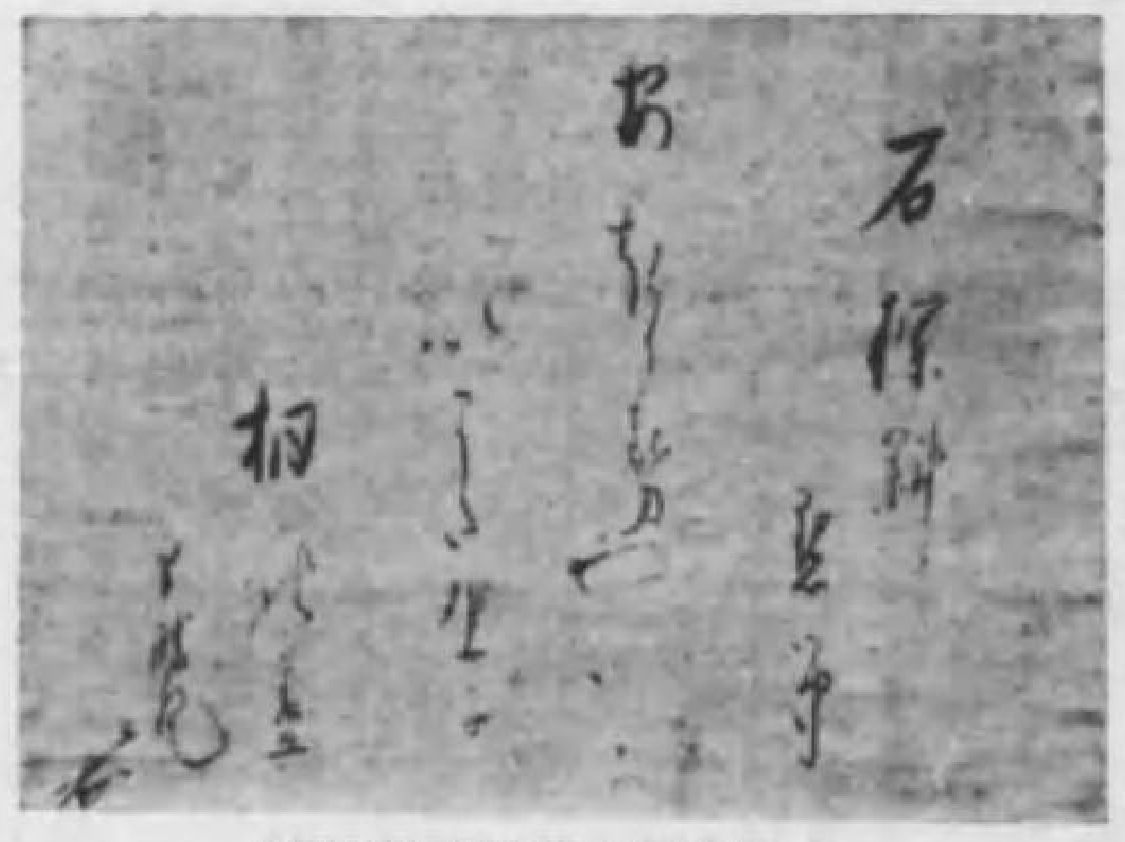
廣瀨淡窓墨蹟（高野辰之氏藏）

膽大小心錄（たんだいしやうしんろく）　隨筆　三卷

【著者】上田秋成　【諸本】新燕石十種（國書刊行會）第五・上田秋成全集・秋成遺文等所收。

【解說】觀察の皮肉、文章の勁拔を以て聞えた著者が、其の遠慮もなく當時京阪地方の文學藝術、さてはこれ等に携はる人々を批評し、その他古今の史談・政論から時風・世相談に及んだもので、如何にも無腸居士の抱懷を見るに足る珍書である。上卷に古人を學ぶ歌人以下四十九則、中卷に師の半德もなき詩人以下七十七則、下卷に家持卿は峰首以下三十九則を載せてゐる。國學者には加藤宇萬伎・加藤景範・小澤蘆庵等、儒者には皆川淇園・村瀨栲亭・中井竹山・岡白駒等、畫家には大雅堂・蕪村・岸駒・應擧・吳春等が話題に上り、本居宣長も甚しくこきおろされて、「ひが言をいふてなりとも弟子ほしや古事記傳兵衞と人はいふとも」などと罵られてゐる。著者の經歷談も數條あつて、中年醫業に勤めた樣子などが判り、晩年己が著作五括を庭外の古井に沈めた奇行をも自白してゐる。文章は極めて不純不統一で文語・口語相半ばする。語法なども勿論眼中にない。所々に戲作調子も見える。この書は秋成が晩年に羽倉信美の家に同居中記したものの由、天保二年寒家と云ふ人の識語にある。　（和田）

淡々（たんたん）　俳人　【姓名】松木氏。幼名熊之助、後傳七【別號】呂國・渭北・半時庵・百川・勃窣翁　【假名】曲淵宗治・森三揚　【生歿】延寶二年に生れ、寶曆十一年（一七六一）十一月二日歿す。享年八十八　【辭世】朝霜や篩で蒔きし富士の山。【墓所】大阪難波瑞龍寺（俗稱鐵眼寺）。生前自ら二樹二石の墓標を遺した。【法名】高源朝水居士　【俳系】其角門　【閱歷】大阪西横堀阿波屋の子である。江戸に出でて小網町に住した。曲淵宗治と假稱し、呂國と號し、其角に入門して渭北と云つた。正德の頃、仙鶴が京に名を成すと聞き、これに對峙しようとして京に上り、庵を祇園の南下河原菊水の傍に結んで、森三揚と假稱し、享保元年鶯峰山の半腹に半時庵を結んで移り、半時庵淡々と號して愈々門戶を張り、仙鶴を壓倒して了つた。點印に青肉を用ひたのは彼が權輿である。享保十九年、點印・家譜を門人竿秋に讓つて再び江戸に出たが、江戸の點者と合はないで大阪に歸り、江戸堀に住し、百川・勃窣翁と號した。一時その居を門人宵天に讓つて堺に移つたが、再び大阪に歸り、島之内鰻谷の龜亭の別莊に住した。これから歿するまで、所謂半時庵流或は浪花振と呼ばれる俳風の弘通に力め、點料を貪り傳書を濫發し、豪奢な生活をした。妾も貯へれば歌吹海にも入り、自ら隱者と答へることを恥ぢるといふ風であった。享保・元文の間俳名天下に喧傳し、門人松木竿秋・山口羅人は、恰も芭蕉に於ける其角・嵐雪の如く半時庵の兩翼であつた。殊にその門下には、林夕（町奉行長田越中守）・五橋（代官角倉與一）・李風（代官石原清左衞門）・花龍（尾州家臣志水甲斐守）・烏朴（紀州家臣三浦長門守）・南里（紀州家臣安藤帶刀）等歷々の武臣多く、その威勢昔日の師其角も及ばぬ程であつた。



半時庵淡々筆蹟（松宇文庫藏）

【著作】安達太郎根二冊（元祿十六年刊）〇其角一周忌一冊（寶永五年刊）〇杉府（同六年刊）〇にはくなぶり一冊（享保二年刊）〇花月六百韻一冊（同四年刊）〇其角十七回（改號、淡々雜談卷）一冊（同八年刊）〇萬國燕一冊（同十三年刊）〇俳諧無邪集一冊（同十五年刊）〇紀行俳談二冊（同十九年刊）〇其角三十三回一冊（元文四年刊）〇かいづの海一冊（同五年刊）〇淡々文集三冊（寬保二年刊）〇淡々發句集二冊 盛瀾分外（延享三年刊）〇年賀集六冊（寶曆三年刊）〇百三十番句合（寶曆四年刊）〇蛙拂集二冊（寶曆七年刊）〇月の鶴〇槇柏〇鷗鳥紀行〇三ケ一〇東仁波〇五歌仙〇六藝〇十友館〇桃若菜〇神苗〇諸曉集〇春秋關〇花月傳〇若俵。

【人物・作風】一種英邁の才があつたが、英雄人を欺くに足る如き器であつた。生前既に「日本無双の橫着者」（寶永七年「刻仙傳」）など云はれてゐるが、而も益々威勢を張り、自流を擴張してゐる。その豪奢は、大阪の水を不潔だとして門人角倉五橋をして日々使船で京の水を運ばせて飲用したと傳へられる。彼の隱僻を語る逸話として種々の書に色々に傳へられるものに、或る人が彼に對面した時「化物の正體見たり枯尾花」（其句、「冬櫻」とも「雪の鯛」とも）と詠んだと云はれ、或はその時、彼がこれに「拜めと雖に八つ手花咲く」と聯したとも傳へられる（合歡食物語）。又門外不出の句とて、「梅の花答へて曰く梅の花」といふ句を門下に示して工夫せしめたとの傳說があるが、これなどは、彼の作風・敎授振・人氣牽引策を想像せしめるものである。蓼太は「穪さがし」に、「誹諧の句ぶりを土地の人情に合せて大に廣めたり」と云ひ、彼の作は田舍人の耳には聞えぬと云ひ、「其頃の作者なり。聞へぬとて下手とはいふべからず」と云つてゐる。少年時に彼の敎授を受けた大江丸は、「俳諧袋」に、「能く所の人情を動かしたり」と云ひ、「俳諧せぬ人までも、ことしの淡々が歲旦御聞なされぬかと申せしほど」であつたと云つてゐる。如何に土地の氣風人情に投じ、これを諧謔的興味で動かすに敏であつたかが知られる。「俳懺悔」に擧げる淡々の語の「詩は長刀、和歌は刀、連歌は脇差、俳諧は懷劍也」は、「宵天に贈る示教」にも見えるので、彼が門人に常に說き示したものであることが知られるが、淡々の語として知られるものは概ねこの類で、故に彼の流行見となり得る所以である。「談綺」に「老後大に人を欺き、誹諧流行車輪のごとく行ふべしと門人に敎訓し」と云つてゐる白露は、「成人の日、付合は半時[illegible]降りたるとまみする人多し」と云つてゐる。畢竟淡々は、其角晩年の傾向を追つたもので、その英才を濫用するよりも惡用するに傾き、而もそれが效果的に應用されて威力を發揮し、多くは「誹諧」ながら而も人を牽く魅力を持つ浪花振を打建てたのである。

【參考】老の樂 市川團〇誹諧家譜 早川丈石〇穪さがし大島蓼太〇俳さげ大伴大江丸〇俳雅摘谷口蕪村〇はいかい袋大伴大江丸〇誹諧

白露〇一時集（五十四歌題發句集）石井雨島〇俳家奇人談竹内玄々一〇合歌合物語合歌合〇俳人百家撰水谷川柳〇俳林小傳中村先久〇俳諧人物便覽三浦若海　（荻原・志田）

段々 だんだん　雜俳　【別名】五文字段々（ごもじだんだん）【解說】もと五文字（別項）より變成したもので、課題もほぼ同樣である。ただ甲より乙、乙より丙、丙より丁と數人で段々に句を附けて長くしてゆく所の、字數の不定な雜俳の一種である。早く廢絶して、その附合等に關して詳細に說明することは困難である。左に「豆鐵砲」中に收錄してある段々の一部を抄錄する。

引つる―一文錢―あるかひなし―紳〻さん―鉄
砦―おかへし申しや―引ゆりだこ―瘦せた旦那―
目あて―金箱一つ―はるか―べらぼふへ―鐵炭―
乳のある客―飛附く―ひろつたよ―やたらむしや
ら―職談明為―（以下略）

かういふ風に一句々々に心を用ひて、即かず離れぬやうに附けてゆくのである。例へば「關を越ゆ」といふ題に、直に箱根などを結ぶは惡しく、「土手で息」若しくは「梯子を下り」、若しくは「四十三」、若しくは「碓氷のだん」、若しくは「この世の風」などと附けるを可とする。第一は大門の番所を越えた廓の賑際、第二は戀路の忍び、第三は四十二の厄年を越した喜び、第四は穂賀が濟んだ安心、第五は出産をいつたものである。　（内藤）

探偵小說 たんていせうせつ　【解說】その名稱の示す如く探偵を主要興味とするから、題材には必然に犯罪、血、怪事件などが取扱はれ、構成には情緒よりも推理に重きがおかれる。そして心理や性格よりも事件本位になり、他の文學に於ては終末に近いクライマックスになる場面、たとへば殺人や、大金の紛失が、概して冒頭に來て、前者の展開的なるに反し、溯及的に物語の進行するのが際立つた特色である。探偵小說は初めてアメリカの作家エドガア・アラン・ポーに依つて創始され、フランスのガボリオやボアゴベによりて著しき普及を見、探偵小說なる特殊名稱はガボリオの付くる所に係る。コナンドイルの出現はこれを完成し、モーリス・ルブランは新生氣を吹き込んだ。日本では文久年間神田孝平がオランダ語から譯した「楊牙兒奇獄」（別項）、「青騎兵右家族共吟味一件」の二篇が、文獻に現はれた最初である。明治になつてからは黑岩涙香がその移植に最も多くの力を盡し、大正以降は久しく雜誌「新青年」を主宰した森下雨村の功を特筆せねばならぬ。作家としては江戸川亂步が最も輝いてゐる。

【參考】明治の探偵小說及大衆文學　小酒井不木（日本文學講座）　（木村）

耽溺 たんでき　小說　【作者】岩野泡鳴【發表】明治四十二年二月、「新小說」【刊行】翌年「篠原先生」外、二三篇と共に刊行。後、代表的名作選集（新潮社）中に改訂所收。泡鳴全集第一卷所收。

【梗概】脚本執筆の目的で妻子を殘し、單身國府津の海岸に避暑に來る。そして借りた家の隣りの料理屋の抱へ藝者吉彌といふ女と關係した。二人の關係はずるずるに深くなり、彼は脚本の仕事も放擲し、その藝者を請け出して女優に仕立てようと金の無理算段をして大に甘さを發揮するが、吉彌には目をつけてゐる客があつて、主人公の思ふやうにならぬ愛戀の苦惱を突込んで書いた。後半はどうにもならず行詰つて歸京した。後、吉彌の上京を待つて千束町の家を訪れた時、女の眼病のひどいのを知り、矢張り梅毒患者だつたかと慄然とする。而して絶望苦惱するが、この戀の惱みを味ふところに强烈な人生を感じ、「さよなら」を凱歌の如く言ひ捨てて引上げる。

【批評】やゝ痴呆的にさへ見える田舎藝者に惚れこむ主人公の戀情に醜い性質を中心とする初歩的一元描寫が見られる。前半のずるずる愛慾にひかれる男の心、愚と知りながら吉彌と關係する邊の描寫の成功に較べて、後半は所々に一元描寫の破綻もあり、放漫で筆觸もだれた。しかし作者には既に明るいニヒリズムから來る樂天觀が出來てゐたので、他の自然主義作家のもののやうに暗さに耐へ兼ねるやうなところはない。又情事の描寫に鋭い感覺を見せる泡鳴獨自の妙味は、既にこの初期の作品の中にも十分に見ることが出來る。女に惚れてゆく男の心理を何等說明しないでゐて、自ら無理がなく讀者の胸に來る。さうした「無技巧の技巧」の冴えを見ることが出來る。【史的地位】作者の出世作である。後の種々な傾向を暗示する發芽的な作品で、自然主義文學史上にも「破戒」「蒲團」（各別項）と共に初期屈指の力作。當時花袋・白鳥・秋江等は擧つて激賞した。

【參考】岩野泡鳴論　正宗白鳥（中央公論昭和三ノ一八）　（舟橋）

談唐詩選 だんとうしせん　詩話　一卷【著者】市河寛齋【刊行】文政二年。日本詩話叢書に收められてゐる。【解說】當時荻生徂徠一派の詩人が金科玉條として珍重した「唐詩選」は李于鱗の選にあらず、名もなき書賈の僞選なることを斷じ、服部南郭が校刻した唐詩選本の誤を指摘などしたもので、「唐詩選」を讀む者の必ず參考すべきものである。　（佐久）

譚嚢 たんなう　噺本　一冊【作者】馬場雲壺（自體齋印章）【名稱】（譚子譚後嚢）と併書がある。本書の訓みは不明であるが、序にタンノウと洒落れてあるからこれに從つた。たんのうは當時流行した民謠の口拍子で、例へば折助たんのうと云ふが如きである。【刊行】安永六年。明和九年即ち安永元年刊本のあるのは、前篇「鹿の子餅」と合卷としたからで、安永六年刊なることは、「力競傳」（安永五年）を引用してあるので明白である。【諸本】近世文藝叢書第六所收【解說】五十三篇の小咄から成る。「猿」は當時流行した「一つ長屋の佐次兵衞殿、四國をめぐつて猿となるんの」の民謠から採つた。「見せ物」は、當時兩國で評判であつた「飛んだ靈寶」の見世物から採つた。「ともよ」は安永五年五月堺町の見世物に、越後女御川ともよの力持が出たのを取材、既に前年風來山人の「力競傳」が、同じ材料を用ひてゐる。「孟宗」及び「其二」は、言ふ迄もなく廿四孝から取材。「切腹」は當時人氣のあつた俳優大谷廣治・市川門之助から取材。「魔法」は人を馬に化する話で、既に「正直咄大鑑」（元祿七年）の「夢想の馬ぐすり」に出てゐるのを奪胎したものである。「紋傳」は、「太平記」に現れてゐる「眉間尺」の說話を採用したものである。前篇の「鹿の子餅」には輕い滑稽に滿ちた佳作が多かつたが、本篇には重い滑稽、言語の洒落が多くなつてゐる。それは材料の缺乏と時代の推移から來てゐるもので、當時の狂歌の傾向が著しく滲出してゐるからだと認められる。併し以後の噺本に比較すれば、遙に輕い可笑味なのである。【影響】本篇も後世の滑稽本及び噺本によく引用されてゐる。「弔ひ」は女房の死體をさかさまに早桶に入れ、和尚が首の無い胸毛のある死

轉と見誤る可笑味であるが、十返舎一九の「東海道中膝栗毛發端」（文化十一年）に襲用してある。「道例」「願人坊主」など現代の落語の枕に用ひられてゐる。　（山崎）

壇浦兜軍記 だんのうらかぶとぐんき　浄瑠璃　五段　時代物【作者】文耕堂・長谷川千四【名稱】壇浦に於ける景清・箕尾谷の錣引に據る。【初演】享保十七年九月九日初日、竹本座【題材】近松作の「出世景清」（別項）の改作。【諸本】浄瑠璃名作集（帝國文庫）・浄瑠璃名作集（有朋堂文庫）・浄瑠璃名作集上（日本名著全集）等所收

【梗概】〔初段〕南都東大寺大佛殿再興成就に際し、頼朝の御臺政子が上洛し、岩永左衛門・本多次郎がこれに随ふ。箕尾谷四郎の妻白梅は父根井の大夫と共に行方の知れぬ夫を尋ねて熱田に到り、大宮司父子に逢つた。姿をやつした景清は、東大寺門前で、源氏に返忠した叔父大日坊を殺し、大佛供養の日頼朝を討たうと忍び入つたが、本多次郎の温情を受け、岩永一味を追拂つて行方を晦ます。〔二段〕景清と契つた傾城阿古屋の兄なる浪人井場十蔵は母を養ふために、清水寺の邊で辻講釈をしてゐると、景清に容貌が似てゐるため、秩父重忠の臣半澤六郎に捕へられたが、誤と知れて許される。大宮司は娘の衣笠（景清の妻）を伴ひ、五條坂の花扇屋に赴き阿古屋に會つた。十蔵は景清から屢々金を惠まれた恩を感じて身代りに立たうとして變裝して來た。花扇屋主人戸平次の惡心を聞き、十蔵兄妹は大宮司父子を助けんとしたが、衣笠は義理を立てて自害する。〔三段〕秩父重忠は禁裡守護の代官として堀川御所に在る。阿古屋が景清の行方を知らぬといふので、助役の岩永が拷問しようとするのを制し、琴・三味線・胡弓を阿古屋に彈ぜしめ、その音色によつて僞りならぬを覺つた。十蔵は母と共に岡崎に住んでゐたが景清に變裝して自害しようとする。箕尾谷が壇浦の鬱憤を晴らすべく景清を探しに來るので、十蔵は景清と名乘つたが、母は自害して兄妹をして景清を探しに立たせる。〔四段〕阿古屋は景清の遺児を抱き、十蔵と共に旅立して近江の長濱についた（道行紫野の恋乳衣）。根井大彌太宅の脊請場で、頼朝を呪ふため大工にやつした景清に逢つて委細を告げた。大彌太は景清と知つて大工に扮した武士達に捕へさせようとしたが、左官姿の箕尾谷が出て景清を捕へる。景清は箕尾谷の實の兄なる事をあかし、その自殺するのを制して引かれる。〔五段〕景清は鎌倉扇谷の牢を破つて出たが、十蔵が景清と名乘つて出たと聞くや、自ら兩眼を抉つて戻る。十蔵は岩永を殺し、切腹しようとするのを、頼朝は制して奉公を命じ、景清には日向勾當の官を與へる。

【構想】原作「出世景清」に比して極めて技巧化されたが、それだけ劇的效果を收めたのは事實である。端的であつた伊庭十蔵をその母と共に人情篤い人物とし、又景清と十蔵の容貌を酷似させ、兩人の情義を厚く見せた果に、實の兄弟たる關係を明かす趣向にしたのは、一見劇的にのみ走つたとも見えるが、景清の人物を一層偉大ならしめる事には十分成功したといへる。又十蔵兄妹、大宮司父子の義理立ても原作の小野姫の件を進展せしめたものである。三段目の阿古屋の責め場は最も華美な點で成功したものと言ひ得る。四段目根井宅の脊請場は、原作の初段の書替へである。

【影響】十蔵を景清と瓜二つとした案は「二人景清」（景清参照）の根源となり、又四段目脊請場の屋上立廻りは、讀本の「里見八犬傳」の芳流閣屋上の闘爭の藍本であるといはれてゐる。歌舞伎に入つたのは、翌享保十八年三月大阪角の芝居上演を初め、江戸には「閏月仁景清」の名題で、元文二年河原崎座顔見世興行に現はれた。後になると、操でも歌舞伎でも、三段目琴責の段のみが屢々上演されて今日に及んでゐる。音曲の聞かせ場といふためもあり、配役の好都合なためでもあらう。　（守随・鶴田）

【參考】浄瑠璃名作集上卷解題　黒木勘蔵

滄泊 たんぱく　儒者【姓名】安積覺。字は子先。通稱覺兵衛と稱す。【別號】老圃・常山・老牛【殁年】元文二年（二三九七）十二月十日殁。享年八十二【墓所】水戸常磐原に葬る。【家系】祖正信は覺兵衛と稱し、元和元年大阪の役に戰功あり、後水戸侯に仕へ、父貞吉職いでその祿を食んだ。【閲歴】幼にして朱舜水に從つて學ぶ。長ずるに及び博學能文にして最も史學に長じた。徳川光圀が「大日本史」（別項）を編修するに方り、滄泊を擧げてこれが總裁となした。明治三十五年十一月正四位を贈られた。その學は程朱を主とするけれども深くこれに拘泥しない。【著作】湖亭渉筆四卷〇烈祖成績二十卷〇大日本史論贊十卷〇大日本史贊藪六卷〇水戸義公行實一卷〇朱文恭遺事一卷〇滄泊齋文稿八卷。　（佐久）

丹波與作待夜の小室節 たんばよさくまつよのこむろぶし　浄瑠璃　三段　世話物【作者】近松門左衛門【興行】竹本座。「外題年鑑」に寶永四年六月とあるが、大關圓の與作節の文句によつて、寶永四年末の興行と考定される「心中重井筒」（別項）より後の作とせられ、又寶永五年の顔見世に京都夷屋座でこの作を少し改め「ゑびす講結御神」として興行した。その狂言本の卷頭に、本作の冒頭の詞章をその儘用ひてゐるので、寶永五年の作と考定されてゐる。本作は正徳二年三月興行の時「丹波與作」と改題し、更に享保十七年六月興行の時、「伊達染手綱」と改題し、道行の外題を「道行戀路の月毛馬」と改めた。【諸本】八行四十五丁本、山本九兵衛板。八九行三十五丁本、正本屋七兵衛板。七行五十九丁本（丹波與作）、山本九兵衛板。諸種の近松全集所收。【題材】丹波與作と圖の小萬の實說は詳かでないが、古く「諸國盆踊唱歌」但馬の部に、「與作思へば照る日も曇る關の小萬が涙雨か」「與作丹波の馬追なれど今はお江戸の刀さし」とあるのから着想し、これに元祿十七年刊「落葉集」第四卷所載の「與作節」「馬士節」等の踊歌をとり入れたもの。元祿十六年刊「松の葉」第三卷にも、「與作」といふ端歌が見えてゐる。丹波與作が初めて芝居になつたのは、延寶五年十一月、京都北側の芝居で嵐三右衛門が演じた「丹波與作」からで、詳しい事は不明であるが、本作と

丹波與作（正本）

の關係はないやうである。次は元祿七年京都村山平右衞門座興行の富永平兵衞作「たんば與作手綱帶（たづなおび）」であるが、これも本作との共通點は認め難い。又「吉光寺與作」といふ古淨瑠璃の正本もあるといふが未見。

【梗概】〔上之卷〕丹波國の城主由留木家の息女しらべの姫は、未だ十歳そこ〳〵で、關東の高家入間家へ養子分として輿入する事となつたが、いよ〳〵出立の間際になり、お伽小姓達の謠ふ「山も見へざるかりそめに、江戸三界へ行かんして、いつ戻らんす事じややら」といふ唄を聞いて、急に東へは行かぬとむづかる。お乳の人滋野井を初め、皆當惑してゐる所へ、通しで行列の供をする今年十一の三吉といふ馬士が、姫と一緒に道中双六をしてお目に懸けると、姫の氣分がかはる。滋野井は、喜んで三吉に褒美を遣り、話の中に三吉は、放蕩の結果改易となり、自分と離別した夫伊達與作との間に儲けた一子與之介なる事を知るが、姫が馬士を乳兄弟に有つたとあつては、養家へ行つても肩身が狹からうと、因果を含めれば、三吉は母を恨みながら去る。〔中之卷〕伊達與作は、落魄して馬士となり、關の宿の白子屋の出女小萬に馴染んでゐる。小萬の父は年貢米の未進から水牢の責にあひ、小萬の苦惱の種となつてゐる。與作はこれを救はうと、一か八かの博奕を打つたが失敗して、石部の八藏からの借錢で首が廻らない。そこで姫の一行が關の宿に泊つた夜、平常與作といふ名にほれて自分に忠實にしてくれてゐる三吉を唆して、姫の用金を盜ませる。三吉は盜んだが忽ち捕へられ、その上、役人の隙を見て、自分を辱めた八藏を斬殺してしまふ。與作はこれを聞き良心の苛責に堪へず、小萬と共に死場所を求める途中、三吉が小萬に預けた守袋から我が實子と知つて失神せんばかりに仰天するが、小萬はこれを勵まし、馬に抱き乘せて死地へ急ぐ。〔下之卷〕道行「與作小まん夢路の駒」宿外れの千貫松に着いた二人は、いざ死なうとしてゐる所を、滋野井の命乞によつて出された搜索隊に發見せられ、與作の舊[illegible]左內の諫言で死を思ひ止まる。かくて與作は姫の慈悲で世に出で、小萬もお家に引取られ、目出度く與作節で結ぶ。

戀女房染分手綱

【構想】本作には殆ど翻案といふべきものがないため、近松はその獨創の才を自由に揮つて、彼が理想的の構造を成したと見られる。滋野井子別れは特に有名で、人の涙を誘ふ詞句に富む。又與作が三吉に罪を犯さしめて、後に我が子と知つて驚くといふやうな運命悲劇は、後世默阿彌等が好んで用ひる所。下之卷の「お乳の人の御立願あす四つ迄に命乞の太々神樂」といふ文句は、當時盛んであつた伊勢參宮の見物を當て込んだものであらう。本作は近松の作中でも特に歌舞や踊の要素の多い作である。【影響】宇治加賀掾の正本に、本作の下卷以下に改修を施したと見るべき同外題のものがある。寛延四年二月竹本座上場の吉田冠子・三好松洛作「戀女房染分手綱」は本作の改作で、この作は同年秋江戸中村座で上場されて以來、今日まで三都の芝居に幾度か繰返されてゐる。一中節の「與作小まん夢路の駒」は、本作の道行の外題も詞章もその儘であり、豐後節の「丹波與作夢路駒」、宮薗節の「染分手綱」十段目「三吉愁ひの段」、長唄の「與作」、歌祭文の「與作丹波染毛上、（與作小萬）夢路の諸手綱下」、兵庫口說熊野節の「丹波與作」等は、持本作から出たものである。歌舞伎書替へ物には前述の「ゑびす講結御神」の外に、同じ寶永五年十一月、芳澤あやめが大阪でやつた「丹波與作」、寶永六年京都榊山座興行（推定）の「與州連理の松」、正德元年夷屋座興行（推定）の「丹波與作待夜の小むろぶし」（ゑびす講結御神と全く同一）、寛政五年四月、大阪中座興行の辰岡萬作作「東海道讀願禮」、同七年十一月京都四條南側芝居興行の奈河篤助作「新改版道中双六」、文化二年八月、江戸市村座興行の並木五瓶作「小室節錦江戸入」、明治元年三月守田座興行の河竹默阿彌作「染分千鳥江戸褄」等がある。外に小說では、浮世草子に元文四年刊の八文字自笑作「丹波與作無間鐘」、合卷に文化十一年刊の曲亭馬琴作「驛路鈴與作春駒」がある。

【參考】近松傑作全集卷之壹解題 水谷不倒 ○近松名作集上解題（日本名著全集）黑木勘藏 ○近松全集第八卷解題 藤井乙男 ○歌舞伎狂言細見 飯塚友一郎 ○日本歌謠集成卷七・八 ○近代歌謠集 ○日本小說年表 〔高野（正）〕

檀風（だんぷう） 「仇討物の謠曲」を見よ。

團袋（だんぶくろ） 俳諧集 一冊 【編者】北條團水 【本稱】俳諧團袋 【名義】自序に「そも〳〵今の袋は、へちまの皮の團ぶくろ」とある如く、この諺から取つて、意に介せられる程の價値のないものかも知れぬとの表面は謙遜であらうが、實は、俳壇に問ふ意味から名づけたものであらうが、編者團水の團に因んでの命名であらう。【成立】元祿三年冬 【刊行】元祿四年一月下旬 【諸本】芭蕉以前俳諧集（俳諧文庫）下卷所收 【內容】卷頭に短文の自序があり、次に凡例と標記して目次を揭げ、その次に大阪西鵬の序（元祿三ひまの冬）があり、次に梓行年月を記して本文に入つてゐる。この體裁は一般の集とは異つてゐる。且つ第二の序の署名の西鵬の鵬の字から右傍へ線を引いて、「鶴ノ字ヲ改」と記してある。西鵬の序によると、元祿三年冬に西鵬が京住の門人團水を訪ね、一夜話まじりに兩吟し、歌仙の中程で止んだとある。この半歌仙が二折あつて本文の卷頭になつてゐるので、團水がこの二折を土臺とし、これに他のものを加へて本集を成したものであることが知られる。本文は、この西鵬・團水兩吟の半歌仙二折、次に團水・澗瀨兩吟百韻一折、團水が知人を訪ねて手向草とした天龍・李梅との三吟表六句、その次に「俳諧一言芳談」と標題して、盧月庵・西鵬・如泉・我黑・信德・言水・芝蘭・澗瀨・鬼貫その他誰やらとある人々の俳諧上の警句が集められて居り、次に言水・澗瀨・我黑・信德・團水五吟の春・夏・秋・冬・春の五歌仙、最後に元祿四年の初會の芝蘭・澗瀨・團水・我黑・信德・執筆の表合、次に元日の發句二十三句あつて終つてゐる。その後に「居士讃說」と標目してその參考書と思はれるもの九種揭げてある。【價値・批評】本集は西鶴研究の方面に於て重要な地位を取る。西鶴が西鵬といふ號を用ひ出したのは元祿三年頃からで、本集はその基本的な資料の一となる。又西鶴は、浮世草子に轉向した後、貞享元年に二萬三千五百句の獨吟をしてから元祿二年に至るまでの六年間は、俳諧を殆ど捨てたのであるが、元祿三年に至つて、可休の「俳諧物見車」（別項）の中で非難されたのが動機をなしたと見えて、浮世草子の傍ら俳諧にも復活したのであるが、その復活の試みが本集であつたと認めらるべく、それは本集が可休の「物見車」に對して反駁書「特牛（ことひうし）」を發表した團水の撰になつてゐることから考へられる。然るに彼の序中に「あとよりおよぎつけども、とかく足のおもたく」と云つてゐる如く、中斷後の老來の彼にはもはや昔日の氣勢がなく、これが歿時までも挽回されなかつたのである。併し本集及び本集以後の彼の作は、俳壇の時代にも因らうが、蕉風に近いものになつてゐるので、この點からも注意さるべきものである。本集は作者から見ると、貞門系の人が寧ろ多く、中に言水・信德の如き蕉風式の人もある。茲に西鶴門たる團水の俳壇との關係及び傾向と時代とが知られ、復活以後の西鶴を考へるにも重要な意義を持つ。また、「俳諧一言芳談」の諸家の語の終りに、團水が「いづれもの申さるゝ段みな尤」と云つてゐるので、「一言芳談」は、畢竟團水が他を借りて自己の俳諧主義を述べたものと云へる。〔潁原〕

單文（たんぶん） 「文」を見よ。

談鋒資銳（だんぽうしえい） 隨筆 二卷 【著者】荒井堯民 【名稱】談鋒を銳くするに資せんとの意を以て書名としたもの。【刊行】文政十二年の序跋がある。【解說】本書見返しに題して、「此書ハ後世隨筆中ニ論ズル所ヲ劄記シテ國字ニ和解シ、世俗ニ解シ易カラシム。又小說ノ奇事奇語等ヲ載スレバ、大ニ學者博識ノ資トシ、看ル人ヲ悦シメ談鋒ヲ銳クセシムルノ奇冊ナリ」とあり、支那歷代の史上人物、殊に文藝學術家等の逸事を揭げて著者の意見を加へ、以て談論の資料としようとしたものである。文政十二年大田敎（[illegible]）の序、同年武田信成の跋がある。【著者小傳】堯民、字は蘇行、通稱治郎右衞門、號は晴湖、旗下白須賀氏の士である。周易に通じて名があり、後大田錦城に師事した。歿年未詳。「楮坡談隨」「[illegible]傳說」「春雪解語」等の著がある。〔和田〕

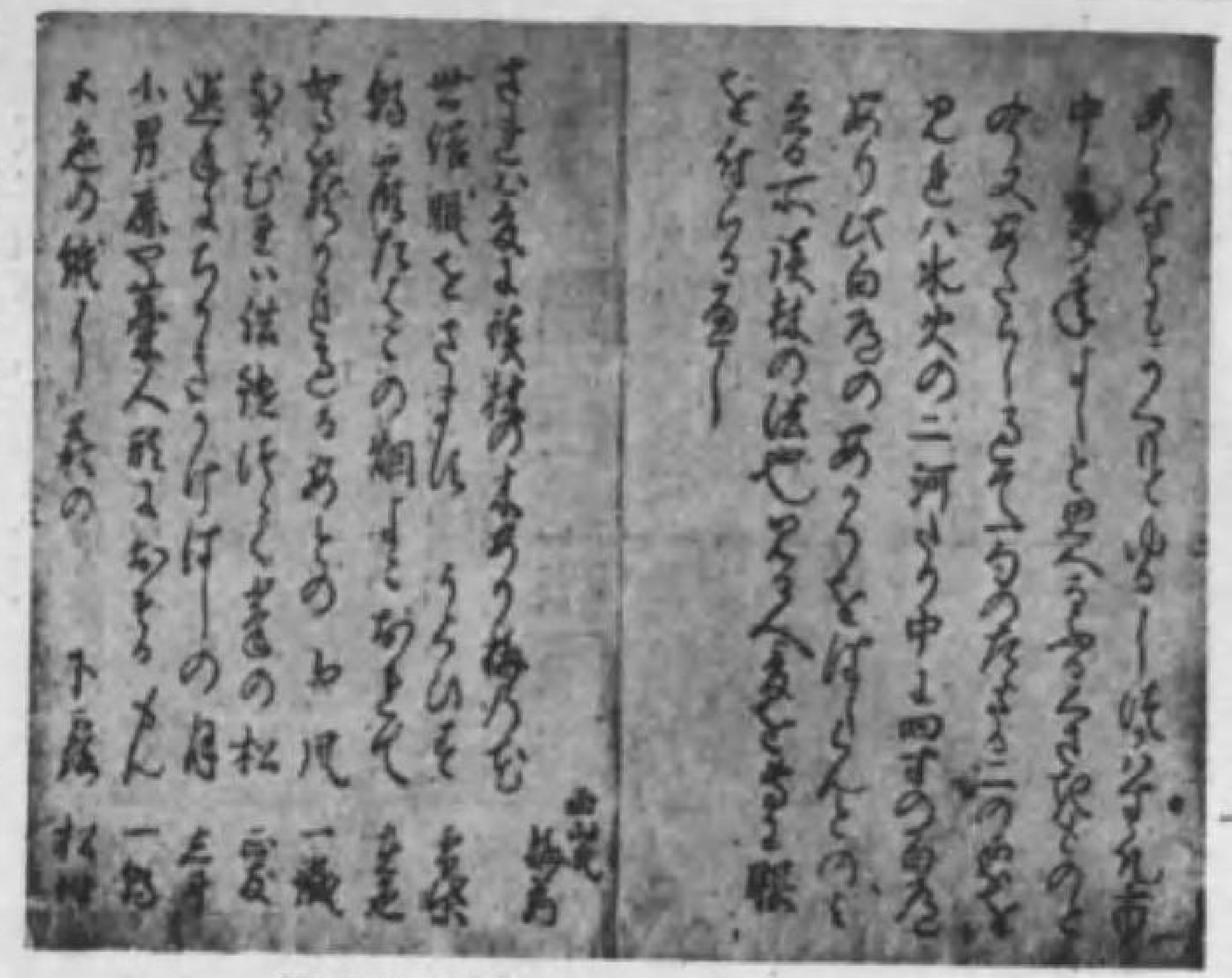
單朴（たんぼく） 滑稽本作者 【本名】伊藤半右衞門 【生歿】延寶八年江戸に生れ、寶曆八年（二四一八）八月四日、武州多摩郡青柳村に歿した。享年七十九 【墓所】同村玉川院にあつたが、最近谷保村長福寺に改葬した。【閱歷】詳しいことは判然せぬ。彼は獨身で、晩年、青柳村に移つたやうに傳へられてゐるが、「雜長持」の序に、「玉河の邊に住て淡點の若盛より、今淡點の老の秋迄、耕耘勤の閑には、平假名の草紙を友とし」とあるから、元來青柳の人で、この地に久しく住んでゐたらしい。普通の百姓ではなかつたらしく、その著述の動機が、靜觀房好阿の「當世下手談義」（別項）を見てその主義に共鳴し、直ちに「敎訓雜長持」を著はし、他の著作も悉敎訓的である所を見ると、やはり好阿と同じく、村童の敎育に任じてゐた先生か、又は醫者であつたかと思はれる。【著作】敎訓雜長持五卷（別項）（寶曆二年刊）○里俗敎訓銭湯新話五卷（同四年春刊）○敎訓差出口五卷（同十二年刊）○楚古良探五卷（明和五年刊）。その他「雜長持後篇」五卷、「後篇銭湯新話」五卷、「山椒太夫物語」五卷の著名がその著の奥書に記してあるが、刊行されたか否か詳かでない。〔水谷〕

【參考】伊藤單朴 三田村鳶魚（初版日本文學講座第十卷附錄）

だんまり 演劇 【名義】默る芝居、即ち默劇の意。【解說】江戸時代中期から、歌舞伎劇に行はれた一種の演出法で、全く臺詞のないパントマイムである。普通は顔見世興行の際、役者の顔ぶれと人柄とを紹介するものとして使はれ、まづ時代物の形式でゆく。即ち幕があくと仕出しが出で、淺葱幕をとると、一座の花形が色上下でせり出しで出る。背景は山神の祠などをかりる。そしてその辻堂から大百（だいびやく）をかぶつた山賊の頭のやうな者が出て來て、その柱を持つて柱まきの見得をする。下手の木の穴から修行者とか、女方が時參りのやうな風體で出る。さうした人物が大勢出て、結局旗や何かを持ち合ふ。そして活人畫のやうに、いろ〳〵美しく動く。遂に山賊の頭などが一人花道へゆくと幕。幕外で、その役が六法をふんで花道を入る。これが普通である。別に「世話だんまり」といつて、世話狂言の一幕中の一節をいふものがある。「四谷怪談」の隱亡堀の直助權兵衞、民谷伊右衞門・佐藤與茂七などとだんまりになる。但し、この方は或る筋の變化進展を一先づそこで保留して、後の幕の解決に殘すための案から出たらしい。又は作者が筋の進行に困り、そこに未解決の逃避所として作られた場合もある。初めのは「三立て目」の返しに屢々このだんまりが使はれて、一座の立て者が全部出て、一の顔見世の意義をなした樣式は千篇一律と見られる。普通の今日の顔見世風のものの外、著名なだんまりは[illegible]、七代目團十郎が演じた[illegible]などがある。[illegible]だんまりには種類はなく、大同小異の形式でゆく。〔三宅〕

談林十百韻（だんりんとつぴやくゐん） 俳諧集 二冊 【編者】田代松意 【刊行】延寶三年 【諸本】延寶四年京阪の再版本がある。芭蕉以前俳諧集（俳諧文庫）・談林俳諧集（俳書大系）所收。【內容】江戸談林の俳諧百韻を十卷集めたものである。延寶三年春西山宗因が江戸へ下つたのを幸として、江戸に於ける宗因派の連衆九人が百韻興行を催したのが本書成立の基である。卷頭の百韻は、宗因に發句を乞ひ、宗因の「されば爰に談林の木あり梅の花」の句を發句として、雪柴・在色・一鐵・正友・志計・一朝・松臼・卜尺・松意の九人が附合つた九吟で、宗因はこの百韻に發句を與へてゐる外、附合には加はつてゐず、第二以下の百韻にも加はつてゐない。第二以下第十に至る九卷の百韻は、以上の九人がそれ〳〵一度づつ發句を出して他の八人と附合つた九吟である。各卷の發句の季は、十百韻に普通に見る季の配當の通りで、第一から第三までの三卷の發句が春、第四・五のが夏、第六から第八までのが秋、第九・十のが冬である。宗因はこの年の夏、京へ向つて出立したから、この十百韻の或る卷までは捌いて指導したのだらうが、或る卷以下は、宗因の捌きに預らないものであらう。本集成立の事情や主義本領を述べた序と跋とが附いてゐて、その何れもに署名がないけれども、松意の文と推定される。【價値】宗因風の俳諧を談林風（別項）といふやうになつたの

は、本集以後のことと思はれる。本集の序に、松意等がその會盟を俳諧談林と云つてゐたところから、江戸人が自然談林と呼ぶやうになつたと云つて居り、宗因の與へた「されば爰に談林の木あり梅の花」の發句も、これを指して詠んでゐるのである。松意が談林軒と號するに至つたのも、この時以後のことらしく、又かゝる内容を持つ本集が現はれてから、宗因一派が一般に談林と呼ばれるに至つたものらしい。宗因の江戸下りは松意等の招きによつたのであらうが、松意等のこの俳諧運動は、江戸談林の樹立とその主義宣言のためとであつたと云へる。その意氣は、宗因の發句に對して、雲蝶が「世俗眠をさます我」と脇を附けてゐるのでも窺はれる。また時期から云つても、この時が宗因風の勃興すべき機運に到つてゐたので、この機運の生み出したものが、上方に於ける「大阪獨吟集」の出版と、江戸に於けるこの十百韻の運動とであつたと見られる。以上の點に於て、本集は談林派に於ける頗る意義深き劃期的なものである。（春田）



談林十百韻（松宇文庫藏）

談林風（だんりんふう）　俳諧流風

【名稱】流派としては談林派といふ。西山宗因（別項）一派の俳風を稱する。談林とは、もと佛敎に於て談義の林の義で、僧徒の學場を稱した語である。「鞋高俳傳」等に見える。寺院の稱を檀林といふ所から移つて生じた語かと思はれる。江戸の田代松意の「談林十百韻」（別項）の序に、鍛冶町に同志の會合を結んだことを述べて、「此席をば我等ごときの俳諧談林とこそ申すべけれなどたはぶるゝよりおこりて、誹人談林と云ならはす」とある如く、松意等がこの佛語を俳諧の會盟に借用し、それから起つた名稱である。それ故又檀林といふ文字も用ひられてゐる。

【性質】貞德流の俳諧の單調と、その法式の煩瑣とに飽き、その反動として専ら斬新奇拔な俳風を樹立しようといふ動機からこの派の運動が起つたのである。即ち想に於て古典趣味から現實趣味への傾向を取ると共に、取材の範圍を擴張し、用語に於て漢語・俗語をも自由に使ひ、表現に於ても十七音形式を必ずしも墨守せず、見立・取成によつて古事をもぢり、輕口・道化に落して、異體な滑稽味をも表はさうとした。例へば天滿紳を傾城にしたり、天の逆鉾を指小木に見立てたり、陶淵明に金の無心を言はせたり、釋迦を下剃して雪隠に行かせたりするなどの放埒無慚な綺語なことまでも敢へてした。隨流が惟中の「皮肉百韻」を分析して、「大惡無道七句」「餓鬼作り十句」などと云つて、惡句を數へ立ててゐるのも（誹諧破邪顯正）、古風（貞門）から見ては無理もない事であつた。併し談林の視ふ所は、輕口・もぢりの狂言、奇拔な滑稽にあつたのであるから、隨流の攻擊などは歯牙にもかけなかつたのである。又一面に早口を尊ぶ傾向を生じ、口拍子にかけて、出來るだけ短時間で多くの句を詠み上げるを誇とした。古式では千句は三日が定法であるのに、談林は千句を一日に作つてゐる。特に矢數俳諧（別項）を競つたりして、西鶴の如きは一日に四千句、果ては二萬三千五百句作つたりして、世人の度膽を拔いてゐる。談林とても全然連句の法式を踏み破るのでもないが、古風の法式の一々を顧みるのではないので、隨流が「句每の不埒・用付・同意・新俗異風、ただ無方放しのめた的也」（誹諧破邪顯正）と云つて、憤慨する如きものになるのである。又會席（別項）の氣脈になつて行つたことも勿論である。【批評】古風が優美な和歌趣味の想を、緣語・懸詞によつて滑稽化して行く事は、終には千篇一律の弊に陷らざるを得ない。談林がその古い型を破つて、用語も自由に、取材の範圍も擴張して、滑稽趣味を豐かにしようとしたのは、一段の進步であつたとは云へるが、それが輕口・道化の邪俗路に墮ちるやうになつては、もはや藝術の頽廢で、到底進步と永續の生命のあるべきものではない。殊に口拍子の速吟は愈々俳諧を散文化せしめ陷落せしめる。同じ談林中の惟中が、近年千句萬句など名づけ早口に俳諧を好む事は何の味もない事である。句は沈思して一句でも心をとめて出すのが面白いのであると云つてゐるのは、恐らく西鶴あたりに當附けた言であらうが、至當である。併しかういふ惟中自身も談林の惡弊を脫し得なかつた。畢竟談林は舊套を破壞して實義ある建設を生むべき過渡的な俳諧で、蕉風が興るに及んでは談林としての存在を失ふべきものであつた。

【沿革】談林の開祖宗因の門下には、三都その他に有力者があつて、それ〳〵宗因風を鼓吹した。かくて談林風が愈々流行するに從ひ、貞門の俳諧の師風を變じてこれに化せられる者が多く、貞門が漸く衰へて談林の新風が勢力を得るに至つた。宗因は元來連歌師であつたから、中でも穩かな方であつたが、飛體と呼ばれた松意、伴天連社と號した高政、阿蘭陀流と呼ばれた西鶴等、新奇異體の作風の高弟も少からず、門人の方が却つて師よりも放埒無慚であつた。談林は延寶・天和に於て、最も隆盛を極めたが、西武門の隨流が古風の衰頽と新風の跋扈を慨して、高政の「中庸姿」（別項）に對して「誹諧破邪顯正」（別項）を著はして攻擊したのに端を發して、一時俳壇に論戰の渦を捲き起したが、結局は談林の勝利に歸して了つた。併し談林の巨頭の間にも勢力の爭鬪があつて圓滿ではなかつた。西鶴は高政の口拍子を冷笑し、惟中は西鶴の矢數俳諧を諷罵した。京阪の談林は宗因歿後やゝ沈滯の色を見せたが、松意を中心とする江戸談林は益々隆盛で、高野幽山は「江戸八百韻」を著はし、言水・一鐵・素堂等と共に新風鼓吹に努めた。寛文十二年江戸へ下つた芭蕉も、漸く古風を捨てて談林に沒頭し、素堂・信德と共に「江戸三吟」（別項）を試みたりしたが、貞享以後は全く談林を蟬脫して蕉風を開いたので、俳風こゝに三變し、俳壇の大勢は蕉風（別項）に歸するに至つた。江戸談林は才麿門の笠家逸志、逸志門の笠家舊室、舊室門の小菅蒼狐、蒼狐門の谷素外・五詩・寶馬等と傳統し、江戸座（別項）中の宗因座の宗匠としてその勢力を維持したが、俗化した蕉風で、昔日の斬新・豪放を失つた。【研究史】許六の「歷代滑稽傳」（別項）に談林の主なる人物を擧げて評傳的に風調を敍してゐるのが古く、白露の「誹論」（別項）や樸川の「俳諧獨稽古」（別項）にも、一わたりの歷史的考察がある。系統の研究には、沾涼の「綾錦」（別項）以來の系譜に、その系譜立てが見られ、その中、素外の「西山家連誹系譜」は、江戸談林の系譜立てである。併し明治以前に於ては、江戸談林七世で編著の多かつた素外が、編著と共に談林派の顯揚に力めたのが目ぼしい位で、特に纏まつた見るべきものはなく、明治以來俳諧の史的研究が進んで以來、談林の研究も漸次精細となり、本格的なものとなつたのである。

【參考】（評論・歷史）誹諧破邪顯正 中島隨流○誹諧破邪顯正返答 岡西惟中○誹諧さるとりもち 中島隨流○歷代滑稽傳 森川許六○誹論 白露○俳諧獨稽古 谷口鷄口 【主要作集】大坂獨吟集 西山宗因批判○談林十百韻 田代松意○大句數 井原西鶴○江戸三吟 伊藤信德等○當流籠抜 松井宗旦○中庸姿 菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野幽山○江戸新道 池西言水 ○大矢數 井原西鶴 ○七百五十韻 伊藤信德 ○次韻 松尾芭蕉 （系譜）綾錦 菊岡沾涼○誹諧家譜 草川丈石○かゞ見種○西山家連誹系譜 谷素外 ○誹家大系圖 生川春明　（萩原・春田）

ち

千秋（ちあき）　國學者　【姓名】横井宏時。通稱金吾・吉平・十郎左衞門・田守（致仕後）【別號】木綿苑　【生歿】元文三年三月朔日、名古屋に生れ、享和元年（二四六一）七月二十四日歿す。享年六十四　【墓所】尾張中島郡下祖父江村一弓山永張寺　【閲歷】千秋は横井時諄の二男、家は世々名古屋藩に仕へて、千石を領した大身だつた。兄圖書の嗣子となり、寶曆八年その後を嗣ぎ、御小姓より徒士頭・新番頭・書院番・部屋用人等を歷仕して、寛政四年に致仕した。これより先、本居宣長の門に入つて國學を修めたが、公務の多端なるを以て、專心學事に沒頭するを得ず、しば〳〵植松有信を伊勢へ遣つて疑義を質さしめた。千秋また巨資を抛つて、宣長の「古事記傳」「古今集遠鏡」等を名古屋に於て板刻せしめた。【著作】詩歌論○天眞中洞○玉鉾百首解○八尺勾璁考（本居宣長全集所收）　（以上森）

【業績】本居宣長に就いて國學を研究し、師の宣長にも大に推重されてゐたやうである。宣長の「古事記傳」の刊行は、植松有信の努力と、彼の出資に依つて始めて成つたものである。「詩歌論」（別項）に見える歌論は、大體宣長の「石上私淑言」（別項）中の詩歌比較論と同樣で、特に彼の創見と見るべきものもない。家の集は殘つてゐない。短册も殆ど書かなかつたさうで得難いものにされてゐる。【歌風】歌は僅に當時の類題和歌集その他に殘つてゐるだけである。宣長の一面を承け繼いで、宣長ほどの技巧もなく柄も小さい。比較的素朴なものもあるが、それがまだ十分の力となつて出てゐない。一言で評すれば温雅とでもいふべきであらう。歌味少く、低調である。

くはしほこ千足御國にたつ春の是日のみかげあや
にむかしも

ぬばたまの闇行く夜は大空の星の光ぞしるべなり
ける

（以上種田）

【參考】横井千秋の傳 横井時冬（芸窓雜纂の內）○名古屋市史學藝篇

智蘊（ちうん）　連歌師　【姓名】蜷川新左衞門親當　【閲歷】室町幕府に仕へた武臣で、永享元年右衞門尉に任ぜられ、後一休和尚に參禪した。歌は正徹に學び、地下三十六歌仙の一人で、「壬生寺緣起」六卷の詞書もその手に成るといふ。連歌の七賢（竹林抄參照）の一人で、七賢中では最も高齡であつたらしく、連歌に於ける地位も宗砌に次ぐ。「竹林抄」に百六十七句採られ、「新撰菟玖波集」（別項）に六十六句採られてゐるが、著作はなかつた。【作風】附句發句共に優れ、優婉なしんみりした作風で、特に景致を詠むに優れてゐる。「名も知らぬ小草花咲く川邊かな」「小松生ひ撫子さけるいはほ哉」など、後の蕉風を思はせる如きものがあり、前の句の如きは、素堂が末句を「野菊かな」と改作して自句としてゐる。　（福井）

智惠内子（ちゑのないし）　狂歌師　【本名】金子通女　【生歿】延享二年に生れ、文化四年（二四六七）五月十八日歿す。享年六十三【法名】芳春院園譽妙桑大姉　【墓所】深川萬年町正覺寺　【閲歷】元木網（別項）の妻。狂歌を能くし、當時菅江の妻節松嫁々（別項）と共に、女流作家の雙璧と呼ばれた。一説には木網に嫁がぬ前から狂歌を嗜み、結婚の席上木網と狂歌を贈答して祝言に代へたと傳へられてゐる。（野崎）

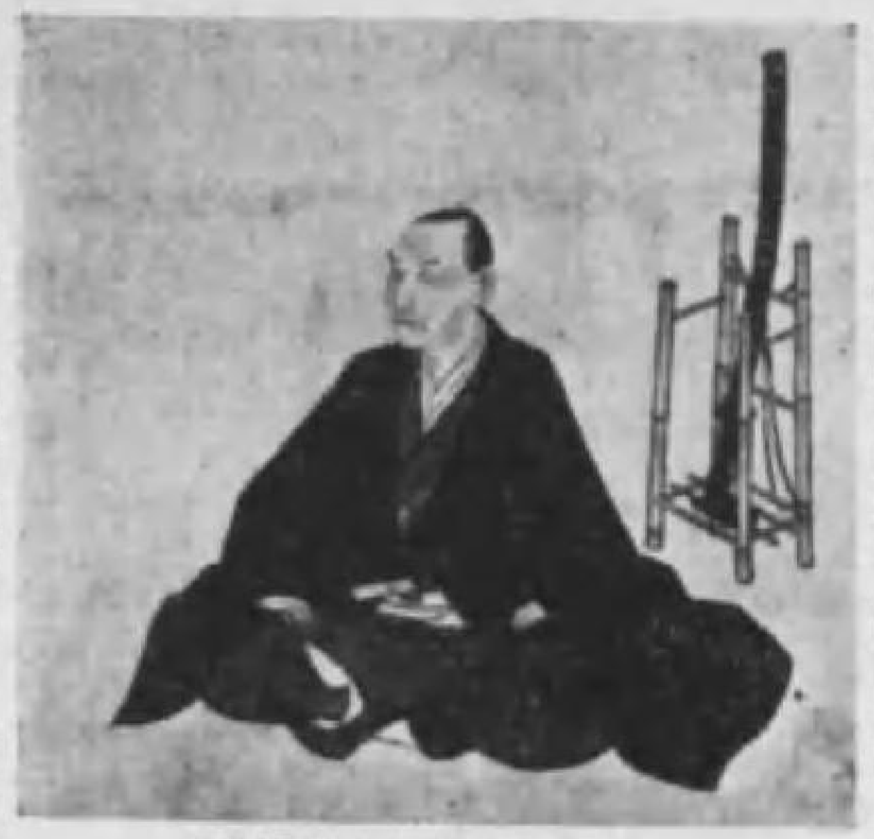
誓之卷（ちかひのまき）　小說　【作者】泉鏡花　【發表】明治三十年一月「文藝俱樂部」【刊行】明治大正文學全集（泉鏡花篇）・鏡花全集第二卷所收。

【梗概】歲十四の春の初め、新次は母の命日に墓參に行き、ふとした事から、優しい年上の娘秀を知る。秀は母なき少年をいつくしみ、新次はわが姉の如く秀を慕ふ。新次は土地のミッション・スクールに通ふ最年少の生徒であるが、師ミリヤアドも亦彼を弟のやうに愛し、遠く東京に去つた後も北陸の市に住む彼を忘れず、頻りに遊學をすゝめ、新次も遂に青雲の志を抱いて上京する。さりながら、これより先、土地の豪家に嫁した秀を懷しむ念は去らず、勉學もためにはか〴〵しく進まない。ミリヤアドはこれを慰め、幾度となくいましめの言葉を遺したが、病に斃れる臨終にも母の心を以て秀を思ひ切る事を命じる。新次は「母上」と呼んで師の胸に縋り附いて泣いた。戸外は風の吹き荒ぶ深夜である。

【解說】この作品は、明治二十九年五月から七・十一月を除き、一・二・三・四・五・六之卷と、半ケ年餘に亙つて「文藝俱樂部」誌上に連載されたもので、「誓之卷」は卽ち最終篇の標題である。「夜行巡査」（別項）「外科室」等で、熱情を以て社會に呼びかけてゐた作者は、更に第二期の活動に入つて、戀愛至上主義の萌芽を生來の浪漫趣味の中に見出し、恰も胸底に湧く詩情に醉へる如くうたつたのである。この

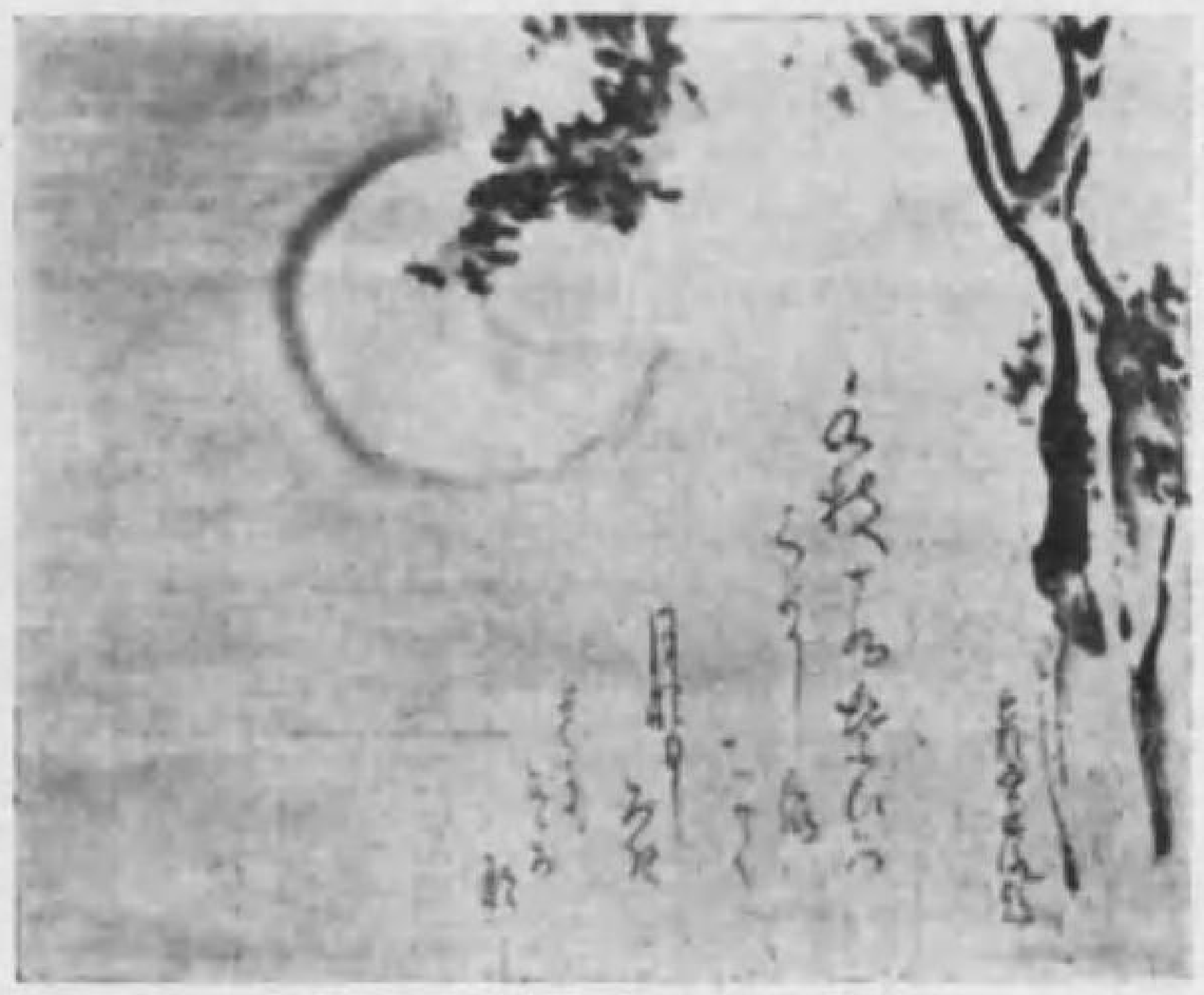
作品は、その意味で作者の浪漫派の詩人としての一面を最もよく代表してゐる。年下の少年に慕はれる美しき人は、この世にありとも思はれぬまでに理想化せられ、作者が憧憬の情をほしいまゝに受けてゐる。一篇を貫く至純の愛情は、西歐の文脈を取り入れた謂はゆる飜譯調を以て描きつくされてゐる。題材も文章とともに新しく、當時の文壇を驚かしたものである。（水上・平松）

千蔭（ちかげ）　歌人・國學者【姓名】加藤氏。本姓は橘。通稱は常太郎、要人、後に又左衞門。字は徳與（常世麿）【號】芳宜園・朮園・逸榮窩・耳梨山人・江翁、狂名は橘八衢【生歿】享保二十年生、文化五年（一八〇八）九月二日歿。享年七十四。【墓所】東京本所回向院【閱歷】



加藤千蔭（竹柏園藏）

國學者枝直（別項）の子。幼少、父に學び、十歳頃賀茂眞淵の門に入る。天性と勤勉と相俟つて縣門の高足となり、宣長及びその一派の學者に對して、歌人として村田春海と並んで盛名があつた。寬延三年正月、十五歳で町奉行與力勤方見習となり、翌年帳面改方、寶曆八年四月選要集書續御用を命ぜられ、寶曆十三年七月には二十九歳で父枝直の跡をついで吟味方助役となり、更に翌明和元年十月吟味役となつたが、天明八年六月五十四歳で致仕の後は、益々古學詠歌に專念し、晩年には富小路貞直卿の知遇を得、妙法院宮から歌を召され、宮が江戸に下られた際は春海と共に御前に召される等の光榮に浴し、權門貴族から花街の婦女に至るまで爭つて門に入る有樣であつた。幼少から書道を好み瀧本松花堂に學んだが、後更に佐理・行成の上代を慕ひ、終に一家を成すに至つた。次いで又大師流入木道正統の筆傳を受け、一層妙味を加へた。草書は晉唐名家の筆意を學び、又假名書に長じ、千蔭流の名を以てその書體は廣く行はれた。畫は建部綾足に學び、これ亦大に見るべきものがあつた。「千蔭やき」「千蔭緞子」の名が存するのは好事の人々が千蔭の畫を陶器に燒きつけ、又は織物として愛玩した爲めである。又橘八衢の狂名で手柄岡持や蜀山人と親しく交り、黃表紙に趣味を持つなど、當代の洒落な思潮にも觸れてゐた。その歌文集「うけらが花」（別項）に見られる彼の特質は寧ろ輕妙で、師眞淵の如く高古を求めず、「古今集」以後の調が著しい。後世に殘した學的業績は「萬葉集略解」（別項）三十卷の撰述である。元來千蔭は枝直以來、田沼意次執權時代に永く與力を勤めた關係上、松平定信が將軍補佐役となり、改革を斷行し、前代の役人を多く罷免するに至るや、千蔭は自ら病と稱して職を辭した。然るになほ在職中の勤めよろしからずとて、他と同じく減祿の上、百日の閉門を命ぜられた。彼はこれを機會に「略解」の撰述を思ひ立つたのである。本書の成るや富小路貞直卿の所望によつて一本を獻じ、謝狀その他を贈られ、又文化元年十月十六日には將軍に獻上し、白銀十枚を賜はつた（北町奉行所撰要集）。彼はこの書を成すに當り、宣長に負ふ所少からざるを思つて恩賜金の一部を割き、これを宣長の靈に供へた（藤垣内文集、加藤千蔭におくりつる）。門弟には、一柳千古・清原雄風・木村定良・廣岡田鶴子等がある。（萬葉集略解參照）【著作】萬葉集略解三十卷（別項）（寛政十二年成。文化九年刊）○萬葉新採百首一卷○うけらが花八卷（別項）○香取日記一卷○月並消息一卷○玉あられ論一卷○ゆきかひぶり二卷○大歌所御歌枕一卷○新撰月百首一卷○玉川紀行一卷○古今和歌集序（墨帖）○新百人一首。



加藤千蔭筆跋（高野辰之氏藏）

【歌風】眞淵の一面である近體風を受けついで、一體に纖細流麗なものが多い。江戸派の歌人は、大體新古今風に今樣を加味した歌風で、纖細に技巧を弄したあとは見えぬが、趣致を重んじ、調子に軟弱の所あるを免れなかつた。千蔭の歌も、きういふ弊をかなりに持つたもので、その表出の安易さが、多くの歌を等しく單一に陷らしてゐる。殊に題詠のものは、古典から一歩も出てゐない。餘りに姿體に重きをおいて、外形的に流れたがために、充實した味ひの感じられぬのは遺憾としなければならぬ。（うけらが花參照）

庭すめる石井の水をかゞみにてたちよそひたる山吹の花（石井のもとに山吹咲けり）

今日の日ものどけきしるくしののめの霞に匂ふあかねのかげ（春の歌）

【參考】近世三十六家集略傳○朮園橘君墓碣銘 林述齋（事實文編三六）○和歌史の研究 佐佐木信綱○國學全史下卷 野村八良○加藤千蔭と其の時勢 山根正直（からすかご）（西尾・鎌田）

近頃河原達引（ちかごろかはらのたてひき）　淨瑠璃三段　世話物【角書】おしゆん傳兵衞【作者・初演】現行正本に二種ある。一は天明五年五月五日初日、江戸肥前座興行のもので、作者は爲川宗輔・奈河七五三助とある。他は中村重助再撰とある同年九月九日刊本で、卷末に、天明二年道頓堀中の芝居で豐竹八重太夫が語つたものを刊行する旨が記されてある。兩者の内容は同一である。又近松半二を作者とする說もあつて、成立に就いては未だ確證がない。【諸本】淨瑠璃名作集下卷（日本名著全集）・淨瑠璃名作集下卷（有朋堂文庫）等に所收。別に、「義經腰越狀」と合綴刊本もある。

【題材】異說が多く、松村操の「實事譚」には、元文三年十一月におしゆん傳兵衞兩人が聖護院の杜で心中したことと、同年同月の四條河原の喧嘩と、同年九月に東堀川の孝子井筒屋佐吉が表彰されたこととの三者を併せ脚色したものであるとしてゐるが、元文三年の事件を天明五年に仕組んで「近頃」と冠するのは如何かと思はれ、しかもおしゆん傳兵衞の心中を扱つた享保三年、京夷屋座興行の「おしゆん傳兵衞十七年忌」（役者談合衝本がある）があり、（これを正當に十七年忌を當込んだものとすれば、心中は元祿十五年の事となる）、寶永元年刊の「心中大鑑」には、おしゆんと庄兵衞の話があり、歌祭文にも、「二條河原心中」「京おしゆん傳兵衞心中」があり、「外題年鑑」には、都一中の正本に「おしゆん傳兵衞河原心中」があるとして居り、また宮古路豐後掾の語り物に、「傳兵衞おしゆん十七年忌道行」（前掲の歌舞伎興行の際のものではあるまいか）がある。又一方、天明二年二月江戸市村座に、「隅田川續俤」（常磐津「垣衣戀寫繪」）同三年春中村座の「江戸花三升曾我」（富本「花川戸身替の段」）が演ぜられて居り、「俗耳鼓吹」には、天明二年正月江戸肥前座で、竹本八重太夫がお俊傳兵衞の猿廻しの段を語つて好評を得たともあり、本作の成立年代はなほ後考を俟つべき點が多い。なほ堀川の段の稽古唄としてうたはれる「鳥邊山」は、寶永三年正月京都都萬太夫座の「鳥邊山心中」の道行を改作した上方唄「鳥邊山」（歌系圖には[illegible]の作としてゐる）である。又、與次郎といふ名は、「人倫訓蒙圖彙」に見える、口早な事をいふ物貰「たゝきの與次郎」を同類の猿廻しと混用したものであらうといはれる。

【梗概】（上之卷）（祇園の段）井筒屋傳兵衞は戀仲のおしゆんと逢つたのを、嘗て父が世話した事のある龜山の勘定役人瀧口左内に見られ、意見される。左内の相役橫淵官左衞門は、おしゆんに惚れてゐて、手代の萬八、仲買の勘藏と共に傳兵衞から三百兩を騙り取つた上、贋金使ひの惡名を附けて打擲するのを左内が救ふ。（揚屋の段）橫淵がおしゆんを身請しようとするので傳兵衞とおしゆんは嘆く。傳兵衞の父眞左衞門が來ておしゆんを身請しようと言ふのを聞いた橫淵は、おしゆんを盜み出さうとしたが、村岡久八に邪魔されて逃去る。（中之卷）（河原の段）橫淵は萬八・勘藏と共におしゆんと思つて駕籠を襲つたが、中のは傳兵衞だつたので怒つて打擲する。傳兵衞は堪へ切れず橫淵を斬り殺し、その場で自害しようとするのを、おしゆんと久八が來て止め、勘藏の訴へによつて來た代官捕手には久八が科を引受けて縛に就く。（堀川の段）おしゆんは生家に預けられてゐる。傳兵衞が忍んで來るので盲目の母と朴訥な兄與次郎は怒るが、二人の熱情、おしゆんの誠意を知つてこれを許し、二人を落す事にする。與次郎は商賣物の猿を廻して門出を祝ふ。（下之卷）「道行涙のあみ笠」二人は猿廻しに姿をかへて心中を決意して道行。（聖護院の段）萬八・勘藏が逃げて來るのを手代十助が追ふ。おしゆんと傳兵衞は、死の用意をしてゐるところへ左内・眞左衞門・與次郎・十助が勘藏・萬八を捕へて來り、橫淵の惡事露顯と、おしゆんを傳兵衞に配はすべき旨を傳へる。

【構想】「實事譚」にいふ三件を合併脚色したものとすれば、短いものだけに、かなりよくまとまつてゐる。堀川の段は貧しい住居に相愛の男女、盲目の母、朴訥な兄を出し、戀人・母娘・兄妹の愛を相當こまやかに描いて居り、寂しい中に一脈の情趣を出してゐる。【影響】淨瑠璃でも屢々演ぜられたが、「猿曳門出諷」として堀川の段を中心としてゐる。歌舞伎では堀川の段といつても義太夫正本通りでなく幾らか補修したもの（日本戲曲全集第三十六卷・有朋堂文庫脚本集上卷・世話狂言傑作集第四卷等所收）が行はれてゐたが、近來は院本によるやうになつた。又猿廻し與次郎を女に書き替へたものがあり、現今も小芝居などで出る事があるが、これは天保九年六月、大阪堀江一の側芝居の「女猿曳門出諷」（西澤一鳳作）に中村富十郎が演じたのが初めであらう。江戸では嘉永七年三月、河原崎座の「初霞女猿廻」（一番目「那島家白浪」）で、嵐璃寛が演じてゐる。なほ別に白藤源太とおしゆん傳兵衞を中心とした系統の作品があるが、これは前記の「花川戸身替の段」（身替りお俊）の系統を引くもので、本作の影響とは言ひ難いであらう。

【參考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下卷解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○「堀川」に就いて 渥美清太郎（歌舞伎、新五ノ四）○近頃河原の達引 三田村鳶魚（芝居の裏表）○歌舞伎の型 鈴木春浦○歌舞伎細見 飯塚友一郎　（鎌田）

近松秋江（ちかまつしうかう）　小說家【本名】德田浩司【閱歷】明治九年五月四日、岡山縣和氣郡藤野村の農家に生る。同二十七年、末廣鐵腸の「雪中梅」（別項）「明治四十年の日本」、矢野龍溪の「經國美談」（別項）等を耽讀して、非常に感激したといふ。又村井弦齋・尾崎紅葉・泉鏡花等の小說に興味を感じ出したのもその頃で、同二十九年には「文藝倶樂部」に載つた樋口一葉の諸作を讀み、女史について小說家にならうとする念が旺んとなり、再度上京したが、女史の長逝にあつて望を果たさなかつた。同三十一年、東京專門學校文學部歷史科に入學、その時初めて正宗白鳥を知つた。後、英語政治科に轉じ、更に英文科に移つて三十四年卒業、博文館編輯部に入り、暫く「中學世界」の編輯助手をつとめた。同三十九年、島村抱月が「早稻田文學」（別項）を再刊するに際し、編輯の任に當つたが、間もなく辭し、更に「中央公論」の編輯を囑されたが、これ亦半年ならずして止めた。その頃正宗白鳥の主宰してゐた讀賣新聞の日曜附錄に、文藝評論「文壇無駄話」を執筆、その着想の斬新なると、その表現の自由なる點で文壇の問題となり、批評家として認められるに至つた。同四十三年九月、小說「別れた妻に送る手紙」（後「別れた妻」と改題）を「早稻田文學」に連載、一躍して小說作家となつた。爾來約二十年間、作家生活を續けて今日に及んだのである。大正十四年には文壇の先輩知友數十氏の發起で、彼の誕生五十年祝賀會が盛大に帝國ホテルに催された。爾來作家的活動は決して旺盛とはいへないが、文學論、政治論等で氣焰を擧げ、時に戲曲を發表したりしてゐる。彼の興味はかなり多方面で、從つて文學上の種々の流派に對しても相當の理解を持つてゐる。その點で彼は依然として文壇的存在を續けてゐる。【作品】別れた妻（別れた妻に送る手紙）（別項）○疑惑（別項）（大正二年）○舞鶴心中（別項）（大正四年）○黑髮○狂亂○霜凍る宵（以上大正十一年）○二人の獨り者（十二年、國民新聞）○子の愛の爲に（十三年）○第二の出産（十五年）等。

【作風】男女の綿々たる愛慾情緒を綿々たる筆致で、縷々と描き出して行く點が特色であ

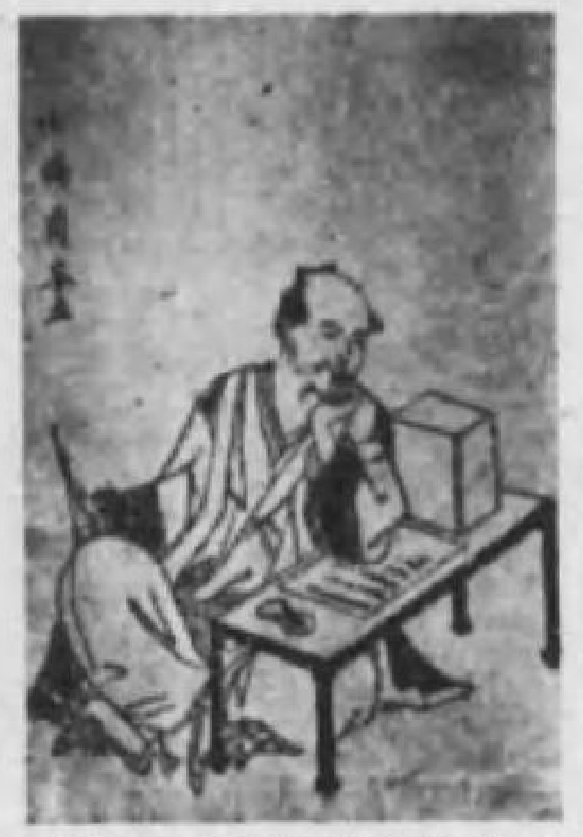
る。如何なる痴情、如何なる愚行も、彼の觀察と彼の筆致とに依つて表現されると、其處には眞面目さが滲つて來る。深刻さが浮んで來る。文章は決して、名文とはいへない。ねちねちしてゐて、印象も不鮮明である。それにも拘はらず、讀者に訴へる力を持つてゐるのは、飾らない正直な生一本な表現の力のためであらう。（宮島）

近松德叟（ちかまつとくそう） 脚本作者【姓名】通稱德右衞門、幼名壽助【別號】初名、德三【俳號】雅亮【歿年】文化八年八月二十六日（二十三日とも）歿す。享年五十九【法名】一如院亮髓日相【閲歴】大阪坂町の娼家大桝屋の主人で、一炊庵小野紹廉の孫といふ。幼時から演劇を好んだが、歌舞伎芝居の銀主が知己なる所から、その勸誘もあつて、近松半二（別項）に入門して作者道に入つた。初め、名は德三と記したが、半二の弟子を利かせ、德右衞門の德を殘したかと思はれる。最初は淨瑠璃作者たらんとして半二についたかと思はれるが、當時の歌舞伎芝居が勃興して來た形勢を見て、彼も歌舞伎の世界へ轉向したのではあるまいか。殊に天明三年半二が歿して、彼の決心はいよく固まつたであらう。初め並木五瓶・竹本三郎兵衞・辰岡萬作等の先輩の下にゐて、執筆してゐたが、歌舞伎の作道について、特に誰に就いたかの傳へはない。かくて十年間ほど修業して、寛政七年立作者となり、以後文化六年まで、上方作者として主に大阪に活躍した。門弟に近松門喬・近松加造・近松萬兵衞等がゐる。【作品】好評を得た作を次に列舉する。（一夜漬狂言）伊勢音頭戀寢刃（別項）○もゝちどり鳴門白浪（寛政九年正月、角の芝居。夕霧に芸屋鳴門之助）○けいせい會稽山（寛政十一年正月、角の芝居。江戸齋大島仇討）○名作切籠曙（享和元年八月、中の芝居。高橋騷動）○艶かしくの紅翅（文化五年五月、角の芝居。北新地の事件）（小說の飜案）淺草靈驗記（別項）○紅楓秋葉話（寛政十一年九月、角の芝居。瑤府觀大歩作「琉璃物語」による）○秋葉院日記（寛政十二年九月、角の芝居。芝叟の「鴻」による。文化十三年「寶指郞」出版）○けいせい輝艸技（文化元年正月、角の芝居。上田秋成「秋雨物語」による）○いろは歌義樓花（文化三年正月、角の芝居。史記藏。但し馬琴の「四天王剿盜異錄」による）○けいせい英草紙（文化四年正月、中の芝居。近路行者の「英草紙」による）○柵自來也談（文化四年九月、角の芝居。鬼武の「自來也說話」による）○けいせい輝草紙（文化五年正月、角の芝居。京傳の「昔話稻妻表紙」による）○舞扇南柯話（文化五年九月、中の芝居。馬琴の「三七全傳南柯夢」による）○島廻月弓張（文化五年十一月、中の芝居。馬琴の「椿說弓張月」による）。（この外、芝叟の長話「𩵋」を脚色したまゝで、歿後、奈河晴助によつて潤色されたのが、「けいせい筑紫𩵋」（別項）である）。【その他】けいせい挾妻櫛（寛政十年正月、角の芝居）○けいせい花山崎（寛政十二年正月、角の芝居）○けいせい廓源氏（享和二年正月、中の芝居）。

【作風】以上の如く三分すると、彼の當り作の多くは、一夜漬のものと、小說の飜案物にあつた。兩者は廣い意味での際物である。彼の名聲は、一面、かゝる際物の活用にもあつたといへよう。且つ社會が漸く讀本の如き、複雜な構想その物に興味を覺えて來たのに乘じ、小說飜案に努力したのであつたが、恰も彼の得意な方面もそこにあつたがゆゑに、「鳴門白波」以來、彼の名聲は忽ち揚まつたのである。盛時には、先輩辰岡萬作（別項）と肩を並べて評せられ、德叟はお家を中心に置いた時代物作者といはれた。半二以來の傳統とも見られようが、世話にも文藻があり、相當廣い題材の範圍を、自在にこなし得たのである。尤も飜案作の如きは、劇作の態度から見れば、邪路とも解釋されるが、彼が他の部分の傑作に於て、十分お家物作家たるの範を示すことは出來たと思ふ。なほ彼の小說飜案の態度が、逆に小說界へ影響したものが種彥の「正本製」（別項）である。又彼及び萬作の作品には、謂はゆる輸入根本として出版されたものが甚だ多い。

【參考】近松德叟が傳（内海一風「傑作作者列傳」）○京攝戲作者考（鳥有山人）○狂言作者概略○近世日本演劇史（伊原敏郎）（守隨）

近松半二（ちかまつはんじ） 淨瑠璃作者【姓】穗積氏【歿年】天明三年（二四四三）二月四日歿す。享年五十九【閲歴】「難波土產」（別項）の著者たる大阪の儒者穗積以貫の子として生れたが、性放逸、遊蕩の餘り家の業から離れ、竹田出雲（別項）の門に入つて、淨瑠璃作者となつた。父以貫は近松門左衞門と親交があつたらしいが、その故に門左衞門を敬慕してか、近松を名乘つた。門左衞門の養子となつたとの說もあるが、直に信ぜられぬ。彼はやがて竹本座の立作者に舉げられ、座の衰退期に面して大に奮闘した。寶曆元年十月、竹田外記の下に「役行者大峯櫻」に執筆したのが最初で、以後約三十年間の作者生活であつた。寶曆十二年までは先輩の下にあつて修行時代と見られるが、その前半期は出雲、後半期は三好松洛や吉田冠子等の指導を仰いでゐた。この時代に於て彼の作の傾向がほぼ定まつたかに覺える。晚年は山科に幽居したと傳へる。歌舞伎狂言作者の近松德叟（別項）は彼の門から出た。



近松半二（鈴木津水氏藏）

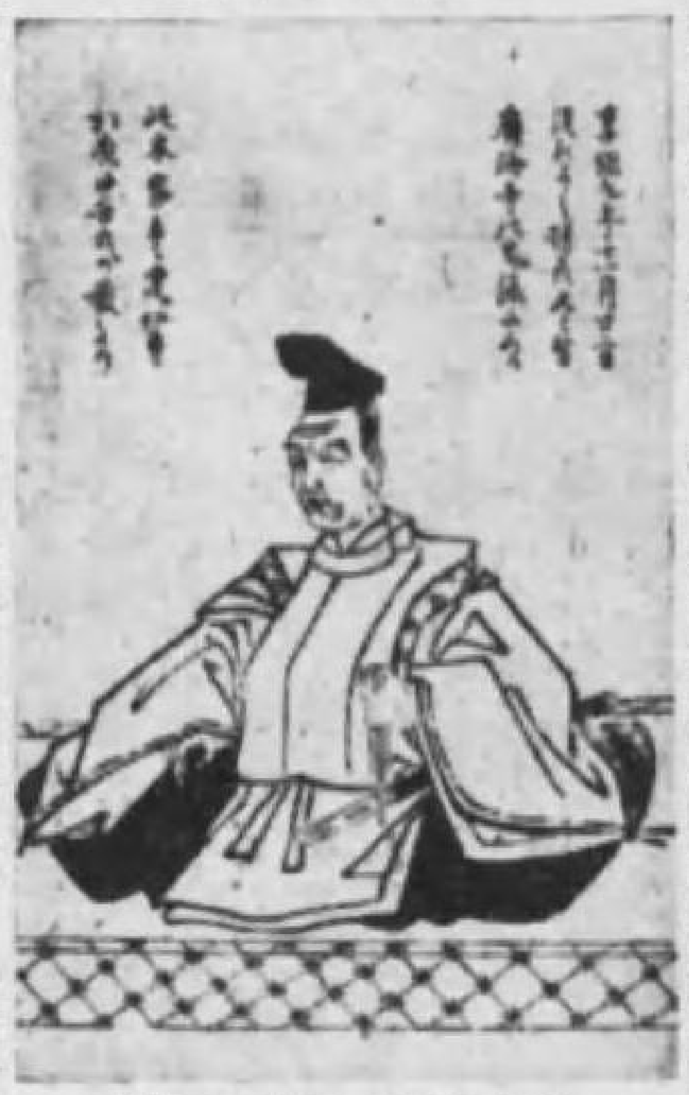
【著作】近松半二傑作集（日本名著文庫）・半二戲曲集（國民文庫）等に收められてゐる。一生の淨瑠璃作五十餘曲の中、三十五曲程が彼の獨作乃至立作者としての作であつて、寶曆十三年四月「山城の國畜生塚」以後である。尤もその他「奧州安達原」（別項）の如きこれに準ずべきものもある。この時代の合作者として、前半期に竹本三郎兵衞がゐるが、彼と提携した作には見るべきものがある。「京羽二重娘氣質」「蘭奢待新田系圖」「本朝二十四孝」「太平記忠臣講釋」「關取千兩幟」「近江源氏先陣館」（各別項）等の傑作がそれ等である。なほ三好松洛（別項）が陰に大に助力したことも認められねばならぬ。半二一代の傑作といはれる「妹脊山婦女庭訓」（別項）にも松洛の補導が相當働いたかとも察せられる。三十餘曲を題材の上から見ると、殆ど先行作品によつたものと見られるが、淨瑠璃種と見られる中に、「傾城阿波の鳴門」「よみ賣三巴」「心中紙屋治兵衞」「往古曾根崎村噂」の近松ものの如きは、特に目立つ一群をなす。その外にも「新版歌祭文」や「伊賀越道中雙六」（各別項）等があつて、これ等の書き替へ作は原作以上に今日に生命がある。なほ遺稿として「獨判斷」がある。一流の平易な人生觀を記したものであるが、彼の人物の躍如た

るものがある。

【作風・價値】見方によれば全作品が書替へ作であると言はれる程に、或る素材の直接的戲曲化は試みられてない。併しこの點は淨瑠璃曲の發展が、事實の展開そのものの持つ興味から進步して、展開の樣式表現等に注意を求めた結果の現象であると思はれる。近松門左衞門から竹田出雲への展開が見られたが、更に半二は出雲時代から飛躍を遂げてゐる。出雲が機巧を應用する事に特異の手腕を示したが、半二は舞臺技巧の全的成功を遂げた。彼の作者生活の早い時代に、三郎兵衞との提携期の發見される事は、三郎兵衞が吉田冠子の伜であるが故に、大に意義があつたと思ふ。近松作の飜案の如き、誠に劇作ではあるが、それ等が歌舞伎化されて、今日なほ歡迎される所以のものも、一面そこにあらう。併し淨瑠璃がその儘に歌舞伎化される事は、本質の破壞と見ねばならぬ。一般の淨瑠璃の墮落とも解釋されるが、彼の作にも、この趨勢を助けたと見られる態度がないでもない。それは淨瑠璃曲の脚本化と言ひ得る。即ち臺詞の部分が增加した上に、臺詞と地の文とを截然と區別して綴るのであつた。この案は臺詞の音曲的表現を退嬰せしめ、語る要素を排除せしめる結果を生んだ。顧つて思ふに、淨瑠璃は既に發育の最後的段階に到達してゐたので、かゝる方向以外には轉換の求めやうがなかつたのであらう。併し、竹・豐兩座の退轉がこの期に見られた如く、彼は淨瑠璃作者としても、事實上最期を飾つた人物といへよう。

【參考】海音・出雲・半二（守隨憲治（岩波講座日本文學））（守隨）

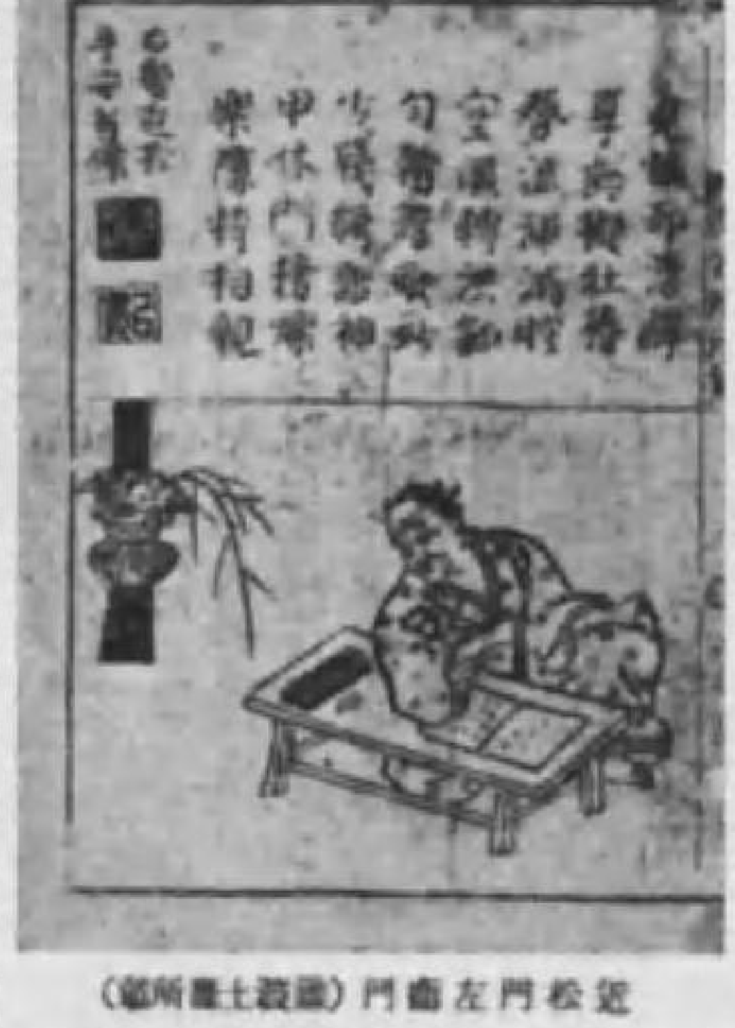
近松門左衞門（ちかまつもんざゑもん） 淨瑠璃・狂言本作者【姓名】杉森氏。諱は信盛。通稱平馬【別號】平安堂（平安）・巢林子・不移山人（一說に不移子）等がある。【生歿】承應二年に生れ、享保九年（二三八四）十一月二十二日（廿一日とも）歿す。享年七十二【法名】阿耨院穆矣日一具足居士【墓所】攝津河邊郡久々知村廣濟寺と大阪谷町法妙寺とにある。【家系】古來種々の說があるが、中で淀藩士杉森家出身とする同家系譜による說が信ぜられるやうである。同家は三條三位中將實次を遠祖とするが、五代目には秀吉・秀賴に仕へ、後、淀藩主稻葉美濃守について千石を食んだ杉森市兵衞信重が出た。その次子信義が近松の父に當る。信義は越前宰相に仕へて、後、浪人したが、智義・信盛・伊恒三人の男子を持つた。智義は織田長賴に仕へ、伊恒は岡本育竹（一抱）とて、長賴の侍醫平井自安の養子となつた。仲の信盛が近松門左衞門であるといふ。近松には一子多門があつた。出生地に關しては古來十數箇の說が擧げられてゐるが、何れも確定的でなく、僅に京都說が有力かと推測される。【閲歴】（第一期、修學時代——天和三年三十一歲に至るまで）但し寛文十二年二十歲の頃で當然二分されるので、それまでは青雲の志を抱いた純然たる修行期と見られる。武家に生れたが、家庭的に文學に親む機會は多くあつたらしく、やがて一條禪閤惠觀に仕へた。この頃、古典文學や有職の知識等を大に蓄へられたかと思はれる。然るに惠觀は寛文十二年に薨じた。それ等が原因となつてか、やがて近江の近松寺（ごんしようじ）（攝津近松寺說もあるが）に遊學した。當時、佛敎方面の知識を驗收したと思はれる。この頃から、天和三年に至る間は、作劇修行期とも見られる。淨瑠璃方面では、古淨瑠璃時代ともいへる。即ち青年時代の志望をかへ、野に下つて作劇の筆を執り始め、一方流行の太夫井上播磨掾を初め、宇治嘉太夫・山本角太夫等のために淨瑠璃を綴り、又一方京の坂田藤十郎に通じて歌舞伎の狂言作りをもなした。彼の情操を越えた技倆は、忽ちにしてその名を世に擴めた。（第二期、都座作者時代——貞享元年から元祿十五年（五十歲）に至る二十年間）藤十郎（別項）と提携して、彼のために新時代的な寫實的な劇を書いて、世話歌舞伎の樹立に盡した。藤十郎の成功の反面には近松の努力が潛んでゐた。さうして併せて竹本座の創立直後、竹本義太夫（別項）のために、專ら淨瑠璃の作をなした。古淨瑠璃（別項）の域を脫して、架空的より現實的に、類型的より個性的に、描寫を進めていつた。但し總體的にはこの期は歌舞伎劇の方に多く力を注いだ。彼は努力の人であつたが、作劇の態度に於て、第一期から第二期への進境は特に目ざましいものがあつた。（第三期、竹本座作者時代——元祿十六年から享保九年歿まで、二十年間）前期の末近く、藤十郎は都座の座本を引退したが、その頃から近松と竹本座との交渉は密接になつたらしい。十六年「曾根崎心中」の際は、名作者として喝采されたのであつたが、寶永二年、「用明天皇職人鑑」に至つて、彼は竹本座座附作者と決つたらしい。その後は、淨瑠璃作者として生を終へた。淨瑠璃の傑作は殆どこの期に於て發表され、特に世話淨瑠璃の人情美の描寫は漸次その極致に達した。が、時代淨瑠璃も亦舞臺技巧に着々成功した。歌舞伎脚本は、これに反して拙作に傾いて行つた。淨瑠璃に於ける彼の進步の背後に、座本竹田出雲（外記）の努力のあつたことを認められねばならぬ。



近松門左衞門（繪鏡小錄所藏）

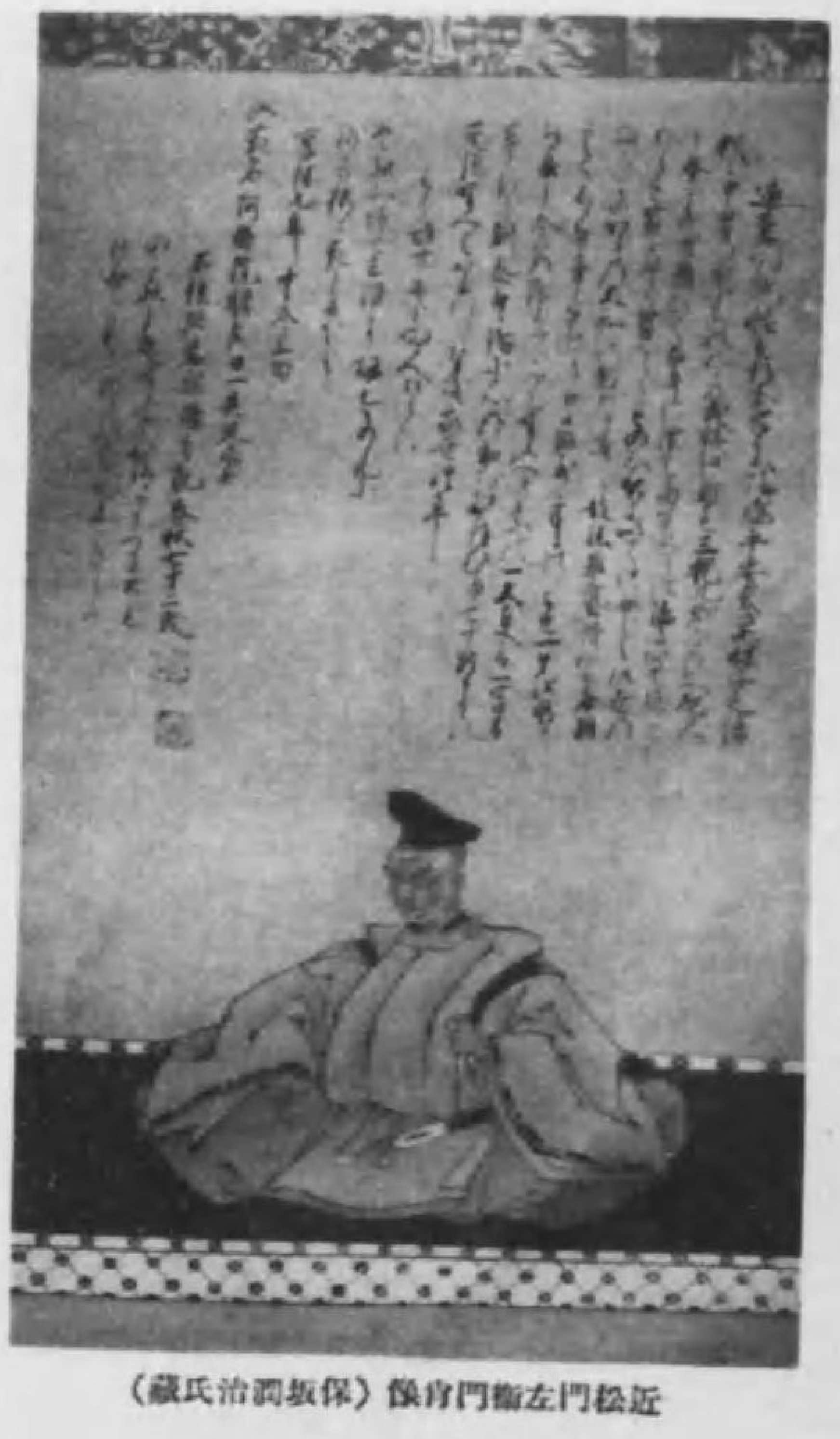
【作品・作風】（全集・選集）近松全集十二卷（藤井乙男校、朝日新聞社刊）○近松門左衞門全集十卷（高野辰之・黑木勘藏校、春陽堂刊）○大近松全集十五卷（木谷蓬吟校）○近松傑作全集四卷（水谷不倒校註、早稻田大學出版部）○近松時代淨瑠璃集（帝國文庫）○近松世話淨瑠璃集（同上）○近松名作集上下（日本名著文庫）○近松世話淨瑠璃集成（小林要子校、大同館）○近松時代淨瑠璃集成（同上）○近松淨瑠璃集三冊（有朋堂文庫）○近松歌舞伎狂言集二冊（高野辰之校、六合館刊）○近松門左衞門集（近代日本文學大系）（一）古淨瑠璃。貞享三年義太夫のために書き卸した初作「出世景淸」（別項）までの作を指すのであるが、彼の處女作については、延寶四年（二十四歲）刊「源氏供養」（別項）說、寛文十三年正月（作は前年と見て二十歲）刊「花山院后諍」（別項）說等がある。これ等には勿論署名はなくて、作意筆勢等から推定されるのであるが、それ等の推定說を全然否定せんとする說もある。處女作の年代考定は容易ならぬ危險の伴ふ事ではあるが、無署名の作中に近松の作がないといふ事

は考へられぬ。この時代の作の通性は、古淨瑠璃の性質に共通するが、概して古典の翻案と見られる。殊に謠曲は非常に活用されてゐる。從つて、一曲としての創作的價値は少いが、後の五段形式の整理への考慮が、漸次に具體化されて行く傾向の窺へる事は、作者の態度の上に、史的意義の注意さるべきものがある。（二）世話淨瑠璃。元祿十六年「曾根崎心中」（別項）から享保七年「心中宵庚申」（別項）に至る二十四曲。前二者の外に、「心中二枚繪双紙」「卯月の紅葉」「卯月の潤色」「心中重井筒」「心中萬年草」「丹波與作待夜の小室節」「今宮の心中」「心中刄は氷の朔日」「冥途の飛脚」「長町女腹切」「博多小女郎浪枕」「生玉心中」「心中天網島」等十五曲の心中物、「堀川波鼓」「鑓の權三重帷子」等二曲の妻敵討物、「薩摩歌」「淀鯉出世瀧德」「五十年忌歌念佛」「夕霧阿波鳴渡」「大經師昔暦」「山崎與次兵衛壽の門松」「女殺油地獄」等七曲の普通物（以上各別項）等に分類する事もできる。近松としては、都座作者時代の經驗に據つたのであらうが、「曾根崎心中」の豫想外な成功は、劃期的な世話淨瑠璃發生といふ效果を收めたのである。際物として最新の報道を劇化することが、强く觀衆の興味を捕へたが、而も醜惡な事實なるべきそれ等の實相が、彼の筆端に上ると、忽ち淨化されて相思の男女は樂しく死に就くので、これは作者の人生觀・社會觀の反映、卽ち彼の愛の精神の發露であると見られるので、實際、世の青年男女への影響は强かつたらしい。近松晩年の圓熟期に及ぶと、愈々心理描寫は複雜を加へ、場面照應の巧妙さが認められてゆく。（三）時代淨瑠璃。「出世景淸」以後、享保九年「關八州繋馬」（各別項）に至るまで、普通八十曲程を算へる。世話淨瑠璃に比して、舞臺の興味に富む時代淨瑠璃の方が、遙に觀衆の興を惹いた。この時代物は、脚色の背景が武家社會にある所を以てすれば、古淨瑠璃と變化はないが、近松が武士道卽ち義の精神を主張した所に、第一義的差別が認められるので、こゝに時代淨瑠璃の基調を確立したのは、正に近松の功である。但しかゝる明確な態度は、第三期に入つてから漸次に現はれたと見られる。題材の範圍は神代から當代に及んでをり、曾我物・義經物が最も多い。構想の進化や舞臺技巧の發達は、第三期後半に入つて著しい。「國姓爺合戰」（別項）の如きはその尤なるものである。筋の葛藤による興味に成功したのもその頃である。「傾城酒呑童子」「平家女護島」「雙生隅田川」「信州川中島合戰」「關八州繋馬」（各別項）等皆これである。時代淨瑠璃の圓熟は、世話淨瑠璃の特質をも加味して、柔軟性に富んだ時代世話の型を生んだ。「傾城反魂香」「傾城吉岡染」（各別項）等が好例である。かくして後、完成の域に達した時代淨瑠璃も、その大體は近松によつて示唆されたのである。（四）歌舞伎脚本。貞享の初め、藤壺の怨靈の趣向（花山院后諍（別項））で名を擧げてから寶永年中に至る四十篇程が知られてゐる。様式は當時の通性で殆ど御家騷動であるが、内容は藤十郎との提携によつた爲めか、世話狂言と見られるものが多く、又その中に傑作が多い。但し世話狂言としての構想は極めて簡單で、古い傾城買狂言の系統をひくに過ぎぬ。それ等の傑作は、元祿十年以後十五年頃までに書き、「傾城佛の原」「傾城壬生大念佛」（各別項）の類は、悉くその間に書かれた。多少構想に複雜性のあるものは先行淨瑠璃等の翻案作に多く、早い頃は寧ろ機巧の運用等に觀衆を驚歎させたものであつた。しかし改作物の中にも、「一心二河白道」（別項）の如き名作もある。元祿十六年以後は、淨瑠璃の脚本化すら現はれて、脚本獨自の興味が失はれ、拙作が續いた。（五）その他淨瑠璃に、筑後掾追善として、その語り物の外題盡しを綴り込んだ「音曲百枚笹」の如きがあり、近松作安齋案讀と記された浮世草子で、國姓爺を小說式に書き直した「國姓爺御前軍談」（別項）等がある外には、上方唄に近松作と傳へられるもののある位で、纏まつた作品はないらしい。

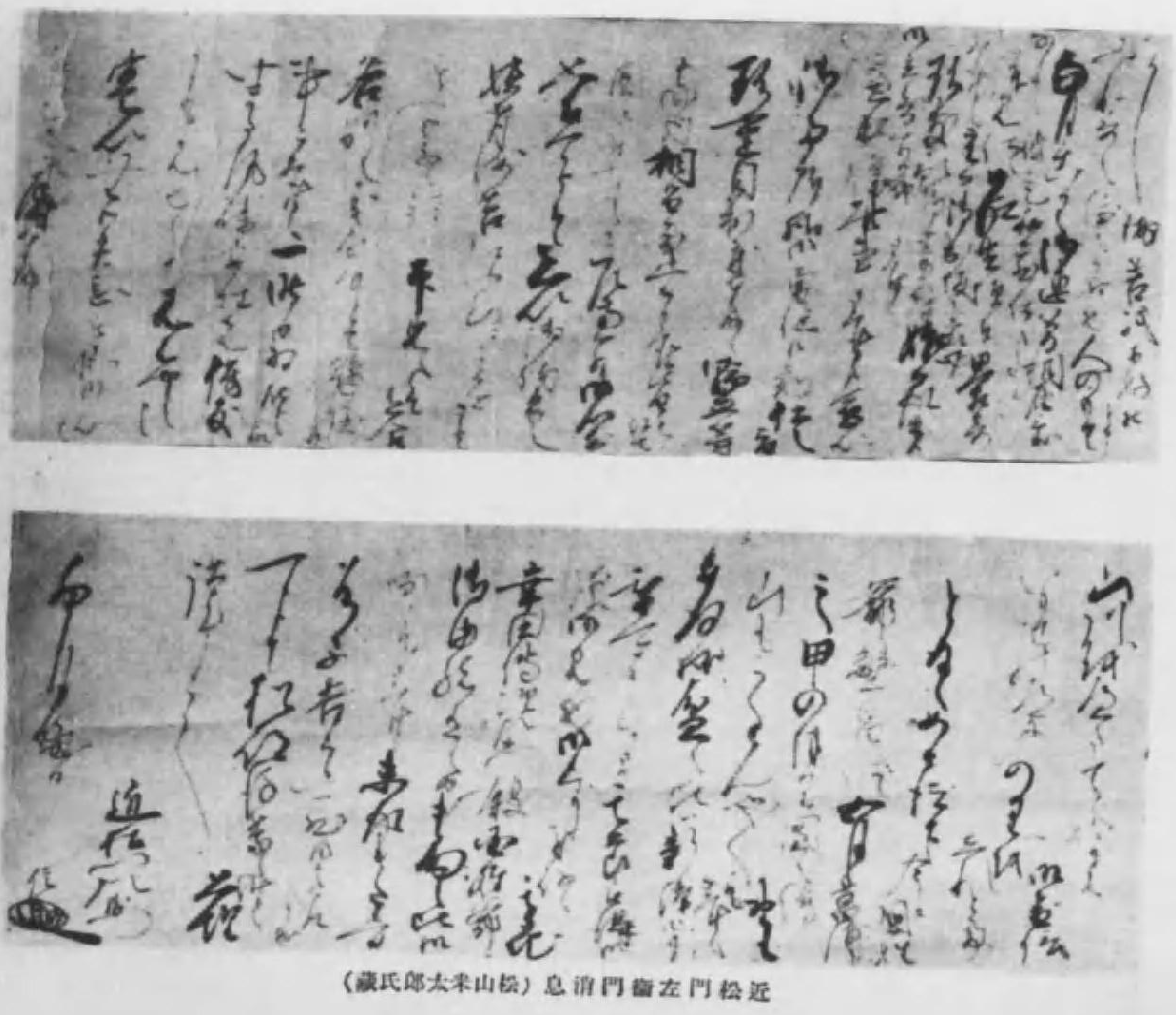


近松門左衛門畫像（難波土産所載）

【構想法】戯曲の構想法に於て、その組織に對して、彼が研究した様式は最も意義深いものであるが、それ等は第二期、主として都座作者時代に起きたらしい。彼の歌舞伎劇の組織は、三幕を基本としてゐるが、各幕の排列は序幕を騷動場、第二幕を世話場として事件を解決させ、第三幕を大踊りで終へる。淨瑠璃に比して内容の簡單なために、却つてかゝる案が生れたかとも思はれるが、この一時代、二世話、三所作とする様式は、近世演劇の根本組織に觸れたもので、爾後の演劇界へ大きな指針を與へたものと思はれる。但し内容から見ては、脚色は極めて未熟であつた。これは世話淨瑠璃についてもいへる。ただ世話淨瑠璃は多く最近の事件を扱つてゐて、事實の戯曲性が脚色を大に助けてゐるに過ぎない。世話淨瑠璃の基本様式を三段組織にし、道行を最後に置いて、こゝに振の美を見せたのには、脚本の影響が察せられる。時代物とは別に、太夫の節よりも人形の振に重きを置いたところに、切り場面の配置が考案されてゐる。而もかゝる世話物は時代物の後に切狂言として据ゑられるのが定型であつた。これ等一日の興行組織が、歌舞伎脚本に試みられた組織と共通してゐる事はいふ迄もない。内容の複雜な時代物の五段組織についても、三段目に愁歎、四段目に道行を配する形式を定めて、一曲の照應の效果を求めたが、こゝに今後發達すべき淨瑠璃の方向が示されたとも言ひ得る。かくて戯曲發達期に際して、作劇家として彼の開拓した方面は、多岐に亙つてゐる。【文章】彼は淨瑠璃作家中卓越した文章家である。その巧緻と絢爛とは人を魅するものがあり、道行文の如きは切磋琢磨の結晶ともいふべきである。併し淨瑠璃作者としての苦心は、第一に人形との調和である。人形の活動が伴ふが故に、一般戯曲の必要以上に、文章の立體化が常に計られねばならなかつた。第二には太夫との關係である。聲のあらゆる長所を持つた筑後掾のために書いたものには、一曲の中に、古來の音曲、殊に當代の流行唄の類まで、廣く採用してゐるが、そのためには、淨瑠璃



近松門左衛門肖像（保坂潤治氏藏）



近松門左衛門消息（松山米太郎氏藏）

本來の格を破らぬやうに苦心せねばならなかつた。これ等は年と共に研鑽を重ねたので、晩年の作には、內容形式共に圓熟の極致を示してゐる。【藝術觀】「難波土產」に傳へた所によると、文字通りの眞實を寫したものでなく、虛を認めて、虛と實との僅かな皮膜の間に、藝術は存在すると說くのであつた。この主張は彼の發見ではない。恐らく歌舞伎芝居生活時代の體驗から得た所であらうが、演出上の問題として研究されてゐたものを、戲曲作の上に轉用し得た所に、彼の發明があり、彼の淨瑠璃の成功も考へられる。彼が時代物に於て、荒唐無稽な解釋の中に一種の眞實性を潛めて、觀衆を讚嘆せしめたのも、世話物に於て、人生や社會の暗黑面を美化し得たのも、一にこの藝術觀によるものと思はれる。後世の作者がかゝる態度を誤解した憾みもあつたが、全體として淨瑠璃の發達には少からず貢獻したと思はれる。

【參考】難波土產（穗積以貫）○竹豐故事 ○淨瑠璃譜 ○近松集（坪內雄藏・水谷不倒等）○近松門左衞門（塚越芳太郎（十二文豪の內））○近松著作一斑（同上）○近松之研究（坪內雄藏・綱島榮一郎編）○近松門左衞門傳（水谷不倒（近松傑作全集））○江戶文學研究（藤井乙男）○江戶文學叢說（同上）○近松戲曲新研究（加藤順三）○上方文學と江戶文學（藤村作）○近世文學序說（同上）○近松門左衞門傳（木谷蓬吟（大近松全集））○近松研究之序篇（前島春三）○近松門左衞門傳（黑木勘藏（近松名作集））○近世演劇考說（同上）○近松門左衞門（同上（日本文學講座））○近松語彙（上田萬年・樋口慶千代）○近世戲曲研究（守隨憲治）○近松研究（加藤順三（日本文學講座））○近松時代物研究（黑木勘藏（同上））○近松世話物研究（藤村作（同上六卷））○近松の藝術（近藤忠義（岩波講座日本文學））○早稻田文學（明治三九ノ四、大正一五ノ一二）○國語と國文學（大正一三ノ一〇、同一四ノ八）○國文學踏查（東京文學會編）○演劇學（昭和七ノ五）（守隨）

茅上娘子（ちがみのをとめ）　歌人　【本名】狹野茅上娘子。「茅上」は細井貞雄手澤本及び無訓活字本に據つた。神田男爵藏本・西本願寺本・溫故堂本には「弟上」。寬永版の流布本には、「弟上」となつてゐる。これは無訓本の「茅上」を誤つたので問題でないが、細井本・神田本の優劣は未定。今從來の通說に從つて「茅上」をとつた。【閱歷】不詳。ただ「萬葉集」第十五卷の作品及び同卷の目錄に、「中臣宅守、娶藏部女孀狹野茅上娘子之時、勅斷流罪、配越前國也。於是夫婦相嘆易別難會、各陳慟情、贈答歌六十三首」とある事から、中臣宅守が茅上娘子と通じたが故に、越前に流されて、娘子の悲愛の作が出來た事だけが分る。二人の結婚が何故有罪となつたか不明である。その流罪の年月も不明であるが、「續日本紀」天平十二年六月の條、天下に大赦して罪人を赦す記事のうちに、「中臣宅守不在赦限」とある故、天平十二年には宅守はまだ赦されずに越前に在つた事が分明であるから、流罪はその二三年前、天平十年前後の事であらう。この推定は、二人の相聞歌と共に卷十五に收められてゐる遣新羅使の歌が天平八年出發九年歸國の事件であつて、流罪もそれと同年頃の事件と考ふべきである、と云ふ事からも證據づけられる。これ等によつて茅上娘子が、聖武天皇の天平十一・二年の頃に、その青春時代を持つた奈良朝の女流作家なる事が分る。（宅守參照）【作品】「萬葉集」の第十五卷を二分したその後の半分は、二人の贈答歌で埋まつてゐる。二人の作品が交互に、五六首づつをひと固めにして贈歌・答歌、贈歌・答歌とほぼ一つおきに並べてある。最初に離別卽時の娘子の作をおき、次に宅守の越前迄の道中の作、後は次々に流罪地と都との贈答になつてゐる故、かなりの年月の間にとり交したものをこゝに集めて集錄したものと思はれる。宅守の四十首に對し、娘子の作二十三首である。凡て短歌。【作風】萬葉歌人の、情熱的であつた事の證歌として、いつも引かれる「君がゆく道の長手をくりたたね燒き亡ぼさむ天の火もがも」の一首は、能く茅上娘子の作風を語つてゐる。深い人生觀や複雜な味ひは見出せないが、その愛の純眞さと强さとが强く人に迫つてくる。宅守への愛を中心にして娘子の命全體が燃えてゐる感がある。これは全く作歌の動機そのものが、熱烈で純粹だつたことに基いてゐる。天平の中期以後は、歌が交際の具になりかけてゐた時期で、こんな純眞な動機から歌を作る風は次第に絶滅しつつあつた時期なのである。それを思ふと、そんな雰圍氣中からこんな作家の生れたことは不思議だとさへ考へられる。表現も當時の弊たる技巧に墮して却つて表現のために歌を害する如き事無く、必要以上の修飾や技巧を施さずして能く强い戀愛の氣持を出し得てゐる。情熱と技術を兼備した「萬葉」の代表的作家である。（森本）

千賀屋草（ちかやぐさ）　隨筆　六卷三冊　寫　【著者】桂秀樹（多田義俊）【解說】公家・武家の故實、刀劍・弓箭・甲胄の談、言語の談、和歌の談、神道の談、醫方の談等を主とし、交ふるに卑俗の傳說等を以てして、蘊蓄を傾かうとしたものである。卷一に天照大神を良家に祭る論以下、卷二に鎧きせながの事以下、卷三に言語のなまる訛らざる論以下、卷四に牛飼の論以下、卷五に年始に佛事を忌む談以下、卷六に短歌・長歌の義以下各二三十餘を收めてゐる。傳寫に文字の誤脫が多い。（和田）

親行（ちかゆき）　歌學者　【姓】源　【法號】覺因　【生歿】未詳。但し建保三年に「萬葉集」を書寫してゐるから、これより少くも二十年位前に生れたのであらう。而して建治三年にはなほ存命してゐるから、九十歲前後まで生きてゐたやうである。【閱歷】元久二年十一月、左

季遠―光季―光行―親行┬孝行
　　　　　　　　　　　└義行―知行（行阿）

馬允に任じ（明月記）、建曆六年正月叙六位（建久九年建保六年記）。承久三年八月二日父光行譴せられんとするや、親行愁訴して宥さるゝことを得た。同十一月二十九日從五位上（家光卿記）。貞應二年閏七月二十三日、宰相中將實雅が上洛の際、私に扈從し、その故を以て十一月鎌倉の出仕を止められ、所領を沒收された（吾妻鏡）が、後數年にして罪を赦されたらしい。嘉祿二年正月正五位下（明月記）。大和守・河內守を歷任した。父光行と共に和歌の道に重んぜられ、屢々朝廷及び將軍家の和歌・連歌の會又は歌合に出席した（吾妻鏡・明月記）。又、故實に詳しく、幕府の諮問に答申したことも「吾妻鏡」に見えてゐる。又建保三年二月十日、累代の祕本を以て、「萬葉集」を書寫し（細井本奧書）（二十卷本奧書）、貞應二年七月九日、八本を以て校合せし「新古今集」を定家に進覽した（高野辰之氏所藏本奧書）。父と共に「源氏物語」の本文校訂に力を盡し、所謂「河內本源氏物語」を作り、水原

抄を完成せしめた（原中最秘抄奥書）。嘉禎二年二月三日、源氏の校本中缺脱せる十五帖の再校合を始め、建長七年七月七日、やうやくこれを完成した（鳳来寺所藏古寫本奥書）。寛元元年、將軍頼經の命によりて「萬葉集」を校調し、兩證本を以て卷一を校合した（飛鳥井本奥書）。これ等の諸本は、仙覺の校本の基礎となつた。親行は特に「源氏物語」の學者として世に重んぜられ、「原中最秘抄」を作り、將軍實朝・頼經及び宗尊親王の三代に亙つて和歌所の奉行であり、將軍の「源氏物語」の師範であつた（原中最秘抄奥書）。また定家より、その家集「拾遺愚草」の清書を依頼せられた時、假名遣の混亂せるを一定せんとし、自己の意見によつて假名遣を定め、定家の檢閲をうけた。これが定家假名遣の根源であると傳へられてゐる（行阿假名文字遣序）。また雅有は親行の門弟となり、揚名介に關する秘說を授けられん事を懇望し、一首の和歌を贈つた（閑女和歌集・原中最秘抄奥書）ほどであり、後、德大寺入道太政大臣は、親行の門弟となつて、その消息の表に、「光源式部大夫」の名を記し、衣笠內大臣家からの消息には、「親行は當道之棟梁一向可存門弟之儀云々」の言葉があつて、親行の名聲は一世を風靡した（原中最秘抄奥書）。また一說に「東關紀行」の著者とも云はれるが、これは誤りである。（光行參照）【著作】勅撰集に六首、新葉和歌集に十二首、東撰和歌六帖に七首、拾遺風體和歌集に二首見える。○水原抄○原中最秘抄（各別項）

【參考】河內本源氏物語とその校訂者 山脇毅（藝文一二ノ二）○水原抄光明抄の撰者問題上（藝文一二ノ二）○源光行親行年譜上（藝文一二ノ四・五）○定家の假名遣 吉澤義則（藝文一二ノ五）○源氏物語研究の初期 山岸德平（國語と國文學一二ノ一〇）○源氏物語研究史の新資料 橋本進吉（同上）　（池田）

地久（ちきう）　雅樂舞曲【異稱】地久樂・圓地樂【解說】高麗樂。新樂、中曲（又準大曲）。高麗双調曲に屬す。舞があり六人で舞ふ。舞人は常裝束を用ひ、甲は異なり、甲の下に帽をかぶり、鼻の高い假面を用ひる。この樂は催馬樂の樂人（呂調）の歌に合ふといふ。番舞は「萬秋樂」。起原・傳來・共に不明。大槻如電は「其假面の狀貌より見る時は、進走禿・貴德などと同じく渤海樂にやあらん」と言つてゐるのは信ずるに足る。（田邊）

乳姉妹（ちきやうだい）　小說【作者】菊池幽芳【發表】明治三十六年八月から大阪每日新聞に揭載【刊行】同年、春陽堂（前後二編）。後、明治大正文學全集（菊池幽芳篇）所收。【梗概】華族の落胤房江は、乳母お濱の手に育てられ、乳母の子君江と共に成長した。房江は性温順なれど、君江は虛榮心強き性であつた。君江は情慾の冒險家高濱勇と戀に陷ち、未來を約した。一方房江は學校の敎師、家庭敎師となつて、益々崇高なクリスチャンとなつた。お濱の死期に際し、遺言した房江の素性を、君江はそのまゝ自分の素性として華族の落胤となりすました。一方房江の父は、房江を求めて止まず、落胤と名乘る君江を自分の子と思ひ、侯爵家に引取つた。老侯爵は乳母お濱への感謝のために、房江を我が子と知らず、己が屋敷に君江と共に迎へた。そして侯爵家に於ける二人の生活は始められたが、不思議にも、老侯は君江より房江に引きつけられてゐた。のみならず養子昭信の心をも引きつけてゐた。併し房江は君江に對する義理から、自分の戀を斷念してゐた。昭信との結婚の日も迫つた或る日、三年前別れた高濱に見出されて、かつて君江から彼に與へたバイブルの中から現はれた品に依つて、君江と房江と代つてゐるのを詰り、侯爵に打明けようとしたが、プライドに燃えた君江は、あく迄それを拒絕した上、殺害に終らせようとしたため、遂に高濱の怒りを買つて殺された。總てが暴露された結果、房江が侯爵令孃なることが明かになり、昭信の夫人となつた。【解說】同じ作者の「己が罪」（別項）と共に、新聞小說として聲價甚だ高く、殊に大倉桃郎の「琵琶歌」などと共に、漸く衰へて來た家庭小說の末路に最後の光彩を添へたものである。これはベルサ・クレー女史の或る小品からヒントを得たことを、著者はその自敘傳中に述べてゐる。（以上齋藤（昌））

【上演】明治三十七年一月、大阪朝日座及び天滿座で同時に上演された。前者は高田・河合・秋月の一座、後者は、喜多村・福井の一座である。翌年一月、東京でも東京座と本鄕座とに同時に上演された。兩座の主なる役割は

（東京座）高濱勇（市川高麗藏、後に松本幸四郎）、松平昭定・三宅雄（市川猿之助、後に市川段四郎）、松平昭信（澤村訥升、後に澤村宗十郎）、房江（市川女寅、後に市川門之助）、君江（中村芝翫、後に中村歌右衞門）（本鄕座）高濱勇（高田實）、田川綱作・雲家久米（木村好美）、三宅雄（佐藤歲三）、松平昭信（山岡如萍）、松平昭定（木村周平）、房江（藤田芳美）、君江（河合武雄）等。

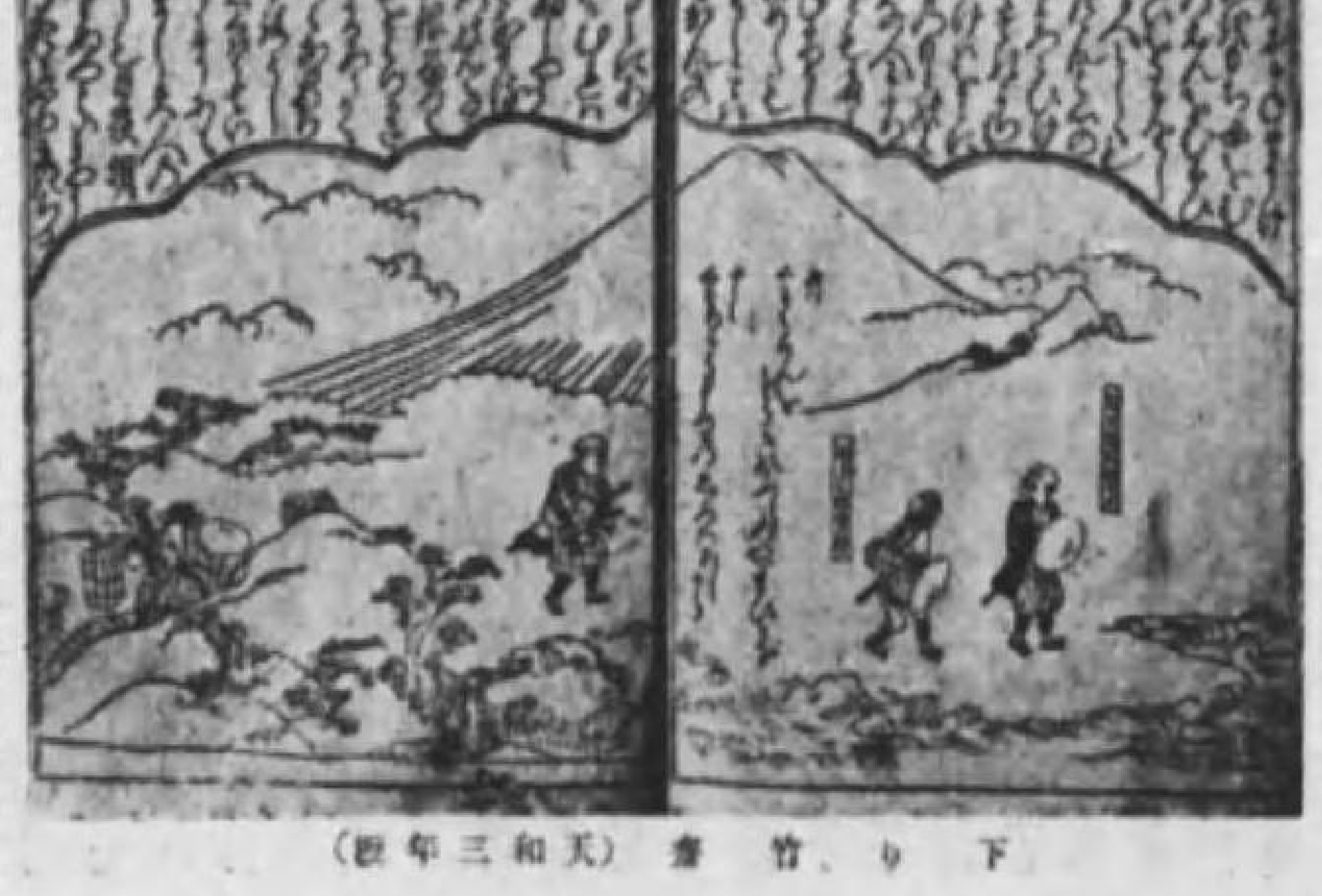
この競演は、勿論好劇家の間の問題になつたが、各々一長一短で、どつちが勝つたとも言へなかつた。その後も屢々上演され、新派の主なる脚本の一つになつてゐる。（以上久保田）

逢枷（ちぎりき）　能狂言【別名】花の顯【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代の內の作と傳へられる。【格式】本紳文濟相傳の部（大藏流）【題材】諍はてゝのちぎり木なる俚諺を捉へて一曲の種としたもので、全曲の趣向は創作であるが、題名の示すやうに諺が中心になつてゐる。この諺は、「源平盛衰記」四十三「成直降人の事」の文中にも、「二月十七日は阿波ノ勝浦の軍、二十一日には屋島を攻め落し、二十二日には讚岐ノ志度を攻められけり。二十三日に梶原巳下の兵屋島の渚に著く。諍終ての乳切木の風情なりとて、人皆口をすくむ」とあり、「平家物語」十一「志度合戰」の條下には、「今は何用にか逢べき。六日の菖蒲、會に逢はぬ花、いさかひはてゝのちぎりきかなとぞ笑はれける」と見えてゐるから、相當古くから人口に膾炙してゐた諺のやうである。【梗概】某が、あたりの者と連歌の初心講を結んで、丁度今日しも當家に當つたので冠者を呼んで皆の衆を呼びにやる。所が近所の太郎なる者がいつも邪魔になるので、態と今日は觸れずにおかせる。するといよいよ皆の者が集まつて、連歌を始めようとする頃、太郎が聞きつけ押しかけて來て、色々と難癖を付けるので、一同申し合はせて太郎を叩き出す。太郎は悲鳴をあげて歸る所へ、女房が急を聞いて駈けつけ、刀を差させ棒を持たせ、仕返しに行けと口惜しがる。太郎は怖れて行きたがらぬが、女房は果して來ねば內へは寄せぬと共々行くと言ふので、虎の威を借りて、當家を初めに皆々の家へ一軒々々尋ねて行くが、悉く居留守をつかつて相手にならぬので、門口で散々威張り散らし、「爰を訪へども留守と云ふ。彼處を訪へども留守と云ふ。是かや事の譬へにも、いさかひ果てゝの千切木」と罵倒をあげて女房と家に歸る。（義田）

竹園抄（ちくゑんせう）　歌論書　一卷【著者】藤原爲顯【成立】終りの方に、「爲顯入道殿小童の時竹園にてをしへ給へる民部卿入道殿の言葉を爲顯殿のかきあつめ給ふなり。世間に未披露物也。穴賢不可有外見、可秘竹の苑にて御子にをしへ給へる爲家の詞なり。仍號竹園抄者なり」とある。爲家の聞書であるが、年代は未詳である。また僞書とする說もある。【諸本】刊本には「寛永廿一甲申無射吉辰　藤屋三郎兵衞」の奧附ある本があり、群書類從にも收められてゐる。東京帝國大學國文學研究室藏の寫本二册は、刊本と比すると小異がある上に、終りの方が、刊本に「凡詞おほしといへ共」云々とあるところ以後はなくて、その代りに、「私云竹園抄は爲顯卿之作也。爲顯者爲家卿之三男ニテ爲教卿ノ弟ナリ大歌道ノ專要是ニ過ベカラズ。可信可祕」とある。【內容】歌に關する知識を舉げてあつて、一、歌可緣詞之事、二、可對詞之事、三、親疎句之事、四、六義之事、五、取本歌傳之事、六、返事歌之事、七、題存知之事、八、懷紙可書事、九、披講座席之事、十、名物題事、十一、風體之事に分けてある。この中、親句疎句の記述の如きは、句と句との接續の關係を說いて注意すべき言である。即ち親句をひとぎの親句と正の親句とに分けて居り、「ひとぎの親句」とは、音の上から接續する句であり、正の親句とは意味の上から接續する句である。又疎句とは、「ひとぎも通ず、詞もきるれとも、心のはなれぬ歌」であるとしてゐる。【價値】本書は、僞書說もある程であるが、大體に於て爲家から主張せられた平淡美の立場を見られる點で注意せられる。その所說の中でも、親句・疎句の說の如きは、殆ど最初に見られる文獻である。（久松）

千種庵霜解（ちぐさあんしもどけ）　狂歌師【姓名】山中恒海、通稱要助【別號】霜解道和留【生歿】寶曆十一年生れ、文化八年（一八一一）四月二十六日歿。享年五十一【法名】釋淨羽信士【墓所】淺草今戶慶養寺【閱歷】元、上總木更津に生れ、江戶に出て淺草馬道に住し、後、諏訪町に移轉して書肆を營んでゐた。狂歌を初代淺草庵市人（別項）に學び、後淺草側の判者となり、又狂歌集數種を自家から出版した。歿後門人鄙田器持が二世千種庵の號を襲いだ。【著書】夷曲花鳥集二册（寛政十二年）○狂歌新手集二册（寛政年間）○狂歌若葉之內二册（享和二年）○堀川太郎新狂歌集三册（享和三年）（野崎）

竹齋（ちくさい）　假名草子　二卷二册【作者】名はないが、「辨疑書目」に、「烏丸光廣竹齋」とあり、光廣の作と稱せられてをる。【名稱】「竹齋物語」とも云ふ。竹齋は主人公の名。【成立】元和から寛永十二三年までの間と推定される。【諸本】木活本が最も早いものであるが、刊記はない。これには「ちくさい」と假名で記され、繪は入つてをらぬ。次は整版で繪入本、これも刊行年月不明であるが、寛永版と稱するもの。その後江戶で寛文初年に覆刻したものは、「竹齋狂歌ばなし」といふ外題で四册になつてをる。又天和三年に鱗形屋で刊行したものは三册に分れ、全く別版で菱川師宣の繪で有名である。外題は「下り竹齋」。これは竹齋が行はれて、江戶から京都へ、逆に行く「上り竹齋」といふ竹齋の擬作が出來たから、それと區別せんために、殊更に「下り竹齋」と斷つたのである。一時大層流行つたものであるから、種々異本が出來た。滑稽文學全集第一・假名草子集（近代日本文學大系）所收。【梗概】山城國に、やぶくすし竹齋といふやせ法師があつて、都で食ひ詰め、にらみの介といふ下僕をつれて、諸國を遍歷し、いづくでも心の落着く所に安住せんと、先づ京內參りをはじめ、淸水より順次奪國・三十三間堂・大佛などを經巡り、北野に行つて、連歌・三味線・能役者さまざまの興行物を見て、それより東を志し、尾州名古屋に足を留め、天下一やぶくすし竹齋といふ看板を打ち、醫者をはじめたが、勿論藪醫であるから、醫書は知らず、鍼灸練轉の働きを以て、病者を診療して行く。先づ最初は、おこりを煩ふ者を見て、古拳古紙衣の黒燒を投じて、首尾よく癒し、それより矯々療治を施してゐるうちには、失敗もあり成功もあるが、何れも稀代の療法で、或る時鍛冶屋の主人が、鐵屑を目に入れて苦しんでゐるのに對し、磁石の粉を張り付けて吸ひ出し、姫稀が生梅を好み、咽喉に詰めたのには、吸ひ出し膏藥を口に張り、首尾よく生梅は、飛び出したが、じんべん膏藥の效目で、目鼻までが吸ひ上げられ、却つて怨まれることもあり、又或る時小兒が井戶へ陷ちたのを、竹齋が通りかゝり、戶板に例の吸出膏藥を一面に張り、井戶の蓋にし、今吸ひ上げるから見てをれと、言つてをるうちに時間が經つて、小兒は遂に死んで了ひ、兩親その他から袋叩きに逢ひ、漸くのことでその場を逃れ出で、三年程は名古屋に住んでゐたが、又こゝを立ち出で、にらみの介と共に、東海道を下る途すがら、名所古蹟をたづね、狂歌を詠じなどして打興じつつ江戶に下り、諸所の見物を終る。【批評】光廣は元和四年の春、近衞准后八條式部卿宮に隨伴して江戶に下り、「東の道の記」一卷を撰してをり、その外にも度々江戶に下つたと云ふことであるから、「竹齋」は彼の實際の見聞に基づいた所が多いであらう。「東の道の記」は大納言の資格で書いたもの、「竹齋」は、衣冠束帶を脫いで赤裸々の光廣となつて書いたものと言つてよい。「まことに貧は諸道のさまたげ阿彌陀も錢ほど光る」と警句を吐


下り竹齋（天和三年版）

いて、すべてを金の世の中に歸し、又「くすしには上手も下手もなかりけり、ひいき〳〵の時のしあはせ」と狂詠し、有能が時に遇はず、無能が却つて世に蔓るといふ皮肉な世相の一面が、滑稽に展開されて居る。名古屋で試みた藪くすしの療法の如き、やゝ探りに墮してはゐるが、當時にあつては奇拔な構想であつたらう。文品も勝れてをるところから、好評を博したものと思はれる。【影響】構想を摸擬したものに「上り竹齋」があり、又「新竹齋」（別項）がある。その他黄表紙等に影響を受けたものが多くある。また狂文的紀行、道行體の意匠を學んだものもある。淺井了意の「東海道名所記」（別項）の構想はその一例で、「上り竹齋」は、やはり東海道の行程を辿つたものである。

【參考】新撰列傳體小說史前編（水谷不倒）（水谷）

竹山（ちくざん）　儒者【姓名】中井積善。字は子慶。壽太と稱す。【生歿】享保十五年大阪に生れ、文化元年（二四六四）二月二日歿す。享年七十五。【閲歷】甃庵の長子で、弟履軒と倶に宋學を五井蘭洲に學び、出藍の稱があつた。また詩文にも長じてゐた。懷德書院の院長となり、子弟を教授した。大正元年二月從四位を贈られた。【著作】逸史十二卷○草茅危言八卷○詩律兆四卷○非徵七卷（佐久）

畜生腹（ちくしやうばら）　小說【作者】廣津柳浪【發表】明治三十年十月號「太陽」【刊行】柳浪叢書前編。現代日本文學全集（廣津柳浪集）所收。

【梗概】某火災保險會社員の重三郎は、聽女房といふ程でもないが、見染めて一緒になつたおもよと新世帶を樂しんでゐたが、四五日に迫つた妻の初産を前にして突然名古屋へ出張を命ぜられた。跡にはお近といふ五十過ぎの雇婆と、主人を命の親としてゐる馬鹿正直の下男力造がゐるだけだつたから、まだ十九の初々しい妻の事を萬事賴んで、やむなく旅へ出たのである。おもよに産氣がついたのはそれから三日の後だつた。これまで度々取り上げの經驗があるといふお近を力賴みに、刻々劇しくなる陣痛を忍んでゐたが、力造を幾度使にやつても、産婆がなか〳〵來てくれなかつた。遂にその手を待たずに、出産することが出來たが、それは男女二人の雙兒だつた。名古屋から歸つた重三郎は、初めて儲けた子が男だつたのを殊の外よろこんで、日ましに可愛く育つて行く重太郎を抱いては、わが身の幸福に醉つてゐた。しかし産後夫婦に陰鬱になつて來たおもよの樣子が、重三郎の心を曇らせるのだつた。醫者に診せると血の道だといふので、治療を重ねたが、何の驗もなく益々泣蟲になるばかりだつた。夫婦が寵愛の的にしてゐる重太郎のことを話し合つても、濟んだ後はすぐにわけもなく涙に溺るのだつた。おもよがただ沈み勝に日を暮らすにつれて、家事向きの事をまかされるやうになつたお近は、急に變つた圖々しい態度になつて、酒を呷るやら主人に言葉を返すやら、雇人としてあるまじい所作を見せるのだつた。重三郎は不快に堪へかねておもよに解雇するやうに迫つたが、おもよは「お産の時世話になつたから」とて、夫を宥めては涙ぐむばかりだつた。いつも泣顏ばかり見せる妻と、太々しく振舞ふ惡婆との間に、何か祕密な關係がなければならないと、重三郎は妻の不義といふやうな暗い想像をさへした。しかしおもよが夫にも打ち明けずお近の脅迫のまゝに忍從してゐるのは、そんな事のためではなかつた。いつか茶飲話しに上つた因果な畜生腹のお産に立會した時、上總生れのお近に女の子を殺して貰つた祕密を握られてゐるからだつた。お産の苦痛で夢心地だつた自分は賴んだ覺えはないが、お近は賴まれて恥を除いてやつたと言ひ張つてゐるから、もしこの祕密を夫に知られたら、無殘冷酷な女として夫婦の緣もそれ限りになるだらう。おもよは死んだ子を思ひ、今の情なさを思つては、泣き暮すばかりだつた。お近の增長と横暴はその極に達した。重三郎が解雇を言ひ渡すに及んで、食つてかゝつて罵り騷ぎまでする。それを見かねた力造は、おもよの祕密を胸一つに收めて、遂にこの呪ふべき禍根を斷つた。お近を殺して自首したのである。主人に殘した書置きに、「いつまでもなかよく、ぼつちやんのおほきくなるのをあのよからみてゐる」とあつたが、夫婦の仲にはさきの日の和樂を求むべくもなかつた。

【批評】所謂作者の悲慘小說の一つであつて、人の卑しむ畜生腹の恥に墜ちたおもよの苦惱を、お近の毒々しい脅迫を緯として漸次深めて寫してゐる。しかし今日から見れば、祕密を中にした夫婦の氣持が、だん〳〵隔つて行く徑路の方が、無理がなくわれ〳〵の胸に感じられる部分となつてゐる。山男のやうな異常人の力造を用意して、おもよの苦悶を解決させてゐるのは、作者の趣味的反覆とのみ見られて、反つてこの作の眞實感を減ずるものではあるまいか。

【上演】花房柳外によつて五幕十一場に脚色され、明治三十一年四月東京川上座に、川上音次郎・佐藤歳三等によつて上演され、後四十年四月東京眞砂座に再演された。（永木）

筑前琵琶（ちくぜんびは）　「琵琶」を見よ。

竹窓餘話（ちくさうよわ）　隨筆　一卷　寫【編者】因修庵主人【成立】寫本の卷尾に、傳寫主稻垣氏の識語には「原書は享保六七比之錄也」とある。【解說】我が國戰國時代の末頃から、江戸時代の初期までの武家將士の逸話類を記したもので、每話の末に評言を加へてある。寬永八年八月豐島刑部の井上正就刄傷、貞享元年八月稻葉正休の堀田正俊刄傷の事、里見忠義所領沒收、駿河大納言忠長の事、旗下坪内惣兵衞の由緒、島勝猛の末路、小幡信世の節義、鳥居久五郎の義烈、石田・小西・安國寺の心事、蒲生鄕舍の出處、立花宗茂の氣魄、生駒將監の奇智、松岡淸右衞門の武士道、福島正則の暴戾等凡そ三十四條を收む。但し末の數條は漫言である。序跋はない。（和田）

竹塢吟社（ちくをぎんしや）　「北山」を見よ。

竹田（ちくでん）　畫家・漢詩人【姓名】田能村孝憲、字は君彜、通稱行藏【別號】雪月書堂・補拙廬【生歿】天保五年（二四九四）八月二十六日大阪に病歿す。享年五十九。【閲歷】豐後岡の人、家は世々藩醫であつた。父は碩庵といふ。幼より文學を好み、やゝ長じて醫を學んだが、その志にあらざる故を以て、藩主特に命じて儒員とした。時に二十三歳。即ち江戸に出で、古屋昔陽・岳東海に就いて學び、傍ら谷文晁に畫を學んだ。又京都に往き村瀨栲亭に就いて經學を修めた。三十八歳、多病の故を以て致仕、專ら風流に遊んだ。賴山陽・篠崎小竹・雲華上人等と交情最も厚かつた。竹田は才藝に秀で、詩文書畫はもとより、茶道・香道にも通じ、就中、畫技に長じ、一家の風を成した。【著書】「填詞圖譜」、外に田能村竹田全集（國書刊行會）一卷がある。（佐久）

竹堂（ちくだう）　儒者【姓名】齋藤馨。字は子德、通稱は順治【生歿】文化十二年十月生れ、嘉永五年（二五一二）閏二月十一日江戸に歿す。享年三十八【閲歷】仙臺の人。世々伊達氏に仕へた。幼時江戸に出でて増島蘭園に學び、後、昌平黌に入り、業大に進んだ。ついで關西地方を游歷して郷に歸り、再び江戸に出で、塾舍を下谷相生町に設け、徒を聚めて教授した。藩侯その名を聞き、擢んでて儒員となさうとしたが、竹堂時に病床に在り、竟に起たなかつた。【著作】竹堂游記二卷○讀史贅議二卷○竹堂文鈔六卷（正續に分れ各三冊、竹堂の文集である）。（佐久）

竹柏會（ちくはくくわい）　歌人の團體【成立】佐佐木弘綱、その庭に竹柏樹を植ゑて、竹柏園と號した。子信綱その號を襲ひ、明治二十四年弘綱の歿後、多くの門人を指導し、團體を作つて竹柏會と稱した。【解說】明治二十九年同人の機關雜誌「いさゝ川」を出した。同三十一年同誌を廢して「心の花」（別項）を發行し、出版部・通信部を設け、現今に至つてゐる。各地に支部を有し、奈良支部は雜誌「奈良文化」を出してゐる。また同人の歌集「心の華叢書」を刊行し、昭和五年三月までに四十四卷に達した。同人の數は二千を超えるが、中にも出版部を主宰せる石榑千亦を初め、小花清泉・川田順・齋藤劉・下村宏・印東昌綱・山下陸奥・前田鋼太郎・兒山敬一・片山廣子・白藻・栗原潔子・津輕照子・小金井素子等現に世に聞えてゐる。明治二十七八年の交、新詩社（別項）及び淺香社（淺香社歌會參照）と並んで、新派和歌の勃興に方つて結ばれたのであつて、その歌風は清新といふことを標榜してゐる。又一つの歌風で會全體を拘束することをせず、作者それぞれが獨自の歌風を持つことを重んじてゐるので、會員の中から多くの個性的な歌人を出してゐる。（佐佐木）

竹生島（ちくぶしま）　「龍神物の謠曲」を見よ。

竹婦人（ちくふじん）　淨瑠璃作者・俳諧師【本名】未詳。通稱大滿屋仁左衞門【別號】俳號岩本乾什。外に栗丈・滿足庵・千歳庵・鷹一叟等。竹婦人は淨瑠璃小唄等の作名。【歿年】寶曆九年（二四一九）二月十七日歿、享年八十。【墓所】淺草寺地中人丸堂前【閲歷】壯時は吉原江戸町一丁目の揚屋大滿屋の主人で、土佐節に長じ、且つ俳諧を山本子英や貴志沾洲等に師事してこれを能くし、通人として知られてゐたといふ。また半太夫節を以て初代十寸見河東（藤十郎）とも親交があつたらしく、河東が半太夫から分離獨立した際に盡力し、文才に富んでゐたところから、その制作をも約したと傳へる。彼が初代河東のために始めて作つた曲は「提灯紋盡」（享保四・五年か）かと思はれる。享保五・六年頃と覺しき「禿萬歳」なども古い。かくて五十歳に近き頃（一說に[illegible]して）に、剃髮隱居して淺草北馬道和泉院（俗に誹諧地藏）地内（一說に、始め淺草竹門に住すといふ）に住み、趣味生活に入り、俳諧の點者を業とし、傍ら淨瑠璃・小唄等の詞章を作つた。河東節の詞章は、二代河東のために作つたものが多く、當時連續的に秀作を著はした。「水調子」「ぬれ扇」「いの字扇」等は、絕唱とまで稱美された。彼は又土佐節や半太夫節にも通じ、作詞者として最適任者といふべく、ために河東節は一段の光彩を放つた。かくて河東興隆の機運を助長し、遂に師流を遙かに凌駕せしめた功勞者の一人として記憶さるべきである。「誹解や八十年のつくりもの」の辭世がある。門下では彼に竹婦人の號を讓られたと傳へる竹島正朝（吉原名主たに右衞門）が知られてゐる。

【作品】二十餘曲と數へられる中、主なるものを擧げる。○禿萬歳（享保五六年頃）○江の島（同八年前後か）○飛東濱川（「二柳川」とも書く。同十一年七月）○（縄は一說の江戸紫露は門出の武藏鐙）鏡花がたみ（同十二年七月）○傾城水調子（河東節參照）○浮ぶ瀨（同十六年七月か）○ぬれ扇（同十七年か）○いの字扇（同十九年七月）○夜の錦（源氏、竹婦人作。元文二年七月か）。

【參考】歷代集二代瀨田左交○中古戲場說（燕石十種第二）○江戸節根元記[illegible]（同上）○嬉遊笑覽○日本歌謠集成卷十一（英堂）

竹豐故事（ちくほうこじ）　淨瑠璃　三卷三冊

【著者】序に浪速散人一樂とある。「外題年鑑」（別項）の著者一樂子と同人であらう。傳未詳。【刊行】寶曆六年【讀本】新群書類從卷六・近松世話淨瑠璃集附錄（昭和版帝國文庫）所收。

【解說】「今昔操年代記」（別項）を增訂しようといふ意圖に成つたものらしく、淨瑠璃好きの筑紫翁といふ老人が東（豐竹）西（竹本）兩座贔屓の若者たちの望みに應じて物語るといふ形式で、淨瑠璃の發生・展開から兩座の發達を述べてゐる。上卷は「芝居濫觴并淨瑠璃[illegible]等之事」（平城天皇の御代、南都興福寺中將大門前說を採る）、「淨瑠璃操之來由并太夫受領之事」「三ケ津淨瑠璃流布并古流廢衰之事」「井上播磨掾并清水理兵衞之事」「竹本筑後掾來歴并同播磨掾之事」の五章、中卷は「豐竹越前掾來歴并江戸肥前掾之事」「竹豐東西之流芝居繁昌之事」「名人上手下手三品評判之事」「名人之太夫並弟子中へ教訓之事」「淨瑠璃語り眞心得之事」「五段續語り場役柄之事」「音曲狂言綺語并呂律五音十二調子之事」の七章、下卷は「淨瑠璃作者并近松氏之事」「三味線來由并寸法三筋糸附澤之字前字に付る事」「操人形之故事并名人達手附古今達人事」「淨瑠璃古今之序并當時之太夫名人之評」「兩座繁榮并逃助之字義事」の五章に分れてゐる。全體として「今昔操年代記」よりは系統的組織的になつて居り、中卷所收の藝談類や、下卷所收の當時の太夫の評言なども注目すべきものであらう。義太夫節及び人形劇隆昌期研究の資料として、「今昔操年代記」「淨瑠璃譜」「外題年鑑」（各別項）と共に必ず併せ見るべき書である。（和田）

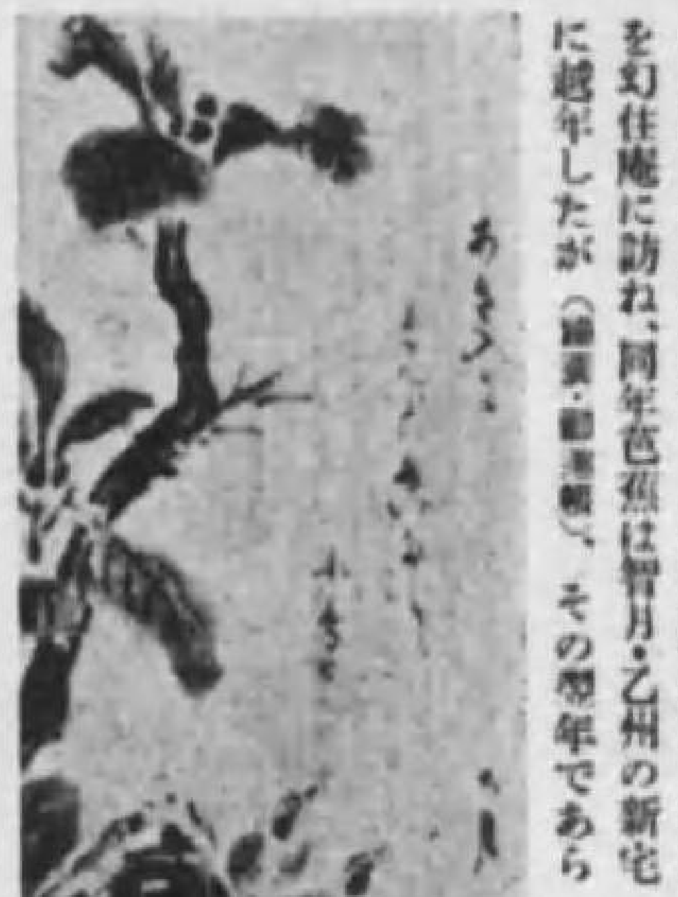
千曲川スケッチ（ちくまがはすけつち）　小品集【作者】島崎藤村【刊行】大正元年十二月、佐久良書房。後、藤村全集第二卷に收む。岩波文庫その他所收。【解說】千曲川にのぞむ信州小諸地方の、自然と人間生活を觀察した小品を集めてゐる。言葉通りペンとノートをもつて、自然の移り變りを一木一草の末までも描寫し、或は農村の社會生活の色々な斷面を寫生したものである。作者がその地方に在住した當時、それまでの浪漫的傾向から、現實主義の最初の自覺に到達しかけた頃の產物である。その或る部分は「破戒」（別項）の中に素描として用ひられ、全體の筋立に再構成されてゐる。簡素の美を愛し、勞働する下層社會の人々に接觸して、自らその一人として生きるべき覺悟を得たのも、この著作の成つた前後であると、後に作者自ら書いてゐる。全體を通じて十二章に分れ、各章とも數篇づつの小品及び感想を收めてゐる。この小品集の書かれたのは、ずつと以前、明治三十三年頃からのものであつたが、發表及び刊行は遲れて、大正元年冬、恩人吉村氏の息に贈るはしがきを附して單行本として出版した。發表以來、

歌を重ねて廣く讀まれてゐる。或る意味で、作者の代表的な著作の一つである。（武藤）

竹林抄（ちくりんせう）連歌集　十卷【撰者】飯尾宗祇【名義】竹林七賢に象つて、優れた連歌の作者七人を選んだ集なるによる。【成立】文明八年【諸本】京都帝國大學國語研究室本・內閣本・續群書類從本がある。【內容】高山宗砌・杉原賢盛（宗伊）・權大僧都心敬・法印行助・法眼專順・蜷川智蘊（親當）・能阿法師、以上七人の附句發句を選び、附句は四季・戀・雜の六部に部立して九卷までに收め、十卷に發句を部立なしに、四季の順で收めたものである。初めに一條兼良の序があり、末に宗祇の文明十八年臘月晦日一校し終つた由の識語がある。【價値】宗祇は、連歌の風調に於ける時代分けとしては、二條良基（別項）の頃を上古とし、梵灯庵（別項）の頃を中古とし、宗砌（別項）以下を當世とし、當世の作を最も進んだ體義すべきものとするので、その當世に於ける先輩中の最も優れた作者として以上の七人を選定し、その七人の佳作を選集したのが本集である。されば本集によつて、これ等七人の佳作と、同時に宗祇の推稱する種類の作を窺ひ得る。宗祇は文明十一年の「老のすさみ」（別項）に於ても、更にこれ等七人の作中模範とすべき作、模範とし難い作を示してゐる。宗祇のこの選定によつてこれ等の七人が後世から連歌の七賢と呼ばれる。（福井）

竹冷（ちくれい）俳人【姓名】角田眞平【別號】聽雨窓・頓々房・神田閑人・閑々人・半閑人・未開人等【生歿】安政三年五月二日、駿河富士郡加島村柚木に生れ、大正八年三月二十日歿。享年六十四【閱歷】明治五年東京に出で、沼間守一の門に在つて政治生活に入つた。區會・市會・府會・衆議院の各議員に列した外、東京市區改正局長として業績を殘し、又本業の辯護士以外、東京株式取引所理事を初め、幾多の會社の重役を勤めた。明治十三年、丈六庵一草と共に報知新聞に俳句を載せ、新聞紙上に俳句を掲載するの例を開き、沈滯せる當時の俳壇に何物かを齎す所があつた。爾來劇職の傍ら俳道に精進し、明治二十八年には、自ら主盟となつて尾崎紅葉・巖谷小波・岡野知十等と共に秋聲會（別項）を結社し、二十九年には、機關雜誌「秋の聲」（別項）を創刊した。かくて或は古俳諧の研究を發表し、或は新聞雜誌に執筆し、又は選者となり、講演會に聽者を傾けたりした。竹冷は作句者としてよりも寧ろ史料の探究や俳諧の講說の方により多く勝れ、又松宇・洒竹と共に古俳書蒐集家として知られ、古俳書の散逸を防ぐと共に、これを善用して、斯道に貢獻するところがあつた。その文庫は竹冷文庫として次男竹涼に傳へ、現在は東大圖書館に收められてゐる。【編著】俳諧句合集○聽雨窓俳話○俳遊記○芭蕉句集講義○竹冷句鈔（竹冷會編）等。（伊藤）

智月（ちげつ）俳人【姓】川井氏【生歿】未詳、但し千那の「白馬紀」によつて寛永五年三月にはなほ存命であつたことが知られ、路通の「芭蕉翁行狀記」によつて推算して當年七十餘歲であつたことが知れる。【俳系】松尾芭蕉門【閱歷】近江大津の荷問屋川井某（佐右衞門と稱へる）の妻で、乙州（別項）の母である。「蕉門諸生全傳」には「生國山城宇佐の產、若年の頃何れの御所にか御局に宮仕す、歌路と云へり」とあるが詳かでない。元祿五年の「誹林一字幽蘭集」に亡夫七回忌の追悼句があり、貞享四年の「ひとつ松」に、「獨寢や夜わたる男鹿（をじか）の聲悔し」の句があるので、貞享三年頃に夫に死別し尼となつたらしく、又この頃までに芭蕉に入門したと思はれる。元祿三年には、芭蕉を幻住庵に訪ね、同年芭蕉は智月・乙州の新宅に越年したが（雜談・翻漢帳）、その翌年であらう、芭蕉が智月の家に立ち寄つた時、智月が形見を欲んだところ、芭蕉が「六そぢの霜にむかふ人に形見を乞はれて いと力なし、我先にしねとや」など興じ、幻住庵記を書いて與へた（芭蕉翁行狀記）。芭蕉病歿の時は、三七日に乙州の催しで宅に信仰の襲を迎へ、智月が形見を乞うた時芭蕉が乙州に與へた自畫像を懸けて追悼の句會を營み、每七日盡七日に至るまで智月親子が各所の追悼俳筵に列席してゐる（以上）。「俳家奇人談」に引く許六の智月宛の手紙によると、芭蕉歿後、許六が五老井の芭蕉須愛の古木を伐つて芭蕉像を刻んで智月に贈つてゐる。女流ながら近江蕉門中重きを置かれる人で、一家皆句に遊び、家も豐かな方で、惟然・路通の如きをも扶助したらしく、性質も慈愛に富む人であつたらしい。著作の知られたるものなく「近江人物志」には、「三遺論の著あり」とあるが詳かでない。作風に就いては、許六は「智月は一筋見えたり。乙州より遙かに勝れたり。然れども仕習の朝より終焉の曉までの誹諧五色の中、ただ一色を染出だせり。これは女の風雅なればなり。彼が風雅の美をいはば生涯の句ひたすら智月と言ふ尼の句にして、女の形を能く顯はせり」（歷代滑稽傳）と云つてゐるが、ほぼ當れる評と云つてよく、なほ理智に落ちる傾きがあると云へよう。【著作】智月尼句集　大野洒竹編（俳諧文庫元祿名家句集）○智月尼俳句集　永井瓢齋編（女流俳家全集）○蕉門名家句集（第三輯）安井小酒編【參考】芭蕉翁行狀記　八十村路通○誹諧問答　森川許六○蕉門頭陀物語　建部涼袋○誹諧世說　高桑闌更○芭蕉翁反古文　文曉○俳家奇人談　竹內玄々一○蕉門諸生全傳　遠藤曰人○俳人百家撰　水谷川柳○俳林小傳　中村光久○俳諧人物便覽　三浦若海○近江人物志　滋賀縣教育會（志田）



智月自畫讚

稚兒觀音緣起（ちごくわんのんえんぎ）繪卷【解說】蜂須賀侯爵所藏殘缺一卷。昔大和國の一老尼が長谷の觀音に參詣して、おのが後を繼ぐべき年若きもの一人を賜へと乞うた効があつて、遂に詩歌管絃にも秀でた一美少年を得たが、これ即ち奈良興福寺なる菩提院の十一面觀音の化身であつたといふ物語を描いたものである。繪は土佐吉光筆、詞は後醍醐帝筆と傳へられてゐるが、素より確かでない。その畫致から見れば鎌倉末に大成した土佐派の樣式を見るべきもので、製作の年代は遲くも南北朝を下るまい。この外になほ住吉慶恩法橋の畫と傳ふる一卷もあるらしいが、前者との異同のほどは詳かでない。觀音の利生應化譚を描いた繪卷として、「地藏靈驗繪卷」等と相並んで、時代信仰の所產としても興味あるものである。（田中（一））

千里（ちさと）歌人（中古三十六歌仙の一）【姓】大江【家系】音人の子、一說に玉淵の子。音人は、「本朝皇胤紹運錄」に阿保親王の子とし、大江氏系圖には本主の子、親王の孫とし、「公卿補任」には本主の子、母は中臣氏（阿保親王侍女）とある。【閱歷】元慶七年備中大丞、延喜元年中務少丞、二年兵部少丞、三年大丞に任じた。寬平年中自ら作る所の新舊の歌を奉るべき勅を承つたが、魂神安んぜず遂に病に臥した。身は儒門にあつて和歌を習はず、やむなく古句を援つて歌を作り、別に自ら詠ずる所（十首）を加へ、百二十首の歌を奉つた。卽ち「句題和歌」である。【作品】勅撰集に入る歌は古今十、後撰二、その他凡そ十三首、合計凡そ二十五首。一體に線が太く硬直な歌が多い。○句題和歌一卷。群書類從一七九所載本は文保二年六月參議爲藤の奧書と補遺の歌三十五首とがある。圖書寮所藏本（一冊寫）は、大江千里集とあつて匡衡集を附してゐる。部類を春・夏・秋・冬・風月・遊覽・離（圖書寮本別）・述懷の八に分ちて古句に和した歌百十四首（圖書寮本百十六首）があり、終に詠懷として十一首（圖書寮本十首）がある。初めに寬平六年四月二十五日散位從五位上大江朝臣千里（圖書寮本寬平九年、從六位上）とした署名の序があり、二月十日勅を承つたとある。類從本にある補遺の內には、「靜なかりしかども人の事につきて暫く籠居すべき由ありし頃」弟の千古（式部大輔）に贈つた歌、伊豫の任にあつた時の歌、小野美材の許にて詠んだ歌等がある。（西下）【參考】古今集目錄○中古歌仙傳○大日本史二百十六（音人の條）○百人一首一夕話

鍋屋新助（なべやしんすけ）「八幡祭小望月賑」を見よ。

知十（ちじふ）俳人【本名】岡野敬胤【別號】正味【生歿】萬延元年北海道日高國様似に生れ、昭和七年八月十三日東京に歿す。享年七十三【閱歷】函館每日新聞を振出しに、長く記者生活をした。この間俳句に趣味を持ち、明治二十八年九月、每日新聞に「俳諧風聞記」を掲げ、俳壇に認められた。同年角田竹冷等と共に秋聲會（別項）を創立し、後これを脫退して雀會を起し、三十四年俳誌「半面」を發刊し、半面派と稱する一團を組織した。知十の俳諧に對する考は、子規が俳句も生活であるとしたのに反して、飽くまで俳句は趣味に生きるものであるとして其角の風を慕つた。後年江戶座の硏究から小唄に興味を持ち、角丸商會の取締役たる傍ら、時々小唄に筆を染めてゐた。又酒井抱一の研究に造詣深く、野口米次郎氏の「抱一論」など、彼に負ふところが鮮くない。【編著】也有全集（俳諧文庫）○一茶大江丸全集（別項）○晉其角○雨華抱一○俳趣畫趣○稿村その他。（伊藤）

地上（ちじやう）小說【著者】島田淸次郎【成立】第一部は大正七年七月脫稿、翌八年六月新潮社より出版。第二部は大正九年二月、第三部は同十年一月、第四部は同十一年一月、何れも新潮社。後第一部は現代長篇小說全集（新潮社）第二十四卷に收む。

【梗概】（第一部）少年大河平一郞は正義を尙ぶ純心と、不合理を憎む熱情とを抱いて、何時かは世と人とを救はうと期してゐる。彼はもとは大河村きつての豪家であつた北野家の外孫であつたが、北野家は彼の叔父――母の兄の代で亡びて了ひ、彼の父大河俊太郞も彼が三歲の時死んで了つたので、今では母のお光と二人金澤の或る藝者周旋業者の二階借りをしながら、中學校に通つてゐた。當時の彼には吉倉和歌子といふ愛人があつた。其處へ突然冬子といふ女が現れたのが機緣となつて、彼等は春風樓に移り住むことになつたが、冬子は間もなく東京の有力な實業家天野榮介の妾となつて連れて行かれて了つた。さうして彼女は平一郞を引き取つて天野に世話をさせようとした。天野は元來お光と双生の同胞續子の一生を狂はせた仇敵であつたが、冬子は素より何も知らなかつたのである。平一郞も何も知らなかつたし、和歌子との交際を變に不純視する學校に嫌氣がさしてゐた上に、和歌子は強ひられて他に嫁いで了つた時であつたので、寧ろ進んで上京した。が、天野の邸での生活と觀察とは、彼に虐げられた萬人の悲しみのために闘はうといふ悲壯な決心を愈々強く振り起させた。（第二部）（本篇の主人公赤倉淸造は、第一部の主人公平一郞の分身のやうな男になつてゐる）東京で羽振りのよかつた實業家三崎の世話になつてゐた赤倉淸造は、正義觀と爆發的な激情とのために、自らその境遇を破壞して金澤に歸り、叔父の家からその市の商業學校に通學する事になつたが、辯論大會の演說が學校の忌諱に觸れて停學に處せられ、更に落第を餘儀なくされた爲め、再び上京して母が再緣してゐる小さな鼻緒職人の家に厄介になり、鼻緒製造の手傳ひから洋品屋の小僧、出版社外交員の下働きと轉々した後創作に志したが、全然認められないのに憤激して自殺を企て、そのためその家にゐられなくなつた母を擁して、一時鐵工場の職工となつたが、罷業を煽つたので其處も追はれて又金澤に歸つた。揚句に、彼が三崎の世話になる以前からの知り合ひであつた藝者小菊と自分の母とを殺して死刑に處せられた。彼はこの汚濁醜穢な人生は美しきもの正しきものの生きるに値しないところだと觀じ、自分も死ぬつもりで、この兇行を行つたのであつた。（第三部）（主人公は再び大河平一郞になつてゐる）彼は天野の邸を出た後半ば放浪的な生活を送つてゐたが、郷里の母が病に犯されて重態に陷つた爲め歸郷して看護に努める傍ら、土地の新聞社に入つて發送係を勤めた。その頃金澤の町には人間力に對する絕望と、それ故に徹底的な現實への信賴を高調する異端者の宗教が、市民の間に指彈されながら勢力を蓄つて醜惡の限りを盡してゐた。さういふ行き詰つた地上生活の陰に勞働大衆の擡頭が靜かなる暴風の如く渦卷き起りつつあり、更にそれに對抗すべき資本家の大同團結を、天野榮介などが畫策してゐた。平一郞は母の病氣の漸く怠つた頃、たまたま金澤に歸つてゐた和歌子と能登方面に旅行して、社會主義者で長い間支那に行つてゐた明智順之助と會ひ、その紹介で京都の某新聞に寄稿の約束が出來た爲め新聞社の發送係を罷め、次いでその新聞社から招聘されて京都に移つた。擡頭する社會主義的風潮にも必ずしも滿幅の贊同は感じられなかつたし、能登への旅行中もう一度彼の胸に歸りかけた和歌子も結局歸つては來なかつたし、更に彼の戀した棒といふ女も、彼女の暗い過去を卑下して彼の熱情を完全には受け容れなかつた。彼は勢ひ孤獨を感じずにはゐられなかつたけれども、やがてそれも萬人のために生き、萬人のために死ぬる覺悟の自分の運命と諦觀した。（第四部）（主

人公は、野島民造といふ名前になつてゐる）「新しい世界への道」といふ作品によつて、一躍文藝思想界の若き明星となつた彼は、以前友人の中谷と一緒に暮してゐた頃親しくしてゐた中谷の妹艶子が、兄の破滅と妹の病氣とを救ふために藝者となつてゐるのと逢つてゐた所へ、飯坂榮子に斬り込まれた。併し彼女がその場で自殺して了つた爲めに、危く殺人の嫌疑をかけられようとしたのを、艶子の小菊が身を以ての證言によつて僅かに免れることが出來たけれども、その事件のためその儘日本に止まることは、やがて彼自身の破滅でなければならないやうになつたので、獨り淋しく外遊の途につくことになつた。小菊は横濱埠頭まで彼を見送つて別れ難い別れを別れた。かういふ事件の直接の動機となつた飯坂榮子といふ女は、古くからの社會主義運動の闘士飯坂利助の娘で、矢張り當時の日本の思想界に非常な勢力を有つてゐた吉川博士の令嬢貢咻と、猛烈に戀を奪ひ合つた結果、一度は民造と約婚の間柄にまでなつたのであつたのに、父の一存からその許婚を破棄された女なのであつた。

【批評】「地上」といふ題名が示してゐる通り、この書は地上に於ける人間生活のあらゆる斷面を描き盡して、其處に潜んでゐる卑陋と醜惡と虚僞と弱小と淺薄と不合理とを剔出し、それ等を拭拂し去つた後の、崇嚴と高貴と輝かしさと偉大な愛との世界を夢覺させようとする意圖の上に打ち樹てられてゐる。理想主義的傾向小說の一つであるが、其處に示された著者の理想への火のやうな情熱と、現代社會惡乃至人間惡に對する燃えるやうな反抗と憎惡と、野介大膽を極めた戀愛愛慾の描寫とに最も著しい特色を示してゐる。筆力も強いし、作品の局面も廣いし、その廣い局面のいろいろな部分に優れた描寫の見られるところも少くはないが、全體にラフな感じと餘りに放埒を極めた材料の無整理と、それにも拘らず矢張り材料の不足から來る同一題材の繰り返しとが目に着き過ぎる。人物の傀儡化も如何に傾向的なものとしても著し過ぎるし、作品の構造も餘りに通俗小說的な型と奔放さとに流れ過ぎながら、四部それぞれの間には類似點共通點が多過ぎ、且つ四部相互の關係が、即き過ぎた部分を多く有ちながら、必ずしも有機的になりきつてゐない。殊に作品全體を貫く著者の理想主義が、人道主義と社會主義とをつきまぜたやうな、一種特異な形貌は有ちながら、それが餘りに空想的であり過ぎる上に、主人公がさうした理想を屢々口にし、さうした理想への激しい情熱に燃えてゐる割合に、生活的實質的には何もしてゐないために、ただ空疎な大言壯語と理想主義的感傷とを感じさせるだけのものになつて了つてゐること、作品全體に抽象的な思念や概念的な議論の多過ぎることとは、一番大きな缺點になつてゐる。併し二十歲前後の青年の作であることを考慮に入れるならば、この作の持つ缺點は十分に首肯されるであらう。而してブルジョア的理想主義が行き詰りかゝつて、當然新しい屈折が必要とされた大正後半期初頭に、上記の如きやゝ進歩的な理想主義を、通俗味の多い形式に結びつけて、且つは俚耳に入り易い抽象的談理を情熱的に强調したことが成功の因であつたのであらう。この書はその第二・三部の如き、當時としては滅多に見られない初版に、それぞれ二萬部づつを刷つたといふ程の賣行きを示した。それだけ同じ傾向形式の作品を多く作り出させる機運を作つた譯で、この書はその作品としての價値よりも、寧ろさうした歷史的價値に、より多くのものを有つたものと云ふことが出來る。【附記】この小說は、初め五六百枚で完結の豫定であつたが、後、豫定を變へ、三部作とする考で第一部を完成出版したが、第二・三部とも壓倒的な好評を得たので、更に稿を繼いだが、第四部は未完成に終つた。作品としても第一部が最も勝れてゐる。なほ本書の出版に就いては生田長江の力に負ふ所が多い。

【參考】大正文學十四講 宮島新三郎　（片岡）

痴人の愛（ちじんのあい）

小說【作者】谷崎潤一郎【發表】大正十三年三月から同十四年七月までの間に、大阪朝日新聞及び雜誌「女性」所載。【刊行】大正十四年、改造社。谷崎潤一郎全集第二卷所收。

【梗概】河合讓治は、眞面目ではあるが情痴に餓い而も金に不自由のない人物である。彼はナオミ（奈緒美）といふ少女のあどけなさと異國的な顏つきに興味を覺え、やがては妻にする心組みで、理想的な女に育て上げようとして、贅澤に、思ひ切つてハイカラに育てていつた。かうして彼女は近代型の娘に成熟するに伴れ、その日本人離れのした肉體の美しさに讓治は益々魅力を感じ、彼女の言ひなりに唯々として從つていつた。同時にナオミの周圍には、多くの異性が集つて來た。が、讓治は彼女を束縛するやうな事はなく、女優か混血兒かと人から言はれたりするのを寧ろ得意に感じさへした。ナオミは彼女に近づいて來る若い男達の間で思ひのまゝに振舞つた。其處には不良少年がゐた。外國人がゐた。彼女はその身内に眠つてゐた娼婦性が、活々と眼覺めて來ると共に、讓治に對するヒステリックな強情も嶮しくなつて來た。やがてナオミは彼女の父であり兄であり、そして夫である讓治を眼中に置かなくなり、いつか彼の眼を盜んで淫蕩な生活に浸るやうになつた。そこで彼女を取卷く青年達との不倫な關係が知れて、一悶着あつたのを機會に、讓治は從來の放縱な生活を建て直さうとしたが、それも彼女の反對で崩れてしまつた。ところが丁度その前後に彼女の不行跡が暴れて、讓治と衝突したことから、ナオミは家を飛び出してしまつた。讓治は、すべてを犧牲にして狂氣の如く女の跡を追ひ求めた。勝ち誇つた彼女は間もなく彼の前に再び姿を現はし、全身から發散する官能の薫りによつて彼を誘惑した。彼女の言葉は、彼にとつて命令的であつた。その壓倒的な媚態の下に彼は無條件に跪かせられた。そしてそれから後の讓治は、全くナオミに征服され切つた生活を送つてゐる。

【批評】これは、一種の私小說とも言ふべきもので、筋は割合に單純であるが、着想に作者獨特の趣があつて、愛慾の奴隷としての主人公の病的なまでに異常な情念が、妖麗な女性の肉體の總てから放射されるリズミカルな肉感的芳香の下に惱まされながらも、なほそれから脫し得ずに引摺られてゆく有樣が歷々と描き出されてゐる。殊に讓治がナオミに引き付けられて次第に深みに陷つてゆく過程が、微細な局所にまで觸れつつなだらかに述べられてゐる。同時に又、それだけナオミといふ性的方面に解放された近代女性の一典型としての風姿が明かに物語られてゐる。彼女は無思想な代り、感覺的に濃厚な魅惑を持つ明朗な現代女性の日本文學上に現はれた顯著な先驅である。其處には彼女を中心に、全篇に亙つて、性的・感覺的な近代味が盛り込まれてゐる。この作品の特色は、さうした雰圍氣から醸成されてゐる官能の薫りが、强く漂つてゐることであり、生活遊戲としての主人公等の生活の中に、單なる遊戲以上の切實さを感じさせること、卽ち彼等自身、生活の藝術化を具現してゐることであり、これを具體的に言へば、女主人公の肉體を通して官能の美しさを歌つてゐることである。（藤森）

遲塚麗水（ちづかれいすい）

小說家・紀行家・新聞記者【本名】金太郎【別號】紫濤仙・蹄破仙、併讀松白【閱歷】明治元年十二月二十九日駿河沼津町小敷訪に生る。父綸三（後に保）は、幕臣であつた。明治八年上京、湯島學校・櫻池學校に學ぶ。この頃から幸田露伴と相知つた。十六年父の死と共に具に貧苦を味ひ、一時新聞賣子となつた事もある。その間獨學詩文英書を獨學した。十七年菊池松軒の塾に入つた（漢學）。翌年教員試驗に及第して小學教員となつたが、更に遞信省屬員に轉じ、二十二年に及んだ。この年「風流佛」の發刊が緣となつて露伴と親交を溫めたが、露伴から勸められて初めて小說を書いた。「新佐世姫」（讀賣新聞所載）がこれである。二十三年露伴を介して森田思軒と知り、思軒の紹介で報知新聞社に入つた。同年「歸省」（別項）の一篇を發表して名聲を得た。二十七年日淸戰役には從軍記者として渡鮮。同年十二月都新聞社に入り、社會部長・理事を歷て現に同社の編輯顧問である。大正三年冬支那山東に遊び、十五年三月再び渡支、揚子江岸を上り、三峽を經、重慶から成都に入り七月歸朝。昭和二年三月より七月まで南洋諸島に遊歷、同四年四月から七月にわたり滿鮮蒙古を漫遊した。【著作】（小說）青板碑○半月城鍛鬼○巨人石○蝦夷大王○南蠻大王○月夜鵜○照日の松○大和武士○さんざ時雨○名馬小輝○白菊御殿○紅蓮白蓮○金剛簿○氷柱越○黄眉傪。外數十篇（紀行）歸省（別項）○不二の高根○蹄分衣○ふところ硯○陣中日記○日本道中記○山水供養○山東遍路○新入獨記○南洋に遊びて等。【批評】麗水の小說は、その傑れた作に至ると紅・露に迫るものがあり、文章の美と浪漫的雰圍氣で讀む者を魅する。だが虛心に見ると、その小說は終にその紀行文に及ばない。明治の紀行文學は麗水の筆によつて詩の域にまで達した。彼はその先驅者であり大成者の一人であつた。麗水の文學史上の地位は、小說家としてよりも紀行文學家として定まるであらう。（篠田（泉））

千瀨川一代記（ちせがわいちだいき）

合卷　六冊合二冊前後二卷【作者】柳亭種彥【畫工】前卷歌川國貞、後卷歌川貞繁【刊行】文政二年、丸文板。成稿は前々年、文化十四年春の由、序文に見ゆ。【題材】安永七年刊の酒落本、田螺金魚作の「契情買虎之卷」（別項）を原據としてゐる。序文に、「何もさまの御存のかの虎の卷の威をかりて」と見えてゐる。柱も「とらの卷」となつてゐる。

【梗概】（前卷）武藏の國に雌雄の白鹿がゐたのを、獵師梁作が銃殺する事を發端とする。その鹿の怨念が當時武家奉公してゐた梁作の娘八重咲及びその戀人小姓花澤鳳次郎に憑りうつり、共に手を携へて主家を出奔させる。二人が梁作の家に往く途中、賊柴髭の巾子藏等に襲はれ、鳳次郎と別れ別れになつた八重咲は、偶然父に救はれる。その時、梁作が巾子藏の手下を銃殺したが、その銃聲に驚いて、鳳次郎の體内に宿つてゐた鹿の怨念が離れ去つたので、鳳次郎は正氣に復り、前非を悔いて直ちに主家に歸參した。さうと知らない八重咲は、鳳次郎は死んだものとのみ思つてゐる。間もなく梁作が病氣となる。その療養のために、八重咲は身賣りして、鎌倉化粧坂伏見屋の千瀨川太夫となる。しかし鳳次郎と、また病死した父の菩提のために、ただ座敷のみを勤める。或る夜、自害しようとするのを遊客五嶋のために止められ、さうすることが却つて鳳次郎の意に背く理を意見される。二人はいつか深い仲となる。これも鹿の怨念のなすところであつた。五嶋とは、鎌倉の絹商人五大屋實右衞門の一子嶋之助のことであるが、これ以來實直な性質が一變して、遊蕩三昧に身を持ち崩し、つひに勘當となる。その借金やら、またもとの賊巾子藏、今は遊客として通ひつづけてゐる桐自滿軍次が、千瀨川に振りつけられてゐる妬みやらで、五嶋は桶伏の刑に處せられることになつた。五嶋には許嫁があつた。浪人澤瀨丹太夫の娘小梅である。これは五嶋に知らせずに、父實右衞門が懇望してゐたのである。丹太夫は實右衞門を桶伏の前に伴ひ來て、中にゐる五嶋のために金を貸して吳れと賴む。實右衞門は外の事ならともかく、勘當した伜のためには貸す譯にはゆかぬと斷る。丹太夫は義理のために、必ず五嶋を救はうと言ひ切る。その下心には、娘小梅に身賣りをさせる覺悟がある。それを對手に告げなかつた。實右衞門が貸金を拒絕したのにも深い理由があつた。もと實右衞門は前主實右衞門に事へた番頭であつた。前主は一子貫太郎の放蕩を怒つて勘當し、番頭の錢助を妹に添はせ、跡目に据ゑて實右衞門の名を名乘らせたのである。かういふ次第であるから、實右衞門はわが實子をして主家に疵つけさせては濟まぬと、棄てて顧みないのである。しかも、その本心を丹太夫に語らなかつた。（後卷）丹太夫は小梅を大磯の藝子に賣つて、その金で五嶋の借金を償ふ。遊女屋の亭主の俠氣ゆゑに、その金も必要でなかつたが、丹太夫は義理を重んじて、無理にも請取らせる。しかも、救はれた五嶋は、その金の出所を知らないだけに、却つて手代丁助が武家に金を奪はれたことから邪推して、丁助もろとも丹太夫を疑つてゐる。千瀨川もまた五嶋を救ふために大磯に住みかへて、今虎御前と呼ばれて嬌名が高かつた。そこへ、五嶋が來て逢つた時、また桐自滿の手にかゝつて縫傷する。それを虎の馴染客夢蜂が助ける。夢蜂とは夢野屋蜂兵衞であるが、實は勘當後奮發して、京で身代を立てた貫太郎のことである。こゝで、五嶋はもとの千代見屋の仲居、今は大磯に住みかへてゐる歌仙の計らひで、はじめて、許婚の小梅、卽ち藝子かほるに逢つて、丹太夫の金の出所を知つた。この歌仙は、もと丹太夫の家に奉公して小梅のお附となつてゐた女であつた。そこへ、丹太夫が丁助を伴つて來る。五嶋は丁助とともに、丹太夫を疑つたことを陳謝する。また實右衞門も來合はせて、丹太夫に本心を語る。貫太郎は實右衞門に對面して、五嶋の勘當赦免の計らひをする。さういふところへ、鳳次郎も來て、桐自滿に縄をかける。桐自滿は巾子藏時代の舊惡の外に、丁助の金をも奪つたのである。千瀨川は鳳次郎の生存を知つて宿運を悟り、また小梅に對する義理を思つて剃髮する。鹿

の執念全く離れ去つて、靜かに念佛三昧に日を暮らすこととなつた。

【構想】この作は田螺金魚の洒落本「契情買虎之卷」（別項）の輪廓を藉りて筋を立ててゐる。その薄倖の太夫瀬川を千瀬川とし、瀬川の馴染客五郷を五鴨とした。尤も瀬川を無理から身請けした桐山と、瀬川を欺いて拉れ出して慘殺した桐山の僕軍次とを、一人のうへに合せて、桐自滿軍次としたのである。その「虎之卷」は、もと鳥山檢校が松葉屋の太夫を身請けしたといふ有名な事實を潤色したものであるが、種彥は殆どその原事實に介意することなく、或る意圖の下にこの作の飜案を試みたのである。種彥の一つの意圖は、原作に見る耽溺または殺人の醜さ、瀬川の一念が幽靈となつて出現するいたましさを避けることにあつた。故にこの作では、わづかに鼬の怨念といふ事とし、また事件の葛藤も、たとへば丹太夫に對する金の出所の疑ひも、實右衞門に對する父の愛を缺くとの憎しみも、皆本心を知らぬ誤解から出づることであつて、篇中桐自滿以外一人の惡意がなく、また桐自滿の手下の死以外殺人の一事項がないのは、種彥の用意であつた。この事は篇中に於ても、作者の言葉として聊か言ひ漏してゐる。その結果參據といふ損役を設けて原作と全く違つためでたい結末を告げさせたのである。種彥の第二の意圖は、原作にない義理を加味する事であつた。即ち丹太夫が武士として守る義理、實右衞門が故主に對する義理である。事件としては、種佚の前の二人の對談の一節が、その焦點をなしてゐる。種彥は、この一節の大略を近松の作「山崎與次兵衞壽門松」の猪要の段から轉用してゐる。しかし、種彥はその原作以上に、義理を重く書き現はしてゐる。この作では、吉原を化粧坂とし、深川を大磯としてゐるが、これはその頃の戲作の常であるが、千瀬川を大磯に住みかへさせて、虎といふ名で呼ばせることに於て、原作「虎之卷」との絲を重ねさせるほどの事は、必ずしも種彥の意圖の主要なものでない。彼一流の細かい技巧の一つと數へて置けばよい。（山口）

知足（ちそく）　俳人【姓名】下里吉親（男蝶羽の時より下郷と改む）。通稱、初め三五郎、後勘兵衞。商號千代倉【號】寂照庵・蝸廬亭【生歿】寬永十七年生れ、寶永元年（二三六四）四月十三日歿。享年六十五【法名】知足庵寂照湛然居士【墓所】鳴海驛東細根山墓地【系譜】男蝶羽は通稱二郎太夫、習習軒順宗風和居士と云ひ、寬保元年十一月十二日（六十五）歿。二男蝸世は通稱次郎八、三代目を嗣ぎ、藏六園鐵叟道肝居士と云ひ、明和元年九月十八日（七十七）歿。四代目如羽（後常和）は、天明五年二月二日（六十二）歿。弟の蝶羅は分家し、安永五年五月六日（五十四）歿。五代目學海、六代目傳芳、七代目葆光、八代目咫尺以下連綿として今日に及んでゐる。【俳系】松尾芭蕉門。【閱歷】尾張鳴海の酒造家である。延寶五年頃既に談林俳諧に入つてゐたが、貞享四年冬「芳野紀行」の旅の芭蕉を、その家に留めて親しく教を受けた。芭蕉は、この旅行に出る時の吟「旅人と我名よばれん初時雨」の句に、謠曲「梅ヶ枝」の一節を節附のまゝ附して、後から知足へ送つてゐる（千鳥掛・素龍子）。かくて知足は鳴海の中心俳人となり、尾張蕉風の開拓に與つて力あつた。母水參、子辰之助、女つね、孫女しゆん、蝶羽妻等一家揃つて句に遊んだ。芭蕉も「此所は名古屋・熱田に近く、桑名・大垣へも亦た遠からず、千鳥がけに行通ひて幾生を踏らん」（千鳥掛序）と云つた位、この地方に蕉風を弘通させるに好都合の足だまりで、上方への往返には屢々立ち寄つた。こんな關係から、鳴海には知足を中心として蕉門俳人が多く、その中、知足と菐言（ぼくげん）・安信・自笑・如風・重辰が鳴海六俳仙と稱せられる。著作に、「千鳥掛」（別項）がある。

【參考】いらこの雪（知足五十回忌、蝶羽十三回忌集）下郷蝶羅 ○合歡のいびき 下郷蝶羅 ○俳家奇人談 竹内玄々一 ○蕉門諸生全傳 遠藤曰人 ○俳林小傳 中村光久 ○芭蕉翁春秋 中島秋擧 ○俳諧人物便覽 三浦若海 ○蕉門名家句集（萩原蘿月）○千代倉一族の俳諧 鶴見雛主（ひなろ三七・八・九和露莊報誌）　（萩原・志田）

千楯（ちたて）　國學者【姓】城戶（きど）【通稱】蛭子屋市右衞門・城戶市・綿次・萬治郎【號】紙魚室・蠹室【生歿】安永七年に生れ、弘化二年（二五〇五）九月二十一日歿す。享年六十八。【墓所】京都黑谷【閱歷】京都の人で、室町錦小路で書肆を營んでゐた。蛭子屋市右衞門・城戶市等は商人としての通稱である。業務の傍ら久老及び宣長について和歌を學び、後、歌學者として一家を成し、子弟に敎授してゐた。【著書】和歌布留の山ぶみ四卷四冊（大江廣海の序は文政七年十二月刊。詠歌の參考書で、先づ題を擧げ、用語を纂集し作例を示してある）○雅言通載抄四卷四冊（文久元年九月刊。國學雜種の「雅語通載」を拔萃したもので雅語の辭書である）○紙魚室雜記二卷（日本國粹大成第一期卷一に收む。讀家の考說、諸家の談話の筆記、諸書の拔萃等であるが、歌學に關するもの最も多く、中には國語に關するものもある）○萬郷備能匠道一冊（文化十三年十一月本居大平の序。藤井高尚の序もある。刊。初學者のために國學の大要を記したもの）○勅撰和歌初句類聚四卷（天保十一年成る。勅撰歌集の簡單な索引）○記紀萬葉類語集二十卷（記紀萬葉の語の詳しい索引）（篠田）

父歸る（ちちかへる）　戲曲　一幕【作者】菊池寬【發表】大正六年一月、「新思潮」。【刊行】戲曲集「父歸る」、菊池寬戲曲集。その他多くの選集に收められてゐる。【初演】大正九年十月東京新富座。市川猿之助等。

【梗概】黑田賢一郎の父親は、二十年前、三人の子と母とを捨てて情婦と共に出奔して了つた。元々彼は入婿で、母方に相當あつた小金も、その道樂のために消費して了つてゐたので、母子は途方にくれ、築港に身を投げたのを救はれると云つた始末であつた。その後長男賢一郎のあらゆる苦勞と努力のお蔭で、一家は細々ながらも安らかに暮してゐた。次男と妹も中等學校を卒業させてゐた。一日、賢一郎が役所から歸つてくると、續いて歸つて來た小學教員をしてゐる弟が、父の舊友であつた校長が町でどうも彼等の父親らしい人を見かけたといふ噂をする。妹は、見慣れぬ老人が家の前で覗いてゐたなどといふので、怪訝に思ふ間もなく、表の戶があいて入つて來たのは、矢張り父親その人であつた。母親は流石に喜びをかくし切れず父親を迎へる。弟や妹も挨拶する。父親も今はいかにもうらぶれた姿で、賢一郎に歸つて來たから賴むといふ。が、その時見向きもしなかつた賢一郎は語氣鋭く、自分達に父親はない。一家が今生きてゐるのは皆自分の力だ。父親は既に二十年父親としての權利を放棄して了つたのだと言つてはねつける。母や弟妹達が宥めたり哀願したりしても斷乎としてきかない。これを

きいた父親は思はず、昔の親の威光をもつて怒りはするが、一々胸に響く言葉に、遂に悄然として立ち去つて了ふ。が、流石に肉親の愛とうらぶれて泊りの金さへもたぬ父を思うて、弟と共に跡を追ふ。

【批評】作者の最も初期の一幕物であるが、戲曲形式の緊密さ、臺詞の切實さ、一絲のゆるみもなく犇々と人の肺腑を刺るの感があり、彼の作中でも代表的の傑作である。初演の時の感銘は異常なもので、ために日本創作劇勃興の最初の機運を作つたといはれる歷史的のものである。その後澤田等によつて、幾回となく演じられた。（關口）

竹居清事（ちくきよせいじ）　詩文集【著者】翱之慧鳳（號竹居子）【成立】元は「竹居清事」と「竹居西遊集」との二部があつたのであるが、文化の頃に、僧慧周が「竹居清事」の名のもとに、二本を合併分類したもので、もと「竹居清事」は文が多くして詩が少く、「西遊集」は詩が多くして文が少かつた。慧周は二書を合併し、詩は詩、文は文と分類して、閱覽の便を期したと云つてゐる。「竹居清事」はその自序によれば、「前來詩文爲不少也、然而只以恐其不可足取之、遂且不敢付之梓焉、雖間有之、或出於朋故職遊戲謔之餘」と云つてゐる。これによれば、なほ多くの詩文のあつた事が想像される。本書を編したのは晩年になり自ら感ずる所があつたものらしく、末に乙亥孟夏日、竹居子とある。乙亥は康正元年であらう。守黑子即ち明の前監察御史張式之の跋がある。即ち「舊人合偶帶竹居集、舐得樓船萬丈光、示我桐同刷出匣」といつてゐる。それは著者の友人[illegible]が、寶德三年遣明使の船に乘りて渡明した時に、この書を携へて行き、張式之に見せたものである。「西遊集」は、著者が寬正五年に細川勝元の意を承けて、周防に游んだ時のものである。九淵龍睟・村庵靈彥・一條兼良等の寬正六年の序があり、景徐周麟の跋がある。一條兼良の序に、保壽寺の惟參が、大に翱之を崇敬し、この集を明人に紹介せんと欲したと云つてゐる。【解說】この集は五言古詩・七言律詩・五言絕句・七言絕句・贊・附載・序・論・記・說・題跋・對・銘・祭文・行狀・書を順次に分類收載してゐる。それで友人知人との交遊を見るもの多く、翱之が渡明する時に和した七言律詩、これを送つた序、保壽寺の惟參に寄せた詩等も見られる。論には、德政論一篇が收められてゐる。この論は嘉吉元年九月、將軍足利義政が天下に德政を布いた時に草したものである。行狀には東福寺聖一國師の行實等が收められてゐる。守黑子の「竹居清事」の跋、村庵靈彥・一條兼良の「西遊集」の序を見ても、この集の價値が窺はれる。（鷲尾）

秩都紀南子（ちつときなんし）　「平秩東作」を見よ。

池亭記（ちていき）　漢文隨筆【作者】慶滋保胤【成立】末に、「天元五載孟冬十月、家主保胤自作自書」とある。【諸本】本朝文粹卷十二所收。【解說】外に、前中書王兼明親王の「池亭記」もあるが、短文で、從來注目せられなかつた。保胤の「池亭記」が注意せられて來たのは、「方丈記」との關係を云々せられてからである。即ち「方丈記」の結構は本書の摸倣であるといふ（方丈記參照）。保胤の池亭は「拾芥抄」の諸名所部に據ると、「六條坊門南、町尻東隅、保胤宅云々」と見えてゐる。內容を見るに、二十餘年間東西兩京を見るに西京の荒廢は天爲であつて人爲ではない。東京の四條より北は東北も西北も人口は稠密である。貧富の者、共に住んでゐる。併し卑者にして富家の傍にゐる者は高笑もならず、進退常に懼れ、烏雀が鷲鷹に近づいたやうなものである。又勢家に壓倒せられて居宅を離れる者もある。鴨川は水害が多くて、その邊には耕作には不適當の田畑がある。京內は次第に荒れて、四條・坊城以南は畑となつてゐる、誠に怪しむべきである。余はもと居所がない。土地は高價で買へないが、六條以北に荒地を求めて宅とした。そこに小池を掘り、池西に小堂を建てて阿彌陀佛を安んじ、池東に小書庫を建て、池北の低い家に妻子を住ませた。四季各々趣がある。五十にならうとして初めて小宅を求めたのである。官位は天に任せ、心は山中に在つて佛に歸依してゐる。念佛し讀書し古人を友とし獨り自ら樂しむ。村上帝の應和以來、世人は好んで宏大の邸を建てる。高樓に住み奢侈を盡すとも人生それ幾時か。聖賢は仁義禮法を以て家を造る。故に傾けない。盜賊も犯さない。子孫以て愼めよと言つてゐる。

【附記】兼明親王の「池亭記」（本朝文粹卷十二所載）は、やはり、老後、池のほとりに小亭を營んで、悠々自適する心境を、その亭の內壁に記したといふ小篇である。文末に、「已未之年（天德三年）十二月二日記之」とある。（山岸）

知得齋雜考（ちとくさいざつかう）　隨筆　一卷【著者】村田幸敞【解說】國學上の雜考七篇を收めたもので、（一）皇國御傳之事、（二）聖廟祭家之事、（三）古今三鳥三木之傳之事、（四）鵜歌之事、（五）禮節之事、（六）族旗之事、（七）掛軸之事等これである。末の二篇には挿圖を以て說明に便してゐる。序跋はない。【著者小傳】村田幸敞。號は知得齋、又は芙蓉樓、通稱嘉右衞門。信濃の人。國學者で家に多くの圖書を藏した。弘化四年の震災に罹死したといふ。享年不詳。著述に「芙蓉樓讀抄」「今人錄」「書字彙纂」等があるが、今散逸して傳はらぬ。（和田）

千鳥掛（ちどりがけ）　俳諧集　二冊【編者】千代倉知足遺稿、同蝶羽補正【本名】俳諧千鳥掛。內題には上卷に「俳諧千鳥掛集」、下卷に「誹諧知登利懸」とある。【名義】素堂序によると、鳴海の知足亭に芭蕉が泊つてゐた時、芭蕉が「此所は名護屋・熱田に近く、桑名・大垣へもまた遠からず、千鳥がけに行通ひて幾生を送らん」と云つた言葉を知足が覺えてゐて、本書の題號としたのである。【刊行】正德二年か。【諸本】享和三年の「俳諧續七部集」に收められた。元祿名家句集（俳諧文庫）・蕉門俳諧前集（俳書大系）所收。【內容】知足が編輯を完成せずに歿し、男蝶羽が追補完成して出版したもので、正德二年六月素堂の序があつて、この事情を述べ、末尾に蝶羽の「笈銘」があつてその中にもこの事情が述べられてゐる。連句二十四卷（歌仙・歌仙表・三ツ物・附句等）、發句四百三十三、外に「笈銘」一篇を收めてゐる。上卷は冬の發句連句の順に集め、下卷は夏の連句發句、春の發句連句、秋の連句發句の順に集めてあつて、連句は凡て知足生前のもので凡てに知足が加はつて居り、發句には芭蕉歿後の作と思はれるのが少くなく、これ等には蝶羽の追補したものが多いかと思はれる。連句の作者は鳴海俳人が多く、又芭蕉の加はつてゐるものが十一卷ある。發句の作者は貞門談林の人もあつて、廣く新古に亙つてゐる。【價値】貞享頃の芭蕉との交會の作を中心として、知足一代の風交上に得た作を集めたも

のと思はれるので、寧ら知足一代の風交俳諧集の觀がある。一面からは鳴海を中心として尾張に於ける芭蕉を知るに重要なものであると共に、桃羽の追補と相俟つて尾張蕉門を窺ひ得るものである。冬の發句の初めに新古諸家の千鳥の句六十七句を集めてゐるのも、一部千鳥句集の如き面目を持つ。以上の點から蕉門俳諧集の中でも、特色あり價値あるものの一と云へる。（荻原・志田）

茅野蕭々　詩人【本名】儀太郎【閲歷】明治十六年三月、長野縣上諏訪町に生る。同四十一年、東京帝國大學文科大學獨逸文學科卒業。第三高等學校教授に任じ、轉じて慶應義塾大學文學部獨逸文學科主任教授を勤む。初め茅野蕭蕭と號して「明星」に短歌を掲げ、同派歌人中の尤であつた。詩人としても同派の立場に立ち、詩風の獨自的なるものに到らなかつたが、その作風は概して內觀的で、餘りに小心にして自己內訌的であつたが故に、情緒の詩人北原白秋や木下杢太郎のやうに一派の鮮かな詩風を特立するに及ばず、その詩集は一冊も存せず、僅に「リルケ詩抄」一卷の譯集があるのみである。獨逸文學研究家としては、戲曲小說及び詩歌の鑑賞に於て卓れ、戲曲小說類の飜譯もあり、文學史的述作もあるが、最もその特長とする處は抒情詩の鑑賞、リルケ、ショルツ論等にある。（日夏）

千葉龜雄　評論家【閲歷】明治十一年九月、山形縣酒田町に生れた。仙臺第一中學、早稻田大學史學科、外國語學校等をいづれも中途退學し、國民英學會を卒業した。「文庫」「新聲」「日本及日本人」の記者を經て、日本新聞・國民新聞・時事新報・讀賣新聞等の社會部長、讀賣新聞編輯局長、東京日日新聞の學藝部長、編輯顧問を經て、現在、同新聞の學藝課長である。著書は「惱みの近代藝術」「歐洲文藝十二講」等であるが、文學評論は頗る多く、常に歐米の近代文學に親しむと同時に、日本の文學にも眼をはなさないので、すぐれた外國文學の紹介者であると同時に、常に時代の思潮に對して、博大な理解と妥當な見識とをもつて、文藝批評界の指導的地位を保持しつつある。婦人問題に對しても關心淺からず、この方面に於ても多くの評論がある。その他、ジャーナリストとしての長い經驗は、彼の興味と關心を、現代社會のあらゆる問題に注がしめてゐる。又驚くべき多讀家を以て知られてゐる。（平林）

千葉群記　讀本　五卷【作者】爲永春水【畫工】歌川國安【名稱】詳しくは「星月光輝千葉群記」といふ。千葉氏の內亂が忠臣名士群集して星月つひに光輝する、めでたい結末を告げるといふ謂ひである。【刊行】文久元年。

【梗概】享德の頃、その昔兩總に君臨した千葉介常胤十世の孫滿胤は、故あつて家督を弟胤直に讓つて市河に隱棲したが、間もなく胤直その子宣胤相次いで病歿したので、長臣圓城寺胤向は滿胤の子實胤、惟胤に後を繼がせようとし、一族佐原時連は下總馬加の城主馬加輝胤の子康胤を推さうと謀り、こゝに兩派の爭亂が起つた。併し時連は巧に許我公方の加勢を誘うたので、勝は馬加方に歸し、市河は落城して滿胤は自刄し、實胤兄弟は胤向と武石忠審に護られ、河鯉の亘田持助を頼つて城を脫れ、馬加の義臣大須賀高寧の家來畚平によつて武藏多加谷の里に伴はれたが、その夜時連の手先紫尼といふ妖術使に攻められ、實胤は忠著と惟胤は胤向と別々に逃れた。やがて馬加輝胤は許我公方に申し請ひ、その子康胤の名を孝胤と改めて家督に定め、千葉の城に據つて威を振つたが、その歿後奸臣時連は孝胤の妹養貝姫に想を寄せ、孝胤を押し込めて主家を奪はんと企み、紫尼の計を容れて先づ濫川列厚を用ひて忠臣高寧を殺させ、藪坂四滑次、圓留市父子に高寧の子乙女助、小文二を尋ねさせた。併し二人は能く難を遁れて、小文二は老僕以智助を眷卒の許に遣し、乙女助は高寧の靈によつて時連の謀を知つた孝胤の手に救はれ、その內命を受けて武藏に實胤兄弟を尋ねゆく途中、弟に再會したが互に知らず、拜領の鎧櫃の中から實胤の許婚養貝姫が現はれた。

【解說】安政五年十月の撰文の序がある。「總倉大雙紙」「關東古戰錄」、その他の舊記に見える、享德・康正の頃、北總の千葉氏が兩家に分れて爭うた史實に名を藉りて、架空な孝子節婦の物語を作り上げたといふのであるが、構想は寧ろ「南總里見八犬傳」（別項）に倣ひ、それを縮小した觀がある。讀本として本格的な表現を持ち、趣向の變化に隨つて相當な興味を繋いでゐる。初め數編を重ねて大成する企てであつたが、初輯で未完に終つた。（笹野）

千葉胤明　歌人【號】有明子・春擧【出生】元治元年六月十一日佐賀縣久保田に生る。【家系】父は千葉元祐といひ、桂園派の歌人、母は仲子といふ。【閲歷】三歲の時父に死別し、繼母の下に嚴格な敎育を受け、佐賀中學・長崎師範等に學んだが、卒業せずして上京、藩主鍋島邸に寄寓し、佐野常民の紹介にて高崎正風の門に入り和歌を學ぶ。明治二十五年、判任官見習として初めて御歌所に出仕し、次いで錄事となり、同三十七年、參候となり奉行を仰せ付けられ、次いで寄人となり現在に至る。讀書中「大鏡」「伊勢物語」の古寫本は著名である。その歌には、「ありあけの月かげふみて田に畑にゆく人おくる庭鳥のこゑ」の如き優雅の作が多い。（相原）

千引　國學者【姓名】大石氏。初名貞見。通稱傳兵衛・源左衞門。字道和【家號】星巖・野嶋舍【生歿】明和七年江戶本所橫堀に生れ、天保五年（二四九四）九月十三日歿した。享年六十五【法名】千引信士【墓所】芝西應寺町光明山法泉寺【閲歷】父田隣は下野烏山藩士であつたが、故あつて致仕し、江戶に來り本所に住した。千引は幼より歌を好んで冷泉風を慕ひ、又博く古書を讀んで獨習に努めた。後千蔭の門に遊んで名を千引と改め、專ら萬葉の古調に心を委ね、氣韻高い歌を詠んだ。人物樸實、人と爲り謙退辭讓の風があつた。【著書】日中行事略解一卷（文政三年刊。增訂故實叢書所收。禁中日々の行事を書いた「日中行事」（後陽成天皇御撰）に舊記を引いて註解を加へたもの）○大鏡觀短抄○水鏡觀短抄○元言梯○榮華物語抄○榮華物語考續註等。（石村）

千尋日本織　浮世草子　六冊【作者】卷頭にある團粹（團水）の序には、「此全篇をなすものは東武の紳秀法師なりとぞ」とあり、卷末の書肆起牛なるものの跋には、「愛に花洛の隱士湖十高散人集むる六卷」と見えてゐる。紳秀法師と湖十高散人は同人かと思ふと、東武と花洛と居住地が違つてゐる。紳秀も湖十高散人も、如何なる人か知り難い。【刊行】寶永四年【諸本】近世文藝叢書第五所收【解說】卷一は六章、その他は各八章より成る。各章悉く讀み切りの綺物で、計四十

六の說話から出來てゐる。說話の種類は定まらない。古い傳說には小栗判官傳說がある。多くは實際の事實又は巷說を材としたものと思はれる。說話の地域は京都を中心とした近畿地方と、江戶を中心とした東國地方が大多數であり、狀況盛みに關する話、狐狸の怪に關するものが多く、義理又情事に關するものもある。要するに、諸國咄（別項）の系統に屬するものである。叙述描寫は強ち拙とはいへないが、取立つべき秀でた點もない。（藤村）

道俣神　神話【名稱】衢神とも書く。「ちまた」は道股で岐路の義であり、從つて「ちまたのかみ」は、岐路・衢を守護する神を意味する。【本質】岩石崇拜の系統を引いた民間信仰に基く神で、本來、岩石に偉大な力を認め、これに邪靈の侵入を阻止する靈力があるとしたところに、この神の發生本質があるとなす說（次田潤氏「古事記新講」）がある。しかしそれでは何故にこの神が特に岐路を守るとせられるかの理由が分明でない。恐らく船戶神・來那斗神と同じく、自然民族が他者即ち自己が形成してゐる社會集團以外の者共（異民族でも死界の者でも）を、呪力・魔氣の濃厚な存在とし、それ等の侵入し來る要路を、或る超自然的存在の力で守りたいといふ欲求から生れた神であらう。船戶神・來那斗神は、邪靈を阻止する作用力をおのれの名とし、道俣神はこれを阻止する場所を名としてゐるといふ差別はあるが。そしてその超自然的存在をいかなるものに關するかに至つて、或は岩石崇拜が拉し來られ、或は石によつて神の所在を標識する觀念信仰が誘導せられ、或はまた生殖器崇拜が物を言ふのであると思ふ。道饗祭の祝詞に現れる八衢比古・八衢比賣は、民間に信仰せられた道俣神が、公事としての道饗祭に於て、男女對立の二神格に分化したものであらう（この點に關しては「古事記傳」に詳しい）。

【神話梗概】「古事記」に、伊邪那岐命が黃泉國から歸つたあと、穢い國に行つた身の汚れを濯めるために、筑紫の日向の橘小門で禊祓をしたとき、投げ棄てた褌から道俣神が化生したとあり、また若し岐神を「ちまたのかみ」と訓むとするなら、「日本書紀」一書に、伊弉諾尊が、伊弉冊尊によつて遣はされた八つの雷を桃の實で追ひ退けた後、杖を投じて、「自此以還雷不敢來」と揚言したその杖が、ちまたの神であるとなしてゐる。

【解說】褌から道俣神が化生したといふ觀想は、これが股引のやうに左右に岐れてゐるからであり、杖がこの神とせられたのは、旅行と杖との關係から來てゐるのであらう。一體岐路・衢は、旅人にとつて大切な場所ゆゑ、そこを守る神は、その職能の分化過程に於て、屢々旅行を掌る神、旅人を守る神となる。希臘宗敎に於ける岐路神ヘルメス（Hermes）の如き、メキシコ宗敎に於ける岐路神ヤカテクトリ（Yacatecutli）の如き、みな一面に於ては旅行を掌る神、旅人を守る神である。そして旅行に杖は附物ゆゑ、ヘルメス及びヤカテクトリは杖を主要な標徵とし、メキシコ人は、野山に宿を定めると、携へ來つた杖を積み上げて、これに血を灑ぎ、花を捧げ香を焚いて道中の安全を祈つた。日本神話に於て、杖が「ちまた」の神とされたのは、かうした事情から來てゐるのであつて、或る學徒が解したやうに、單に旅行者が杖を岐路に立て、その倒れる方向によつて進路を定めた風習だけに由來してゐるのではあるまい。（松村）

【參考】Keightley, T.: *Classical Mythology.* ‖ Réville, A.: *The Native Religions of Mexico and Peru.* ‖ Spence, L.: *Myths of Mexico and Peru.* ○神代史の研究津田左右吉○日本古語大辭典 松岡靜雄

地名字音轉用例　語學書　一卷一冊【著者】本居宣長【刊行】寬政十二年【諸本】本居宣長全集卷四・增補本居全集卷九所收【內容】地名に宛てた漢字に普通の字音と異なるものを集めて、その轉用した例を類別して擧げたものである。卽ち（一）ウの韻を加行の音に轉じたもの、相模・相樂等。（二）ンの韻をマ行の音に通用したもの、伊參・安曇・南佐等。（三）ンの韻を奈行に通用したもの、信濃・丹波・讚岐等。（四）ンの韻を羅行に轉じたもの、播磨・駿河等。（五）入聲フの韻を同行の音に通用したもの、愛甲・揖保等。（六）入聲ツの韻を同行の音に通用したもの、秩父・伊達等。（七）入聲キの韻を同行の音に通用したもの、色麻・安直。（八）入聲クの韻を同行の音に通用したもの、美作・信樂等。（九）イの韻をヤ行に通用、拜師・愛智等。（一〇）ア行行音を同行に通用、英虞・愛宕等。（一一）カ行音を同行に通用、菊池・感口等。（一二）サ行音を同行に通用、設樂・宿久等。（一三）タ行音を同行に通用、筑紫・安達。（一四）ナ行音を同行に通用、寧樂。（一五）ハ行音を同行に通用、阿拜・多配等。（一六）マ行音を同行に通用、各務・高目等。（一七）ヤ行音を同行に通用、讚治・勇禮等。（一八）ラ行音を同行に通用、等力。（一九）雜の轉用、伯耆・對馬等。（二〇）韻の字を添へたもの、紀伊・由宇等。（二一）字を省けるもの、武藏□、但□馬等。【價値】右の如き例は、後世に字音を訛つたやうに考へられてゐたが、さうでなく初めから字音を轉用したものであることを明かにし、その轉用にも法則がある事を示したものである。これは全然事實に卽したものであるが故に、この調査の結果は、後に著者が豫期しなかつた方面——字音の研究に頗る貴重な資料を與へた。義門の「男信」（別項）、白井寬蔭の「音韻假字用例」（別項）の如き、本書に負ふところ甚だ大なるものがある（尤も、これ等の書は、宣長の音韻に關する論と相反する結論に到達したのであるけれども）。（龜田）

茶をつくる家　戲曲　二幕【作者】松居松葉（松翁）【發表】大正二年十月「演藝畫報」【刊行】後、松葉脚本集に採錄。現代戲曲全集・日本戲曲全集現代篇所收。【初演】大正二年十月、河合武雄一派の公衆劇團によつて帝國劇場に上演。

【梗概】（序幕）茶師、春日井家の臺所。春日井の老父友右衞門は小學校敎師上野良造にすすめられて次男悼造、三男泰男、四男友次郎の三人をそれ〴〵家を出してやつた。長女お花までが七年前に家を出てしまつたが、それも上野の感化であつた。家には長男守之助が父を扶けて茶をつくる家業に勵んでゐる。併し不景氣のためもあつて不振續きである。老父は他所に出てゐる息子達の扶けを求めず、獨力でその挽回に努めてゐる。遂に思案に餘つたか、保險金目當てに焙爐場に火を放つて燒き拂つて了つた。次男悼造は名古屋に女學校を建てる計畫をして、妻三代子を伴つて久し振りで父の家に歸つた。家出してから行方の知れなかつたお花までがふらりと歸つてきた。彼女は東京でタイピストをして成功してゐるといふ。友右衞門は自分で火を放つたこ

どを押し隠し、あくまで放火されたものと言ひ張つて保險金を下げて貰はうとしてゐる。博造はその不心得を諫め、自火として屆けて父の放火の嫌疑を免れさせようと努める。その道理ある勸めをも友右衛門は理解しない。博造は父に頼む金策のあての外れたのは勿論で、自分の持つてゐる資產を一切賣り拂つて沒落する父の家を救はうと決心する。（二幕）春日井家の外庭。博造は妻三代子と一緒に父の家に踏み止まつて、田園生活にかへらうとしたが、その空想が破れかける。三代子は夫に話さず、もとの都會の知人に、新しい職業を夫のために求めた。今まで默つてゐたお花は、自分が友次郎兄に頼んでやつたものと僞はつて、東京の舊主人から二千圓を前借して父の家を救ふ。彼女は實は新橋から藝妓に出てゐたので、今までの生活を蔽うて父の家に歸つたものの、再び身を捨てて父の家を出て行くのである。友次郎は妹の不心得を責めて行かせまいとするが、お花は父や長兄達が事情を知らずに喜んでゐる顏を見返りながら、悄然と出て行つてしまふ。

【批評】この作の書かれた當時の、婦人解放の問題に關する作者の見解がうかがはれる。教育者の博造夫婦にも出來ない犧牲的行爲を、無知な藝妓お花が平氣でやつてのける。而も人にその功を誇る氣もない。弱い無知な女性の強さと犧牲的精神を晴に訴へかけようとしてゐる。舞臺技巧はリアリズムに終始して、一脈の田園情調を漂はせてゐる。お花の性格は河合武雄の藝風にあてて書いたものである。作者の代表作であり、又當時に於ける異色ある作品の一つであつた。（武藤）

茶嗅座頭（ちやかぎざとう）　能狂言【解說】盲檢校の所で、納會講があると云ふので、大勢の檢校、勾當が集つて來る。やがて酒宴が開かれ、惣檢校は平家を語り、菊市は舞を舞ふ。そのうち世上で流行る茶の湯に倣ひ嗅ぎ茶をして嗅ぎ當てようとて菊市に茶を運ばせる。これを見た通りがかりの者が茶の中へ懷中の胡椒を混ぜる。とは知らず皆々嗅ぎ廻し、茶でないとて怒り出す。通りがかりの者は、一層面白がつて檢校たちを打擲するので、盲人共はお互に打合つて喧嘩になるといふ筋。鷺流の外に見當らぬ。盲人慰めの惡戯を種にしたもので、狂言としてはやゝ惡落ちに類するものであるが、盲人慰めの事は月見座頭にも作られてゐる。月見座頭の方は、下京に住む或る勾當が、世上の月見の晩に野へ出て蟲の音を聞いてゐると、上京の者が來あはせ、勾當を相手に酒を酌み交した上、わざと突き當つて散々に引廻して嬲り物にすると云ふのである。月見座頭の方は比較的新しい作のやうで、鷺流のみの狂言ではないが、鷺流では傳右衛門派のみの狂言になつて居り、また「鷺州保ノ御狂言」となつてゐた。「茶嗅座頭」の方は、早く寬正五年の糺河原勸進能にも演ぜられた古い狂言である。その番組には、「茶カギザトウ」と記されてある。（篠田）

著到狀（ちやくたうじやう）　古文書【解說】軍勢の催促に應じて馳せ參じたる時、大將に差出す文書。寄判のことが多い。然る時は、大將がその奧か端或は裏に證判（別項）を加へて下附する。後證のためである。なほ著到狀は公武の諸著等にもある。（伊木）

長井治部丞藏人貞頼、今月廿日馳參于御方候畢、
以此旨可有御披露候、恐惶謹言
元弘三年五月八日　貞頼（裏判）
●御奉行所
承候了（花押）星野番長

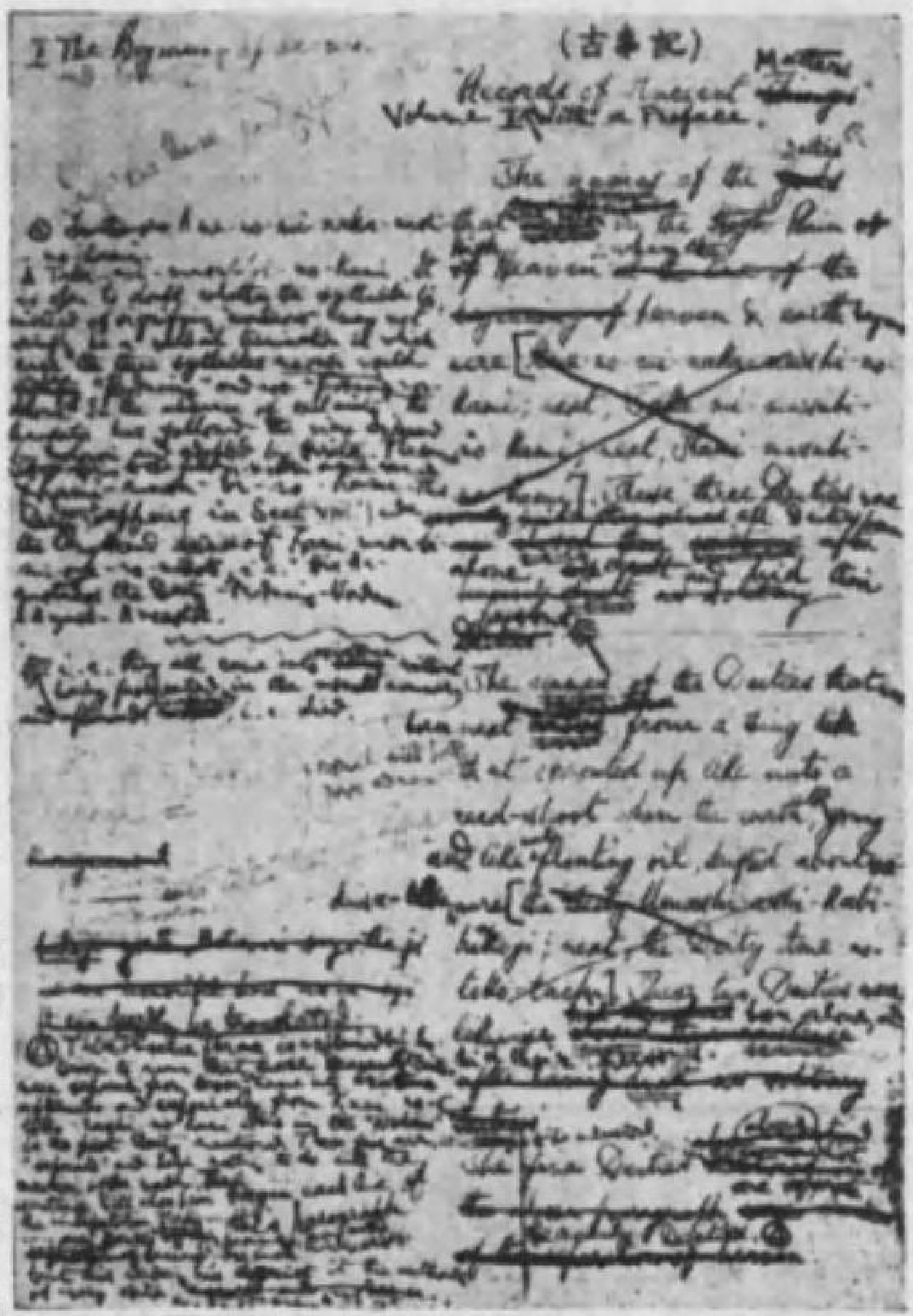
茶傾腹立顔　浮世草子　四冊【作者】西澤一風、書中の署名には西澤與志とあり、又本文中には朝義・朝與志・與志など見ゆる。【刊行】寶永五年。寶永二年六月二十五日と書出しにあれば、成立はその頃か。【解說】廓と茶屋、傾城と茶屋女に關する所謂諸分を書いた書である。地女と遊女との心中不心中の論、起請文のこと、色里詞・紋日・年中行事・流行唄などの諸件が記されてあり、また不案內の茶屋女に騙されて通ひ、多くの金銀を失ひたるもの、金銀を盗みて宥されたと、事實ありもせぬことを記させた一札を取り置きたる客などの說話もある。文學としては見るに足らないが、諸分の記述には參考すべきことがある。（藤村）

茶壺（ちやつぼ）　能狂言【內容】中國のさる法師の下人が、每年の如く栂尾へ茶を購ひに上り、その歸路昆陽野の宿で酒に醉ひ、街道の眞中に寢てゐると、洛中に住む水破が見つけて茶壺を奪ふ。やがて下人が眼を覺し互に爭ふ。そこへ目代が出て來て仔細を尋ねる。下人も水破も同じことを物語る。目代は困つてその茶の藏所を問ふ。下人は舞で答へると、水破も亦見習つて同じやうに舞ふ。目代は二人に連舞を命じ、昔から論ずる物は中からとれと云ふから、身共が取るとて持つて行くので、二人は橫領者やるまいぞと追ひ入る。【影響】水破物の典型で、近年にも、岡村柿紅によつて歌舞伎の所作事に應用されてゐるが、寶永の「銀葉集」、丹前出端の中の大和屋甚兵衛が「輕波排濤論」などもこれに據つたものらしく、「昆陽野の宿の遊女が、槍をしごく〲ともひかへて、今樣は朗詠しほり萩を謠つて、押へて酒を強ひられた」などと見えてゐる。しほり萩の名は、この狂言によつて、世に聞えてゐるが、「白石紳書」に、「催馬樂のふし世に傳はらず。それを後奈良院殿、持明院殿へ御所望有しに、今は、ふし奏に傳はらぬ由を申されしを、何とぞ詮議して御うたひなされとありしに、しほりはぎといふ狂言の謠ひ物は、催馬樂を似せたる由なれば、その節奏に斟酌して謠ひ候由を、子息の持明院申されしなり」などとあつても、狂言小歌の中に未だ見當らないのは不審である。一曲の結末、爭ふものは中から取るの俗諺も、昔からの諺であつたらうが、例證は見付からぬ。いづれ戰國頃に、所謂鷸蚌の爭漁夫の利となるの類と同じく、古くからの俚諺であらう。（篠田）

茶の子餅（ちやのこもち）　噺本　一冊【作者】唐遊侯とある。【名稱】明和九年刊の山風の「鹿の子餅」（別項）や、安永二年刊の江岳庵の「再來餅」や、同年刊の宇津山人菖蒲房の「飛談語」（別項）に因んで、餅の緣語による名稱である。【刊行】安永三年【解說】七十七話より成るが、殆ど新しいもののみである。漸く實演との關係が密接となつて、落語としての體裁を具へて來た。從つて今日寄席で上演する落語の枕に、落ちに用ひられるものが多い。例へば、蟲相撲者が脇差と拍子木とを取り違へて佩き、其家で恥を搔いて我が家へ駈けつける積りで、隣家に入つて隣の女房を叱るのは、「堀の內」にやゝ趣向を變へてはゐるが語られてゐる。また「異見」の、親仁が惣領の値踏み癖と、次男の地口癖とを矯正しようと異見をすれば、惣領は早速、「世話にも御異見五兩堪忍十兩と申せども、此御異見はどう安く賣つても三百兩が物はござります」と述べ、次男も、「兄貴、三百兩とはいけんの鐘か」といふ話も、今日なほ聞く所である。かうした落語に言語上の洒落の多いことが氣附かれるが、深川萬年町の老人なるが故に、聖德太子の千百五十年回忌を、昨日今日のやうに言はせるなど、理窟臭いものもあらはれてゐる。併し一般には新作である所に興味も引かれる。噺本としては注目さるべきものであらう。なほ後編として「いちのもり」が安永四年に出版せられてゐる。（小島）

チャムブレン（Basil Hall Chamberlain）　言語學者【號】王堂（Basil Hall を譯したもの）【生歿】西曆一八五〇年（嘉永三年）十月十八日、英國ポーツマウス（Portsmouth）に生る。昭和七年八十三歲。【閱歷】父は海軍中將であつた。チャムブレンは、七歲のとき、彼を教育するために自らギリシヤ語・ラテン語を學んだといふ賢明にして慈愛深き母を失ひ、八歲から十六歲まで、佛國ヴェルサイユ（Versailles）なる祖母の許に養はれ、こゝの學校に入つて種々の國語を學び、長ずるに及んで文學に志したが、父の希望に從つて十八歲の時、英國の銀行に勤務した。然るに過度の勉強により眼病と神經痛とを得たので、彼は醫師の勸告に從つて遠洋航海の途に上つた。即ち支那茶を積むべき帆船に乘り、喜望峯を經てオーストラリヤ（Australia）に着き、ついで上海に到り、更に米國船に乘つて長崎に來り、次いで橫濱に上陸した。これは西曆一八七三年（明治六年）五月のことで、彼二十四歲の時である。かくて彼は東京に來り、芝西久保廣町の青龍寺に住し、濱松藩士荒木氏に就いて和歌・物語の講義を聽き、次いで鈴木庸正に就いて萬葉・枕草子より始めて謠曲・狂言を聽き、橘東世子（橘守部の嗣子冬照の室）に從つて作歌を學ぶなど、日本文學の研究に精進した。明治七年七月築地海軍兵學寮の教授となり、十三年九月病氣の故を以て辭任歸國した。併し幾ばくもなく來朝し、翌十四年四月再び兵學寮教授となつたが、翌十五年六月辭任退職、その翌年十二月勳五等に叙せられた。十九年、時の文部大臣森有禮によつて文部省に招聘せられ、次いで同年四月。外山正一博士の推薦によつて帝國大學文科大學の教師となり、日本語及び博言學の教授を擔當した。明治二十三年三月許可を得て健康保全のため歸歐した。その歸國に際して、大學から「歐洲に於ける極東殊に日本語學の現況及び將來」に關する調査を囑託せられた。然るに同年九月に至り、病氣の故を以て解職を願ひ出で、同年九月許可せられ、前に囑託せられた調査も終に果すことが出來なかつた。翌二十四年三月七日、東京帝國大學名譽教師の稱號を贈られた。その後も屢々來朝したが、復又四十三年六月來朝して最後の研究旅行を試み、自己の藏書を日本に留むべき處置をなして、前後四十年に近き日本生活の精算をした。翌四十四年三月、彼が多年の功績により勳三等に陞叙せられ、瑞寶章を賜はつた。かくてその月、彼は思ひ出多き日本を永久に去つて、瑞西國ゼネヴァ湖畔に幽棲を求め、こゝに餘生を送り今日に至つてゐる。

【人物】彼はその滯在中常に我が國の各地を旅行し、その足跡は千島の涯から琉球にまで及び、北海道の如き三度も渡り、その都度彼の研究は深さと廣さとを增した。又屢々歐洲に歸り、その都度各地を巡遊して見聞を廣め、殊に明治二十五年（1892）の歸國の際にはマニラの寺院に數十日滯在して、古く我が國に渡來した伴天連の遺書につき調査したこともあつた。彼は又旅行と共に絕えず讀書して、その研究を深めることを怠らなかつた。併しながら彼が壯年の頃害した健康は、再び恢復せず、二六時中病と戰つてゐた。彼は獨・佛・伊・西・露・日・鮮・支・ヘブリウ・希・拉等十餘ケ國語に達し、殊に日本語はその古典的修養からして最も典雅に美しく、談話中屢々古語・雅語が交へ用ひられた程であつた。その日本の古典に關する理解力は、我が國の專門家に比して毫も遜色なく、よく我が古典を消化してゐた。彼は溫厚篤實な好學者で、眞に英國紳士の典型と云ふべきである。彼はその歸國に際し、多年蒐集した王堂文庫の和漢の珍籍稀書一萬一千卷は、これを利用する人稀なる歐洲に持ち歸ることは、學者としてなすべきことにあらずとし、藏書の全部をあげて上田萬年博士に讓り渡した如き、彼の人格を雄辯に物語るものである。健康のために專ら書齋にのみ籠つてゐたので、交友はあまり多くはなかつた。


(古事記)
Records of Ancient Matters

チャムブレン筆「古事記」稿本（佐佐木信綱氏藏）

【業績】彼は二十四歲にして來朝し、六十二歲最後に歸國するまで約四十年間、人世として最も盛んに活動し得る時代を我が國に過し、その間、讀書と研究旅行とにのみ沒頭したので、その業績には見るべきものが多い。〔日本特に國文學の研究とその紹介〕彼の日本文學の研究は、上代より近世に及び、その範圍極めて廣く、殊に「古事記」の英譯最も優れ、アストン（別項）の「日本書紀」、サトウ（別項）の祝詞の飜譯と並び稱され、日本上代文化を歐洲に紹介した最初の權威となつた。殊にその序論の部分には、古代日本の宗教思想に關して述ぶる所多く、神道復興の運動、夢に關する記述、神に關する傳說の評論等、幾多興味ある問題を提出してゐ

る。後この序論の翻譯が、栗田寬・木村正辭・小中村淸矩・飯田武鄕・黑川眞賴・井上賴圀等の批評を加へて、「日本上代史評論」（永山英夫譯）と題して刊行せられ（明治二十一年）、國文學の新研究の興る機運を促進する一原因となつた。その他、萬葉・古今・謠曲等を英譯した「日本上代の詩歌」（明治十三年）、日本に關する百般の記述をなした「日本事情」（明治二十三年）などもあつて、外人にして彼ほど日本語と日本文學に精通し、よく日本を世界に紹介したものは、恐らく他にないであらう。〔日本語學の研究〕彼は初め文部省に招聘せられた時、我が國語の辭書を編纂しようと志したが、故あつて果さなかつた。併し、文部省の命によつて「日本小文典」を編み、明治二十年四月、文部省から刊行した。この書はその前年ロンドン刊行の A Simplified Grammar of the Japanese Language, modern written style. とほぼ同一內容のもので、品詞論・文章論・音韻並に文字論から成り、最後の部分は、當時のローマ字國字論者の主張に從つて、その所說を假名交り書とローマ字書と相對照させてある。その他、前のロンドン版の文典を補訂して理論の部とし、これに會話に必要な語彙・句集・對譯付きの小話集等から成る實用の部を加へ、"A Handbook of colloquial Japanese." と題して明治二十一年ロンドンで刊行した。これ等の文典は、主として英文典に摸したもので、文典の組織としては必ずしも成功したものでなかつたが、西洋人に日本語の組織を知らせるには便宜なものであつた。文部省刊行の「日本小文典」（別項）は國學者にも讀まれ、ために當時の國學者を刺戟し、殊に文部省が外國人に日本語の文典を編せしめたことは、國學者、延いては國家に對する侮辱なりとし、木村正辭は、「日本人日本文法講ずべし」と叫び、谷千生は二十年九月「ビー・エッチ、チャムブレン日本小文典批評」を刊行し、內容はもとより一々の措辭に至るまで、最も嚴重に批評した。彼は東京大學の教師となつてから、間もなく命を受けて北海道及び琉球に到り、その熱心なる研究の結果は、「文科大學紀要」として刊行された「アイノ語研究上より見たる言語・神話・地理」、日本亞細亞協會雜誌に掲載せられた「琉球語文典及び字彙」となつた。而して、前者にあつては、日本內地殊に關東・東北の地名にして、アイヌ語によつて說明せられるもの多きことを論證し、後者にあつては、國語と琉球語との比較研究を試み、兩者は同一母語より出たる姉妹語で、その差異的距離は國語的といふよりも方言的であるとし、兩國語の母韻については短母韻の a・i・u を原始的のものとし、動詞の活用の種類に就いては奈行變格を根源とするなど幾多の創見を示した。以上の外、「枕詞の研究」「文字のしるべ」、方言研究、文體の研究等多方面にわたり、その功績顯著なものがある。〔講義及び指導〕彼は日本の大學に於て、日本語及び博言學の講義を始めて開き、一般言語及び日本語の學術的研究の興るべき基礎を築いた。その薫陶を受けたものには、上田萬年博士・芳賀矢一博士などがあり、明治・大正の國語學・國文學研究は、その一源泉を彼に發してゐると云つてもよい。

【參考】王堂チャムブレン先生を送る 佐佐木信綱（帝國文學一七ノ三）○明治文化に寄與せる歐米人の略傳（明治文化發祥記念誌文明大觀六）○明治初年の英語教育（同上）○我が記憶をたどりて（ジョン・バチラー自敍傳）Fr. von Wenckstern : *Bibliography of Japan.* vol I 1477—1893 ed. 1895. ＝ Nachod, Oskar : *Bibliography of Japan* 1906—1926 vols II. 1928. *Who's who* 1912. （宮）

中央學術雜誌（ちゆうおうがくじゆつざつし） 雜誌 【刊行】明治十八年三月創刊（月二回）、二十一年廢刊。號數未詳。東京專門學校內同攻會雜誌局【解說】東京專門學校（早稻田大學の前身）の講師・得業生・學生、その他同校に緣故ある人々より成る同攻會の機關雜誌、即ち上の同攻會員の研磨した法・理・文三科に亙る論說及び記事を集錄するを主とする。なほ創刊者たる人々が、東京大學の機關誌「東洋學藝雜誌」（別項）を摸倣し、乃至これに對抗する意識のあつたことは事實であらう。小野梓・高田早苗・天野爲之・坪內雄藏の諸氏が主なる寄稿家であつた。內容は政治・經濟・法制等に關するものが過半を占め、理學・文學（哲學・宗教を含む）は從屬的地位に置かれてゐた。從つて全體的には時代の一般文學界と緊密に連絡しても居らず、又目立つてさう大きな影響を與へたとも考へられぬが、今日明治文學を歷史的に見るとき、その發展に對して可なり重要な役割を演じたと思はる〻文獻を若干含んでゐる。例へば、坪內逍遙の「假作物語の變遷」（第二號以下）、「小說神髓拾遺」（第六號）、「班烈多物語」（第九號以下）、「稗史家略傳並に批評」（第二十一號以下）、「文章新論」（第二十八號以下）、「美術論」（第四十五號）、「批評の標準」（第五十八號）の如き、高田早苗の「當世書生氣質の批評」（第二十一號以下）、「佳人之奇遇の批評」（第二十五號以下）の如き、冷々亭主人（二葉亭四迷）の「小說總論」（第二十六號）、「カートコフ氏美術俗解」（第二十八號以下）、島田三郎の「小說談」（第五十號）の如きものを擧げることが出來る。その他、チョーサア、エドマンド・スペンサア、シェークスピヤ等泰西文豪の傳記、アンソニイ・トロロープの「小說論」の紹介、トマス・カーライルの「歷史論」の譯なども注目すべきである。【附記】同名の雜誌が明治二十五年五月に東京專門學校內中央學術雜誌社から發刊されてゐるが、これは右の十八年創刊のものを續刊したのでも再興したのでもなく、二十四年創刊の「同攻會雜誌」を改題したものである。これにも「文苑」欄の如き文藝的分子はあるが、それはほんの附錄で、本體は純然たる政治經濟の學術雜誌であり、從つて文學史的には何の意義も認められない。 〔柳田（泉）〕

中央公論（ちゆうおうこうろん） 雜誌 【解說】初めは「反省會雜誌」と稱し、明治二十年八月、京都から佛教徒の手によつて創刊。後、東京に移され「反省雜誌」と改め、本鄕駒込西片町から發行せられてゐたが、更に三十二年以降「中央公論」と改題した。初めは、禁酒宣傳などを主とし、宗教的な傾向を持つてゐたが、後には主として社會評論、學術思潮方面の雜誌として四十有餘年續刊され、今日に及んでゐる。「反省雜誌」時代から、「中央公論」と改題後の四五年間は、「文藝小觀」「詞藻」の項目の下に詩歌俳句乃至一二の極めて短篇の小說を紹介してゐたに過ぎなかつたが、年一回時に二回の增大號を出して、文藝創作時評の類を附錄として紹介した。これが自然派擡頭前後からは每號必ず創作三四篇を加へるに及び、評論雜誌として許りでなく、文藝紹介の雜誌としても重要な雜誌となり、勢ひ文壇の登龍門を以て目さる〻に至つた。明治の末期から、大正・昭和を通じての最も注目すべき大雜誌である。從つて本誌上で紹介された新篇傑作は、甚だ多數に上つてゐる。なほ本誌に就いて逸することの出來ないのは、編輯者としての大きな功績を殘した瀧田樗陰（大正十四年七月二十七日歿）である。本誌をして斯界に重からしめたのは、一に彼の手腕によるといつても過言ではない。 〔齋藤（昌）〕

中觀月（ちゆうかんげつ） 「觀月」を見よ。

忠義太平記大全（ちゆうぎたいへいきたいぜん） 浮世草子 十二卷【作者】未詳【畫工】吉川盛信【名稱】角書に近士とある。【刊行】享保二年【諸本】德川文藝類聚第一帝實小說所收。【解說】正德元年版「忠義武道播磨石」（別項）を摸作したもので、赤穗四十七士仇討の次第を小說的に記述した浮世草子の一つである。筋は「忠義武道播磨石」と大同小異である。最後に尾花殿屋形之圖（吉良邸圖）、尾花殿內郭之圖、泉成寺圖（泉岳寺圖）、必死一途之衆を記載してあるのも同樣である。 〔小泉〕

忠義武道播磨石（ちゆうぎぶどうはりまいし） 浮世草子 六卷【作者】未詳【別名】武道忠義太平記【刊行】正德元年【諸本】赤穗復讐全集（帝國文庫）所收【解說】赤穗義士復仇の事件を實錄風に綴つたもの。書中の記述は事實と略ぼ大差なく、ただ鎌倉幕府を背景とし、吉良上野介は尾花右門、淺野內匠頭は印南野丹下、大石良雄は大岸由良之介、大野九郞兵衞は相野屋九兵衞等となつてゐる。事件の發端は尾花右門が印南野丹下に駿馬一匹小姓三人の借用を申込み、小姓の一人礒井杉之丞の容色に迷ひ、これを讓り受けんとして拒絕せられたのを遺恨に思ひ、使節饗應の席上、丹下に恥辱を與へたのに始まる。それより丹下の刄傷沙汰となり、由良之助一味が主人の仇を討ち、遂に切腹を賜はるまでを敍し、布置詳細を極めてゐる。事件後九年の作である。行文優雅にして構成に不自然なる痕跡少く、後世義士物の範となつてゐるものが多い。卷末には、尾花屋敷そなへ圖（吉良邸圖）、必死一途之衆（四十七士の名號・役柄・年齡・特性）、泉成寺圖（泉岳寺四十七士墓所圖）等を附してある。「忠義太平記大全」（別項）は本書を摸傚した作。 〔小泉〕

中古歌仙三十六人傳（ちゆうこかせんさんじふろくにんでん） 歌人傳 一卷【著者】未詳【成立】未詳「後六々撰」（別項參照）に、和泉式部以下三十六人の歌人の作十首づつを選抄した以後のもので、一本に「寶治二年五月二十三日寫之。大外記師光借送此本者也」とあるから、寶治以前のものに相違ない。【諸本】群書類從卷六五所收。寫本では宮內省圖書寮藏本その他がある。【解說】和泉式部・相模・惠慶法師・赤染衞門・能因法師・伊勢大輔・曾禰好忠・道命阿闍梨・藤原實方・藤原道信・平定文・清原深養父・大江嘉言・源道濟・道雅卿・增基法師・在原元方・大江千里・公任卿・輔親卿・高遠卿・馬內侍・藤原義孝・紫式部・道綱母・藤原長能・定賴卿・上東門院中將・兼覽王・在原棟梁・文屋康秀・藤原忠房・輔正卿・大江匡衡・安法法師・清少納言の三十六人の歌人の家系・官歷・歿年等を漢文體を主として記したものである。先祖不レ見等のものもいくつかあり、又單に父の名前だけしか擧げてないのもある。歿年等も明記してないのが多く、所々に逸話も挾まれてゐる。かゝる傳記の性質として、どれほど信をおく事が出來るかは問題であるが、また一資料として見るべきもので、「三十六人歌仙傳」（別項）につづく歌人傳として注目される。 〔藤川〕

中古甲冑製作辨（ちゆうこかつちうせいさくべん） 故實 三卷【著者】榊原長俊【刊行】寬政十二年【解說】天文から慶長に至る所謂戰國時代の甲冑の製作を詳かに圖說したもので、上卷には、大意、新調製作心得七箇條、中卷には、兜之品目、兜鉢之大意、鉢之表十一箇條、鉢之裏八箇條、輪之事。下卷には、面具頰當之事、草摺之部、籠手之部、脛當之部、佩楯之部、身甲之事、威毛色目之事、袖之部、喉輪之事等が記されてある。 〔石村〕

中古戲場說（ちゆうこぎじやうせつ） 演劇書 二卷【著者】叶舞里觀主人。傳未詳。但し劇場內部の者でなく、相當身分のあつた者であらう。【成立】文化二年か【諸本】燕石十種（國書刊行會）所收。【解說】上卷は、文化元年中村座壽狂言興行口上寫を卷頭に掲げ、以下、柏莚（二代市川團十郞）・訥子（初代澤村宗十郞）・十町（初代大谷廣次）・薪水（初代坂東彥三郞）・市紅（初代市川團藏）・海丸（四代市川團十郞）・二代十町（二代大谷廣次）・魚樂（初代中村勘五郞）・路考（初代瀨川菊之丞）・仙魚（瀨川菊次郞）・盛府（二代佐野川市松）等の傳記・逸話等を記述してゐるが、他書に見えないものも散見する。下卷は附錄として「耳塵集」「あやめ草」「訥子口傳」中を抄出し（印刷に洩れたのも出すとある）、次に、「戲場古今名簿錄」として、元祿末年以降の俳優の名を列ね、また「役者名家系譜」及び淨瑠璃の系譜、最後に淨瑠璃作者の名簿を掲げてゐる。謂はゆる寶曆期の俳優傳記資料としては有力な價値を有つもの。 〔關田〕

中古雜唱集（ちゆうこざつしやうしふ） 歌謠集 一卷【編者】伴信友【成立】天保十四年【諸本】古謠集・近世文藝叢書第十一所收【內容】「土佐日記」「枕草子」等の古典に見えた舟歌・田歌の類や、神社に傳へ來つた神事歌の類、隨筆雜著に見える田植歌・神樂歌の類を、見聞に從つて集め記したもので、自ら聞書したものや知友より寄せられた報告も二三ある。多く歌詞の傳來や註解に就いて考說を書き加へてゐるのが有益である。天保六年閏七月十五日の信友の自序があり、天保十四年九月の黑川春村の跋文がある。それによると、春村も別に謠ひ物を見聞に從つて書き集めて置いたものがあつたので、信友にその話をすると、信友も自分の編纂したものがあるから、それに增訂して貰ひたいと云ふ事で、この一卷を託された。併し春村の集めて置いたものは、別冊として續集にでもする積り故こゝには一つも加へず、ただ信友の稿本を整理したに止まるとある。即ち天保六年に成つたのを、後、同十四年に春村が整理を加へたものである事が明かである。なほ集中、鎭花祭歌に詳しい信友の考證が附してあり、これは天保六年本書成立以前に成つたものであるが、その後に天保十三年五月の日附を有する書き加へがあり、天保六年以後にも信友は增補を怠らなかつたと見える。【價値】脫漏が多いが、蜀山人の「巷謠編」卷四十一に次いで、この種の書の先鞭をつけたものとして價値がある。殊に信友の自註に多くの價値を見出す。これに「巷謠編」卷四十一や、春村の集めて置いたもの等を增補すれば、明治以前の歌謠集としては、內容の可なり豐富なものが出來るであらう。【類書】田澤仲舒編「雜纂」の卷一と卷二は、唱歌部であつて、信友の稿本に材料を取り、神樂催馬樂や、八丈島歌曲、甲斐白根田植歌、信濃神事歌等を增補し、また仲舒の私案をも書き加へたもので、彼此參照すれば、本文校訂

の上に得る所が多い。（藤田）

中古三十六歌仙 ちゆうこさんじふろくかせん 「歌仙」を見よ。

中古文學 ちゆうこぶんがく 「平安時代文學」を見よ。

中齋 ちゆうさい 儒者【姓名】大鹽後素。字は子起、通稱平八郎【生歿】寛政六年阿波國美馬郡脇新町に生れ、天保八年（二四九七）三月二十六日自殺した。享年四十六【閲歴】祖先は駿河今川氏の臣、平八郎は大阪に出でて大鹽氏の養子となつた。少時より學を好み、尤も王陽明の人と爲りを慕ひ、專らその學を修め、又よく吏務に熟達した。大阪の與力となり、町奉行高井某を輔けて功を立つること多く、その名が一時に聞えたが、後、職を辭して專ら諸生を教授した。天保八年、米價騰貴して餓死する者が多く、これを町奉行に訴へたけれども聽かれず、因つて自らその財を散じて貧民を救恤し、攝津・河内・和泉・播磨等に檄し、貧民を煽動して亂を起さうとし、事成らずして自殺した。【批評】王陽明はその抜本塞源論に於て一個の理想的國家を構成し、現實の社會を改造してこの理想的國家に至らしめん事を志した。中齋も亦陽明とその志を同じうしたのである。故に彼をば直に一種の共産主義の實行者となすのは當らない。【著作】洗心洞劄記三卷〇洗心洞詩文二卷。（佐久）

中洲 ちゆうしう 漢學者【姓名】三島毅。字は遠叔【別號】桐南・綺莊【生歿】天保元年十二月九日、備中窪屋郡中島村に生れ、大正八年五月十二日東京麹町區一番町に歿した。享年九十。【閲歴】年十四にして藩儒山田方谷に學び、これに事ふること九年、學業大に進んだ。去つて伊勢の津藩に遊び、齋藤拙堂の塾に居ること五年、安政四年江戸に遊んで昌平黌に入り、六年初めて板倉侯の聘に應じて松山藩校（有終館）の督學となり、維新の後、司法省判事・大學教授・大審院檢事・同判事・東宮侍講となり、文學博士を授けられ、宮中顧問官に任ぜられた。明治十年二松學舍を一番町に開いて儒學を教授し、在官中と雖も教授を廢せず、四十年の久しきに亙つた。その文は奇趣横生で、構想を以て勝つてゐる。【著作】中洲講話一册〇老子講義一册〇論語講義一册〇中洲文稿十二卷。（佐久）

抽象藝術 ちうしやうげいじゆつ 藝術論（獨）Abstrakt【解說】藝術的表現形式の無對象性を標識とする流派の人々が唱へるところによれば、過去の古典主義藝術をはじめ新印象主義藝術も、個人意識的叙述や具象化を行つたにすぎない。印象派以後のセザンヌ、マチス、といへども、その主題は主知的な自己内部の構造を形象化したものである。併しこれに反して新興像主義と名づくべきモンドリアン、デスブルグ等の主張によれば、藝術は吾々の中にある宇宙的なものの直接的表現である。意識内の個人的なもの、變化するものの表現ではなく、非意識的なものの表現である。意識的相對的なものを通して絶對的なものを表現することであるといふ。かくしてそこに幾何學的形式を通して、宇宙的絶對的觀念を具象化する樣式が生じた。抽象的形式及びそれ等の相互形式の中に、美の基本形式があるとする。ロドチェンコ、ミトリッチュ、アルトマン、モホリ・ナギー、アルプ等この派に屬する。原始藝術の抽象的形式表現に關して美術史家ウオリンゲルは、その著「抽象と感情移入」の中に於て、「原始人は外界自然に對して、不安な感情を有した結果、この不安恐怖からまぬかれて、滿足安心を得るために「生なき」抽象形式、即ち幾何學的表現形式を求めたのである」といつてゐる。【參考】Worringer: *Abstraktion u. Einfühlung.* 〇世界藝術發達史 マーツア（熊澤復六譯）（村田）

中將姫京雛 ちゆうじやうひめきやうびな 脚本 四幕十一場（別に三場）【作者】中村清五郎【名稱】中將姫役者たる本作の主役嵐喜世三郎を上方下りときかせたものであらう。狂言本題簽には、肩書によつて「追善役者揃」と記し、二月三日の中村七三郎命日を偲ばせた。【刊行】狂言本一册。刊記は見えぬが興行と同時であらう。江戸堺町中島屋版。【翻刻】狂言本傳存。元祿歌舞伎傑作集上に所收。【興行】寶永五年三月、江戸中村座上演。

（役割）唐橋少將（水木きく三郎）、鏡の大臣（濱崎源五郎）、梅ヶ枝の内侍（藤村半太夫）、秋山角右衛門（宮崎十四郎）、唐橋宰相（袖崎鶴之助）、行基菩薩（仙石庄助）、藤原廣主（中島三郎四郎）、藤原春時（村山十平次）、久米の八郎（中村傳九郎）、中將姫（嵐喜世三郎）、大膳太郎（宮崎中三郎）、唐橋の大臣（山中平九郎）等。

【題材】中將姫に八百屋お七を加へたが、これは喜世三郎が寶永三年春、大阪嵐座で演じた時、初興行の切がお七であり、二の替りが中將姫であつたに據ると思はれる。從つて脚色の内容にも嵐座の上演が關係があらう。なほ四番目の切に七三郎の最期場を添へる。【梗概】（序幕）（紫宸殿鷄合せの節會）聖武帝の御代、彌生初めの一日、梅ヶ枝内侍と櫻の内侍との鷄合せの場に、鏡の大臣は鷲の如き鷄を持出して、梅ヶ枝に勝負を挑み、わが戀を遂げようと謀つた。併し梅ヶ枝の侍、藤原春時と左近之介とが天に祈り、梅ヶ枝方が勝つて事なきを得た。（住吉社前）梅ヶ枝の汐干の催しに、唐橋の少將と櫻の廣主が伴寧を勸めた。廣主も薄暮に乘じて梅ヶ枝を奪ひ去らうとしたが、少將の家來角右衛門のために邪魔された。而も角右衛門は、兄の敵として廣主に討つたが、廣主は隙を見て逃げ去つた。（内裏歌合の會）行基は梅ヶ枝と唐橋宰相との仲を、春時は弟左近と櫻の内侍との仲を取りもたうと誓つた。この時、鏡の大臣は天子と名乘り、梅ヶ枝を口說き、神器を奪つたのを春時兄弟が危く取戻す。（二幕）（清水寺花見）宰相の弟少將が花見遊覽の折柄、久米の八郎が來て宰相への衆道の媒を頼む。嵯峨野に隱れてゐた中將姫も花を眺めに現はれ、人々を歸した後で自害を計つたのを八郎に留められる。姫は幼い頃、繼母のために雲雀山に害される所を、八郎と春時とに救はれたのであつた。（行基の寺）行基は梅ヶ枝を招き宰相と會はす所に、丑三つ頃中將姫の靈が現はれて、兩人は物狂ほしく見えた。（唐橋館）行基の奏上により、勅許をうけて宰相と梅ヶ枝の婚儀が執り行はれる。こゝへ八郎が姫を連れて人々を驚かせたが、姫はわれから宰相への戀を捨てて、仲に儲けた若を妹梅ヶ枝に託して立ち去る。姫の繼母たる後室は弟大膳と謀り、人々を逐ひ立て家を乘取つた。（三幕）（鏡の大臣館）大膳が梅ヶ枝を殺して後は、大臣は日野大納言の娘雲姫を慕ひ、これを奪つて來ると、大膳のため、梅ヶ枝の怨念は消え去る。（本郷妙圓寺）春時は亂を避けて、宰相を弟とし、小姓吉三郎と名乘らせて妙圓寺に匿く中、本郷八百屋彌右衛門の娘お七とわりなき仲となつた。吉三郎が落した文が、八百屋の下人に拾はれ

て、お七は引取られ、座敷牢に入れられる。（八百屋内）お七は、實は人買から買取られた中將姫であつて、彌右衛門が密に戀して口說いてゐたが、吉三郎との仲をせいた爲め、お七に刺された。駈付けたのは宰相と八郎で、一人の檢視は春時、他の一人は角右衛門であり、姫のお七は救はれたが、八百屋の下人實は大膳方の櫻の廣主と名乘り、人々と斬り結ぶ。（墓所）大膳と鏡の大臣とは改心の上出家を遂げ、大膳が藥師を祈ると、息絶えてゐた春時とその弟左近は蘇り、その身は虚空に失せた。（四幕）（御堂）唐橋・横佩兩家も治まり、中將姫は遁世し、御堂建立の日、說法の場に歌舞伎役者が封じ文を捧げて回向を頼む。姫がこれをあけると、「心境院經實日榮俗名中村七三郎」とある。姫は高座から、これより七三郎追善と述べる。（役者揃）（幾代餅舞臺面）曾我の十郎が出す幾世餅の店に、團三郎と朝比奈の女房とが來た。この時急に、十郎は目まひがして内に入り、芝居は中止になる。棧敷から、京で七三郎に會つた八百屋のたつが現はれた。（雜司ヶ谷鬼子母神）たつと七三郎女房熊と跣足參りの祈願。（七三郎宅）七三郎はたつに淺間を語はせたが、病勢いよ〳〵重く、我が子七十郎と勘三郎とを傳九郎に賴んで瞑目した。

【解說】中將姫の件は寧ろ簡單で、その背景ともいはるべき唐橋家の騷動が重きをなした。唐橋宰相と相思の仲の、中將姫の妹梅ヶ枝は、鏡の大臣や廣主にも想はれ、終に怨靈としても働き、宰相は又、久米八郎から衆道の戀を懸けられる等、頗る複雜な關係が取結ばれ、從つて事件は極めて錯綜して見える。そこに騷動物としての興を覘つたのではあらうが、主な題材たるべき中將姫と宰相との關係に至つては、雲雀山事件の後日談の形式ではあるが、殆ど筆が省略せられてをり、この點に無意識にではあつたらうが、作の破綻が見られる。併しお家騷動の脚色としては、大阪など上に流行するものよりも遙かに調ひがあり、上作と言へよう。お七二十七回忌を強ひて綴り込んだために、お七實は中將姫、宰相實は吉三郎の如き、江戸狂言一流の時代錯誤を縱橫に示してゐるが、當年の江戸歌舞伎としては當然と認容せられ、寧ろそこに作者の一種の働きをさへ發見せられる。切に七三郎の最期場を事實の儘入れた事は、却つて七三郎の舞臺の最期を知つた觀衆には、追慕の情を深めたであらう。「中將姫」としては、津打治兵衛の「けいせい顔本尊」（別項）の方が整つてゐるが、本作の方が好評を博した。一に嵐喜世三郎に負ふ所大であると思はれる。後世のお七の紋所が封じ文になつたのも、本作による事を種彦も「還魂紙料」に說いてゐる。彼が寶永三年正月大阪嵐三右衛門座「お七歌祭文」に於て、お七役で當てたところから、寶永四年顔見世の江戸下りに際し、喜世三郎に配役して成功を收めたものであらう。かくして、本作は今後の江戸のお七狂言の典據たる位置を占めるに至つた。（けいせい顔本尊參照）（守隨）

中將姫古跡松 ちゆうじやうひめこせきのまつ 「鶊山姫捨松」を見よ。

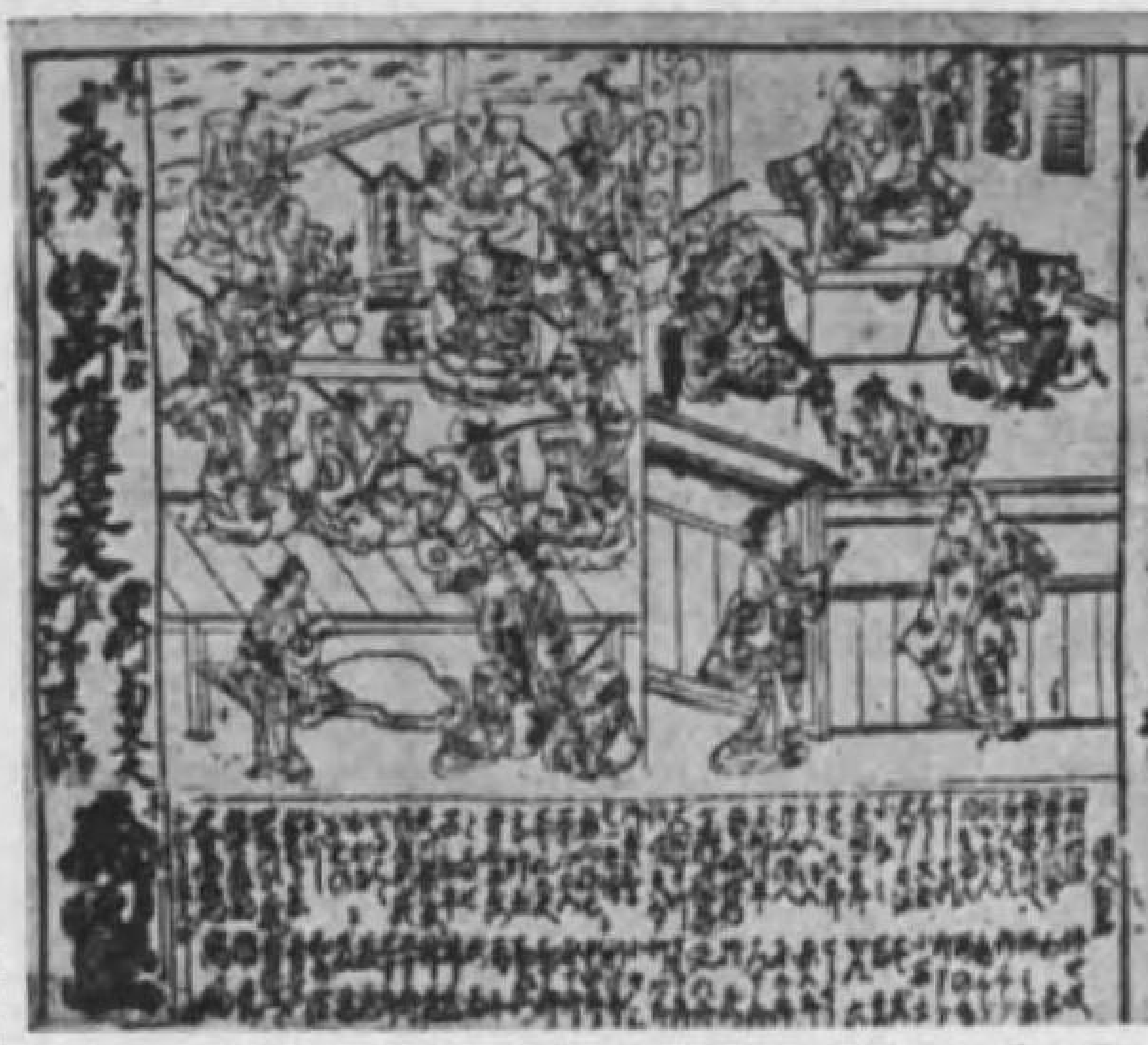
中書王物語 ちゆうしよわうものがたり 物語 一卷【作者】「太平記」に基づいて作つた由の奧書があつて、「沙彌御判」とあるにより一條兼良の作かと言はれるが詳かでない。【成立】文明十五年以前【諸本】古板本なし。兼良筆の本を文明十五年に書寫したとの奧書ある帝國圖書館藏本が室町時代小說集に收められてゐる。【解說】歷史小說。後醍醐天皇の一宮尊良親王と御息所今出川公顯の女との物語。秦武文戀慕傳說で、「太平記」卷十八「春宮還御の事附一宮御息所の事」の文を書き改めたもの。幸若舞曲「新曲」（別項）と同材。【參考】近古小說解題〇室町時代小說集解題（島津）

中津 ちゆうしん 禪僧【俗姓】藤原氏【法諱】中津【法號】絶海【別號】蕉堅道人【生歿】延元元年一月十五日土佐津野に生れ、應永十二年（二〇六五）四月五日歿す。享年七十。【閲歷】中津の母は、惟宗氏の出である。彼は初め天龍寺に入り、當時西芳寺に老を養つてゐた夢窓疎石の下に至つて隨侍してゐた。疎石は深くその才學に感じて、他日必ず叢林の器となるであらう、叢林に入つて大に學問修行せよと云つた。十五歳の時、得度して沙彌となる。後入室して朝夕疎石の膝下に侍して示教を受けた。十六歲で具足戒を受け、天龍寺に在つて一夏百日の間風雨も厭はず、毎日四更の一點坐禪の後、徒跣して法輪寺に詣で、燒香禮拜して專心業に勵んだ。十八歲の時、建仁寺に錫を掛け、義堂周信・龍山德見等に隨侍した。建仁寺東堂放牛光林に才識を認められたが、後間もなく東國に下向して大喜法忻の門を叩いた。東國を出發の時、石室善玖から詩を贈られた。彼が明に渡つたのは三十三歳の時であつた。中竺寺の季潭全室に師事してゐたが、太祖に召されて法要を說き、太祖の勅を受けて詩を獻じ、太祖は和を賜うた。この年歸朝。その後の彼は、天龍寺等に留まつて益々修行を勵んでゐた。この頃伊豫・土佐・讚岐・阿波の太守細川氏の請を容れ、讚岐に赴いて寶冠寺の開山となつた。やがて足利義滿の請を受けて京都に歸り優遇を受けた。幕府の命を受けて再び相國寺に住し、こゝで寂した。後小松天皇、勅して國師の號を賜ふ。【著作】四會語錄二卷〇蕉堅稿（別項）二卷。【參考】翊聖國師年譜〇延寶傳燈錄〇本朝高僧傳。（鷲尾）

忠臣藏 ちゆうしんぐら 歌舞伎・淨瑠璃【名稱】義士劇・義士物ともいふ。「假名手本忠臣藏」（別項）の流行によつて、義士劇一般がその略稱によつて呼ばれるに至つた。【諸本】忠臣藏淨瑠璃集（帝國文庫）・赤穗義士傳（日本戲曲全集）等所收。【沿革】（一）假名手本忠臣藏の發生まで。元祿十五年三月、江戸山村座の「東山榮華舞臺」で、吉良を横山大膳（富澤半三郎）に、内匠頭を小栗判官（生島新五郎）に持込み、刃傷の一幕を演じたと傳へられるのが最初らしい。また同十六年二月同座（通說には中村座）「曙曾我夜討」も暗に義士討入を當込んだが、僅か三日で當局から停止されたといふ。併しこれ等は單に一部を當込んだものに過ぎないが、一篇の戲曲として脚色されたもので最も古いのは、寶永三年五月大阪竹本座上場、近松門左衛門作「碁盤太平記」（別項）であらう。歌舞伎では寶永五年正月京都[illegible]屋座の「福引閏正月」が古い。同七年六月大阪篠塚座上場、吾妻三八作「鬼鹿毛無佐志鐙」は非常に好評を博し、類作を盛んに生んだ。後の義士劇の結構はこの操の作による所が多い。更に並木宗輔等の合作「忠臣金短冊」（別項）には、早野勘平や茶屋場が現れ、「大矢數四十七本」（市村座所演）を經て、「假名手本忠臣藏」の一母胎をなした。（二）假名手本忠臣藏以後。義

士劇は「假名手本忠臣藏」によつて確立され、それ以前の諸作は概ね忘れ去られたが、又その後の新作も本曲の影響を受けないものは殆どないといつてよい。それ等の主なる作を次に擧げる。

【淨瑠璃】難波丸金鷄（寛政九年五月豐竹座、若竹笛躬等作。「忠臣出世櫻」と忠臣藏の後日）○いろは歌義臣の鑒（明和元年閏十二月豐竹座、豐藏主・中邑阿契合作。「假名手本」と「金短冊」）○いろは藏三組盃（安永二年七月竹本座、近松半二作。在來の諸作に據る改作）○忠臣伊呂波實記（同四年七月江戸肥前座、福内鬼外。「假名手本」と「いろは實記」）【歌舞伎】敵討最上民草船（寛政九年閏七月江戸市村座、櫻田治助作。後日に女由良之助）○日本花赤城鑑（明和六年十二月大阪角の芝居、並木五兵衛作。「假名手本」と「忠臣講釋」）○義臣傳讀切講釋（天明八年二月大阪大西芝居、竹本三郎兵衛作。淺井碓木屋の初演）。○いろは假名四十七訓（寛政三年九月角の芝居、奈河七五三助作。「いろは行列」と「四十七本」）○江戸花赤穗鑑（同八年四月江戸桐座、並木五瓶。「赤穗驛電」の補綴）○扇矢數四十七本（同九年三月大阪中の芝居、辰岡萬作作。百姓松平の趣向、平右衛門の忠義）○御攝本忠臣藏（享和三年七月大阪大西芝居、近松徳三作。「殺切」の初演）○いろは歌義臣櫻花（文化三年正月大阪角の芝居、近松徳三作。「赤穗驛電」と「扇矢數」等の義士銘々傳の增補）○新版累七いろは（文政九年六月市村座、二代櫻田治助作。九太夫の切腹、蛇の七段目）○裏表忠臣藏（天保四年三月江戸河原崎座、三升屋二三治作。三段目裏のおかる勘平の道行。諸人參詣）○假名手本忠臣藏（弘化四年三月市村座、三代櫻田治助作。常磐津・清元・長唄・大薩摩の忠臣藏十一段返しの所作事）○假名手本忠臣藏（嘉永二年九月中村座、藤本吉兵衛（三代瀨川如皐）作。村松三之丞の讀劇と廟圖德利錫と十八ヶ條中岡の江戸での初演）○假名手本硯高島（安政五年五月市村座、三代河竹新七（默阿彌）作。赤垣源藏德利の別れ）○忠臣瞎命鷄（萬延元年五月江戸守田座、三代櫻田治助。小山田左衛門の變心）○稽古筆七いろは（慶應三年八月市村座、三代河竹新七作。「いろは四十七譚」の改訂、孤行婦の平右衛門の初演）○四十七刻忠箭計（明治四年十月守田座、三代河竹新七作。忠臣藏十二時の初演）○忠臣藏年中行事（明治十年五月東京春木座、竹柴金作。十二ヶ月の忠臣藏の趣向）○實錄忠臣藏（同二十三年五月、東京歌舞伎座、福地櫻痴作。「土屋主税」が出來た）○芳哉義士譽（同三十四年十月同座、作者同上。討入後義士切腹まで）等。（秋葉）



「假名手本忠臣藏」辻番附（寛政五年五月江戸森田座）

【參考】忠臣藏類聚大成 一鳳（新群書類從第三）○古今四十七大家評註假名手本忠臣藏（古今いろは評林）○「忠臣藏」以前の義士劇 黒木（近世演劇考說）○近世邦樂年表（義太夫之部）○歌舞伎脚本解題 渥美（歌舞伎研究一―二二）○忠臣藏後日のいろいろ 同上（歌舞伎狂言往來）○歌舞伎細見○歌舞伎圖說○花菖蒲いろは連歌の話 一鳳（新群書類從第二）○假名手本忠臣藏に就いて 堀田七郎（岩波講座日本文學）

忠臣藏岡目評判 隨筆一冊【作者】十返舍一九【刊行】享和三年【讀本】「忠臣藏心實論」と題する文政板の改題本がある。なほ、帝國文庫四・赤穗復讐全集（帝國文庫）にも收められてゐる。【内容】竹田出雲の不朽の傑作たる「假名手本忠臣藏」（別項）の、章句の微妙なる部分に對し、時には作者の心中を忖度し、或は批判し、なほ著者が聞き得へた事項を加へ、評釋したものである。一例を擧ぐれば、初段の大序詞「嘉肴有といへども食せざれば其味を知らずとは云々」に對し、「よき肴も食はざれば、其味ひの美なるを知らずと、忠臣太平にあらはれざるの譬をひいて、星の晝見へずと、大星になぞらへたり。これまでを淨瑠璃作者の頭書に、枕文句といふ。發語なる故、歌詞の枕詞といふによるならん」といふやうに說明し、なほ人形の遣ひ方、或は章句と摘出との微妙なる關係にも言及し、淨瑠璃作者の指針としたものである。【價値】評釋としては、本書の價値は高いものではないが、こゝに入れられた淨瑠璃作家達の作に對する考へが知られる。なほ別な意味で、本書の意義を持つてゐることは、一九の傳記に一材料を與へてゐることである。一九が若年の頃、大阪で淨瑠璃作者であつたことは傳へられてゐるが、本書の序文に近松東南が誌した「なには江のあしの假寢に、七とせあまり淹泊して、予が近松の流に遊びし一風士有」の文は、それを裏書してゐる。（小澤）

忠臣藏偏癡氣論 滑稽本二冊【作者】式亭三馬【成立】文化九年【讀本】滑稽本名作集（帝國文庫）所收。【梗概】忠臣藏の滑稽化である。例へば高師直をば、芝居で見る程の嫌味ある顏貌でなく、鎌倉の執事職であるから、博達聰明の士であり、鹽谷判官とても師直がなければ座頭の杖を失つたものである。それに對して音物の少いのは、鹽谷判官が吝嗇であるからだといふ論法で許してゐる。さうして由良之助は純然たるお國侍であるから物事を知らず、かゝる大事の出來したるにも拘らず國にゐたり、殿の短慮を知りながら、この大役を辭退せしめなかつたり、密書を九太夫やおかるに見られたり、手負の九太夫に大事を明かしたり、殿の逮夜に遊興してゐたり、夜討の際雨戸を外す工夫の幼稚さや、天川義平を追從交りに褒めたり、或は義平を試したり、燒香順に不義者の勘平を第二番目にさせたり、七段目でおかるに刀を持たせて緣の下の九太夫を刺させたりなど何れも不始末だらけ、一國の家老の態度とは思はれない。その點から言へば、九太夫は遙に先見の明があり、鷺坂伴内なども師直に對する第一の忠臣で終始一貫した態度である。加古川本藏も表裏ある武士であるが、由良之助より遙かに優れてゐる。又勘平も不始末だらけの男であり、腰元おかると駈落したりする腰拔者であり、人を殺して金錢を奪つた大賊であり、死體を改めず切腹する粗忽者であり、主人拜領の紋付を平服にしてゐる不忠不敬の者であり、且つ縞の財布を何時までも持つてゐた馬鹿律儀者である。といふ風に、忠臣藏にあらはれたあらゆる人物についての評論である。甚だしきは五段目山崎街道に出る猪も前足二本はぶらさがつて居り、後足二本で駈出すのは不思議だなどと言つてゐる。

【構想】物は見方である。議論は如何やうにもつく。忠臣藏の諸人物も忠臣・奸物と、時代の常識から相場は決つてゐるものの、強ひて反對論をしようとすれば、理窟には事缺かない筈である。三馬はこゝに目をつけて、定論のある忠臣藏の諸人物の言動に、強ひて異論を持ち込んで、忠臣を非難し、奸臣を辯護して、これを滑稽化してゐるのである。川柳にもかうした史實などの茶化しがある。本書はさうした川柳風の茶化しを滑稽本に試みたものである。（小澤）

忠臣金短册 淨瑠璃五段 時代物【作者】並木宗輔・小川文助・安田蛙文【角書】小栗判官 横山郡司【名稱】討入の義士が各自姓名を記した金の短册を背中に附けたと本文に見える。【初演】享保十七年十月朔日より豐竹座。（外題年鑑には同十八年とあるが、「忠臣金短册曲虫」の序文によつて訂正する。）【讀本】忠臣藏淨瑠璃集（帝國文庫）・戲曲義士篇前篇（名著文庫）所收。【題材】赤穗義士の件を扱つた。同材の作品中淨瑠璃の先行作は、宇治加賀掾の正本「難波染八花形」（寶永元年か）、「碁盤太平記」（別項）、「鬼鹿毛無佐志鐙」（紀海音作。正德三年十二月豐竹座初演）の三つであらうが、本作は世界を小栗・横山時代に採つたこと、その他「鬼鹿毛無佐志鐙」に負ふところ多く、又「碁盤太平記」の影響も著しい。（忠臣藏參照）

【梗概】（初段）足利政知より勅使饗應を命ぜられた横山郡司信久と、添人を命ぜられた小栗判官兼氏の香についての論爭。これに敗けた横山は、小栗の相役土川兵庫と共に進物の事で小栗を嘲り、進物臺を折るので、小栗は怒つてこれに斬り付けたが、土川に抱き留められて果さず、切腹を命ぜられ、家臣原郷右衞門に國家老大岸由良之助への傳言をなして自刄する。小栗の臣大鷲傳五は駈付けて來て横山の郎黨山縣兵衞を追ひ、名馬鬼鹿毛を組留め、原の命でこれに乘つて國元へ急使に立つ。（二段）元小栗の足輕寺澤七右衞門は女房の連れ子おやつが身を賣つた金を得て復仇の仲間入りに出立する。早野勘平は女房歌木を横山の腰元に入り込ませ、自身は肴屋となつて、共に横山に迫つたが、用意の鐵の網に包まれて危い所を奴樂内となつて奉公した寺澤の計で逃れる。歌木は深傷で絕命する。（三段）大岸由良之助以下の義士等が瑞祥院に集つて連判。その際大岸の伜力彌もこれに加はらうと父に願ふが許されず、義士等のとりなしや、母を思ひ切つた旨を明かにしたので許される。横山の臣太田武太夫は、實の娘おやつ（寺澤の繼子）が、遊女九重となつて島原の廓に勤めてゐるのを知り、又大岸力彌を戀してゐる旨を聞いて、それとなく大岸父子に横山の館の案内を教へた上、九重の手にかゝつて死ぬ。（四段）「道行老の一つ書」由良之助の母千鳥と妻おやなが本國より山科への道行。由良之助は山科の閑居に妾おかよを置きながら島原で遊興してゐる。千鳥おやなが山科に尋ねて來たが、原郷右衞門からの暗の使者が、己が背に書かれた文字を鏡にうつして讀むのを見た力彌がこれを刺すと、手負は早野勘平なる旨を明かし忠義の志を語るので、由良之助は連判狀に血判させる。大岸父子は母妻妾等と別れて仇討に出立する。（五段）討入より本懷。

【構想】大體は「鬼鹿毛無佐志鐙」に據り、「碁盤太平記」の山科閑居をもとりいれ、宗輔一流の趣向を加へてゐるのであるが、人物を多くとりいれて複雜化してある。【影響】「假名手本忠臣藏」（別項）への影響を第一、寧ろ唯一のものとして認めなくてはならぬ。「假名手本」及び本作で義政の弟政知を出したのも、「鬼鹿毛」大序に、尊氏の弟直義を出したのからであらうし、三段目の加古川本藏が鹽冶判官を抱き留める件は、本作の土川兵庫の件の複雜化であり、早野勘平は本作によつて命名された人物であつて、そのおかるとの關係は、本作の勘平歌木の件と、太田武太夫の告白（三段）から來て居り、又鷺阪伴内は本作の山縣兵衞と似てゐる。更に「假名手本」四段目の判官の遺言は、本作の判官が原への傳言から來て居り、六段目おかるの身賣は、本作二段目おやつの身賣の改作と見られる。七段目は本作三段目の廓の場に負ふところが甚だ多いやうであるが、本作太田武太夫の最期は、「東鑑御狩卷」三段目を經て、「假名手本」九段目の本藏の最期に大なる影響を與へてゐる。本作の寺澤七右衞門は、「假名手本」の寺岡平右衞門となり、おやつとの繼父子關係は兄妹に變へられてゐる。由良之助・九重と武太夫・母親といふ横の排列は「假名手本」ではおかる・由良之助・九太夫といふ縱の排列となつて居り、おかるが鏡で文を讀む趣向は、「碁盤太平記」の飜案なる本作四段目で暗の勘平が鏡によつて背の文字を讀む件の奪胎であらう。又「假名手本」八段目の母娘の道行も、直接には、「東鑑御狩卷」の母娘の道行から來てゐようが、本作の姑嫁の道行からも暗示を受けてゐよう。本作四段目は前述の如く「碁盤太平記」の飜案であるが、最期の勘平が大岸父子によつて連判狀に名を加へられるのは、「假名手本」六段目に影響してゐると思はれる。本作は元より傑作とすべきほどのものではなく、再演もされなかつたが、立作者宗輔が竹本座に轉じて出雲等と共に作つた名作「假名手本忠臣藏」に、かく多大な影響を及ぼした點に於て、その歷史的地位は忘るべからざるものがある。【參考】「忠臣藏」以前の義士劇 黒木勘藏（近世演劇考說）○「假名手本忠臣藏」に就て 堀田七郎（岩波講座日本文學）○名著文庫「戲曲義士篇」前編解說。（增田）

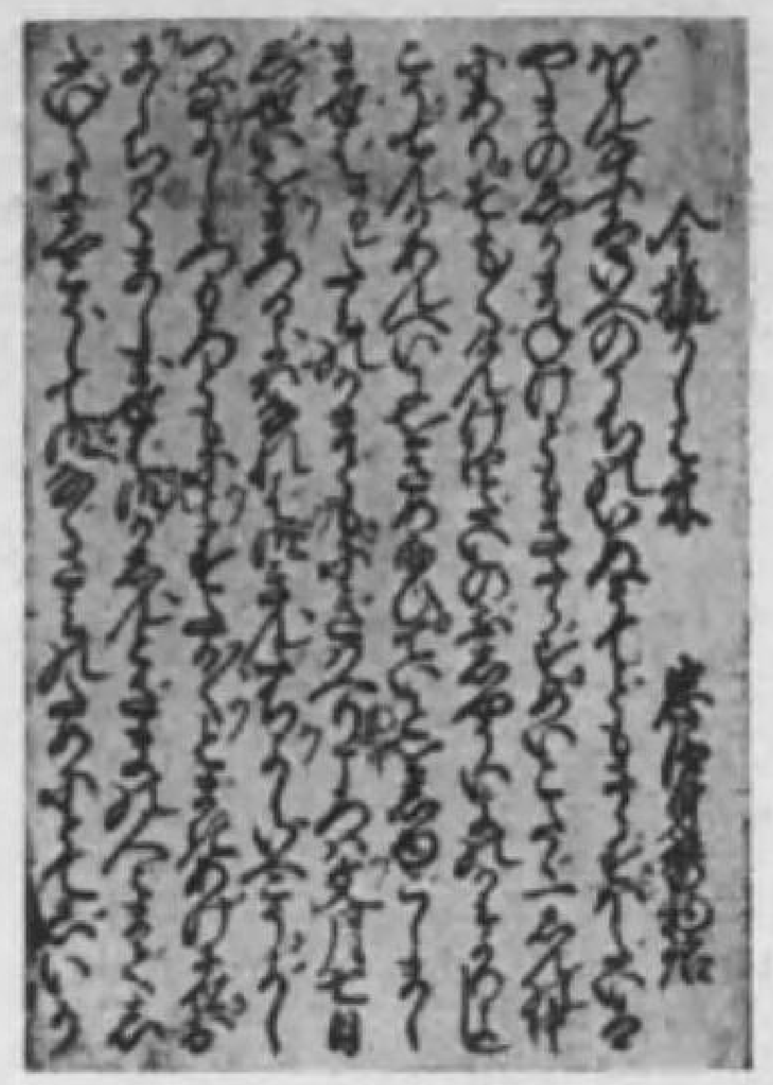
忠臣水滸傳 讀本十卷十冊【作者】山東京傳【挿畫】北尾重政【名稱】支那の「忠義水滸傳」の世界を翻して、「假名手本忠臣藏」（別項）のそれに移したもので、かく名づけたのである。【刊行】前編寛政十一年、後編享和元年、江戸蔦屋重三郎、鶴屋喜右衞門板【讀本】繪入文庫・山東京傳集（近代日本文學大系）・京傳傑作集（帝國文庫）所收【題材】「假名手本忠臣藏」の事件に基づき、水滸傳の結構を附會したもので、高師直と鹽冶高貞との確執を高俅と林冲に比し、又四十七士を百八の將星に、大星由良を宋江に擬してゐる。【梗概】（前編）北朝の光明帝の御時、洛中に屢々怪異があり、北陸に疫病が流行したので、

都の寺社に祈禱せしめ、特に新田義貞の兜を鎌倉に埋めて退轉する事になつた。この命を受けた鎌倉の執事高階師直と雲州の刺史鹽冶高貞が、地を卜して穴を掘ると地中に盤石があつた。師直はこれを石室と推して強ひて掘り起すと、忽ち一道の白氣が昇つて四十餘條の金光が四散した。これ希代の珍事を起す兆であつた。師直一日鶴岡八幡宮に詣で、高貞の室貌好を見て戀慕し、高貞を失はんと計り、逆に陷れて自刃せしめた。貌好は家臣原郷右衞門に護られて雲州に赴く途中、師直の伏兵に捉はれんとするが、桃井侯に救はれて遁れ、又天龍川で賊に遭うたが、鹽冶家の飛脚寺岡平右衞門の救ふ所となり、その神行の法で本國に走つた。雲州守護の家士大星由良は、貌好を迎へると直にこれを高貞の弟石堂縫殿助に預け、不忠の徒鉄九太夫父子を去らしめ、義を重んずる家士と復讐を圖り、黨を結んで京に向つた。こゝに桃井家の老臣賀古川本藏は足利尊氏へ贈物を獻ずる使者として京に上る途に、鉄九太夫の子貞九郎に襲はれ、使を果すことが出來ずして身を隱した。又高貞憤死の事に關して、不幸主家を追はれた遠野勘平は、妻信兒の實家に身を寄せ、計らず繼母のために信兒を賣られたが、鹽冶家の臣千崎彌五郎と邂逅し、大星の義擧に投ずる傳手を得た。【後編】京に於ける大星は日夜花柳の巷に遊んで行跡を晦ましてゐた。こゝに名妓とうたはれてゐた信兒は、或る夜大星の子力彌が落した密書を奪ひ、力彌に刺されて夫勘平の害冥を告げ、同志に加へられんことを切望し、身を殺して夫の本意を遂げさした。この時鉄九太夫は床下にあつてこれを竊つてゐたが、その場に殺された。彼は師直の間者となつて大星等の動靜を探つてゐたのであつた。さて賀古川本藏の妻戶無瀨は娘小波を伴ひ、大星を訪れて曾て約せし力彌との結婚を迫るが、容易に許されない。本藏、虛無僧姿にて入り來り、鉄貞九郎の首を示し、その難に遭うたことを物語り、疑晴れて祝言の式を擧げる。又本藏は庭の雪佛を見て、師直の滅亡の近きを告げた。力彌が槍を取つてその雪佛を突くと、中から師直の館の圖面が出た。本藏の和歌の師兼好法師の好意によるものであつた。かくて遂に時節は到來した。大星由良は一夜石山寺に義士を糾合して鎌倉に向つた。時に兼好は草菴に在り、九天玄女が諸星を下界に下して大星以下の義臣に生れさせ、奸臣侫者を誅戮して道を行はしめたが、既に天數つきて諸星天に歸る時期が來たといふ奇夢をみて、大星等が故主の仇を報じたことを悟つたが、果して高階師直を討つたのであつた。【構想】水滸傳翻案の風潮に從つて作つたもので、その主として據つた材は、忠臣藏であるが、俚俗の耳目に熟してゐるものであるから、その舊態を殘すまいと期し、ただそれの因果を藉り、水滸傳の結構を以て事件の葛藤を多くしてゐる。すべて支那風の發揮に努めたものである。【史的地位】京傳の讀本に於ける處女作であると共に、讀本作者として曲亭馬琴と對立の第一戰をなしたものである。既に建部綾足が「本朝水滸傳」（別項）を書いて以來、水滸傳の翻案が續出したが、「女水滸傳」（別項）を經て、馬琴の初作「高尾船字文」（別項）が現はれた。京傳は明かにこの風潮に誘發されたもので、馬琴が水滸傳に「伽羅先代萩」（別項）を綜合したのに對して、彼は忠臣藏を結合したのである。兩者共に失敗した點で似るところがあるが、その效果から見れば、京傳の方が優れてゐる。【價値】內容の著しく異なつた說話を附會しようとしたのが失敗のもとである。遂に內面的にも外面的にも統一し得なかつた。何等效果を持たない挿話や附會の脚色に不自然さを增し、又物語の理想精神を不明にした。併し「近世物之本江戶作者部類」（別項）によると、當時の讀者には非常に歡迎されたさうである。歷史的意義を有する作品として注意されるものである。（笹野）

忠臣身替物語（ちゆうしんみがはりものがたり）

淨瑠璃　五段　時代物【成立・興行】寶畝板「外題年鑑」の宇治加賀掾の語物中に、本作の名が見えて居り、繪入十七行十三丁半本の卷末に、元祿二年巳ノ八月吉日とある。竹本筑後掾の正本「今樣かしは木」「金平法問諍」は共に本作の外題替。「外題年鑑」は「今樣柏木」の興行を元祿二年八月としてある。【諸本】繪入十七行十三丁半本、元祿二年八月板。八行四十七丁本（義太夫正本「今樣かしは木」）、十行二十八丁本（筑後掾正本「今樣かしは木」）、十行三十丁本（筑後掾正本「金平法問諍」）、武藏屋本（金平法問諍）、近松門左衞門全集第九卷（今樣かしは木）・近松全集第三卷（忠臣身替物語）等。【作者】十行二十八丁本「今樣かしは木」、十行三十丁本「金平法問諍」は共に竹本筑後掾、近松門左衞門連名の奧付があるが、假に近松の作とは定め難い。【題材】上總少掾正信の正本「公平法問諍」（寬文三年板）の改作。「外題年鑑」の井上播磨掾の語物中にも「金平法問諍」があるが未見。

【梗概】〔初段〕（大序）源家四代の武將頼義は文月七日の酒宴の折、池の露臺に宿れる白露の散るを見て無常を觀じ、次男加茂次郎義綱に父の菩提のため出家せよと命ずる。義綱は出家を嫌ふが、頼義は三浦和田左衞門爲宗を召し、東山の滿要上人を請じて義綱を剃髮させよと命じて座を立つ。（中）義綱と妹脊の約束ある柏の前は、義綱が出家を強ひられてゐるといふ事を聞き、その夜坂田兵庫頭公平の許を訪れ、事情を打明けて圖る。其處へ義綱も密かにやつて來たので、公平は萬事を引受け、義綱を己が館に匿ひ、柏の前を歸らしめる。（切）翌朝頼義が滿要上人を請待し、義綱剃髮の準備をして待つ所に、義綱が行方不明との報があつたので、頼義は怒つて奧に入る。所へ公平が赤地の錦直垂の上に墨染の衣を着し、三枚錣の兜の緒を締め、大太刀を橫たへて出で來り、上人をとらへて法談を試み、論爭の末上人を遣り込め、念佛の力で受けて見よと太刀を拔けば、上人は驚いて逃げてしまふ。公平は驚き制する人々に向つて、上人は源氏の武力を碎く魔王だと暴言を吐して去る。〔二段〕（序）公平は頼義の討手を避け、手勢を引具し、義綱の供をして江州石山寺に落ちる。頼義聞いて大に立腹し、嫡子八幡太郎義家を討手の大將、三浦和田左衞門爲宗、鎌倉權五郎景政兩人を侍大將とし、その勢七千五百餘騎で押寄せる。（中）義綱が公平と共に寺の庭前で月見の宴を催してゐる所へ、和田左衞門爲宗が只一騎訪れ來つて公平に對面し、事を圓滿に解決するため義綱に出家を勸めて呉れと賴むが、公平肯んぜず、爲宗は空しく本陣に歸る（繪入本はこの月見宴の場を缺く）。かくして公平は出陣の用意をして義綱の前に出で、手勢と共に軍の門出の盃をする。（切）爲宗は本陣に歸り、義家に公平の所存を申上ぐれば、義家も思案にくれるが、父頼義から催促の使が頻りなので、已むを得ず出陣の下知をする。公平方應戰し、互に火花を散らす。中にも公平の養子秩父十郎賴平は鎌倉權五郎景政と渡り合ひ、敵も味方も手に汗握つて見物する。折しも北國より歸京の途にあつた渡部兄弟が急を聞いて馳せ來り、雙方を引分ける。かくて渡部國綱は公平に暫くの猶豫を請ひ、味方の本陣に到り、爲宗に向ひこの際施すべき思慮はないかと謎をかける。〔三段〕（序）爲宗は今日の國綱が謎の意を悟つて一子竹若丸を近付け、義綱の身替に立つて呉れと賴めば竹若は潔く覺悟を決める。爲宗は喜んで竹若を伴ひ密かに公平を訪れ、親子の覺悟を述べ、一刻も早く義綱の供をして落ちて呉れと勸める。公平は一旦辭退するが、爲宗親子の決心動かし難く遂に竹若の首を打落す。物音に驚き出で來つた義綱は、話を聞いて感謝の涙にくれるが、やがて公平を供として八幡の方へ落ちる。かくて爲宗は公平の贋首を携へ、館に火を放ち、馳せ付けた寄手の勢に向つて義綱も公平も和田左衞門が討取つたと呼ばはる。（中）爲宗が頼義の前に罷り出で二つの贋首を示せば、頼義これを賞して二つの首を爲宗に賜ふ。（切）爲宗が館に歸り、北の方から竹若の安否を問はれる儘に竹若が身替りに立つた次第を語り、竹若の首を示す。北の方は我が子の首に抱きつき、悲しみの餘り氣も魂も消え果てたやうになると、忽然竹若の靈が現はれ、菩提を弔つて呉れと告げて消える。所へ一人の女が馳け來り夫の敵と呼んで爲宗に斬つてかゝる。柏の前であるので驚くが、理由を聞いて、初めて姬と義綱との關係を知り、互に事の眞相を語つて聞かせ、義綱は今八幡に忍んでゐると告ぐれば、姬は感謝の涙にくれながら去る。〔四段〕（序）義家は母御臺所に弟義綱の安否を尋ねられるので已むを得ず、爲宗に討たれた顚末を言へば、御臺所は義家を責め、狂亂の態となつて奧に入る。義家は思案に餘り腹を切らんとする所へ、虛空より一羽の白鳩が筆を啣へて飛び來り、障子の面に時を待てとの八幡の神託を書き記して去る。義家、これを拜して生害を思ひ止まる。（中）「かしはのまへ道行」柏の前は、義綱の跡を慕つて八幡の麓に辿り着く。（切）義綱の留守に公平が義綱の小袖を引被つて宵寢をしてゐる所へ、柏の前が辿り着き義綱と間違へて種々かき口說く可笑味がある。そこへ義綱が歸り來り姬と會つて嬉し涙にくれ、種々物語る話の末、明日御臺所が六條河原で義綱追善のため滿要上人を賴んで流灌頂を行ふと聞き、公平は緣起が惡いと怒つて都を指して急ぐ。〔五段〕（大切）六條河原の式場へは頼義も來てゐる。やがて儀式が始まると、折から暮れかゝつた水の面に公平が亡靈を裝うて現れ、散々滿要上人を愚弄した揚句これを追ひ拂ふ。豫て義綱の首が竹若の身替りなるを見拔いて爲宗の忠義に感じ、義綱の勘當赦免の儀を待つてゐた頼義は、この公平の潔い振舞に感じ、義綱の勘當を許すとあつたので、義綱も其處に立ち現はれ、御臺所を初め、上下一度に悅びの聲を揚げる。（高野（正））【構想】身替りの趣向は謠曲「仲光」（滿仲）から出たもので、上總少掾の「公平法問諍」より一層原作に近づいてゐる。（公平法問諍參照）【參考】近松全集第三卷解題



十行本〔今樣かしは木〕

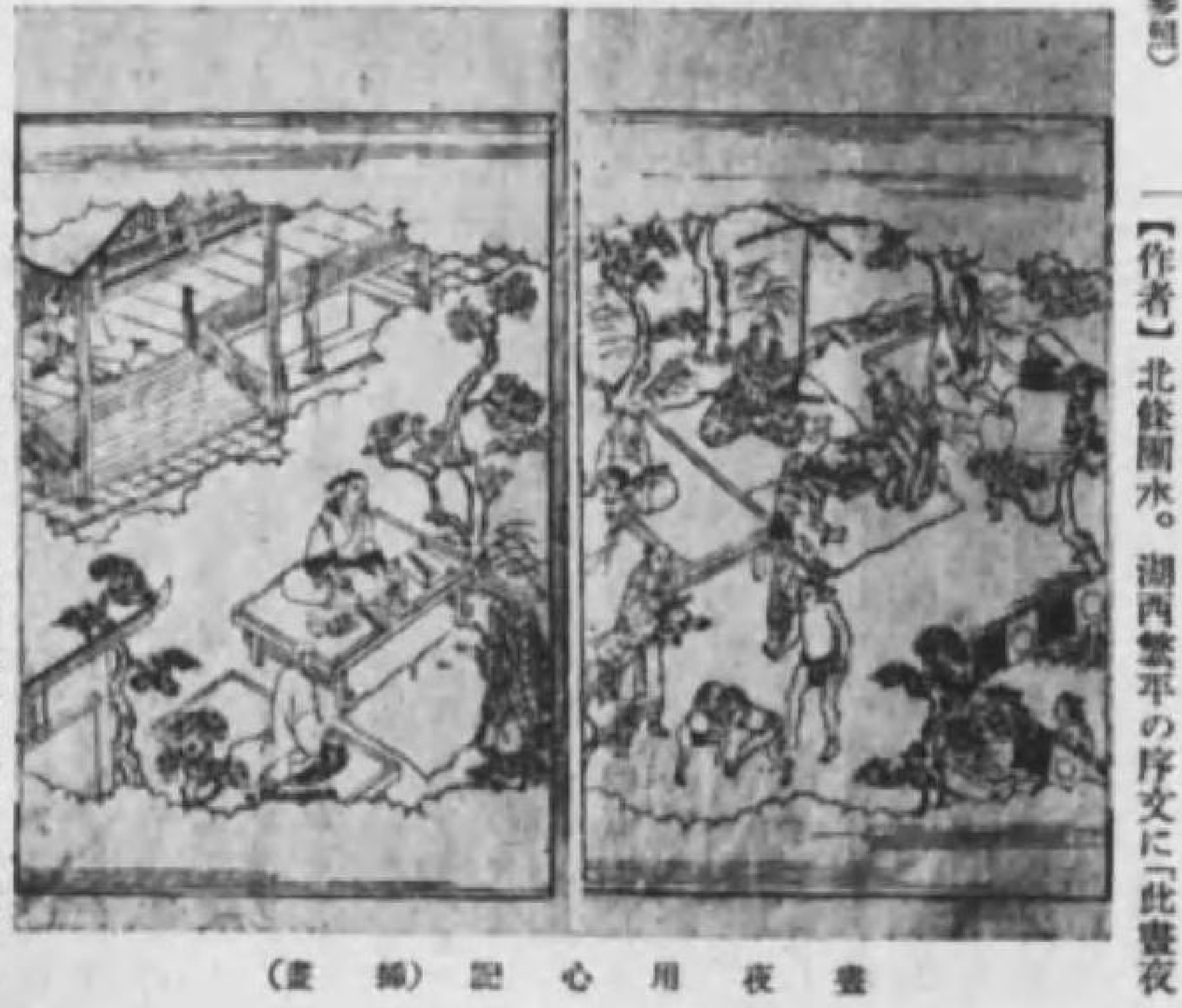
中殿御會圖卷（ちゆうでんぎよくわいずくわん）

繪卷一卷【解說】順德天皇の建保六年八月十三夜、宮中清涼殿に於て和歌管絃の御會を催された折の光景を圖繪したもので、繪は藤原信實筆、この繪の前後に添へた御會の記事と當夜の和歌とは藤原行能の書と傳へられ、この圖卷はもと九條家に祕藏せられてゐたといふが夙に烏有に歸して了ひ、今は同家に住吉如慶の摸寫したといふ白描一卷を存する。なほ毛利公爵家に住吉具慶の摸本があり、その他にも二三摸本が知られてゐる。順德天皇を初め、右大臣道家以下公卿殿上人三十一人が殿中に列坐奏樂の光景で、この圖の畫者信實、書者行能の姿も一隅に描かれてゐる。藤原信實は鎌倉時代の初め、大和繪の肖像畫卽ち似繪に於て名人と謂へられた人であつて、この圖の如きは、思ふに當時の光景を描いて圖樣も各人の容貌も、蓋し寫實的なものであらう。摸本に依つて見てもその構圖といひ、それ〴〵特徵ある面貌といひ、原本の趣致を想ふに足るべく、當時單に靜的な單獨の肖像畫以外、集合的場面を取扱つて、各人の似顏をその動作に於て表現する似繪の發展方向を窺ふ上にも興味あるもので、そこにまた似繪の代表作家としての信實の特色ある技量の一端をも彷彿することが出來る。（田中（一））

中本（ちゆうほん）「人情本」を見よ。

晝夜用心記（ちうやようじんき）

浮世草子　六冊【作者】北條團水。湖西繁平の序文に「此晝夜用心記全部六冊は鳳城團粹居士篋中の餘れに書捨てられしを撮集めて一帙と成せり」とある。鳳城團粹居士は北條團水の別號。【名義】繁平が序の一節に、「大殿世間に諜計子といふ



晝夜用心記（挿畫）

者，僞をたくみ辯舌もつて人を誑かし、金銀を掠め奪ひし方便、古今の聞語り傳へしを、三十六種に書きつらねたり。誰裏虚あり、實あるべし。ただ民家用心の爲に記して、詐僞覺悟の種に編める者也」とある。【刊行】寶永四年【諸本】西鶴文集（有朋堂文庫）所收。【解說】「棠陰比事物語」（別項）の刊行されて以來、社會に於ける種々なる惡事を題材とした浮世草子がいろ〳〵出てゐる。「本朝二十不孝」「本朝櫻陰比事」「好色世の書弦」「鎌倉比事」（各別項）「桃陰比事」などは、その類である。本書も同類に屬すべきもので、各卷六種、都合三十六種の詐僞行爲の類を材とした說話より成る。支那の「杜騙新書」から思ひついたものであらうと言はれてゐる。摘出された人情などよりは、とり〳〵樣々の詐僞の手段に興味を覺えるものが多いのは惜しい。但し敍述摘寫の間に世相の一面を窺はせるものもないではない。寶永六年刊の「傳說用心記」（別項）は、本書を模倣して作られたものである。【藤村】

中右記（ちゆういうき）　日記　七卷【著者】中御門右大臣宗忠【名稱】「宗忠公記」「中右抄」ともいつた。中右は家號と官名との一字を取つたものである。又「愚林」ともいつた。宗忠の祖右大臣俊家の日記を「大右記」といひ、宗忠の引用した中に「曉林」といつてゐる所から察すると、愚林は曉林に對した謙稱で、恐らくはこの日記の原名であらう。【諸本】寫本では內閣文庫に舊藏本二十九冊、久松家獻本八十冊等がある。又宮內省圖書寮には宗忠自筆本一卷がある。天仁二年十月十八日より十二月二十四日に至る熊野詣に關する別記で、卷首が缺失してゐる。「史料通覽」に收められ、大正四年八月以降同五年五月までに刊行された。【解說】寬治元年から、保延四年二月に至る日記でその中間に缺逸して傳はらぬ個所も尠くない。本書は楓山文庫藏本、村上勘兵衞の獻本に、近衞・九條二家所藏本を補寫した百九冊本を、更に諸書に據つて增補訂正したもので、卷一は、寬治元・二・三・四・五年、六年（夏・冬）、七年（冬）、嘉保元・二年、永長元年。卷二は、承德元年（春・四・五）、二年、康和四年、五年（春・夏・冬）、長治元年。卷三は、長治二年、嘉承元・二年、天仁元年、二年（冬）。卷四は、天永二・三年、永久二年。卷五は、元永元・二年、保安元年、大治二年。卷六は、大治四・五年、長承元年。卷七は長承二年（春・夏・秋）、三年（春・夏・秋）、保延元年、二年（春・六・秋・冬）、三年、四年（正・二）の記事を記し、終に佛事部類・脫漏追加・目錄等が添へてある。その佛事部類と目錄とは本文にない所もあつて、恐らく本書の殘缺しない時分に抄出部類して置いたものであらうと思はれる。【價値】宗忠奉公六十年、堀河・鳥羽・崇德三代五十二年に亙る日記で、中間缺佚する所が少くないとはいへ、平安末期に於ける人情・風俗を知らんとするには、必要缺くべからざる資料である。【石村】

【參考】歷世記錄考　星野恒（史學叢說第一集）

中庸（ちゆうよう）　經書　一卷【著者】子思。「史記」（卷四十七）孔子世家に、「子思中庸を作る」と云ふ。宋の歐陽脩・陳善、淸の崔述・姚際恆等を初め、これに疑を挾む學者が少くなく、伊藤仁齋も、この書の前半（第一—十五章）を上篇として子思の作とし、後半を下篇として中庸の本文にあらずと主張してゐるが、いづれも抒臆見である。【名義】中・庸の二字は本書の中に見え、全篇の意義を總括する眼目であるから、取つて書名とした。【成立】戰國時代初期【由來】朱子は中庸章句の序に、「中庸は何の爲にして作るや、子思子道學の其の傳の失はんことを憂へて作れるなり」と云ふ。蓋し當時老子の一派が、宇宙の本體から論及して、高遠な哲理を鼓吹し、儒家に對立する有力なる學派であつたので、儒家の立場からこれに對抗して、孔子の常識的教學に深遠な立脚地を與へるために作られたのがこの書である。これは開卷第一に、「天命之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ふ」と云つて、儒家の道に形而上學的根據を與へ、又孔子の言を引用して、「隱を索め怪を行ふは後世述ぶるものあらん、吾は之を爲さず」と云つたのに徵しても明かである。子思の著書は、「漢書」藝文志儒家の部に、子思子二十三篇と、禮類に別に中庸說二篇とがあるが、今本はその何れから出たかは明かでないが、恐らく後者であらう。【表章】「大學」と同じく「禮記」中の一篇（第三十一篇）であつたが、劉宋の戴顒が始めてこれを摘出して、「中庸傳」二卷を著し、又梁の武帝は、「中庸講疏」二卷、「私記制旨中庸義」五卷を作つたが、唐の李翶に至つて益々これを尊信して、「復性書」三篇を著し、「中庸」の趣旨を敷衍して復性滅情の說を主張し、宋に入つて司馬光が、「大學」と共に廣義を撰び、范仲淹・周茂叔・二程子等、何れもこれを尊重する等。「中庸」は「大學」よりも一層早く諸家の注目を受けたが、朱子が章句を作つて四書に入れ、孔門の根本書として以來、愈々世人の尊敬を受けるに至つた。【內容】〔天道論〕本書の冒頭に、「天命之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ふ」と云ひ、性は即ち天賦で、これに循へば道である。故に天道は即ち人道、人道は即ち天道であるとして、天人合一の眞理を闡明した。換言すれば、天地の法則は即ち人の本性とするので、子思はこれを誠と名づけた。孔子の仁を忠恕と解した曾子の學系を承けた彼が、己を盡すの忠から一轉して、これを誠と云つたのは、極めて自然な展開であつた。天地の法則たると同時に人の本性である所の誠は、完全自足な本體で、自ら發展すると共に、萬物をして完成せしめ、「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」（第二十・二十五章、朱子章句本、下同）天地の間に流行するが、五官によつて知覺することは出來ず（第三十三章）、又到るところ遍滿充足し（同上・第十六章）、恰も鬼神の如く（第十六章）、且つ無始無終、恆久不變である（第二十六章）。誠とは天地の法則であるから、獨り人の本性が誠であるのみならず、同じく誠によつて存在する萬物の本性も亦誠でなければならぬ。即ち森羅萬象は悉く誠の發現である。要するに誠は天人一貫の契機であるのみならず、また內外物我を結合すべき樞紐である。【倫理說】誠が天地の法則であり、又人の本性であるならば、人は唯々自己の本性に率つて行動すれば自ら道に叶ふべきで、人間の行爲は價値の世界を離れて、修養或は敎育の必要を認めず、自然因果の律法に支配さるべきであらうか。然るに彼は開卷第一に、「道を修むる之を敎と謂ふ」と云ひ、敎育修養を必要としたのは、彼が人の資性の階級を認めたからである。即ち人の資性を二種に大別し（第二十章）、敎養の必要と可能と效果とを述べ、修養の方法としては、「德性を尊び」「問學に道る」の二綱領に歸し、而も二者の竝行を要求する。これは勿論孔子の博文約禮を祖述したのであるが、尊德性は約禮の客觀的、他力的であるのに比して、著しく主觀的、自力的となり、一

層深く自己の良心の權威を認めてゐる。更に道問學の細目に就いて、彼は博學・審問・愼思・明辨・篤行の五者を擧げてゐる。その云ふ所は先知後行說であり、且つ知識も亦外的知識を先にし、內的知識を後にしてゐる。而して尊德性の方法として、愼獨の工夫を擧げ（第一章）、「大學」が愼獨を以て誠意の工夫とするのと相表裏してゐる。この兩側の修養法に依つて到達せらるべき理想は誠であり、至誠の域を中和と云ふ。「喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ふ、發して皆節に中る、之を和と謂ふ。中とは天下の大本なり、和とは天下の達道なり。中和を致して天地位し、萬物育す」（第一章）。中は性の體、和はその用であり、體用を兼ねてこれを中和と云ふ。即ちその形式が中であり、その內容は誠となるが、これは易の思想と頗る類似してゐる。さて「中」とは堯舜以來の敎で（論語堯曰）、且つ舜の四德、臯陶の九德、洪範の皇極及び周易等は、何れも中を重んずるので、即ち子思は、上古以來の敎を采り、孔子の說によつて自己の學說を組織したものである。中とは「過不及無き德」の謂ひで、その道が平常であり萬世不易であるからこれを庸と云ふ。庸とは常經の意である。或は中和と云ひ、或は中庸と云ふも、抒修養の究極の目的たる誠に外ならぬ。而してこの域に達した者を名づけて聖人（第二十章）と云ふ。【註釋書】（內容の項參照）禮記正義の內中庸篇　漢鄭玄注唐孔穎達等正義○中庸章句　宋朱熹○中庸輯略　同上○中庸或問　同上○中庸直指　明釋德淸○中庸發揮　伊藤維楨○中庸解　荻生雙松

【參考】中庸に對する疑問說を論ず　藤塚鄰（支那學研究三ノ一・二・三・五・八）○先秦學術史上に於ける中庸の地位　武內義雄（支那學二ノ九）○子思子に就いて　同上（卷子原始）（宇野・本多）

中陵漫錄（ちゆうりようまんろく）　隨筆　十四卷　寫【著者】佐藤成裕【解說】物産家佐藤中陵の隨筆で、動植・金石・地理・歷史・風俗・節序・氣候、俗間の傳說等、すべて博物的の考說數百項を收めたもの。蓋し廣覽治聞の結果をこゝに載集した槪がある。稀に[illegible]があり。文政九年中島嘉春の序がある。【著者小傳】佐藤成裕、字は綽道、通稱平三郞、中陵はその號、一に爲義堂ともいふ。江戶の人。物産學を以て、島津・上杉の二侯に聘せられ、又水戶德川家に仕へて、天保元年「山海庶品」百卷を著した。【和田】

樗陰雜錄（ちよいんざつろく）　隨筆　二卷一冊　寫【著者】埼島固【解說】漢文の隨筆で、上卷に六藝稱謂、十三經註疏、易之名不始于文王以下二十二條。下卷に、鹽水臨海水鹽鹵、子程子、扶桑花以下三十五條を載せてゐる。槪ね支那の經籍・典故にかゝる解說である。序跋はない。【和田】

牒（てふ）　古文書【解說】大寶令の公式令の規定に依れば、牒は主典以上の官人が諸司に申牒する文書となつて居り、その樣式は、

牒、云々、謹牒。
　年月日　其官位姓名牒

併し實際に於ては寧ろ移（別項）と混同して、互通文書として用ひられ、遂に移は行はれず、牒のみとなつたのであるが、その代表的のものは太政官牒である。これは太政官よりその被管ならざる所へ遣す公文書で、單に官牒ともいふ。恰も太政官符と相並ぶもので、若し八省や諸國等の被管であれば官符で出すが、寺や社の如き直接被管でない所へは官牒で出すのである。例へば、

太政官牒金剛峯寺
　應任院廳下文、以備後國大田庄地頭寶實寺大塔不斷兩界供用途、免除勅事院事大小國役等事
右、太政官今日下彼國符偁、得彼寺沙門鑁阿今月日解狀偁、謹檢案內、（中略）者、正二位行權中納言兼左兵衞督藤原朝臣經房宣、奉　勅、依請者、國宜承知、依宣行之者、寺宜承知、牒到准狀、故牒。
　文治二年五月十日
　修理左宮城判官正五位下行左大史
　　算博士小槻宿禰（花押）牒
修理左宮城使從四位上行左中辨
兼阿波介藤原「朝臣」（[illegible]）

この種の牒には、官牒の外に、平安朝以後の諸司、諸國、藏人所、留守所、記錄所、雜訴決斷所、門院、神社、諸寺、諸家等いろ〳〵の牒があるが、樣式は大體官牒に准じたものである。なほ牒は國際文書としても用ひられてゐる。所謂牒文或は牒狀はそれである。【伊木】

蝶衣（てふい）　俳人【姓名】高田千鶴。初め四十平といひ、大正六年千鶴と改む。【生歿】明治十九年一月三十日生れ。昭和五年九月二十二日歿。享年四十五【閱歷】淡路國津名郡山田村草香の人。早稻田大學を病氣のため半途退學、大正六年以後湊川神社の神官であつたが、又病氣のため辭して鄕里草香に幽棲し、そこに歿した。俳句は中學時代から大谷繞石（別項）を師として學び、後、虛子・三允等の知遇を受けて年少夙く俳壇に顯はれ、「アラレ」の同人として角逐し、「中央公論」の俳壇選者であつたこともある。その後「懸葵」「石楠」その他求められるが儘に句を寄せて偏せず黨せず、孤獨を樂しむの風があつた。【著書】蝶衣句集（內題には「蝶衣句帖」とあり。アラレ叢書第二編）【批評】明治四十一年、二十七歲にして其の句集を公刊したことは、當時にあつては驚異すべき事柄であつたが、彼の心事は、一に、「世の識者に垂教を仰ぎ以後の句作に參考にしたい」ためであつた。その天分の豐かな點に於ては明治より昭和へかけて俳壇屈指の一人といふべく、古語の驅使斡旋に一特色を有してゐた。その句品の高いのは溫藉な人格の反映と見るべく、制作の態度は終始一貫、殆んど時潮に動かされることがなかつた。作としては「弱き身をたよりにされて螢籠かな」などよりも、「林頭の月に膽冷えて眠りたり」や「群鳥の尾越すあとより時雨暗く」などに、その特色が窺ひ得られる。【白田】

潮音（てうおん）　短歌雜誌【主宰】太田水穗【創刊】大正四年七月【解說】本誌の歌の思潮は水穗の歌風と變遷を共にしてゐる。その一は第一歌選「初ざくら」の時代、その二は第二歌選「羽萱集」の時代、その三は最近の第三歌選「荒海」の時代といふべく、その一、その二は水穗が芭蕉に傾倒してゐた時代で、歌風著しくその影響を受けてゐる。水穗はその一を、「潮音」の歌風を定位せしめたものとなし、その二を既に定位した根本のものの表現に力を致したものとなし、その三即ち最近の歌風を「前面に凄じい荒海が現はれ、息をつぐ間もなく苦鹹の浪を浴びなければならなかつた。潮音の流行體或は變相期といふべきものである」と云つてゐる。主なる同人に、四賀光子（水穗夫人）・小田觀螢・大井廣・米村國一・野澤柿葉等がゐる。從來の「潮音」は久しく歌壇の裏側を行つてゐた觀がある。今僅かに現代意識に轉向して、所謂荒海に乘り出したが、よくその所期を達し得るかどうかは今後の努力に俟たねばならぬ。【金子】

長歌（ちやうか）　和歌【名稱】「ながうた」とも

いふ。【成立】長形式の歌は記紀の歌謡にも多く見られる。併し未だ形式から言ふと確定しないのであつて長短句の連續の偶數形式のものもあれば奇數形式のものもある。又句の音數も一定せず、終りに反歌もそつてゐない。而して次第に奇數句が有力となり、また反歌（別項參照）が生ずるに至つた。反歌の萠芽は既に記紀の歌謡の中にも見られる。それが萬葉集時代になると、音數が五七音に大體一定し、奇數句形式となり、また反歌が獨立して、所謂長歌形式となつたのである。もとより「萬葉集」の中にも反歌のない歌があり、偶數形式の歌さへあるが、それは過渡期にたつ少數の作であつて、大部分は奇數句形式であり、且つ反歌を有する。【解説】この長歌の性質を要素の上から素材・形態・內容に分けて見る時、第一に素材の上では叙景・叙事・抒情・抒思的素材がそれ〳〵用ひられてゐる。たとへば山上憶良の長歌は抒思的素材を多く用ひ、高橋蟲麿は叙事的素材を多く用ひてゐる。これに對して人麿の長歌は抒情的素材であり、赤人の長歌は叙景的素材を多く用ひてゐる。而して素材的な立場からわけて見る時、長歌形式の素材としての感情や形象はやゝもすれば單調に流れ形態にひきずられてゆく感がある。思想的もしくは事件的素材が、漸く長歌形式の單調化を免れてゐるのであり、叙景的素材や感情的素材もこれ等を加へることによつて單調化を免れてゐるのである。かういふ意味で長歌の素材は叙事的もしくは抒思的素材が最も適してゐるのである。然らばかくの如く複雜な素材でなければ單調を免れない長歌の形態は、形態としてどれだけの特質を有するかといふ點を見るに、長歌形式の完成した形は五七七であり、これに反歌が加はつてゐるのである。もとより「萬葉集」の長歌も五七七の形式のみではなく種々の變化は見られる。例へば憶良の令反惑情歌は、長形式の部分が三段落に分れて五七七・五七七・五七七となつて居り、これに反歌が加はつて所謂長歌形式の複合體になつてゐる。かうした複合的な形式は「萬葉集」の中にも種々の意味で見られるが、「萬葉集」に於てはそれ以前の複合體であつた、もしくは未分の狀態であつた形態の中から反歌的要素が獨立し、また長歌形式と旋頭歌形式と短歌形式とが、それ〳〵確然とした區別を生ずるに至つたのであつて、それは純粹なる所謂長歌形式を作出したものではあるが、それだけ「萬葉集」に於ける長歌形式は形態としては單調を免れない。かくて大體に於て五七の連續の形態の中に素材の構成を發展させて行くのであるが、形態としては殆ど何等の變化も見られない。この形態は、「古今集」以後の長歌になると、形の上では同様であるが、五音から起して、やがて七五音に變化する。これは短歌形式に於て、五七調から七五調へ展開したのと同様であつて、その萠芽は已に「萬葉集」の長歌の中にも見られる事は、短歌に於ても同様であるが、かくの如き形態が主要なるものとなつたのは言ふまでもなく「古今集」以後に於てである。併しかくの如き長歌に於ける七五調は、五七七の形式に比して、長歌形式の單調性を和らげる效果は餘り多くなく、却つて素材の自由なる表出を妨げる缺點があり、七五音の連續は下の句が輕いために餘りに優美流麗に過ぎて力がないことは、明治時代の新體詩の形式と同様である。かくの如く長歌形式にも多少の變遷はあるが、その全體を通じて見られる形態の單調性に變化を與へ、複雜ならしめるために部分的の修辭を必要とするに至つた。その主要なるものは對句であつた。近世の歌格研究家が長歌の根本的な格として對句を論じたのも發生的に於てのみならず、形態の效果の上からも一面の道理はあつた。單調なる長歌の形態の上に於て重年や守部や是香の論じたやうな種々の對句を用ひて變化を與へる事は、やむを得ない必要の事であつたのである。その他序や枕詞の如きも、かくの如き單調なる形態に出來るだけの變化を與へるために用ひられた修辭に外ならない。人麿の長歌の豐富なる修辭技巧は、感情的素材と單調なる形態とから成る彼の長歌に、變化と複雜とを與へるための方法であつたのであり、その點に彼の長歌は效果を舉げる事が出來たのである。而してこの豐富なる修辭技巧を用ひ得なかつた、もしくは用ひ盡してしまつた人麿以後の長歌は、素材的方面に於て新しい展開を見出す事によつて、形態の單調を破らうとした。抒思的素材と叙事的素材とはそれである。憶良と高橋蟲麿とが長歌歌人として成功したのは、內容としての眞實なる感動といふ點とともに、素材的方面が重要なる動機をなしてゐる。而もそれ以後、この點に於て更に進み得なかつた長歌形式は當然衰退してゆくより外なかつた。形態的にも素材的にも新しい開展をなし得なかつた家持の長歌が、如何に慘めな姿を示してゐるか。長歌は「萬葉集」に於て初めて完成したとともに、「萬葉集」の後期に於て既に衰退の兆を示してゐるのである。それは純粹なる長歌形式の形態そのものの有する本質的缺陷であつた。以上の如くして長歌を要素的に分解して考へる時、その內容は短歌と同じく我の眞實なる感動、個性的な抒情的精神であるのであるが、その形態は未定型式から次第に分解されて、純粹の長歌形式となるに從つて、その形態の單調性が生じて來たのであつて、そのために形態の上に種々の修辭技巧を加へ、また素材的方面から種々變化と複雜とを求めて、その生命を持續せしめたが、それが行き詰り、殊に長形式の終りまで緊張性を持續せしめる感動の稀薄になる時、長歌は衰退に傾いたのである。（和歌參照）

【參考】長歌詞珠衣小國重年○長歌撰格橘守部○長歌大意橘守部○長歌私編八木美穗○長歌規則中村知至○長歌玉琴六人部是香○日本歌學史佐佐木信綱○歌書總覽福井久藏○長歌の本質久松潛一（上代日本文學の研究）○國歌の胎生及び發達五十嵐力　〔久松〕

調鶴集（てうかくしふ）　歌文集　三卷【著者】井上文雄【刊行】慶應三年【諸本】明治名家家集上卷（續日本歌學全書）・明治初期諸家集（校註國歌大系）所收。【解説】佐佐木弘綱の慶應二年二月の序文がある。三部に分れ、短歌は四季・戀・雜に部立し、長歌は五篇を載せ、文集は調鶴文草と題す。本書は弘綱が和學を講じた藤堂侯に聞えて、その出資で上木したものである。文雄は中世の撰集よりも同時代の家集の自由にして個性の發揮せられることを喜び、又桂園派の平弱の弊に陷り、千篇一律となつたのを攻擊し、用語の自由を主張し、俳諧的趣味をも鼓吹した。かく歌に一見識を持つてゐたから、集中にも秀逸の歌が少くない。王朝時代の趣味を詠じ、田園の野趣を詠つた歌に佳作が多く、滑稽洒落の歌も亦その得意とする所、時勢を諷詠した作のあるのも特色の一である、總じて優美な中に打寛いだ趣のある歌風である。左に作例を舉げる。

岡越の切通したる作り道卯の花咲けりおにたに
夏の日はいつも凉殿の客人を歸して後もなほ長くして

〔佐佐木〕

長歌言葉珠衣（ちやうかことばのたまぎぬ）　和歌　六卷【著者】小國重年【成立】享和元年二月、重年三十六歲の時成る。內山眞龍の「日本紀謡歌解」「古事記歌註」との先後は未だ決定し難いが、共に遠江の學者で、同時代であるから一方からの影響はあつたと思はれる。【諸本】帝國圖書館藏寫本は二本あるが、一本には「明治七年二月以黑羽本謄寫」とある。諸所に寫本を藏する。【內容】主として對句の上から長歌を解剖した書である。先づ長歌を小長歌（七句より十五句まで）、中長歌（十六句より五十句まで）、大長歌（五十一句より以上）に分ち、對句を二句對句、四句連對句、六句連對句、長對句、並對に分ち、各長歌の中で、これ等の對句の如何に現れてゐるかを精密に調査してゐる。二句對句といふのは、

あしたには　しらつゆおき
ゆふべには　かすみたなびく

四句連對といふのは、

ときなくぞ　雪はふりける　そのゆきの　ときしくがごと
ひまなくぞ　雨はふりける　そのあめの　ひまなきがごと

長對とは二句以上の句が對になつてゐるのをいひ、並對とは、

ほつえに　鵜ひきかけ
中つ枝に　いかるがかけ
しつえに　しめをかけ

の如く三以上並ぶのをいふ。この立場のもとに精密な解剖を行ひ、主なる萬葉歌人を批判してゐる。たとへば柿本人麿の長歌には對句のないのは一首もなく、連對句・長對をまじへた歌が殊に多いとし、山部赤人も對句のない長歌は一首もなく連對句を多く詠み、四句連對句が多いが、長對を用ひた歌は一首もないとしてゐる。山上憶良は、連對句・長對句を多く用ひ、大伴家持は對句のない歌も多く、用ひた對句も二句對句が多いとしてゐる。【價値】本書は近世の歌格研究のほぼ先驅的な著書である上に、極めて正確な概念と綿密な解剖の下に調査せられてあるので、歌格研究の中でも優秀な著述である。方法論としても結果から見ても創見が多い。もとより對句の上からのみの研究であり、また對句の上からのみ歌人を批判したのは一面的であるが、上代の歌謡、殊に長歌が對句を重要な表現技巧として居ることは明かで、その一方面から精密に研究したのは極めて組織的であると言はなければならぬ。

【參考】日本歌學史佐佐木信綱○國文學研究史野村八良○大日本歌學史福井久藏○歌格概說久松潛一（短歌講座）　〔久松〕

長歌撰格（ちやうかせんかく）　歌論書　二卷【著者】橘守部【成立】文政二年にほぼ稿成り、天保十一年完成したといはれる。明治六年、三條西季知・松浦詮・鈴木重嶺の序、橋本直香の跋を附して出版された。【解説】上卷に於て、先づ歌は歌ふべきものとの立場から長歌本位說を立てて長歌の復古を唱へ、次いで長歌の句格を、疊句・聯疊・變疊・對句・隔對・變對・招應・照響・首尾・調段・譬喩・序辭の十三に分け、又修辭を連貫・光彩・數量・方邊の四に分けて論じ、記紀萬葉の長歌を選んで、以上の分類を符標によつて示し、その優れた點を明かにし、下卷に於ては同じ立場から當代の長歌の劣れることを指摘してゐる。「短歌撰格」（別項）と共に守部の歌論を窺ふべき良著である。〔相原〕

長歌玉琴（ちやうかたまごと）　歌論書　一卷　寫【著者】六人部是香【成立】文久元年十月【內容】長歌の構成を論じたもの。先づ總論に於て長歌の變遷とその尊ぶべき事を述べ、次いで一篇の製作に、その事の起原より詠むとと今の目前の上に就いて詠むとの二種ある事を萬葉の長歌を舉げて說明し、首尾の照應に就いては詠み出でたる起句の辭の上を結句に至つて立ち還りその辭もて結ぶもの、義をもて言外に結びて照應するもの、對句を以て起して對句にて結びて照應するものとの三種ある事を、又「萬葉」の長歌に例をとりて說明し、更に段落に就いて例示說明し、對句に常對・長對・短對・隔對・三連對・反對・組織對等のある事を述べ、且つその各々に就いて例示說明し、又長歌一篇中の轉義、判辭（結末に至つてその意を判斷して決する辭）の事を說き、終りに長歌の體裁に八則あることを述べ、その各々に就いて說明してある。【價値】長歌の歌格研究は、本書に至つて大成したともいへる。殊に圖式を用ひて說明し、これによつて長歌一篇の構成を明瞭に知ることが出來る。歌學史上重要なる地位を占むべきものである。〔相原〕

聽玉集（ちやうぎよくしふ）　歌論書　一卷【編者】加藤信成【別名】請錄玉話・不昧眞院殿御說加藤信成聞書【成立】編者が烏丸光榮につき歌學を受けた中、享保十六年から元文五年まで十ケ年間の內容を錄し留めたもの。【諸本】刊本はない。轉寫本が帝國圖書館に存する。それには、寬政三年にこの書の由緒正しい旨の鑑定を日野資枝卿に受け、且つ外題裏書の染筆を受けた旨、信成の門人辭室に依つて記されてゐる。【解説】烏丸光榮の歌論聞書乃至その門下の聞書類は、相當の數に上つてゐる。併し、凡て詠歌信條十五條を骨子となり、特に新說と見做すべきものがない。定家への崇拜は『詠歌撰髓』の標信となり、歌風の不偏不黨を最も肝要のものとなして說く。無心に詠むべき事、感情の高潮、觀念の露出を忌む。これは詠歌の中心をなすべき心の誠の發露である。ありのまゝの姿であると言ふ。但し、神の道や儒佛が引合ひに出されるところ、流石近世精神の色彩を被つてゐると言ふべきであつて、單なる歌情三昧を歌とと云ふことを排斥して居る。心の誠から人道主義といふものを引出して來る後世の國學精神の一端が、こゝにも萠芽を示してゐると言つてよいであらう。ともかく、近世堂上歌人の歌典の一つであつたことは、本書の價値のすべてを表明するに足る。〔齋藤（淸）〕

聽玉集（ちやうぎよくしふ）　「雪玉集」を見よ。

長慶子（ちやうけいし）　雅樂曲【異稱】長慶樂【解説】左方樂。新樂の小曲。太食調又は平調曲に屬する。拍子十六。舞は無い。諸員の退出に用ひる。三位源博雅の作。白石の「樂考」には、「教坊記に長慶樂あり。しからば舊曲により改作りしなるべし」とあるが、これは信ずるに足らない。〔田邊〕

澄月（ちようげつ）　歌僧【俗姓】西山【號】澄月は法號、その他、隨阿・垂雲軒（雲の字は時に雨や樂の字をも用ひてゐる）。酔夢庵とも稱した。【生歿】正德四年に生れ、寬政十年（二四五八）に寂した。享年八十五（但し垂雲和歌集序には、享年八十あまり二となつてゐる）。【墓所】京都二條河東の善秀院內【學統】二條派歌人で武者

小路實岳に就いて學んだ。桃澤夢宅・西山正・浮（並）木・小寺清元・木下幸文等多くの門下を輩出した。【閲歷】彼は隱士的生涯を送つてゐたので正傳はない。備前の玉島に生れたらしい。備後福山說もあるがこゝは幼時ゐたことのあるだけの土地らしい。出でて倉敷の一商家綿屋に仕へた。町內錢屋の一老婆に辱しめられ、出世を思うて玉島の天台派圓乘院に入り、慈照法印に就いた。寺內で常に他の小僧の師範となつてゐたが、十三歳の時更に志を立てて上洛し、叡山に登り教義の研究に志した。信覺上人に認められ七年間奉侍したと云ふ。併し念佛修行に心をよせて、その後は普く念佛行脚に身を託したらしい。遙に江戶にも下り、又紀州の日方浦に止錫した事もあつた。併し彼も似雲（別項）などと等しく、歌道に對し根强い執着を持つてゐた。或る夜、月光の枕邊に射込んでゐた時、郭公の啼わたるを見て歌を得、時の堂上歌人武者小路實岳の門を叩いたと云ふが、これは偶然の一挿話だけのものであらう。天台から念佛に出た所にも彼の面目がある。名號を稱へるを詠歌に換へたことにも、彼の詩人的の性格が感ぜられる。彼が正徹（別項）に似て、形式的歌學の弊を指摘してゐる點なども、一路、詩心を味到せんとする純情の顯現に外ならぬ。永い間洛東岡崎の際夢庵に住してゐた。併し屢々旅も試みたものらしい。安永八年（六十七歳）には、住吉等和歌三神に千首を奉納するために西下してゐる。世人は、時の歌人蘆庵・蒿蹊・慈延（各別項）に澄月を加へて、和歌四天王と敬稱した。寬政五年に「和歌爲隣抄」を書いた。晩年は閑寂を尋ねて、ひたすら大原に隱棲しとほした。垂雲軒は、門下の桃澤夢宅に繼がしめ、大往生を遂げた。

【著作】和歌爲隣抄二卷（別項）○垂雲和歌集（別項）○澄月法師千首二卷（文政五年刊、徹山の序に澄月二十五回忌にあたることが出てゐる。この千首は、和歌三神へ奉納した千首で、晩年の作。部立はないが、自ら四季・戀・雜の順序になつてゐる。終に千首和歌奉納紀行が附加されてゐる）○歌枕名寄三十八卷（「澄月歌枕」とも、「澄月名寄」とも呼ぶ。寬政二年刊。清蔭の跋がある。刊本は十九冊。初め總目錄に、名寄活計客澄月撰とあるから、生前完成してゐたものと思はれる。大略、畿內部十六卷・東海部五卷・東山部七卷・北陸部一卷・山陰部一卷・山陽部二卷・南海部二卷・西海部二卷・未勘國部二卷と云ふやうに排列され、歌枕を考證した大著である。本書は古來澄月の著と傳へられてゐるが誤りである）。

【作風】澹泊の中に全身を投じながら、その行步の中に詠ぜられてゐる諸作は、ともすれば緣語・懸詞を用ひ語戲におちた發想であつた。彼の理想の歌人逍遙院の二百五十年忌にも、「おどろかす今の時雨の音よりも過ぎてあとなき昔をぞ思ふ」と、法樂歌を詠んでゐる。彼はその際、恐らく時雨のすぎ去る忙しい心持の中で、故人を追慕したのであらうに、かうした形式を採るところに、新時代に對し、如何に偏固であつたかを感ぜしめられる。彼が四天王の中に位しながら、遂に蘆庵に及ばぬところは、主としてこの一點に懸つてゐると言つてよい。

こぎかへる跡なし小舟霞む江に誰が霧切ふはるのやまもと（江山春興多）

すまれずはすまでぞあらむ此世にも濁る江ながら蓮さくなり（見蓮誓）（以上垂雲集）

けふよりは伊勢路にかゝる鈴鹿山ふるさとといづこあとのしらくも

爰ぞとはきゝてもたどるしかすがのとをきわたりに日もくれにける（以上澄月千首）

【參考】歌僧澄月傳（木下幸文（さゝやき草紙））○北窓瑣談○近世三十六名歌集略傳○落栗○歌學（三號）○心の花（一ノ一〇）（齋藤（清））

澄憲 ちようけん　天台僧【俗姓】藤原氏【法號】澄憲【歿年】建仁三年八月六日寂す。【學統】澄憲は初め、その家學である儒學を修めたが、後、天台の宗義を研究し、天台座主明雲が伊豆に流さるゝ時、國分寺まで送つて、明雲から一心三觀の相承血脈を受けた。澄憲の第三子聖覺が、その業を繼承した。【閲歷】澄憲の父は、少納言藤原通憲、即ち信西入道であり、母は高階重仲の女である。出家して初め延曆寺の衆に入り、夙に辯才を以て知られ、承安四年五月、最勝講の論義に列して辯論縱橫、その右に出づる者がなかつた。この頃、權大僧都に任ぜられ、後、大僧都となつて法印に敍せられた。程なく一條北小路大宮通安居院に退居して、法體ながら妻帶し、說經を以て道俗の敎化に力を盡した。後德大寺左大臣實定の息公守、亡母の鏡面に梵字を書して供養する際、導師となりて說經し、九條關白兼實の亡室經供養に導師となつて說經したことなど聞えてゐる。奈良の衆が五部の大乘經を寫して春日明神の寶前に供養するに方り、澄憲を請じようとして、興福寺の衆徒の憤りを招いたが、春日明神の警告に依つて、遂に請ぜられることとなつた。時に道俗がその說經を聽いて感動し、彼は數日の間奈良に留まつて、道俗から多くの施物を受けた。法體にして俗家の生活をなし、眞雲・海惠・聖覺・覺位・宗雲・理覺・惠聚・惠敏・覺俊及び一女子の十子を擧げた。【著作】源氏表白文○法滅の記等。

【參考】業資王記○尊卑分脈○平家物語○古今著聞集○源平盛衰記○僧綱補任○勅撰作者部類○法然上人行狀畫圖○長西錄○淨土傳燈系（宮尾）

超現實主義 ちようげんじつしゆぎ　藝術論（佛）Surréalisme【解說】超現實的な自由な想像を表現する最近フランスの繪畫並びに詩歌上の運動の名稱。西曆一九二四年フランスのアンドッレ・ブルトン（André Breton）がシュールレアリスムの宣言書を出し、「精神の最も偉大なる自由」を唱へ、「ただ想像力のみが在り得べきものを敎へる」と言ひ、同年の十二月には、「シュールレアリスト革命」といふ雜誌を出し、アラゴン（L. Aragon）、スーポール（Ph. Soupault）、デノー（R. Desnos）、エリュアール（P. Eluard）等がこれに加はつた。更にブルトンは、一九二八年に「シュールレアリスムと畫家」を出した。かくしてシュールレアリストの詩集が出版せられ、又シュールレアリストの家（La Maison de Surréaliste）といふ彼等の繪畫展覽會が開かれるに至る。畫家としては、この派のエルンスト（M. Ernst）の外、ダダイスト、表現主義者の一部が加はつてゐる。その理論は前述の點以外には一定してゐない。日本では繪畫の方に、古賀春江・東鄕靑兒等、主として二科會の一部の人々にこの派のものが見られる。

【參考】Breton, A.: *Manifeste du Surréalisme*, 1924. ‖ Breton, A.: *Le Surréalisme et la Peinture*, 1928.（淺尾）

鳥向樂 てうかうらく　雅樂曲【名義】樂中に於て調首に向つて奏する樂の意。【解說】左方樂。新樂（或古樂）、中曲。盤涉調曲に屬する。拍子十八。舞はない。嵯峨天皇南池院に行幸の時、舞樂としてこれを作り、調音に向つて奏した故にこの名がある。作者未詳。（田邊）

彫刻美 てうこくび（美）Plastic Beauty（獨）Plastische Schönheit【解說】三次元的形體の創造が彫刻であるが、立體的形象表現の媒材の相異によつて、塑像及び彫刻に區別される。即ち（一）は粘土・石膏・セメントの如き軟質を媒材とし、その表現の方法は中核より始め骨組を作り、外部に肉づけを行ふことによつて立體的構成を得るもので、この操作によるものを Plastic art といふ。（二）は石材・金屬・木材の如き硬質の媒材によるもので、素材の塊から始め、その內面に向つて刻み込む方法を採るもので、普通 sculpture といひ、前者と區別し、求心的操作を行ふ。兩者共に呼ぶときには彫塑といふを通常とする。彫塑の美は他藝術と異なつて、立體的形象の實在的な統一を表現するところに存する。このために形象の量的感覺と質的感覺の統一が必要である。彫刻家は製作の動因として、物・人體を選ぶのであるが、決して物や人物そのものの形體を摸作するのではない。三次元的獨自の實在的統一形象を創作するのを目的とする。この創造乃至鑑賞には、立體的深さへの運動表象と觸覺表象とが密接な關係を有するものであるが、全體的形象の統一は視覺の中に求められる。作家であり、理論家であるヒルデブラントは、彫刻製作は視覺に於ける全體形象を素材の第一次元から深化するのであるといひ、彫刻は平面的なところから、素描より出發するといふ。かくして深化の程度の上から浮彫と丸彫との區別も生ずる。（繪畫美參照）

【參考】ヒルデブラント「造形美術に於ける形式の問題」（淸水清譯）○ロダンの言葉（高村光太郎譯）○造形美術概論（外山卯三郎）（村田）

朝小子 てうこし　「太平樂」を見よ。

調子 てうし　音樂【別名】調【解說】音樂に用ひる樂音の高さに關係した名稱。この語は相異なつた數種の意義に於て用ひられる。（一）音樂上の音の高さを呼ぶ場合。これは通俗に用ひられる語で、例へば二つの音の調子が合つてゐるとか、琴と三味線と調子が合はないなどといふ場合に用ひられる時は、その音の高さを指して言つてゐるのである。（二）音階を言ふ場合。これも通俗に用ひられる語で、例へば呂の調子、律の調子などといふは、實は呂旋音階・律旋音階のことである。又田舍節の調子などといふのも、これは田舍節音階の事である。又支那の音樂に於て、宮調・商調などといふも、これは宮調音階・商調音階のことである（音階參照）。（三）音階に於てその主音即ち宮音が如何なる音律になつてゐるかといふことを現す語。今音階の宮音が壹越の音なれば、これを壹越調といひ、斷金の音なればこれを斷金調といふが如きである。かくの如く宮音を十二律の各音に置けば、十二種の異なつた調が得られる。これを十二調子といふ。これ等の名稱は主として古樂に於て用ひられ、近世の俗樂に於ては一本・二本・三本等の調子と呼ぶ。この名はもと十二律管から來たもので、即ち壹越の音を一本とし、斷金を二本、平調を三本、勝絕を四本等と呼んだのであるが、三味線音樂が普及するに及び、その本調子に於ては、中央の二の絃が宮音になるので、二の絃に前記の十二調子名を當嵌める代りに、一の絃に當嵌めた方が便利なので、これを四度音程だけ下げて呼ぶことになつた。即ち一の絃を以て言へば、

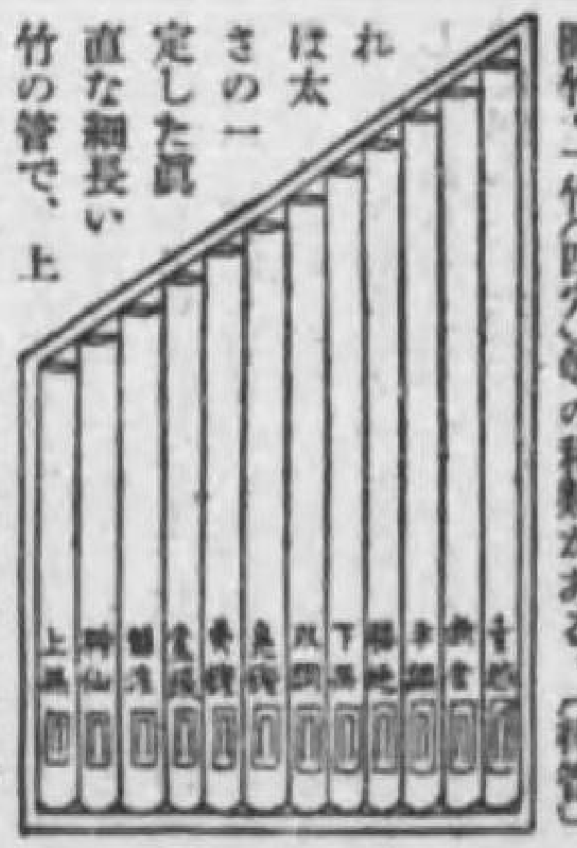
一本—黃鐘、二本—鸞鏡、三本—盤涉、
四本—神仙、五本—上無、六本—壹越、
七本—斷金、八本—平調、九本—勝絕、
十本—下無、十一本—雙調、十二本—鳧鐘

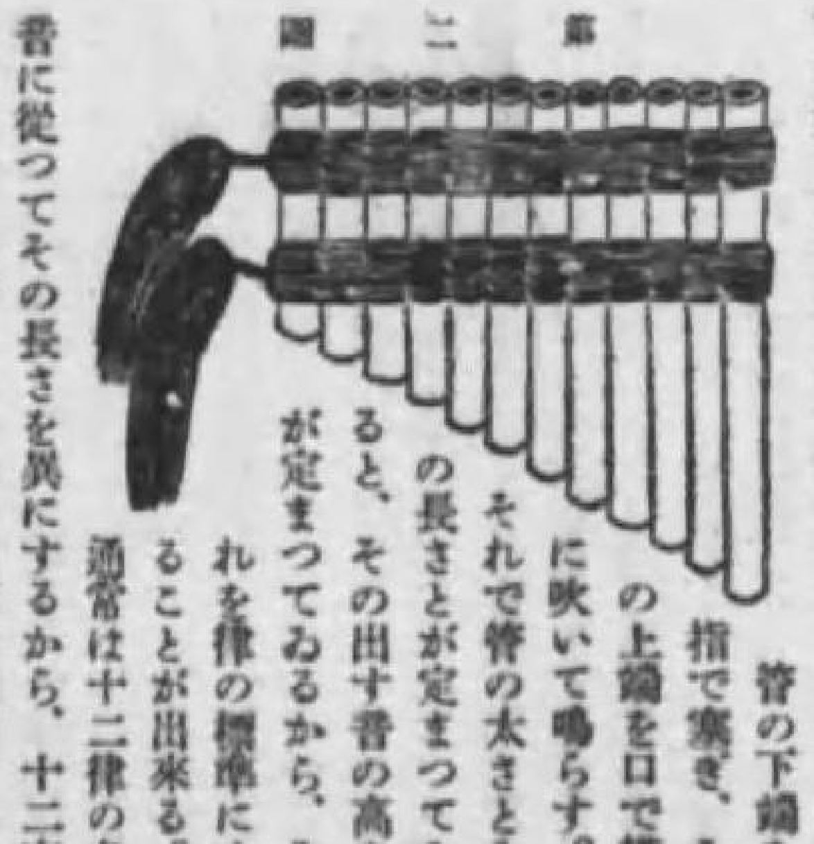
普通の三味線は八本の調子位までしか用ひない。又本邦に行はれてゐる雅樂に於ては十二調子の全部を用ひず、通常行はれるのは壹越調・平調・雙調・黃鐘調・盤涉調・太食調の六つであつて、これを雅樂の六調子といふ。太食調とは呂旋音階に於ける平調に當るものをいふ。これに對し律旋音階に於けるその宮音の平調なるものはこれを平調と呼んでゐる。その他壹越調及び雙調の曲は呂旋音階のものが主で、黃鐘調及び盤涉調の曲は律旋音階のものが主になつてゐる。即ち我が國に於て行はれる所の雅樂は大體に於て

呂旋 { 壹越調 / 雙調 / 太食調 }　律旋 { 平調 / 黃鐘調 / 盤涉調 }

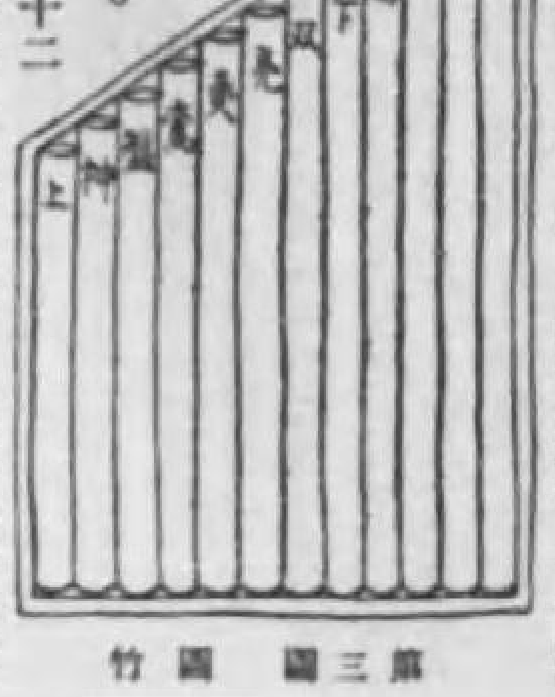
となつてゐる。（四）樂器の調律の仕方を呼ぶ場合。例へば三味線の本調子・二上り調子・三下り調子等、又箏の平調子・雲井調子・古今調子など言ふが如し（三味線・箏參照）。樂器の調律が正しいか否かを驗する場合に、單にその各絃の音を用ひて見るだけでなく、これを簡單なる旋律化して行ふ場合に、これを「調子しらべ」といふ。箏に於ては爪調べともいふ。雅樂に於ては呂旋と律旋とはその爪調べを異にしてゐる。又[illegible]「[illegible]つ撥」といふ。又音取の曲を用ひる（音取參照）。（五）雅樂の管絃又は舞樂の演奏に際し、先づ初めに各樂器の調子しらべのために奏する所の特種の合奏曲の名。但し管絃に於ける場合には、短い音取を用ひるが、舞樂又は大合奏には調子を用ひる。これは雅樂の六調子に依つてそれぞれ特殊な曲をなしてゐる。それで例へば、壹越調々子・平調々子・雙調々子等と呼ぶ。何れも笙・篳篥・笛・鞨鼓・鉦鼓・琵琶・箏の順で追々と參加するものである。（田邊）

調子笛 てうしぶえ　樂器附屬品の一【解說】正確な調子を指示するために用ひられるもの。即ち十二律の音の高さを規定するものである。その形狀及び用法の差によつて律管・調竹・一竹四穴等の種類がある。【律管】これは太さの一定した眞直な細長い竹の管で、上下兩端は直角に切つた儘になつてゐる。この管の下端を指で塞ぎ、その上端を口で橫に吹いて鳴らす。それで管の太さと長さとが定まつてゐると、その出す音の高さが定まつてゐるから、それを律の標準とすることが出來る。通常は十二律の各音に從つてその長さを異にする十二本の律管を用ひ、これを一つの箱に納めてあるか（第一圖）、又は第二圖の如くこれを竝べて打


第一圖

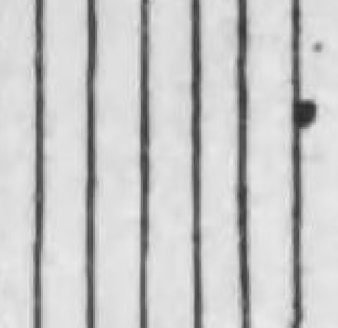

第二圖

經を以てこれを綴り合せて用ひる。この律管は支那の古代より使用され、我が國には奈良朝頃から輸入され、今日に至る迄主として雅樂家の中に於て用ひられてゐる。我が國の十二律管の由緒正しい最も古いものは、菅原道眞の自作と稱せられるもので、今は御物となつてゐる。律管は製作は簡單であつて、その物の狂ひは少いが、これを吹く方法によつて多少調子の差違を生ずるから、正確に固定して吹奏することは困難だといふ缺點がある。

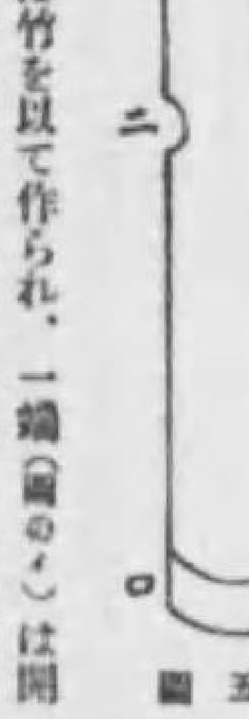


第三圖　調竹

〔調竹〕普通に調子笛と名づけてゐるもので、前記の律管の一端を塞ぎ、その端に近い側面に一定の調子を持つた金屬（眞鍮）製の簧を挿入し、この管の開端を吹き又は吸へば、直ちにその簧の調子の高さを發する裝置になつてゐる。それで管の長さは、その管中の空氣がこの簧の振動に共鳴するやうに定められてゐる。第三圖に示すものはこの種のものの中で雅樂家に用ひられるものである。管の太さは凡て同じく、正圓形である。この調竹は大きくて攜帶に不便であるから、これを小形に作り、第四圖に示したやうに各管同じ長さで約二寸の細い管を六本並列し、その中央を金屬棒で貫き、各管はこの軸の周に自由に廻り得るやうに作つたものが、近代の俗樂家の間に主として用ひられる。各管の內部に上方と下方とに金屬の舌を二個づつ入れ、何れもその管の一端を吸へばこれに近い舌が鳴るやうに裝置してある。この管の順序は二本づつ調律に都合のよいやうに並べてあつて、十二律の高さには並んでゐない。第四圖に示したものは皇室の御物たる八橋檢校作の調子笛の順序である。なほ民間には、壹越・平調・下無・双調・黃鐘・盤渉の六音だけを三本の管に納めた所の調子笛も多く用ひられる。

第四圖


〔一竹〕俗に四穴（しあな）ともいふ。第五圖の如き一本の短い筒で、象牙又は竹を以て作られ、一端（圖のイ）は開き、他端（圖のロ）は閉ぢてある。即ち象牙の儘で閉ぢるか、又は厚い紙が張つてある。筒の長さ約二寸四分、直徑は內徑四分六厘位である。管側には四つの指孔がある。この四孔を筒の閉端に近いものから順に一・二・三・四と名づける。今この器を使用するには、これを左手で持ち、第一孔をその食指、第二孔を拇指、第三孔を中指、第四孔を無名指で開閉するやうにし、右手の指の爪で筒の閉端を彈く時は、筒內の空氣はこれに共鳴して音を發する。その音の高さは開いた孔の位置に依つて定まる。この開閉によつて十二律を出すことが出來る。



第五圖

【參考】三橋檢校の一竹に就て　田邊尚雄（東洋學藝雜誌二七ノ三四四）　（田邊）

長者宣（ちやうじやせん）　古文書　【解說】藤原氏の氏長者より氏神氏寺を初め、關係深き社寺並に藤原氏一家の事に關して出す御教書式の文書。　（伊木）

被　長者宣偁、宮寺大原社遷宮事、任例、宜致遂行者、
長者宣如此、悉之、以狀、
享祿二年八月廿六日　大藏卿光豐
多武峯寺檢校三綱御中

長者傳說（ちやうじやでんせつ）　「長者屋敷」を見よ。

長者屋敷（ちやうじややしき）　傳說　【解說】長者の物語は我が國の民間文藝に於て、殊によく發達し、又最も弘く共通してゐた上に、珍らしくその大部分が傳說と化して今も記憶せられてゐる。府縣の鄕土誌にはこれを歷史の埋もれたる一片として、考證を下す者さへ今日はまだ稀でない。これには記錄を失つた舊社大寺の近代の援引もあれば、又財寶發掘といふやうな實際の利害もあつて、容易に人をしてこれを生活圏外に送り出さしめなかつたのである。日本は天變地異が多く、また社會の條件も幾度か改まり、その上に人口は可なり稠密であつたから、邑里にも山野にも、共に小さな廢墟が澤山に出來たのは當然のことである。さういふ不明の廢墟には、何れの國でも傳說の附着するのが普通であるが、それの殆ど全部を擧げて長者屋敷と名づけ、嘗て絕大の富豪がそこに住み、榮えて後又衰へたといふ風に信じてゐたのは、改めてその理由を究めなければならぬ一つの特色であつた。幸なことには日本では國の隅々まで、この長者の傳說が落ちもなく行き亙り、何れも可なり鮮麗なる色彩を保存してゐる。さうしてその主要な記憶は、完全に一致してゐるので、そのただ一點からでもその傳說の起原が、もとは各地を輪巡せられてゐた系統ある一種の說話であつたことが證明し得られるのである。所謂長者が末期に近よつて、朝日さし夕日かがやく木の下に、黃金萬兩を埋めたと傳ふる說話なども、その幾つかある共通挿話の一つであつた。それを史實と信じて苦心して掘りあるく者も亦誤まれる鄕土史家の亞流である。糠塚もしくは「すくも塚」といふ塚、又は地名は、奇妙に長者屋敷の近傍に必ずあり、大昔、長者の家の食糧が莫大で、棄てた糠殼がこの通り山になつたといふのだが、これなども奈良朝の頃から、既に行はれてゐた語り草であつた事は、「播磨風土記」がこれを暗示する。長者榮華の盛りにただ一子無きことを愁ひ悲しみ、靈佛に心願をこめて果して容色珠の如き姬を生むといふ話なども、例の矢作の金高長者以來、最も有りふれた文藝の趣向となつてゐるのだが、各地の長者傳說はそれをさへ永く認めてゐた。そのただ一人の愛娘が成長して類稀れなる高貴の聟を儲け、乃至は水の神に嫁入して土地の信仰の基礎を築いたといふ話なども、些少の變化を以て今なほ多數の長者屋敷に傳へられてゐる。因幡の湖山長者が大田植の日に、西に入る日を招き返した奢りの罪によつて、家は滅びて千町の田が湖になつたといふが如き、珍しく又繪のやうな傳說でも、搜して見ると既に遠近の數箇所に同じ例がある。一つの土地の信仰又は誤れる經驗によつて、そこだけに發生した長者傳說などは、先づは絕無といつてもよからう。元來長者といふ語を以て富人の義に解したのは、佛經には例はあるが、その以外には聞かぬことである。それを近世に入つて長者番附などといふ語があり、東北では現實の富豪を、その地の長者と呼ぶに至つたのも、つまりはこの近世の文藝の影響であつた。記錄に出てゐるのは藤氏・源氏の長者、又は僧にも東寺の長者などがあつたが、その普通の意味は、一族一群の首領といふに過ぎなかつた。近江の竹生島の蓮華長者などは、單に年々の祭の頭屋の職用と思ふ。それよりも前からよく知られてゐたのは、遊女の長者であつた。多分その仲間の一藏に限つた語だらうが、小相撲をも關取と呼んだ如く、一人行けば彼等は皆長者であつたかも知れぬ。全國の長者屋敷又は長者池等には、かういふ者から名を得た土地がありさうに思はれる。さうして彼等の主たる職分は、この類の物語を語つてあるくことに在つたのだから、二者の混同は一層この名稱の普及を助けたらしいのである。日本が古くからこれほど多くの大金持を、包容し得たと思ふと間違ひのもとである。多かつたのはその第二の「長者」である。小野のお通（別項）なども、恐らくは自身が矢作の長者であつたらうと思はれる。　（柳田國男）

晁樹（てうじゆ）　歌學者　【姓名】西原氏、通稱多門　【號】川隈舍　【生歿】天明元年二月十五日に生れ、安政六年（一八五九）七月二十日歿す。享年七十九　【閲歷】筑後柳河藩士、清水濱臣に學ぶ。和漢の學、殊に國史・歌學に通じてゐた。夙に勤王の志厚く、維新の際柳河藩が王事に竭したのは、晁樹の薰陶によるといふ。著書は甚だ多いが、「宇太驚多理」が最も知られてゐる。大正十三年二月從五位を追贈された。【業績】晁樹の歌學書「宇太驚多理」は、近藤芳樹の「古風三體考」（別項）に刺戟されて成つたもので、稿の成つたのは、安政五年、晁樹の歿した前年である。草場佩川の序文がある。論は、守部・重年・芳樹等の研究のあとを追つてゐて、創見に乏しい憾みがあるが、長歌・短歌を論ずるに、記紀・萬葉・神樂・催馬樂等の全般にわたつて證歌を引き、又對句を論ずるにあたつては、長歌・短歌・祝詞・壽詞等を對象にしてゐるばかりではなく、「平家物語」「論語」等をまで研究材料に取り入れてゐるなど、よく晁樹の學識の深博なるを語るものである。　（龍田）

聽秋（ちやうしう）　俳人　【姓名】上田肇　【別號】花の本十一世・不識庵　【閲歷】嘉永年中、美濃大垣に生る。維新の勤王家小原鐵心の血族である。初め東京に出て、慶應義塾・大學南校に學んだが、病のために中途退學し、八木芹舍の門に歸して俳道に入り、明治十七年京都に梅黃莊を組織して「鴨東新誌」を發行した。二十三年十一月二條家から推されて花の本の道統を繼ぎ、十一世を稱した。二十六年芭蕉翁頌碑を洛東通天橋畔に建立し、衆僧を招いて翁の二百年忌を執行した。三十五年四月菅公一千年祭に際し、北野神殿に於て古式を復興して二條公の臨席を仰ぎ、俳諧連歌を興行した。爾來健在今日に至つてゐる。【著書】月ケ瀨紀行○錦秋百吟○鶴鳴集等。　（伊藤）

長秋詠藻（ちやうしうえいさう）　私家集　三卷　【作者】藤原俊成　【名義】題名の長秋は「後漢書」に、「有司奏立長秋宮」その註に、「皇后所居也、長者久也、秋者萬物成熟之初也、故以名焉、不敢指言、故以宮稱之」とあつて、皇后の御殿を指す言葉である。俊成は皇太后宮大夫の職にありしに因んで名づけたもので、詠藻は、詠草の意であらうと謂はれてゐる。【諸本】古寫本には、宮內省圖書寮藏本（桂宮舊御藏本）がある。その本には次の如き奧書がある。下卷「右大臣家百首」の前に、

此三箇帖者二年夏依仁和寺宮召所被書進也、件本（自筆）近年依貴所召進覽、未返給之間、錄偏忽忘更申請竹園御本令書留之、以件本又書之、　寬喜元年四月廿二日　正二位（花押）

下卷「千五百番之歌合」の前に、

此一帖、京極黃門筆、安嘉門院四條局所藏也、以本不違一字、亡父卿予実筆令書寫之畢、尤可秘藏之證本者也、　天和七年小春中旬（花押）

下卷の最末に、

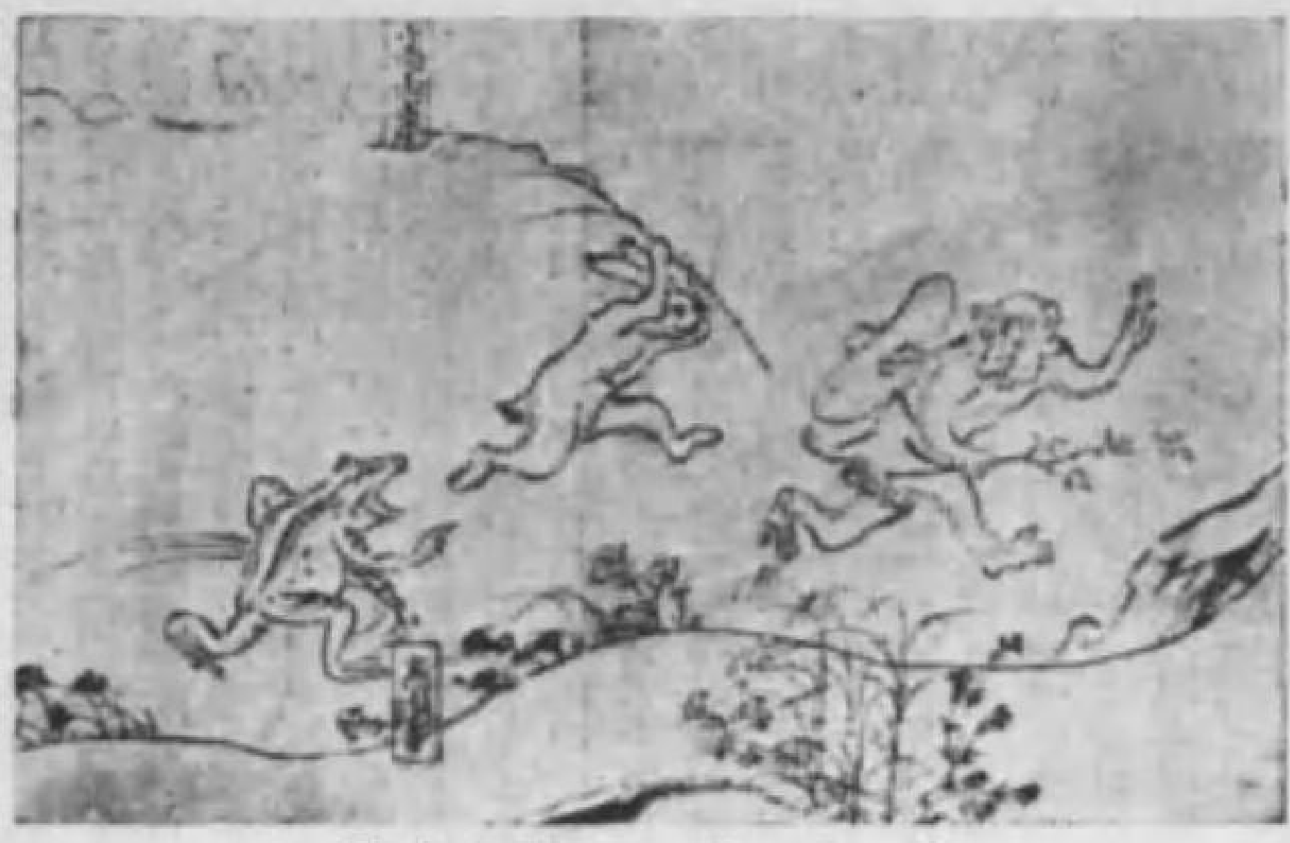
此長秋詠藻今度加書寫校合畢、錄有誤寫者也人之六家抄、以本集所撰之間、加斯校於此草者、雖令所持之可錄一具之故、新調之者也、
慶長三年孟冬初三　　丹山隱士玄旨
慶長十九林鐘七一校了

最後の奧書と、同文の奧書を有する寫本（一卷）が神宮文庫にある。刊本には六家集本があり、明治以後、續國歌大觀・國歌大系・古典全集等に所收刊行。【內容】卷上には、久安の頃崇德院に百首歌召しし時奉りし歌（短歌百十八首、長歌一首及びその反歌一首）、「堀河院の御時の百首の題を述懷に寄せて詠みける歌、保延六年の頃の事にや」とある二つの百首を載せ、卷中には部類を立て、春歌十九首、夏歌十五首、秋歌二十四首、冬歌十八首（その內、他人の歌を錄せるもの二首）、賀歌三十四首、戀歌四十七首（內八首は贈答による他の人の作歌）を載せ、卷下には、雜歌四十二首（內十八首同上）、釋敎の歌六十六首、神祇歌十二首と分類し、更に「右大臣家百首」（治承二年五月晦比給題七月追詠進）、「千五百番歌合之百首」を載せ、次に「崇德院讚州にして崩れさせ給ひて後、御供なりける人の許より傳へられて斯かる事なん有しとて折紙に御宸筆なりける物を傳へ贈られたりしなり」と前書して、崇德天皇の御製なる長歌と反歌一首とを載せ、俊成がそれに奉和して作れる長歌一首反歌一首を記したるを初めとし、兼實・慈圓等との贈答、文治六年女御入內の屏風歌などを載せ、最後に西行の死に就いて記し、「願ひ置きし花の下にて終りけり蓮の上にも違はざらなん」の歌もて卷を終つてゐる。崇德院の長歌以下、小計長歌二首、その反歌各一首、その他五十五首（內八首他人の歌）。通算するに短歌七百二十九首と長歌三首及びその反歌各一首となる。【價値】俊成の所謂幽玄體の歌を見るべきは勿論ながら、長歌を短歌と記した點や、中卷釋敎の歌中に引用されてある「極樂六時讚」の斷片が、和讚の歷史の上で注目すべき文獻らしく思はれる點など、注意すべきであらう。

【參考】長秋詠藻備考　岡本保孝（眞齋叢書二六所收）○長秋詠藻の成立　兒山信一（國語と國文學　昭和四ノ七）　（松田）

鳥獸戲畫（てうじうぎぐわ）　繪卷　【解說】栂尾高山寺所藏四卷。外にその斷片が二三諸家に收藏されてゐる。一般に鳥獸戲畫と呼ばれてゐるが、その內容から言へば（甲）蛙・兎・猿などの擬人的嬉戲の樣を畫いたものが一卷、（乙）鳥獸野生の樣を畫いたものが一卷、（丙）法師等が首引き、轉引き等遊戲の樣を前半に、猿・兎等の擬人的嬉戲の樣を後半に綴合せたものが一卷、（丁）人物の流鏑馬・打毬等の戲畫が一卷であつて、四卷一括して鳥羽僧正覺猷の筆と喧傳されてゐるが、四卷の筆致は必ずしも同一とは言へぬ。甲乙兩卷は蓋し同筆で

摘寫最も優れ、鎌倉以前と思はれる筆致の特色が窺はれるが、丁卷はその描寫最も墮落で鎌倉期に入つてからの製作と思はれる。而して丙卷は前半後半同筆とも思はれないが、何れも甲乙卷や丁卷とも同じからず、畫致は正にこの兩者の中間を行くものであつて、前半は丁卷に似て而も一層勝れてをり、後半は甲乙卷に似て而も描寫やゝ劣つてゐて、槪して言へば丙卷も鎌倉期の製作かと思はれる。かく筆者も一人でなく製作も同時と思はれないから、その主題の意味も製作の由來も那邊に在るか容易に斷じ難い。鳥獸の擬人描寫は、當時の僧侶を諷刺したものかとの說が古く行はれてゐたが、最近に至つては、六道思想を背景とする畜生繪の轉化であらうとの新說も出てゐる。とにかくその描寫は總じて戲畫的であるから、自ら一種皮肉の感を抱かしむる所もあるのみならず、畫中に僧侶關係のものが多いから、畫僧の筆として寺院生活のつれづれに戲作したものかも知れない。從つて鳥獸描寫などに、佛教思想を反映せしむるのも自然である。筆者に就いては最近鳥羽僧正說を排して、この中甲・乙卷の如きは繪佛師定智の筆と想定する新說も出てゐる。とにかく描寫の秀拔なもので表現の滑稽たる點は、他に多く類例を求め難い。その全く白描に終始してゐる點も、この繪卷の特色で、當時僧侶や繪佛師の間に、佛教圖像の白描抄寫が行はれた事とも密接な關係を辿り得るであらう。因みに後世鳥羽繪といふは、鳥羽僧正の名に由來するもので、その源流を溯れば、この戲畫などにこれを辿る事も出來るであらう。（田中一二）



鳥獸戲畫（高山寺藏）

鳥獸物の謠曲（てうじうもののえうきよく）

【曲目】鳥獸蟲魚の類を主人公とした謠曲に、「石橋」「龍虎」「猩々」「大瓶猩々」「合浦」「鷺」「鶴龜」「初雪」「胡蝶」「殺生石」などがある。【諸本】現行諸流謠本。その他、謠曲叢書・國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番集（日本名著全集）等所收。

【石橋】五番目〔作者〕世阿彌（謠本作者註文）とも元雅（二百十番謠目錄）ともいふ。〔內容〕寂昭法師（ワキ）が入唐して、淸涼寺に參り、石橋を渡らうとすると、樵夫（シテ）が出て、神變佛力がなくては、この橋を渡ることは出來ないと引き留め、後獅子（後ジテ）が現れて舞を舞ふといふ曲。能樂の先進文獻たる風流の「摩闘師語淸涼山事」を本としたものか。劇的夢幻能。五流現行。

【龍虎】五番目〔作者〕觀世小次郎（謠本作者註文・二百十番謠目錄）〔內容〕諸國一見の僧（ワキ）が入唐すると、樵夫（前ジテ）と漁夫（前ヅレ）が來て、龍虎の勇ましい樣を物語つて歸る。やがて虎（後ジテ）と龍（後ヅレ）が現れて相爭つた後、龍は空に上り、虎は竹林に入つたといふ曲。「龍虎相搏」の成語から想を得たもの。劇的夢幻能。觀世現行。

【猩々】五番目〔作者〕不明〔內容〕支那揚子の里のかうふう（ワキ）は孝行の德によつて、潯陽江の猩々（シテ）から無盡藏の酒壺を與へられたといふ曲。出典は見當らない。庭訓往來註市町之興行の條に、同趣の記事がある。一段劇能。五流現行。

【大瓶猩々】〔作者〕不明〔內容〕前ジテ童子、後ジテ猩々として、前曲を複式に潤色したもの。觀世現行。

【合浦】五番目〔作者〕不明〔內容〕支那合浦の者（ワキ）が鮫人といふ魚を助けると、その夜童子の姿（前ジテ）で來て禮を述べ、やがてその精（後ジテ）が現れて壽命長遠息災延命の寶珠を贈るといふ曲。「述異記」の鮫人說話と、「蒙求」の合浦玉說話とを結び合せたものであらう。劇的夢幻能。觀世現行。

【鷺】四番目〔作者〕世阿彌（二百十番謠目錄）〔內容〕帝（ツレ）が神泉苑に行幸の御時、藏人（ワキ）に洲崎の鷺（シテ）を捕へよと仰せられると、鷺は敕をかしこみ、進んで藏人に捕へさせたので、御感の餘り五位の位を賜はつたといふ曲。「平家物語」卷五「朝敵揃への事」に據つた。觀世・寶生・金剛・喜多現行。一段劇能。

【鶴龜】脇能〔作者〕不明〔名稱〕喜多流では「月宮殿」といふ。〔內容〕皇帝（シテ）が新年の佳節に鶴（子方）、龜（子方）の舞を舞はしめ給ふといふ曲。一段劇能。五流現行。

【初雪】四番目〔作者〕金春禪鳳（謠本作者註文）〔內容〕姬君（前ジテ）が寵愛してゐた初雪といふ鷄の死を悼んで、友達の上臈（後ヅレ）を集めて佛事をすると、鷄の精（後ジテ）が現れて成佛を喜ぶといふ曲。出典はない。複式夢幻能。金春現行。

【胡蝶】三番目〔作者〕觀世小次郎（謠本作者註文・二百十番謠目錄）〔內容〕吉野の僧（ワキ）が都に上つて、一條大宮の梅を見てゐると、胡蝶が女姿（前ジテ）で現れ、梅の花に緣のない恨みを述べて消える。そしてその夜、僧の夢に、胡蝶の精（後ジテ）が現れ、法華の功力によつて梅花に戲れ得た喜びを述べ、舞を舞ふといふ曲。「莊子」の胡蝶夢の故事、「源氏物語」胡蝶の卷の文を主材とした。複式夢幻能。觀世・寶生・金剛現行。

【殺生石】五番目〔作者〕日吉安淸（二百十番謠目錄）〔內容〕源翁道人（ワキ）が陸奧から都に上る途次、下野國那須野に來ると、この殺生石は鳥羽院の御時帝を惱まし奉つた玉藻前の化したものであると敎へて石に隱れる。源翁が石に向つて敎化すると、殺生石の石魂が野干の姿（後ジテ）で現れ、三浦介・上總介のためにこの野で射殺された樣を語り、今後は惡事をしないと誓つて消え失せるといふ曲。「下學集」（犬追物）、「臥雲日件錄」（享德二年）等にも記されてゐる傳說で、この原據は、「本朝高僧傳」に記してゐるやうに、「傳燈錄」などの破竈墮の說話の展開したものであらう。劇的夢幻能。五流現行。

【構想】「石橋」以下「鶴龜」に至る七曲は、祝言を主としたもので、戲曲的な內容は乏しい。「胡蝶」は草木精魂物（別項）と同型のもの、「殺生石」は、悽愴な傳說を巧みに潤色したもので

ある。「石橋」「猩々」「鶴龜」「殺生石」は後の文藝に大きな影響を與へてゐる。【參考】謠曲評釋大和田建樹○謠曲大觀佐成謙太郎（佐成）

長嘯子（ちやうせうし）

歌人【姓】木下・豐臣。本姓は平、又、杉原氏【名】勝俊字は大藏【別號】擧白堂・天哉翁・松洞等と稱し、住地に依つて西山樵翁・東翁等の雅名を用ひてゐる。長嘯の號は隱遁して東山參翁長嘯と稱したのに始まる。【生歿】永祿十三年生れ、慶安三年（二三一〇）六月十五日歿（一說慶安二年）。享年八十一【諡號】大成院【墓所】京都の西郊小倉山の常照寺。その碑は東山高臺寺にも遺存してゐる。【家系】その先祖は伯耆守平（杉原）光平に出づ。父家定は肥後守で紹英と號し、その妹は豐臣秀吉の母である。弟に中納言秀秋がある。但し長嘯の實母松丸殿は一時秀吉の愛妾であり、後に武田元明に嫁し、更に家定に再嫁したので、長嘯實はその元明の子であるとも云ひ、別に京極高吉の息であるとも言ひ傳へられてゐる。【師統】細川幽齋門。長嘯の門下には春正・公軌・立圃などが出てゐる。【閱歷】尾張に生れたが、秀吉の義甥の關係で早く從五位下に敍され、天正十六年には從四位下、侍從の職を授けられた（十九歲）。文祿元年の征明役による名護屋出征、ついで彼は若狹守となり小濱の城に入り、左近衞權少將となつたが、生來文事を愛好した。桃山文化の影響もあつたものであらう。二十三歲の時、彼の錄した「九州の道の記」（群書類從第三三八）は、文辭觀妙なるのみならず、短歌・長歌の詠はその歌人的天賦を證し、歌名所の知識、「萬葉集」の引歌は、歌學者的敎養を語つてゐる。その他、彼は蹴鞠の技に通じ、庭園趣味をもその中に敍べてゐる所、若輩の武人とは思はれ難い程である。而も單なる風流好みの享樂歌人でなく、遙かに正徹（別項）の風格に憧憬れてゐた。偶々慶長三年秀吉の薨去と共に、豐臣・德川の間には不安な暗雲が漲してきた。父家定は慶長五年姬路城に封ぜられ德川氏に屬してゐたのであるが、長嘯はその歸趨に迷つた。初め秀賴の命に依つて守つてゐた伏見城は、鳥居元忠の殉死と共に棄てて歸洛したのであるが、若狹の留守兵田邊城を包圍した爲めに、關ヶ原戰後、德川からその封地を奪はれてしまつた。併しこの悲運は、却つて文人長嘯子に剃髮隱栖する好機會を與へる事になり、專ら世俗を超脫して京都東山靈山の擧白堂に隱れた（三十一歲）。歌は幽齋の指導を受け、學は惺窩などと相研鑽するところがあつた。閑居の樣樣を敍したものに、「山家記」「朝ぼらけ」「石枕記」等がある。好學の士で、やがてその藏する書、漢籍千五百卷、歌書類二百六十部に及び、惺窩その他その借覽を求めたものも多かつたといふ。晚年は靈山の都近いのをすら煩はしいとして、多く洛北大原野小塩山の麓に潛居した。その際、同じく幽齋門の貞德が、「とにかくに月はうき世にすまじとや山より出でて山に入るらむ」と云ふ歌を送つて來たので、長嘯また「こゝもまたすみこそやられ大原やあこがれ出でしふるさとの山」と返歌してゐる。八十一歲の長壽を保ち得たが、晚年の消息は審かでない。但しその淸淡純一の生活のために、世人の注目を惹く點も多く、種々の逸話を遺してゐる。辭世「つゆの身のきえてもきえぬおき所草葉のほかに又もありけり」【著作】擧白集（別項）十卷八册○長嘯子文集一卷（寫。內閣文庫藏。主要な文章を收め輯めたものである）○若狹少將勝俊朝臣集（群書類從卷四四三に收む。歌數四百餘首、選者である）○長嘯歌選（下河邊長流選による抄本で、所謂三家和歌集の一。契沖全集附錄長流全集所收出版）。なほ文集甚だ多く、「扶桑拾葉集」に採られたもののみでも三十六篇に及び、集中、數に於て第一位を占めてゐる。

【作風】保守精神に依つて全く沈滯しきつた歌壇に於て、長嘯こそ唯一人の革新派であつたと言ふに憚らない。彼は幽齋との私交關係上、その誘掖をも受けるには受けてゐたが、彼の理想は寧ろ遠く爲家とか正徹とかの歌調に存してゐた。第一に取材の淸新と自由、第二に漢語調を加味して歌調の勁健、第三に自由闊達な詠み振り、これ等をその特色として擧げ得る。「難擧白集」（慶安三年、尋舊坊著）の如き反駁書が、保守派の中から出たことも如何にもと思はれる。その攻擊に對して、更に「擧白心評」といふ辯護書すら現れた。次には、例歌として山家の歌を數首揭げるに止める。

さびしさを尋ねて入りしおく山にあるじがほなる
峯の松風
しづかなる峯の木の間にかげおちて夜ふかき花に
月わたる見ゆ
今朝よりはものあぢきなく心ゆきし人わびさする
秋や來ぬらむ

又文章は凡て行文流麗で、停滯する所がない。「心戒」の如きに至つては、所謂俳諧文の先驅をなすものとも言へよう。【史的地位】過渡的時代にあつて、冷泉派程度の淸新さではなほ効驗の乏しい憾があつたが、秀吉の甥に長嘯子のあつた事は、やがて擡頭した文藝復興運動に對して、全然沒交涉のものには考へ難いと思ふ。環境の反映と云ふものを、彼に於ても全然否定する事は許されないであらう。【參考】翁草○玉勝間○鬱尻○長春閑筆○假名世說○續近世畸人傳○野史（齋藤（淸））

超人主義（てうじんしゆぎ）

【解說】超人（Uebermensch）とは、ヘインリッヒ・ミュラアやヘルデル、ゲエテ等によつて用ひられた語であるが、超人主義を明かに高潮したのは近代のことで、ニイチエがその主張の代表者である。ニイチエは、權力意志を以て實在の本質とし、その最も多く表れた、最高理想の最もよき體現者としての理想的人間を超人と呼ぶのであるが、彼の超人主義に於ては、肉體的にも精神的にも、凡衆を遙に超越して、自分の立てた道德によつて行動する藝術的に優秀な人、或は剛健敢行の意志ある人を天才として、これを稱揚するのである。併し彼はただかゝる天才を稱揚するのみに止まらず、更に人類一般がかくの如き天才となつた狀態を理想とするのである。從つてこの意味に於ける超人主義は、人類の理想鄕、究竟地であつて、超人を生產し養成することが、誠に人類の目的であるとするのである。「ツァラトウストラ」はニイチエのこの超人主義を最もよく代表してゐる著作であると言はれてゐる。ニイチエの外に、この超人主義の文學の中に含まれる人にストリンドベルヒがある。その作「大海のほとり」の如きは、明瞭にこの主義を發揮してゐる作品である。

【日本に於ける超人主義】日本に於ては、明治二十七八年頃から三十七八年頃までの間が、浪漫主義の時代であつて、世界主義の運動が起るにつれて、その反動として日本主義が叫ばれた。高山樗牛は日本主義提唱者の一人であるが、日本主義の現實的傾向に行き詰つて、

自我の權威、個性の尊重を必要とし、個人主義、本能主義と共に天才主義卽ち超人主義を提唱したのである。この思想は、ニイチエの哲學に發してゐるのであるが、必ずしもニイチエと同一ではない。併しニイチエが舊道德や舊倫理を呪ひ、凡人主義の思想を憎惡して、君主の道德、强者の道德を主張したやうに、在來の凡俗主義に眞向から反對して、天才を活かし、非凡を主とする超人主義を高唱したのである。　（宮島）

鳥醉筆蹟

鳥醉（てうすゐ）　俳人【姓名】白井信興。通稱喜右衞門【別號】牧羊・西奴・百明房（伊賀實錄・夏山伏）・留明・風日・實歩坊（以上懷玉抄）・松牛牧士（南靑春）・南齋山人（五七記）・露霞窓・露柱庵・松露庵・松原庵・鳴立庵【生歿】明和六年（二四二九）四月四日歿す。享年六十九【墓所】品川海晏寺【閲歷】上總國埴生郡地引村の人で、長南城主武田豐信の後裔武田信景の裔だといふ（露柱庵歿二箋俳諧家譜）。鏡山に關係して家産を失つたので（俳諧家奇人談）、少壯にして故園を去り江戸に出た。寶曆十三年に書いた文章に自ら「南總を出て卅年餘り」と言つてゐるのに據れば、それは享保末年の頃であつたらしい。かくて佐久間柳居に從つて俳諧を學び、牧羊人西奴と號した。「俳道系譜」に初號長水とあるが柳居の初號と混じたものか、若しくはその號を與へられたものでもあらうか。なほ寶曆十一年刊乙由追善集「一字題」の中に、鳥醉は自ら麥林先師と言つてゐるから、直接乙由に會つた事があるかも知れぬ。而してこの西奴の名を初めて文獻に見るのは元文二年刊の「夏山伏」と「八居題詠」とであらう。のち幾許もなくして號を鳥醉と改め、延享元年には遠く松島に遊び、同三年には師に從つて京都に赴き風交を汎くした。柳居の歿後その遺蹟たる葛飾の三升庵を去つて、柳原の邊に露霞窓の額を掲げたが、更に又日本橋銀町の松露庵に移つた。こゝで門人の來り集まる者が漸く多かつたが、彼は庵を高弟左明に附託して、遠く京阪地方に赴いた。「壬生山家」（寶曆九年）に據れば、寶曆六年九月大阪天王寺の壬生山淨春寺に芭蕉の舊蹟を訪れ、遂にここに金龍庵を結ぶに至つた。又同七年三月には吉野に花を見、翌八年三月には伊賀に遊んで、「伊賀實錄」（「冬扇一路」中に收められ、伊賀で聞いた芭蕉に關する逸話を集めたものである）を撰び、九年春には門人鳥明を伴ひ、再び吉野に登つた。かくて難波に居を定めて四年の春秋を送つた。大阪には金龍庵の外兄花庵・菅田廬・二葉庵があり、又京都四條にも有明庵があつた。寶曆九年秋東都門人の迎ひに應じて東に歸り、南總の露柱庵に入つた。「五七記」の序に、往し年の秋故鄕に歸つて東壽山に隱棲したといふのはこの時の事である。而も故山にもやはり長く心が留らなかつたと見え、諸方に笻を曳いてゐたが、品川海晏寺附近の風色を愛でて、此處に松原庵を營んだ。時に寶曆十三年である。かくて久しぶりに定住の地を得たが、その後も明和元年には八王子、二年には常野地方、三年には常總地方と諸所に行脚をつづけ、同年相模鳴立庵を再興してこゝに移り住む事になつた。明和五年四月、故鄕に歸り亡母の五十回忌を營んだが、同年初冬の頃から病み、翌年江戸に出て病を養つたが遂に起たず、四月四日歿した。「濃きうすき雲に持ち得て時鳥」といふのがその遺章である（うつきの鳥）。【批評】鳥醉は柳居の門にあつて、伊勢派の平易な句風を固守し、敢て一歩を進めようとしなかつた。「俳懺悔」に見える古池吟の解や附句の說によつても、彼の平明說が能く覗はれる。「三日月のぬけて落ちたる柳哉」「ものもなく動かぬ海や朝霞」「松風の骨になつたる寒さ哉」等の作で、ほぼその句風は察せられよう。併し彼が俳壇の陵夷した時代に出でて、而も甚だしい卑俗に陥らず、且つその門から相當の人材を出した事は、彼の功績として認められねばならない。【編著】伊賀實錄○五七記一册（寶曆十三年刊か。先師柳居の追善のためその歿した當時の五七日間の日記及び實錄を刊行したもの）○俳諧攷補提要錄二册（鳥醉の俳論を門人が筆錄したもので、彼の識見を知るのに最もよい。安永二年に一度成つて世に行はれたが、同七年二月燒失したので、更に遺語の殘つたのを補ひ出版したのである）。

【門流】主な門人には、左明・鳥明・百明・昨鳥（白雄）等がある。左明は師から松露庵二世を讓られたが、寶曆十年師に先立つて歿したので、鳥明がその三世を繼いだ。鳥明は師に隨身する事十有餘年、屢々行脚を共にし、師の歿した時には追善集「うつきの鳥」を撰んだ。又寛政十三年三十三回忌には「懷玉抄」二卷を編して、先師が一生の間各地に遊歷して詠んだ遺草を集めて出すなど、最も能く師のために盡したが、その年六月十八日七十六歲で歿した。昨鳥は後白雄（別項）と號し、鳥明とは義絕したが、俳人としては最も大成するに至つた。又その門の星布尼は松原庵を、春鴻は露柱庵を、葛三は鳴立庵をそれぐ〜繼承して、鳥醉の衣鉢を後に傳へた。百明は上總東金の人で、葛三の前に鳴立庵二世を繼ぎ、天明四年七月二十二日歿した。　（潁原）

長翠（ちやうすゐ）　「奧羽四天王」を見よ。

長頭丸隨筆（ちやうづまるずゐひつ）　隨筆　一卷【著者】松永貞德【成立】卷末に「慶長十とせきのとの巳の天、ふりみふらすみさだめなき頃よと川のいほりにて筆をとり畢」とある。【諸本】久しく傳寫本のみであつたが明治二十五年「日本文庫」に收められて刊行された。【解說】歌道の師傳を細川幽齋より受けた著者の閲歷談に交へて、歌道に遊ぶ者の心得などを說き、又俳諧・茶式・神書等の事にも及んだものである。自己が初めて歌書の講義を民間に聞いた時の事を叙して、「此頃道春はじめて論語新註をよみ、宗務太平記をよむ。われにも歌書よめと下京の友達どもすゝめしより、何の思案もなく百人一首つれぐ〜草を人の發起も無に群集の中にて大事の名目などをよみちらし侍りけるを、中院入道殿のきこしめしつけさせ給ひて、陰にて御にくみ有けるとかや云々」とある。古典開拓の先驅者として堂上家輩の嫉視を被つた樣子がよく分る。書き終へたのは貞德齡三十三歲の時である。又前記の中院入道は貞德と師を同じうした權中納言通勝の晚年素然と稱したのを指す。　（和田）

調節（てうせつ）　音聲學【英】articulation【獨】die Artikulation【佛】l'articulation【解說】ズィーヴェルス（Sievers）の所說に從へば、喉頭及び共鳴部（咽頭・口・鼻、及びこれに屬する諸部分）を有意的に働かして氣息流の壓力を加減すること、及び氣息を變化させることが廣義の調節である。狹義には、某音（言語音聲）を作るとき、音聲器官に特殊な構へ方をなすことをいふ。平易に言へば、言葉の音聲を發する喉や口の諸部分の働きである。調節を大別して、（一）音聲發生の調節（Schallbildende Artikulation）及び、（二）音聲修飾の調節（Schallmodifizierende Artikulation）の二種とする。前者は例へば喉頭（聲帶）を働かして、「こゑ」「さゝやき」等を發すること、又舌や脣を働かして諸種の子音を發する事をいひ、後者は例へば聲帶に發した「こゑ」をば、口腔の大さと形との變化によつて修飾して所謂母音の差別を作ることをいふ。音聲修飾の調節は母音に於て最も著しい。所謂子音に於ては、例へばʃ音（英語等でshを以て表す音）を發しつつ脣の開口を加減する時、ʃ音に多少の變化を來たす等の外餘り著しく現れない。

【調節基礎】【獨】die Artikulationsbasis【英】the basis of articulation【佛】la base d'articulation　或る國語或は方言について、各々その音聲の調節基礎を異にするをいふ。卽ちその國語或は方言に使はれる音聲の多くに通じ、音聲器官の或る特有な調節位置がある時、これをその國語或は方言の調節基礎といふ。例へば、英語に於ては多くの音に通じ、舌全體を奧に引き舌の前部を廣くし、舌端は上齒裏よりも寧ろ上齒齦に多く接し、脣は他の部分の運動に伴つて受動的に動く等の特徴がある（Sievers に據る）。フランス語に於ては、脣が活潑に動き、舌は表面が凸形となり前方に進む傾向がある（Roudet に據る）。　（神保）

【參考】Sievers: *Grundzüge der Phonetik.* 5. Aufl. 1901. § 291.　Roudet: *Éléments de phonétique générale.* 1910. P. 37.

廳宣（ちやうせん）　古文書【解說】在京遙任の國守から在國の在廳官人（留守所）或は鄕などに下す文書。平安朝から南北朝頃まで見えてゐる。樣式は官宣旨（別項）式であるが、終りの署判に「守」とあるは國衙の守で、「大介」とあるは個國の守であらう。　（伊木）

廳宣　留守所
　可早任　院宣免除金剛寺四至内田畠山野等所當
　官物以下臨時雜事幷又禁斷殺生事
副下
　院宣御下文一通
右件寺者、依致聖朝之御祈、且爲
禪定、且爲祈禱、最可崇重、就致高介、況乎添被成下
院宣御下文、任其狀、永可免除四至内田畠山野等所
當官物已下國役臨時雜事也、就中可禁斷殺生事、縱
命殺服、若不拘制法者、憑可加嚴禁之狀、所宣如件、
留守所宜承知、依宣行之、以宣、
　建久二年六月　日
守源朝臣（花押）

朝鮮（てうせん）　小說【著者】高濱虛子【發表】明治四十四年七月東京日日新聞【刊行】明治四十五年二月春陽堂。現代日本文學全集所收。【梗概】著者夫妻は朝鮮に渡つた。大邱では、親戚の家に泊り、又果樹園を經營してゐる友人を訪ねて、旅芝居の一座にゐる青年慶之助とも會つた。京城では何の仕事をしてゐるのか解らない石橋剛三といふ男と、今は金成鎬夫人になつてゐる昔馴染のお房さんに迎へられた。石橋の宿である南山樓に行李を解いたが、剛三の宿にはいつも二三人の浪人風の男がたづねて來る。そこにはお筆といふ美人もゐた。お京さんといふ有名な女中もゐた。そこへ慶之助もたづねて來た。慶之助は一座の花形であつた。著者は剛三や、剛三の友人で當年の志士である洪さんの案内で、いろ〜のものを見た。素淡といふ妓生と知つて、身の上話も聞いた。或る時は執念く言ひ寄つてくるお筆に當惑したり、お筆や洪さんと淸涼里の月も見た。その中に突然行方をくらましてしまつた剛三をあとにして著者は平壤へ向つた。こゝで又洪さんと落ち合ひ、牡丹臺に登つてお牧の茶屋に休んで好印象を得た。宿に歸るとはからずもお筆が來てゐる。後を追うてつきまとつて來るこの女には益々閉口する。そこへひよつこり石橋剛三が現はれて來て、お筆も剛三も、滿洲へ行く途中であつたことがわかる。慶之助も一緒に滿洲の旅興行に出掛けるといふ。二三日後、平壤に集つたこの人々は、府尹などを加へて大同江に船を浮べ、萬景台に遊んだ。素淡とお京も京城から呼び寄せられた。お牧の茶屋のお牧も加はつた。素淡は唄ひ、お京は踊つた。翌日滿洲へ赴く剛三・お筆・慶之助等の一行を停車場に見送つた。その後お筆から、いろんな意味を含んだ二通の旅だよりがあつた。

【批評】當時の他の寫生文家は、當面の事象を、いかに忠實に描寫するかの技術に努力するだけで、斷片的であつた。著者は個々の斷片を斷片と見ない。どの斷片も、一つ一つの人生に繫がつた、大きいか小さいかの連鎖だと見る。「朝鮮」はその代表的な作品で、朝鮮の風物や人物を、漫然と寫生しはしない。どこか荒んで自暴自棄な、敗殘的な、新領土的ないろんな人生面を自然の背景の上にかつきりと掬ひ取つて來て、當時の朝鮮の氣分や風土を、且象的に、痛いほど讀者の印象に鮮明に叩き込む。それは、この作者のやうに、一致した態度と技巧とによつて始めて成功する。特色に富んだ力のこもつた長篇だ。鐘路の夜や大同江の夕などは、描寫や情趣の最もすぐれた部分である。　（木原）

朝鮮語（てうせんご）　世界の言語の一【名稱】韓國時代には、その國號に因んで韓語と稱せられたが、今日は一般に朝鮮語といふ。又古く朝鮮人は自國を以て支那の延長と考へてゐた結果、自國語を以て諺言又は方言など稱へ、又支那に對して自國を東國と稱したに因んで自國語を東言などとも稱へた。【範圍】現在朝鮮語の行はれる範圍は、鴨綠・豆滿兩江以南の所謂半島地方及びその所屬島嶼に行はれてゐるが、東間島及び琿春地方には三十萬餘の朝鮮人が移住し、遙かに支那人の人口を凌駕し、朝鮮式の生活を營み朝鮮語を使用するを以て、現在に於ける朝鮮語の勢力は國境を越えて大陸地方にまで進出してゐると見ることが出來よう。【方言】この廣大なる地方に分布せられた言語に、地方的色彩が現はれぬといふことは到底考へられない。故人の遺した記錄の中には、何々地方の方言として、若干この問題に觸れた資料が發見されぬことはないが、固より朝鮮語全體に對する記述ではない。私は音韻・語法・語彙の各方面より概觀して、朝鮮語の方言を（一）京畿方言（京畿道・黃海道・忠淸南道の全部、忠淸北道の大部分、江原道の東南部を除く大部分、咸鏡南道の定平以南の地）、（二）平安方言（平安南北道の殆ど全部）、（三）咸鏡方言（咸鏡北道の殆ど全部、咸鏡南道の定平以北の地）、（四）慶尙方言（慶尙南北道の全部、江原道の東南部、全羅南道の南海岸）、（五）全羅方言（全羅北道の大部分、全羅南道の南海岸を除く大部分）、（六）濟州

島方言の六種に分類するのが適當であると思ふ。

【特質】（イ）音韻　朝鮮語を表記する基本文字の數は、現在は母音十一字・子音十四字合計二十五字より成つてゐるが（諺文參照）、事實上の音數は決してそれに限られてゐるのではない。例へば에・애の如きは、京城地方では少くとも各字が二種の音を含み、애・의・예・외等の如きは字形としては二個の母音字の組合せより成れども、事實上の發音は基本母音以外の一箇の獨立した母音を形成するが如き、又基本子音以外に聲門閉鎖（glottal stop）の破裂を同時に伴つて發音されるᄭ（까）・ᄯ（따）・ᄲ（빠）・ᄊ（싸）・ᄶ（짜）等の所謂된사옷（toin-sa-os）の音現象の如きは何れも二十五種の母子音以外に存し、立派に基本的の單母音・單子音を形成するものである。これを以て觀ても朝鮮語の基本的母音・子音の數が、決して二十五種の文字が示す如き少數且つ簡單なるものでないことを知るに足るであらう。語又は音節を形成する音の結合上方に自らの法則が存する。先づ頭音規則（アンラウトゲゼッツ）からいふと、(a)語頭には母音・子音の何れもが立ち得るが、古くは二個以上の子音群が語頭に立つことを許されたらしい。例 ᄡᆞᆯ（米）へ psal、ᄠᅡ-ta（摘）へ pta-ta (b)語頭には濁音（有聲音）が來ぬ。但し一語中の第二音節以下の頭音に屢々濁音が現はれることは國語の連濁の場合と似たものがある。(c)기（ki）・계（kje）等のᄀ（k）は地方によりᄌ（tʃ）となる。例 길（路）へ 질、계집（女）へ 지집。(d)니（ni）は多くの地方に於て이（i）と發音されるが、平安南北道の殆ど全部、咸鏡南北道の北邊及び濟州島にありては頭音の n が完全に保存せられる。例、님（主）。(e)댜（tja）・뎌（tjə）・됴（tjo）・듀（tju）等に於けるtjは、半島多くの地方に於てtʃ音に變化するが、平安南北道の全部、又咸鏡北道の北部では、原音を存するか又はj音を脫落して單なるtとなる。例、뎜심（點心）> tjəm-sim, təm-sim; 됴소（良い）> tjo-so, to-so・디も鮮內各地では殆どすべてtʃiに口蓋音化するが、上記地方にありてはtiの原音を存する。例、딥（家）—집 (f)半島多くの地方にありては語頭の라（ra）・러（rə）・로（ro）・루（ru）・르（rɯ）は、na・nə・no・nu・nɯ の如く、랴（rja）・려（rjə）・료（rjo）・류（rju）・리（ri）は、ja・jə・jo・ju・i の如く發音される。（例 론어（論語）—non-ə 량반（兩班）—jaŋ-ban、륙십（六十）—juk-sip）但しriは、平安南北道の全部及び咸鏡北道の北邊にてはriの原音を存し、（例、리익（利益）—ri-ik）その他の랴・라全部は咸鏡北道の北部ではほぼ r の原音を存し、（例、論語—ron-ə、兩班—rjaŋ-ban、六十—rjuk-sip）、平安南北道にありては n に變ずる（例 論語—non-ə 兩班—naŋ-ban、六十—njuk-sip）。北部國境地方に於て何故に頭音 r の發音が特に可能であるかの理由は別問題として、朝鮮語一般の性質としては頭音に r 音の來るのを好まぬことは事實と言へる。Russia なる語が移入されると、前に母音を添へて「俄羅斯」（A-ra-sa）と稱へるが如きもその一例である。(g)히（hi）・혀（hje）等のㅎ（h）は地方によりㅅ（s）となる。例 힘（力）へ him、sim、혀다（量る）へ sə-ta。次に末音規則（アウスラウトゲゼッツ）に就いて述べると、末音としては母音・子音の何れも許されるが、二個の子音群も可能である。例 talk（鷄）、palp-ta（踏）。而して pak（大鼓）・pat（畑）・tʃip（家）等の。下に何等の語を伴はぬ場合の -k・-t・-p は破裂を伴はぬ停止音であることは特に注意を要する。朝鮮語は調子のよい言葉であるとは內外人の認めてゐる所であるが、それには確かに理由がある。今その理由の主なるものを述べると、(a)一般的にフランス語流の liaison が行はれる。即ち一語の末音が子音で終り、次に來る語の頭音が母音である場合には、發音上の連續が行はれるのみならず、その末音の子音が無聲音である場合には、次の母音に同化せられて有聲音となる。例へば im-kim（任官）・tal-i（月が）は、i-mkim, ta-li の如く、tʃip-e（家に）・pat-a（受けて）は tʃi-be, pa-da と發音せられるが如きこれである。(b)母音間の同化。朝鮮語にはウラルアルタイ諸語に存する如き、母音同化の現象があり、語幹に於ける母音は接尾的語句の母音を自己と同音又は類似の音に引き附けようとする。例へば、動詞中、語幹に o 音を含める po（見る）なる語あり、それが活用して連用形を作る場合には、必ず po-a となつて接尾語に a を要求し、語幹に u 音を含める두（置く）なる動詞の活用するに當つては、tu-ə となつて必ず ə を要求するが如き、又同一語根に出で同一意義を有する語に sol-sol と sul-sul（何れも細雨の降るさま）との如き對立があるが、その第二音節が o となるか u となるかは、全く第一音節にある母音の支配を受けたものである。これ等の現象を綜合して、朝鮮語の母音を分類すると（イ）強母音、아・야・오・요・ᄋᆞ、（ロ）弱母音、어・여・우・유・으、（ハ）中性母音이・의の三種となすことを得べく、その強母音は強母音相互又は中性母音と、弱母音は、弱母音相互又は中性母音と調和する現象が存する。(c)子音間の同化。一語の末音が子音であり、次に來る語の頭音も子音である場合、子音の種類によつては各種の規則正しい同化現象が生ずる。例へば sol-ip（松葉）が sol-lip となれるは n が先行の子音 l に完全に同化したもの、sam-na（森羅）が sam-ra となれるは、r が全部 m に變化はせぬが m の影響を受けて同一發音位置の鼻音 n に變化したものであり、何れも順行同化に屬し、sin-ra（又、ra）（新羅）が sil-la となれるは n が後行の子音 l に完全に同化したもの、sip-njən（十年）が sim-njən となれるは、p が全部 n に變化はせぬが、n の影響を受けて自己と同一發音位置の鼻音 m に轉じたものであり、何れも逆行同化に屬する。（ロ）語法　名詞には本來の名詞の外、動詞・形容詞の語幹に m・ki を附して作られたものがあり（例、ham〔爲ること〕〈ha-〉、ka-ki〔行くこと〕〈ka-〉）、代名詞も本來の代名詞の外、名詞より轉成したものが少くない。數詞は一二三などの如く基數を示す場合（例 ha-na（一）・tul（二））と、名詞の上に冠せられる場合（例、han-kwən（一卷）・tu-al（二個））とにより語形を異にすることがある。動詞と形容詞とは活用形を異にし、人により二種或は三種の基本活用形を設ける。助詞・副詞にも種類が多いが、他の品詞より轉成したものも少くない。措辭法は最初に主語、次に述語が來ること、修飾すべき語句が修飾せらるべき語句の前に置かれることは國語の場合と全く同一である。各語の連結は國語同樣著しく添着的性質を帶び、殊に尊敬又は謙讓の意味をあらはす文の語尾變化は複雜を呈してゐる。例へば ha-əs-sɯp-nai-ka（爲ましたか）に對して ha-si-əs-sɯm-ni-ka（〈ha-si-əs-sɯp-nai-ka〉）（爲さいましたか）、ha-o（爲ます）に對して ham-ni-ta（〈ha-op-ma-ni-p〉）（致します）などいふ類である。（ハ）語彙　朝鮮語彙の數が全體で何程あるか、又その中純粹の朝鮮語が何程含まれてゐるか等の統計が今日未だ明かにせられて居らぬ。但し朝鮮語成立以來、幾多の外來語が輸入せられ、中には全然朝鮮語化したものも含まれてゐるに相違ない。外來語中最も多數を占むるものは漢語であり、その多くは朝鮮音化して吸收されるけれども、中には pai-tʃʰai（白菜）・mu-mjən（木綿）等の如く、支那語の原音を比較的忠實に傳へてゐるものもある。その他隣接諸民族との交通接觸により古くより蒙古語・女眞語・滿洲語・日本語等の輸入せられたもの少からず、又近時は西洋諸國語を輸入して、日常生活上の語彙を豐富ならしめてゐる。

【系統】從來歐米の言語學界に於ては、朝鮮語は餘り多くの注意を惹かず、その所屬問題の如きも深く論及せられたことなく、ただ漠然と、或はこれをウラルアルタイ語族の一部に配し、或は日本語、又は滿洲語と一族をなすものとし、或はこれを全く孤立の位置に置いた。然るに近時斯學の發達と共にこの問題は漸次科學的に研究せらるゝに至つた。W. G. Aston 及び金澤博士の日鮮語同系論、H. B. Hulbert のドラヴィダ語との比較研究の如きはその例である。元來朝鮮語には印歐語流の冠詞なるものなく、名詞には性・數・格の觀念を缺き、又關係代名詞を有せぬ等の事實以外なほ朝鮮語の特質の條に述べた如き、頭音としてはラ行音及び濁音を忌み、ki・ti 等の k・t は容易に tʃ に口蓋音化し、末音としては子音が來ることを許され、音結合上よりしては、或る子音間に特殊の同化現象が行はれ、母音調和の現象が極めて顯著であり、措辭法上より觀れば主語が前に立ち、述語これに次ぎ、修飾すべき語句は修飾せらるべき語句の前に置かれ、而もその連結の狀態は、著しく添着的性質を帶びてゐる等の現象がある。これ等の諸現象中には、國語と共通のものもあり、又ウラルアルタイその他の語族と共通なものもある。朝鮮語の眞の系統はこれ等の科學的研究に基礎を置き、初めて完成せらるべきものであらう。

【沿革】朝鮮には古く固有の文字がなかつた。漢字の輸入を見てより、これを利用してその言語を寫したけれども、固より完全を期する譯には行かなかつた（吏讀參照）。朝鮮語が完全に文字の上に書き表はされるに至つたのは諺文（別項參照）發明以後の事に屬する。隨つて朝鮮語の歷史的變遷を比較的精細に知り得るのは最近五百年足らずの期間に止まり、それ以前は極めて茫漠である。元來今日朝鮮語と簡單に言ひ去れども、その由來する所極めて悠遠で、その歷史は複雜を極めてゐる。即ち最初漢が半島に四郡を置いた頃には、その南部には辰韓・馬韓・弁韓等あり、中部以北には高勾麗を初め濊・貊・沃沮等の諸民族占據し、相互に異つた言語を用ひてゐた。次いで三國時代になると、高勾麗は從前の北方系言語を用ひ、新羅・百濟は韓族固有の言語を用ひてゐたけれども、高勾麗より分出した百濟の言語中には、なほ幾多の高勾麗語の影響があつたらしい。その後新羅が三國を統一し、次いで高麗これに代るに及び、新羅語を祖語とせる朝鮮語は廣く半島の大部分に行はるゝに至つたけれども、北邊にはなほ女眞その他の民族の言語が行はれた。朝鮮語が現在の如く鴨綠・豆滿兩江以南に完全に行はるゝに至つたのは、實に李朝以後の事に屬する。以上の如き歷史を有する現代の朝鮮語が、時代によつて幾多の變化を經來つたことは、蓋し想像するに難くないのであるが、吾人は常にその變遷の跡を辿るべき資料の缺乏を痛歎せざるを得ない。李朝以後の言語資料としては、諺文制定と同時又は直後に公にせられた訓民正音の諺解及び「龍飛御天歌」、世祖の頃に出版せられた佛書類の諺解を初めとし、各時代に亙りやゝ豐富にこれを求めることが出來るが、その以前に至りては完全なる資料極めて少く、新羅時代のものとしては、「三國遺事」「均如傳」等にあらはれた鄕歌、金石文にあらはれた若干の吏讀、漢字を以て記された地名・物名などに於ては、僅かに「鷄林類事」及び金石文・古文書等にあらはれた吏讀に就き、これを窺ひ知ることを得るに止まる。各時代の言語の特質等は、今玆に詳述することを避けるが、李朝時代にありては、成化・弘治の頃既に諺文の古い綴字法に幾分の變化を來し、嘉靖年間に出來た崔世珍の「四聲通解」や「訓蒙字會」等には、殆ど古式の諺文綴字法が失はれ、表音的表記法の約束を規定せるなどを見る時は、朝鮮語はこの時期を以てすべての點に亙り變化を來したと見ることが出來よう。朝鮮語の文體には（一）漢文に吐（吏讀參照）を附して讀む場合の漢文懸吐體、（二）國語「なり」「たり」等に相當する語尾を用ひる文語體、（三）國語の候文に相當する書簡文體、（四）純粹の口語體等の種類があるが、（一）より（三）までは、畢竟するに文語體である。從來の諺文體は主として文語體のみであつたが、近時は新聞・雜誌・小說等に口語體が盛んに用ひられるやうになつて來た。文語體・口語體の分裂した時代に關しては未だ十分な研究が遂げられては居らぬが、恐らくは餘り近代のことではないだらう。

【研究史】我が國に於て朝鮮語學習の必要を認めたのは、かなりに古い事である。即ち「續日本紀」淳仁天皇天平寶字五年正月の條には、美濃・武藏二國の少年毎國二十人をして新羅語を習はしむとあり、「日本後紀」嵯峨天皇弘仁六年一月の條には、對馬史生一員を停め、新羅譯語を置くなどの記事が見える。その後朝鮮語の學習は專ら對馬がその任に當つたらしく、壬辰の役などには嚴原よりのみでも六十餘人の通譯を出し、明治の初年に至りては嚴原に語學所なるものさへ設けられた。次に學術的研究の業績に就いて言へば古く「二中曆」が引用する所の譯言曆に、高麗語・百濟國語等の一より十に至る數詞を列擧せる事などは頗る珍とするに足るが、固より斷片的のものに過ぎぬ。江戶時代に至り、雨森芳洲が「交隣須知」を著はして朝鮮語研究の先鋒をなし、新井白石が「東雅」に於て日鮮兩語の比較研究を試みた事などは、當時の學界を賑はすに足りたるべく、その他大田全齋・黑川春村等が、音韻研究上朝鮮字音をも參取したことは最も注意すべきことである。明治以後に至りては、白鳥・宮崎・中田諸博士により、或は史學或は法制史の立場より、盛んに日鮮兩語の比較研究が行はれたが、特に語學を專攻せらるゝ人としては金澤庄三郎・前間恭作諸氏あり、辭書文法の如きも、追々と優秀なるものが編著せられつつある。次に西洋人の朝鮮語研究を略述すると、古く第十七世紀頃に航海者又は地理學者などにして朝鮮の記述をなしたものがないではないが、深く言語の事に注意したもの

はない。ただ N. Witsen がその著 "Noorden Oost Tatarije"(1692, 2nd ed. 1705)に於て朝鮮語彙百數十を列擧し、それに解釋を施してゐるのは異數とするに足る。第十八世紀後半に至り P. S. Pallas や L. Hervas の如き言語學者が各種の言語の比較に當り、朝鮮語を引用してゐるが、それ等は Witsen の資料によつたものが多いやうである。又第十九世紀の初頭に當り W. R. Broughton, B. Hall の如き航海家が朝鮮沿岸を訪問して、自ら生ける朝鮮語を蒐集したが、その頃から朝鮮及び日本の書籍を基礎とせる研究が擡頭しかけた。その第一先鞭はヴインの Dr. Hager が、「三國通覽圖說」の諺文を學界に紹介したにあるが、その解說が誤つてゐたので、一八二〇年 Abel-Rémusat がそれを反駁した。その後 J. Klaproth がシベリアの一隅に於て自ら「三國通覽圖說」の一本を得、これを佛語に飜譯した(" San Kokf Tsou Ran To Sets." 1832)。彼が前に著はした "Asia polyglotta" (1823, 2nd ed. 1831) と共に、その中に增補挿入せられた朝鮮語には「雞林類事」「和漢三才圖會」等から採つたものが大部分を占めてゐる。その頃また P. F. von Siebold, J. Hoffmann 等は、「千字文」「類合」の獨譯をなし、W. H. Medhurst は、「千字文」「倭語類解」の英譯及びこれ等の書を基礎として鮮英對照の語彙集を作つたが、これ等の事業はついで起り來るべき外國人特に在鮮外國人の盛觀たる語學研究の導火線となつたものである。卽ち彼等の著作中の主なるものは、辭書としては Poutzilo の鮮露辭書(1874)、Coste の鮮佛辭書(1880)、佛國宣教師編「韓佛字典」(1880)、Underwood の「韓英字典」及び「英韓字典」(1890)、宣教師編の羅甸語朝鮮語對照辭書(1891)、Scott の英鮮辭書(1891)、Gale の「韓英字典」(1897, 2nd ed. 1911)、Alevêque の「法韓字典」(1901)、Jones の「英韓字典」(1914) 等あり、文法書としては、佛國宣教師編の朝鮮語文法(1881)を初めとし、Underwood の「韓英文法」(1889, 2nd ed. 1914)、Gale の "Korean Grammatical Forms" (辭課指南)(1893, 2nd ed. 1903)、Eckardt の "Koreanische Konversations-Grammatik" (1923)

【參考】W. G. Aston : *A comparative study of the Japanese and Korean Languages.* 1879. ‖ H. B. Hulbert : *A comparative grammar of the Korean Language and the Dravidian dialects of India.* 1905. ‖ 日韓兩國語同系論 金澤庄三郎 ○韓語通 前間恭作 ○鷄林類事麗言攷 同上 ○郷歌及吏讀の研究 小倉進平 ○日鮮古代地名の研究 金澤庄三郎 ○日本文法新論 同上 ○日鮮同祖論 同上 ○宮崎先生法制史論集 中田薫編 ○朝鮮語辭典 朝鮮總督府編 ○朝鮮語學史 小倉進平 ○南部朝鮮の方言 同上 （小倉）

調度歌合（てうどうたあはせ）　御伽草子　一卷　【成立】逍遙院實隆筆の傳を眞とすれば、少くともそれ以前に成つたものといふことになる。【諸本】群書類從卷五〇四所收。原本奥書に「右一卷三條實隆入道逍遙院殿染筆也、臨于此卷書寫公顯」とあり、類從には「右以濱田侯本校合畢」と見える。【內容】異類歌合物。擬人の道具類の十番歌合。彌生の末、高野山の御寺の御供から歸つた後、主人の留守をしながら寢てゐた夜の夢に、諸道具共の物語る聲に驚いて耳を傾けると、炭櫃の主唱に水甕の贊同があつて、題を題で歌合を初め、一番左燈臺右炭櫃から、十番左大つぼ右おびの臺まで、歌人すべて二十人、判は衆議判で御硯のうの毛の筆が一々記し留めた。夢現に聞いて居るうち夜が明けて、奇異の思をなしたと云ふ筋である。古今序から出て、鶯と蛙の歌の傳說まで生じた歌道尊信の傾向に伴ふ遊戯化の現象で、蟲鳥の歌合と同種のものであると共に、他面「化物草子」(別項)及び「付喪神」(別項)の器怪說話とも聯り、後者と併せて近世の馬琴の「昔語質屋庫」の先蹤をなすものとも云へる。（島津）

町人物（ちやうにんもの）　浮世草子　【名義】町人の生活を取扱つたものの義である。なほ詳しくいへば、町人の本分は勤勉節儉等に由つて富を致すに在つたから、この本分に就いて取扱つたものの義と解すべきである。【性質】すべて端物で、町人が商工業を以て世に立ち、勤勉・節儉・機會・慣習・資本等の要素に由つた致富の諸相を書き、或はこれに關する教訓を含めたものであるが、中には大晦日を背景として、その前に展開された町人の經濟生活の諸相を書いたものなどもある。物慾生活を主題とした文學は世界に稀であるが、町人物は純粹にこれを主題としたものが多い。要するに、人間生活の中から、物慾生活だけを抽出して取扱つたものである。【沿革】井原西鶴の「日本永代藏」「世間胸算用」に始まり、後、門人北條團水が「日本新永代藏」を作つて、「日本永代藏」を摸してより、八文字本作者がこれ等に倣うて數部の町人物を綴つてゐるが、これ等の摸倣は單にその形を摸したに止まらず、內容文章までも摸倣したもので、殆ど西鶴の域を出でないものばかりである。追隨者の自信なき態度もさるものであるが、又西鶴の浮世草子作者としての大きさ、その作品の影響の非常でなかつたことも、これに由つて知られる。

【作品】今その主なる作品を擧ぐれば、

日本永代藏　（別項）　井原西鶴　（元祿元年）
世間胸算用　（別項）　同　（元祿五年）
西鶴織留　（別項）　同　（元祿七年）
日本新永代藏（別項）　北條團水　（正德三年）
手代袖算盤　八文字自笑（正德三年）
商人世帶藪　（別項）　八文字自笑（享保七年）
商人家職訓　（別項）　江島其磧　（享保七年）
[illegible]身持扇　（別項）　江島其磧　（同十五年）
（渡世勤解）世間手代氣質（別項）江島其磧（同十五年）
（立身紹繪）商人軍配團（別項）江島其磧（享保十八年）
（世帶傳授）渡世身持談義（別項）江島其磧（同二十年）

【時代との關係】階級制度の當時に於て、町人階級に生れて町人として生きるには、その階級に許されてゐた商工業を以て身を立つる外に道はなかつた。工業はその發達が甚だ幼稚であつたから、彼等は活動慾・事功慾・名譽慾等を滿足させるに、主として商業に就くのであつた。商業は畢竟利益を得て、富を積むべきものであるから、町人の苦心して求めたものは、大富の蓄積に在つた。かくて町人たるものは、商業に成功し、大富を積んで、世に分限者・長者と謳はれようと努力した。かくして起つた時代の富貴崇拜の精神は、やがて貧を忌むの精神ともなり、富の成功者に羨望の目をみはると共に、貧に泣くものには、侮蔑又は憐憫の情を持つた。かくて町人の成功と共に失敗の事實は、彼等の大に關心を惹く所であつたから、これを文學化したものに興趣を感じて、外國にも類の少く、我が國の前後にも又例なきこの種の文學が、特にこの時代に生れたものと考へられる。（藤村）

【參考】西鶴町人物研究 片岡良一（日本文學講座）

長伯（ちやうはく）　歌人　【姓】有賀氏　【號】以敬齋　【生歿】寛文元年京都に生れ、元文二年（一七三七）六月二日歿。享年七十七　【墓所】高津の東の正法寺　【閲歷】醫師の家に生れたが家業を繼ぐことを好まず、和歌の道を學ぶため、父兄の反對を押し切つて、京都を出て住吉の平間長雅の門に入つた。苦學數年、貞享三年（二十六歲）には師の勸めに從つて、「和歌世々の栞」を編んだ。後、難波に移り、一家を構へ、二條派の歌風を弘く世間に傳へた。門下には辻稱長・加藤景範・川井立牧・有賀長因がある。長伯の子孫は、長伯—長因—長收—長隣といふやうにその跡をついで難波で和歌の師匠をつづけ、長隣の長男は有名な國際法學者有賀長雄（別項）である。【業績】長伯は、和歌の道についての多くの指導書を著はしたが、通俗的であるのが特色で、弘く行はれ、長い間、この道の初學者達の參考書となつて來た。「和歌世々の栞」「初學和歌式」「濱の眞砂」「和歌八重垣」「歌林雜木抄」「和歌分類」「和歌麓の塵」の七書は、有賀家の七部書といはれ、蕉門の七部書と對立させられてゐる。作歌の道を辿り始めるには、この七部書が、如何に便利な手引書であるかといふことがわかる。その他、「和歌世々のしをり追加」「歌枕秋の寢覺」「歌枕秋の寢覺追補」「和歌麓の塵二葉草」「源氏掌故」「長伯集」「秋葉與草」「春樹顯秘增抄」等の著書がある。（齋田）

蝶花形戀聟源氏（てふはながたこひむこげんじ）　脚本　五幕十四場　時代物　【作者】木村圓夫　【通稱】女貞任　【興行】文化二年十一月一日初日江戸河原崎座。紋番附には三年とあるが俳優の顔觸れはあはない。疑ひを存して置く。

【役割】安倍宗任・奴鐵平（澤村宗藏）、金の八郎・新羅三郎義光（嵐雛之助）、橘太夫良成・源賴義（山科四郎十郎）、願山坊・加藤右馬之丞・右倉角之進（桐山紋次）、傾城逢州實は貞任娘千代童姬・仲女皆鶴・妹お袖（小佐川七藏）、勝田次郎成信・大道寺一學・立引五郎（市川荒五郎）、安倍貞任・淸原武人武明（中山來助）、[illegible]のお鷹實は鴛鴦の精・[illegible]島女歌妓・妹お仲實は淺香姬（中村國子）、田畑村の八右衞門實は鴛鴦の精・八幡太郎義家・金藤舍人之助惟道・出羽城之助重成（澤村源之助）、貞任妻雄島・釣舟屋お光實は勢知島文次妻安方（小佐川常世）。

【題材】義家奧州攻を世界にした顔見世狂言。【諸本】顔見世狂言集（日本戲曲全集）所收。【梗概】「一番目」（序幕）（男山八幡）須賀川次郎鎌純の惡事。橘の太夫良成と爭ふ。（別當所）小烏丸の名劍紛失、勝田次郎成信の難儀。願山坊主を語つた鎌純の惡事が露顯。（裏手）鎌純・成信の立廻り。（男山）金の八郎鐵時、惡人の連判を奪ひ取る。（二幕）（三韓責）神功皇后・武內宿禰の三韓責。（岩手山）右は貞任の妻雄島の夢。雄島貞任と奇遇。（三幕）（武隈明神）大道寺一學と貞任のだんまり。（鳥居先）殺人事件があつて騷ぎの所へ、東西より女飛脚お鷹、男飛脚雲平來かゝり、通行出來ぬまゝ兩人書狀を取替へて引返す。（源義家館）新羅三郎義光、傾城逢州に迷ひ放埒。出羽郡領勘定と加藤右馬之丞が家押領の惡事。淸原武則、逢州を詮議。お鷹飛脚に來る。右馬之丞等お鷹を公卿に仕立てる。大道寺一學上使に來り義家の本心詰問。源賴義の明答。お鷹、虎熊大臣に扮し、勘合の印の催促。（武則館）お鷹實は雄島、逢州を娘千代童姬と知つて對面。武則、雄島の面前にて逢州を責める。大道寺一學、秩父十郎と僞つて勘合の印を雄島より取戻す。（奧庭）賴義・武則、雄島を見露し一旦立ち別れる。（大詰）（鎌倉花ヶ谷）源義家と歌綾姬の色模樣。奴鐵平と腰元谷鎌の振り事。鐵平、義家を呪つて鴛鴦の番ひを殺す。植木賣り八右衞門、花賣りお露出て物賣りの所作あつて、兩人は鴛鴦の精と正體を現はし、鐵平實は坂戶九郎期賞に仇をする。常磐津淨瑠璃「色達衣の思羽」。（奧州外ヶ濱）安方、夫文次が宗任に殺されしを知る。城之助重成と安方だんまり。「二番目」（釣舟屋）釣舟屋のお光、妹お仲とお袖を使つて、いろ〳〵の男を色仕掛けに騙し、軍用金を集める。お仲實は實方の娘淺香姬、許嫁の夫金吾惟滿が大工となつたのに逢ふ。安倍宗任、一宿を求める。淺香姬・惟滿、宗任を敵と覗ひ、危ふく返り討にならんとして立引五郎に助けられる。城之助重成、お光實は安方と共に宗任に詰め寄せる。

【解說】一座が無人で俳優を多く使用されぬため、顔見世狂言の通弊たる、餘りに複雜に陷ることは免れたが、座頭が女方なので、女ばかりが活躍する筋は物足りない。無人のため全篇を通じて非常に寂しいが、鴛鴦の所作事は形式完備して立派なものであり、釣舟屋に當時の下級賣笑窟を描寫した。この二幕だけは立派な價値がある。（渥美）

蝶花形名歌島臺（てふはながためいかのしまだい）　淨瑠璃　十一段　時代物　【作者】若竹笛躬・中村魚眼　【角書】（[illegible]）　【名稱】十段目に小田春姬が、大內義廣に嫁する件があるところより來た。【興行】寬政五年七月十六日初日、大西芝居豐竹榮次郎座初演。太夫は竹本內匠太夫、豐竹園太夫等。三味線は野澤吉兵衞等。人形は吉田冠藏、吉田磯五郎等所演。その後、操に歌舞伎に屢々上演されてゐる。

【題材】眞柴久吉は羽柴秀吉、小坂部晉近は長曾我部元親、大內義廣は島津義弘、兒島元兵衞は後藤又兵衞に當る等、「太閤記」に據つてゐるやうである。【諸本】淨瑠璃名作集（有朋堂文庫）下卷所收。

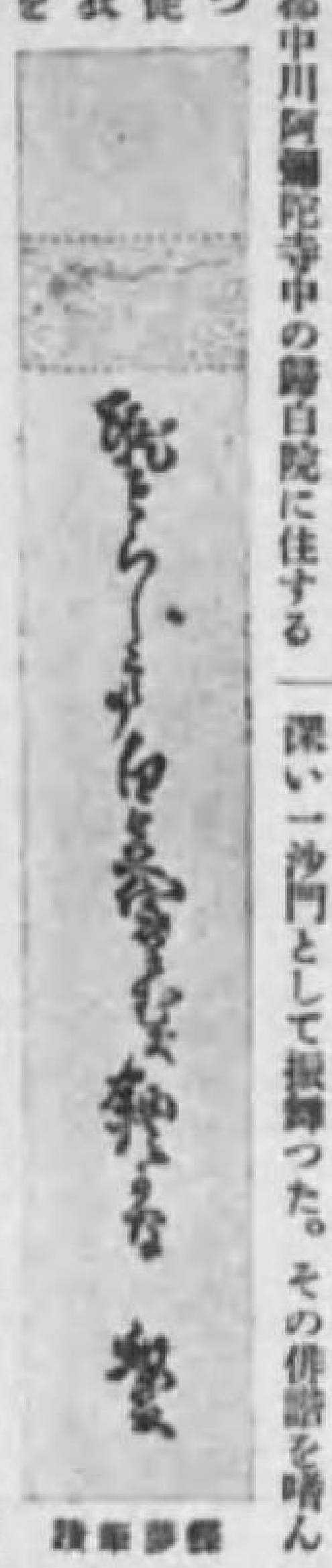
【梗概】（初段）天正十四年五月紫宸殿で勅命により眞柴・大內兩家の間に和睦が成立する。（二段）宮島で、大友三郎が奸計を企てた爲めに、兩家の和睦が破れる。（三段・四段）小坂部利三郎が鍛冶に弟子入して眞柴の軍勢を火藥で鏖殺する。（五段・六段）兒島元兵衞が眞柴久吉の幕下に從ふ。（七段・八段）日本無双の軍略家小坂部晉近は、眞柴・大內の何れにも味方せず領國に引籠つてゐる。晉近の聟で眞柴の臣なる加藤正淸、同じく聟で大內の臣なる出海左衞門は各々その妻を離別し、一子を使者として晉近を味方に付けんと謀る。晉近は二人の孫に眞劍勝負をさせ、加藤梓市が出海松太郎に勝つや切腹し、加藤の妻葉末は我が兄の遺見であるから、松太郎には鈍刀を渡した旨を語り、松太郎と共に絶命する。（九段）大內義廣、加藤正淸を謀らんとして却つて謀られる。次に「道行山路の柳曇」（十段）山間に隱栖する柴田の後家小谷の方を、久吉と義廣が見出した事から、兩家は和睦し、小田春姬は義廣に嫁ぐ。（十一段）眞柴・大內兩家合同して大友三郎を擊ち亡す。

【構想】全體の構想は、強ひて複雜を求めたとも見られて、やゝ統一を缺き、部分的に技巧が著しく施されてゐて、傑作とは認め難い。ただ八段目小坂部館は前例も跡からぬ獨色であり、舞臺面の活用と恩愛の切なるものが利用されて注目せられる。そのためか、人形劇に

も歌舞伎劇にも長く生命があり、素淨瑠璃としても知られてゐる。大正九年四月、現大谷友右衛門改名の際、市村座に上場された。（この時の臺本は日本戲曲全集第二十六卷所收）九段目の男一人の道行は珍しい型である。（守隨・暉田）

調伏曾我（ちやうぶくそが）「曾我物の謠曲」を見よ。

蝶夢（てふむ）　俳人【別號】五升庵・泊庵【法號】幻阿彌陀佛【生歿】享保十七年、京都に生れ、寛政七年（二四五五）十二月二十四日京都に歿す。享年六十四。【墓所】京都寺町今出川上ル阿彌陀寺【閲歷】京都の人、幼くして洛東法國寺に投じて其阿に師事した。其阿は遊行の徒であるが、蝶夢の穎悟なのを見込んで得度させた。然るに蝶夢は終に靑水の流に歸し、京都中川阿彌陀寺中の歸白院に住することゝなつた。併し徒に檀臨で衣食する事を喜ばず、明和四年三十六歲にしてその院を法嗣某に附し、洛東岡崎に小庵を結んで閑居し、伊賀の桐雨から、芭蕉の短冊「春立つや新年古き米五升」を贈られたのに因んで、五升庵と名づけた（五升庵は後、某年三月七日、蝶夢が嵐山へ花見に行つてゐる留守中に類燒したが、その年八月十五日再興成つて再び入庵した）。かくてこの庵に住む事二十餘年、更にその後の地をトして泊庵を構へたが、間もなく天明八年春の大火があり、新しい庵はさる寺に寄進してしまつた。又この大火に阿彌陀寺も燒失し、當時の住職は無慚にも燒け殘つた洪鐘を竊かに沽却したので、蝶夢はその買主に論してこれを寺に還させ、自ら諸州に募緣して困苦數年の後再び本尊を補造し洪鐘を聞く事が出來るやうになつた。彼は岡崎に閑棲の後は、靜心念佛に日を送る傍ら俳諧に遊んで、特に蕉翁の高風を慕ひ、風天雨露と雖も必ず忌日毎には義仲寺に詣で、明和七年には芭蕉堂を再建し、同九年には幻住庵の舊址に碑を建てたりした。又常に諸州に山川の名勝を探る癖があり、寶曆十三年には遠く松島に遊んで「松島道の記」を撰び、同八年には桐雨と共に九州太宰府に詣でて「宰府紀行」の著を殘し、天明八年には甲斐に行脚して「蕉富士の紀行」があつた。寛政七年九月、病に臥してから復た起たず、同年臘月靜かに一生を終つた。



蝶夢筆跡

【人物】蝶夢は、俳諧の所謂專門家ではなかつた。彼は徹頭徹尾阿彌陀如來に仕へ奉る信心深い一沙門として振舞つた。その俳諧を嗜んだのも、ただ風雅に遊ぶといふよりは、芭蕉の人格を慕ふ道德的な動機に基いてゐる所があつた。花鳥風月に魂を惱ます詩人的な性格は、彼の中に見出す事は出來ないが、人の世を淸く正しく送らうとする宗敎的道德的な情熱には燃えてゐた。これがやがて俳諧に對し芭蕉に對するあの忠實眞摯な態度となつて現はれたのである。凡そ芭蕉の歿後、その遺風を宣揚するために、蝶夢程あらゆる方面に亙つて力を盡した者が外にあるだらうか。芭蕉直指の門人と雖も、か程までに忠實な者はまだなかつた。或は貲を募つて影堂を建て文庫を作り、或は各地の遺址を訪ねて建碑の業に携はり、或は幾度か自ら主催して遠忌の追善俳諧を營み、或は又傳記遺稿の編纂出版に苦心經營を重ねるなど、その芭蕉のため有形無形に彼が盡した事は、測り知る事が出來ない位である。而もそれは決して名聞利養のためにするのではなかつた。又偶像的に芭蕉を盲信し祭り上げるのでもなかつた。常に私意を去り且つ信念を持して事に當つたのである。だから彼の事業の凡てに不朽的な精神と氣魄が籠つてゐた。交遊は頗る廣かつたが、就中伊賀の桐雨とは親しかつた。俳人以外では澄月・慈延・蒿蹊等の歌人、皆川淇園・赤松滄洲の詩人と交があつた。【史的地位】作家として、彼が天明俳壇の復興に貢獻した所は、固より蕪村や曉臺と同日に論ずる事は出來ない。彼は藝術家としての天分には必ずしも勝れてゐなかつた。又彼が自ら專門家として立たなかつた關係上、俳壇的勢力とても小さいものであつた。併し彼が純潔な熱情で芭蕉を宣揚し、以て俳壇に廓淸の機運を齎した間接的な功績に至つては、決して輕視する事が出來ない。彼は又、藝術に對して相當の理解を有し、批判の眼を具へてゐた事は、かの「類題發句集」等に徵しても明かであるが、更に彼自身の創作とても、從來評價されてゐた如くに全く二流以下として過し去るべきではない。蕪村・曉臺などには勿論及ばないとしても、闌更・靑蘿等には、聊か比肩するに足るべき作も多く殘してゐる。又五升庵社中としての彼の勢力は大したものでなかつたが、當時の俳人との交渉は各方面に亙つて中々廣かつた。言はば純派を超越した一種の別格宗匠として迎へられてゐた。翻つてその個人的な人格の感化はかなり汎く及んだのであつた。結局蝶夢が天明の俳壇に寄與した點は、その間接的な方面に多く認めなければならないが、俳壇革新の實際に即して言へば、彼の力は所謂中興の五傑六家等に比して、多く遜色がなかつたと論定すべきであらう。【編著】蕉門俳諧語錄○芭蕉門古人眞蹟○芭蕉堂歌仙圖○名所小鏡○芭蕉翁繪詞傳○類題發句集○新類題發句集○去來丈草發句集○芭蕉翁發句集○芭蕉翁俳諧集○芭蕉翁文集○施主名錄發句集（以上各別項）○松島道の記（寶曆十三年、師の舊跡を慕して、木曾路から松島に遊び東海道を經て歸つた紀行）○宰府紀行（明和九年刊。前年夏桐雨と太宰府に詣でた紀行）○蝶夢和句文集（一名五升庵文草。五卷、寛政十一年正月刊。門人瓦全が師の遺稿を集めたもの）○十論發蒙（明和元年稿。支考の十論を註釋したもの）【門流】五升庵二世を繼いだ柏原瓦全や、追善集「かなしぶみ」（寛政八年）を撰んだ井口菊二等がその高足である。（穎原）

【參考】五升庵蝶夢藤井紫影（國語昭和五ノ二）

長明（ちやうめい）　歌人【姓名】鴨氏、長明は「ながあきら」と訓讀するのが正しいが（源家長日記）、普通音讀で呼び慣れてゐる。又菊大夫と稱した（大日本史）。【法號】蓮胤（東鑑）【生歿】建保四年（一八七六）歿、享年六十四（東鑑）。一說に六十三（方丈記流水抄）【家系】世々鴨社の氏人で、累代禰宜であつた。【閲歷】和歌管絃の道に堪能であり、應保中從五位下に敍せられた。歌學は源俊賴の子、俊惠を師とした。自著の「無名抄」によれば、かならず末の世の歌仙となるべき人と思はれる故、たとひ人にゆるされる程になつても、我は顔したる歌よみ給ふなとさとされたといふ。若くして父を失つたが、歌才によつて、後鳥羽上皇に召され、和歌所の寄人となつた。更に「家長日記」によると、河合社の禰宜の補缺を望んだが果さず、後、氏社を官社として長明をその禰宜にせらるべき御沙汰があつたが、長明はすでに出家して大原に隱遁してしまつてゐたといふ。遁世後も和歌所の寄人たるべき恩命を蒙つたが、「沈みにき今さらわかの浦波によせばやよらんあまの捨舟」と詠じて籠居した（十訓抄）。「東鑑」卷十九（建曆元年十月）に、度々鎌倉に下向、將軍に謁した記事があるが、「大日本史」に記す如く、歌道に熱心な實朝が請じ下したのであらう。その後、日野の外山に入つて、方丈の室を營み、「方丈記」を書いたと傳へる（方丈記參照）。【批評】社家から出て、隱遁となつた點は後の兼好を思はせるが、遁世者としては、ほぼ同時代の西行に似てゐる。長明の本領は和歌にあるであらうが、歌人としての力量は、西行や慈圓よりは餘程劣る。文才に於ても、「方丈記」は姑く措き、「無名抄」や「發心集」によつて見ると、一流の文章家とは稱し難い。【著作】勅撰集に入つてゐる歌は、千載一、新古今十、續古今二、續拾遺一、新後撰二、玉葉一、風雅二、新千載一、新拾遺一、新後拾遺一、新續古今二、合計二十五首○鴨長明集○無名抄○發心集○方丈記（各別項）○伊勢記（散佚して、僅かに斷片を夫木和歌抄に止めてゐる）。その他、「瑩玉集」「文字鎖」「四季物語」「長明道之記」（東關紀行參照）等が、長明の著と傳へられるが疑はしい。なほ「發心集」「方丈記」等にも疑ひがある（發心集・方丈記參照）。

【參考】源家長日記○扶桑拾葉集○大日本史（隱逸傳）○東鑑○十訓抄○鎌倉時代文學新論　野村八良　（野村）

長明道之記（ちやうめいみちのき）「東關紀行」を見よ。

長明和歌物語（ちやうめいわかものがたり）「無名抄」を見よ。

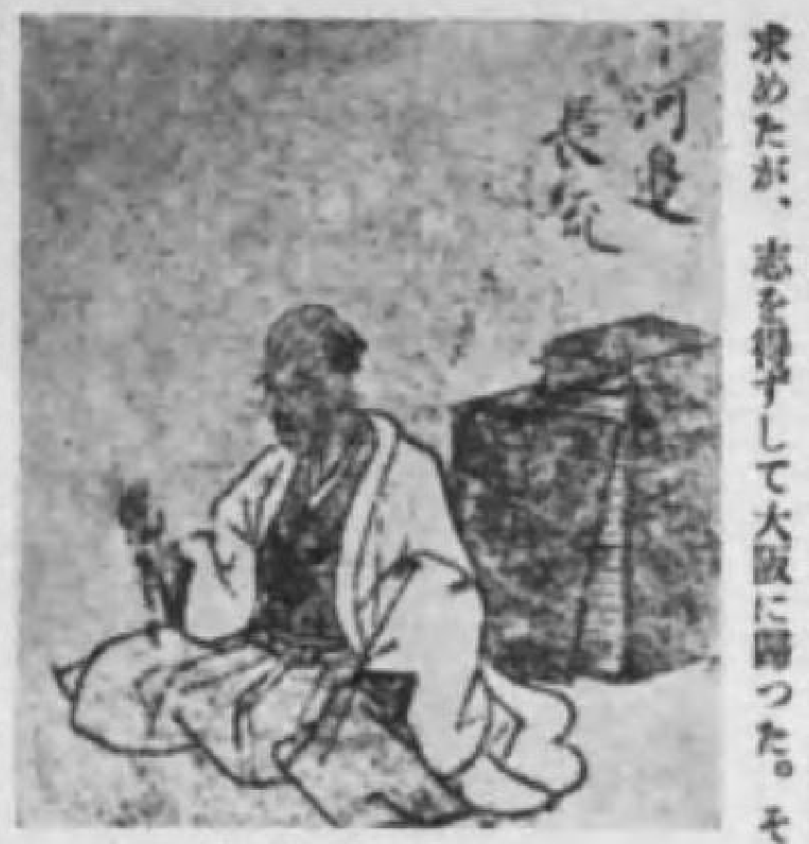
朝野群載（てうやぐんさい）　詩文集　三十卷【著者】三善爲康【名稱】朝野の詩文及び雜文を群集し收載した意味を示してゐる。【成立】永久四年（自序）。但し、その後も見るに隨ひ得るに隨つて補充し、元永・大治・永久頃のものも載つてゐる。故に完成した年次は、長承・保延頃であらう。恐らく歿するまでは手を入れたものと思はれる。【諸本】史籍集覽・改定史籍集覽に收む。この書は伴信友の校本を底本とし、別に小杉榲邨の校本及び帝國圖書館藏古寫本を以て對校したといふものである。信友の校本は禁裏本・官本・林本・異本・尾本等各種を搜索し、都合十本を以て校正したものである。寫本としては、帝國圖書館本・內閣文庫本・圖書寮本等がある。又、京都の猪熊信男氏藏本は卷一だけであるが、鎌倉初期の卷子本で、流布本に比較すると內容が多い。この本は最も原本に近いものと思はれる。東京帝大史料編纂掛編の「古簡集影」第六・七に複製されてゐる。【解說】流布本は、卷十・十四・十八・十九・廿三・廿四・廿五・廿九・卅の九卷を缺いてゐる。「群書一覽」卷五には、卷十・十四兩卷を缺卷とせず、現存するもの二十三卷と記してゐる。但し右兩卷の存在は今明かでない。その內容は、

卷一より卷三迄は文集上中下に分れて、本朝文粹その他の詩集に重複する文もある。卷四・五は、朝儀の上下で、除目・東宮・女御・親王・女官・齋宮等に關するものと、藏人所關係のものを載せて居る。卷六は神祇官と太政官とに關するもので、中臣祭文や龜卜や神社關係の諸事と太政官の勘奏・官符・勘文等。卷七は攝關家に關する內覽宣旨・關白詔・辭讓表、或は寺院や勸學院に關する下文・牒文・仰書と公卿家に關する年給、官の中文その他の書牒文。卷八は別奏と諸奏とである。別奏には中務省の日月蝕の奏、主殿寮・大學寮・諸陵寮・式部・民部・治部省等に關するものを載せ、諸奏には轉任や諸官に關する公文を載せてゐる。卷九は功勞と讓狀とで、功勞には中宮職、中大學頭、中式部丞、中納言等に關するものを載せ、讓狀には以（辭讓）子、解・市舍史・讓男の如き類。卷十は缺け、卷十一は廷尉で、檢非違使や獄人過狀や斷獄、起訴・過狀等。卷十二は內記の詔や勅符の外、主に宣命を載せてゐる。卷十三は紀傳道關係の公文であり、卷十四は缺け、卷十五は陰陽道・曆道・醫道・天文道に關する勘文・奏狀等。卷十六・十七は佛事の上下で、東大寺大佛記、石淸水宮緣記等を初め法務・僧綱、修法施入狀等に關する公文。卷十八・十九兩卷は缺けて、卷廿は太宰府竝に諸國關係の解狀及び返抄等。卷廿一は雜文上で、怪異勘文、異身勘文、奏前帶刀調文、謁位々記等を載せてゐる。雜文下の見えないのは、現在の卷廿二は或は卷廿三であるかも知れない。さうして卷廿二は雜筆下の缺卷と見るべきかと考へられる。卷廿二は諸國雜事上で臨時祭幣奠文・國事祝文・國符・移文・新司廳宣等。卷廿三・廿四・廿五は缺けてゐるが、若し卷廿二缺本とし、諸國雜事上を卷廿三とすれば、卷廿四は諸國雜事下となり、卷廿五は諸國公文上であらう。卷廿六・廿七は諸國公文の中・下で解由以下國解・赦解文・勘藉文書・正稅返抄帳・封戸帳等の類。卷廿八は諸國の功過で、受領功過申文・覆勘等の類を載せてゐる。

これ等によつて見ると、制規に關しては周到な用意が注がれた事も知られ、忠實に廣範圍に長年月に亙つて輯次せられたことが推察せられる。詩賦・文章を知るには「本朝文粹」「本朝續文粹」（別項）以下の著作が少くない。內外の官符には、「類聚三代格」の如き、又は「類聚符宣抄」や「續左丞抄」（卽ち壬生新寫古文書）等がある。併し編纂・公卿・朝儀・佛事乃至諸道の史蹟や公文をかくの如く類聚し、平安時代に於ける古文書の書式を知る資料となり、又制度事情の材料となる。なほ一般の詩文の外に神祇官の諸奏や中臣の祭文及び宣命の文の存する點も、大に參考となるものである。伴信友はその校本の末に「抑余之注意于此書、可顧費日月者、豈愛詩賦文章、制度事情、可就而覽者存矣」と述べてゐる。詩賦は多くは平安後期の文人の作を取つてゐる。卽ち具平親王・源順・橘在列・大江以言・大江匡衡・藤原敦光等多いが、前期の文人には、都良香・菅原道眞・紀長谷雄等極めて僅少である。（山岸）

長流（ちやうりう）　歌學者【姓名】下河邊氏。初め共平（具平とも）、後に長流又長龍。長流を「ながる」と讀んでゐるものもあるが、長龍ともあるから、「ちやうりう」が正しからう。長流と長龍との前後については、長龍を改めて長流としたといふ說もあるが、長龍は延寶の末年以後に見え、長流は寛文から延寶七年頃までのものに見える故、長流が先で、晚年に長龍の字を用ひたのであらう。通稱彥六【生歿】貞享三年（二三四六）六月三日歿す。享年は六十三といふのが從來の說（年山紀聞）。これは細見多幼といふ人の記憶で、長流歿後、凡そ三十年頃に記されたもの。然るに長流の自撰歌集「長龍和歌延寶集」に、「延寶九年五月二十日下河邊長龍五十五歲自集」とあるによれば、享年六十一歲で、この方が正しくはあるまいか。また六十二歲といふ說もあるが、圓珠庵の過去帳及び位牌によつたもので、共に後のものであるから信じ難い。【法名】吟曳長流居士【墓所】もと大阪玉造の東、大今里村にあつた由であるが、久しい以前に廢滅。大正十四年に圓珠庵の契沖の墓の隣に新たに作つた。【學統】木下長嘯子（別項）について歌を學んだ。又西山宗因（別項）に連歌の點を乞うた

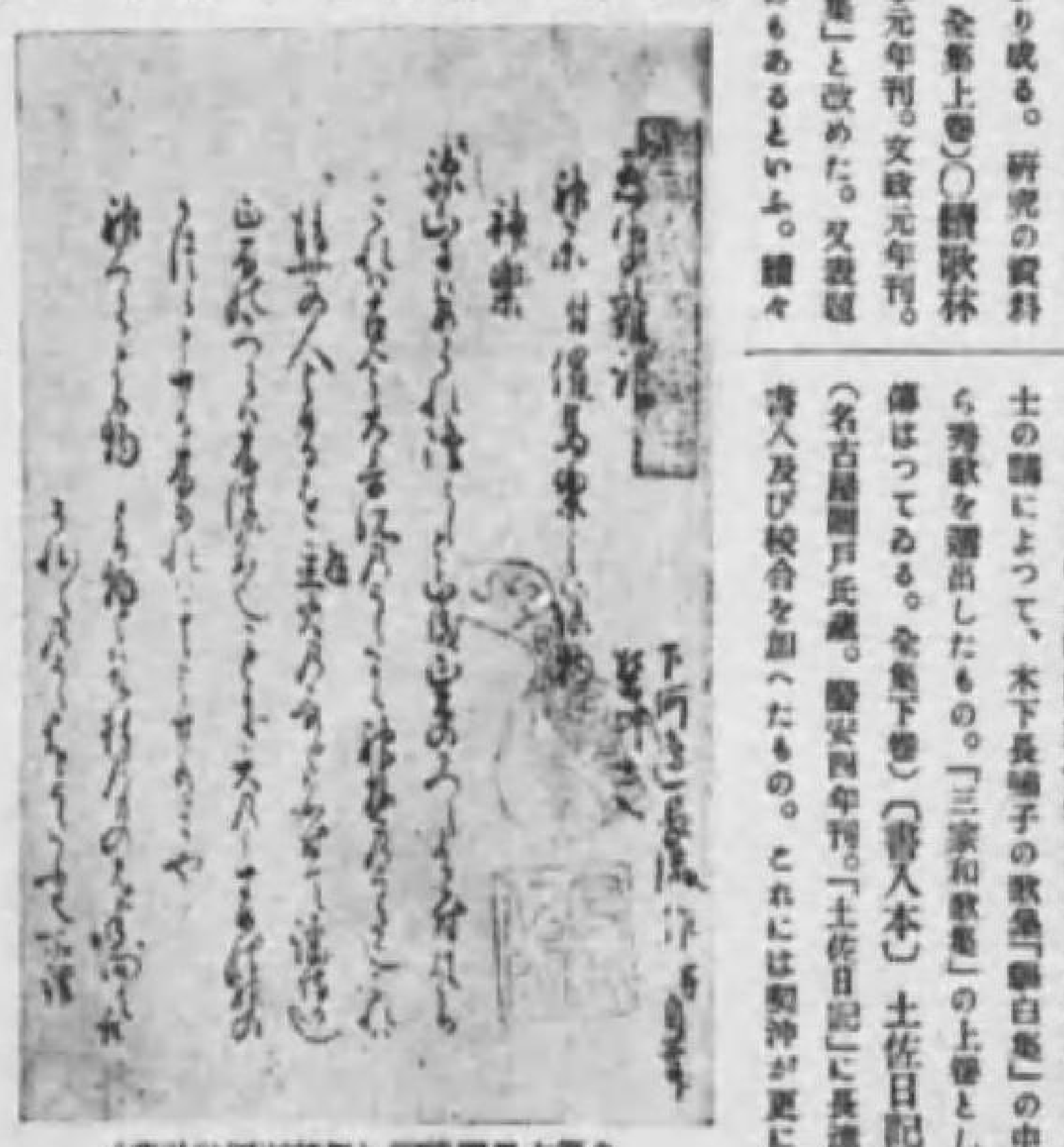
とも傳へられてゐる。門弟には、今井似閑・野田忠肅・五井守任（蘭洲）・三浦義建・志水（清水か）赤城・寺田陽仲などがある。【閲歴】長流は大和國宇田に、武士小崎氏の子として生れたが、母の氏を繼いで下河邊を名乘つた（宇田の靈とするのは、年山紀聞の說で、長流の家紋の靈に基づく。契沖は薗田であると信じてゐた）。父は片桐氏に仕へたといふが、長流は、年少から武士の教育を受け、十八九から「古今集」を讀み、又連歌を作つたが、主君片桐氏の不興を買つたので致仕した。後江戸に赴いて出仕を求めたが、志を得ずして大阪に歸つた。その後京に上つて三條西家に仕へ、「萬葉集」の抄物を寫し傳へ、數年にしてこゝを辭し、又江戸に下つたが、再び大阪に歸つて、鯰谷・江戸堀などに住み、一生を隱士として獨身で過した。和歌を好み、歌學に通じ、歌集や枕詞歌語などの註釋書を著し、撰集などをも作り、殊に「萬葉集」には精通してゐた。從學するものが多かつたが、狷介不羈の性で、心の趣かぬ時は富家の招にも應ぜず、人が來てもものをも言はなかつたと傳へられてゐる。僧契沖とは交り最も深く、契沖が妙法寺や曼陀羅院にゐた頃から絶えず往來し、その和泉に隱棲した後も、歌の贈答相ついだ。徳川光圀が長流の名を聞いて、召したけれども應じなかつたので、これに筆紙の料として五十人扶持を給つて「萬葉集」の註釋を作らしめる事としたが、長流は應諾しながら氣のむかない時は筆を執らなかつたので、餘り進捗しないうちに病に罹り、成功が覺束なくなつた爲め、契沖が改めて光圀の囑を受けてその業を繼ぐ事となつたが、長流はその後、病が重つて遂に世を去つた。契沖は長流の歌を集めて「晩花和歌集」と名づけて世に傳へた。



下河邊長流

【著作】長流全集二卷（新村出等編（契沖全集附卷として昭和二年刊））【註釋書】萬葉集管見（別項）二十卷（寛文初年以前の成立か）〇萬葉集鈔一卷（年代未詳。但し管見より後。「萬葉集」卷一から卷十四までの中から七十三首を拔萃して註釋を加へたもの。全集上卷所收）〇二荒僧歌注一卷（寛文七年八月成。聖徳太子と達磨の化身なる飢者との片岡山での贈答の歌を釋したもの。刊本は神佛二聖和歌注と題し、天明八年東園賈慧の序がある。自筆本は賀茂別雷神社藏。全集上卷）〇歌仙抄二卷（萬治二年頃成。萬治二年刊、自筆版下。三十六歌仙の歌を釋したもの。全集上卷）〇百人一首三奧抄二卷（百人一首の評註。全集上卷）〇六々歌人贊一卷（寛政十二年刊。三十六歌仙を贊して契沖が詠んだ歌に註釋を加へたもの。隱士就真の所望による。全集上卷）〇晶閣雜記一卷（自筆本賀茂別雷神社藏。萬葉の註釋。說は大抵「萬葉集管見」に同じい。自筆本には契沖の書入がある。全集上卷）【歌學書】枕詞燭明抄三卷（寛文十年刊。百餘の枕詞をあつめて解釋したもの。全集上卷）〇萬葉古事並詞一卷（自筆本賀茂別雷神社藏。「萬葉集」中の詞を風土記等を引いて證し、又解釋したもの。全集上卷）〇餅考集一卷（水戸彰考館所藏寫本が唯一の傳本である。難解の歌語を解釋し、これに關する諸說をあげたもの。全集上卷）〇古詠並古事一卷（自筆本賀茂別雷神社藏。古歌を部門別にしたものと、「日本書紀」その他から故事出典たるべき文をあつめたものと、詠古の歌と名所の歌とをあつめたものとより成る。研究の資料として抄錄したものであらう。全集上卷）〇續歌林良材集二卷（延寶五年刊。貞享元年刊。文政元年刊。文政刊本は表題を「新歌林良材集」と改めた。又表題に一名「和歌祕密抄」とあるものもあるといふ。續々群書類從歌文部所收本。一條兼良の「歌林良材集」の續編として歌に詠まれる故事傳說等を說明したもの。全集上卷）〇四季出題抄一卷（大阪殿村家所藏契沖書寫本が唯一の傳本である。四季の歌題をあげて說明し、これをいかに詠むべきかを示したもの。全集上卷）〇萬葉集名寄（別項）四卷（萬治二年頃刊。これは著者版下本。寛永七年再刊。この時書名を「萬葉集名所部類抄」と改めた。全集上卷）〇材林和歌抄五卷（水戸彰考館と竹内文平氏との所藏の寫本が知られてゐるのみである。「萬葉集」その他の歌集から三千五百餘首を抄出して、その詠ずる品物によつて部類し作歌の資材としたもの。全集上卷）【歌集】長龍和歌延寶集一卷（湖海狂士の謂によつて、長流自らの歌を選んだもの。延寶九年成。「三家和歌集」の中卷として收められた。文化十年自撰「晩花集」と題して刊行。更に續日本文學全書第一編中に複刊。全集下卷）〇晩花和歌集（別項）二卷〇林葉累塵集二十卷（寛文十年刊。長流が同時代の武士・農夫・商賈・僧侶等無官無位のものの歌を集めて後世に傳へんために作つたもの。但し木下長嘯子のみは例外。四季・戀・雜等に部類してある。全集下卷）〇萍水和歌集二十卷（延寶七年頃成。刊。前項の書と同じ趣旨で撰したもの。但し心敬・宗祇・肖柏・藤原惺窩等古人の作をも加へた。全集下卷）〇長嘯歌選一卷（延寶九年頃成。湖海狂士の謂によつて、木下長嘯子の歌集「擧白集」の中から秀歌を選出したもの。「三家和歌集」の上卷として傳はつてゐる。全集下卷）【書入本】土佐日記抄（名古屋岡戸氏藏。慶安四年刊。「土佐日記」に長流が書入及び校合を加へたもの。これには契沖が更に書入を加へた。その書入校正を集めて整理し、全集に收めて「土佐日記抄」と名づけた。全集上卷）【歌風・學風】長流は江戸時代に新たに興つた古典學、所謂古學の先驅者である。歌は貴賤を問はず老若を論ぜず、わが國民の見るもの聞くものにつけて思を述ぶるものであるとの考から、窮屈な因襲的な堂上家の歌に對抗し、その教權から和歌を解放して、取材の範圍をひろくし、自由な清新な歌を鼓吹した。これは恐らくは、彼が愛讀した「萬葉集」から得來つたものであらう。さうして、曾根好忠・源俊頼・藤原俊成の如き、各時代の新風歌人の作を重んじ、殊に木下長嘯子に私淑した。官位ある人は我が儕にあらずとして、位なき武士を初め、田夫・野人・商賈・僧侶の歌をあつめて「林葉累塵」「萍水」の二集を撰んだ如きも、その志を見るべきである。併し實際に於ては、長流の歌は、まだ十分舊來の風を脫しきらないところも見えるが、とにかく特色のあるものであり、又數篇の長歌の作があるのも異とするに足るものである。歌の學問に於ては、長流は歌の註釋、殊に「萬葉集」の註釋を主としてゐるが、これも從來の傳授のつまらないものである事を稱へて、從來の諸說に拘はらず調法や解釋に新說を出してゐる所が少くない。但し概してその考證精しからず、また偶臆に陷つた所も見える。この點は長流も自覺したとみえて、「萬葉集管見」の如きは老後には愧ぢて、人に示さなかつたといふ。【影響】長流の學問は、契沖に影響するところ甚大であつた。契沖の主著なる「萬葉代匠記」は、長流の「萬葉集管見」を基礎として出來たものであることは、「代匠記」初稿本と「管見」とを比較してみれば明瞭であつて、「代匠記」は「管見」に多くの論證を添へ、且つ契沖の私見をも加へたものといつても過言でない（萬葉集鈔その他長流の說を引いた所も少くない）。契沖の「百人一首改觀抄」と、長流の「百人一首三奧抄」との間にも同樣の關係が見られる。「古今集餘材抄」の如きも亦、程度の差こそあれ、長流の手を着けておいたものを基礎とした事は契沖自ら記せる通りである。かくて契沖は、學問上に於ける長流の後繼者であつて、長流が開いた土地の上に、古學の殿堂を建てたものである。古學の特色は、自由討究の精神と、歸納考證の研究法とにあるが、前者は長流に於て明かに見られるが、後者は長流に於てはまだ十分發達せず、契沖に至つて初めて明瞭になり確立せられたのであつて、ためにその學問を劃期的のものとしたのである。されば長流は契沖の始めた古學の基礎を築いたものであつて、その學說は、契沖の著作に攝取せられて、後の古學者・國學者に影響を與へたのであるが、又「萬葉集管見」の如きは、北村季吟の「萬葉拾穗抄」や荷田春滿の「萬葉集僻案抄」などにも引用せられて、これに直接の影響をも與へてゐる。【參考】長流傳記資料 橋本進吉（長流全集下卷附錄りに長流研究論文目錄がある）〇新資料に據る下河邊長流傳の研究 森銑三（國語と國文學八ノ四）〇契沖阿闍梨 大町桂月〇契沖傳 久松潜一（契沖全集九）〇國文學研究史 野村八良〇國學全史 同上 〇日本歌學史 佐佐木信綱 〇近世和歌史 同上

（橋本）



自筆本晶閣雜記（賀茂別雷神社藏）

長龍延寶集 ちやうりゆうえんぽうしふ 「晩花集」を見よ。

張良 ちやうりやう 幸若舞曲（番外）一卷【作者】不詳【成立】室町期【諸本】内閣文庫藏の古寫節附本が新群書類從第八舞曲部に收められ、又全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを、日本歌謠集成卷五所收。【題材】舞曲中唯一の支那說話。兵法傳授說話。漢の高祖の三傑の一、張子房に關する曲で、「史記」「漢書」等に有名な黄石公傳說を主題としてゐる。謠曲「張良」と同材。但し謠曲よりは委しいが荒唐さを增し、大蛇退治の武勇傳說的要素をも含み、觀音信仰の本地物的時代色と融合してゐる。酒の由來を說くも近古色である。なほ本曲の題材は、特に「鬼一法眼」（別項）の挿話としての說話と近似してゐて兩者の交渉を推測し得る。張良・樊噲は、漢土の謀臣勇士として近古に特に崇拜せられた人物で、彼等に關する文學や傳說も少くない。謠曲「鞍馬天狗」乃至その内容を成す義經の兵法傳授說話の如きも、一面この黄石公傳說の影響である。【梗概】張良が、天下を平げようと鷲峰山の十一面觀音に一七日の參籠をなし、その示現に任せて御手洗の川について百日下ると、果してしやうみやう國に着き、橋を見出し、八十餘歲の老翁の馬に騎つて來るのに逢つた。翁は沓を橋下に落し、張良が捧げる毎に幾度も落し〳〵した。最後に激流に落下したのを張良は三十餘丈の崖下に飛び下り、襲ひかゝる大蛇を打懲して歸服させ、沓を拾うて來ると、翁はその剛膽の試に堪へたのを感賞して、虚空に鞭を上げ良を馬の尾に縋らせたまゝ南方淨土へ伴ひ、觀世音の本體を現して兵法の祕書陰陽の卷を授けた。後、仙酒を賜ひ、その由來をも告げられ、なほ與へられた扇と鞭の奇特によつて、良は一瞬に故郷に歸る事が出來た。

（鳥津）

張良 ちやうりやう 「唐事物の謠曲」を見よ。

勅書 ちよくしよ 古文書【解說】天皇の綸言を記した公文書。詔書（別項）が臨時の大事に用ひらるゝに對し、勅書は尋常の小事、例へば攝政關白に隨身を賜はり、皇子に源氏の姓を賜はり、内親王を三宮に准ずる場合及び封戸を充つる場合等に用ひられる。併し後世は詔書勅書使用の場合は劃然としてゐなかつたやうである。その手續は詔書を少し簡略にしたもので、普通は御畫日も御畫可もない（詔書參照）。そして地方へ遣る場合は謄勅符として下す。公式令規定の勅旨式は、

勅旨云々、
年月日
中務卿位姓名
大輔位姓名
少輔位姓名
奉 勅旨如右、符到奉行、
年月日　史位姓名
大辨位姓名
中辨位姓名
少辨位姓名

この公式令の勅旨式はその實例は殆ど無く、一般に勅書と稱せらるゝものは、同じく公式令に規定してある飛驛下式即ち勅符式に據つたものである。

勅、諸國所貢調庸支度等物、毎有未納、交闕國用、積習稍久、爲弊已深、良由國宰郡司遞相怠慢、遂使物漏民間用乏官庫、又其在政治民、多乖朝委、擁平隔頗、百不聞一、遂民窮弊、十室而九、害日實而、宜令知此、宜覈其狀、隨事貶黜其政績、有聞執事無勤者、亦當褒賞陟其階級、所司宜詳沙汰明作條例奏聞、主者施行、
延曆五年四月十一日

後世、禪師號・國師號等を贈らるゝ場合の徽號勅書もこの式である。これには普通御畫日（日の數字の宸書）があるが、時に全文宸筆のこともある。なほ後世は普通の宸翰をも俗に勅書と稱し、幕末には今日の御沙汰書の式のものも勅書と申してゐた。明治以後は勅旨・勅諭・勅語・御沙汰書の區別がある。

（伊木）

勅撰和歌集 ちよくせんわかしふ 和歌【名義】宣旨又は院宣によつて撰者がえらんだ歌集をいふ。【解說】勅撰和歌集としては古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・新古今和歌集・新勅撰和歌集・續後撰和歌集・續古今和歌集・續拾遺和歌集・新後撰和歌集・玉葉和歌集・續千載和歌集・續後拾遺和歌集・風雅和歌

集・新千載和歌集・新拾遺和歌集・新後拾遺和歌集・新續古今和歌集（以上各別項）をさし、併せて二十一代集といふ。この外、「萬葉集」を勅撰とする說もあるが、「萬葉集」全部にではなく、卷一・二等の小部分に適用され得るのみであり、それも「古今集」以下のやうな嚴正な勅撰集とは言はれないであらう。又清輔の撰した「續詞花集」の如きも宣旨によつて撰したのではあるが、撰上の前に崩御になつたから勅撰集とならなかつた。かくて勅撰集としては二十一代集をさすと見るべきである。なほ古今・後撰・拾遺の三勅撰集を三代集といひ、古今より新古今までの八勅撰集を八代集といふのである。【研究】二十一代集をまとめて書史學的に研究したのは、吉田令世の「歷代和歌勅撰考」である。（久松）

勅版 ちよくはん 「刊本」を見よ。

勅筆流 ちよくひつりう 「書道」を見よ。

直喩 ちよくゆ 「比喩」を見よ。

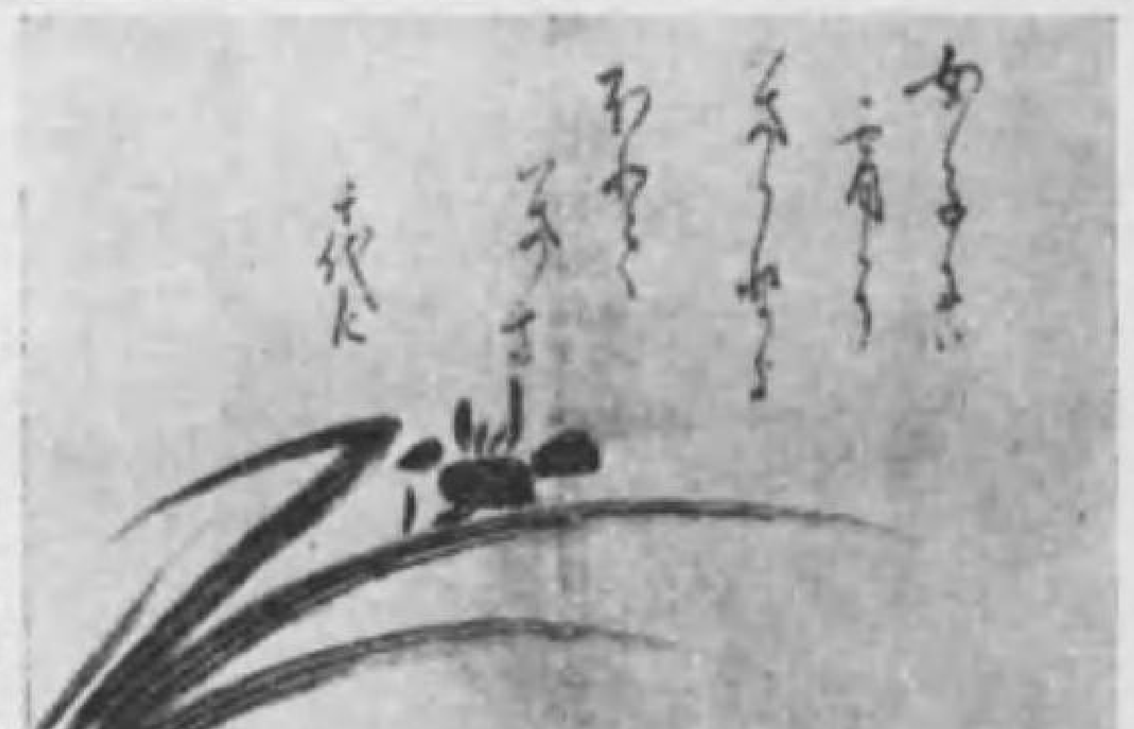
著作權 ちよさくけん 【解說】文書・演述・圖畫・建築・彫刻・模型・寫眞・演奏・歌唱その他文藝・學術若しくは美術の範圍に屬する著作物の著作者が、その精神的勞作の所產たる著作物を、經濟上排他的に利用することを得る權利を謂ふ。この權利は著作權法（明治三十二年法律第三九號、但し明治四十三年・大正九年及び昭和六年にそれぞれ一部改正）の認むるところであり、又所謂ベルヌ條約に依つて國際的にも認められてゐる。著作者は著作物を作成すると同時に當然著作權を與へられ、今日では以前のやうに免許・版權・登錄・納本等の手續は勿論、著作物の各部册に著作權所有なる字句の表示などを爲すことは必要でなくなつた。著作權は法律に定むる一定の期間內だけ保護せらるる權利である。即ち發行又は興行した著作物の著作權は、著作者の生存間及びその死後三十年間繼續する。著作者の死後發行又は興行した著作物の著作權は、發行又は興行の時から三十年間繼續する。無名または變名著作物の著作權は、發行または興行の時から三十年間繼續する。著作權は上述の如く、著作物を經濟上排他的に利用することを得る權利であるが、その利用方法は、著作物の種類に依つて多種多樣であるから、從つて著作權の內容をなすところの權能も亦多種多樣である。その主なるものを擧ぐれば、出版權、飜譯權、興行權、演奏權、映畫化する權能、戲曲化する權能、放送權等である。著作者は、通常出版や興行の設備と經驗とを有しないから、出版業者又は興行者等と出版契約、映畫化契約、興行契約、上映契約等を締結して著作物の利用をなすのが普通である。出版に就いては出版法その他出版の取締に關する法規の制限を受け、興行に就いては活動寫眞フイルム檢閱規則、その他興行の取締に關する警視廳令、又は各府縣令等の適用を受けねばならぬことは勿論である。又放送は現在では放送局のみこれをなすことができるのであるから、所謂放送權なるものは、現行法制の下では放送局に對する放送許諾權として現はれるのである。僞作者卽ち著作權の侵害者に對しては、著作者は侵害の中止並に損害の賠償を請求することができるし、又僞作者を告訴して刑事制裁を受けしむることができる。【著作者の人格權】著作者は著作物を作成することに因つて、著作權の外に、著作物の作成者としての人格的利益を維持する權利を與へられる。この權利は人格權の一種であつて或る著作物の著作者たることを明示する權利、著作物の全一性を維持する權利の如きがこれに屬する。著作者にこの權利があるため、何人も他人の著作物を發行又は興行する場合には、著作者の生存中は、著作者が現にその著作權を有すると否とに拘はらず、その同意なくして著作者の氏名稱號を變更若しくは隱匿し、又はその著作物に改竄その他の變更を加へ、若しくはその題號を改むることができない。又著作者の死後は著作權の消滅した後と雖も、その著作物に改竄その他の變更を加へて著作者の意を害し、又はその題號を改め若しくは著作者の氏名稱號を變更、若しくは隱匿することができない。著作者の人格權を侵害する者に對しては、著作者は著作者たることを確保し、又は訂正その他の聲望名譽を回復するに適當なる處分を請求し、及び民法の規定に從ひ侵害の中止並に損害の賠償を請求することができる。著作者の死後に於ては著作者の親族がその著作者たることを確保し又は訂正その他、その聲望名譽を回復するに適當なる處分を請求することができる。又著作者の人格權の侵害者に對しては、告訴をなして刑事制裁を受けしめることができる。【江戶時代に於ける著作物の保護】江戶時代に於ては、法制上概して出版物の取締の方面のみが着眼され、著作者の利益の保護の方面は閑却せられてゐた。併し江戶時代の中期頃から書物の著作・出版が盛んとなるにつれて、又他人の出版したものを無斷で重版したり、又は類版を出版して最初の出版者の利益を害する者などが出たので、三都の書物出版業者の間には、重版類版の防止に關する同業者の組合規約が成立するに至り、著作出版の私法的關係は、實質上この組合規約に依つて私的に規律されてゐた。著作者の利益は、これ等の出版業者の組合規約を通して、極めて間接に保護せられてゐたのである。これ等の規約は單に同業者間の私的協定に過ぎなかつたが、實際に於ては法令の如く尊重せられ、當局からもその效力を認められてゐた。その後天保十五年五月、町年寄館市右衞門から書物掛名主へ觸れられた沙汰書が出づるに及んで、始めて著作出版の私法的關係が、公的にやゝ詳細に規律さるゝこととなつた。卽ちこの沙汰書が我が國に於ける著作出版に關する私法的法令の最初のものであると普通に云はれてゐる。尤もこの外には、その後江戶時代の終りに至るまで、私法的法令の見るべきものは現れなかつた。【馬琴と著作權】江戶時代の中頃、著作出版が盛んに行はるゝに至つてから、作品の剽竊や盜賣や僞版（類版重版）が屢々行はれたに拘らず、作家の間に著作權的思想は容易に發生しなかつたやうである。ただ一人馬琴が永年の著作生活の間に書かれた日記や、書翰や隨筆に於て、度々著作權侵害の問題に就いて訴へてゐるのを見るだけである（馬琴日記・著作堂雜記等）。併し彼の時代には、勿論、著作權と云ふものが確立してゐたわけではないから、救濟を受くる途もなく、恐らくその都度泣き寢入りになつた事であらうと思はれる。（藤村）

著作堂一夕話 ちよさくだういつせきわ 隨筆 三卷【著者】瀧澤解（馬琴）【刊行】弘化五年【解說】享和三年刊の「蓑笠雨談」（別項）の改題である。やゝ大判になつてゐるのと出版書肆の違ふだけで、板木も同一のものを用ひてゐる。

（[illegible]參照）（和田）

千代田歌集第一卷 ちよだかしふだいいつくわん 歌集【撰者】佐佐木弘綱【刊行】明治二十三年一月【解說】全國から募集した歌を分類編纂したもの。分類は新年・四季・戀・雜以外に、詠史・新題の部が立てられてある。當時として清新の作が多い。作者には、三條實美・岩倉具視・高崎正風・福羽美靜・東久世通禧・小中村清矩・小出粲・税所敦子等知名の人もあるが、無名の作者がその多きを占めてゐる。卷首に新六歌仙圖を揭げてある。明治時代の民間歌人の撰集の初めともいふべく、歌道普及の上に大に功があつた。隨つて二・三卷も世に出たのである。（佐佐木）

千代尼 ちよに 俳人【別號】素園・草風【生歿】元祿十六年二月加賀松任に生れ、安永四年（二四三五）九月八日同地に歿す。享年七十三（白雄が明和六年訪ねて會つた時の手紙には「六十九」とある。それによれば七十五歲說がよい）【法名】釋尼素園【墓所】松任町聖興寺。金澤專光寺にも碑がある。【閱歷】千代は松任の表具屋福增屋六左衞門（通稱六兵衞）の女として生れた。幼時から文藝の趣味があり、十六七歲頃から既に俳諧をよくしたらしい。それは彼女が十二歲の頃奉公した本吉町北潟屋大睡の感化によるなどと言はれてゐるが、大睡に宛てた支考の手紙（城丸兵衞「千代尼」所載）に據れば、實は特に學んだ師匠はなかつたと思はれる。「姬の式」（享保十一年）等に據れば、寧ろ金澤の俳人野角の妻梁仙女を先蹤としてこれに親炙してゐたらしい。享保六年の夏秋の際、支考・露川が相前後して北越に行脚した折、二人は共に千代に會してその奇才に驚き、支考は特に書を裁してこれを鄕友に報じた程であつた。千代の作が初めて物に見えるのは享保七年刊の「北國曲」に揭げられた「池の雪鴨あそべとて明てあり」の一句である。露川が金澤に行つたのは享保六年六月で、この句はその折聞き得て採錄したものと思はれるから、享保五年冬卽ち千代女十八歲の時の吟である。次いで支考が大睡に報じた二句「行春の尾や其まゝに杜若」「稻妻の裾をぬらすや水の上」及び「藉拔集」（享保七年夏序）に載せられた「惜めども春は留らで啼く蛙」「それ〲に名乘て出る若菜哉」等の作が知られてゐる。この頃から、千代女の名は益々喧傳されたと見え、稻妻の吟の如きは「水の友」（正秀追善、享保九年松霞撰）、「文月往來」（享保十一年風枝撰）等にも採錄され、その名は既に遠くまで聞えてゐた事が分る。かくて享保十年には小松の俳人宇中が「俳諧千代女二書」（千代尼句集所載）をものして、大に彼女の賞揚に力めた。當時千代は二十三歲であつたが、この書中に「やゝ廿とせの春秋を經て、千代の梁に生先しるし。いまだ高砂の尾上に相生の名もあらずとかや」とあるのに據れば、なほ未婚であつたらしい。然るに傳說によれば、千代は享保五年四月金澤大衆免中組の足輕福岡彌八に嫁ぎ、同六年七月一子彌市を生み、十一年七月良人に死別し、十二年二月彌市も亦夭折したので、その年五月婚家を去つて鄕里松任に歸つたといふ（城丸兵衞「千代尼」）。併し文獻的にはこれを證すべき何等の資料もなく、かの「澁かろか知らねど」「起きて見つねて見つ」「蜻蛉釣今日は」「破る子のなくて」等の吟も、彼女の作だといふ確證を得難いのみならず、「起きて見つ」の如きは全く他人の作たる事が明かにされた。それで、近時千代女未婚說も唱へられてゐる（昭和四年五月「月明」所載日置謙氏說）が、兎に角よし結婚した事があるにせよ、それは極めて短い間の事であつたらうと思はれる。さて千代女の俳名が高くなると共に、行脚の俳人の來訪する者も多く、享保十一年秋には魯九が來て唱和し（雪の白河）、翌年夏には盧元坊もやつて來た（桃の首途）。爾來美濃派の人々と最も風交多く、剃髮してから後（剃髮したのは享保十三年といふが、その他の諸說あつて詳かでない）は、特に蕉俳に繫縛し、金澤の麥浪女を友としたり、同鄕のすゑ女に風雅を傳へ（破れ笠）たりした。又折々は各地に遊歷して諸好士との交を重ねた。寶曆五年五十三歲の時素園と名を改めたが（寶曆五年春刊「百太郎」に「松任千代女素園」とあるから、既にその前年に改めてゐたかとも思はれる）、彼女の名聲は年と共に高く、遂に寶曆十三年には既白の手によつて「千代尼句集」が撰ばれ、明和八年には更に續集「松の聲」が編まれた。生前既に二句集が相次いで出たのに徵しても、その聲望の高かつた狀が察せられる。かくて晩年に至るまで風雅の名を擅にし、「月も見て我は此世をかしく哉」を辭世として終つた。【批評】その名聲のみから言へば、千代女は恐らく芭蕉と比肩すべき地位に居るであらう。而もその實は、彼女の名に比して餘りに虛しいと言はねばならぬ。元來彼女は特に師によつて風雅の手筋を學んだといふのでもなく、言はば天性の才から自然と他の句を眞似て見たといふに過ぎない。それが偶々支考等の推稱によつて汎く喧傳されるに至つたので、恐らくは彼女の美貌と才氣とが更に人々を惹きつける力を持つてゐたのであらう。勿論この才は正當に導けば眞に大成し得たかも知れない。然るに不幸にして彼女が最初多く影響を受けたのは、既に衰頽に傾いてゐた平俗な美濃派の風調である。加ふるに若い彼女は內面的な深い省察を缺き、ただ淺薄な表面的な風雅觀に捉はれて、それを小器用に纏めようとした。そしてそれが俗受けがすればする程、彼女は益々心を內に向ける事を忘れて、只管所謂風雅臭い趣向のみに才を働かせたので、その作には才氣が露はに出過ぎて、深さと潤ひとがない。細みや寂びに至つては殆ど求められない。かの最も人口に膾炙する「朝顏に釣瓶とられて貰ひ水」の一句によつても、彼女の全面目は十分窺はれよう。これは風雅を理知的に說明したやうな句で、そこにわざとらしい臭味を感ぜずにはゐられない。併しそれ故に又風雅といふ事に深い修養を經てゐない俗人にも、容易に風流心を感じさせる事が出來たので、千代女が世間的に名聲を博した所以



千代尼筆蹟（松宇文庫藏）

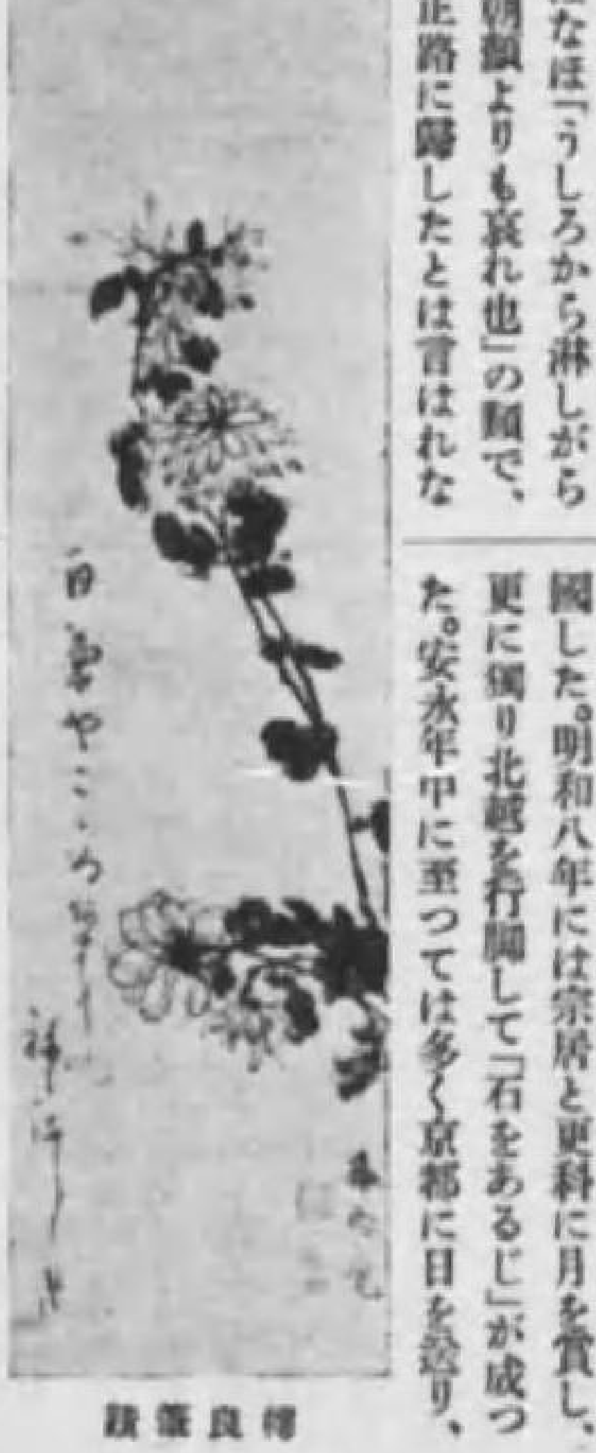
は畢竟この點に存する。そしてそれだけ彼女の俳諧は藝術的に低いレベルに止つてゐる。蕪村や闌更や麥水や、固よりそこに氣づかないのではなかつたが、彼等が世俗と共に彼女を尊重したのは、寧ろ女性であるといふ特殊のハンディキャップと、强ひて世間に反して輕視する必要がなかつたのとに因る。決してその作品に價値を認めたからではない。とはいへ彼女も晩年の作には、「思ひ忘れ思ひ出す日ぞ春の籬」「涼しさやはだかに近き茶の木畑」「蝶は夢の名殘分入る花野かな」の如き、落着いた、深みを持つた心境への推移を見せてゐる。あれだけの才を持ち、今少し俳壇的環境のよい時代に生れ、よい師匠を得てゐたならばと遺憾にも思へる。ただ彼女が生前既に傳說化され、歿後多くの巷談街說が生れた程名高かつたといふことは、俳諧史上誠に希有の事象である。

【撰著】千代尼句集（別項）○松の聲（千代尼句集參照）【門流】斐子白烏がやはり俳諧を嗜んだのと、すゑ女が紫園と號してやゝ知られてゐた外には、特に門人といふ程の者はない。

【參考】近世奇跡考（山東京傳）○千代尼（城丸花仙）（俳句日本叢書四篇）○千代尼事蹟雜考（日置謙）（月明叢書第二輯所載）○千代尼の句と人（栗田天青）○加賀の千代について（鈴鹿野風呂）○貞心と千代尼と蓮月（相馬御風）〔潁原〕

千代尼句集（ちよにくしふ）　句集　二冊　【編者】無外庵既白　【刊行】寶曆十四年初春の序があるから、當時の刊行と思はれる。京橘屋治兵衞・江戶山崎金兵衞版　【諸本】大參編嘉永二年版「增補千代尼句集」がある。女流俳句集（俳諧文庫）・閨秀俳家全集（雙峰菅風編）・中興俳諧名家集（俳諧大系）・俳文俳句集（日本名著全集）所收。【解說】加賀の俳人既白が、千代尼の句の散佚するを惜しんで、自らこれを蒐集し、四季類題別として收めたもので、なほ卷頭に蓮二・麥林から千代に遺つた書信や、宇中の「傳千代女書」等を添へて、千代女の聲望を示すことに努めて居り、藤松因の序、半化坊の跋また千代女を推賞してゐる。これは本書がなほ千代女生前に刊行されたものであるから、大に辭令も含まれてゐるであらうが、また當時千代女の名聲が高かつた狀も十分想察される。既白はなほ本書に次いで明和八年續千代尼句集として「松の聲」を撰び上梓したが、共に千代女生前の編であるから、その內容は最も信憑すべきである。〔潁原〕

樗良（ちよら）　俳人【姓名】三浦元克、字冬卿、通稱勘兵衞。後薙髮して玄仲といつた。【別號】梭本庵・無爲庵【生歿】享保十四年志摩鳥羽に生れ、安永九年（二四四〇）十一月十六日伊勢山田に歿す。享年五十二【墓所】山田尾上町壽巖院【家系】父は志州鳥羽の人で稻垣對馬守の家臣三浦彌惣左衞門に仕へてゐたが、故あつて致仕し、寬保二年勢州山田岡本町に移り住んだ。【閱歷】樗良は寬保二年十四歲の時、父と共に山田に移つて、紙烟草入の繪を書いて生活してゐた。少時から俳諧を善くし、夙く鄕黨の間に名が知られてゐた。その師系については、自ら「白頭鴉集」に、「無敵齋百雄子は紀の長島に住して、風雅の互爲なりける。そのかみ予も其門に遊んで遂に俳諧の一斑を窺ふ事とはなりぬ」と言つてゐるが、百雄その人の俳系はなほ明かでない。又その師事した年代も詳かでないが、樗良の句が初めて物に見えたのは、寶曆元年頃山田で作つた「名月や袖とらるゝ蕎」（杜十編本庵のさらへ）であるから、それよりも以前のことであらう。即ち延享・寬延の際で、まだ彼が弱冠にも達しない頃であつたと思はれる。山田の俳人杜十の稿本「筆のさらへ」に據れば、寶曆初年の頃は山田にあつて、同地の杜十・和鈴等と唱和してゐた事が分る。かくて寶曆九年正月紀州木の下に遊び、同三月山田に歸るに際して、木の下の俳友と應酬唱和した句を初め、豫て書き集めて置いた知友の吟を集めて、自ら「白頭鴉集」二冊を撰んだ。玆に初めて、彼は麥林の徒に對して自ら別に一旗幟を揭げたのである。但しその風調はなほ「うしろから淋しがらする紅葉哉」「鉢敲朝顏よりも哀れ也」の類で、まだ決して蕉風の正路に歸したとは言はれないが、ために伊勢の俳壇に漸く支麥以外の境地を拓かうとする機運を作り、又樗良の俳名一時に高くなつた事は爭へない。寶曆十年正月には神風館で涼岱等と唱和を試みて居り、同十一年八月には南紀新鹿の里に遊んで岐川庵にとどまり、「二股川」を撰んだ。かくて同十二年十月末、市中に無爲庵を結んで、「我が庵は榎ばかりの落葉哉」の吟があり、社友と連句數卷を興行して、「我庵集」が成つた。「樗良發句集」（寬政版）の序に、「曾て俳諧に志深くふたまた川の一集に專ら正風を唱和してより何くれの集の變化に遊び、終に我庵集に風とゝのほり格定りける程に、その國ゆづり他の國迄もゆづるばかりの名なりけらし」と言つてゐる。かくて樗良が無爲庵主となつたのは三十四歲の時で、當時既に宗居・坡仄・野梅・茂岡・麥父等の有力な門弟を擁し、「山寺や誰も參らぬ涅槃像」「風吹く草の中よりけふの月」の如き、彼獨自の風調が定つて來たのが見られる。伊勢一國のみならず全國的に彼の實力が認められて來たのは蓋し實際であつたらう。然るに彼は元來一度は世塵を厭ひ剃髮した程であつたから、やがて無爲庵の喧噪を厭うて（我庵を辭し）、明和三年十月こゝを去り、北勢大島に假の宿りを定めた（諾大島賦）。而もこゝにも長く足を留めず、同五年妻と共に遠く江戶に下つたが、やはり故鄕戀しく翌年歸國した。明和八年には宗居と更科に月を賞し、更に獨り北越を行脚して「石をあるじ」が成つた。安永年中に至つては多く京都に目を注ぎ、蕪村・几董等と頻りに來往して、唱和に寧日がない有樣であつた。安永二年から數年間の几董の日記や、「一夜四歌仙」「月の夜」「秋風六吟歌仙」、さては「新雜談集」に載する逸話等によつて、その風交の密であつた狀は十分察せられる。又播州に青蘿を訪ねて「骨書」の兩吟を試みたのも安永初年であつたらう。かくて京都にも美角・定雅・玄化・甫尺等の門人が出來、城南寺田の里には、秦夫・雲裡等忠實な社中があつた。又この間、安永四年・七年の兩度北越を廻つて、越後高田の眠波等を初め多くの門人を得、「菊の香」「月の夜」「花七日」「一日行脚」「雪の聲」「まだら鷹」等の諸集が撰ばれた。蓋し樗良一生の俳諧生活中、安永初年はその



樗良筆蹟

最も油の乘つた時代で、蕪村一派と相提携して所謂天明中興の一家たるに至つたのであつた。天明八年二月、都の花がなつかしいとて北陸から歸洛し、四月には曉臺等と唱和したりした（反古籠）が、翌年春故鄕に歸つて、その冬歿した。

【人物・俳風】樗良は「性朴直」（中興俳諧六家集）と評せられてゐる通り、極めて恬淡素樸な人であつた。少壯の頃はやゝ放縱な生活もしたらしく、伊勢に傳ふる口碑によれば、彼の少時は寧ろ不良少年に類し、「樗良のまねはしてはならぬが俳諧だけは眞似せよ」と言はれたといふ。又彼が女色に溺れる例があつた事は彼自身の手紙・日記などによつても知られる。一度髮を剃り捨て法の敎を聞きながら、市中に居を構へ、俳諧の點料に生活しなければならなくなつたのも、實は捨て難い妻のためであつた（我庵集序・自筆明和の旅日記）。併し、これは又一面彼が頗る純情の人たる事を物語るものでもあつた。而してかうした性格は凡てその儘彼の作品に反映されてゐる。彼は、蕪村・曉臺等と等しく天明中興の一人として知られてゐるが、併しその風調は決して優艷高雅を主とし、奇警斬新を尊ぶといふのではなかつた。彼は自ら、俳諧の本體は俗談であると言つて（樗良文集序）、伊勢風の平明調を終に捨て得なかつたので、その點に於ては麥水・曉臺等が全く支麥の調から脫したのとは大に趣を異にしてゐる。言はば樗良は麥林の格調をその儘守つて、而も風趣を全く一變したのであつた。隨つて結局平板に終つて失敗した作も少くはないが、それでも似而非風流を振廻す卑俗さは彼には見られなかつた。況や上乘の作に至つては、その中に事象に對する的確な把握があり、純粹な感激に滿ちてゐて、一見淺薄平板なやうであるが、深く味はへば滋々として自然の眞實さが湧いて來る。「春の雪風吹荒れて日の暮るゝ」「山里や家根へ來て啼く雉子の聲」「櫻ちる日さへ夕となりにけり」「初雁や月のほとりよりあらはるゝ」等、何の他奇もないやうであるが、實は自然の幽情に深く分け入つてゐる所があるではないか。これは優艷な言葉や典雅な趣味のみで到り得る境地とは違ふ。樗良の特色は、要するにこの淡々無味の間に自然の眞情を寓する所にあつた。道彥が「無孔笛」に「樗良は淡白に過ぎて上天の如く、香もなく香もなく、さらに只事を言ふに至る」と言つたのは、蓋し適評と言ふべきであらう。

【史的地位】樗良が天明俳壇革新上の最大功績とすべきは、寶曆の末に逸早くも南勢に自家標榜の一旗幟を樹した事であつた。それは前にも言つた通り、必ずしも麥林の調に積極的反抗の態度を取つたのではないが、梅路・杜麥等の徒以外にあつて一調を成した事は、やがて俳風革新の大きな潛勢力となつたのであつた。几董が、「麥林の一格も今は其地にして信ぜざるの徒多し」（明烏序）と言つたのは、即ち樗良一派の進出を指したのである。又後人が彼を目して伊勢に於ける正風鼓吹の先驅者であるとするのも、この意味に於て誤つてゐない。併し彼は早く地方的に名を成した割に全俳壇に實際働きかけた力は弱かつた。それは彼が後年鄕國を出て各地に轉々した爲め、しつかりした自家の根據地を得なかつたのにも依るであらうが、又恐らく彼の淡々たる俳風が當時の人々を惹き附ける魅力に乏しかつた事も、その大きな一つの原因であつたらう。樗良の如き格調を以て樗良の如き風趣を得るには、實は樗良自身でなくては到底及び難い所で、畢竟彼の獨自な俳境は彼の獨自な性格の中に存するのであつた。だからその門人と雖も、蕪村の絢爛、曉臺の優艷を學ぶ者のやうに、直に師の風格に化せられにくかつた。彼の歿後遂に無爲庵の名跡を繼ぐ人がなかつた事に依つても、彼が獨り善しとしただけで汎く周圍に感化を及ぼさなかつた事が察せられる。だから同じく天明中興の一人と言つても、それは寧ろ當時に於ける勝れた一作家としての地位に重きが置かれてゐて、實際の革新運動に寄與する事は比較的少かつたといふべきであらう。

【編著】白頭鴉集（二冊、寶曆九年）○二股川（一冊、寶曆十一年）○我庵集○石をあるじ○菊の香○月の夜○時雨笛○花七日○年の尾（以上別項「樗良七部集」參照）○雪の聲（安永九年、加賀小松自在庵凡夫の編となつてゐるが、實は樗良の代撰によつて成つたもの）○まだら鷹（安永八年成、天明三年刊。越中井波蔎蘆吏の撰であるが、實はやはり樗良の力が大に與つてゐるので、「雪の聲」と共に「樗良七部集」中に收められてゐる）○樗良發句集（別項）○八瀬（樗良發句集參照）○樗良文集（天明六年雪蕉編、樗良の遺文を集めたもの）○樗良集（寬政版の樗良發句集、文化二年良木編の樗良附合集、樗良文集の三部を合冊にしたもの）○召波樗良句集（ホトトギス發行所、明治三十三年刊）。なほ樗良は雜俳の點者としても知られてゐたので雜俳の集もある。また嘗て自ら句集編纂の志があつたものと見え、寶曆六年から明和九年に至るまでの作を自選して、山田の書林藤原長兵衞に與へた自筆稿本が殘つてゐる。又妻を携へて江戶から歸つた時の日記、坡仄と共に京都地方に旅行した時の紀行等も、自筆のものが存してゐる。

【門流】伊勢に坡仄・宗居・茂岡・野梅・麥父、京都に美角・定雅・玄化・甫尺・秦夫・雲裡、北越に陸史・眠波・凡夫・大器・故麥等がゐて、その門人は決して少いといふのではなく、特に京都の南寺田の里には、樗良の句集・文集等を編した忠實な門人もゐたが、終に彼の衣鉢を繼ぐ程の者は出なかつた。

【參考】道の枝折（卓嗣）○樗良雜考（藤原紺帶）（寶舟三ノ六・七・八）○樗良坡仄京地旅行記（濱田椿堂）（木太刀二〇ノ一〇・一二）○樗良の句集（濱田椿堂）（木太刀二〇ノ一二）○稿本樗良句集（山田蕉雨）（燕火屋大正一五ノ一二）○樗良旅の日記（櫻井青瓢）（集古大正一一ノ一二）○樗良雜考（潁原退藏）（にひはり昭和二ノ三・八）〔潁原〕

樗良七部集（ちよらしちぶしふ）　俳諧集　小本二冊　【編者】玄化堂甫尺　【刊年】寬政五年五月、京菱屋孫兵衞等刊。【諸本】七部集總覽第三（俳文學大系）所收　【成立・由來】樗良七書（菊の香・時雨笛・佛之座・花七日・一日行脚・雪の聲・まだら鷹）と言つて世に行はれるものが、その選擇、當を得てゐないといふので、更に書肆が甫尺の意見により、新に七部を選んで、これを小本二冊に纂輯したものである。【內容】樗良關係の俳書中、代表的なもの七部を收めてゐる。〔我庵集〕明和四年刊。寶曆十二年樗良が山田に無爲庵を結び、「我が庵は榎ばかりの落葉哉」の吟があり、宗居・坡仄等の門人と歌仙四卷を興行した。これに社中の人々の四季發句を加へ、後に出版したもの。〔石をあるじ〕明和八年刊。この年仲秋、樗良が宗居と共に姨捨山の月を見て兩吟の歌仙が出來た。それに社中諸家の句を加へたもの。〔菊の香〕安永五年刊。樗良が安永末年、越後高田の門人眠波を訪ね、直江津の故麥と三人で、金澤

に赴いた折の紀行に、樗良一派の人々の句を添へたもの。〔月の夜〕安永五年刊。樗良が木屋町三條の假寓にゐた頃、月明の夜訪ねて來た人々と唱和した連句を初めとし、諸家の發句を集めたもので、樗良と蕪村一派との交渉が最もよく窺はれる。〔時雨笛〕安永五年冬序。同年暁波が京都三條に旅寓してゐた樗良を訪ひ、同じく附近に滯在中、京都の諸俳士と唱和したり、名所に遊んで得たりした作を集めたもので、暁波の主著である。〔花七日〕安永六年刊。樗良がその門下・知友の櫻花を詠じた句を集めたもの。〔年の尾〕安永年間、樗良が門人と催した連句五卷を上卷とし、一派の人々の四季發句を類題別に集めたものを下卷としてゐる。樗良一派の俳書としては最も代表的なものであらう。【批評】樗良七書に比して、「佛之座」の如き特殊のもの（これは元東皷の編した父の追善集である）や、小冊子に過ぎる「一日行脚」等を省いて「石をあるじ」「年の尾」等を加へた事は、樗良關係の代表書として、選擇當を得たものと言へるであらう。〔潁原〕

樗良發句集 ちよらほつくしふ 句集 二冊【編者】甫尺【刊行】天明四年春の自序がある。【諸本】本書はその後板木が燒失し、爾來專ら寫本で傳へられ魯魚の誤も多くなつたので、城南寺田の遺弟等が力を合はせて、更に遺句百五十餘章を加へ、寛政四年秋新たに京都の書肆菊舎太兵衞から出版された。又元治元年蘇窪久安がこの寛政版を「八棚」と題して翻刻した。板下は改まつてゐるが、內容は全く異同がない。召波樗良句集（ホトトギス發行所編）・天明名家句選（俳書大系）所收【解說】曾て樗良が京都に寓居してゐた時、門人支化がその句を集めて刊行しようと乞ひ、僅に百吟を書き附けて與へられた。然るにその後間もなく支化は病歿し、樗良も亦三年を經て世を去つた。それで支化の弟甫尺が亡兄の遺志を繼ぎ、同門秦夫の助力を借りて、更に人々の口に殘り耳に留まつた句々をも集め、三百章を選んで刊行したものである。樗良の作品が纏めて後世に傳へられたのは、全く本書が存在したからであつて、甫尺兄弟が師のために盡した功績は大きいと言はねばならぬ。〔潁原〕

千里 ちり 俳人【通稱】油屋喜左衞門【別號】日損者・損居士【生歿】生年未詳。元祿九年（一三五六）七月歿。享年未詳。【俳系】松尾芭蕉門【閱歷】大和葛下郡竹ノ內村の人、江戶に出て淺草に假寓した。貞享元年八月芭蕉が「野ざらし紀行」（別項）の旅に出るに當り、千里が舊里に歸るので同行し、共に東海道を上つて千里の舊里に到り、芭蕉はこゝに暫く旅の勞を休めた。後再び江戶に歸つた千里は貞享三年の其角の「初懷紙」（別項）に加はつたり、同年の芭蕉庵に於ける仙化の「蛙合」（別項）に加はつたりして居り、芭蕉の歿時には桃隣等の追悼俳諧に加はつて悼んだりしてゐる。かくて元祿九年七月十七日入道偈を作つて李里に與へ、李里は、これを折柄「陸奧偈」（別項）の旅から歸つた桃隣に傳へた。その偈は、「心日由來無ニ閑闕一、本源自性絶ニ塵埃一、損之又損損非レ損、是貧是賤任ニ去來一。」「はらへただ我もとゆいの秋の霜かゝれとてしも みずや有無」「一筋に思ひ入日の影法師あるをありともなきをなきとも」（陸奧偈）といふものであつた。かくてこの月歿したらしい。【人物】「野ざらし紀行」に、「常に莫逆の交ふかく、朋友ニ信有ル哉此人」と芭蕉も云つてゐるから、眞實な人であつたらしい。且つ桃隣が「陸奧偈」に、入道偈を揭げた前書に、「一向此道の話を好で此道にさかしく、此道を敲て大悟を得たり」と記して居り、入道偈と比べ見て、芭蕉の風雅を解して一種悟道的な風格を持つ人であつたらしい。

【參考】野ざらし紀行松尾芭蕉○陸奧偈天野桃隣○蕉門諸生全傳遠藤曰人○俳林小傳中村先久○俳諧人物便覽　（潁原・志田）

塵塚談 ちりづかだん 隨筆 二卷【著者】小川顯道【成立】文化十一年【諸本】燕石十種所收【解說】七十八歲の著者が、壯歲以來親しく見聞した江戶市中風俗の變移を追憶し、また自家の所感を交へて記述したもので、上卷には俳諧師の事以下五十二項、下卷には鳥居坂田火消首の事以下七十二項を收めてゐる。劇場・遊所・寶物・物價・社寺・祭禮・服裝等に關する記事が多く、又醫藥の事にも及んでゐる。蓋し著者は醫を業とした人であらう。奥に、「文化十一年甲戌季冬七十八翁小川顯道著」とある。　（和田）

塵ひぢ ちりひぢ 歌論書 一卷【著者】小澤蘆庵【成立】寛政二年九月「蘆かび」（別項）と同時に成つたもの。同十年「蘆かび」や「或問」（別項）とともに、「ふるの中道」と名づけられ、一冊の書として刊行された。【諸本】小澤蘆庵翁全集（續日本歌學全書第六編）所收。【內容】歌を詠むには、法なく師なく心のままを詠めばよいものであるが、鈍根愚昧の自分は昔人の詠歌のあとをみて學ぶことをおもふのである。これは第二義であるが、「日本紀」「萬葉集」「八代集」迄を見あきらめる事は容易でなく、特に「古今集」をこそ熟讀すべく、これは第三義である。第二義・第三義と雖も、自己の心を詠ずるといふ第一境に入らうと思つてみれば、第一に變る事はないのであると論じ、古今主義の歌論を展開してゐる。元來歌は心をもととするもので、人に習つてよまず、作例によつてよまず、法なく師なきものである。併し唯ありのままを詠むとは言へ、天地萬有の理を知り、人情に通ずべきである。彼我相通じ、情に達しなければ、如何程詠むとも虛妄のたは言である。この心掛さへあるならば、日夜の見聞によつてその人相應に、自ら彼我相通じ、物の道理や人情は知られる。この見聞覺知によつて思ふ心必ず生ずるので、事々物々、これより新しきものはないのである。かくの如く、歌は自らなる實情をうたふもので、實情をうたふ故に新鮮であり、そは廣く物を知り正しき認識、同情の念から誘導さるべきものである。かういふ歌の第一義をもととして、前述の第二義・第三義を結びつけたのが本書の要旨である。【價値】「蘆かび」に說かれた所と變らないが、歌の第一義・第二義・第三義とわけて說いた所に、一層明瞭にその說を窺ふことが出來、より整然と首肯せしむることの出來る論陣を張つてゐるといふべきである。なほこの書中、特に說明を要すべきものについて問答體を以て書いた「或問」の書中には、一層彼の見解をくはしく述べてゐるものがある。物には始中末があつて、すべて中がいゝといふ所から「古今集」を盛期の作で最も尊むべきと論じた所にも、又ただごと歌と「古今集」とを結びつけた所にも、理論上突きこむ餘地があると思ふが、當然起るべき反對論議の歌論の代表的のものとして、逸すべからざるものの一つである。　（藤川）

塵泥 ちりひぢ 隨筆 四十二卷十一冊 寫【編者】神澤貞幹【解說】編者が八十三歲の

頃、京都その他に起つた大事の數々を記錄したもの。卷一に寛政二年鳥居の御遷幸成つて新宮に渡幸の鹵簿。卷二に同上上皇遷幸鹵簿等。卷三に賢聖御障子。卷四に御遷幸記。卷五に新殿和歌、同御奏樂。卷六に御會詩歌、諸國奇談、異國舟漂流、相撲上覽、東山殿遺忌。卷七に淺草長吏彈左衞門由緒書、蒹葭堂集拔萃。卷八に歷世の咄し、醫者の事、賀壽ひ、長壽の者、砲術上覽、日蝕、火用心。卷九に夕なきの事、人の名、西洞院の古家、儒士西依備兵衞、伊奈右近將監の事、狐狸ヨリ御令書、三河國寶錄、肥前島原變、大坂火。卷十に武術上覽、岡田清助和文、七夕輪、東照宮御社、肥前島原變、因幡佛等十八條。卷十一に雙の淺讀、謠曲の衰、現在七画、紙王寺の尼等八條。卷十二に風俗三石士（劍術者）、（卷十三缺）。卷十四に殿中日記（天明七年二月ヨリ九月迄）。卷十五に殿中日記（天明七年十月ヨリ十二月迄）。卷十六に殿中日記（天明八年正月ヨリ六月迄）。卷十七に殿中日記（天明八年七月以後）。卷十八に殿中日記（天明九年中）。卷十九に殿中日記（寛政二年正・二月）。卷二十に殿中日記（寛政二年二・三月）。卷二十一至二十五に年山打聞（安藤爲章著）。卷二十六至二十八に城主鑑。卷二十九・三十に諸家事略。卷三十一至四十に西山遺事。卷四十一に從駿城御文宣。卷四十二に無題號の隨筆を收め、所々に挿畫がある。（和田）

塵泥 ちりひぢ 隨筆 九卷 寫【編者】本多忠憲【解說】題目を異にした數十種の隨筆雜纂を集めたもので、寧ろ叢書と謂ふべきものか。卷一に隨行く駒（兒童遊戲の品目）、書畫目六、經網品卷、道詞、武田家書五十番目錄、詩撰集證記、十日之訳、[illegible]、沖の小島を收め、卷二に風葉和歌集見出、例言、こし水月、岡のなゝ浦、英雜院ないたみ奉る辭、徒然草序誹、大原、五日の枝を收め、卷三に初鰹露、不明異、恭柱、貝造、加賀女、紙置、防櫻、楊枝、一節截、天見、拍揃、晁戶考、頭巾、右大將道綱母、蹴鞠、抑杖を收め、卷四に懷紙、髮飾、尺八、下駄考、進物例、奏者羽、締餅、[illegible]、足利家位階書按考、挨はこの事、挿頭造花、軟頭、節分夜鬼儺の標をなすと云事、眉、[illegible]を收め、卷五に喉刺、修補、小直衣并狩衣直衣、扇子、楽上、五蘊東、長手鐙、兎袋、酒吞童子物語[illegible]、編笠、鈴鮎、手巾、着步障、兵竿を收め、卷六に鞍、尾花粥、伊勢[illegible]、杖扇、東帶袴、立砂、[illegible]、透扇、燕尾帽、[illegible]、國姿、十九布、扇高濃事、御顏紙、季海を收め、卷七に入瀨鴨、步障、十二單衣、[illegible]、安拆、空柱、粥柱、鬮皮、猫子、紳無月、釘貫、擲紙、三日月餅事、馬具、茶碗杖を收め、卷八に走馬[illegible]、小島丸鮒、短歌、丸木弓考、半額考、[illegible]、大角小角國言、餅丸、床八、馬上三物賛、[illegible]、佐々木[illegible]、幸氏公買傳家を收め、卷九に貝鍛、鋼喪、四眉紫、伊勢家花押、梅、扇衣を收む。所々に挿畫がある。每編の終りに抄寫の年月及び忠憲の署名がある。卷一、隨行く駒の編首に文化三年同芳主人の序が添つてゐる。同芳は編者の號。　（和田）

知連抄 ちれんせう 連歌書 二卷 寫【著者】二條良基【諸本】京都帝大本一冊は、舊寫の年代江戶中期を溯らぬらしき新しい書寫であるが、上下二卷より成り、完本と思はれる。東北帝大本一冊は、同じく江戶時代の書寫で、その內容京都帝大本上卷に相當し、語句の異同が少くはないが大體相類する。圖書寮本は「知連抄幷梵灯連歌」と題する一冊で、その「知連抄」の部は京都帝大本の下卷に相當し、內容大體同じいが、語句に大に異なる所がある。併しこの圖書寮本の「知連抄」及び「梵灯連歌」の奥書によると、「知連抄」は良基が應安七年に時の關白（良基の子師良か）の所望によつて著はしたものであることが知られ、圖書寮傳本はそれを良基が嘉慶元年に聖護院門跡（後光嚴院の御子堯胤法親王か）に書いて獻じた本から出て、永享十年及び寶德三年の轉寫を經て寶德四年に書寫したものであることが知られる。されば「知連抄」としては下卷のみの傳本であるけれども、三種の傳本中書寫の最も古いもので、從つて轉寫の誤りも少かるべく、最も據とするに足るものである。古典保存會によつて、圖書寮本「知連抄幷梵灯連歌」が複製されてゐる。【解說】上卷には、連歌の三儀五體、六の句作りを說き、下卷には救濟・周阿（各別項）等の連歌の風體を論じ、上中下の三體、寄合、連歌する心得を說き、大原野千句の時の去嫌の注文を載せ、病の事、五韻連聲・五韻相通の事を說いてある。上卷よりも下卷の方が價値多く、その說く所が當時の連歌道の實際を知らしめる點少からず、特に大原野千句の注文は、應安の「連歌新式」（別項）の應用で、同新式原本の傳はらない今日に於ては、その面目を窺ふべき唯一の資料となるものである。

【參考】二條良基を中心としたる連歌道の建立福井久藏（國語と國文學昭和三ノ九）○連歌の史的研究前編後編福井久藏○宮內省圖書寮御藏知連抄幷梵灯連歌解說橋本進吉（古典保存會本知連抄幷梵灯連歌）　（志田）

椿園 ちんゑん 讀本作者【姓名】浦邊源齊。【閱歷】攝津伊丹の人で、伊丹椿園と稱し、寶曆より明和・安永頃、近路行者（別項）と殆ど時を同じうし、また同じ傾向の小說を書いてゐる。「京攝戲作者考」に[illegible]であつたこと、畫筆の心得のあつたことが傳へられてゐるが、讀書家であつたことは、その小說の序文等にても知られる。【著作】兩劍奇遇五卷（安永七年刊）○[illegible]○深山草○女水滸傳（以上各別項）【作風】殆ど支那小說の[illegible]が、何れも近路行者[illegible]よりも支那小說の[illegible]つてゐる。しかし初期讀本として文學史的意義の深いものである。　（重友）

【參考】江戶文學研究藤井乙男○江戶時代小說通志豐田八十代○京攝戲作者考木村默老

鎭源 ちんげん 學僧【生歿】未詳【閱歷】比叡山橫川首楞嚴院の沙門である。後朱雀天皇の長久二年の秋、支那の[illegible]の「法華驗記」に倣ひ、「大日本國法華經驗記」（略して法華驗記）三卷を撰んだ。同書の序文によれば、鎭源は法華經の[illegible]は古來甚だ多いから、その[illegible]を集め、これを後世に傳へようとして[illegible]る。「日本往生極樂記」「靈異記」「三寶繪詞」等を資料とし、聖德太子以下百二十九人の事蹟を錄してゐる。【附記】[illegible]「法華驗記」といふのを引いて居り、それは鎭源の「法華驗記」の文とほぼ一致するやうである。若し同一書とすれば、鎭源は[illegible]とも稱したものと考へられる。[illegible]

【參考】[illegible]○日本佛敎文化史の研究橋川正　（[illegible]）

枕山 ちんざん 漢詩人【姓名】大沼厚。字は士壽、一字は昌嗣、幼名は捨吉【別號】熙堂・仙史【生歿】文政元年江戶に生れ、明治二十四年十月一日、東京下谷花園町に歿した。享

年七十四【閲歴】初め尾張の名儒鷲津益齋に就いて學んだが、時に森春濤も亦その塾に居り、春濤は十七、枕山は十八、倶に若年を以て詩に巧であつた。後江戸に出で菊池五山・梁川星巖に師事し、詩を以て一時に稱せられ、星巖が玉池吟社を閉ぢて京都に移住するに及び、下谷吟社を起して宋詩を鼓吹した。下谷吟社の名は、その家が下谷御徒士町三枚橋畔（今の上野公園前）に在つたからである。かくて一時詩壇の覇權を握つた。門下にあつては植村蘆洲・溝口桂巖・杉浦梅潭・中根半嶺等はその錚々たる者である。【著作】枕山詩鈔九卷○房山集一卷○江戸名勝詩一卷○日本詠史百律一卷○歷代詠史百律一卷【批評】その詩は晩放翁に私淑し、格律の細を以て勝れてゐる。諸體皆佳ならざるはなく、美句佳章に富み、咏物に至つてはその獨擅場である。（佐久）

枕山詩鈔（ちんざんしせう）　九卷九冊【著者】大沼枕山【解説】初二三編、各三卷より成り、安政六年から慶應三年までの間に夾々に刊行された。又「枕山詩鈔」以後の詩を輯錄したものに「枕山先生遺稿」一卷があり、明治二十六年に刊行された。（佐久）

珍術罌粟散國（ちんじゆつけしさんごく）　浮世草子五卷【作者】其鳳【刊行】安永四年【諸本】德川文藝類聚第三編通俗小説所收【解説】大山志壯太といふ男が讒言を吐き散らしてゐると、異相の神人壽老人が現はれて、その心得違ひを諫め、「廣い世間を見聞して見よ、みじんの虫にも相應にみじんの世界ありて人間界にかゝはらず、それぞれの境涯に入りてみよ」と御託宣あつて、忽ちその神力により、志壯太は罌粟人形程になる。それより蚊の國鳥の國花の國と遍歷し、鳳の神の遠謨を聞き、地獄と庚申との問答を聞かされ、感慨無量の末、びつくり夢の醒めし如く頭をあげて見れば、壽老人の姿現はれ、「慢心を戒めんがため汝の形をみじんとなし有情非情神仙佛界をあらまし見物せしめたり。今後は高卒を以て他を譏ることをやめ我が身分を顧みて不義の邪路に陷るな」と訓戒する。その聲は雲霧にまぎれ、志壯太はありし机の前に呆然としてゐる自分を發見する。思へばそれは夏日一夢の間であつたといふに終る。小さい人間に化して、人生の種々相を見、又經驗するといふ構想は、浮世草子界の一流行であつたともいふべく、本篇も亦その一である。要するに神人の言を借りて當時の村學究の眼界狹く高慢に陷れるを諷刺したものである。（小泉）

陳狀（ちんじやう）　「申狀」を見よ。

沈鐘傳説（ちんしようでんせつ）【名義】ハウプトマンの戯曲が紹介せられた頃から、こんな言葉を用ひるやうになつたが、日本では普通に、「鐘が淵の由來」として知られてゐる。最も分布の弘く且つ久しい傳説の一つである。東京のやうな若々しい寄洲の上の都にも、既に又一つ以上の鐘が淵が出來て居り、その他、近世新たに運び移したかと思はれる例は少くない。何かこの類の地名の發生すべき理由が前にあつて、それに所謂沈鐘が附會したのではないかとも想像せられる。全國無數の鐘が淵由來は、分類して見ると存外に簡單なものばかりである。その一種はそこに大きな寺の伽藍があつて、或る時代の地變に陷沒して淵となつたといふもの、これはただ鄕土の古く榮えてゐたことを、說くだけの趣旨としか考へられない。第二にはその鐘に靈あつて盜賊兵火の難を脫し、我から水底に轉げ込んだといふ類の名器傳説、これには女夫鐘などの哀話の織り入れられたものもある。今一つは佛典から筋を引いたかと思ふ龍神の物語で、古い記錄の中には往々にこれを傳へてゐるが、近頃は却つてこれを說く者が稀である。何れにしても水中の靈異と關聯してゐることだけは明かで、或はこの傳説の所在を以て水の神の祭場と解しても誤りではなからうと、私は思ふ。さうでなくては、これほど津山の釣鐘の、水に沈んでゐると信じられた起因を、想像することが難いからである。但しこの傳説の基礎には、別にやゝ意外なる史實の類推があつた。德川氏の時代に入つてからも、海から梵鐘の漂着した事蹟は所々にあつた。明かにその當時の記錄もあれば、實物も亦現存する。その以前にもこれと同樣に、海から揚つたと稱する朝鮮鐘などの、寺に傳はつてゐるものも少くはない。これほど幾つかの鐘が水中から出てゐるのだから、今なほ水底にありといふ說も本當かも知れない。といふやうな茫漠たる論理が、一段と鐘が淵の口碑を史化してゐたのである。その上に古書の記述もしくは類例の古い存在が、この數多い同種傳説の一つ〳〵を支援してゐることは、考へて見ると面白い協力であつた。その中でも筑前の鐘の岬は、古くは「萬葉集」の歌にも詠ぜられ、それから以後にも數々の不思議を現じ、殊に種彥の「白縫物語」（別項）で、頓に遠國の者にも知られるやうになつた。さうして他の多くの鐘が淵も同樣に、晴れて波靜かなる日に船の上から覗くと、龍頭の岩の間に傾いてゐるのが見えると云つた。大正八・九年の好景氣時代に、或る成金が一代の思ひ出に、十餘萬圓の財を費してこの鐘を陸に持つて來ることに成功し、鐘の岬も鐘のないただの地名になつてしまつた。而もその海底の大梵鐘だと思つて引揚げて見たのが、實は形のよく似てゐるただの岩であつた。諸國の鐘が淵は、このために一つの支柱を失つたわけだが、その代りには、傳説としての眞の意味を、これから追々に發揮することが出來るやうにもなつたのである。（柳田〔國〕）【參考】日本傳説集　高木敏雄　○沈鐘の傳説　新村出　○沈鐘傳説と大鳴冠と　志田義秀

珍書大觀（ちんしよたいくわん）　叢書【編者】大阪每日新聞社【刊行】大正十五年【内容】金平本全集（江戸版）三十冊、吉利支丹叢書（別項）、牛若千人切（延寶七年刊本）一冊、說經かるかや（寛永八年刊本）一冊を含む。各種とも原本そのまゝを複製したものである。（土井）

珍説豹之卷（ちんせつへうのまき）　人情本　二編六冊【作者】鼻山人（東里山人）【畫工】菱川政信【名稱】豹之卷は虎の卷に擬したもの。洒落本「契情買虎之卷」（別項）が世に歡迎されたので、その書名をもぢつたのである。【刊行】文政十年【諸本】人情本刊行會本所收。【題材】自序にもある如く、田螺金魚の「契情買虎之卷」に換したものであるが、實は、讀書が「當世虎之卷」と改題し、文政九年に發表されたのに剽竊されたのであらう。內容は、「虎之卷」とは何の關係もない。遊女若四季の傳を綴つたものである。果して事實に據つたか事實めかしたのか、假に斷ずる事は出來ぬが、彼の作には「[illegible]談」（別項）の如く事實に取材したものがあるから、實在の人物に據つたと見られる。篇中の瀧野屋紋介は當時の人氣役者市川門之助（瀧野屋）から採つたのである。

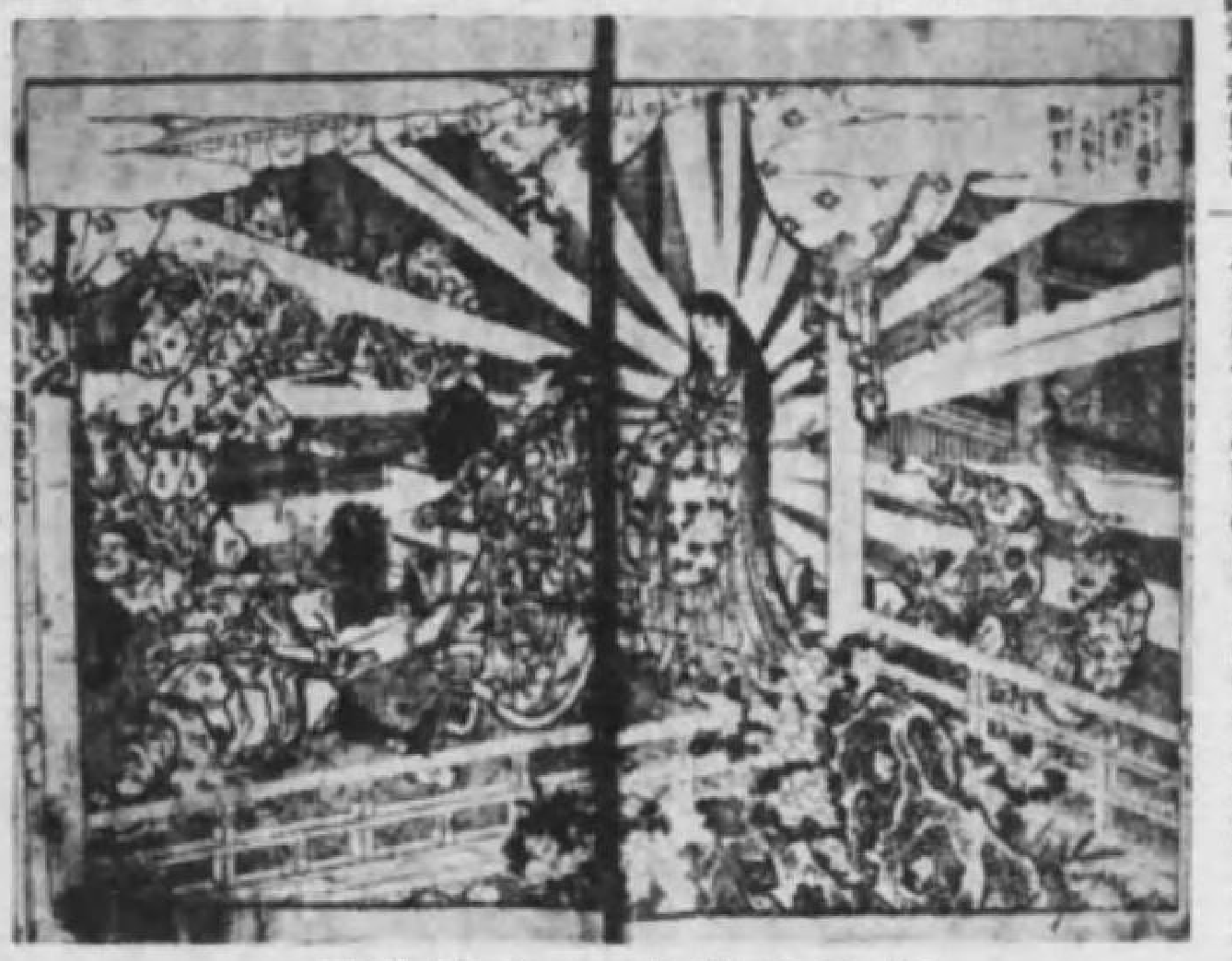
【梗概】千葉家の藩中に、室山兵左衞門と云ふ武士があつた。諸買物奉行下役を勤めてゐたが、或る時瀧野屋紋介と云ふ用達の許から、金五十兩入の狀筥を受取り歸る途中、惡黨に見込まれ喧嘩に事寄せて狀筥を奪はれた。彼は酒好きの事とて、紋介方で十分に酩酊して抵抗する力もなくすご〳〵と歸宅した。妻おそねにこの事を語り、切腹して申譯しようと言ふ。妻は驚き留めたけれども金策すべき當てもない。娘のお四季の身を賣らうかと言ふ。兵左衞門は娘を賣つて迄も生きる甲斐はないと爭つた。これを立ち聞いたお四季は進んで賣つてくれと願つた。そこで父も漸く涙ながら承諾し、吉原に行き庄司甚右衞門に相談すると、その弟若葉屋甚五郎が五十兩で引請ける事になつた。無事五十兩を上へ納め、その場は落着したけれども、娘を遊女に賣つた事が知れ、自分の過失からこんな事になりながら、武士たる身が子を遊女に賣るとは穩當ならずと非難する者が多かつたが、家老大町賴母は彼を憐み、巧に庇護して漸く事なく納まつたが、これを機として大町の政務の執り方が緩漫であると云ふ聲が高くなり、賴母は隱居同樣となり、家老職を免ぜられた。一方お四季は若葉屋甚五郎に抱へられ若四季と呼ばれて全盛を極めた。それと同時にその前身も世間に知られ、室山は上を欺くの罪に陷ち、千葉家を追拂はれた。已むを得ず室山夫婦は瀧野屋紋介を賴み、宮戸川の邊に貧しい長屋住みをしてゐた。前家老の大町の嫡子大町大三郎はふと瀧野屋の案內で若葉屋に赴き、若四季を招いた。最初は避けてゐたが、度重なるにつけ大三郎の情が身に染みて戀するに至り、大三郎も熱心に通うた。室山夫婦もおかげで生活が豐かになり、喜んでゐる間もなく、大三郎は父賴母から懲らしめのため片田舍に一時追ひやられた。この通知が若四季から更に室山夫婦へ達した。若四季の悲歎は勿論、室山も大に悲しんだ。大三郎がかくなるのも我等親子のためと思ひつめた兵左衞門は、遂に思ひ詰めて大町賴母に謝罪の書置を殘して切腹して了つた。賴母も初めて大三郎の放蕩の原因を知り、瀧野屋紋介に命じて、密かに若四季を身請けさせた。紋介は身請の證文と共に、通知の手紙を若者菊藏に持たせて大三郎の許へ屆けさせた。菊藏は途中で稻妻光吉と云ふ盜賊に殺されて證文を奪はれた。光吉はこれを見て早速吉原へ赴き、大三郎の使と稱して若四季を誘拐した。室山の妻は夫の切腹、娘の行方不明に歎き死に死し、その亡靈の導きによつて、大三郎は賊の隱家に忍び込み、光吉を捕縛し、彼の盜んだ御家の重寶都鳥の香爐をも取り返した。大三郎はその功に依つて加增仰付けられ、若四季を妻として一家めでたく繁昌した。稻妻光吉は實は室山兵左衞門の五十兩を奪つた賊である事も露見して處刑された。

【構想】初期の人情本の常として、洒落本と合卷本との混淆した形式になつてゐる。卷頭に吉原細見の寫しと、五街春色美景圖と題して、新吉原大門の夜景が揭げてあるなど、全く洒落本に等しい。吉原の描寫にも、「堅い奴と云へば半次も故人になつたさうだの」と實在の男藝者の噂を長々と書いてあるのも、それから來た趣味だ。ただ後期の人情本と比較して武家生活が比較的よく描いてあるのは、作者が武家出身であるからであらうし、主人公が武家である事も、人情本の型から言へば異彩を放つものと言へる。室山兵左衞門が酒好きで働きのない下級武士で、而も義理固い點、その妻が愚痴の多い、世間並な習慣によく氣がついて、あせつてゐる平凡な女性である點など、脚色の說明のみに囚はれぬ人情本で、鼻山人の代表作の一とするに足る。（山崎）

椿説弓張月（ちんせつゆみはりづき）　讀本　三十卷【作者】曲亭馬琴【挿畫】葛飾北齋【角書】（鎮西八郎爲朝外傳）とある。【刊行】文化三年より同七年【諸本】東京稗史出版社本・曲亭馬琴翁叢書・四大奇書上卷（帝國文庫）・國民文庫・有朋堂文庫等に所收【題材】「保元物語」「續太平記」等の軍記物にも據つてはゐるが、また自らその序に、「唐山の演義小說に倣ひ、多くは憑空結構の筆に成る」と言つてゐるやうに、支那小說に脚色を藉り、作者の空想に據つて作られたものである。殊に爲朝が大島に死なずして、琉球に渡つて活躍する續編以後は、「神社考」「和漢三才圖會」等の傳ふるところに據り、最も空想を逞うした所で、また最も筆力を揮つたと稱せられる。それは「水滸後傳」に擬したものであるが、「南島志」「中山傳信錄」等は見たとしても、當時に於て琉球の國情生活を、これだけに纏めたのは、この作者の力に據るものでなければならない。これが全篇中特色のある部分をなしてゐて、椿說といひ爲朝外傳といふ謂れがある。なほ卷末に、「爲朝神社幷南島地名辨略」といふ考證めいたものを附錄としてゐる。

【梗概】（前編）鳥羽上皇と崇德の新院が不和とならせられた頃、俊敏強勇の源爲朝は、少納言信西と爭つて九州に逐られ、八町礫紀平治といふ勇者を家來にし、阿曾三郎平忠國の尊敬を受け、稀代の勇婦白縫姬を妻として忽ち九州を略するに至つた。保元の亂には勇士を從へて上京、父爲義、兄義朝等と新院に味方して大に戰ひ、不幸敗れて伊豆の大島に流されたが、島民を說服し、代官を從へその女簓江を妻として私に再擧の時を待つた。一方敗戰の難は九州にも及び、忠國は攻められて死し、白縫姬は紀平治と共に四國に遁れたが、爲朝流罪と聞き東上し、これを途に奪はんとして果さず、讚岐に流され給うた新院に謁してその誠忠の志を奏した。（後編）大島を從へた爲朝は、又周圍の島々をも併せたが、一日女護ケ島に渡り、女はこの島に、男は鬼ケ島に各別居するといふ迷信を聞き、自ら七郎五郎といふ者の長女を妾として二兒を擧げ、男女同棲の自然を說いて民俗を化し、この島と鬼ケ島を從へて妾と二兒を後繼者に殘し、鬼夜叉と呼ばれた勇士七郎五郎を伴つて大島に歸つた。然るに彼の留守中代官忠重は島民を苦しめてゐたので直にこれを懲したが、忠重は脫れて伊豆に行き、伊豆大介茂光等と京に訴へ、爲朝討伐の勅命を請うて攻め寄せて來た。爲朝は勅命の抗し難きと、新院崩御の報に死なんとしたが、鬼夜叉がこれを諫止して來島に落し、自身は爲朝の身代りとなつて簓江等と館に籠つて討死した。爲朝は來島でこの報を得て、彼等の義に感じて自殺しようとしたが簓江の靈に遮られ、扁舟に乘じて讚岐に渡り、新院の陵を拜して御靈に逢ひ、御旨に依つて更に九州に渡つた。そして肥後の木原山に紀平治・高間三郎等と共に兵を集めてゐた白縫姬に會し、此處に棲むこと數年、一子舜天丸をまうけた。かくて擧兵の時機至つて海路東上せんとし、偶々颶風に遭ひ白縫姬は風波を鎭めんとて海に投じ、高間夫妻以下の從卒も死に、爲朝と紀平治・舜天丸とは、別々に琉球に漂着し

た。【後篇】時しも琉球は、尚寧王の治下にあつたが、その暗愚に乘じ、寵妃中婦君は奸臣利勇と結んで國政を紊し、廉夫人の娘寧王女が王の後嗣となるを忌んでこれを除かうと企てた。忠臣毛國鼎・陶松壽等は、常に王女の身邊を護つてゐたが、邪曲の仙士曚雲國師が現はれて王の尊崇を受けるに及び、中婦君・利勇の徒はこれを味方として王を誑り、兵を以て夫人と王女を殺さうとした。この難に國鼎は死し、夫人は殺され、王女のみ辛うじて遁れた。然るに曚雲の妖術に依つて中婦君は殺されたので、利勇は國鼎夫人の腹を割いて得た嬰兒を中婦君の生んだ幼主と僞り、これを奉じて南風原に據つた。遁れた王女は途中賊に遭うたが、國鼎の二子に救けられ、又、白縫姫の靈に宿られて勇婦となり、小琉球に渡つて此處に漂着してゐた爲朝に會した。【拾遺篇】爲朝は王女に逢うて彼女に妻の靈が乘り移つてゐる事を知り、王女を助けて琉球を平定し、崇德院の御志を實現せんと、先づ南風原に赴いて利勇の軍に投じたが、狡猾な利勇は難題を課して爲朝を試みた。爲朝は强勇を現してその一を梟し、次を梟さんとして偶々一美人を得、これを利勇に薦めて漸く重用されるに至つたが、美人は曚雲が妖術を以て利勇の軍に入れた間者であつた。これより先、國鼎の二子鶴龜は曚雲に捕へられ、その策に依つて放たれて利勇を討たんとしたが、爲朝はこれを捕へ密かに保護した。この功に依つて爲朝は大里の按司となり、王女を妻として大に治を圖る一方、今は利勇の重臣となつてゐた松壽と共に兵を擧つて、先づ利勇を亡ぼし曚雲を討たんと志した。然るに利勇は、爲朝・松壽等が勢を得るを憎んで彼等を殺さうと圖つた。併し松壽の諜者に依つてこれを知つた爲朝等は、直に城中を襲うて妖婦を斬り、鶴龜に利勇を討たせた。爲朝は更に大軍を起して、王女と前後から首里の曚雲を撃ち、曚雲忽ち城を拔くと見えたが、曚雲の術中に陷ちて却つて大敗し、鳥袋の峽谷に燒き殺されんとしたが、只一騎駈けつけた王女に救はれ、共に遁れて小琉球に渡つた。【殘篇】桂呂嶽の島長に救はれた爲朝夫妻は巴麻島といふ孤島に行つて仙翁に逢ひ、姑巴島に行けと勸められてそこに渡ると、紀平治と共に此處に漂着してゐた舜天丸が武術兵法を修めて成長してゐるのに會うた。玆に四人は曚雲討伐の事を謀つて密かに島を出發し、那覇を過ぎて大榮河畔に上陸し、山路を辿つて松壽・鶴龜等に出會ひ、途々味方の勇士智者を得てやがて浦添の城を拔き、遂に曚雲の軍と會戰した。然るに此度は曚雲の妖術も神童舜天丸の武威に敵せず、彼の桃の矢に射留められた。射留めて見ると、曚雲は虬の化身であつた。かうして琉球は平定し、功臣等はそれぞれ要職に就き、衆望は爲朝等を國王に推したが、爲朝・寧王女・舜天丸は、互にこれを辭した。併し後王女は死し、爲朝は昇天したので、舜天丸は、中山府に王位に卽いて舜天王と稱し、祭祀を敬うし民治を圖つて在位五十年、二世・三世相繼いで島民はその治に浴した。



「椿說弓張月」口繪（北齋畫）

【構想】前・後二編は史實に基いて爲朝の武人的英雄的風貌を描いてゐるが、續編以下は作者の空想によつて理想的英雄の面目を描いてゐる。即ち彼の理想から自然の人生の不完全を補ふといふ趣旨のもとに、史上に於て大島に死んだ爲朝の悲慘な末路を引直し、假構によつて琉球に活躍させ、一代の善行偉業が悉く報いられるめでたいものにしてゐる。それは首尾照應した複雜な大說話を構成し、近世武士道の精神、儒敎の道德思想、因果應報の思想を最も高調して、彼の小說に於ける勸懲主義と娛樂本位との二目的を立派に成し遂げてゐるものである。【價値】馬琴は最初から全篇の構想を十分に得てゐたものではなく、續々と構成して書いて行つたらしい。それ故に因果應報思想の具體化に關して多少構想上の破綻を免れなかつた。殘編に於ける爲朝に就いては殊にその感が深い。併し彼の理想を具體化して、雄大な內容を構成し、而も結構整然、首尾貫通して能く纏まり、又文章が最も絢爛である。夙く馬琴も、「近世物之本江戶作者部類」に、「三七全傳南柯夢」「南總里見八犬傳」（各別項）と共に、その三大奇書なる事を言ひ、又依田學海も「椿說弓張月細評」に推賞してゐるやうに、馬琴の作中最大傑作といふべきものである。【影響】文化五年十月、大阪の淨瑠璃作者佐藤太がこれを「（筑紫の白縫琉球の冠江）鎭西八郎譽弓勢」といふ外題の淨瑠璃に作り、また同年冬大阪の歌舞伎座でも、「島巡り月の弓張」といふ名題の狂言に仕組んで興行した。なほこの狂言は天保四年九月、大阪中の芝居嵐三津[illegible]座に於て繰り返され上演したといふ。その他この趣向の、錦絵・合卷等の文藝に影響するところ頗る多い。

【參考】椿說弓張月細評 依田學海（帝國文庫）〇馬琴研究 藤村作（日本文學講座）〇支那文學の馬琴の作品に及せる影響 麻生磯次（日本文化叢書）（笹野）

枕頭山水 ちんとうさんすゐ

紀行【著者】幸田露伴【刊行】明治二十六年六月、博文館【內容】「易心後語」「地獄渓日記」「まき筆日記」「突貫紀行」「醉興記」の五篇から成る。自序に「草まくら旅にありし日、まのあたり見し山水のながめ、みやこひなの手ぶりのをかしきさまざまを、ますかゞみ床のへさらず今の夢にも見えねかしとてあつめ置きたるふみこそは」と言つてゐる。「易心後語」は、明治二十五年七月から八月にかけ、奥羽・越後・佐渡に遊び、海岸づたひに、越中・越前を過つて丹後に出で、天の橋立を眺め、大阪の諸文士と交歡した時の紀行。「地獄渓日記」は、二十三年夏、赤城山方面に遊んだ時の事。「まき筆日記」はその年の初夏、太華山人と京都に遊び、有馬に一浴、四國から九州に渡つた時の事。「突貫紀行」は、文壇に出る前、北海道をあとに東上の途、奥羽に旅した折の紀行である。「醉興記」は二十一年「露團々」（別項）の一篇で初めて原稿料を得るや、元氣にまかせて信州・野州を旅した時の紀行である。【批評】どれも、小說のやうに意匠に凝らず、寂びと諧謔が、奔放な筆で書かれて、初期の著者の風骨が隨處ににじみ出てゐる。「地獄渓日記」は赤城で病害と戰ひつつ書いたもので、詩人としての彼の俤が早くこれに躍動して居り、「醉興記」には、「風流佛」（別項）のお辰のモデルのことなどが出てゐて興味深い。明治文壇における紀行文集として最も傑出したものの一つで、異色あるのみでなく、青年露伴の風格が最も鮮明に出てゐる旅行記である。（高須）

つ

對句 つゐく

修辭學【異稱】對偶法ともいふ。【解說】連續した二個の句節の語と語とが、平行して互に對偶を成すもので、古來東西の文學者に用ひられた修辭法である。普通は二句の對偶であるが、中には三句もしくは四句の對偶もある。對句は口調を好くし、文章を飾る效能はあるが、多く用ひれば文章を輕浮にする缺ひがある。

面白きかな天地の心。山は屹として聳ち、水は汪として流る。飛鳥天を掠めて天翔る處を知らず、長鯨濤を蹴つて濤盡くる時なし。昨日人あり其の人兵を鳴らす。今日人あり其の人仁を思ふ。天と地と之を覆ひ之を載せて時と共に悠々す、悠なるかな。（川上眉山「晴嵐」）（武島）

對句 つゐく

漢詩【名義】對偶をなせる句をいふ。【起原】對句の起原は極めて古代に屬する。「詩經」「書經」「易經」「老子」の如き韻文のものは論ずるまでもなく、散文にも隨處に散見される。後漢以後、一般に駢儷を好んで對偶を排列するやうになり、六朝時代に至つて益々盛んになり、詩人は皆好んで對句を作るやうになつた。【種類】對句の種類は甚だ多く、分類も亦區々であるが、「支那文學考」に擧げてゐる十三種の分類が、最も當を得てゐる。即ち隔句對・當句對・回文對・聯綿對・雙擬對・流水對・重字對・雙聲對・疊韻對・虛字對・色對・數對・正名對がそれである。隔句對とは、第一句を以て第三句に對し、第二句を以て第四句に對するものである。例へば、「五月南風興、思レ君下二巴陵一。八月西風起、想レ君發二揚子一」の如きものがそれである。當句對は、一句の中に於て、二個若しくは三個の對語を疊用するもので、これは必ずしも上下二句が對偶を成すを要しないものである。例へば、「南陌北堂連二北里一、五劇三條控二三市一」の如きものがそれである。回文對は、上下二句の首尾に於て、相應して同一の文字を點出したものである。例へば、「今年花似二去年好一、去年人到二今年老一」の如きものがそれである。聯綿對は、一句の中に於て、同一の文字を幾度も繰り返して用ふるものである。例へば、「龍池躍レ龍龍已飛、龍德先レ天天不レ違」の如きものがそれである。雙擬對は、上下の二句が對偶をなし、而も上下二句が、それぞれ一句中に於て、第一字と第三字とに同一の文字を疊用したものである。例へば、「九月九日望鄕臺、他席他鄕送客杯」の如きものがそれである。流水對とは、もと對偶にあらざる事物を、一意を以て、上下二句對偶の形式を以て貫穿したものである。例へば、「海內存二知己一、天涯若二比鄰一」の如きものがそれである。重字對とは、疊字を以て一聯の對偶を成すものである。例へば、「漠々水田飛二白鷺一、陰々夏木囀二黃鸝一」の如きものがそれである。雙聲對は、二字雙聲（[illegible]）の熟語を以て對偶をなせるものである。例へば、「流連戲蝶時々舞、自在嬌鶯恰々啼」の如きそれである。流連、自在はそれぞれ雙聲の熟語である。疊韻對は、二字同韻より成る熟語を以て對偶をなせるものである。例へば、「江山城宛轉、棟宇客徘徊」の如きものがそれである。宛轉、徘徊はそれぞれ同韻の熟語である。虛字對は、虛字を以て對偶を成せるものである。例へば、「去矣英雄事、荒哉割據心」の如きものがそれである。矣、哉は虛字であつて又對偶をなしてゐる。色對は、色を表す文字を以て對をなすものである。例へば、「丹鳳朱城白日暮、青牛紺幰紅塵度」の如きものがそれである。數對は、數字を以て對をなすものである。例へば、「且論三萬六千是、寧知四十九年非」の如きものがそれである。正名對とは、名詞を以て對を成すものである。例へば、「匡衡抗疏功名薄、劉向傳經心事違」の如きものがそれである。【參考】〇詩格集成 長山貫〇詩轍 三浦安貞〇詩律 赤澤一〇文鏡秘府論 僧空海〇文心彫龍 劉勰（西澤）

追善[illegible] 「中將姬京雛」を見よ。

追善連歌 ついぜんれんが

【法式】追善連歌は、名號、或は法華・淨土等の佛教の要文を冠字として賦するものである。懷紙の書樣も通常にて少しかすれるやうにするといふ。發句は文字餘りは[illegible]とし、[illegible]の句は避けるとか、輪廻の心ある句は[illegible]らぬとか、上句は左前に包むとか、水引は[illegible]筋を用ひるなど細々と掟を立てるに至つた。【沿革】故人の追悼、若しくはその供養のために追善連歌を行つたことは、既に鎌倉時代にその例がある。「菟玖波集」には尊阿法師の[illegible]に追善千句を行つたことが見えてゐる。これ[illegible]古いものは、「文明十四年宗祇院追善名號連歌」であらう。大永八年肖柏が[illegible]長が試した「[illegible]名號百韻」がこれに次ぎ、また「天正十年織田信長追善百韻」などがその著名なものである。【類種】追善連歌の一種と見られるものに、懷舊之連歌といふものがある。古人の名句を發句として、その人の有りし昔を忍ぶもので、「天正五年太秦最勝院[illegible]追善懷舊百韻」の如き、その例である。（福井）

通 つう 「文學の內容」を見よ。

通圓 つうゑん

能狂言【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へられる。【格式】中聲と云つて「賴政」（別項）・[illegible]等と同格[illegible]。【題材】當時[illegible]に茶の湯の稽古が流行してゐた事は、風俗史上著しい。狂言には「鬼清水」の如きそれが反映せられてゐる。この「通圓」は元宇治の[illegible]で、古川通圓と云つて代々續いた茶屋坊主で、茶を立死にしたと云ふことを材料に使つて、この作が出來てゐる。

【梗概】拔萃方の旅僧が宇治の里に到り、通圓と云ふ茶立坊主の幽靈に會ふ。通圓、その最期の有樣を物語つて、旅僧に回向を請ふと云ふのである。

【構想】「祐善」や「蛸」や「樂阿彌」と同じやうに能がかりに仕組んだ作で、幽靈能とか修羅物とかの型を模してゐる。さうして、これは全く謠曲「賴政」に擬したもので、眞面目な謠曲を茶化してしまつてゐる。だから滑稽味は專ら語戲の上にのみ存して、これと云ふ脚色上の長所はない。狂言としては實に一變態の觀がある。（野村）

通音（つうおん）　國語學　【解說】同じ語と認められる語の或る部分の音が多少違つて、同じ語が二つの違つた形であらはれる時、その相異る音は相通じて用ひられ、場合によつて轉換し得るものとしてこれを通音といふ。これを廣義に解すれば、音便（別項）も活用（別項）の語尾變化も、すべて通音の中に含まれるが、これを狹義に解すれば、（一）五十音圖中にある音節であつて、その上、同行又は同列中での轉換に限る。それ故撥音「ん」や促音の如き、五十音中にない音との轉換や、又「思ひて」が「思うて」となる如き、同行同列中での轉換でないものは、これを通音とは認めない。（二）音の轉換によつて、意味の變化を來さないものに限る。それ故、「戀ひしき」と「戀ほしき」は通音であるが、「戀ふ」「戀ひ」などの如き、活用の語尾變化は通音でない。（三）時代的音變化によつて起つたものは、通音とは認めない。それ故、「かぞふ」（數）と「かずふ」、「いづく」（何處）と「いどこ」の如きは、通音とは認めない。但しその起因は、時代的變化に在つても、その結果、同時代の同一の言語の中で、共に差別なく用ひられるものは、これを通音とする。（四）「ふね」（船）が、「ふなびと」（船人）となり、「たけ」（竹）が、「たかばやし」（竹林）となる如き、複合語を作る際の音轉換も、これを通音と認めない。

【種類】通音は、五十音圖に基づいて說明するのが常である。その種類としては（一）同行中での相通。同じ行の音節が互に轉換するをいふ。これは、音節中の母音が轉換するのである。これを同音相通、同紐相通、五音相通、又は音通などいつた。その中に、初五相通（初後相通とも。同行中の最初の字と第五の字とが通ずるもの、即ち母音aとoとの轉換）、二四相通（第二字と第四字との相通、即ちiとeとの轉換）、三五相通（第三字と第五字との相通、即ちuとoとの轉換）などを區別したものがある。（二）同列（段）中での相通。同韻相通とも云ひ、同じ列の音節が互に轉換するをいふ。即ち音節の初めの子音が轉換するのである。その中で、五十音圖に於て相隣接する行の、子音の相轉換するところから、親類相通と云ひ、又同じ調音部位の子音が轉換するのを同內相通と稱し、アカヤの諸行（共に喉內の音）、サタラナの諸行（共に舌內の音）及びハマワの諸行（共に脣內の音）の內に於ける相通を、それぞれ喉內相通、舌內相通及び脣內相通と稱した。【音相通說】同じ語が相異る二つの形で現はれる時、その異る部分の音を相通するとする考は、何時から始まつたか明かでないが、古く我が國の悉曇學者の間には在つたのであつて、院政時代の悉曇學者明覺は、その著「悉曇要訣」に梵語に於けるかやうな現象を音の相通とし、これは梵語のみならず漢語及び日本語にも存するものであり、その相通は主として同紐（五十音圖の同行）、同韻（五十音圖の同列）に於て通ずるものであるとし、支那語及び日本語に於ける例を舉げて、梵語の例を說明してゐる。かやうにして多分漢字音の反切のために作られたであらうと考へられる五十音圖が、梵・漢・倭三國語を通じて音相通の原則とせらるゝに至つた。さうして古く朝廷に於ける「日本書紀」の講筵から起つて、鎌倉時代以後の神道家に繼承せられた「日本紀」の註釋に於ても、また平安朝に於ける歌學の中から起つた古語の研究に於ても、院政時代以後には、語義又は語源を說明するに當つて、五十音圖による同音相通、同韻相通を說くやうになつたが、これは恐らくは悉曇學者の說を承けたものであらう。鎌倉時代に於ては、悉曇學者の間に相通說が次第に委しくなり、同音相通の中に初五相通、二四相通、三五相通等を分ち、又同韻相通にも三內の相通を分つやうになつた。さうしてこれ等が室町時代を經て江戸時代にまでも及んだが、その間、相通說はやはり語義・語源の說明に用ひられたと共に、又假名遣にも應用せられて、互に關係ある語の假名遣を定め又は知る原則の一として用ひられ（假名遣參照）、延いては、動詞の活用にまで及んだ（活用參照）。さうして、初めは種々の種類のものをすべて通音としたのであるが、後には次第にこれを區別して、音便その他の如く、時代的變化によるもの、活用の如く音の違ふに隨つてその意味や用法の異るもの、複合語に於けるが如く、音の變化が、語を複合せしむる手段となるもの、又方言による音の轉換などを通音から除外する傾向が生じて、遂には、意味が全く同じくして音が通ずると見るべきものはないと主張するものさへ出るやうになつた（野之口隆正の通略延約辨など）。明治以後、日本語をローマ字で書くことを學び、又西洋の言語學や音聲學が輸入せられて、國語の音節を單音に分解して觀察し、又各音の性質に關する正確な知識を得るやうになつて、從來の五十音圖に基づく通音の說は、根本的に變化せざるを得なくなつた。

【參考】和字解（貝原益軒）○語意考（加茂眞淵）○雅言成法（鈴木重胤）○通略延約辨（野之口隆正）○音韻啓蒙（敷田年治）（橋本）

通議（つうぎ）　論策　三卷三冊　【著者】賴山陽【刊行】弘化四年【解說】我が國古今の形勢、政治の得失、並に官制・民政・法律・兵制等に關する漢文で書いた策論で、凡て二十八篇ある。古賀穀堂の評論が附いてゐる。（佐久）

通氣粹語傳（つうきすいごでん）　洒落本　一冊【作者】山東京傳【畫工】無署名。但し自畫であらう。【名稱】「忠義水滸傳」のもぢり。【刊行】寛政元年【題材】書名の如く支那小說「水滸傳」を江戸の世界にもぢつたのである。文中、「この頃碑文谷仁王尊はやり給ひ」とあるは、當時荏原郡碑文谷法華寺の仁王尊を信仰する事が流行したことを指す。

【梗概】或る邸の用人の息子、綽名を林沖と云ふ男、魯智深と云ふ花の師匠で綽名を花和尚と呼ばるゝ者と向島武藏屋松兵衞即ち武松方に飲みに行き、主人と三人で面白く騷ぎ、やがて向ふ岸の宋江の許を訪れる事となり、林沖矢文を放つと、舟宿の息子張順これを讀み、舟を寄せる。林沖・花和尚と二人、宋江の別莊に行く。そこで宋江と又酒宴を催す。又或る日宋江は桑屋相撲久紋龍史進、茶屋亭主朱貴を連れて吉原へ行き、長字屋梁山の許へ上るが、

梁山には神田鞆指南の高休がついてゐると云ふので、宋江との間がもめる。高休は宋江と梁山との間を切らせようと企て、弟橋內と共に李忠と云ふ居合拔、時遷小僧と云ふ巾着切の名人に依賴し、久紋龍の預れる梁山から宋江への起請文をすり取らせようとして失敗し時遷小僧はひどい目に逢つた。碑文谷の仁王尊に參詣した花和尚は、茶屋に休んで武松の兄武太郎の嫁の惡計を聞き、武太郎に密告する。高休は折角の計企が失敗したので、今度は醫者瘦皮翁身に依賴し、しびれ藥を盛らせ鋼丸屋吳服店の手代に飲ませて反物を奪ふ。梁山へ約束の夜具を作つてやるためである。ついでに宋江を誹謗する相談をする。

【構想】强ひて水滸傳中の人名をもぢつただけで、京傳特有の例の穿ちに乏しく、黃表紙に類する作である。「水滸傳」が大衆化したのは、「新編水滸畫傳」（文化三年）（別項）の發表以後であるから、折角の趣向も案外「水滸傳」を知らぬ讀者に受けなかつたらしい。本書內題に上編とあり、卷末に中下編を續刊する旨斷つてあるが刊行されなかつた。ただ本書が彼の讀本「忠臣水滸傳」（寛政十一年）（別項）の翻案となつたことは注意すべきである。（山崎）

通言總籬（つうげんそうまがき）　洒落本　一冊　【作者】山東京傳【畫工】山東けいとう畫とある。雜著は京傳の書製の一つ。【名稱】總籬とは吉原の所謂大店を云ふ。總籬については、凡例に「書總籬ト題セルハ、流行ニ後ダル古句ノ雅ナキヲ以テ也」と說いてゐるから、通言の大店（純粹なるもの）の義に用ひたのである。【刊行】天明七年【諸本】こんにやく本第二・京傳傑作集（帝國文庫）・洒落本集（日本名著全集）所收。【題材】凡例にある如く、彼は天明五年、黃表紙「江戸生艶氣樺燒」（別項）を發表し大に歡迎され、艶氣樺燒中の主人公艶次郎の名は己惚男の意に用ひられるやうになつた。本書でもこの艶次郎を主人公とし、彼の書の人物北里喜之介・惡井志庵の兩名をも再び用ひ、「江戸生艶氣樺燒」の續編たる體裁を成してゐる。

【梗概】日本橋伊勢町の新道にある北里喜之介の住宅に、若旦那艶次郎と出入の太鼓醫者惡井志庵の兩人が來た。喜之介は女郎上りの女房おちせと共に歡待する。艶次郎が奢つた二朱の錢で酒を飲みつつ、話は例の如く遊里の噂である。新宿の話は輕く切り上げて、やがて話題は吉原にうつる。「はやり言葉も味なものだ、ちよつといゝだすと無性にはやるよ」と吉原の流行言葉の話となり、更に進んで、大店の正月の仕着模樣の異なる點、松葉屋で上草履をはかせる遊女に格式のある事、二階ばし子の二つある店、小便所の遠い店など、通は種々として盡きない。やがて三人は身支度して柳橋の船宿から舟で吉原へ行く。山谷で上つて廓に入り、引手茶屋駿河屋にあがる。そこへ松田屋（松葉屋）の遊女おす川が、店まで艶次郎を迎へに來る。やがて松田屋へ行くが、艶次郎は京町に新造を買ひに行つたのを種に、おす川に冷遇される。喜之介のみは新造買ひと見せて實はわけある女と忍び合ふ。間もなく茶屋の男に迎へられて三人は駕籠で立ち歸る。

【構想】友人が相會して遊里の噂をし、やがて遊里に赴く光景は、洒落本の類型であつて、脚色にはちつとも新味が盛られてゐない。作者の重きを置いたのは、當時の吉原大店の通を穿つ事にあつた。松葉屋の細かい穿ちの如きは到底單なる作家に描けるものではない。絕えずこの家を觀察してゐるもの、而もこの家の新造菊山と深く馴染んで、內狀を知悉してゐた京傳にして、始めて描けたところなのである。通を生命とした代表的江戸人の、代表的趣味がかゝる穿ちにあつた時代なのであるから、本書が歡迎され、愛讀されたのは當然のことである。實にこの書の生命は、新しい穿ちを見せた點に存したのである。（山崎）

通言總籬（初頁）

通憲入道藏書目錄（つうけんにふだうざうしよもくろく）【名稱】「信西入道藏書目錄」とも云はれる。【成立】撰者及び成立事情については明かでないが、吉村茂樹氏は內容より見て、編者は藏書家自身ではなからうと推定して居り、その時期も、藏書家の生存中か、或は遺書を後人の著錄したものか、はつきりしない。【諸本】群書類從四九五に收められ、新校群書類從では、東京帝國大學附屬圖書館所藏の寫本によつて校合を加へてゐる。寫本の存するものの割合に少いが、「通憲入道信西書物目錄」と題せられる內閣文庫所藏本は類從本とはやゝ趣を異にしてゐる。【內容】主として經籍・史書・記錄の類三百餘部を、これを收めた書櫃の番號の順に著錄してゐるのであるが、櫃には缺號が多く、最後の番號は百七十に至つて居り、而も番號の無いものが三十合あるけれども、こゝに擧げてあるのは凡て八十八合である。同一書が重出してゐる點から見ても、この書が現存書の目錄である事は明かに知られる。この書は從來藤原通憲の藏書の目錄として解せられて居り、學者としての通憲を知る上の好個の資料とされてゐたのであるが、果して通憲のものであるかどうか、吟味の餘地のある事を吉村氏は指摘してゐる。もし通憲のものとすれば、個人の藏書目錄として存するものの中、最古のものと云ふ事が出來る。

【參考】通憲入道藏書目錄についての疑問　吉村茂樹（史學雜誌三九ノ一〇）（岩橋）

通仁枕言葉（つうじんまくらことば）　洒落本　一冊【作者】蓬萊山人歸橋【畫工】無署名【名稱】通人の常套語の意であらう。【刊行】安永兩手の年と序にある。安永十年即ち天明元年。【題材】作中の人物に一擧・二指・三爪・四關等と出て來るのは明かに當時流行した拳の術語である。噂に上る花柳界の人物、演藝界の人物の動靜は、確かに實在の人々で、作者が消息通を誇るものである。當字は異つてゐるが、山本・梅本・尾花屋は當時門前仲町（現今門前町）に鼎立した青樓の名稱である。「升屋の普請話

く出来た」とあるは、洲崎に明和頃出来た升屋祝阿彌經營の料理屋茶屋で、松平雲州侯の隱居南海が隠れ遊びをしたと云ふ當時有名な家である。

【梗概】一家に集る一學・二指・三爪の息子株、頻りに生花の話をしてゐるうち四開も來り話は遊里の噂となつた。そこへ四開の許へ手紙が來る。彼の馴染のおたよが病氣で逢へぬと云ふ知らせである。四開は顏色を變へ探りに出かける。彼は山本へ行きおたよを呼ぶ。幾よし屋では、久保井と云ふ客がおたよを上げてゐるが、おたよが無愛想なのでいら〳〵する。ところへ四開、頭巾のまゝでぬつと這入り、乙にからんで來る。おたよ四開を廊下に呼び出して辯解し、「夫程云ふなら久保井さんと切れやせう」と、四開を馴染の茶屋梅充にやり、自分は座敷に戻り、久保井に愛想づかしを云ふ。久保井は口惜しがつてくど〳〵と自惚まじりに並べ立てる。これは作者蜀橋が八幡社に通夜した時の夢であつた。

【構想】恐らく全體寄實談をその儘摘寫したのだらう。脚色は餘り纏まつてゐないが、可なり實在感に富んだ作品である。四開が天晴の深川通の粹客であるに拘らず、眞劍の戀をしては平常の洒落も出ず、一本氣な所、おたよもこれに對して、ためになる客久保井と斷然切れてしまふところなど、洒落本前期の作品が漸く一轉換をする傾向を示してゐる。中にも作者自身が現はれるのも、黄表紙にある趣向で、蜀橋の作品には、これが可なり多い。「能戊問答」「與人贅換居續傳会」（各別項）の如き同樣である。　（山崎）

通新戯

洒落本　一册　【作者】小金あつ丸　【口繪】畫狂人北齋　【名稱】（仇手本後編）と角書がある。山旭亭の序及び前編「仇手本」の扉には「通神蔵」とあり。本書内題及び小金あつ丸の序には「通新戯」とある。忠臣蔵のもぢり。【刊行】享和二年【題材】前編「仇手本」（別項）と共に「假名手本忠臣藏」を擬つたもの。要するに該書の名を前後兩編に分けて命名したもの。本書は第七段目より大切迄に當る。

【梗概】吉原一力屋の二階、由良之助、力彌が持參したわか町かほよの手紙を密かに閨のほとりで讀む。九太夫、遊女かる川、これを怪しみ窺ふ。九太夫の相方は新造ねむ川。あまりに九太夫がしつこいので逃げ出す。平右衞門は出入の鳶の親分、相方いさみは憎からず想ひ、部屋の中では話がはずむ。由良之助、かる川を身請けすると言ひ出す。かる川實はおかる、勘平への義理で自殺しようとするのを、由良之助添はせてやらうと安心させる。深川わか町となせ屋の抱へ小浪、力彌に是非逢はうと、お針のおなせ・男藝者銀六・魚之介と舟で由良之助の向島の別莊へ行く。舟中で、銀・魚の二人、富士から京までの地口を言ひ續けて向島に行く。由良之助の粋な計ひで小浪、力彌に逢ふ。藝者屋天川屋義兵衞、抱への事で女房と喧嘩する。藝者進化粧の最中、飼猫、鼠を捉へて來る。家内中の騒ぎとなり、義兵衞長持の上に乗りおさへてゐる。不意に由良之助現はれ、近日高野やの直をゑぐつてやるつもりであるから、手傳ひを頼むと依頼して去る。師走の中の頃、由良之助、仲間のぬらくら者四十餘人をつれ、高野屋におしかける。直、面倒と見て物置小屋に隱れる。一同發見して祝儀を唱へ、由良之助、夜が明けたら品川へ年忘れにつれて行かうと云ふ。一同贊成して引き上げる。

【構想】前編「仇手本」（別項）のつゞきで、毎章「忠臣藏」にもぢつたのであるから、單に同名の人物が現はれるといふだけで、筋は支離滅裂である。　（山崎）

通俗漢楚軍談

讀本　十五卷　【作者】夢梅軒章峰（自一卷至七卷）・泉京南傑庵（自八卷至十五卷）。序と同七年の跋がある。【刊行】元祿三年の　【諸本】帝國文庫・有朋堂文庫所收　【題材】秦末の紛亂より漢の興隆に至る支那の史實を材としたもの。

【梗概】呂政は秦の統を嗣いで六國を亡ぼし、始皇帝と號して威を振ひ、東に大海を塡め、西に阿房宮を建て、南は五嶺を修し、北に萬里の長城を築いて守を固めると共に、書を燒き儒者を屠つて苛政を極めたが、遂に沙丘に病んで歿した。この時趙高と李斯は遺詔を受け、僞つて太子扶蘇等を自殺せしめ、太子の弟を二世皇帝とし、專横を極めたので群盗は諸方に起つた。就中沛の劉邦、吳の項梁等は勢最も強く、劉邦は樊噲と相知り、沛縣の役人蕭何・曹參と共に、縣令を殺して沛公に推され、四方に兵を募つた。又項羽は楚の大將項燕の後で、叔父項梁と久しく會稽に隱れてゐたが、偶々太守の謀叛に乘じて一擧に會稽城を奪ひ、忽ち十萬の兵を領した。次いで淮陽の謀士范增を迎へて軍師とし、その計によつて楚の懷王の後を樹てて義帝と稱し、項梁を武信君とし、以下諸將の官位を定めて江北に出づれば、楚の諸將等續々と來り從ふ。かくて大軍淮河に到つて豐西の兵を率ゐる劉邦と會し、又楚の大將陳嬰と合し、なほ淮陰の韓信を仕へさせた。この報に接した秦の丞相趙高は、急ぎ討伐の兵三十萬を遣はした。大軍は先づ魏を奪つて直に楚に迫つた。項梁は項羽・范增等と迎へ擊ち大捷したが、又急戰に出で項梁殺されて敗戰した。項羽は雍丘にあつてこれを聞き大に歎いたが、敗軍を集めて劉邦と會し、定陶に叔父を葬つて兵を陳留に留めた。時に趙は秦の軍に破られて援を楚に請うたので、義帝は項羽・范增等に兵を與へて趙に遣はした。項羽よく戰ひ、敵の本陣に迫り三日にして悉く破り、兵を漳南に屯した。これより先、趙高は二世皇帝に逸樂を勸め、李斯の一族を滅ぼし恣に政を紊つてゐたので、敗戰の將は兵を率ゐて項羽に歸した。かくて項羽の全軍彭城に都した義帝の許に還れば、劉邦亦南陽の諸郡を平げて凱旋する。この時項羽は百十餘將と兵五十萬を領し、劉邦は五十餘將と兵十萬を有つて、彼は豪壯、これは寛仁、共に下らざる勢にあり、義帝項羽を魯公とし劉邦を沛公とし、その他の諸將に封賞を行つたが、やがて二人に征秦の命を下し、先に咸陽に入つた者を以て王としようと約した。兩者各々兵を整へて東西より征途に上る。西に向つた劉邦は昌邑を取り、韓の賢相張良を抱へ、武關に進み關を攻めた。これを聞いた趙高は誅を免れんと皇帝を弑せしめ、扶蘇の子子嬰を樹てて三世としたが、子嬰は趙高を憎んで彼と一族を誅せしめ、嶢關を死守する。併し劉邦は張良の計を用ひて遂に關を破り、子嬰を降して軍を霸上に留め、法を三章に約して咸陽の民を撫した。一方項羽は沿道の諸城を攻め從へ、河北を平げて咸陽に入らんとし、先に降つた秦兵の異心あるを知つて、その二十萬を屠つた。劉邦はこれを聞いて項羽を怖れ、函谷關を固めさせたが及ばず、項羽關中に入つて鴻門に陣し、夜襲して劉邦を除かんと企てたが、項羽の近親項伯が友情を以て張良に内通して果さず、次いで鴻門の會に失はんとしたが、劉邦は張良・樊噲に護られ、無事に秦の玉璽を項羽に傳へた。かくて項羽は王位に卽いて西楚の霸王と稱し、子嬰の一族と官民併せて五千人を殺し、將士に與へる財を求めて秦王の墓を發き、諸侯を封賞して天下を定めたが、特に沛公を漢中に封じ、秦の三將を巴蜀の地に任じてその外塞とした。併し范增はなほ劉邦を害せんと圖り却つて遠ざけられた。又張良は沛公を漢中に送り獨り關中に戻つて項羽に遷都を勸め、韓信を說いて劉邦に從はしめ、自ら遊說して諸侯を楚に叛かせようと圖つた。項羽は范增が遺した三の計に從はず、强ひて義帝を遷して大江にこれを弑し、自ら彭城に都して覇を唱へた。この時韓信は咸陽を脫れ漢王に仕へて大元帥となり、嚴に軍規を定めて兵馬を訓練した。やがて漢の甲兵四十五萬、劉邦を奉じて散關に據り、火攻水攻を以て漢王一路咸陽に入れば、張良來り見え、西魏王・河南王を說いて服さしめ、次いで韓信は殷王を攻めて降した。なほ漢王は韓信・張良の諫止を卻け、兵五十六萬を以て伐楚の軍を起し、項羽が齊へ遠征の虚に彭城を衝いたが、大に睢水に敗れて三十萬の兵を失ひ、身を以て滎陽に遁れた。項羽はこの役に諸將を殺し、漢王の一族を捕へ、次いで齊を降して再び彭城に據り頻に滎陽を狙つた（以上第七卷まで）。こゝに於て張良は蕭何と謀つて咸陽にあつた韓信を招く。韓信乃ち項羽に戰書を送り車戰を以て項羽を滎陽城外に破る。そこで范增は平陽の西魏王を誘うて叛かせ、滎陽を挾擊しようと圖れば、韓信・曹參・樊噲等と兵十萬を以て向ひ、忽ち王を虜にし、楚の兵この虚に乘じて滎陽を攻めたが破れた。間もなく韓信は平陽より歸り、また代州を治め進んで趙を取り更に燕を降した。これを聞いて項羽は范增等と十萬の兵を以て滎陽を圍んだが、反間の計によつて范增は憤死し、劉邦は成皐に遁れ趙に走り、又成皐を恢復して再び滎陽に君臨した。次いで韓信は急に齊を攻め、楚の援軍の將を斬つて齊王を捕へ、漢王に請うて自ら齊王となつた。そこで項羽は韓信を招かんとしたが果さず、大軍を以て滎陽を攻め、弩弓を伏せて劉邦を射たが、韓信が成皐に來援したのを知り退いて廣武に陣した。韓信は滎陽に入つて漢の兵を十隊に分ち、項羽の軍を廣武山の險に誘つて大に破り、項羽等を亡さんとしたので、劉邦は張良に從つて項羽と鴻溝の和をなし一族を救つた。併し漢王は直に固陵に據り約に背いたので、項羽は三十萬の精兵を以て一戰に固陵を破れば、劉邦は成皐に遁れ、張良は楚の糧食を燒いて項羽を彭城に退かしめた。次いで張良は韓信等を封賞して迎へ、劉邦は諸侯に檄を飛ばし、帶甲百十二萬、韓信を帥として楚を殲滅しようとする。項羽は急ぎ吳楚の間に兵を募つたが概ね從はず、項伯等の諸將と固く彭城を守つた。然るに項羽は僞られて五十萬の兵を率ゐ沛郡に出で、韓信の九里山十面埋伏の陣を以て破られ、遂に垓下の一戰に潰滅し烏江で自刄した。かくて劉邦は途中魯を徇めて洛陽に戻り、帝位に卽いて呂氏を皇后、劉盈を太子とし、韓信を楚に改封し、その他諸侯を封賞して天下を統べた。次いで咸陽に都を遷し、楚の降將を集めたので、項伯等は直に來り仕へた。又偶々韓王姬、匈奴の冒頓と結んで亂をなしたので、帝自らこれを伐ち公主を與へて冒頓と和した。その後韓信は謀叛を企てたが呂后に捕はれて未央宮に斬られ、なほ帝は全く後患を斷つたが、以後戚氏の愛に溺れてその子如意を太子に替へんとしたので、呂后は張良に賴り、商山の四皓を招いて、太子の輔佐とし、如意を趙王に封じて事なきを得た。その後張良は四皓と共に致仕して終南山に隱れ、帝は病んで歿し、太子皇位を嗣いで惠帝となり、劉邦を高祖と號した。やがて蕭何歿するや曹參を丞相に擧げ、樊噲等を武將として高祖の遺訓に背かず、永く漢の社稷を保つた。

【構想】當時「水滸傳」「三國志」等の支那小說の飜譯が流行したが、これは一部の書の飜譯または飜案ではない。秦末より漢初までの時代を、作者が廣く諸史小說を讀んで得た知識と想像をもつて書いたものである。事件を歷史的に發展させ、それに關係ある傳記・逸話・考證・議論等を介在させて、叙述の單調を避けてゐる。殺伐壯快なところや、悲慘哀切なところや、讀物としての波瀾起伏を具備してゐるが、やゝ史實になづみ編年體を固持した點は、創作としての用意が足りなかつた。【史的地位】「通俗三國志」（別項）と並んで古來支那軍談物の雙璧とされた。張良・韓信の奇謀、さては鴻門の會、垓下の別離等、普く人の知るところで、後の讀本・軍談の類に多くの話柄を提供してゐる。殊に曲亭馬琴の「繪本漢楚軍談」（十六卷、文政十二年—天保三年）は最も著名なものである。【價値】主要人物　項羽・劉邦・范增・張良・韓信・項伯等の性格・行爲・劇的境遇がよく現はれ、事態を變轉させるところに興味がある。「順レ天者昌、逆レ天者亡」といふ作者の宿命觀による智と力との爭ひの内に、支那人の性質や習俗等が窺はれて面白い。文章は漢文の讀み下しで、一見他奇なきが如くであるが、簡勁で而も委曲をつくしてゐる。本書は七卷まで章峰の手に成り、彼が歿したので弟南傑庵が書き繼いだのであるが、結構・布置・文章まで殆ど變るところがなく、よく前作を生かしてゐる。

【參考】有朋堂文庫解說　（笹野）

通俗吳越軍談

讀本　十八卷　【解說】凡例に「通俗列國志後篇十八卷號二吳越軍談一」とあり、各卷首に「通俗列國志後篇吳越軍談」とある。支那の「春秋列國志」を通俗的に書き改めたもの。「春秋列國志」は、その後半を占める。「春秋列國志」が先づ作られ、更にその前半をなす「西周演義」が追加され、而もこの兩者が追加以前の書名で呼ばれたものらしい。「通俗吳越軍談」の作者もこれに倣つて、先づその後半部の「春秋列國志」を譯して、「通俗列國志後篇」として出版し、次いで前半の「西周演義」を譯し、寶永二年序を記して刊行したらしい。後篇凡例に、「前編十九卷號二武王軍談一後篇十八卷號二吳越軍談一」とある。なほこの書を「吳越軍談」といふは、吳越の軍談がその一部に過ぎずして内容に相應しない。作者に就いては、凡例の末に、「元祿癸未（十六）季春泉攝陽池田邑士淸地以立（曾柏）」とあるが、その何人かを詳かにせず。又刊年も不明である。【諸本】帝國文庫所收。

【梗概】秦の哀公は、闘寶の會に十七諸侯を集め、己が制覇の志を延べんとしたが、楚の麗王の忠臣伍子胥は秦に乘ぜしめず、却つて楚を列國に重からしめた。然るに麗王の後平王立つに及んで、子胥は讒に遭ひ、吳の公子姬光の下に走つた。姬光は子胥を得て更に孫武を郢山より迎へ、吳王僚を弑して王位に卽くや、先づ楚を伐ちて子胥の怨を報じ、次いで秦を

踰し齊を降し、忽ち中國に覇を稱した。吳王闔閭がこれである。かくて勢に驕つた闔閭は、間もなく智將范蠡を擁した越王勾踐のために携李の戰に敗北せねばならなかつた。その子夫差、子胥と共に兵を養ふこと三年、夫椒山に大に越を破つて、先王の恥を雪いだが、漸く慢じて姑蘇臺を築き美姫西施を擁へて逸樂に耽り、子胥はこれを諫止して聽かれず、却つて侫臣伯嚭に計られて自刄した。勾踐は嘗の敗戰に會稽山に窮して、范蠡と共に囚はれたが、三年の後、遁れ歸つて臥薪嘗膽報復を圖り、吳の亂るゝに及び大擧してこれを撃ち、夫差を殺して會稽の恥を雪いだ。併し業成るや范蠡は勾踐の人と爲りに安んぜず、江湖に扁舟を泛べて去つた。北方晉の智伯は趙無恤を晉陽城に水攻めしたが、韓虎・魏駒の兩人に計られて敗れ、晉は韓・魏・趙によつて三分された。智伯の臣豫讓が趙王を刺さんとした事蹟は、この時の事である。一方齊は、又田和に國を奪はれて田齊となつた。齊の孫臏は初め魏に迎へられたが、魏の龐涓に妬まれて齊に仕へ、後龐涓の軍と大梁に決戰すること三度、遂に馬陵山に龐涓を戰死せしめ、自らは又山に復つた。こゝに秦は漸次强大となり、孝公に至つて商鞅を魏より迎へて强國の術を聽き、法令を改めてより治世十年、制覇の基を定めた。こゝに於て趙の蘇秦は燕・韓・魏・齊・楚を合從して秦に當らしめんと、六國の會に六國の相印を佩びたが、その友張儀が秦に仕へ、六國に連衡の策を進めたので從約は忽ち解けた。この時に當つて六國に活躍した人材は多かつたが、秦に迎へられて後、讒に遭うて歸つた齊の名相國孟嘗君や、燕・齊の數度の爭に功を成した燕の勇將樂毅、齊の田單、又寶和氏の璧を秦より護つた智勇や、廉頗將軍に許した寛仁等に名を得た趙の藺相如や、きては孟嘗君と倶に四公子と謳はれた趙の平原君、楚の春申君、魏の信陵君等が最も著れた。魏の名臣范睢が丞相須賈に陷れられて秦に逃れ、昭襄王に遠交近攻の策を獻じてからは、秦と六國とは愈々正面衝突となつた。秦王莊襄、趙を討てば、平原君は楚魏に援を求めて大に秦を破り、魏を伐てば、信陵君は楚・趙・齊・韓の聯合軍を以てこれに快捷した。然るに莊襄の子政王位に卽くや、楚の春申君、列國を合從して秦を壽陵城に攻めて大敗し、却つて秦の勢を加へしめた。これに乘じた政は、楚人李斯の丞相となるに及んで、遂に列國を滅し、覇業を遂げて始皇帝と稱したのであつた。

【附記】嘉永六年池田東籬主人、これを補正し、圖繪を挿みて「繪本吳越軍談」と題し、三十卷として刊行した。帝國文庫・有朋堂文庫に收められてゐる。（笹野）

通俗三國志（つうぞくさんごくし） 讀本 五十一卷

【作者】文山 【名稱】支那小說「三國志」を通俗化した意である。【刊行】元祿己巳孟夏の序がある。元祿二年から五年に至るものであるが、「日本小說年表」には天明五年とある。

【梗概】後漢末の大亂に際して蜂起した群雄の中、魏の曹操、吳の孫堅、蜀の劉備の三者が最も著れた。初め曹操父子が帝室を擁して權勢を恣にし、孫堅父子が江東に大勢力を扶殖してゐたに對し、劉備は獨り勢運未だ到らざる概があつた。彼がこの二者に拮抗して建國の大業を遂げ得たのは、實に諸葛孔明の補任に依つてである。曹操は天下平定を志して先づ吳に戰を挑んだ。この時孔明は吳將周瑜に計を授けて、赤壁の一戰に魏の大軍を粉碎せしめ、曹操の雄圖を挫くとともに、吳を牽制して巧に蜀の威力を伸ばしたのであつた。かくて吳と蜀は一時手を握つたが、素より豺狼の二者永く結ばるべくもなく、やがて劉備は僻遠の地西蜀に入つて、魏・吳二强の鋭鋒を避け、孔明は南蠻を征して蜀の發展を邊域に求めた。後孔明は縱横の奇策に屢々魏軍を惱まし中原恢復を企てたが、未だ志成らざるに魏將司馬仲達と五丈原に會戰して陣中に病歿した。これを期として蜀は次第に衰へて魏に降り、魏も亦仲達の子炎の叛逆に抗し得ず、炎は國を奪つて晉と稱し、遂に吳をも降して天下統一の覇業を成就したのであつた。

【解說】後漢末、支那全土に亙る大亂を舞臺として群雄蜂起の狀況を叙するに、爭鬪の壯烈と策謀の妙を躍動させて壯快な物語を作してゐる。もと羅貫中の「三國志演義」に採り、正史たる陳壽の「三國志」を參考として取捨を加へ、片假名交りに作りかへたもの、これが如何に讀者に歡迎されたかといふことは、支那小說翻譯或は飜案の流行と相俟つて、當時の書肆がこの書と關係のない西晉時代の軍談書に「續三國志」「續々三國志」の名を冠し、更に東晉のそれに「續後三國志後篇」と題して恰もこれが續編たることを標榜した事實によつても十分察せられる。又天保七年池田東籬亭は二世戴斗の畫を挿んで「繪本通俗三國志」七十四卷を刊行した。（笹野）

通俗小說（つうぞくせうせつ） 文學論

【名義】藝術小說に對する語。高級な藝術小說は、多少文學的教養のあるものでなければ解し得ない點があるが、教養の低い者にも理解の出來るやうに、通俗的に書いたものが通俗小說である。日本の小說といふ語は、英語の Novel 及び Romance の二語を包括したものであるが、通俗小說は、popular Novel or story に相當するものである。【解說】通俗小說は、内容も主題も難かしい問題を選ぶことなく、思想とか、社會問題とか、性格描寫とかいつたやうなものには何れかといへば力を入れず、寧ろ筋の面白さ、事件の變化などに中心を置くものである。そして殆ど全部が現代物であるといつてよい。從つて家庭小說（別項）の如きは當然この中に含まるべきものである。又今日、一般に新聞小說と通俗小說とは同一のもののやうに考へられてゐるが、それは新聞小說の多くが、藝術的價値といふことよりは、讀者の興味を惹くといふ目的の下に書かれるから、大抵の作品が通俗小說でしかあり得ないのであつて、新聞小說必ずしも通俗小說とは言へない。兎に角、通俗小說の根本的な特色は、内容・形式共に平易にして、誰にでも容易に了解されるといふところにある。併し近來所謂大衆文學（別項）の擡頭と共に、漸くその地位を高められて來た。明治期に於ける通俗小說として主なるものは、德富蘆花の「不如歸」（別項）、尾崎紅葉の「金色夜叉」（別項）、菊池幽芳の「己が罪」（別項）などがあり、大正期では、島田清次郎の「地上」（別項）、賀川豐彥の「死線を越えて」（別項）等が代表的のものである。昭和に入つてからは、中里介山の「大菩薩峠」（別項）及び菊池寛・中村武羅夫・加藤武雄・三上於菟吉の長篇物等が擧げられる。（宮島）

通俗巫山夢（つうぞくふざんのゆめ） 讀本 五卷

【作者】十返舍一九 【挿畫】松高齋春亭 【名稱】支那の巫山神女が、雲となり雨となりて、楚の襄王に契つた故事を假り、この夢物語の名とした。【刊行】文化十二年 【讀本】一九全集（續帝國文庫）・十返舍一九集（近代日本文學大系）所收。

【梗概】京の豪商雙島屋陸兵衞の子陽太郎は、島原の遊女桔梗屋若紫に現を拔かし、遂に勘當の身となつたが、家出の折着換へさせられた紙衣が悉く證文となつて五萬兩の大金を得たので、豫て父の信仰する藤の森稻荷明神から夢に誡められた事も忘れて、數人の遊び仲間と共に桔梗屋に赴き、先づ若紫を身請して豪遊を極めた後、物々しい道中よろしく江戸に練り込み、若紫に吉原の張りを持たせんとして年百兩の仕着せ三年の契約でこれを三浦屋に預けた。然るに三年に滿たずして若紫は吉原の張りを會得した樣子なので、陽太郎は京の一行に若紫の兄と稱する長次郎兵衞と張りで名を賣つてゐた春日野の二人を更に加へて、江戸を後に長崎の衣裳を求めて再び遊行の旅に上つた。かくて長崎に到つた陽太郎は此處でも、術を外した遊興と痴態の限りを盡し、やがて長崎の衣裳の綺羅を飾つた若紫・春日野を左右の花と擁へ、數十人の取卷連を前後にして、大阪新町の揚屋よし田屋に繰り込んで小判の雨を降らしたが、勘定となつて百兩の足を出し、さしも豪華を極めた彼が酒色の歡樂も遂に此處に終つた。若紫は百兩のかたに二度の勤めをし、陽太郎は宿六の身となつて艱苦を嘗め、窮餘の一策を案じたが、これも稻荷明神に懲らされて初めて長い夢を醒まし、前非を悔いて神德を畏み、後、父に許されて家業を勵んだといふ。

【構想】明和頃の流行唄に、京の娼妓に吉原の張りを持たせ、長崎の衣裳を着せて、大阪の揚屋で遊ぶ夢を見て騷いだといふ事に據り、八文字自笑に倣つて書いたと、作者自ら言つてゐる。流石に滑稽本の作者だけに、滑稽を專らとし、なほ邪惡の道に奔らざらしめんとする勸善の作意に出づるものである。（笹野）

津打九平次（つうちくへいじ） 脚本作者

【本名】未詳 【生歿】未詳。但し、寛延・寶曆の頃歿したか。【閱歷】初代津打治兵衞（別項）の門に出て、江戸歌舞伎のために活躍し、元祿の末から寛延三年に及ぶ四十年間の長い立作者生活を送つた。晩年に及んで森田座に出たが、それまでは殆ど市村座に關係してゐるので、同座との特殊な交渉があつたかと察せられる。

【作品・作風】寶永元年十一月市村座「女髮岡錦手綱」が彼の初作かと思はれるが、以後、寶永年代に、藤本平左衞門・津打半右衞門等が數次合作者に發見される外、多くは彼の獨作であつた。併し享保年代に入るや、津打治兵衞（二代め）を主な相手として合作期に入つた。當時の江戸脚本の習ひとして、脚色内容よりも、各場面の展開そのものに興味を抱く時代であつただけに、世界の範圍は極く限られてゐた。その方面から分類して見ると、隅田川物で、「早咲隅田川」（寶永二年三月、市村座）や「雙兒隅田川」（寶永五年同座）「參覲隅田川」（元文五年二月市村座、治兵衞・升文と合作）等が大當りであつた。曾我物は「大屋形世繼曾我」（寶永三年五月、市村座）を初め最も多く、「名山累曾我」（享保二十年正月中村座、治兵衞と合作）は累を加へ、「春曙堤曾我」（寛保三年正月市村座、治兵衞と合作）は鳴神を加へた。「初髻通曾我」（元文四年正月市村座、升文と合作）は一代の傑作と思はれ、二月に二番目高尾、三月に三番目助六、七月四番目累と加はり、十月迄興行を續けた。外に伊豆源氏の「傾城伊豆日記」（寶永七年市村座、津打半右衞門と合作）、四天王と浦和の「（浦和源氏）浦島七世孫」（享保十三年正月市村座、治兵衞と合作）、藤戸源氏と累の「大角力藤戸源氏」（享保十六年市村座、治兵衞と合作）などがある。「大島毛五十四郡」（寛保三年森田座、治兵衞と合作、伊達）や「栗島譜嫁入雛形」（寛延二年森田座、粟島）等もあつたが、要するに世界は、表面を時代で選み、内に世話を含めた作柄である。一場面としての脚色を主とし、刹那的な感情の享樂を目的とした當時の脚色の傾向としては、最も妥當な態度であつたと思はれる。二代津打治兵衞は彼の指導にまつ所が多かつたと察せられる。

【參考】劇代集　櫻田治助（守隨）

津打治兵衞（つうちぢへい） 脚本作者

【初代】【別名】津山治兵衞 【閱歷】上方役者津山治兵衞として親仁方を勤めた傍ら狂言を作つてゐたものが、專門作者に轉じたと思はれる。かくて元祿初年の頃から作者名は津打を名乘るやうになつた。主として大阪の立者岩井半四郎のために、その一座に書き卸してゐた。元祿十三年冬頃、江戸に下つたらしく、元祿の末年に歿したらしい。享年未詳。【作品】「日本阿闍世太子」（元祿七年大阪岩井座）、「七星如意輪觀音開帳」（元祿八年、同座）、「けいせい八丈島」（元祿十二年三月、同座）の如きは著名な作である。概して歌舞伎脚本からと淨瑠璃からとを問はず、改作物が多く、太刀打を好んだ。構想の妙味は乏しいが、筋の運びが比較的單純である事は、却つて大阪歌舞伎には歡迎されたものと思ふ。

【二代】【別名】太鼓堂・泥樂・鈍通 【俳號】英子 【歿年】寶曆十年正月二十日歿す。享年七十八（又は八十二）。【法名】勇健院英子日雄 【閱歷】初代の子と傳へられる。一說に元祿十六年江戸に下り、翌年名を改めたといふ。元祿末年から寶曆年中に至る五十餘年間、元文三・四年の交、一時大阪に上つた外、殆ど全部を江戸に作者生活を送つたので、江戸歌舞伎脚本の轉向期に當り、脚色を主とすべき態度を指示し、卽ち江戸狂言の完成に努力する所多く、江戸作者中興の開山といはれた。作者として打つて出た頃は、才牛が刺されて二代團十郎が發憤の期に際し、これを擁立する者に生島新五郎、山中平九郎・荻野八重桐等があつた。而して治兵衞が、その識見に於て二代團十郎を抑へた逸話は有名である。晩年に及んで、禪に志し、龜井戸の瑞龜山大海和尚に參じた。「鈍通禪學唱」五卷は、彼の宗教生活の産物である。長い作者生活を送つたがために津打の門葉は頗る多く逸才をも生んだ。津打九平次（別項）・津打半右衞門（助六の狂言、花館愛護櫻の作者）・津打又左衞門等は古參で、初代からの關係もあるらしく、壯年時代の彼を補佐した人々である。その他、津打省吾・津打岡次・津打三郎次等は寛延・寶曆の頃活躍した。三代治兵衞は、津打藤十郎に讓つた。【作品】合作が多い。總數は百有餘篇を算へるが、ここには當り作數種を擧げておく。○けいせい吉長染（寶永二年三月、山村座、丹波與子安地藏に清玄）○賴政五葉松（寶永四年、山村座、賴政）○傾城顯本尊（別項）○一心二河白道（寶永七年三月、中村座、清玄と丹後與作）○式例和曾我（享保元年正月、中村座、助六と曾我）○寶曾我女護島臺（元文三年正月、中村座、女護島とお七）○瑞樹太平記（元文四年十一月、中村座、太平記に曾）○參覲隅田川（元文五年二月、市村座、隅田川）○若木の梅平清盛（寛延三年十一月、中村座、鎌朝と清盛）

○淡島榮花琴（寶暦三年五月、市村座、清玄と淡島）○檜弓勢源氏（寶暦五年十一月、中村座、文覺と不動）等。【作風】題材を新たに研究する態度を缺らなかつた事は、初代の讀風とも見られるが、筋に餘り興味を持たぬ江戸歌舞伎としては、この點はさして問題とはならなかつた。從來の題材を殆ど無批判に活用したことが、寧ろ當年の江戸には歡迎されたかに見受けられた。ために時代と世話の混入等について、後世からは甚だしく非難された。併し彼の脚色の基本的態度の一として、役者を知つて、これにつく配役を案ずべきを主張してゐるので、當り作は多くあつたが、前の如き非難も生れたのだと思ふ。後世「一心二河白道」を以て、從來の五番續を四番續に改めた最初であると傳へる。これを直ちに認める譯にはいかぬが、彼によつて江戸脚本が四番續を定式とするやうになつたのは事實である。併し又、江戸の續狂言が續狂言としての形式を破壞し始めた責も彼にあると思はれる。尤もそれだけに、彼の作風が江戸氣質と一致したとも言ひ得るであらう。

【三代】（俳號）英子【別名】錦適與三兵衞。一河齋など。【歿年】明和八年四月【閲歴】初代津打伴十郎であつて、寶暦十二年市村座の顏見世に治兵衞を襲いだ。二代との關係は詳かでないが、晩年の門弟であらう。明和二年、錦適與三兵衞と改め、同六年秋退座して作道に筆を斷つた。明和年中は門田候兵衞（別號）の作に、スケとして大分關與してゐるが、兩者の交渉は詳かでない。彼も二代に連れて譯に志し、「心の鬼」五卷などがあるが、或はかゝる生活が、彼をして歌舞伎生活から遠ざからしめたかとも思はれる。【作品】津打一流の作風が見えたが、浄瑠璃に於ても名篇を殘して二代瀬川菊之丞はために、大に名を謳はれた。(一)脚本。封文榮曾我（寶暦十三年正月、市村座。曾我とお七）○星合曾榮東山榮（寶暦十三年七月、市村座。不破名古屋と忠臣藏）○江戸染曾我雛形（明和元年春、市村座。曾我と淺間と助六）○全盛末廣源氏（明和五年十一月、中村座。曾我と熊坂）○曾我綉愛護若松（明和六年正月、中村座。曾我と清玄）○金力捨樂鑑（明和六年七月、中村座。信太と梅川と梁）等。(二)浄瑠璃長唄等。常磐津節では、「契枝千鳥曙」と「曾我引胡蝶」（寶暦十三年二月、市村座。封文榮曾我に菊之丞と羽左衛門）を初め數多い。明和四・五年の中村座顔見世に菊之丞の葉平東下り、田舍娘、菊相撲、石橋の當りは最も評判であつた。めりやすをも屢々書いた。「萩の風」（明和六年六月、中村座、金力捨樂鑑に瀬十郎の男舞）など著名である。

【四代】（閲歴）本名未詳。但し文政十一年十一月、河原崎座「魁源氏騎士」に襲名して、立作者となつてゐる。或は名目のみを繼いだかとも察せられる。天保六年頃通與三兵衞の名が見えるが、この人物の改名か。また同八年以後には、再び津打治兵衞の名が見られる。復名と見るべきか、他に更に襲名者があたか詳細は明かでない。

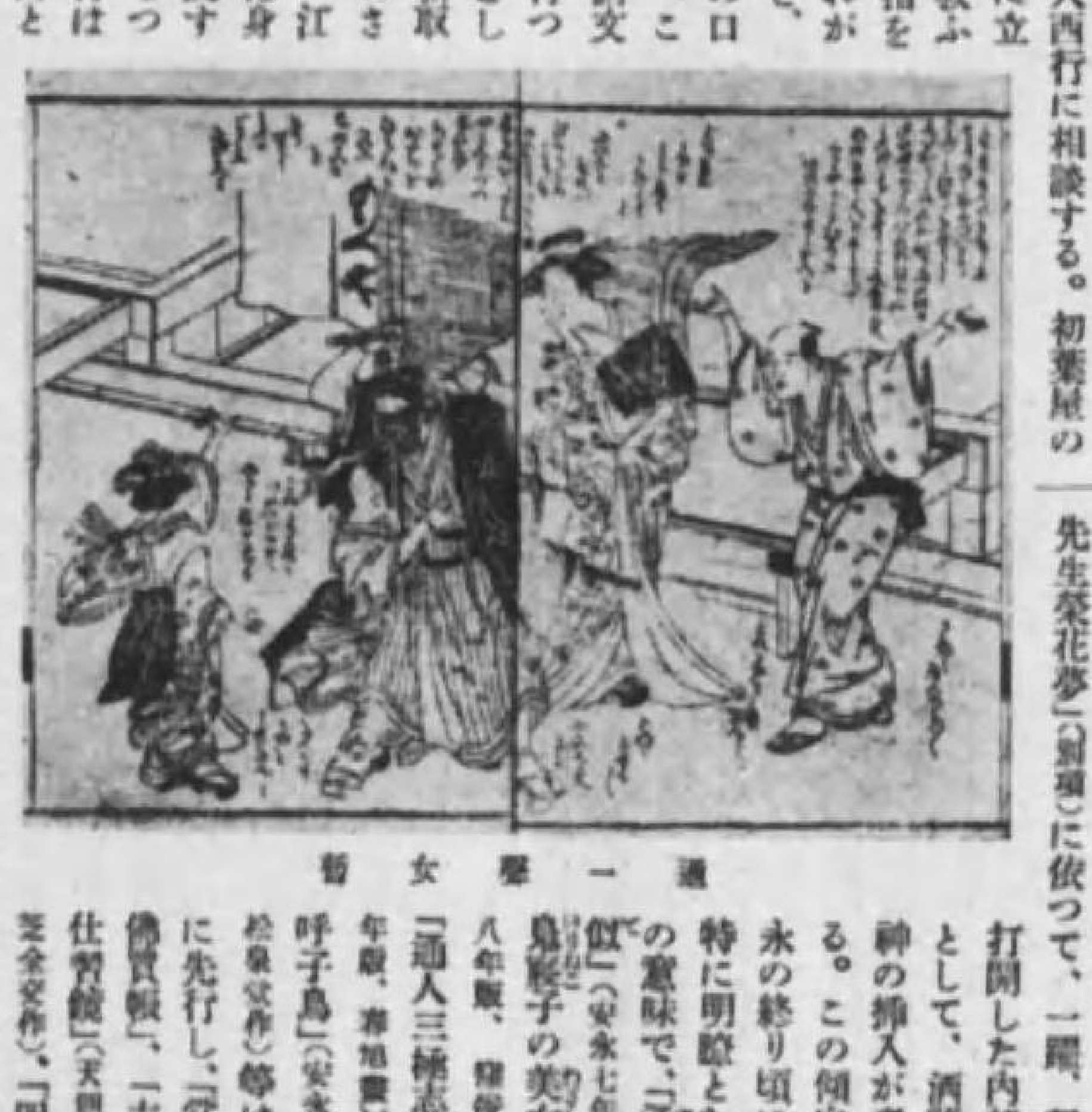
【參考】古今役者大全○役者全書（八文字舍自笑）○紙屑籠（三升屋二三治）○歌舞伎年表（關根只誠）○近世日本演劇史（伊原敏郎）（守隨）

通一聲女暫（つうのひとこゑをんなしばらく）　黄表紙

三冊　十五丁十八圖【作者】芝全交【畫工】重政【名稱】指切の立引をさばく遊女の口上を鶴の一聲の語呂に合せ、女暫と鶴によつて中村座と版元とを暗示する。【刊行】天明元年鶴屋版【諸本】帝國文庫第三十四卷・黄表紙傑作集（蘇武利三郎編）・黄表紙名作集（近代日本文學大系）所收【題材】江口西行の傳說、茨木童子の傳說。

【梗概】うつのみやと云ふ有德な酒屋の息子里次郎は、大磯の富士見屋の遊女江口の許へ通ふが、江口が靡かぬ故、江口は指を切らせて仲の町で受取る事にする。江口は里次郎の要求に困じて戀人西行に相談する。初葉屋の姫の助は、苦境に立つ江口・西行を救ふために、糝粉の指を先方へ渡し、それが僞物だとわかると、自ら女暫まがひの口上で里次郎方をへこます。自分の起請文と手紙を落して行つた客を捕へようとして、江口は腕を斬取られたが、遊女おさんが腕を取戻す。江口は普賢菩薩の化身で、遊女買を濟度するために遊女となつたとわかり、西行は發心して西行法師となる。

【構想】本書は「菊壽草」（別項）が、華やか過ぎて、今少し實の入るやうにありたいと評して、若女形の傑軸に据ゑた作である。茨木傳說を遊里に持ち來つた事は「四天王大通仕立」（天明二年版、是和齋作）の構想に等しく、法師と遊女との關係は、「當世大通佛買帳」（天明元年版、芝全交作）に近い。戀の立引に興味の中心を置いて、洒落本的の色彩を濃厚に盛り、實在の人物を混じ、更に安永九年正月、中村座興行「初紋日曲曾我」を暗示してゐる。天明元年、中村座顏見世狂言「四天王宿直着綿」は、本書にヒントを得、「四天王大通仕立」は・「四天王宿直着綿」に依つてゐるのではなからうか。【史的地位】黄表紙が從來の黒本の世界から、「金々先生榮花夢」（別項）に依つて、一躍、新世界を打開した内部的要素として、洒落本的精神の挿入が考へられる。この傾向は、安永の終り頃になつて特に明瞭となる。この意味で、「通人俳諧似」（安永七年版）、「通鳥籠子の美女」（安永八年版、雛僊作）、「通人三極志」（安永九年版、春旭畫）、「懸者呼子鳥」（安永九年版、松泉堂作）等は、本書に先行し、「當世大通佛買帳」、「吉原傀儡仕智鏡」（天明元年版、芝全交作）、「四天王大通仕立」、「遊客古事附太平記」（天明元年版、[illegible]作）等は、本書と同年出版である。更にこの種の黄表紙、「通添藏且見」（天明三年版、杜芳作）、「願滿賛字盡」（天明三年版、春町作）、「通人いろはたんか」（天明三年版、芝全交作）、「吉原大通會」（天明四年版、春町作）、「問似合噓言曾我」（天明五年版、蹄齋作）・「江戸生艶氣樺燒」（別項）、「三筋緯客氣植田」（別項）等に於て一層遊里と



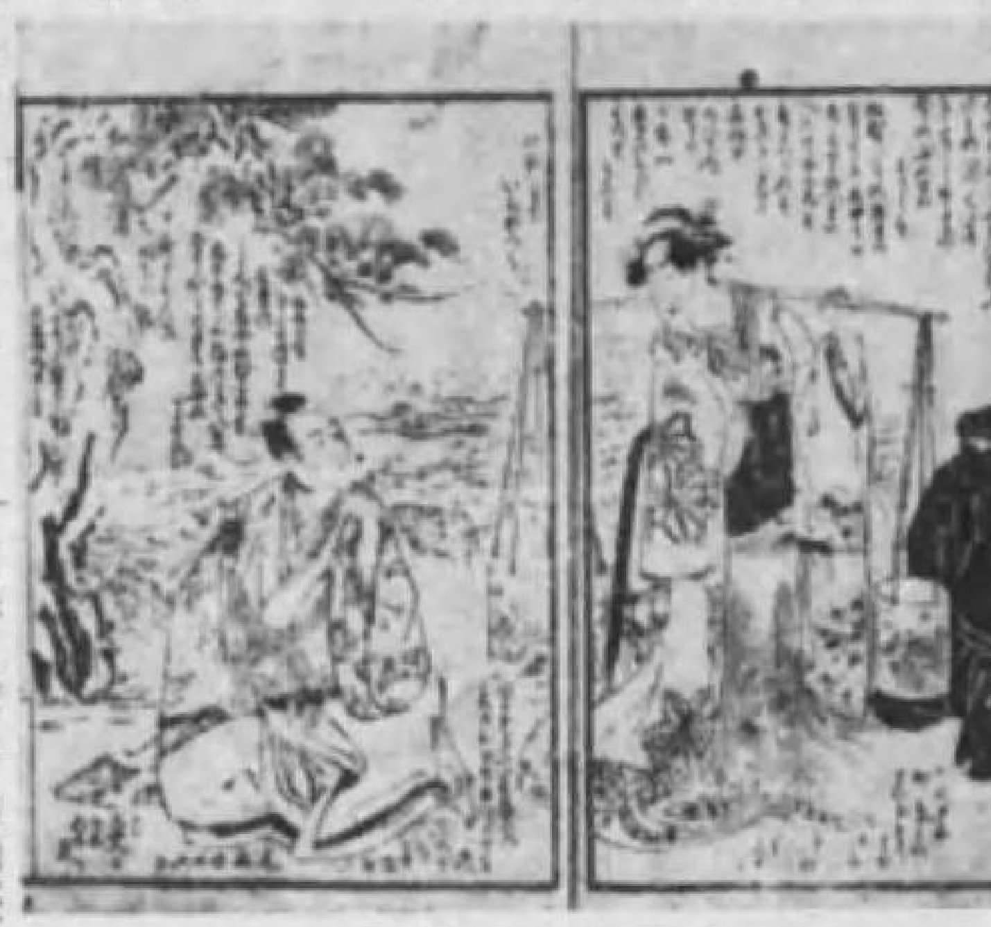
通一聲女暫

接近する。（小德）

費用而二分狂言（つかひはたしてにぶきやうげん）　黄表紙

二冊　十丁十二圖【作者】京傳門人大榮山人（曲亭馬琴）【畫工】歌川豐國【名稱】廿日餘四十兩と角書がある。「忠兵衞梅川冥土の飛脚」（近松門左衛門作）の、「二十日餘りに四十兩遣ひ果して二分殘る」の語呂で、當時流行した壬生狂言を逆に捻つた外題である。【刊行】寛政三年。天保十年歌川國芳の畫にて再版。【諸本】大通世界卷二（幸堂得知編）・黄表紙百種（續帝國文庫）・黄表紙名作集（[illegible]編）・黄表紙傑作集（蘇武編）・黄表紙集（近代日本文學大系）所收。

【梗概】馬琴は、俳道の上達を祈らんと、深川八幡宮の拜殿で通夜する。その夜の丑三つ頃に、堂に揭げた繪馬がぬけて出る。鵺は盜賊壬生の小猿になり、鴛鴦は十六七の女となり、その他思ひ〳〵にぬけ出す。繪馬が脫け出たので物を言はず、黑衣を着た者が側で譯を言ふ。洒落をする鴛鴦に曾我十郎の繪馬がいちやつく。座頭の繪馬は壬生の小猿に金と酒とを奪はれ、猪の早太は鵺を搜して空鐵砲を擊つ。鴛鴦に小猿が横戀慕して鴛鴦を縛る。信長記の雪姬を思ひ出して足で鼠を畫くと鼠が繩を喰ひ切る。荒獅子男之助が現はれる。鴛鴦は十郎をたづねまはり、小猿と猪の早太を爭はせる。小猿は炮烙を叩いて碎く。娘道成寺まがひとなり、鴛鴦は鳥の姿、小猿は鵺の形で互に爭ふ。以上は馬琴の口の利き過ぎを惡んで、友人達が一狂言書いたのである。黑衣を着て附屬色をしたのは作者の大榮山人厚皮の面人である。馬琴は勸善懲惡の誠を悟り、無用の舌を動かさず俳道に精進した。



費用而二分狂言

【解說】寛政二年、永代寺で辨財天の開帳の時、見世物に壬生狂言がかゝり、大に喝采を博した。後、兩國の見世物にも出で、幇間は酒席でこれを眞似て興を添へる程であつた。作者はこれに、桶取・座頭の川渡・紅葉狩・炮烙わり、その他の壬生狂言に、歌舞伎の先代萩・曾我・信長記・道成寺等を交ぜて複雜化し、滑稽を加へて前後に俳人馬琴の肖像を揭げて初舞臺名弘めの寓味を持たせた趣向である。本書の刊行前年には、滑稽本「壬生狂言囈口舌」（寛政二年版、樂の坊作）が出てゐ、本書と同年には「直讀見臺萩」（寛政三年版、芝全交作）、「名代振袖」（寛政三年版、內新好作）、「壬生踊戲作甸日」（寛政三年版、[illegible]作）等が出版されてゐる。「直讀見臺萩」は面を捨てて、壬生狂言を歌舞伎の世界で筋を通し、「名代振袖」は、壬生狂言の由來に趣向の捻りを見せてゐる。京師壬生、寶幢寺の地藏堂で每年三月に行はれる念佛踊は、鰐口を敲いて拍子を取り、それに合せて無言で色々の所作をする。この踊の桶取の小唄は、寛政の初、京攝の間に流行したと「三養雜記」は記してゐる。かゝる流行物を取り込んだ事と、場所が作者の出生地であるのに、處女作としての面白味がある。戲作に於ける馬琴の天地はこの時は全く未知數であるが、俳諧方面には多少の自信が持てたらしく、これを誇張して一角の宗匠に自己を祀り上げ、自己宣傳の根據としてゐる。後、讀本方面で展開した勸懲主義が、本書の末尾に仄かに現れてゐる。地口や洒落を頻に用ひてゐるが拙い。實在の人物に據つてゐると思はれる節も見える。本書の序文に京傳門人大榮山人誌とあるのは、この頃の京傳・馬琴の關係を語るものであらう。繪は、壬生狂言の舞臺面に似せたらしい。肖像は青年馬琴の容貌に似せたものと思はれる。

【備考】（直讀見臺萩）大名らしい人が寶物らしい名劍を、高麗藏のやうな色男に預ける。半五郎のやうな撫で附けの男が刀をすりかへる。預つた男は刀の詮議に出掛ける。賴兼公らしい人は吉原通ひをし、傾城をさげ切りにする。評定の幕も例の無言で咳拂ひだけ。高尾の亡魂の場も壬生狂言ゆゑ、だまつて鐘と太鼓ばかりで踊る。（名代振袖）嫖客惣太は遊女にふられ、衣をかへして寢て思ふ女に會ひ、親が許さないので心中する。地藏尊は二人を救ひ、二分の金で古着を買ひ、又八幡の境內に小屋を建て、地藏の手作りの面で狂言をして大に當てる。結局は夢。（小德）

番舞（つがひまひ）「舞樂」を見よ。

塚原澁柿園（つかはらじふしゑん）　小說家

【本名】塚原靖、幼名は直太郎【別號】蓼洲・縱死・しかま【生歿】嘉永元年三月一日、江戸市ケ谷合羽坂上（市ケ谷仲町）に生れ、大正六年七月五日歿す。享年七十。【閲歴】家は代々幕臣で鐵砲組の與力であつた。元治元年京都に赴き、二條城の定番を勤めたが、間もなく歸して下阪、御目附木城安太郎に從うて慶應二年東上、關東地方の河川改修・開墾等の事に當り、十二月江戸に歸つた。翌年奧儒者小林榮太郎に就いて經書を學ぶ傍ら、柔道・劍術等を修めた。明治維新の後、德川家に從つて駿河田中に移り、明治二年、沼津兵學校に入學。こゝで外國語の知識を修得し、靜岡の集學所で武術を修めた。集學所解散後は、地方の小學教師となつたが、間もなく友人島田三郎の紹介する横濱每日新聞に入社、編輯事務を擔當した。時に明治七年。筆禍を得て禁獄十ケ月（但し自宅監禁）に處せられた。十一年、東京日日新聞に轉じ、曾て朝野新聞の成島柳北に引立てられたと同樣に、こゝでは主筆福地櫻痴の知遇を得、十五年、朝鮮京城に事變起るや、特派せられて「入韓紀實」を執筆した。爾後、東京日日新聞の小說欄を擔當し、初めは櫻痴と共譯のディスレリーあたりの英國小說を、後には彼一流の歷史小說を連載した。彼は幕臣なので夙くから諸家の舊記に通じ、特に深く戰國時代から江戸時代にかけて研究した。當時、東京日日新聞は政府の機關紙なので、讀者は官吏・教員等の知識階級が多かつたので、彼の多少むづかしい歷史小說も愛讀されてゐた。彼の處女作として同紙上に出た歷史物は、「丸と釘貫」で、次に「長篠合戰」。何れも二十六年の作である。爾來、主として東京日日新聞を本據とし、傍ら「文藝俱樂部」「太陽」等に作品

を揚げた。二十七年、毎日電報（大阪毎日新聞）の創刊と共に入つて社員となり、四十年「碧玉盆」を大阪毎日新聞に寄せ、以後晩年まで、時々同紙のために歷史小說を書いた。四十四年、新に東京日日新聞社員となり、大正六年二月まで勤續した。この年四月、大阪毎日に「新說雁金五人男」を連載し、翌年、小說「烈女さつ」を執筆中卒去した。澁柿園は、最初蓼州の號を用ひたが、明治二十二年、出世作「條約改正」を出版するとき、時事を題材としたので筆禍に逢ふを恐れ、澁柿園の別號を用ひた。この作が大に受けて蓼州の名は自ら忘れられた。【作品】數はなか〳〵多いが、代表作と云はれるのは、「由比正雪」（別項）、「天草一揆」「北條早雲」「俠足袋」「島左近」「伊達正宗」「金烏帽」「印旛沼」「幡隨院長兵衛」など主に元龜・天正から幕末を舞臺にした。又劇化上演せられたものは、「振武軍」「天下茶屋」「黃金十枚」「幡隨院長兵衛」など。短篇も少からず、中には「不老術」の如き佳作もあり、外に少數の現代物の作もある。彼は晩年に至つても意氣衰へず、圓熟老巧であつた。【批評】澁柿園の歷史小說に就いての見解は、晩年人に語つたところによると、「古文書・歷史などは必ずしも信據するに足らぬ。歷史小說家は自己の批評眼、自己の見識によつて自由に歷史を解釋し活用し、且つ創造の世界を開拓すべきだ」と云ふにある。彼は無論史實を誤る程度までは尊重するが、それ以上は自由に史材を創造する。そして人物を主觀的に解釋するのが彼の特色で、例へば由井正雪を勤王家に、北條早雲を情味ある人物に、淀君の生涯に綺麗な同情を注いだ如きその一例。そして德川幕府側を、萬事ひいき目に見たのも彼が幕臣であつた爲めである。彼の作物の結構は、確かに巧妙で、どの小說も劇的に仕組まれ得るし、作中の人物にも一種の熱がある。殊に武士氣質を描寫する上に於て獨自の妙味があり、面白く讀ませるが、ただそれだけで、そこに時代的・思想的の、新しい考察を加へた點が乏しく、されぱとて、彼自身の社會理想を、作物に打ち込むといふ行き方の歷史物でもないから、自然奥行が淺いのは已むを得ぬ。（高須）

塚原澁柿園

通鑑綱目（つがんかうもく）　史書　五十九卷　【撰者】朱熹【名稱】正しくは「資治通鑑綱目」、又「綱目通鑑」とも略稱す。【體裁】史實の提要卽ち綱を大書し、史實の說明卽ち目を小書し、綱のみは朱子自ら筆を執つて發意を寓し、目の部分は門弟の趙師淵をして書かしめた。朱子は私かに本書を以て春秋に繼がしめんとしたので、卽ち綱を春秋經に、目を左傳の體に倣つたものである。【解說】司馬光の「資治通鑑」（別項）が、卷帙が餘りにも浩瀚で、讀者の通覽に不便であるから、その提要を簡明してその失を補はんとしたことも、確に一の重要なる動機であつたが、更に一層根本的には、彼が司馬光の書の史實の相違、紀年の方法等に對する不滿及び史實に對して褒貶の發意を寓する史評に就いて、慊らざるものがあつたがためである。而して史評の中心とするところは、常に必ず名分大義の問題であつて、朱子が通鑑に對して慊焉たるものがあつたのは、主としてこの點に係つてゐる。兩家の名分論の相違の特に顯著なものは、三國の魏・蜀の間に於ける正統論である。「通鑑」は魏が明かに漢帝の禪を受けたものとして、魏を正統として蜀を賊とし、遂に諸葛亮の來攻を入寇と書してゐる（魏紀）。これに對して、「綱目」は蜀漢を以て正統とし、魏を以て簒立と書してゐる（漢獻帝紀・昭烈紀）。併しかくの如く兩家の論が背馳したに就いては、司馬光の生地涑水が魏に近く、朱熹の生地新安が蜀に近い事實を看過することは出來ない。上述の如く朱子は光の「通鑑」の後を承けて、訂正を加へた所が少くないが、而もまた光の修史の志が君國のために正名を期するにあつたことに對しては、常に推服して措かなかつたのである。我が國に於ては僧玄惠が初めてこれを讀み、北畠入道准后はその蘊奥を得たと云ふ（尺素往來）。德川時代に入つて、鵜飼錬齋がこれに校點を加へて刊行（慶安四年）して以來弘く行はれ、學者必讀の書とせられた。（宇野・本多）

【註釋書】御批通鑑綱目五十九卷（清康熙敕撰）○通鑑綱目考異（宋汪克寬）○通鑑綱目考證（徐昭文）○通鑑綱目集覽（王幼學）○通鑑綱目集覽正誤（陳濟）○通鑑綱目質實（馮智舒）○通鑑綱目書法（劉友益）○通鑑綱目發明（尹起莘）（以上の七書は、今本通鑑綱目に附載す）○綱目訂誤四卷（陳景雲）○綱目釋地糾謬六卷（張庚）○綱目釋地補注六卷（同上）

月かげ（つきかげ）　物語　六卷　【作者】不明【成立】室町末期か【諸本】住吉文庫藏寫本六卷あるのみ。

【梗概】豐前國ひたの莊にひたの大夫と云ふ者娘二人を持ち、姉のにほひ御前は豐後の目代に望まれ、妹月かげ御前一人を如何にもして女院后の位にもつけんと思ひ賴んでゐた。安藝國あまの莊七郷を領する人は、都に時めいた大臣のこの地に流された者の末である。その子藏人は未だ妻なく、嚴島明神に月每に七日詣でてゐたが、月かげも同じく詣でたのを見染めて、以來戀の病となる。その父これをめのと三郎左衞門から聞いて、大夫に娘を請ふが、流人の末と聞いて許さない。父怒つて兵を以て奪はうとするので漸く承知する。やがて父は死ぬ。藏人夫妻は嚴島明神に祈つて一男一女を儲ける。若君四歲、姬君三歲の時、何の故もなく所領は沒收され、俄に困窮の身となる。ひたの大夫偽つて病と稱し、歸つて來た月かげと二子を監禁する。藏人これを聞いて自殺しようとするが三郎左衞門に止められ、その奬めによつて京に上る。月かげは周防國の地頭五二郎の許に嫁がせられるが、そのまゝ病となる。大夫の許に殘された二人の子は母を慕ひて涙絕えず、大夫兄を五月雨、妹を村雨と名づけて虐待する。二人は逃れて父の館に到り自殺せんとする。大夫は益々怒つて二人を海に沈める。嚴島明神、大蛇となつてこれを救ふ。二人は故郷に歸り、空館に泣いてゐるのを或る翁が奬めて京に上らす。上る途中備中備後の境の山で遂に道に迷つて餓死する。明神また山伏となつて救ふ。京に上つたが尋ねるあてもなく、二人が淸水に祈請する所を叡山の大納言の阿闍梨が見つけて伴ひ歸り、村雨は阪本に預け、五月雨は手許に置く。この子才學優れ、その名一山に聞えるやうになる。或る時淸水に參詣し父と逢ふ事を祈ると、會々藏人も詣で來てめぐり逢ふ。時の帝五月雨を召して今様を聞かせ給ひ、叡感あつて素性を問はれ、藏人に九州の代官七代まで安堵の狀を賜はる。月かげは夫と別れて以來八年病の床に沈んで、一度も契を交さず、二子の殺された事を聞き乳母侍從と共に逃れ、あまの莊の舊館に到り自殺しようとするが、乳母に勸められて京に上る。併し親離に堪へず折しも藏人、所領入せんとして來り、二人を助けあげる。かくて漸く父子夫婦相逢ひ喜び勇む。藏人は九州に到りひたの大夫に復仇せんとする。五二郎はこれを聞いて藏人に討たれ、大夫夫妻は捕へられる。五月雨斬るに忍びずこれを追放す。かくて一家は益々繁榮した。（大野木）

月暈日暈（つきがさひがさ）　小說　【作者】島村抱月【發表】明治三十一年一月、「新著月刊」【刊行】明治三十九年、小說集「亂雲集」。抱月全集第一卷所收。

【梗概】某省の會計課長代理正木篤は、恩人である課長深澤某の官金費消の形跡を隱蔽するために官印を盜用した。これが同僚の宇川伴次の知るところになるので、その口を緘するために、自分の戀人であり、やがて自分の妻となるべき深澤の娘術子を好餌として、同女に心を寄せてゐる彼に結婚をすゝめる。が、彼はそれを卻けるばかりか、窮境わるくもその罪を發かうとするので、憤りの餘り彼を九段牛ケ淵に突き落して殺し、やがて術子と結婚をするが、日を經るまゝに殺人罪の苦惱がかうじ、つひに一切を術子に打ちあけ、牛ケ淵で夫婦心中をする。

【批評】題材は殺人後の煩悶の描寫で、ドストエフスキーの「罪と罰」を連想させるものがある。文章の典雅な雅俗折衷體である事と、人物事件の布置配合の善く整つてゐる事とは、この作の大きな特色である。【附記】抱月は一時、作家たらんとして明治三十年四月創刊の「新著月刊」に「白あらし」の一篇を寄せて以來、四・五年の間に、「新著月刊」を初め「太陽」「新小說」「國民之友」等に約十四・五篇の小說を公けにしてゐる。「亂雲集」の自序にも、これ等の作を以て、作者は「能く現實以上の境に飄逸」しようとしたものだと云つてゐるが、「月暈日暈」も、無論作者のかう云ふ意圖の現はれである。（本間）

月草（つきぐさ）　論文集　【著者】森鷗外【刊行】明治二十九年十二月、春陽堂。【內容】菊判千頁にあまる尨大なる論文集で、殆ど全部が明治二十二年から二十七年まで「しがらみ草紙」（別項）に據つて、論陣を敷いたその所產である。美術論・劇壇偶評・文章論等がある。更に「山房放言」「山房柑掌談」、また新刊雜評、自作に對する批評への解嘲、最後に演劇に關する論議と、弟三木竹二の手に成る「觀劇偶評」を收めてゐる。併しこの書の眼目は卷頭に揭げた六篇の「山房論文」にある。これは、「早稻田文學」の坪內逍遙と、「理想沒理想」に就いて應酬したもので、明治文壇始まつて以來の大論爭の記錄であると共に、單に論駁の文たるのみでなく文學上の重要な論策である。【批評】この書は當時の批評壇に怪しげな印象批評のみ橫行してゐるのを見て、決然立つて批評の規準を審美學の上に置くべきことを敎へた、批評の批評がその多くを占めてゐる。有名な「理想沒理想」の論爭とは、逍遙が「批評は著作の本旨の所在を發揮するを事とし、歸納的沒理想たれ」と主張するに對して、彼は「著作を批評せんとせば先づ觀察し探究すべく、これ科學的手段であり歸納的批評である。併しこれを舉つて判斷を下さんとする曉は「理想」標準を要する。理想とは審美學上に古今の美術品を見て歸納し得たる經驗則だ」と論駁してゐる。その後逍遙が沒理想的宇宙觀を述べたのに對して、彼は「世界はひとり實なるのみならず又想のみち〳〵たるなり」とし、「理性界を觀、無意識界を觀て、美の理想ありといひ、又これに適へる極致あり」と云ふ說を支持し、また藝術家に於ける神來を舉げ、「眞の美術家の製作は無意識の邊より來る。これ製作性の上の理想にあらずや」と駁し、かくてこの大綱から派生して論爭は、諸種の問題に亙つてゐる。これは逍遙に全然勝ちみがなかつたが、しかしそれ等の山房論文は相手を說服せしむる以上に、當時の文壇を益するに役立つた。ハルトマンの審美學を知り、眞正の批評の如何なるものかを敎へられ、ゾラの自然主義に對する縱橫の論議を聞き、歐羅巴文學の消息を傳へられたのである。この論爭以外にも、幽玄の文字が夥しく收載されてゐるが、これは彼が好戰の士たることを語るものではない。專ら論難の體を借りて所期の啓蒙運動を行つたものであることは、就いてこれを讀めば直に明かにすることが出來る。かくの如くして「月草」一卷の諸論文がわが文壇を覺醒し刺戟し、敎へ高め深めた功績は甚だ大きい。なほ三木竹二の手に成る精到なる劇評も、所謂見巧者流の評判記の域を脫した最初の批評として永く尊重に値するものである。（小島）

築地小劇場（つきぢせうげきぢやう）　劇團　【解說】新しき國劇樹立を目的として結成された演劇團體。大震災の因緣に大正十二年末演劇研究のための歐洲留學から急遽歸朝した土方與志は、東京の劇場が殆ど全部壞滅せるを見、且つは當時バラック劇場の建造を許さるるを機會に、一の研究劇場を興すべきことを小山內薰（別項）に提議した。既に既成劇壇の一切に絕望して、私かに俳優學校に依る根本的革新を策しつつあつた小山內は、卽座に同意し、協力して創立の事に當つた。半歲にして京橋區築地二丁目二十五番地に建坪八十、客席五百八を有する劇場が成つた。これが建設は土方與志が私財を投じた。演出者として小山內薰・土方與志・和田精、俳優として汐見洋・友田恭助、經營係として淺利鶴雄の六人の同人が、劇場の運用並に經營維持に當つた。かくて大正十三年六月十三日、「築地小劇場」は記念すべき開幕の銅鑼を打ち鳴らした。【沿革】第一回公演にはチエホフの「白鳥の歌」、マゾオの「休みの日」、及びゲエリンクの「海戰」を上場したが、特に「海戰」は世界大戰後の新聲たる獨逸表現派の戲曲に屬し、その砲丸の如くに飛ぶ臺詞と力强き集團的演技とが、效果的な舞臺設備と相俟つて劇壇に新しき驚異を齎すに至つた。爾來約二年間、最初の宣言通り飜譯劇のみを以て上演曲目を編成して一部戲曲家の誤解と反感から非難の聲を浴びたが、これは新しき國劇の樹立を目ざし、歌舞伎劇でも新派劇でもない劇術を創成するために、演技者の訓練上必須の手段として執つた方針でもあつた。この間上演された主なるものは、カイゼルの「朝から夜中まで」、ゴリキイの「夜の宿」、イプセンの「幽靈」「ペールギント」、チエホフの「櫻の園」「三人姉妹」、ゴーゴリの「檢察官」、エデキントの「春の目ざめ」、メエテルリンクの「靑い鳥」、チヤペックの「蟲の生活」、沙翁の「ヴェニスの商人」、ロマショフの「空氣饅頭」、創作物では、坪內逍遙の「役の行者」、武者小

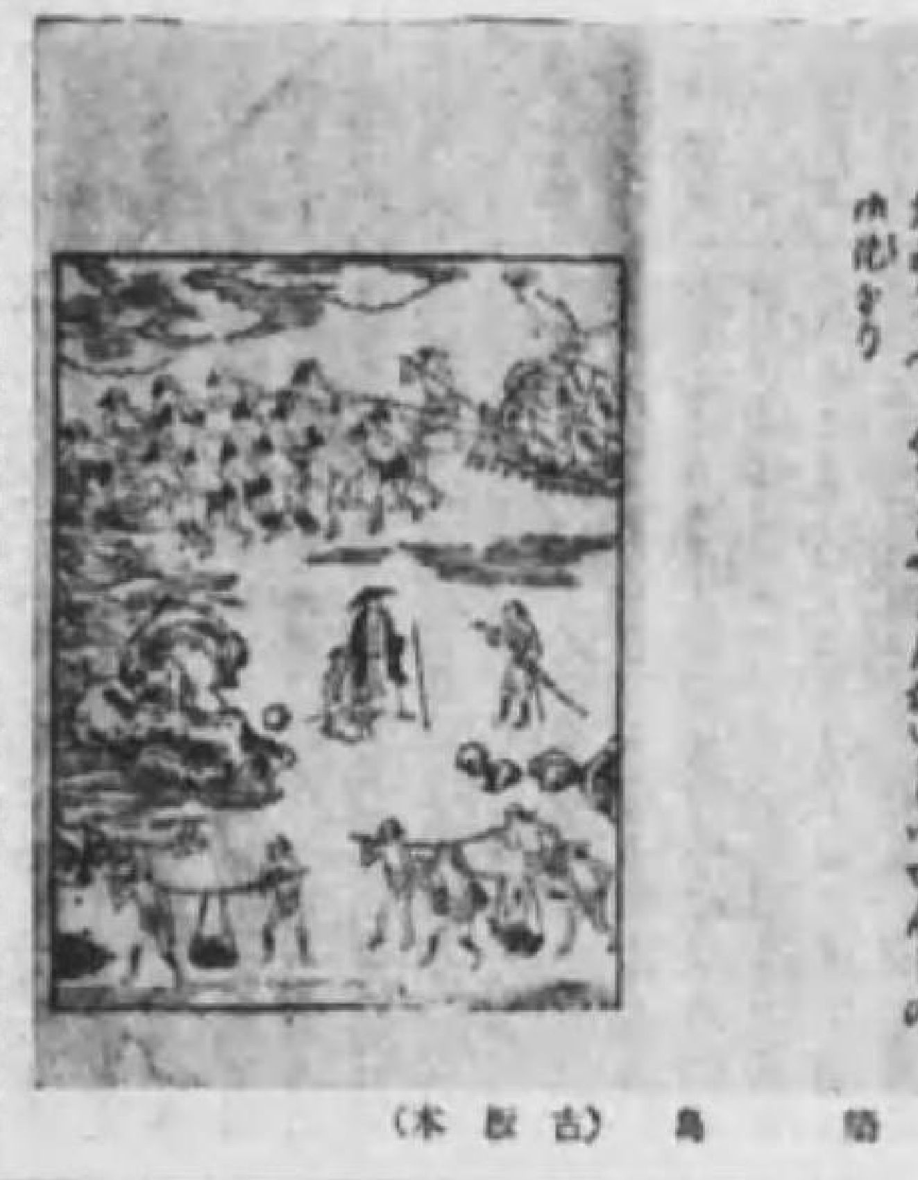
路實篤の「愛慾」、久保田万太郎の「大寺學校」等であつた。この間、時には地方興行や、帝劇にも出演した。かくて四周年を迎へた劇場は、折柄區劃整理のため築地二丁目二番地への移轉と改築を行つた。これより先、劇場の同人制度を全劇場員の代表委員組織に代へて來たが、更にこの機に土方與志を主事とする劇場部と小山内薫を主事とする劇團部となしてその責任を區分し、十月の改築記念公演に臨んだ。然るにこの年十二月、小山内薫の急死に逢ひ、劇場は大なる困難に直面した。即ち盟主小山内死後の劇團組織に種々の紛糾を生じ、感情の衝突に加ふるに思想的對立の強化を見、三月二十四日、遂に一部の人々は連袂脱退の擧に出で、やがて劇場部主事土方與志を擁して新に「新築地劇團」を興すに至つた。殘留組は青山杉作を主腦に「劇團築地小劇場」として進み、光輝ある「築地小劇場」の名は、今や空しく建物の上に留めるのみとなつた。「劇團築地小劇場」は更に分裂して「劇團新東京」を生んだが、後何れも解散され、友田によつて築地座が興された。

【批評】「演劇の實驗室、芝居の定設館、民衆の見世物小屋」の標語の下に、滿五箇年に亙り、絶えざる活動を續けた築地小劇場の存在そのものが、まづ劇壇に對する大なる貢獻であつた。即ち從來の浮動常ならぬ劇團と異つて、これは自らの劇場と財政上の支援と更に豫定曲目とを用意し、或る程度の損失を顧慮することなく計畫的に一流の作品を定打ちし、歌舞伎劇・新派劇に對峙して新劇（翻譯）を根強く舞臺に植ゑ付けたからである。またこの定小屋を有して不斷の興行を續け、八十四回の公演を重ね百十七種の戯曲を上場したことは、技術者の舞臺的修練に役立ち、本來の目的とする新しき劇術の創成を促進せしめたことは言ふまでもない。而もそれ等の演出には近代劇の古典を小山内、新傾向のものを土方、その中間を青山とほぼ分擔してこれに當り、各自の特色ある良心的な舞臺は、築地をわが新劇壇の大本山として仰がしむるに十分であつた。かくて築地小劇場はその質と量とに於てわが新劇運動始まつて以來の偉大な足跡を印し、所期の任務を完全に果した。而して上演曲目に多くの進歩的傾向戯曲を加へてあるとは云へ、演劇的效果の發揮を主にした藝術劇場の態度に終始したので、思想的よりは技術的方面に殘した功績が遙に顯著なことは爭へない事實である。舞臺設備の點ではあらゆる近代的機能を取り入れ、わが國最初のクッペル・ホリゾントを設けたのみならず、脚光及びボオダアを廢してサスペンション、スポットに依る照明や、舞臺構造、音響器具等にも新機軸を出し、これが自在な的確な驅使に俟つて見事な效果を現じて、幾多の名演出を可能ならしめたが、その手法の如き、爾來一般營業劇場の舞臺に於ても踏襲されてゐる有樣である。各樣式の戯曲の研究的上演は必然的に舞臺裝置の領域を擴め、構成舞臺も試みられ、また世界の劇壇に誇るべき創案丸太式舞臺も屢々採用された。演技に就いては言ふまでもなく、先覺小山内が企圖した新しき劇術の創成は不斷の舞臺的鍛錬に俟つて、次第にその成就の歩を進め、幾多優秀の技術者を生み、現に彼等は「新築地劇團」「左翼劇場」等にあつて活躍しつつあるが、更に今後の新劇運動の中樞となつて活躍するであらう。（新劇參照）

築地小劇場

【參考】月刊築地小劇場（築地小劇場發行）○築地小劇場水品春樹○小山内薫全集第六卷（水木）

築島（つきしま） 幸若舞曲（三十六番の一）二卷【作者】不詳【別名】兵庫【成立】室町期【諸本】古板本は寛永十二年板（十行本）。新群書類從八舞曲部所收。節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五に載せてある。又御伽草子として、新編御伽草子下卷にも收む。【題材】淮平曲物。本地物。經ヶ島人柱傳說。人柱の代りに一切經を寫した石を以て築かせた清盛の功德を語る「平家物語」（卷六）の叙述とは異り、清盛の專橫と人柱に選ばれた國春父子の恩愛及び健兒松王の俠氣を主題とし、これを說法の方便に結びつけたもの。


築島（古板本）

【梗概】福原に遷都の後、清盛は平大納言時忠の議を納れて、輪田泊を築かんと五條大納言邦綱を奉行とし、大和・山城等七箇國の人夫に命じて始めたが、浪荒くして工事成らず、安倍安氏のトによる人柱三十人の數に充てるため往來の人を捕へる事二十九人に及んだ。最後に捕へられた修行者はもと難波入江みつまつの刑部左衛門國春といひ、鞍馬の多聞天に申子した名月女を丹波國をがはの莊能勢なる藤兵衛家藤に奪はれ、妻にも死なれて高野に遁世、女の行方を捜して兵庫に來掛つたもので

ある。父の噂を聞いた名月女は夫の留守中馳せ附けて代らうとし、跡を追ひ來つた家衆も共にと請うたが、許されない。人柱供養の當日二人は更に輪田岬の觀音堂に見物してゐた清盛に愁訴したので、漸く國春一人が許されると、偶々清盛の童松王健兒は自ら進んで二十九人の命に代り、一萬部の法華經と共に海に沈められた。工事はめでたく成就。これが經ヶ島である。名月女は吉祥天女、松王は大日王、清盛は地藏菩薩の化身で、すべては築島成就の方便であつた。（島津）

【影響】本作に據つたものに、榎本虎彥作の脚本「經島娛生贄」（明治四十二年十月歌舞伎座初演）がある。

月並（つきなみ） 俳諧【名義】月並俳句の略稱。子規（別項）の新派運動より見たる舊派、即ち純傳統派の俳句を指す。又、それより轉化して、何事にても守舊的なるもの、卑俗なるもの、低級なるものに對してかく呼ばるゝ場合もある。【沿革】月並とは月次で、例月の發句會を月次會と稱する。文政末期より、俳壇一般に卑俗なる趣味が行はれ、その俳諧の月次例會は所謂點取の興に陷り、或は賞をのみ目的として一種の文藝賭博たる觀をなすまでに墮落した。天保より明治の初年にかけては殊に著しく、蒼虬・梅室（各別項）の如き、所謂宗匠として富を積む程に、俳諧の文學的內容を荼毒すること甚だしいものであつた。子規が俳壇革新の大旆を建てたのは、先づかくの如き俗流に對する指彈であつて、子規はこれを一轄的に「月並流」「月並俳人」などと云つた所から、この語が輕蔑の意を以て踏襲せらるゝ事になつたのである。子規の「俳諧大要」に、「月並風に學ぶ人は、多く初めより巧者を求め婉曲を主とす」などとあり、子規より見れば、その主唱する新派俳句以外の當時世間に流行せる俳句は、凡て「月並風」と見なしたので、かく對者を酷評することに依つて、その文藝的の立場を鮮明ならしめたのである。子規の新派は、反對派より書生俳句といふ名を酬いられたほどに、自由であり名を成し易かつたが、舊派にては宗匠より立机を許されて、傳統の名を繼ぐといふ風習を守つてゐるので、何々庵何世などといふ名の下に集まる人々を、月並といふ風に當今は考へられてゐる。けれども、本來は、文藝的なる俳句に對する非藝術的なる俳句を「月並」となすことが眞意であるから、子規派の新派の中にも、非藝術的に低迷した作品は、これを月並風と名づけて差支ない。（萩原）

【參考】獺祭書屋俳話正岡子規○俳諧大要同上○月並研究高濱虛子

月次祭（つきなみのまつり） 神道【名義】月次は月竝で、月毎に祭るの義であるが、その幣帛を六月・十二月の二回に諸社に奉りて神事を行ひ、國運の發展、皇室の彌榮を祈る祭儀である。【祭神・祭儀】「延喜式」卷一、四時祭上、六月祭の下に、「月次祭、幣帛案上神三百四座、大社一百九十八所」とある。即ち祈年祭の案上幣に與かる神で、新嘗の祭神と同じである。從つて祭儀も祈年祭（別項）と大體に於て同じである。【由來】この祭も、古く行はれたるものと思はれるが、その史に現はれたのは、「續日本紀」文武天皇の大寶二年七月である。

【神今食】宣長の「玉勝間」に曰く、「神今食はジンゴンジキと字音にのみ唱へ來り云々、加牟伊麻氣と唱ふべきなり。そは神は神嘗祭などの神に同じく、今は新の意なり云々。新嘗の御食といふことなるべし」と。かくて月次祭が月毎に奉らるべき幣帛を二度に奉らるゝやうに、月次祭の夜行はるゝ神今食も、「天皇の月毎に新嘗の御食を聞食すよしにて、其度ごとに行ひ給ふべきを、合せて二度に行ひ給ふよしにて、そは新穀にはあらざれども新嘗を聞食始むるをさへに、重く齋に齋み給ふにて、先づ神に奉り給ひて、さて天皇のきこしめすこと、もはら新嘗大嘗のこゝろばへに同じ」と宣長は說いてゐる。現今月次祭は、六月・十二月の十七日に太神宮に大祭として行はれ、一般の神社に於ても亦行はれる。（田中（義））

【參考】令義解○三代實錄○延喜式○江家次第○禁祕抄○祝詞考○神道名目類聚抄○祝詞講義○古事類苑○祝詞新講○神祇辭典等

繼根振（つぎねぶり） 上代歌謠【名稱】歌の冒頭の句を以て名づけたのである。【出典】「琴歌譜」に一首出づ。【歌詞】譜を附した歌詞を分り易く記せば次の如くである。

つぎねふ、山城川に、秋つ花開く（一說に、[illegible]）
花ふとも、吾が愛し者に、逢は
ずは止まじ。

純然たる旋頭歌形式の歌で、二段より成る。なほ記紀の仁德の條には、「つぎねふ山城」と云ふ起句を持つ歌が四首見えて、それには、志都歌の返歌（又は歌返）と云ふ名が附いてゐる。これ等の歌は、何れも繼根振に歌はれたもので、且つこの「琴歌譜」の歌の曲は志都歌の返歌と關係があるのであらう。（藤田）

槻の落葉（つきのおちば） 歌文集 一卷【著者】荒木田久老【名稱】本書の名は、正しくは、「槻の落葉詠草」とあるべきものかと思ふ。久老には、外に「槻の落葉信濃漫録」（別項）「槻の落葉名古屋錄別集」（文政二年刊）など同名の書がある。【諸本】東京帝大圖書館藏の原本と思はれるものが、大正震災に燒失し、その轉寫本のみが傳はつてゐる。「近世萬葉調短歌集成」に依つて公刊されたものもそれである。外に刊本を見ない。【內容】短歌百九十三首、長歌二十六首、文章六篇。四季・戀・雜・長歌・文部と云ふ類別に從つてゐるが、原本の戀部の終りが落丁になつてゐると云ふ。從つて長歌の實際は二十五首を遺すのみである。なほ[illegible]刊本に遺憾なことは、文章が六篇の中二篇とられてゐるに過ぎない。【歌風】久老には別に「五十槻園集」がある。併せ見るべきものである。その歌才は[illegible]較には眞淵の萬葉調を繼承した門下として田安宗武・加藤千蔭等が擧げられるけれど、素朴さと自由さとの點には、却つて久老の方に特色が多い。恰もその學が、同門本居宣長の風に比し全然別途の方向を示し、時に師說をすら超えて憚らない豪宕不羈の態を見せてゐるに似てゐる。[illegible]時に[illegible]酒色に身を浸しめるやうな生活をすら辭しなかつた。「[illegible]枕六月の暑き[illegible]」とか、「[illegible]わがするど[illegible]ん日遊み」と云ふやうな、[illegible]の歌も見られる。次の二三の例によるも、詠出の自在と、萬葉調の追隨とが見られる。

初春の初日かゞよふ[illegible]
もろ
やよや鳴け山[illegible]
な惜しみそ
さ丹塗の小舟[illegible]
色もなつかし

なほ、「白鷺を玉にぬきたる三輪山のさぬはぎ

が髻華に挿せこの子」の如く、「古事記」中の歌より脫化した類の遺作もある。長歌に就いても語格は同樣である。形式や雅味に捉はれず、自在闊達に表現した點に、彼獨自の個性が見えて面白い。ともあれ近世の長歌中逸色多いものとして推賞すべきである。（齋藤（淸））

槻の落葉信濃漫錄（つきのおちばしなのまんろく）　隨筆　一卷【著者】荒木田久老【名稱】一名「病床漫筆」といふ。【刊行】文政四年【解說】卷頭に、「享和元年九月、信濃の國に下りけるに、神無月淺光寺にていたく煩ひけるをりしも云云」とある如く、病間、土地の學徒の問に對して答へた事を記したもので「病床漫筆」とも云ふのはそのためである。主として「萬葉集」の歌詞の難解なのを說いたもので、[illegible]の歌調以下四十二條を收めてゐる。本居宣長の說を斥非する所が多い。所々著者の男久守の頭註がある。文化元年跋、文政四年大堀正輔の序及び文政元年久守の跋がある。（和田）

嗣信忠信記（つぎのぶただのぶき）「八島」を見よ。

月舍遺抄（つきのやいせう）　隨筆　一卷【編者】橫山由淸【諸本】本書は由淸の自抄本をその歿後友人小中村淸矩博士に贈られたもので、他に轉寫本はあるまい。隨筆文學選集第六卷所收。【解說】月舍橫山由淸が抄寫して一卷に綴つたもので、加納諸平の「山多豆考」、黑川春村の「同追記」、木村正辭の「同附尾」と、諸平の「免す河考」、春村の「同附記」とから成る。一二の飾圖がある。「月舍遺抄」の題名は小中村淸矩の命じたものである。（和田）

月山發句合（つきのやまのほつくあはせ）　俳諧【編者】齋部路通【刊行】元祿四年【名義】羽前羽黑三山の一、月山での發句合であるから、かく題したので最後の判詞に「左右十八番、名を月のやまの發句合といふ」とあるから、これを本名とすべきであらう。【諸本】原本は路通の「俳諧勸進牒」（別項）上之卷の附錄となつてゐる。俳諧句合集（俳諧文庫）には單獨に收められ、蕉門俳諧前集（俳書大系）には「俳諧勸進牒」と共に收められてゐる。【內容】左右十八番の句合で、羽黑山の別當代會覺阿闍梨發起、圖司呂丸撰、路通判である。元祿三年六月路通、芭蕉の曾遊を慕つて月山に登り、この句合の判を書いたのである。路通の序があり、羽黑の呂丸の賀詞が跋になつてゐる。作者は會覺・枳風・不玉・文鱗・曾良・釣雪・宵花・總人・立圃・蜂々子・路通・呂丸等二十七人である。（荻原）

月の行方（つきのゆくへ）　歷史物語　二卷三冊【著者】荒木田麗女【名義】八月十五日に脫稿したので、紫式部が八月十五夜に、「源氏物語」を書き始めたといふ古傳を連想し、「あくがるゝ心のはては千さとともかぎらぬ月の行方とぞ思ふ」と歌を詠んでかく題した（自跋）。【成立】明和八年八月七日起稿、同十五日完成（著者四十歲）。【諸本】原本は荒木田興正（麗女實家の甥）蒙直女筆で、神宮文庫藏。自筆本は所在不明である。史籍集覽・國文叢書・女流文學全集第二卷・日本文學大系第十三卷等所收。【內容】鏡類の結構を摸倣し、片田舍に世を避けてゐる老翁の物語に假託して、高倉（卷一上・下）・安德（卷二）二代の事を記してゐる。この兩朝の歷史は、「彌世繼」（別項）に記されたのであるが、散逸した爲め、その缺を補つたのである。資料は主として、「平家物語」「源平盛衰記」によつてゐるが、優婉華麗の情趣を現はして「榮花物語」「大鏡」の遺風を發揮しようとつとめ、戰爭記事の如きは極めて簡單に記し、風流情事に關する說話に力を注ぎ、和漢の故事・詩歌等を巧みに利用して、「平家」「盛衰記」に重複せざるやう、別種の表現を以て精細に描いてゐる所に特色がある。（池の藻屑參照）

【參考】國學者傳記集成　○荒木田麗女著書考　宮崎敏子（國語と國文學一ノ九）（宮澤）

月日の御本地（つきひのごほんぢ）「つきみつの草子」を見よ。

つきみつの草子　物語　二卷【作者】不明【別名】月日の御本地【成立】室町末期か【諸本】寬永頃の丹綠の古活字本がある。寬文の刊本は「月日の御本地」と題し、寬文七丁未年林鐘吉日、松會開板とある。【梗概】天竺摩迦陀國に、やうこく長者といふ富者があつた。未だ子のないのを嘆いて夫人に相談すると普陀落世界の千手觀音に祈り給へといふ。長者は祈るが一向に示現がない。そこで自宅に壯麗な堂塔を築いて觀音を勸請し、七日祈ると觀音老僧と現じ、汝は前生に於て仙人であつたが山鳥の子を食した爲めに、今富貴を極めながら子がないのであると告げる。長者後世を弔はれんがために是非にとなほ七日祈念する。觀音さらば子を與へん、されど母はその子四五歲の頃死すべしと告げらる。かくて一子が生れた。ほう王の君と名づく。翌年又一子が生れ、さんそうの君と名づける。この子四歲の時果して母は死んだ。長者若君嘆く。後或る小名の娘を容れて室とする（原文、この女をきりうの局と云ふとあるが、その後の文にみたいときりうの局と二人出て來る事から見ると乳母か妾女らしい）。繼母先妻腹の兩子を憎んで毒殺しようとするが、觀音これを救ふ。こゝに假病を作り、長者、にひふら山に到つて不死の藥を求めんことを願ふ。長者の出でし後兩子の保育を託せられたしゆん王の呼妻をんで實を與へ、兩子を害さん事を夫に奬めさせる。しゆん王、怒つて妻を追ひ、百騎を率ゐて若君を迎へようとする。繼母これを聞きさかいのはまのむくみのてうを召し、若君を海に沈めんことを命ずる。てう已むを得ず兩子を伴つて出たが汐水島に棄てて歸る。此處に二子の飢に迫るを母は悲しみ、閻魔王に暫しの暇を乞ひ、極樂の大鳥に魂を宿して島に來り、二子に逢つて母なる由を告げる。さて長者が不死の藥を祈る供物を取り來つて兩子を養ふ。長者は七十五日祈つて得ず、歸つて見れば若君がゐない。しゆん王、てうを召して仔細を知り、自ら三十艘の船を具して島に到る。供物を奪つた大鳥を見、二子は食はれたかと案じたが、羽の下に無事な我が子を見、且つこの大鳥が亡妻なることを知る。かくて長者は繼母を鬼ケ島に追ひやり、二子は佛弟子となつて苦行の末、兄は日、弟は月と現じ、長者は菩薩となり、しゆん王、てうは四さう八の星と現じ、鳥へ迎ひに行つた人々は、諸星となつて日月を守り、母は明星となつて子に附き添つた。（大野木）

月詣集（つきまうでしふ）　私撰和歌集　十二卷四冊【撰者】賀茂神社の神主賀茂重保。その知人賴盛法師が助力し、假名序の如きは同法師が淸書したといはれてゐる。【名稱】賀茂神社に月詣をする人々の歌を主として集めたものの命名。「月詣和歌集」ともいふ。【成立】本集は奉納の意味で撰せられたものであり、眞名序の末に、壽永元年十一月とある。「千載集」は翌二年二月撰修の命が下つてゐるが、兩者の關係は不明である。但し本集と「千載集」とに共通な歌は濱臣の調査に依ると九十八首程ある。序文には單なる私の備忘とあるけれども、私に祕しておくといふ程ではなく、世間に流布して選の不公平や拙劣を非難される場合を豫想したからこそ、賴盛法師に助力させて豫め備へたのである。隨つて撰修の動機は單なる奉納ではなく、當時の流行に倣ひ、賀茂社に對する文人の信仰を中心として、一個の權威ある私撰集を撰しようとしたものである。【諸本】刊本には淸水濱臣の校本（四冊、大、文化五年刊）、續群書類從卷三六六所載本がある。濱臣は享和元年より文化五年に亙り、數本を以て校合したけれども、雜下・十月・哀傷等に於て、なほ多くの脫落歌があり、八月・雜中・神祇の如きは、全部缺落してゐたのである。然るに橫山由淸の「月詣和歌集補」（一冊、大、安政五年刊）は、山川正份の藏した「月詣和歌集殘缺」（尾崎雅嘉自筆）及び淸水光房の校本によつて、濱臣の校本に缺けてゐた歌を雜下・十月・哀傷等に於て、百三十二首補つたものである。光房の校本は、初め文化十四年井辻尙鑑が賀茂季鷹本に依つて校合し、文政二年校本を賀茂の松田直兄に送り、賀茂淸茂藏本に依つて校合せしめ、天保八年山田市郎右衞門儀兵衞永隆は、この本に更に前記淸茂校本にて再校を加へ、最後に天保十二年淸水光房が永隆本にて校合したものである。類從本は前記井辻尙鑑本に依つてゐるが、濱臣の校本と由淸の補遺とを加へたものに等しい。【內容】假名序・眞名序があり、全卷を正月より十二月までに分ち、これに賀・別・羇旅・戀（上・中・下）・雜（上・中・下）・哀傷・神祇・釋敎の十二を配し、卷一は正月附賀、卷二は二月附別の如くなつてゐる。十二月に分けたのは月詣に因んだものであらうし、賀以下十二部を分つたのは十二律に法つたものと考へられる。歌の數は序に千二百首とあるが、現存本は千七十六首ある。脫落の主なる原因は寫本の磨滅である。作者の總數は二百八十九人、內僧八十一人、女四十五人。歌の多い作者は、俊成（二十七首）、俊惠（二十五首）であるが、この二人は、當時の歌壇に對立した二歌仙である。次に撰者重保（二十一首）が多いが、賴盛法師（九首）は少い。西行（十七首）・實定・顯昭・顯輔（各十六首）がこれに次ぐ。女流は振はず、小侍從（十一首）・大輔（十首）が主なるものである。作者の大部分は現存の人々で、前時代の人を少數加へ、別雷社歌合の作者六十人は大部分加へられてゐる。賀茂氏の歌人が十八人あるのは目につく。【批評】「千載集」と前後して成立してゐるけれども、「千載集」の如く藝術的傾向は認められない。歌は槪して平凡で月並である點に、「詞花集」や「後葉集」（各別項）に近いところがある。選に於ては公平を期したであらうが、全體的な統一や主張を出すことには力が及ばなかつたであらう。重保は和歌を以て神冥に感應することができると考へたのであるが、併しそれは單に行事的な考へであつて、未だ文學と信仰との合一とまでは行かなかつたと考へられる。隨つて本集が當時の思潮の中心に觸れてゐなかつたことが考へられる。濱臣は本集の平明な點を喜んだらしく、「此集と續詞花千載の二集とは大方似たる調べながら、中に此集のすぐれたるやうに覺ゆるは我心を入れて朝夕ものしたる心の引く方にやあらむ」といつてゐる。（西下）

【參考】校註月詣集附考淸水濱臣（校本の附錄）

憑き物（つきもの）「放浪」を見よ。

月讀命（つきよみのみこと）「天照大御神」を見よ。

筑紫系神話（つくしけいしんわ）　神話【解說】九州、殊にその南部に占據した隼族が有した說話群を意味する。それ等の諸族のうちで、隼人族が最も著しく活動した。從つて筑紫系神話は、その隼族の神話を一つの中心となしてゐる。筑紫系神話は、海洋神の崇拜及びこれに關する說話が重心をなしてゐることを、その特色の第一とする。山幸彥・海幸彥の物語、豐玉姬の物語等は、明かにこれを證示する。更に南支那・印度支那・南洋方面の土俗・信仰・說話と密接な關係を有してゐることを、その特色の第二とする。隼人族は九州に於ける一の海邊部族であり、そして人種的には南方的であるらしい。筑紫系神話が、海洋的要素と南方的要素に富む主因は、そこに存するらしい。そして後代文化期に於て、高天原系神話（別項）に包攝せらるるに及んでも、獨殊の要素を殘留して、我が國の神話系體を多彩ならしめてゐる。（松村）

筑紫箏（つくしごと）「箏」を見よ。

筑波會（つくばくわい）　俳團【解說】明治二十七年佐々醒雪・大野洒竹・水野酔香・笹川臨風等の東京帝國大學一派の人々に依つて組織された俳團で、この一派を筑波會派或は大學派と稱する。當時一方に日本派・秋聲會派（各別項）があつたが、日本派の如く專門的に俳句道に精進するといふ風ではなく、言はば俳諧の硏究或は學問の餘技として樂しむといふ風で、後、洒竹逝き、醒雪逝き、又最も熱心で俳誌「俳味」（別項）を發行したりした理曹が、晩年社會風敎方面に趨つてから、俳團も自然消滅の形となつた。從つて同派の存在は、作句の方面よりも寧ろ學的方面に於ける貢獻に意義を求むべきである。筑波會に屬した前後の人々には、國府犀東・桐生悠々・田岡嶺雲・久保天隨・大町桂月・沼波瓊音・宮島五丈原・若月紫蘭・中內蝶二・戶澤姑射・小島烏水・小日向是因・須賀茄村・廣津光僧等がある。（伊藤）

筑波子家集（つくばこかしふ）　歌文集　一卷【作者】近藤茂子【編者】淸水濱臣【刊本】古刊本はない。縣居遺稿第三集中に採擇されたものが傳はつてゐる。江戶文學（東京帝大圖書館藏）・續日本歌學全書・國文講義（同文社）・婦人文庫・女流文學全集・國歌大系等に收載【內容】短歌百六十八首を四季・戀・雜・物名に分類し、その他に二首の長歌と、「東麿うしの祭を賀茂の翁の家にてし給ふをり」と題された一文を添ふ。【歌風】作者は縣居門三才女（外に鈴野子、倭文子）の一人で、淺野家から土岐家に嫁したけれど、やがて夫に死別した。眞淵に愛されて、「筑波山は山しげ山」の古歌にちなみ、しげい子の外に筑波子と云ふ名を貰つたのだと云ふ。濱臣の序によれば、眞淵は彼女の歌調を天暦の女房の口つきであると推賞した由で、今本書に傳へられた作も、その意味から眞淵が合點したものだけであるらしい。從つてすべて變化に乏しいと云ふ嫌ひがある。謂はゆる天暦調とも云ふべき實の歌が甚だ多い。

何となく心ぞ春になりにける霞みもあへぬ空を見つゝも

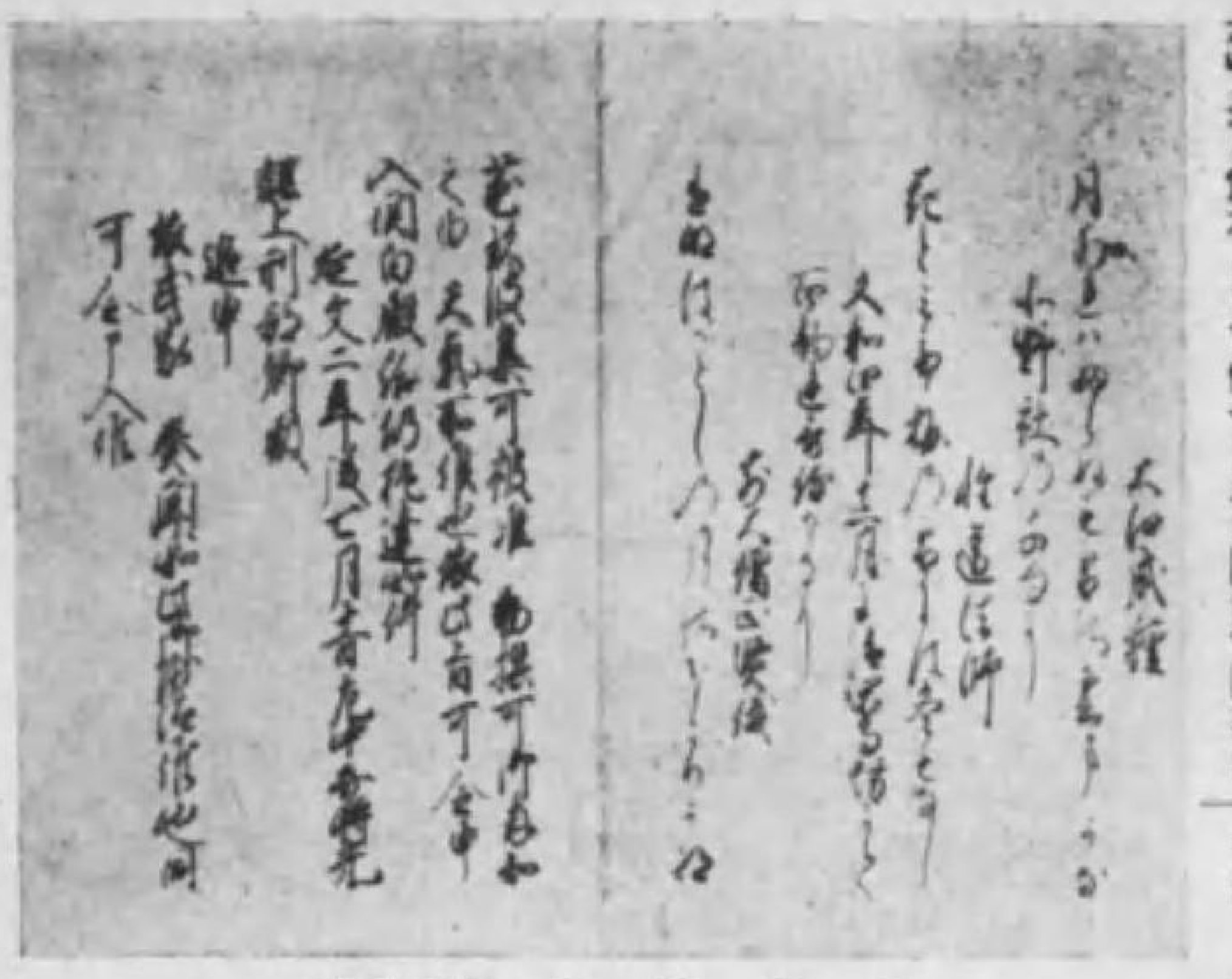
しぐれつゝ淺み色づく鳩鳥の葛飾野べに冬は來にけり

次の諸例の如く、淡泊無味の中に趣あるのがその特色の一つとなつてゐる。

見わたせば涼しかりけり浦風にゆくへをまかす海士の釣舟

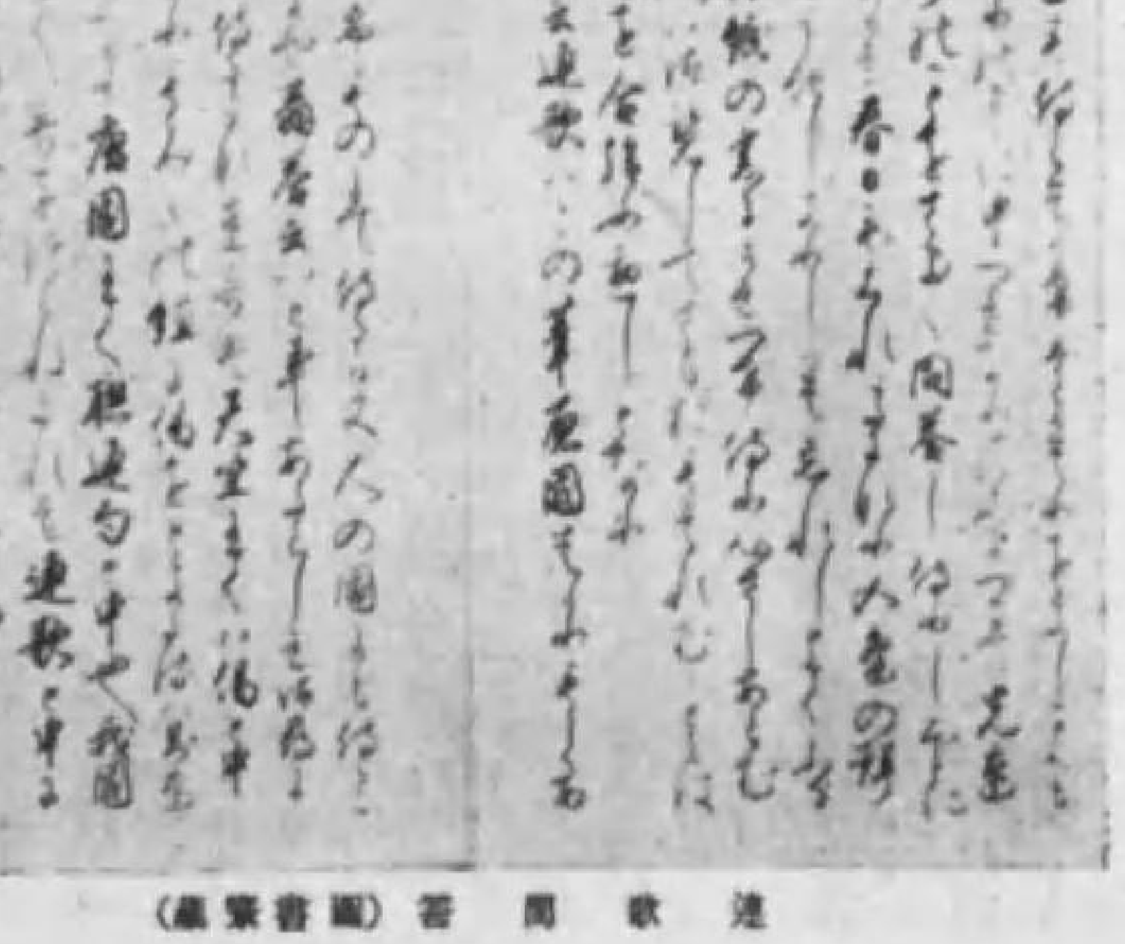
のどかなる都の程ぞ知られぬる行きかふ人の袖のさまにも　（齋藤（清））

菟玖波集（つくばしふ）　連歌集（准勅撰集）　二十卷【撰者】二條良基が救濟法師と共に撰集したものであるが、救濟が主として事に當つたのであらう。【成立】文和五年三月【諸本】長く寫本として傳へられた關係で諸本が多く、内閣文庫本・圖書寮本・學習院本・岩瀨文庫本・北野本・神宮文庫本等があり、その他個人傳來のものが少くない。この中、學習院本は連歌師阪昌文の寫で、里村家等の諸本を以てよく校合してある。古典書文庫第一・二冊に收む。【内容】「古今集」に兩序のあるに倣つて和漢の兩序があつて、假名序は二條良基、眞名序は近衞右府（近衞道嗣と傳へられる）である。部立を四季・神祇・釋敎・戀・雜・羇旅・賀・雜體・發句に分ち、上代より當代に至るまでの附句發句二千百七十九句を收めてある。併し發句は第二十卷一卷のみで、他はすべて附句である。作者は五百三十人に上り、古くは日本武尊からあるが、鎌倉期以前の人は四十人許で、その作の數も少い。作の最も多いのは救濟の百十八句で、次いでは良基の七十九句である。【價値】武家の奏聞によつて延文二年勅撰集に准ぜられた。古來の連歌を蒐集してあるからその變遷を窺ひ得る。採つてあるものは、附句は初めからの二句連歌（短連歌）と長連歌中の一節を二句拔いたものとであるが、その詞書によつて百韻・千句・萬句等、或は種種の賦物（ふしもの）（別項）、連歌の一節であることの知られるものも少くないので、これ等によつて、いつの頃如何なる人によつて、如何なる連歌が行はれたかといふことを窺ふことが出來る。また本集によつて連歌の地位の高められたことは甚だ大で、新しい作家のこれによつて勵まされたことも少くはなく、又本集が第一撰集となつて、第二撰集「新撰菟玖波集」（別項）が撰集されるにも至つてゐる。本集の序文によつて良基等の連歌觀も窺ひ得る。（龜井・志田）


菟玖波集（圖書寮藏）

菟玖波之栞（つくばのしをり）　連歌書　一卷【著者】渡邊寧【成立】文化十三年【解說】連歌の次第、歌と連歌、附様の八體、賦物（ふしもの）・發句・十八の切字、面八句の立様、三種の脇附、會席の法度等を說いたもので、自跋がある。【著者小傳】寧は上野東照宮の社家、掃部來君の子である。安永七年家督を繼ぎ、出雲守と稱し、合歡園といひ、樂山と號した。久しく病氣のため隱居したが、後癒えてから再勤し、文政八年再び隱居した。（龜井）

筑波問答（つくばもんだふ）　連歌書　一卷【著者】二條良基【名義】連歌は日本武尊の新治（にひばり）筑波の問答歌に起るといふ說によつて、古くからこれを筑波の道と云ひ來つてゐるので、連歌に關する問答の義で名づけたのである。【成立】應安年間か。【諸本】圖書寮には「連歌問答」と題した古寫本があり、神宮文庫にも古寫の一本がある。群書類從連歌部にも收む。【内容】初めに序說に當る文があつて、これに常陸の筑波あたりから出て來た老翁が良基の館を訪ねたので、連歌について問答することになつた由が述べられてゐて、問者は良基、答者は老翁といふ形になつてゐる。かくてその問答に於て連歌の名義・起原・沿革、その效果、百韻・千句の運び方、發句・脇句の仕様、稽古の要訣、斯道に對する學書、上古體・中古體・近來體の三體（作例を擧ぐ）、その他の諸體、式目撰定の由來、賦物・連歌の性質、會席・執筆（しゆひつ）の作方等が十七項に分つて述べられてゐる。【價値】連歌の學書として組織立てて說いてあり、儒敎・佛敎の思想によつて連歌の效果を述べ、當時の他の藝術と同じく幽玄の境を理想とし、社會的には連歌を和歌と對等又はそれ以上の地位に引上げ、百韻について序・破・急のうつり方を說き、作句の要旨を示し、會衆・會席の掟を定めるなど、良基の連歌に對する史觀及び連歌觀、その連歌觀の根柢をなす思想、連歌の當時の社會に於ける地位及び連歌作法の要諦とされたもの等を窺ふ事が出來る。概括して云へば、本書は史論的連歌論書と云ふべきものであると共に、纏まつた連歌論書の嚆矢と云ふべきものであり、その論の透徹してゐる點に於てすぐれたもので、後世の連歌論の準據となり、連歌道の建設に與つて力あつたものである。（龜井・志田）


連歌問答（圖書寮藏）

付喪神（つくもがみ）　繪詞　二卷【別名】「付喪神記」、又は「付喪神緣起繪」。「近古小說解題」には、原名（？）「非情草木成佛」。「三條西實隆公記」明應六年十月十五日の條の、「内外萬物緣起」と云ふのも、この繪卷の事かと疑つてある。なほ、「今鏡」の一名を「つくもがみの物語」と呼ばれてゐるが、それとは全然別種のものである。【成立】土佐光信筆に似てゐるから、畫風からすれば室町時代。平出氏は原本の成立年代を、院政時代乃至鎌倉時代の初期と觀ようとしてゐる。鳥羽僧正覺、僧成賢詞の繪卷「非情草木成佛」に似て、畫も詞も少いとは「好古小錄」の云ふ所であるが、古川躬行・黑川眞頼は一物二名と云ひ、平出氏は「非情草木成佛」の增補が、「付喪神」であらうと推測してゐる。作者は不明であるが、密敎の人の手に成つてゐる事だけは確かである。【諸本】美濃國岐阜崇福寺藏本は、攝播東寺交輪院傳來「非情草木成佛」（大僧持名書題には付喪神記）、卷尾に「左大史小槻宿禰書寫」（一說には眞言宗東大寺傳燈大法師任賢）とある。室町時代小說集所收のものは、圖書寮傳領の二卷本を寬文六年に寫したものである。刊本としては、右の外、日本文學大系第十九卷にも收めてある。【題材】寓話、異類物、緣起物。百鬼夜行圖等にも描かれてゐるやうな、器物の妖怪に關する說話であるが、謠曲等に强調されてゐる草木國土悉皆成佛の旨趣を說かうとした宗敎色の濃厚なものである。本書卷頭に「陰陽雜記云、器物百年を經て化して精靈を得てより人の心を誑かす。これを付喪神と號すといへり」とあるので、付喪神の意味は明かであり、後世の百物語式妖怪の古い形とも云ふべきものであるが（泣不動緣起に、安倍晴明が付喪神を祭つて僧知空の病を證空に移して癒す事があり、「化物草子」（別項）にも器怪說話が含まれてゐる）、「付喪神」の名だけは「伊勢物語」の「百年に一年足らぬ九十九髮」の歌詞から來てゐる事は、本文からも疑なく推定される。又、本文中尊勝陀羅尼の功德で化物が退散するのは、「大鏡」の九條師輔が百鬼夜行に逢ふ條が本據であらう。【梗概】康保の頃、煤拂で洛中洛外の家々から路傍に捨てられた不用の古道具類が、舊主の人間を恨み集合して各々妖怪となり仇を報じようと議した。數珠の入道一連は因果の理を說いて、仇を恩で報ぜよと勸めたが、手棒の箒太郎が怒つて打擲して追立てた。殘つた者共は古文先生の意見に從ひ、節分の夜各々身を虛無にして造化神の手に從ひ、忽ち千種萬樣の妖物となり、舟岡山のうしろ長坂の奧を根據とし、京白河へ出ては人間に仇をして歡樂に耽つた。或る時妖物等は造化神を氏神に祭る事を思ひ立ち、變化大明神と號して祭典を行ひ神輿を作り、卯月五日山車や鉾の行列を立てて一條通を東へ練つて行くと、臨時の除目のため參內の途の關白殿下に出逢つた。供人の驚いて狼狽する中に、關白は騷がず化生を睨むと懐の御守から火炎を發して覆ひ掛つたので、妖物等は度を失つて逃げ散つた。これはその守が某僧正の書いた尊勝陀羅尼だつた爲めと云ふ事が分つて、主上はその僧正を召して、清涼殿で如法尊勝大法を行はしめられると、護法童子が現れ化生の城へ飛び移つて、これを降伏した。悔悟した怪物等は、去年の冬から山深く隱遁してゐる一連上人の柴の庵を叩いて弟子となり、精進修行して佛果を得た。【附記】曲亭馬琴作「昔語質屋庫」（別項）の構想は、本書に多少の示唆を得てゐるのではないかと思はれる節がある。同書の見臺先生も本書の古文先生の變身ではなからうか。【參考】好古小錄上藤貞幹（畫賛）〇訂正增補考古畫譜卷八・九〇近古小說解題〇室町時代小說集解題（島津）

附合（つけあひ）　連歌・俳諧【解說】連歌・俳諧に於て句を附け合ふことをいふ。この場合先に出される句を前句（まへく）といひ、これに附ける句を附句（つけく）といふ。前句は五七五の長句、七七の短句いづれでも先に出された句が前句で、前句が長句なれば附句は短句を附け、前句が短句なれば附句は長句を附ける。然るに附句は連歌以來、和歌の上句下句とは異なつて、前句に不卽不離のさまに附けるを要とする（比興集）。これに二つの場合がある。（一）は二句連歌（短連歌）の場合で（俳諧に於ても同樣）、この場合は、その一句を片句（長短何れの方でも）といひ、その片句に附ける場合であり、（二）は長連歌（長篇俳諧に於ても同樣）中に於て前句に附ける場合である。片句に附ける場合は、指合（さしあひ）（別項）・去嫌（さりきらひ）等の關係がないから、前句の心も詞もいたはつて、その前句の意を引き起し、或は引きかへなどして附ける。例へば「いづくの山にかくれ住むらむ」といふ前句に、「卯の花の散れども鳴かぬ郭公」と附けたのは、人の事を鳥に引きかへた類である。この場合、附句を一句以上附け試みることも出來る。宗祇が既に「人の心のかはる世の中」といふ片句に、百句附けを試み、これが「宗祇法師前句附」（別項）といふ名で殘つてゐる。又里村昌純の「老の周諍」の如きも、「思ひ出づるは昔なりけり」といふ片句に、「岩戸あけしけしきぞ見する今日の春」、又「誰がひきし小松や高くなりぬらむ」、又「鶯子と我なめそめし春もありて」、又「古里もかはらぬ色に梅咲きて」の如く百句附けを試みてゐる。これを一句百句附といふ。俳諧に於ても「犬筑波」（別項）に一句に多數附けたものがあり、貞門（別項）の俳諧に於ても一句に多數の句を附けた例がいくらもある。長連歌・長篇俳諧中の前句に附ける場合は、式目（別項）の規定上その前句許りでなく、その前々句を顧慮する必要があつて、片句に附ける場合とは異なつた注意を要する。式目に於ける句數の規定上、春・秋・戀の句は三句までは連接せしめねばならず、又前々句との打越（うちこし）・輪廻（りんね）等の指合（別項）・去嫌を考慮して附ける必要がある。隨つて前の場合よりは前句に對する關係が複雜になつて來る。【種類】附合には、前句に附ける附方とか方法とかによつて種々の種類がある。前句の意を取つて附ける附方を「心附」（こゝろづけ）といふ。例へば「海山の心にうかぶ寢覺して」に「はぐくみ立てし父母のあと」と附けた如きは心附であつて、旅路の寢覺に過ぎて來た海山が心頭に映ずると共に、海嶽も及ばない兩親の高恩を思ひ寄せたものである。又前句の中の詞とか物とかに緣を持つものを寄合（よりあひ）といひ、この寄合を以て附ける附方を「寄合附」といひ、後には專ら「物附」（ものづけ）、又は「詞附」（ことばづけ）といふ。例へば、「きさらぎの別の鶴の林にて」に、「よるなく涙月ぞかすめる」と附けた如きは、釋尊入滅の鶴林の鶴といふ詞に、夜なくといふ寄合、別といふに涙、林といふに月霞むといふ寄合を以てしたものである。この「寄合附」には、前句に於けるすべてのものの寄合を附句に盛り込むことが不

可能なこともあるので、その場合は前句中の肝要なものに對する寄合を以て附ける。例へば、「柴の戸のあけぼのは猶かすみにて」に「ほどなき夢に捨つる世の中」を附けた如きは、曙に程なき夢と附け、柴の戸に捨つる世の中と附けて、霞には別にあしらひがない。これは曙・柴の戸の二つを肝要とし據り所としたもので、これを寄所と名づける。かくて結ぶといふ詞には草枕・夢・紐・霜・氷等の詞を附け、續るといふ詞には車・月日・時雨と附けるが如き附所詞といふものも自ら制約されて出來てゐる。又眼前の景物を取つて附けるのがあつて、例へば「草の庵柴の戸ぼそも住わびぬ」に、「松風ふきて花の散る頃」と附けた如きは景附であり、又古歌や本說（故事）などを以て附けるのがあつて、例へば、「秋風寒み夜の長きころ」に、「ひとりねは姨捨山の月なれや」と附けた如きは、「古今集」の「我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」の本歌によつたものであり、「問はれしは後の思出で」に「塚のこる生田の小野の草の原」と附けた如きは、「大和物語」の生田川に身を投げた故事によつたもので、かゝる類を本歌本說の附句と云ふ。この本歌本說は和歌の本歌取に倣つたもので、短い句に複雜な意義を包含させることを目的としたものである。但しこれに用ひる本歌本說は、人口に膾炙し多數の人々に了解せられてゐるものを用ひるのが效力が多く、且つ本歌を取り用ひるに、その詞句によることがあり、その儘によることがあり、本歌に言つてあることを反對に云ふことがあり、前句に本歌の心詞を幾分句はせてゐる場合は、附句に至つてこれを表はすなど種々の方法がある。又材料の上から附方に種々の方法がある。景氣を本とする句にも、山類に水邊を附けることがあり、これに反して水邊に山類を附けることがある。例へば、「煙たつ舘の里は木がくれて」に、「小舟すておく江こそ暮れぬれ」と附けた如きは前の例で、「柳かれたつ遠の川つら」に「山里にさし入淺く門ふりて」と附けた如きは後の例である。又草木に於て總名と種名との附方に於て、前句に總名があつて附句に種名を用ひるのは宜しく、これに反する場合は多くは不可とした。例へば、「咲きぬる花も色かはりゆく」に、「冬枯の小野の萩が枝霜ふりて」と附けた如きは、前句の花が附句の萩の花に取りはやされて面白く、これを「木に名木」を附け、「草に名草」を附けると言つてゐる。鳥獸に於てもこれと同じく總名に種名を附けるは宜しく、種名に總名を附けるを嫌つた。例へば「いかなる鳥ぞ雨に鳴く聲」に「夜な夜なの月につれなき時鳥」と附けた如きは、鳥に名鳥を附けた例で宜しく、これを反對にしたのは不可であるとした。

【體附・用附】物の用（作用）を述べた前句に、その用を起す體（本體）を附句としたのを體附といひ、これに反し體を述べた前句にその用たるべき詞句を附句としたのを用附といふ。例へば弓といふのは體で、引くとか返すとかはその用であるが、體に用を附けるのは唯說明の形であつて和歌に於けると異なる所がなく、これに反し用に體を附けるのは變化があつて面白いので、いつの頃よりか體附を喜んで用附を重んじないやうになつた。例へば、「殘る櫻にわかる夏山」に、「花さそふ風の道は絕えやらで」。「そことも知らず匂ふ薫物」に、「契おく人に心をこがし來て」の如きは、櫻に別れるといふので風の花を誘ふといひ、薫物とあるので焦し來てといふの用附で、これ等は元來は面白い句であるに拘はらず、物足らぬといふやうになつたのである。【附樣諸體】和歌に於て歌體を分つてゐることに影響されて、連歌の附合を風體に分つて組織立てることが早くから行はれてゐる。「筑波問答」（別項）には十五體に分つてあり、その後、或は四十體、四十八體、八十體に分ち、宗牧の「胸中抄」（別項）には、地連歌・作骨連歌・景氣連歌・取成連歌・本歌を取連歌の五種に分つてゐる。俳諧に於ても德元の「誹諧初學抄」（別項）には體附・とりなし附・心附の三體を擧げ、季吟の「埋木」（別項）には「三五記」の歌體の分類を取つて、大きく十體に分ち、これを細かく三十體に分つ分類を擧げ、やゝ降つて支考の「古今抄」には其人・其場・時分・時節・時宜・天相・觀相・面影の八體を定めた。かくて又江戸中期の連歌の方面に於て「菟玖波之栞」には、平附・四手附・風情附・詞附・違附・心附・對附・埋附の八體に分けてゐる（この中、平附・四手附・對附以外の五つは旣に室町期の「白髮集」に見え、四手附は「白髮集」以前から見えるものである）。【附樣三變】連歌時代に於ける附樣（附肌とも附味ともいふ）を時代的に見ると、大體から云つて、吉野朝時代以前は詞附であり、吉野朝時代に心附の傾向となり、室町期中期宗祇（別項）頃には、心附ながらに不即不離の傾向が著しくなつた。俳諧時代に入つては、貞門までは詞附で、談林（別項）に至つて心附の傾向となり、蕉風に於ては不即不離の匂附となり（蕉風參照）、爾來匂附を理想としつつ十分匂附たることを得ない如き狀態で進んだ。以上の如く、連歌・俳諧に於て頗る相似た三變の變遷が見られる。（潁原・志田）

附合小鏡（つけあひこかがみ）　俳諧作法書　小本一冊【著者】雪中庵蓼太（卷頭に「雪中庵蓼太編、門人牛家著」とあるが、それはただ牛家が筆記したといふにとゞまる）【本名】俳諧附合小鏡【刊行】安永四年、江戸西村源六板。【諸本】蓼太全集（俳諧文庫）・付合作法全集（俳諧文庫）・俳論作法集（俳諧叢書）所收。【內容】附合の作法を、初心者のために成るべく平易明快に敎へようとしたもので、或は煙草盆の句によつて附句の變化を說き、或は戀の上中下の例を出して曉らせ、或は執中の法を示して案じ方を論すなど、凡て具體的通俗的に說明してある。かくて極めて巧妙に附合の神髓を會得させるやうに出來てゐて、蓼太がかうした方面に勝れた手腕をもつてゐた事が分る。これはやがて彼が多くの門人を擁し得た一原因でもあつたらう。なほ卷末に社中及び諸名家の連句發句が附載してある。（潁原）

附合てびき蔓（つけあひてびきづる）　俳論書　小本一冊【著者】高井几董【刊行】天明六年十一月の跋がある。京、汲古堂【諸本】附合作法全集（俳諧文庫）・中興俳諧文集（俳書大系）所收【解說】附句の作法心得を說いたもので、先づ附合に關する古來の名目を擧げて私說を附し、脇・第三の附け方から、一般に附句の案じ方を、一々實例によつて丁寧親切に說いてある。而してその實例として擧げたものは、著者と蕪村との兩吟「桃李」（別項）から抄出したので、以て几董の俳論を窺ふだけでなく、蕪村一派の連句の傾向をも知ることが出來る。言はば「桃李」の評註とも見らるべきもので、特にその說明に、必ず三句のうつりを顧慮してゐる如きは、几董の着目の凡でない事が窺はれる。（潁原）

辻淨瑠璃（つじじやうるり）　小說【作者】幸田露伴【發表】明治二十四年の春から夏へかけて國會新聞に連載【刊行】明治二十四年十月「新葉末集」（春陽堂）・露伴全集第一卷・現代日本文學全集（幸田露伴集）所收。

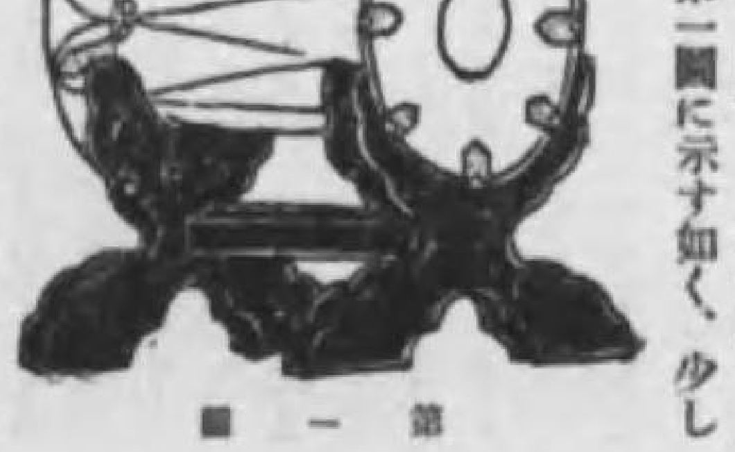
【梗概】德川の中期末、西村虎吉といふ京都の釜師の家は、累代の名家だが、虎吉は父の殁後母の手一つで育てられ、その美貌と才氣とに心傲つて遊蕩に耽り、自慢の淨瑠璃が女に持てはやさるゝので愈々興を覺え、遊びが過ぎると共に、名代の釜師の家業も次第に衰へて行つた。母は心配してお道といふ嫁を取らせ子まで出來たが、それにも飽きて以前の遊蕩生活に歸つた。妻はこれを苦にして到頭世を去り、後に殘つた老母は孫を抱へて途方に暮れた。流石の虎吉も少し目が醒めかけたが、「若い時は短い、思ふ存分遊べ」と放埒を說くした果ては、京にゐたたまらなくなり、老母と愛兒を殘して江戸へ出かけた。途中淨瑠璃を唸つて僅かの金を貰ひ、辛くも江戸に着いたが、廣い都に一人の知己もないので、久保町の原へ出て、毎日辻淨瑠璃を語つてその日を送つてゐるうち、毛利讃岐守の隱居にその藝を見出され、座右に侍する事となつた。かうして生活の安定を得た彼は、京都から老母と愛兒とを迎へ、初めて一家團欒の樂しみを味つた。爾來虎吉はその藝と才氣とを以て諸侯に愛せられ、安樂な日を送る身となつた。

【批評】虎吉は、露伴が好んで書く人物の一人で、我執の强い、人を人とも思はぬ面魂を持つてゐた。放蕩を始めたら最後、人がなんと言はうが徹底しなくては承知しない。旅中乞食同樣になり下つて、淨瑠璃で僅かに口を糊してさへも、「青天井に土間、戸障子なしの大世界、御見物は天下の人々」と豪語して昔の意氣を失はぬ。さうした彼の面目がよく描かれてゐる。それにしては結末が餘りに平凡で、且つ彼の周圍の人物のあまりに陰翳として傀儡同樣であるのが慊らぬ。この續編として書かれた作品に、「寢耳鐵砲」（明治二十四年夏）がある。これと合せ讀むと、「辻淨瑠璃」の平凡な結末が、必ずしも平凡でない展開をなすための前提だつたことがわかる。「寢耳鐵砲」は虎吉改め道也が、島津公から鐵砲鑄造を賴まれ、これに成功してその用達となり、相當の富を作る。やがて花柳の巷に踏み入つて遊女お萬と戀に落ち、朱陵の佐藤の娘お柳とも愛し合つて結婚した上、故鄕に錦を飾る。その際、昔彼を惡口した釜師たちが、ひとしく彼に媚びる中に、唯ひとり、大西の淨味のみ藝術家氣質を守つて道也に屈服しなかつた。といふところで終つてゐる。これまで理想主義であつた露伴が、茲に至ると、漸く寫實的傾向を帶び、「五重塔」（別項）を生むに至つた徑路がほぼわかる。ただ道也とお萬及びお柳の關係が、紅葉ほど巧みに描かれてゐないのは物足らぬ。（高須）

對馬音（つしまおん）　「字音」を見よ。

續の原（つゞきのはら）　俳諧集　一冊【編者】岡村不卜【名義】編者自身の「向の岡」（延寶八年刊）の續集として企てたものであるので、かく題したのである。【刊行】貞享五年。同年三月の不卜の自序がある。【諸本】古來原本は稀で多くは寫本で傳はつて來た。文政二年九月の再版本は、米澤の人、山崎鵬峯の祕藏した原本を、稚嶺・柳々の出版したもので、曉花の跋にその旨が述べられてゐる。この再版本には別に「新つゞきの原」二冊が附された。文政十年の「俳諧新七部集」には、「新つゞきの原」及び跋を除いて收め、「談林俳諧集」（俳書大系）には、「新つゞきの原」を除き跋を附して收めてある。又本集から芭蕉判の、冬の句合の部分だけを拔出して收めたものには、闌更の「俳諧蕉葉考」（明和八年刊）を初め、蕉門七書・芭蕉翁七部餘錄・芭蕉翁俳諧四部錄・俳諧一葉集・俳諧袖珍抄及び諸種の芭蕉全集に收められてあり、又四季の句合の部分全部は俳諧文庫・俳諧句合集に收められてゐる。【內容】不卜が貞享四年の冬に四季各十二番の句合を四卷それぞれ別の判者に判させたもので、春は素堂、夏は調和、秋は湖春、冬は桃青が判者となつてゐる（秋の句合のみは十一番ある）。作者には不卜も加はつてゐて貞門談林の人もないではないが、多くは蕉門の人々である。これに歌仙五卷（調和・不卜等六吟一、才麿・挙白等五吟一、蚊山・不角等七吟一、其角・峽水等六吟一、追加として不卜・嵐雪・其角三吟一）と四季の發句百五十八句とを添へて、貞享五年に出版したのである。なほ五歌仙に於て注意を惹くのは、五卷の發句が順に柳・櫻・柳・櫻と來て五卷目の發句が櫻と柳とを詠み込んだものになつてゐることである。發句の部の作者も、句合に於ける如く蕉門の人々が多く、芭蕉の句も四句加はつてゐる。【價値】談林調であつた「向の岡」の續集であり、作者に貞門談林の人もあるに拘はらず、本集全體の調子は蕉風調になつてゐる。貞門談林が時代的に變化し、或る人々は特に蕉風化してゐる推移を窺はしめる。本集はこの點に於て先づ注意せらるべきものである。從つて又本集は蕉風を究めるにも除外し難く、特に冬の句合の芭蕉の判は、芭蕉を知るに見逃し難いものである。判そのものが芭蕉の正風眼が如何に高くなつたかを知らしめ、判詞の中の「細くからびて」は芭蕉の所謂細みに通じ、「滑稽の誠」は俳諧の誠の義である如き、その俳諧觀の愈々確立し來るを見る。又その跋（貞享四年冬）に於て、不卜のことを云つて「風雅の奴」と云つてゐるのも、翌年執筆の「吉野紀行」に云ひ出す風雅觀の前提をなす語である。かく本集は時代的に重要な意義を持つ一集である。（志田）

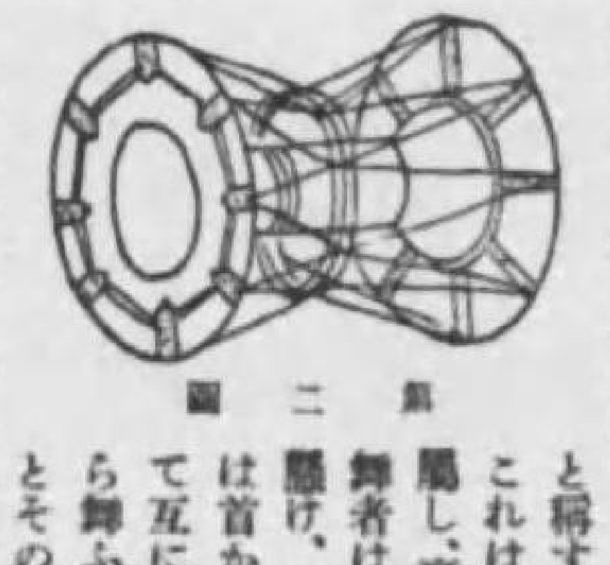
鼓（つゞみ）　樂器【名稱】都々美・都豆美・豆々美・都發等とも書す。一說に梵語 Dudubhi, Dundubhi から來たとも稱せられる。【解說】胴の兩面に革を當て、これを手又は他のもので打つて鳴らす打樂器の種類の總名。【種類】その形狀及び用法の如何により多くの種類がある。卽ち羯鼓・壹ノ鼓・二ノ鼓・三ノ鼓・四ノ鼓・腰鼓・揩鼓・鷄婁鼓・鼗・大鼓・小鼓・田鼓等。【羯鼓】羯鼓は雅樂の左方樂（唐樂・林邑樂等）にて主として用ひられるが、その變形したものが伎樂や田樂に於て用ひられ、それを胸に帶びて踊るものに羯鼓踊と稱するものがある。雅樂で用ひる羯鼓は第一圖に示す如く、少しく中の太くなつた圓筒形の筒の兩面に革面を當て、これを臺上にのせたものであつて、筒の長さ約一尺、端徑五寸、中央の膨らんだ所で徑五寸六七分。胴は欅或は唐木（最上とす）で作り、金地又は他の色で彩色を施し、時として蒔繪などをする。革面の徑凡そ七寸七八



第一圖

分、周圍は鐵輪を心としてあり、これに革を綴うて張り、糊で附け、これに孔をあけ紐を通す。その部分に韋を以て作つた所の觚形の錦皮を張る。その數八個ある。凡て臺は黒漆で塗り、その周に朱塗の限を飾す。桴は二本を用ひ、その長さ一尺二寸、太さ下方にて圓周一寸三分許ある。鞨鼓は、雅樂に於ては太鼓・鉦鼓（別項）と合はせて用ひ、これを三鼓と呼ぶ。三鼓中で鞨鼓を最も重きものとして、通常最長者がこれを司る。御遊舞樂には必ず一老の役として上座に置く。但し左方の樂のみに用ひ、右方樂にはこれを用ひない。その打ち方は、左右の手に桴を持ち、その革面を撫でるやうに打つ。鞨鼓はもと羯に起り、古く支那に入つたと稱せられる。兩手に杖を持つて打つから兩杖鼓とも稱せられた。唐に至つて大に盛行し、玄宗皇帝はこれを能くせられ、汝南王璡に自らこれを傳授されたといふ。我が國へ傳はつたのは奈良朝の頃と思しく、西大寺資財帳には、その名が載つてゐるが、光仁天皇の寶龜九年には、壬生驛麻呂が、鞨鼓八聲（阿禮聲・阿禮短聲・大揚聲・璫聲・沙聲・鐵錦聲・泉郎聲・小揚聲）を定めたと言はれてゐる。平安朝に入つては、多くの樂家がその譜を著はして用法を論じてゐる。

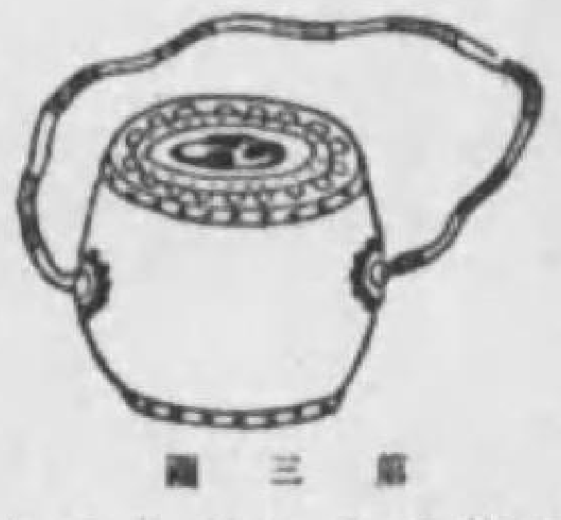
〔壹ノ鼓・二ノ鼓・三ノ鼓・四ノ鼓〕　この四つは總稱して細腰鼓といひ、皆大體同じやうな制になつてゐて、その大きさを異にし、壹ノ鼓が最も小さく、漸次大きくなつて、四ノ鼓が最も大きい。併しその中で、二ノ鼓と四ノ鼓とは古くその傳を失して、今はただ壹ノ鼓と三ノ鼓とだけが殘つてゐる。共に雅樂に於て用ひられるが、壹ノ鼓は極めて稀で、三ノ鼓は主として高麗樂、卽ち右方樂に用ひられる。壹ノ鼓は第二圖に示す如く、中部の細くなつた木の筒の兩端に革面を當てたもので、革面の徑八寸許、筒長一尺二寸、筒口徑五寸三分許、革の表裏に白粉を施し、鞨鼓に似て調穴八個あり、韋劍形を以て飾り、調緒を用ひて兩革面を緊めてある。桴は長さ一尺許の棒を用ひ、黒漆が塗つてある。林邑樂に用ひられるが、又「壹ノ鼓」と稱する舞樂がある。これは左舞で、平調に屬し、裹頭樂を吹いて、舞者は首から壹ノ鼓を懸け、他の一人の舞者は首から二ノ鼓を懸けて互にこれを打ちながら舞ふ。二ノ鼓は壹ノ鼓とその制同じく、少し



第二圖

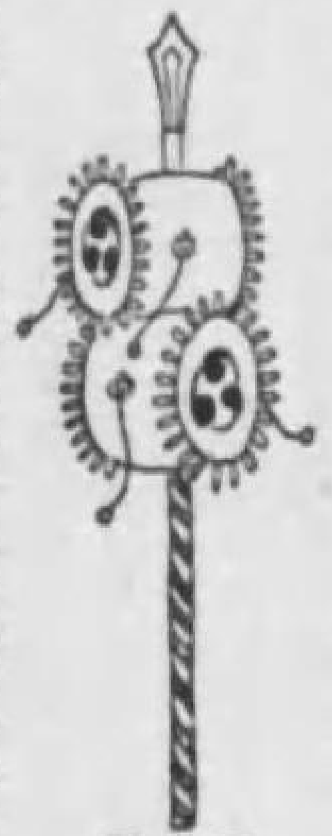
く大であつて、革面の徑九寸八分許、筒長一尺四寸許、筒口徑七寸二分許であるといふ。三ノ鼓は一に呉鼓といひ、その制壹ノ鼓と同じく、革面徑一尺四寸許、筒長一尺五寸、筒口徑七寸二分許、調緒は黄糸を用ひ、桴は白木である。これは主として右方樂に用ひ、鞨鼓の代用とする。三ノ鼓の譜には帝の字を用ひ、これをテイと稱へる。これ等は極めて古く胡國より支那及び朝鮮に入り、我が國へも既に上世に傳はつたものと思はれる。樂家錄には「本邦樂書に曰く、壹鼓は本と胡國の器なり。彼國天子祭神の時之を擊ち、以て太平を唱ふ。故に今古蹟參音聲等に之を用ふ。古樂の具となす。云々」とある。三ノ鼓は推古天皇二十年に、百濟人味摩之が歸化して伎樂を傳へた時に、これを傳へたものと稱されてゐる。

〔鷄婁鼓〕　その制は太鼓に似てゐて、第三圖に示す如く、筒長六寸許、その口徑六寸、中央は少しく膨らんで徑七寸許、兩端面に革を張り、鐵釘をもつて胴に固く着けてある。革面には銀地に黒彩を施し、筒面は金地に彩色を施してある。筒の左右に環が附いてゐて、これを頸に懸けて打つ。桴は鞨鼓の桴と同じもの一本を用ひる。「河南浦」には舞者の一人がこれを打つて出る。支那の唐代新樂の器であると稱せられる。一說には唐朝に鷄を報ずるために用ひたので鷄婁といふとある。



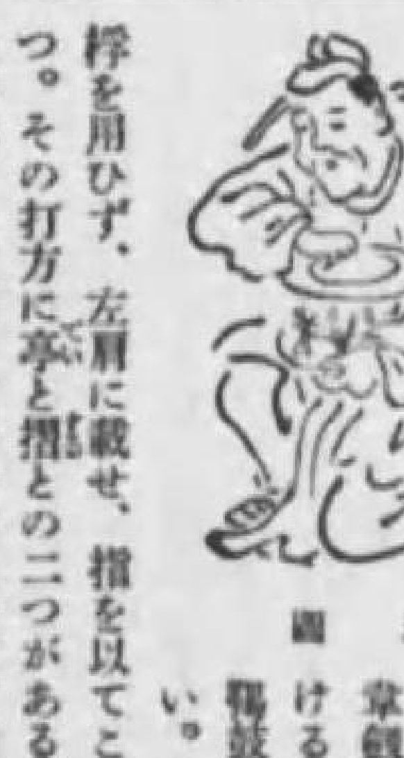
第三圖

〔鼗〕　俗に田々太鼓といふ。支那に於て、古く周の頃より存すると稱せられる。その雅樂に用ひられるものは、第四圖に示す如く小さな鼓二個の革面を互に直角の向に重ねて、その筒を長い一本の棒で貫き、兩鼓の筒の側面に各々耳環を二個附け、それより細長い糸を垂れ、その端に小さな珠を附け、棒を以てこれを左右に振り廻はせば、その糸端の小珠が革面に當つてガラ〲と音を發する如くになしたものである。支那及び朝鮮には大きなものが行はれ、特に朝鮮李王家の雅樂にては、その長さ人身に比すべきものがあるが、我が國雅樂に用ひるものは小さく、革面徑二寸五分許、筒長三寸五分許、柄長一尺八寸許、その鼓上に出づること三寸許、その柄頭は尖つて八角になり、金を以てこれを包む。筒の左右に垂れた糸の長さ二寸許。革面は銀地に黒彩を施し、筒も柄も唐木を以て作る。普通に鼗は鷄婁と共に、一人でこれを用ひることになつてゐる。支那及び朝鮮では別に一人があつてこれを用ひる。鼗は太鼓の左桴に合はせてこれを振り、また太鼓の右桴に合はせて鷄婁鼓を打つ。これは舞人が行列參向の時にこれを行ひ、又「一曲」を奏する時に用ひるのである。この「一曲」は、道樂の中に於て舞ふのであつて諸大寺の法會などに主として行はれる。



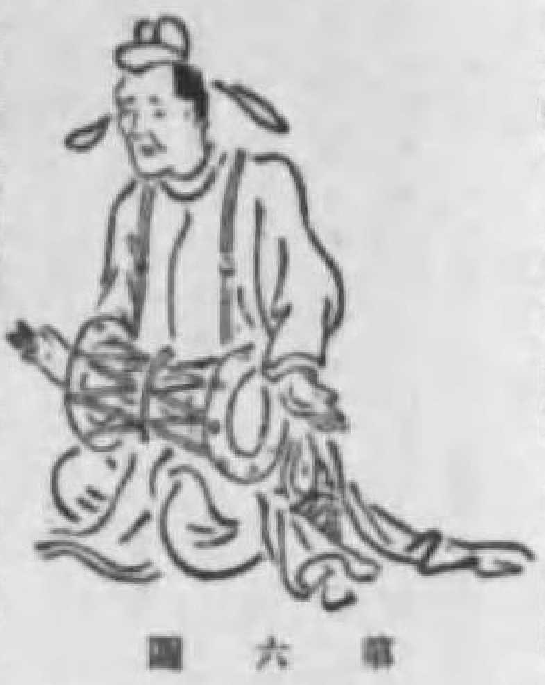
第四圖

〔揩鼓〕　扁平な鼓で、第五圖に示す如く、革面徑一尺二寸許、筒長六寸許、筒口徑九寸許、革の表裏に白粉を施し、調穴八つあり、これに韋劍形を着けることは鞨鼓に同じい。これは桴を用ひず、左肩に載せ、指を以てこれを打つ。その打方に亭と搯との二つがある。亭とは中指を以て革を打つのであつて、搯とは三指を以てこれを搯り撫でるのである。搯を一にムといふ。「文獻通考」に曰く「揩鼓、制同二鞨鼓一而短、以レ指揩レ之、其聲甚震、俗謂二之揩鼓一云々」と。これは西域より支那に入つたものらしい。



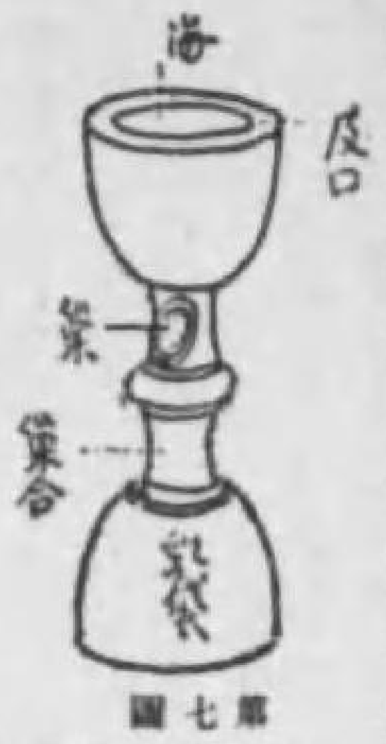
第五圖

〔腰鼓〕　三ノ鼓と同制のものを、紐を以て頸より懸け、腰の邊に吊して兩手を以てその革面を打つて鳴らす。第六圖はその古圖で（信西入道古樂圖）、或は三ノ鼓が推古天皇の頃に伎樂として傳へられた當時は、專ら腰鼓として用ひられたものかも知れぬ。今も伎樂及び田樂の中には用ひられてゐる。



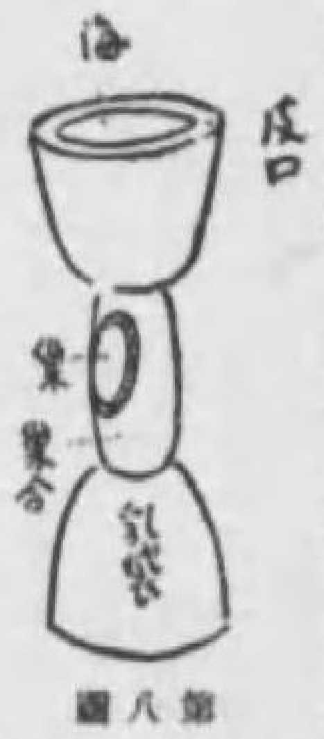
第六圖

〔大鼓〕　普通「オホカハ」と呼んでゐる。能樂囃子及び長唄囃子に用ひられる。雅樂の三ノ鼓から轉じて來たと稱される。その形も三ノ鼓と大同小異である。筒の形は第七圖に示す如く、兩端の膨らんだ部分を乳袋といひ、乳袋の端面で革に當る所を皮口といひ、その内部の凹所を海といひ、筒の中央部の細い所を巢合といひ、その部に椅圓形の巢といふものがある。筒の長さ九寸三分乃至九寸五分、乳袋の長さ三寸乃至三寸一分、巢の長さ三寸一分乃至三寸三分位、乳袋の直徑三寸九分位、その内徑三寸乃至三寸一分、隨つて皮口の厚いのと薄いのとがある。筒の木質は櫻を普通とし、花櫚これに次ぐ。變り物としては栗・柿・桐などもある。革は牛皮を用ひる。革面直徑七寸四分位。革面には輪模樣及び化粧輪などなく、中央の乳袋の當る所を「ブン廻し」といふ。調緒は麻紐を朱紅色に染めたもので、これを革面の緣にある六個の孔（調穴）に通して兩革を結び、胴を挾んで締め上げる。これを打つ前に先づ革を火で焙つてかち〲にして後、調緒でかがつて強く締め上げ、更に小締で締めつける。



第七圖

〔小鼓〕　前記の大鼓と共に、能樂囃子及び長唄囃子に用ひられる外に、單獨にも囃子樂器として用ひられる。これは雅樂の壹ノ鼓から轉じて來たと稱され、或は大鼓が變化したものだとも稱せられる（恐らく前說か）。一說に奈良の樂人美濃權頭が工夫し、これを能樂の宮增彌左衛門に傳へたのが初めであるといふ。その各部の名稱は大鼓と同じであるが、筒の形は少しく異なり（第八圖）、又革面も白色となし周輪並びにブン廻しに黒色の化粧輪を畫き、調穴の所に同じく黒色の花圓模樣がある。革面直徑六寸六分位、化粧輪直徑三寸九分位、化粧輪の太さ一分五厘乃至三分位、筒の全長八寸三分、乳袋の長さ二寸六分位、乳袋直徑三寸三分五厘位、その内徑二寸七分位、巢の長さ三寸一分位。筒の木質は大鼓と同じ。革は馬の背皮を用ひる。調緒も大鼓と同樣であるが、大鼓の如くに強く締めないで、幾分弛くなつてゐる。大鼓と同じく朱色の麻緒であるが、茶色・紫色などを用ひることがある。特に紫色のものは紫調と云つて最上とし、格式を以て他に許さないことが多い。



第八圖

〔鼓の流派〕　能樂の大鼓には高安流・葛野流・大藏流の三流及び石井流、小鼓には幸流・觀世流・大倉流の三流がある。これ等の系統に就いては「猿樂傳記」に詳しい。長唄囃子鼓には田中傳右衛門・六郷新三郎・望月太左衛門・福原百之助の名を代々襲名する家柄が古く、明治になつて柏扇之助一派が興つた。

【參考】樂家錄（安倍季尚）○鞨鼓錄（唐南卓（唐代叢書四ノ二））○猿樂傳記（下卷著者未詳）○雜誌「能樂」（一〇ノ一）○鼓筒之鑑定一卷（生田耕一・山崎樂堂）○日本音樂講話（田邊尚雄）○日本音樂概論（伊庭孝）○長唄稽古手引草（町田博三）○大日本人名辭書附錄系圖　〔田邊〕

藤簍冊子　つづらぶみ　歌文集　六卷　【著者】上田秋成【成立】享和二年【刊行】文化三年

【讀本】上田秋成全集第一所收。また卷一・二の歌集の部は、小澤蘆庵全集（續日本歌學全書）・近代諸家集第三（國歌大系）等に收む。

【解說】享和二年秋の生島の叟の序文、同年の自序、文化元年三月の門人槿并道の附言、同年十一月の大田覃（南畝）の後序があり、文化三年秋、三都書林合梓にて刊行。卷一の卷頭には、屛風に記せる歌以下を錄し、次に春・夏・秋の歌があり、卷二は冬・雜の歌、終りに「源氏物語」五十四帖を載せてゐる。卷三は紀行、卷四以下は文集で、卷六の附錄に瑞龍尼（秋成妻）の遺作を加へた。集中にはこの外、花洛の四季を歌つた四十三首、七十二候を詠じた七十二首の歌などもある。歌の部分は、長歌・短歌が入り交ぜてあつて、中に長歌が多い。

【歌風】萬葉風と古今風との中間を行つたもので、奇才縱横、頗る個性味に富んだ歌が多く、その面目が躍如としてゐる。所々に記した詞書にも、味多く、彼の面目を見るに足るものが少くない。又連作風の歌もあり、長歌にも獨特の風格があつて、一位置を占めるに足る歌風である。

いはりに、ある夜ぬす人入りて、いささかある物をかつぎていにけり、あした思ふ

我よりも貧しき人の世にもあれば笑からたちひまくぐるなり

杉が枝を雪は走りて吉野なるかしの尾上にはだれ雪降る

【附記】秋成の歌は、この外に、「毎月集」「十雨餘言」「歌島稻荷獻詠和歌」などに見え、また「毎月集」より自讃の歌を拔いて註記を加へた「秋の雲」一卷がある。　〔佐佐木〕

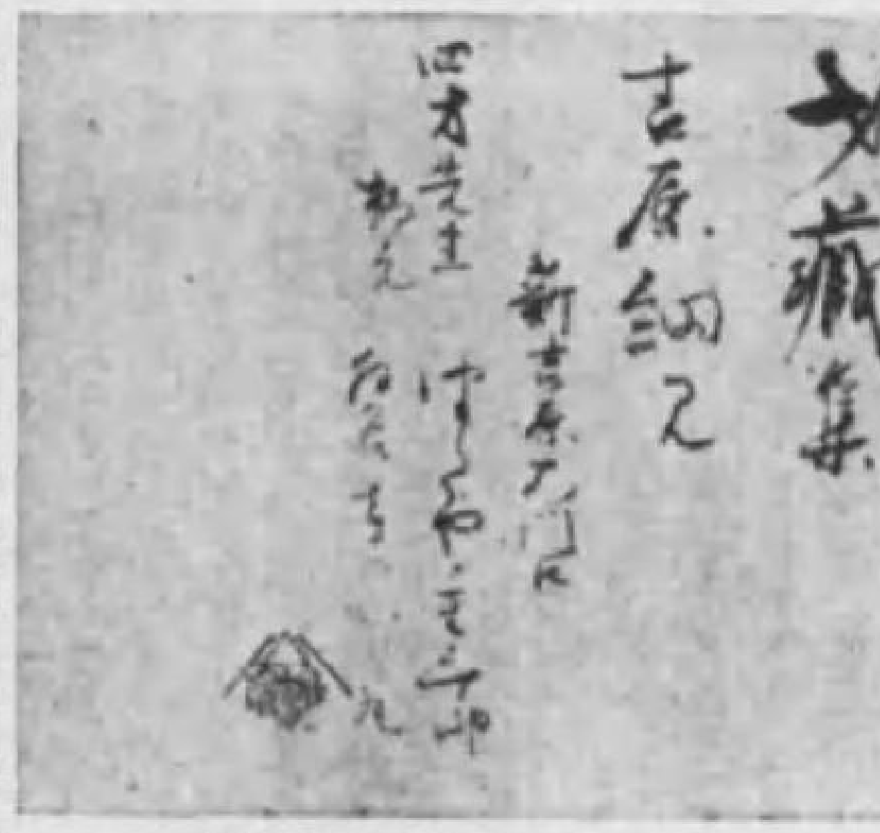
蔦葛戀之花菱　つたかづらこひのはなびし　人情本　一卷三册　【作者】平亭銀雞【畫工】無署名。【名稱】主人公の號、蔦齋から附けたものである。【刊行】文久元年【讀本】人情本傑作集（帝國文庫）下卷所收【題材】蔦齋寛石といへる實在の人物を採つて人情本化したものであつて、兩國萬八樓に於ける書畫會に參集せる人物は、皆實在の人二百餘名が列記してあり、書肆弘文堂の人名錄の不遜な事の非難、作者畑銀雞の雜俳の宣傳など、皆事實を採つてゐる。最後に、三圍稻荷の神託が用ひてあるのは、讀本その他の作品に多く散見する稻荷說話である。

【梗概】本所北割下水邊に、烟石伊十郎と云へる浪人があつた。茶道・花道に通じ、特に大和繪に巧で、蔦齋寛石と號した。美男の譽高く、近所の娘達が皆騷いだが、當年二十四歲になるまで浮いた噂もない人物である。三月の中旬兩國萬八樓で盛大な書畫會が催され、當時江戸で知名の文士・畫人皆集まつた。寛石も亦その一人に加はつた。酒宴に興を催す折柄、十五許りの美しい娘、寛石の側へ寄り、扇子四五本の揮毫を依賴する。ふと寛石の美男なるを見、思はず顏を赤めた。やがて又十八九の藝者が來て、ふくさに雀躍の畫をかいて下さいと依賴する。この女は嘗て寛石が下谷の發

會に招かれた時、宴石を見染め、宴石も心動き、戀歌を書いて與へたお鈴であつた事を想ひ起したのである。二人は人目を憚りつつ互に戀を打明け行末を堅く約束した。お鈴はもと武家の娘であつたが、安政の大地震で兩親を失ひ、叔父の許に引取られ、種々の艱難を經て、今は遊藝に秀でてゐるまゝ諸方より賴まれ、町藝者同樣の身分になつたのである。折柄お鈴を連れて來た客が呼ぶので、お鈴は名殘惜しげにその場を去り、宴石は獨り思ひがけぬ再會を心に考へてゐる。彼の友人白齋が大醉して來り食事に誘ふので、二人で立ち出でた。食事終つて夕暮の向島を散策し、夜櫻を賞しながら土手を行くと、老夫婦と娘一人が三人の惡漢に取圍まれ、所持の品を盜まれようとする樣子、白齋・宴石、馳せつけて惡漢を懲らし、老夫婦を救うた。が、娘の姿が見えないので夫婦は驚き騷ぐ。そこで二人は、朧月を賴りに何處までもと追ひ行くと、白髮の老翁が土手の上に立ち、「二人の者必ず驚く勿れ。彼の娘の兩親は、日頃我を信ずる者なれば、そのまゝ捨て置きがたく、神通力を以て娘を取返し、兩親へ引渡したり。宴石は四五年の内には、必ず彼の娘に廻り逢ふ事あるべし。かく言ふ我は三圍稻荷大明神なり」と告げて姿は消えた。二人は奇異の思をなし、社に參拜して我が家に歸つた。

【構想】序にも、事實談を人情本風に書き和らげたと斷つてあるが、實は讀本風に堅く、評判もよくなかつたのであらう。主人公宴石に十五の娘と藝者お鈴と戀を爭ふ趣向であつたらしいが、其處まで行かず續編が刊行されなかつたものらしい。構想はさほどのものではないが、當時の書畫會の樣子は比較的精細に描かれて居り、文士等の對話の主材なども分る點に興味がある。（山崎）

蔦唐丸（つたのからまる）　狂歌師【本名】喜多川柯理。通稱は蔦屋重三郎【別號】薜蘿館・耕書堂【生歿】寛延元年正月七日生れ、寛政九年（二四五七）五月六日歿。享年四十八【法名】幽玄院義山日盛居士【墓所】淺草吉野町正法寺【閲歷】本姓は丸山氏で、安永の初め吉原五十間道に書店を開き、吉原細見の株を買うて年々引續き出版し、又當時流行の黃表紙・洒落本等を刊行して奇利を博したので、天明三年には日本橋通油町の店舖を買ひ取つてこゝに移轉し、益々繁昌して終に江戸屈指の地本問屋となつた。曲亭馬琴は唐丸の狂歌は代作だと云つてゐるが、自筆の狂歌短册を往々見受けるから、やはり狂歌師の一人であつたに相違ない。併し唐丸の功勞は狂歌集の出版に力を盡した點にあつて、天明・寛政年間の名ある狂歌集及び「蟲えらみ」「潮干のつと」の如き狂歌入繪本は、多くこの蔦屋が發行したので、つまり狂歌と浮世繪を結び付けてこれを世に紹介したのは唐丸の功績である。（野崎）



蔦唐丸筆蹟（蜀山人判取帳）

蔦紅葉宇都谷峠（つたもみぢうつのやたうげ）　脚本五幕　世話物【作者】二代河竹新七（河竹默阿彌）【名稱】通稱「文彌殺し」。東海道宇都谷峠蔦の細道を事件の中心地としたので、かく銘題を撰ゑた。【別名題】「宇都谷峠嘯怪談」「小夜砧宇都谷峠」「花舞宇都谷家話」等。【諸本】默阿彌全集第一卷・日本戲曲全集第三十卷所收【初演】安政三年九月江戸市村座。

〔役割〕文彌・仁三（市川小團次）、伊丹屋重兵衞（坂東龜藏）、文彌姉お菊後に古今・重兵衞女房おしづ（尾上菊五郎）、佐々木桂之助・甚三（坂東彥三郎）、尾花才三郎（河原崎權十郎）、文彌妹おいち（市村羽左衞門）等。

【題材】元祖金原亭馬生の座頭殺しの話を仕組んだもの。

【梗概】〔序幕〕御納戸金を遣ひ込み、佐々木家を追放となつた筑田宮藏は、兼て遺恨ある尾花六郎左衞門が預つてゐた家の重寶花形の茶入を盜み出す。佐々木桂之助は六郎左衞門の伜才三郎の僅かな落度を言ひ立て、表面追放として密かに寶の詮議を言ひつける。才三郎の姉しづは幼い時拐かされて苦界にあつたを、昔の若黨十兵衞に身請けされ、今は酒屋伊丹屋の內儀となつてゐる。そこへ身を寄せた才三郎は、身請けの殘金のため苦しむのを見兼ねて、寶詮議の用意金百兩を用立てる。十兵衞はその金を調達のため上方へ旅立つ。〔二幕〕宮藏の中間小兵衞は、座頭文彌の義理の父であるが、茶入を質入れしてそれを包んであつた袱紗を佛壇の打敷にしてゐる。そこへ町髮結と姿を替へた才三が來て、それに目をつける。白木屋へ養子に遣られた十兵衞の弟彥三は、通りがかりに文彌の難儀を救ひ、文彌の姉きくに想ひを寄せられる。きくは文彌を幼い時穢側から落し盲目とした詫に、座頭の官金を調へるため百兩で苦界へ身を沈めるが、その官金にはなほ五十兩足りないので、不足分を京の師匠に借りることとする。が、溜めた金を小兵衞に騙り取られ、京へ行く路銀に窮してゐる文彌に、才三は袱紗を抵當に金を貸してやる。〔三幕〕當てにした人に死なれて金の調達も出來ずに歸つて來た十兵衞と、百兩を携へて京へ上る文彌と、それをつけて來た胡麻の蠅提婆の仁三とが、鞠子の宿で一つに泊り合はせる。夜中に文彌の包を狙つた仁三は、十兵衞に取押へられるが改心を誓つて赦され、十兵衞は文彌の賴みで宇都谷峠だけ送る事となるが、峠へ來て文彌が百兩持つてゐると聞いて急にそれが欲しくなり、貸して吳れと賴むが斷わられるので、遂に文彌を殺してその金を奪ふ。そこへ仁三が現はれてその金を爭ひ、十兵衞は仁三に腰の提煙草入を取られる。〔四幕〕白木屋の娘お駒は小さい時からの屋敷奉公で、彥三と許嫁なのを知らず、才三と深い仲になる。それと知つた彥三は、心にもない愛想づかしをして白木屋と緣を切り、吉原の古今（文彌の姉）と深い仲になる。一方お駒を手籠めにしようとした宮藏と小兵衞とは才三に斬られ、茶入の質入切手は才三の手に入るが、お駒は故主の宮藏を殺し自害する。十兵衞の妻おしづは文彌の死靈に祟られて苦しむ。〔五幕〕伊丹屋へ巫女として來たりくは、小紋の財布から十兵衞を我が子文彌の敵と知り、古今の許へ驅けつける。古今と彥三とは品川宿で文彌の亡靈に心中を留められ、更にその導きでりくに逢ふ。十兵衞は煙草入を證據に强請る仁三を鈴ケ森で殺し、歸らうとする時、古今と彥三に出會ふので、總てを打ちあけて、文彌から取つた百兩を返せないのは殘念だが、二人に討たれたいと言ふ。そこへ歸參の叶つた才三も來合せ、十兵衞へ百兩を返してやると云つて古今の年季證文を渡す。十兵衞は喜んで自害する。

【脚色】全篇を通じて哀愁に富み、陰慘の氣の横溢してゐる作で、世話物中の代表的作品である。殊に鞠子の宿から殺しに至る一幕、五幕目の仁三の强請場は、劇的興味に富んでゐる。作者が、小團次と結託した市村座時代の最初の作である點から、記憶さるべき價値を持つものであり、小團次の寫實的劇術に據つて、幕末の頽廢的劇壇に一味の革新的氣勢を示した初期の作としても、重要視すべき作品である。（河竹）

【參考】河竹默阿彌（河竹繁俊）○續歌舞伎年代記

土（つち）　小說【著者】長塚節【發表】明治四十三年六月東京朝日新聞に連載【刊行】大正元年五月、春陽堂。夏目漱石の序がある。

【解說】作者唯一の長篇小說である。內容は、著者の鄕里の貧しい農民の生活を細かく描寫したものであつて、筋で運んで行くといふ手法でもなく、哲學を露骨に出すといふ種類のものでもないが、その正直で執拗な描寫が、自から作者の人生觀を浮き出させてゐる。鄕土色藝術、農民小說の一つと看做すべきである。全體を蔽ふイデオロギーといふやうなものは見られない。謂はば一つの忠實な寫生ともいふべきもので、當時の主潮流であつた自然主義的作品のねらひ方とも違ふために、餘り有名にならずにしまつた。けれども、却つてそのねらひ方の露骨でないところに不易の性があり、その後次第に價値を見出さるゝに至り、自然主義的作品の衰微した今日でも、この作は依然として鑑賞に堪へ得るものである。小說としては、虛子の諸作などと共に、明治文學史中に於て、特殊な地位を占むるものである。（齋藤（茂））

土井晩翠（つちゐばんすゐ）　詩人【本名】林吉【閲歷】明治四年十月二十三日仙臺に生れた。家は土地の豪家であつた。第二高等學校を經て、同三十年、東京帝國大學文科大學英文科卒業。突如詩壇に出でて獨自の詩風を拓き、その詩情漸く衰へた頃海外に遊び、歸來久しく第二高等學校教授に任じた。「天地有情」はその處女詩集である。【著作】天地有情（明治三十二年）○曉鐘（三十四年）○東海遊子吟（三十九年）（以上詩集）○衣裳哲學（カアライル原著）○曙光　○晩翠詩集　○チャイルド・ハロウドの巡禮（バイロン原著）○天馬の道等。【批評】明治二十七八年戰役後、國民詩人出でよとか、雄渾剛健の理想を謳ふ詩家出でよとかいふ詩壇の提唱盛んであつた折柄、恰もその要求に應じた如くに出でた晩翠の詩は、漢語成語を中心として放吟に適する七五正調のバラッド體・サニング體で、主として英雄を詠じ、東亞の風雲を歌ひ、「理想」を高吟し、「人生觀」を直敍したので、鐵幹のいはゆる「男兒の歌」が、志士的抱負を吐露して快哉を叫んだとひとしく、その方面の要求を滿たした如く思惟せられたが、一面彼は又「星と花」や「はるのよ」の俳諧體をも奏したので、畢竟晩翠の詩調の重んずべき點は、抒情情緒を主とする短曲と史詩調歌の類と抽象觀念に基く「瞑想體」との三種のうち、第二種のものがその本領で、雄勁なれど單純な詩調詩念に最もよく適してゐたものであつた。第三種のものを粗笨な觀察で見て、晩翠を哲學詩人・瞑想詩人と言つた評家があつたのは批評家の盲斷で、元來晩翠は哲學的思惟に耐へ得る詩人ではなかつたに拘らず、表面の抽象詩語を捉へて直ちにその本質と斷じ去つたにすぎない。が、晩翠の謳歌史詩の格調の清新性は、當時の驚異であつた事は事實であり、先人何人にも多く感化せられざる晩翠獨自の創造に俟つところのものである事も事實である。出づべくして出でた詩人であり、當時一部の要求に正しく應じて生れ出た詩人である。併し當時の世評に照應するだけの本來的藝術價値はなく、後出の詩人に何等特記すべき影響を與へなかつたこともまた事實である。ただ藤村になく、透谷になく、抒情詩派にも早稻田派にもない蒼古雄勁の詩調が、沈痛なる單純、素樸極まる悲調を以て、彼のみによつて完成せられた一事は、文學史上特記するを要する一現象である。藤村の詩調は、明かに「於母影」や新國文提唱の感化を引いてゐるが、晩翠の先達には、ただ晩翠あるのみで、一人の先鞭と認むべきものがない。漢詩を砕いたにすぎぬといふ惡評は、全篇を通讀したものには、適用せぬ蔑辭である。彼は恐らく藤村よりも詩論と詩學とについて研究したかも知れないが、そのあとは詩篇そのものの上には明かに現はれてをらぬ。「天地有情」「曉鐘」の二書以後、彼にも新展開が絕對になかつた。外遊後公刊した「東海遊子吟」は、彼の缺點のみを擴大し、如何に新天地を打開するかといふ評家の待望を裏切つた。彼が詩は青年學生の愛誦するもの多く、これがため校歌・寮歌等は、一時晩翠調に風靡された感があつた。（日夏）

土井晩翠

【參考】明治文學史（岩城準太郎）○樗牛全集第二

土蜘蛛（つちぐも）　「蜘蛛物の謠曲」を見よ。

土蜘蛛（つちぐも）　所作事【解說】「太平記」「源平盛衰記」、或は謠曲などに見えてゐる土蜘蛛の傳說が、近世に入つて古淨瑠璃に現はれてから、歌舞伎・淨瑠璃に盛んに仕組まれて來たが、そのうち、近松の「關八州繫馬」（別項）で、小蝶の觀念が土蜘蛛に化して活躍することに脚色されて以來、この脚色が後のものに大きな影響を與へ、所作事の中に於ても一系統をなすに至つた。次に各種所作事の主なものを列舉する。

【蜘蛛絲梓弦】變化物〔通稱〕「蜘蛛の絲」又は「仙臺淨瑠璃」「仙臺座頭」〔初演〕明和二年十一月朔日初日江戸市村座。作詞金井三笑、作曲佐々木市藏、太夫常磐津文字太夫、振附二代西川扇藏〔內容〕四天王の世界に、謠曲「賴光」をはめ、土蜘蛛の變化の切禿・仙臺座頭・山伏・梓・巫女等が現はれる。この作は、非常に後輩に影響した。

【我背子戀の合槌】拍子舞物〔通稱〕蜘蛛の拍子舞〔初演〕天明元年十一月朔日初日江戸中村座。作詞櫻田治助、作曲杵屋佐吉、曲節長唄と大薩摩との掛合、太夫二代大薩摩主膳太夫、立唄富士田音藏、振附二代藤間勘兵衞。〔內容〕土蜘蛛に「女暫」の形を添へ、拍子舞を主としたもの。

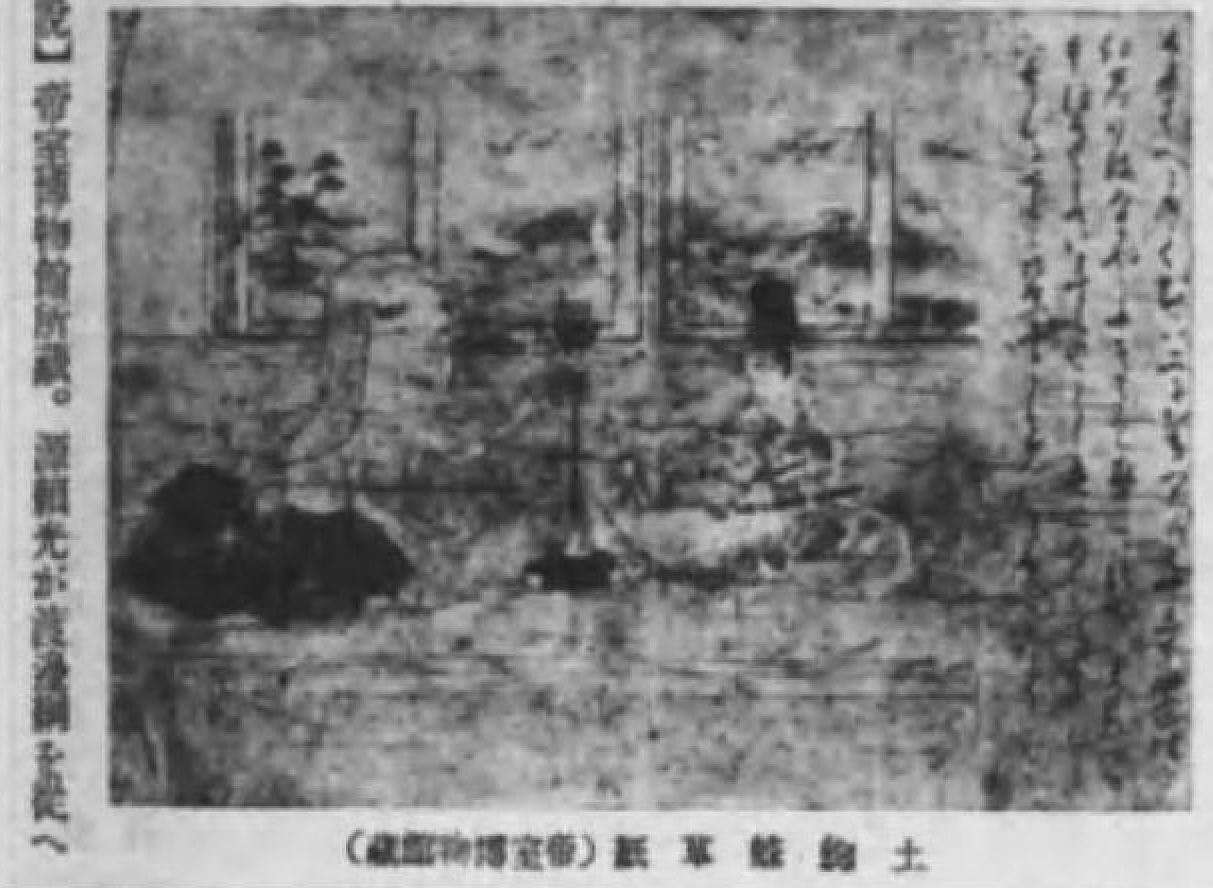
【蜘蛛宿直噺】淨瑠璃物〔通稱〕宿直噺〔初

演】文政元年十一月朔日初日江戸玉川座。作詞二代瀨川如皐、作曲二代鳥羽屋里長、太夫二代富本豐前太夫、振附市山七十郎、曲は廢滅、振は傾城の一部殘存。【内容】土蜘蛛に山姥を持込み、傾城の趣向を取入れたもの。

【土蜘蛛】松羽目物【通稱】大土蜘蛛【初演】明治十四年六月二十九日初日、東京新富座中幕。作詞默阿彌、作曲三代杵屋正次郎、曲節長唄、立唄二代松島左五郎、振附花柳壽輔、曲・振とも傳存。【内容】謠曲「土蜘蛛」を所作化したものである。新古演劇十種の一。明治期の代表的舞踊の一つといつていゝ。

【參考】江戸近世舞踊史（九重左武）○歌舞伎狂言往來（渥美清太郎）○江戸時代音樂通解（町田博三）○歌舞伎細見（飯塚友一郎）〔秋葉〕

土蜘蛛草紙 つちぐものさうし　繪卷　一卷【解說】帝室博物館所藏。源賴光が渡邊綱を從へて京都神樂岡のあやしげなあばら家を探訪して、數々の妖怪變化に遭ひ、これを斬りつけた際、劍の切尖を折つたが、滴る血潮の痕を辿つて遂に土蜘蛛の所在を探り、人形を造つて切尖の難を免れ、やがてこれを退治するといふ話の筋である。繪土佐長隆筆、詞兼好法師筆と傳へる。この傳は信ずべき限りでないが、その描寫は土佐派の樣式を存して内容の通俗な割合に品致を逸してゐないが、總じては次節にお伽草子の卑近な趣味に遷り行かんとする傾向の見られるもので、先づ南北朝か遲くも足利初葉を下らぬ製作と思はれる。賴光の土蜘蛛退治は著名な物語であるが、この繪卷の筋は世に知られてゐる話とやゝ系統を異にし、その點に於ても注目される。〔田中（一）〕



土蜘蛛草紙（帝室博物館藏）

土車 つちぐるま　「男物狂の謠曲」を見よ。

土田杏村 つちだきやうそん　評論家【本名】茂【閱歷】明治二十四年一月、新潟縣佐渡郡新穗村に生れた。東京高等師範學校博物學部を卒へた後、京都帝國大學文學部に學び、大正七年卒業すると同時に、更に六年間大學院で研修を重ねた。早く思想家として新鋭の才を示し、高等師範時代には、田中王堂の哲人主義に共鳴し、深く私淑するところがあつた。當時、雜誌「新評論」に、鋒鋭文明批評の一欄を擔當したことがあり、次いで「文明思潮と新哲學」「文壇への公開狀」等を上梓した。その專攻は生物學及び哲學で、生物學では丘淺次郞、哲學では西田幾多郎の指導を受けた。大正八九年頃、文化主義を提唱し、次いで國文學の哲學的研究に從事、時々文藝評論の筆を執る事もあつた。昭和四年マルクス批判に鋭意して河上肇と烈しく論戰した。現在は專ら著述生活を送りつゝある。【著書】國文學の哲學的研究三卷○文化主義原論○社會哲學原論○マルキシズム批判○文學論等。〔高須〕

土御門院御集 つちみかどゐんぎよしふ　歌集　一卷【著者】土御門院【成立・由來】三本ある内の（一）は、承久三年に、院が土佐・阿波に遷らせ給うて後の御製を、京都にゐた藤原家隆におくり給ひ、家隆がこれに評點を附し奉つたものの由である。（二）は、以上の外に增補したもので、「右土御門院御集、以冷泉大納言爲益卿本書寫之於奧書者以淮后本書加之者也。」の奧書があり、國歌大系第十卷に收む。（三）は、院の御歌五十七首を錄したもので、年代等不明である。【内容】各本によつて、内容を異にする。（一）は、承久三年から元仁元年まで四年間の御歌を集めたもので、詠述懷十首和歌・詠百首和歌（承久三年）・詠五十首・詠三十首和歌（承久四年四月二十五日）・詠二十首和歌（承久四年八月十五日）・詠二十首和歌（貞應二年十二月二日）等を收め、卷末に前記の如き奧書がある。「述懷十首」の中の「寄風述懷」の「吹風の目に見ぬかたを都とてしのぶもくるし夕暮の空」に、家隆は、「先うち見候より已落涙かきくらし候畢。叡慮すべて不覺候へども、心詞無申限候」と評し奉つてゐる。（二）は、承久・元仁間の御製に、春夏秋冬各五首・雜十首・月前三首・草木十首・木蟲鳥獸名各十首・月三首・名所の春夏秋冬戀各十首・戀二十五首・題字六首・朝戀三首を增補したもので、群書類從第二二八に收めてある。その奧書に、「此御集、以勅本令比校畢。尤可爲正本者也。永祿八年乙丑仲秋念三、正二位藤原爲益」とある。爲益は、前記奧書の爲益の子である。この增補の部分のはじめ、「春五首」の題に、「此以下以他本書加之」と旁註があり、またこの部分の歌には評點がないが、歌の用語には、「住み棄てし花の都の」「七歲の秋の今宵を」などあり、懷古追憶の御作の多きことなどから見て、御遷幸後の御作かと推定される。御歌は後鳥羽院のそれの如き、きはやかさはないが流麗な、情味の豐かな歌ぶりである。「詠五十首」の「流れくむ袖さへ花になりにけり梅散る山の谷川の水」の如き、新古今調の歌も見える。（三）は、部立も歌題もなきもので、他に類本がない。なほ「後法興院政家公記」に、「文明十三年二月十六日辛酉、晴。自大樹、土御門院御集可書進之由有其命。可書進之由、令返答了。同廿一日丙寅、土御門院御集書寫進大樹。（使行長）」と見えてゐる。文明十三年は、前記奧書の永祿八年より八十五年前であつて、この本が如何なるものか明かではないが、和田英松氏は、群書類從所收本であらうと推定してゐる。【價値】院の御歌は、「新古今集」には一首も見えず、「千五百番歌合」と「土御門院御百首」（續類從所收）と、「續拾遺集」に一首、「續古今集」に、千五百番歌合の歌一首、「新續古今集」に一首、「承久記」に一首存する位で、本集は、今に傳ふる土御門院の御歌の大部分を收めたものであり、又當時の歌壇の主流とは、やゝはなれてましました傾向の見られる歌集である。また「後鳥羽院御集」（別項）が、承久以前の御歌で編次されてゐるのに對して、本集が承久亂後の御作より成つてゐると思はるゝのも、對照的興味がある。【參考】列聖全集御撰集解題（和田英松）○國歌大系第十卷解題〔松浦〕

土御門中納言 つちみかどのちゆうなごん　「朝忠」を見よ。

土屋文明 つちやぶんめい　歌人【別號】蛇床子・井出說太郞・榛南生【閱歷】明治二十四年

一月二十一日（實際は二十三年九月十八日）、群馬縣群馬郡上郊村大字保渡田に生れた。保渡田の小學校、高崎中學校卒業後、村上成之の紹介で上京して伊藤左千夫方に寄寓し、牛舍に勞働しつつ左千夫の教を受けた。これより先き、中學校在學中三井甲之の編輯してゐた「アカネ」に、短歌・新體詩・小品文等を投稿した。四十二年九月、第一高等學校に入學し、大正五年七月東京帝國大學文科大學哲學科卒業。在學中、芥川・菊池・久米等の第三次「新思潮」同人に加はつた。四十二年以後專ら「アララギ」（別項）同人となり、現在に及んでゐる。その間、長野縣諏訪高等女學校教校長、松本高等女學校長、木曾中學校長等に歷任し、ついで法政大學教授・日本醫科大學教授となつた。【著作】ふゆくさ○往還集（以上歌集）○萬葉集私見○萬葉集年表等。〔齋藤（茂）〕

堤中納言 つつみちゆうなごん　「兼輔」「朝忠」を見よ。

堤中納言物語 つつみちゆうなごんものがたり　物語　十卷【作者】未詳。從來堤中納言藤原兼輔が作者に擬せられて來たが、內省的研究の結果、この物語は兼輔とは著しく時代的に隔りがある。【名稱】この物語は、「風葉和歌集」の中に出るのが最も古いが、それには、「堤中納言物語」の名は揭げず、個々の卷名が擧げてある。これより見れば、初めは「堤中納言物語」の名はなく、個々の卷名で呼ばれてゐたものであらう。それが、飛鳥井本・天王寺明靜院本等、比較的古い系統の本には何れも「堤中納言」とのみある。この名からして、更に「堤中納言物語」となつたのであらう。併しこの題號は、その內容をなす十種の短篇とは、毫も關係のないものである。【成立】（一）入江昌喜は、醍醐天皇時代のもの（無窮會藏本の淸水濱臣舊藏本の初めに書寫せられてゐる解說）となし、（二）萩野由之・小中村義象・落合直文は永承以後となし（日本文學全書解題）、（三）長谷川福平氏は赤染衞門以後卽ち道長の時代以後となし（古代小說史）、（四）藤岡作太郞は鳥羽天皇以後となし（國文學全史平安朝篇）、（五）藤田德太郞氏は平安朝末期の作とする說を捨て兼ねると言ひ（日本文學講座）、（六）淸水泰は鎌倉時代の嘉禎より文永に至る約三十五年間の作としてゐる（堤中納言物語評解附錄）。【體裁組織】諸種の本によつて、一冊に綴ぢられたもの、二冊に綴ぢられたもの及び十冊に分綴せられたもの等があるが、どれが元の型であるか不明。神宮文庫藏本、久原文庫の一本、或は前田家の元祿本の如く、その各帖の題名を小さく書き入れて普通の卷名の記し方とは全くその趣を異にしてゐることから見れば、もと十冊本で內題なく、表紙に各帖の名が記されてあつたのを、後に合綴する時に本文の初めに、その表題を書き加へたからで、題名を小さく書き入れたのは、卽ちその面目を存せしめる用意からではなかつたらうか。各冊は、ばら〳〵でその間順序を示す記號もない。これが異本によつてその卷々の順序に異るもののある原因となつたのであらう。併し現今の流布本は、大體四季を追つて列べられてゐる。或はこれが製作の順序を暗示するものであるかも知れない。【諸本】江戸時代には版本なく、一般に流布してゐるのは、明治になつて始めて發刊された十卷一冊のものであつて、その卷々の順序は前に示した通りである。現存の寫本中注意すべきものの中、系統の分明なものを內容から分類してみると、（一）元中二年古寫卷物の系統の本、又はそれを校合に用ひたもの（內閣文庫藏本一部、松井簡治氏藏本一部）。（二）飛鳥井本、又はその系統の本及びそれを校合に用ひたもの（宮內省圖書寮藏本二部、帝國圖書館藏本一部、京都帝國大學國文研究室本一部、前田家藏本二部、久原文庫藏本二部、靜嘉堂文庫藏本一部、東京高等師範學校附屬圖書館藏本一部、松井簡治氏藏本三部）。（三）天王寺明靜院本によつて校合してゐるもの（內閣文庫藏本一部（原田）、三手文庫藏本一部、京都帝大圖書館藏伴信友校本一部）。（四）淸水濱臣本、又はその系統のもの（圖書寮藏本一部、無窮會神習文庫藏本二部、帝國圖書館藏榊原本一部、松井簡治氏藏本嘉永書寫本一部、南葵文庫藏本一部）。又明治以後の刊本としては、日本文學全書・國文大觀・續群書類從・校註國文叢書・日本文學大系等の所收本がある。

【梗概】〔花櫻折る少將〕照る月影にはかられて、少將は明けきらぬ中に女の許を立ち出でた。道すがら櫻の花は隈なき月に霞かと見まがふ程である。その四邊の築地などは崩れて荒れはてた家には、故源中納言の姬君が住んでゐた。この姬君は小柄ではあるが、おとなしく、言葉づかひなども可愛くて、而も犯し難い所があつた。姬君の叔父の大將は、やがて內裏に奉らうとしてゐた。少將は下僕からこの話を聞いて、或る夜更に忍び入り、母屋に「いとちひさやかにてうち臥し給へる」をかき抱いて、車に乘せて歸つて來た。それは、若く美しい姬君とは似もつかぬ、年も老い法師頭となつてゐた姬君の伯母であつた。〔このついで〕中宮のお前で宰相中將は薰物を試みさせながら、「この御火取の序にあはれと思ひて」人の語つた話を語り出す。「ある君達、本妻を憚つて訪れは絶間がちな女の許で、子供が慕ふあまり、或る時連れて出て行かうとする。その時、「子だにかくあくがれ出でば薰物のひとりやいとゞ思ひこがれむ」と、心苦しげな女の口吟を聞いて、そのまゝ女の所にゐるやうになつた」。次に女房の中納言の君が話す。「淸水參籠も明日は滿願といふ日の夕方、風に散り敷く紅葉を眺めてゐますと、香の薰も床しい隣の局で勤行の間も泣いてゐたらしい人が、「いとふ身はつれなきものをうきことも嵐に散れる木の葉なりけり」と忍びやかに口吟んで、「風の前なる」と微に言つたのが耳に入り、まことに哀愁に堪へませんでした」といふ。最後に、少將の君が、「東山邊の寺で大層美しい姬君が御髮おろしをしようとしてゐました。氣の毒に思はれて、その妹君らしい方に歌を差上げたが、返歌の樣の趣があつて、その巧みさに自分の無作法が後悔されました」と話してゐる時、主上が中宮の處へお出になるので、少將の君も座を立つてしまはれた。〔蟲めづる姬君〕蝶めづる姬君の隣に住んでゐた姬君は、「人は實あり本地尋ねたるこそ心ばへをかしけれ」と、いろ〳〵怖ろしい蟲、特に鳥毛蟲を可愛がる。朝夕、髮を耳に挾んだまゝ眉も拔かずお齒黑もつけず白い齒をあらはして、蟲を可愛がる。親達が世間體を憚り、諫めても聽しない。更に蟷螂・蝸牛など集めさせ、童達にも、螻蛄男・ひきまろ・いなかだちなど名づけて召使ふのであつた。こんな話が世間に洩れて評判となつた。或る上達部の聟君右馬助が、いたづら心から立派な帶の端を蛇の形に作り、動くやうに仕掛けて懸袋に入れて送つて來た。姬君からはごは〳〵の何の趣もない紙に片假名の返歌がある。ある時右馬助が、賤しい女に姿をやつして覗き見し

てゐると、姫君は童の聲に誘はれて歩きざまもあら〳〵しく出て來られる。童が、右馬助があなたのお顔を見てゐますよと告げても澄ましてゐられるので、侍女が姫君に代つて右馬助へ返歌をした。すると、男は「鳥毛蟲にまぎるゝ眉の毛の末にあたるばかりの人はなきかな」と言つて、笑ひながら立ち去つた。〔ほど〳〵の懸想〕賀茂の祭の頃は、都大路を行き交ふ人々の間にも戀が目覺める。頭中將に仕へてゐる小舍人童は、この大路でゆくりなく會つた身の丈、ものごし、實に美しい一人の童女に思を懸けて、澤山實のついた梅の枝に葵を附け、それに戀歌を添へて送つた。併し女は、「しめの中に葵にかゝるゆふかづらくれどねがたきものと知らなむ」と、そつけなくつつ放す。男は追ひ縋りざまに笏で打てば、「それ〳〵、さうしたあなたのお心が」と、ほどほどに心を痛めてゐるらしい。これが緣で二人の仲が結ばれる。この女は、孤獨な故式部卿の姫君に仕へてゐた。女は小舍人童と二人で、姫と頭中將とを一緒にさせようと心を碎く。時にこの頭中將に仕へてゐる年若い男が、小舍人童の戀を羨んで、これを責めて八條の宮の女房に手紙を屆けて貰ふ。「ひとすぢに思ひもよらぬ青柳は風につけつゝさぞみだるらむ」と返歌がある。男はその才氣に心を奪はれてゐると、中將がその文を奪ひ取り、「同じことなら熱心に口說くがよい。自分もなにかの序に行つて見よう」などと言ふ。そして中將は、落魄して頼りなげな姫君の有樣を聞いて「世の常に」など、ひとりごたれ、またどうした心の亂れに、かうした關係を結んだのであらうと後悔しながらも、これが動機で、絶えず八條の宮の姫君に通ふのであつた。〔逢坂越えぬ權中納言〕前日の名殘としてであらう、中納言は眞蒲の紙を幾枚も重ねて歌を送つたが、宮からは例の如く返事もなかつた。片思に堪へかねて五月五日の節句も過ぎた十日の晩、中納言は澄み切つた皐月の風情に浮かれて密に宮を訪れた。併し姫宮は會はうとはされない。聲をしるべに忍んで來てゐた中納言は、宰相と入違ひに姫宮の處に入つた。そして涙をはら〳〵と流しながら、「身のほど知らず、なめげにはよも御覧ぜられじ唯一言」と言ひ寄るのであつた。姫宮は、流石に理なく思ふものの心強くて許さうとはされない。夜は次第に更けて行く。中納言は心弱くも、「恨むべき方こそなけれ夏衣うすきへだてのつれなきやなぞ」と詠み置いて、歸つて行くのであつた。〔かひあはせ〕少將はふと通りすがりの少女から、その仕へてゐる姫君と大夫の姫君とが貝合をする事を聞かされる。よい貝が不足で困じてゐる姫君の方を勝たせてやる約束で、少女に姫君達の姿の見える處に隱れ場を作つて貰ふ。家の中では少女達が手毎に貝を小筥に入れたり、物の蓋に入れたりして騷いでゐる。時に几帳の帷を上げて出て來た女の子があるが、その子はこの世の人とも思はれない程の美しさである。そこへ十位の男の子が來て、「心あたりはみな廻り、承香殿でこれを頂きました。大夫の君は藤壺の君から澤山頂いたさうです」と申上げるので、姫は一層心細がる。其處へ相手の東の姫君が得意顔で樣子を見に來たりする。みなは心配して姫君の勝利を觀音に祈る。その時、少將が、「かなしとてなに歎くらむしら浪も君がかたには心よせてむ」と口吟むと、少女達は「觀音樣の御示現です」などと姫君に告げる。姫君も「まことかはとよ、恐ろしきまでこそおぼゆれ」と喜ばれる。少將はやつと立ち歸り、立派な洲濱の三まがりなのに小箱を鋏め、美しい色々の貝を入れ、歌一首をつけてそつと庭敷に置かせ、前日の處からぢつと覗つてゐた。少女達は二十人許り奇麗に着飾つて格子を上げてゐたが、やがてその貝を見つけて、みなが嬉しさに騷いでゐる面白い有樣を、少將は靜かに眺めてゐたとかいふ事である。〔思はぬ方にとまりする少將〕兩親に先立たれ、侘しい生活を送つてゐる美しい姉妹があつた。男のあながちな心は終に姉の許へは右大將の子の少將が、妹へは權少將が通ふことになつた。或る時右大臣の北の方が病氣された。北の方は權少將の妹であつたから、權少將も右大臣の邸に見舞に行き、そこから權少將は妹君を迎へにやつた。然るに、使の間違から姉君が來る。後で別人と知つた姫君は死ぬほど辛く思つたが、權少將はかねてから懸想してゐたものの如く裝つて、いろ〳〵話をしたことであらう。片方、右大將の子の少將も母が病んでゐた爲め、其處から姉君を迎へさすと、今度は妹君が來てしまつた。それと知つた妹君は、「唯わななかれて」身動きさへもなさらない。少將は、「今は唯さるべきに思しなせ、世に人のためあしき心は侍らじ」と言つて、几帳を押し隔ててしまはれた。かくて二人の少將は、思はぬ方に泊つてしまつたのである。〔はなだの女御〕好者と自他共に許した男が、思ひかはした女の里へ密かに訪れて、皆の者が色々物語をするのを覗つてゐた。女達は花をそれ〳〵の方に譬へて、命婦といふ小女は「あの蓮は女院樣に似てゐます」といふ。一番上の姉が「龍膽は一品の宮樣」といへば、次の妹が「五節花は帝王樣」、三の妹が「紫苑は皇后樣」など、また「中宮樣は桔梗」「四條の宮の女御樣は野萱」などと話は止まる所を知らない。「はちす葉の心ひろさのおもひにはいづれとわかず露ばかりかも」の如く、歌が次々に詠まれる。夜も更けて、女達も寢靜まつた樣子なので、男は歌を口吟むと、鳥の聲と間違へたり、男の聲を聞き知つてゐて笑つてゐる者もある。夜が明けさうなので、男は「百かされ濡れなれにたる袖なれど今宵やまさりひぢて歸らむ」と歎ちながら歸つて行く。この男は、女郎花の方に仕へてゐる女にも、羅蔘の方に仕へてゐる女にも、その外それ〳〵の女に關係があつた。併し、女郎花の方の仄かに聞えた聲が實にゆかしく、いま一度どうかして、「よそ人」としてでも話して見たいと、絶えず浮かれ心地で歩くのであつた。〔はいずみ〕下京邊に淋しく暮してゐる女を憎からず思つて、年頃同棲してゐる男があつた。殷賑な家へ出入する中、男はそこの娘とも戀に落ちて人知れず通ふやうになつた。この女の父親は權勢もあり、無理押のきく人であつた。男はこの親から娘との同棲を迫られて、前の女には氣兼ねをしながらも、遂にそれを承諾してしまふ。新しい女を迎へる日が近づいたので心苦しく思ひながらも因果を含めると、すなほな女は心では泣きながら出て行つた。女の行つた先の餘りの侘しさに、供の童は、その物哀れな有樣に同情して、女の歌つた「いづこにかおくりはせしと人問はば心はゆかぬ涙川まで」を男に示した。涙脆い男は、女の心を氣の毒に思ひ、夜の明けない中に大急ぎで女を連れ戻してきた。そして新しい女の親へは日延を乞うた。そして男は急に思ひ立つて新しい女を訪れた。遽かの事とて女は驚きあわてて、白粉と取違へて掃墨の入つた疊紙を取出し、鏡も見ないで化粧した。洟かんで口に手を當てたまゝ、目ばかりきよろ〳〵光つてゐる異樣な女の姿に、男は瞼をつぶして歸つてしまふ。男の不實に穩かでない兩親も、その姿を見て、そこに倒れ伏してしまふ。女も鏡を見て吃驚し、わつとばかりに泣き出してしまつた。〔よしなしごと〕或る家で大切にしてゐる娘を「ゆゑだつ」僧が隱し妻にしてゐたが、或る年の暮に山寺に參籠するために、色々入用な品を女から貰つた。その女の師の僧は、自分も何か貰ひたいと手紙を書いた。その寫しは、「この世の中が嫌になつたから、浮世を離れてどこかへお籠りしようと思ふ。唐天竺も地に近いから月日の中に交り霞の中にでも飛び住みたい。それには、天の羽衣が入用だからそれを下さい。若しなかつたら破れ着物でもいゝ。又殿下・寢殿・車宿などの整つた屋形も入用だが、逢ふ事の交野の原の菅薦一枚で結構です。さもしいことだが食物も欲しい。紗香八子の信濃梨、天の橋立の丹後和布、いやこれ等がなければ、やもめの邊の蒸豆でも、書きたてて見ると仲々澤山だが、皆でなければ、せめて足鍋一つ、長筵一枚、盥一つで十分です。併しお貸し下さる時は、私の召使の大空の陽炎、海の水の泡にお願ひいたします。そしてきつと天の川の鵲の橋の袂へ寄こして下さい。これがないと昇天が出來ませんから。御返事は天へ下さい。徒然なのに任せて、「よしなしごと」を書きました」とあつた。

【解說】本書は、我が國短篇小說の鼻祖である。各々獨立した十種の短篇を一緒に集めたもので、それ〳〵が含む趣向は、其處に笑や皮肉やを醸し、又耽美的な幻想的な世界を描き出してゐる。十種の短篇は、終始の顛末を持つ物語ではなくて、種々な斷片的の人生の經驗を取扱つたものである。而もその構想と筆法とは、全篇を通じて、神韻縹渺たる情緒を漲らし、端的に人生の實相を觀んとする態度は、近代文藝的な神經の鋭さをもつてゐると云へよう。この物語は、平安朝長篇小說の沈滯した空氣を衝いて誕生した。恐らく世界最古のショートストリズとして特異の地位を占むべき作品である。

【參考】校註堤中納言物語久松潜一〇堤中納言物語詳釋淸水泰〇新註堤中納言物語吉田九郎〇頭註定本堤中納言物語（立命館大學出版部）〇堤中納言物語創解　金子元臣（わか竹二ノ一二・三ノ一）〇堤中納言物語鑑賞木村莊三郎（三田文學三ノ一〇）〇異本堤中納言と小夜ごろも後藤丹次（國語と國文學昭和三ノ五）〇堤中納言物語研究藤田徳太郎（日本文學講座）〇堤中納言物語私考　淸水泰（國語國文の研究三八）〇堤中納言物語鑑賞　玉井幸助（國語教育昭和四ノ一二）　（落田）

綱 つな「頼光物の謠曲」を見よ。

綱島梁川 つなしまりやうせん　思想家【本名】榮一郎【生歿】明治六年、岡山縣上房郡有漢村に生れ、明治四十年九月十四日歿す。享年三十五【閲歷】十九歳の頃上京、それから二年ばかり後に坪内逍遙の家に寄寓して東京專門學校文學部に入つた。同校卒業後も坪内家に留まり、金子筑水・島村抱月・後藤宙外等と共に「早稲田文學」の編輯に從事した。かくて二十九年に及んだが、その年四月、肺疾を得たので、相州逗子に靜養した。後、神戸諏訪山の吉田病院に移つたが、この時代に種々内部生活に於て得るところが多かつた。その後三十年に至り、ほぼ快癒して歸京し、再び「早稲田文學」の編輯に與つた。同年十月、故郷から母を迎へて牛込原町に一家を構へ、翌年更に余丁町に移つた。その頃、逍遙・樗牛の間に歷史畫についての論爭起るや、彼も亦その渦中に入り、雜誌「大帝國」に於て樗牛を難じ、樗牛また答ふるところがあつた。この頃から三十四年にかけて、主として美術上の所說の發表に努めたが、その後は一轉して主力を倫理研究に傾け、當面の問題その他について種々所見を公にし、傳、小說「月前狂」を作る餘裕を見せた。當時、彼は逍遙の外に大西操山に師事し、哲學上に於ける教養は主として操山より得たもので、殊に論究の態度の上に操山を學んだあとが明かに見えた。操山歿後（三十三年）、「大西博士全集」の編纂に參與して盡すところあつた。三十三・四年の頃、再び病痾の人となつてからは、専ら思を靈界の事に潛め、その見神の實驗は、幽玄、詩の如き名文章に叙せられて、讀む者に深い印象を與へ、宗教界に多大の衝動を起した。それ等の文章を集めた「病間錄」（別項）及び「回光錄」は盛んに迎へられ、彼は新ロマンチシズムの先驅者として、青年の間に多くの崇拜者を生ずるに至つた。かくて彼は靈に充實した生活を送りつつ、明治四十年に世を去つた。文學評論に於てはさほどでもなかつたが、宗教上の體驗を說ずる方面では、特にいみじき業績を示し、時人に向つて有力な啓示を與へた。【著書】前記の外に、「西洋倫理學史」「快樂派倫理學說」等があり、大正十年、梁川全集十卷、別集一卷（春秋社）が刊行された。

綱島梁川

【參考】綱島梁川追悼號（新人増刊）　（高須）

經亮 つねあきら　有職家【姓】橋本【號】橘窓・梅窓・香園・香果・森香園【生歿】寶曆十年生れ、文化三年（二四六八）四月十日歿。享年四十七【閲歷】山城葛野郡梅津村の梅宮神社の祠官で、兼ねて非藏人を勤め又肥後守に任じた。小澤廬庵・伴蒿蹊等と交り、和歌を善くして超凡の譽が高く、その門に入つて學ぶ者も少くなかつた。人と爲り豪放不羈で、頗る奇行に富んでゐた。又高橋圖南の門に入り、有職故實を學び、圖南の寶石類書等の校正に力を盡した。服飾・故實等の考證も數多くあつたが、早く歿して稿を脫したものが少かつた。【著書】梅窓筆記〇橘窓自語（各別項）〇校正年山紀聞等。　（石村）

中庸姿 つねのすがた　俳諧集　一冊【編者】菅谷高政【本名】（惣本寺誹諧）中庸姿【名義】題號は、俳道の所謂中庸の道といふ義に取つて、自己の俳風の中正なる事を示したものであらう。隨流の「誹諧破邪顯正」（別項）に「中庸姿とは古風當風の中風といふ事か。但し文字同じければ四書の中庸にや心得がたしと云。されば惣本寺と自身名乘るからして放埒ものなれば、定而俳道の中庸と云事ならん云々」とある。【刊行】延寶七年（誹諧書籍目録には、同年九月とする）【諸本】半紙本・中本・横本の三種があり、半紙本には、卷頭の高政の獨吟百韻の揚句が「珍重々々珍重の」とあつて、句末に「春」の字がない。「誹諧破邪顯正」にこれを難じた

ので、「ふたつ盃」に、「新刊して春といふ字を後に入れたるとなん」とある如く、中本・横本には「春」の字を補つてある。集中の巻の順序も半紙本と横本とは同じく、中本は聊か異なつてゐる。中本は貞門俳諧集（俳書大系）に收む。【内容】高政一派の連句集で、中本によつて巻の順序をいふと作者名を「誹諧惣本寺」と記した高政の獨吟百韻一巻、高政・如風兩吟歌仙一巻、高政・春澄兩吟百韻一巻、春澄・正長・政定・定之・一方・清風各獨吟歌仙一巻づつ都合六巻、鶴一・高政兩吟歌仙一巻、高政・信徳・如泉・仙庵・定之五吟歌仙一巻である。【價値】談林風の三都に於ける中心勢力者は、大阪では阿蘭陀西鶴（別項）、江戸では談林軒松意（別項）、京では伴天連社惣本寺高政である。その高政が、「惣本寺誹諧中庸姿」と題して發表した點から考へて、本集は高政が自信と抱負とを示したものであつた事が窺はれる。それだけ又貞門の方ではこれを問題にして攻撃の矛を向けたのである。併し兎に角談林全盛時の高政及び京談林の作風が、どんなものであるかを知るには見逃し難いものである。又談林の連句の多くが百韻であつた中に於て、本集が歌仙を多く見せてゐることも注目すべきである。【影響】貞門の方から、本集巻頭の高政の獨吟百韻に對して攻撃が開始され、遂に論争の渦を捲き起した。卽ち西武門の中島隨流が延寶七年十二月「誹諧破邪顯正」（別項）を著はして、高政の獨吟百韻を攻撃し、それに對して翌八年二月岡西惟中が「誹諧破邪顯正返答」を著して宗因を辯護した。これより論争が愈々白熱化し、この一年の中に論爭書が相踵いで出で、或は隨流に加擔し或は惟中に與みし、或は中立の地位に立つて論評する等、空前の論戰が展開された。（誹諧破邪顯正參照）　（穎原・志田）

經信（つねのぶ） 歌人・詩人【姓】源【號】桂大納言ともいふ（桂の里に別墅あり）。また帥大納言【生歿】長和五年に生れ、承德元年（一七五七）正月六日、太宰府に薨じた。享年八十二【家系】民部卿道方の第六子で母は歌人、その子基綱は琵琶に秀で、俊頼は有名な歌人である。【閲歷】後一條天皇より堀河天皇に至る六朝に歷仕し、官は大納言、位は正二位に陞つた。嘉保二年（一七五五）太宰權帥を兼ねて七月下向したが、間もなく任地に薨じ、ために俊頼は九州に下つた。承暦二年、通俊が白河天皇の勅を奉じて「後拾遺集」を撰するや、經信はこれに對し不滿を感じて「難後拾遺」を撰し、通俊と論爭もしてゐるやうである。和歌には夙くから熱心で、長元七年の歌合の時（十八歲）、兄の經長が批評を乞ふため、公任を長谷に訪れたので、同行を乞ひ、具に公任の批評を聞いたといふ（袋草紙三）。同じく「袋草紙」三に、彼は公任にも劣らぬ諸道の達人で、賴通が大井川の三船の逍遙を催した時、彼は管絃の船に乘つて詩歌を献じようといつた旨記してゐる（「古今著聞集」には白河天皇の西河の行幸とある）。「古今著聞集」卷六には永保三年七月十三日、白河天皇の仰せにより御琵琶牧馬を彈じたとあり、音樂にも堪能であつた。永承六年の侍臣詩合、天喜四年の殿上詩合その他に作品が見え、詩文にも長じてゐた。

【著作】難後拾遺（別項）一卷（一說には俊頼著）〇後拾遺問答〇家集「大納言經信卿集」（別項）〇經信卿記（帥記とも）七卷〇勅撰集に入る歌は後拾遺集六、金葉二十七、詞花・千載各一、新古今十九、續古今集以下凡そ三十三首、合計凡そ八十七首、私撰集に入るものは續詞花集七首がある。なほ「伊勢物語知顯抄」は經信撰ではあるまい。その他、「寛治三年皇后宮十五番歌合」「寛治八年高陽院七番歌合」等の判詞がある。【人物】博學多能は自他共に許してゐた。事に當つては決斷が明快で、例へば承暦四年（一七四〇）、高麗王が使者を遣はして我が名醫丹波雅忠を請うた時も、公卿の會議が容易に決定しないのに遲參して、「高麗王の病我に於て何ぞ關せんや」と言つて、遂に丹波雅忠を遣はすことを中止した。資質穎敏、詩歌・管絃就中、和歌には甚だ自負するところが多かつた。當時の歌合には殆ど判者として活動し、天下判者とすら稱せられてゐる。【歌風】彼の歌は和歌そのものとしての特殊性に比較的乏しいが、併し自然を對象として淸新な感覺を表現した歌も多く認められる。公任にも同様な立場が見え、兩者を比較すると、公任は無雜作に起つてくる感興を樂に詠んでゐるのに對し、經信は苦心を重ねて詠んでゐる跡が見え、公任は生活に卽した感興を直接的に詠んでゐるに對し、經信は專ら力を表現や修辭の上に用ひてゐる。經信・俊頼の父子を比較するならば、俊頼の歌には鑑賞者をして心境を攝ませるやうな集中性があるが、經信の歌は力が表現の全面に行き亙つてゐて作者の姿が直接見えない。「八雲御抄」に、經信は「詞をさらず、ふつ〱といひたるがよきなり」と記させ給ひ、「古来風躰抄」には、「かの大納言の風體は又ことに歌のたけを好み、古き姿を好める人と見えたれば、後拾遺の風體をいかに相違して見侍りけむかし」とあるが如く、經信は規範を傳統の中に求めて姿の美を重んじ、その中に淸新な趣が見られる。

【參考】勅撰作者部類〇三十五文集〇本朝續文粹〇朝野群載〇本朝無題詩〇公卿補任〇尊卑分脈〇大日本史一四一〇百人一首一夕話〇國文學全史平安朝篇〇日本歌學史〇國文學研究史〇源經信の歌論 久松潜一（心の花昭和四ノ一・二・四）　（山岸・西下）

經信卿集（つねのぶきやうしふ） 歌集　一卷【作者】源經信【諸本】（一）丹鶴叢書本、（二）圖書寮所藏本、（三）同寮所藏の一本等がある。（一）は「大納言經信卿集」とあり、（二）は外題に「帥大納言集」、内題に「經信卿家集」とあり、（三）は外題に「大納言經信集」、内題に「大納言經信丸が腰折共」とある。而して（三）の奥書は三つの年號をもつてゐる。その一によつて本集は經信の薨去より僅か十年後の嘉承元年に書寫された事がわかる。又他の一に平治元年、或る本にて校合した結果十二首を書き入れた旨を記し、次に後日校合した本は歌の順序が相違してゐたが、その儘にした旨を記してゐる。この或る本は嘉承の奥書を有するものである場合と、然らざる場合とが考へられるが、嘉承の奥書に二百六十三首とあり、これに十二首を加へた二百七十五首は現存本の二百七十七首に近いから、現存本は嘉承本を底本として、或る本を以て十二首を書き加へたのであらう。【解說】（一）は歌數百三十一首、内一首は重出、（二）は二百三十一首、（三）は二百七十七首、三本共に同じ長歌が二首づつあり、（三）には連歌が一首ある。（一）の歌は十九首の外は凡て（三）にあり、（二）は一首の外は全部（三）にある。（一）は部類を春・夏・秋・冬・戀・雜に分け、（二）（三）は判然と部類の名目を掲げてゐないが、（一）と同様の部類がある。隨つて三本ともに歌の排列が大體に於て一致し、順序の相違、部屬の相違は多少あるが、順序の全く一致した部分もある。（一）は歌の數が少く誤傳と思はれる箇所が多く、詞書は簡單である。（二）と（三）とは歌の數がほぼ接近し、（二）の殆ど全部が（三）に含まれてゐる。（二）は同一の詞書を數箇所に掲げてゐるのが、（三）は一箇所に纏めて載せてゐるものがある。（三）には奥書があるが（二）にはない。本集に載せられた歌は歌合の歌、逍遙の歌、贈答の歌等であるが、切實な感情や境遇を詠んだものはなく、すべての經驗を趣味化してゐる所が見える。詞書の中には眞名で記したものがある。例へば安樂寺の聖廟に詣でた事、應德元年四月十八日宮中に召された事、治暦二年十月殿上の侍臣が大井河に船を浮べた事、修行の次に龍門に詣でた事等は眞名で記して歌の序としてゐる。眞名の詞書では和歌を倭語といひ、作歌衝動を情感といつてゐる。集中に出る一族は基綱・時俊・基綱女・通時・通時女・俊頼等である。安樂寺參詣を記した眞名文には、「往年參安樂寺聖廟、望廟下梅花云々」とあるから、筑紫から一度歸つたことになるが、「公卿補任」に太宰府に薨じたとあるのと一致しない。代表作「ゆふされば門田のいなばおとづれて」は、三本とも載せてゐるが、（二）は第三句を「なみよりて」とし、傍らに「おとつれて」としてゐる。　（西下）

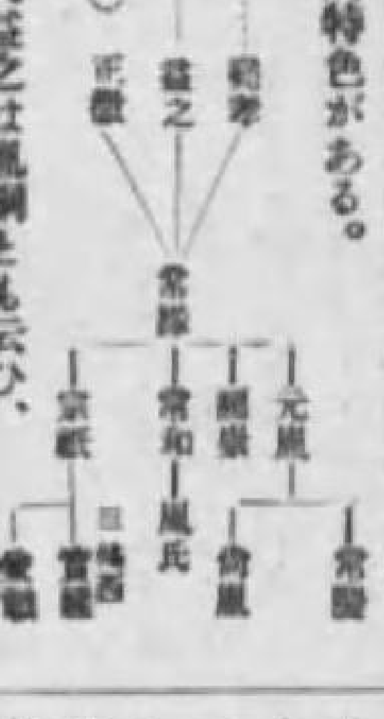
常久（つねひさ） 國學者【姓】もと大神（おほみわ）後に飯村（いひむら）。通稱、萬藏【生歿】未詳。但し文化・文政・天保頃の人。【閲歷】明かでない。伊勢の松坂に住んでゐて、宣長に敎を受けた人で、國語・國文に關する數種の著作がある。【著述】かたばみ草一帖（文政十一年成。同十三年刊。てにをは紐鏡・詞の玉緒・詞八衢の三書に依つて、用言の活用と手爾波の係結を圖に表はしたもの）〇皇語うひまなび（嘉永四年刊。かたばみ草の改題）〇宇津保物語年立二卷（寫）（宇津保物語の年表）〇千草の根ざし一册（なでしこ・をみなへし・ききやう等二十種の說明で、後の方に圖解がしてある）〇夜舟物語一卷（文政九年成。日本文庫第三編に收めて明治二十四年刊。夜船の中で二人の客が論爭した物語の風にして、佛教の翻譯・沿革、各宗派の得失・是非を論辯したもの）。外に「但馬日記」と題する旅日記がある。　（龜田）

經衡（つねひら） 「六人黨」を見よ。

經平（つねひら） 故實家【姓名】土肥氏。通稱典膳【號】富山【閲歷】安永年代の人。岡山藩士で六千石を領した。故實に精しいので世に知られた人。【著書】本朝騎馬集二卷（古よりの騎馬の著名なもの・名を擧げ、これに出所及びその事實を記したもの。温知叢書第九編所收）〇湯土問答二卷（湯淺常山との有職故實に關した問答を記したもの。日本文庫第六編所收）〇甲冑威毛色目〇春湊浪話（別項）〇本朝軍器考補正〇鎧直垂考〇大鏡今鏡增鏡系圖目錄〇備前國志等。　（石村）

經政（つねまさ） 謡曲「平家物の謡曲」を見よ。

常縁（つねより） 歌人【姓】東氏。本姓平氏【別稱】東野州【法號】素傳【生歿】應永八年美濃に生れ、明應三年（二一五四）歿。享年九十四。【家系】千葉介平常胤の後で、東の氏は常胤の子胤頼が下總國香取郡東ノ莊を領したに由る。胤頼は定家門で詠歌に巧であつたと云ふが、その孫胤行も二條爲家の女を娶り、その關係で爲家の門下となり、以下常縁の時世に至るまで、行氏・時常・氏村・常顯・師氏悉く勅撰集中の作者で、父益之の如き、了俊・正徹・飛鳥井雅世などと文人的私交を保つてゐる。武家とは云へ、常に文事に緣の深い家柄と言ふべきである。【學統】常縁の歌道の系統は、かなり繁雜になつてゐるので圖示しておく。二條派と冷泉派との兩流を受けてゐる點に、彼の學統的特色がある。



【閲歷】父益之は胤綱とも云ひ、左衛門尉下野守であつた。常縁が二十二歲の年、家督を長子に讓り、素明と稱し、文事に親しんでゐたが、結城の亂に論にあつて周防に流され、常縁が三十一歲の年に歿した。常縁は父が正徹と私交があつた關係から、その後正徹に親しみ、その說をきくことを得てゐた。文安時代（四十餘歲）から、その影響頗る顯著のものがあつたらしい。併し彼は正統派の關係で、堯孝の方に重きをおき、その門下と云ふ事になつてゐた（寶德二年）。家督をついだ兄氏數（氏數とも）には嗣子がなかつた。ために常縁は寶德三年（五十一歲）、東氏をついで下野守となつたが、間もなく、千葉氏二流の内爭のため、幕命を受け東下して康胤と戰ひ（康正元年）、下總の東莊に留まることになつた。文人の彼は家のため暫く山東の塵に塗れざるを得なかつたのであるが、その後の十ケ年間は、彼の歌道圓熟時代と見てよい。門弟宗祇に與へた「東野州消息」はこの時代書かれたものらしい。堯孝（常光院）や、正徹の歌談を錄し得るにすぎなかつた「東野州聞書」（康正元年）の書かれた時代に比し、一段の自信と進步とが見られる。下總の地は長祿元年再び亂れんとしたけれど、常縁の威風に壓せられてそれも程なく平定した。常縁六十七歲の年、やがて應仁の亂が勃發した。常縁は當時、先祖胤行が承久二年拜領した美濃の國山田の莊（郡上城）を相續してゐたが、戰亂の紛れに、將軍の近臣齋藤妙椿なるものにより應仁二年九月奪取されてしまつた。山東に孤栖する常縁は、祖先以來傳承の地を奪はれた事を甚だ悲しみ、亡父の冥福を祈りつつ悲憤の歌一首を詠んだ。この歌が同席してゐた濱春利の口からその兄康慶へ、康慶から更に妙椿へと傳へられ、その

文明四年六月十七日

東常縁自筆「古今和歌集」奥書（伊達伯爵藏）

同情を得て返却を受け得たといふ。ともあれ常緣は家督を子に讓り、上洛したのが四月、翌月完全に傳領を授けられたのであるが、同時に薙髮の志を遂げた。以後法號素傳を以て呼ばれてゐる。歸洛後、宗祇との師弟關係は一層濃厚になつた。彼は「古今和歌集」に立脚すべきを說いてその研究を勸め、文明三年に俊成女筆の古寫本などを入手するを得た。こゝに「古今集」解釋上の口傳を宗祇に施した。世にいふ「古今傳授」(別項)は、これを初めとするのである。その後、近衞政家・三條公敦・將軍義尚等の邸にも出入し、歌道の指導に任じてゐたが九十四歲の高齡を以て歿した。【著作】東野州聞書(略孝歌話とも)(別項)○東野州消息一卷(門弟宗祇の疑問に對し、解答した書簡。群書類從一四三所收)○東野州家集一卷(平常詠集の書名にて群書類從二六〇所收)○東常緣詠一卷(寫)(歌の排列に系立は無い。且つ後半は門下宗匠に關係者の詠を收む)。その他、彼の著述と稱されてゐる註解書には、「十口抄」(古今集に關す)、「東家三部聞書」(三代集に關す)、「新古今集聞書」(新古今集新抄或は四卷抄とも稱す)、「東野州拾唾」(拾遺愚草抄聞書とも)等がある。何れも簡單な語釋類に過ぎない。なほ「東野州墳記」と稱する小冊が圖書寮にあるが、東氏の由來及び父益之の傳を錄したものである。【作風】彼の詠の傳はるところ殆ど題詠であり、二條派の正路以外に脫する力を缺いてゐた。但し特殊の格調を自在に驅使してゐるところ、如何にも老練の感を抱かせる點もある。

あふぎみるこゝろを花にさきだてて今日もやあめ
になかめくらさむ(春雨)

いづくにか花は咲くらむはるの夜のねざめの床に
にほふやまかぜ(夜花)

ひとこゑにおどろかされてあかつきの我にまとふ
山ほとゝぎす(郭公)　【齋藤(淸)】

【參考】野史○鎌倉大双紙○安齋隨筆○長春隨筆○卯花園漫錄○白石紳書○一話一言○閑窓漫錄○其昔がたり○醉月庵國書漫抄

椿姫（つばきひめ）飜譯小說【譯者】長田秋濤【原作】小デュマ、即ちアレキサンドル・デュマ・フィス作「ダアム・オウ・カメリア」【刊行】明治三十六年五月。初め同二十九年五月から雜誌「白百合」に發表されたが、廢刊のため完結に及ばなかつた。

【梗概】有馬靜太郎(アルマン・デュヴァル)といふ純眞熱情的な青年が、後藤露子(マルグリット・ゴオチエ)といふ娼婦と戀に陷るのが發端である。露子はその美貌と豪奢とで巴里中一二と指を折られるほどのそれ者だのに、最初は有馬青年の純情に絆されて、有馬に許してゐるうち、却つて自ら狂ほしい程有馬を愛するやうになる。さうしていろ〳〵複雜な出來事や障碍やを押しのけて、二人は世間の噂を外に、巴里に近い田舍に同棲する。有馬の父は世間の噂に心配して巴里に出て來、息子にあつて、女を思ひ切らせようとする。有馬は父の言葉に動かされるが、愛の力は、父の言葉をきかぬ。父は密かに露子に逢つて息子を思ひきつてくれと賴む。露子は心ならずも賴みの切ないのに動かされ、有馬には緣切の手紙をやつて又元の泥水稼業に還る。有馬は父と共に田舍に歸るが、露子の樣子を見に巴里に戾る。さうして露子の眞情を誤解して、他に情婦を作つて露子を苦める。露子も餘りの苦しさから有馬の父との約束に背いて一度有馬と元々にならうとしかけるが、思ひ切つて英國に渡る。有馬は露子の仕打に、憤恨と煩悶を抱いたまゝ東方漫遊に出る。有馬の留守中に英國から歸つた露子は、心の苦惱から持病の肺病を昂じさせて、有馬の名を呼びつゝ淋しく死ぬ。急を聞いて歸つて來た有馬の手には、形見として病床日記が殘る。

【解說】譯者秋濤は、この小說を紹介する理由四ケ條を擧げてゐる。(一)十九世紀に於て五指に屈せらるる傑作の一なること、(二)近世の寫實主義の先驅となつたこと、(三)不幸者に對する作者の洪大な同情、社會に對する不平及び一種異彩ある道義の念、云々。「椿姫」が日本に紹介されたのは、明治六年五月、郵便報知新聞に出た「成島柳北寄寓書簡」が最初である。同十八年の「新編黃昏日記」は飜案ではあるが、この小說を最初に日本に傳へたもの、ただ末段がめでたく終つてゐる。飜案者は小宮山桂介(昭和五年三月歿)、これに署名してある天香道人・醒々居士は、共にその號である。最初の完譯は加藤紫芳の譯であらう(明治二十二年刊。二十年頃、讀賣新聞所載といふ)。秋濤の譯は第二の完譯である。そして、やゝ日本臭くし過ぎたと思はれるところはあるが、簡淨で緊密で、實に練熟した名譯文であり、この後數種出た「椿姫」の譯は、皆これに據らぬものはない。今日多少是正すべき所があつても明治飜譯文學界の古典的名譯の一たる聲價は落ちない。【柳田(泉)】

坪內逍遙（つぼうちせうえう）小說家・劇作家・評論家【本名】雄藏。幼名は勇藏【別號】小羊子【閱歷】安政六年五月、美濃國加茂郡太田村(當時尾張藩代官所在地)に生れた。父は坪內平之進、母はミチ。長兄金次郎(後に信益)、次兄貢三郎(後に義衞)がある。明治二年、十一歲の時、父が代官をやめて歸農し、名古屋郊外、笹島村に移住するに及び、寺子屋に入學、次いで明治五年、十四歲の折、私立白水學校に通學して漢籍を學んだ。同年八月、次兄と共に、更に愛知洋學校に於て英語を修め、翌六年、縣立成美學校(翌年、官立愛知英語學校と改稱)に移つた。その頃の同窓に八代六郎・三宅雪嶺がある。當時外人講師の一人、マックレランから「ハムレット」の一節を聞いたのが、沙翁を知つた最初である。九年八月、縣の選拔生となり、加藤高明等と共に上京、上六番町の長兄信益の家に寄寓した。その年九月、開成學校に入り、翌十年四月、同校が東京大學と改まつてから、その寄宿舍に起臥し、十二年、文學部本科(政治經濟科)に入つたが、嗜好・趣味が文學にあるので、前年來、英國小說を貪るやうに讀み、スコットの「ランマムーアの新婦」の一部を意譯した。十三年、前記スコットの作を「春風情話」(別項)と題して刊行した。この頃、同學の高田半峰(早苗)も文學に興味を持つたので、各自分擔してスコットの「レデー・オブ・ザ・レーキ」を譯し、且つ本鄕元町の進文學社で英語を敎へたりした。十五年(二十四歲)父を失ひ、大學の卒業試驗に當つて、不得手な政治・哲學の二科が不成績のため落第したが、翌十六年七月、大學を卒業して、文學士の稱號を得た。これより先、逍遙は依然進文學社に關係する傍ら、本鄕元町に寓居して、年少學生七八名を監督した。その頃、「該撒奇談」を譯了して、一層沙翁の

坪內逍遙

作品に親しみを加へた。同年九月、高田早苗の勸誘により、私立東京專門學校講師となつたのが、今日の早稻田大學との因緣を結ぶ端緒である。當時は、まだ文學科がなかつたので、西洋歷史及び憲法論などを講じた。翌十七年、リットンの「リエンジー」譯を起し、「春窓綺話」及び「自由の太刀餘波銳鋒」(各別項)を公刊した。明治十八年は、逍遙に取つても文壇に取つても意義ある年だつた。この年、新文學論とも云ふべき「小說神髓」(別項)を公にし、且つ小說「書生氣質」(別項)をパンフレットの形で續々世に出した。「書生氣質」の公刊と共に逍遙は文壇の流行兒となり、明治の寫實小說の先驅者となつた。十九年一月に出した「妹と脊鏡」(別項)も、やはりパンフレットとして出したのである。この前後、頗る著作に力め、「慨世士傳」(別項)「內地雜居未來の夢」「朗蘭夫人」などを出版し、且つ齋藤綠雨・長谷川二葉亭・饗庭篁村・矢崎嵯峨の舍・關根正直等と相知るに至つた。二十年、讀賣新聞の客員となり、翌二十一年、小說「外務大臣」を同紙のため執筆したが、二ケ月餘で中絕した。この年「國民之友」に、短篇小說「細君」(別項)を書いた頃から、漸く自省し、藝術上の苦悶を深く經驗すると共に、斷然小說に筆を絕つことに決した。それは文學生涯に於ける一轉機で、小說から演劇へ步みを移し、先づ行き詰つてゐる劇界及び劇文學のために、改善の方途を講じようと志した。翌二十二年九月、東京專門學校が文學科を設立するについてその主腦者となり、和漢英三文學の調和を目的として學科の配置等に頗る注意した。その最初の入學者中に金子馬治(筑水)があり、第二期には島村抱月等がゐた。かうして一方において、文學上の人材養成に努むると共に、他面、演劇改良に力を注ぎ、この年九月、芝離宮で開かれた演劇協會委員會にも列席した。翌二十三年、親しく學生のため、自宅でシェークスピヤを講じ、なほ一二の私立學校で敎鞭を執つたが、間もなくやめて專ら早稻田の專門學校のために努めることに決した。二十五年「都新聞」の依賴で、飜案物「二心」「電小僧」の小說などを書いたが、三ケ月ほどで筆をとめた。これより先、二十四年十月、その主宰のもとに「早稻田文學」(別項)を發刊し、二十六年、同誌上に「美辭論稿」(別項)を揭げ、二十七年には學生の戶外劇を催し、別に近松研究會を起したり、自宅で朗讀會を開いたりした。かくて二十九年、早稻田中學創立に與つた關係から同校敎頭となり、多忙のため「早稻田文學」を休刊した。この年から翌年にかけて「桐一葉」(別項)「牧の方」「文學その折々」(別項)「梨園の落葉」(別項)等を刊行し、それと前後して文學博士の學位を授けられた。三十五年、早稻田中學校の校長に就任したが、この間、「英文學史」を刊行して日本に於ける英文學界を裨益する所大きく、且つ新舞踊劇の創作に志すに至つたのである。同年、高山樗牛がニイチェを熱心に鼓吹して、青年を誤らんとすることを憂ひ、「馬骨人言」(別項)を讀賣新聞に匿名で揭げ、大にこれを論難した。翌三十六年、一身上の事情で、早稻田中學校長を辭すると共に、新文藝運動の準備を始め、三十八年、文藝協會(別項)を設立した。大正二年夏、協會を解散する迄種々協會の事に盡力した。同四年、早大敎授を辭し、主として沙翁劇その他の著譯に努めた。同九年、文化事業研究會を起し、ページェントの創始に熱中した。十二年、文化事業研究會を解散、十四年、「逍遙選集」全十二卷、別冊三卷を出した。昭和三年に至り、明治四十年以來、刊行を繼續し來つた「沙翁全集」を漸く譯了して、日本第一の飜譯事業の完成を告げた。なほ昭和四年、その古稀祝賀の意味にて演劇博物館(別項)が設立された。

【著作】逍遙選集十二卷、別冊三卷○沙翁全集四十卷(早稻田大學出版部)。【小說】當世書生氣質○妹と脊鏡○細君○一圓紙幣の履歷ばなし(以上各別項)。【戲曲】桐一葉○沓手鳥孤城落月○役の行者○新曲浦島(以上各別項)○新曲かぐや姬○名殘の星月夜○義時の最期等。【飜譯】春窓綺話○自由の太刀餘波銳鋒○慨世士傳○人肉質入裁判(以上各別項)。【評論書】小說神髓○文學その折々○馬骨人言○小羊漫言(以上各別項)。【其他】わがページェント劇○劇と劇文學○家庭兒童劇等。なほ西洋史に關する著作が數種ある。

【批評】四十餘年間に亙る文學生涯を手短かに批評することは容易でない。唯それを前期・中期・後期に區分して考へると、前期は小說及び文藝評論を主とした時代、中期は演劇改良に專心すると共に新文藝開拓に努め、傍ら倫理研究に力を割いた時代、後期は演劇改良上の抱負を實地に試み、且つ劇文學の創作・飜譯に主力を集中した時代といふことが出來よう。その前期に於ける小說家時代は永く續かなかつたが、文藝評論方面は、穩健中正を旨として「早稻田文學」創刊より休刊頃に至る前後まで、殊に油の乘つた樣子を示した。實際逍遙は鷗外の理想派に對し、現實派の立場から、現實の上に立つて時代の文學現象を具體的に記錄し、批判するを旨とし、その批判の領域は廣汎であり、批判の態度は親切と嚴肅と和氣を兼ねそなへてゐたので、黎明期の明治文壇が、逍遙の提唱と價値づけによつて、どれほど啓發され、感化されたか知れなかつた。この點だけでも逍遙は明治文壇に偉大な功績を殘してゐる。中期の演劇改良時代には脚本「桐一葉」「牧の方」「菊と桐」その他の創作を續々公けにし、新しい立場から演劇評論を行うて時代に先驅した。この時期に「演劇は敎化の一種である」といふ思想が既に現はれ、そこに一つの重要意義を示した。後期は文藝協會の創立と活動、ページェント劇の創始、沙翁全集の完成などに精力を傾け、戲曲「名殘の星月夜」「役の行者」「新曲浦島」(別項)「義時の最期」「沓手鳥孤城落月」(別項)等、作るところ多かつた。この間、總じて演劇上に於ける諸々の主張を率先して實地に行つた趣が見える。云へば必ず行ひ、及び絕えず反省しつつ新しい時代を劇界に作つて行かうとする傾向が、過去に於ける文藝活動を特色付けてゐるやうに思ふ。その仕事は多方面に分岐してゐるが、これを大觀すると、やはり、劇文學の開拓、演劇の革新が、その中樞をなしてゐる。その他、逍遙が敎育家としての一面にも少からぬ功績があつて、多くの人材を養ひ、その門下から、故人としては島村抱月・綱島梁川・中島半次郎・土肥春曙・東儀鐵笛等を出した。且つ倫理研究に於ても亦、在來見ざる新境地を開拓し、文學と敎育との接近に貢獻する所があつた。即ち文藝敎育家として卓越せることを示してゐる。【高須】

妻（つま）「生」を見よ。

褄重嘩菊月（つまがさねかねてきくづき）脚本　五幕十

二場　世話物【作者】本屋宗七【通稱】おさん茂兵衛、磔刑のお駒【名稱】題材の事實を響かせた上に、上演の月を利かせた名題。【讀本】歌舞伎脚本傑作集第八卷・日本戲曲全集第四十一卷に所收【興行】文化十三年九月十二日初日、江戸中村座上演。

【役割】佃屋喜藏・魚賣り胸の喜三郎（三代坂東三津五郎）、大黑屋茂兵衛・城木屋娘お駒・尾花六郎右衛門（三代尾上菊五郎）、髮結ひ才三郎（五代松本幸四郎）、茂兵衛女房お玉（中村松江）、喜兵衛のおさん（二代澤村田之助）、城木屋番頭丈八（七代市川團十郎）、按摩赤松梅摘（坂東簑平）、城木屋庄兵衛（市川友藏）、秋月角太郎（中村傳九郎）。

【題材】文化十三年六月三十日の拂曉、靈岸島東湊町の家主武兵衛を、女房おひめが殺した。その罪を長八といふ者に塗りつけようとして發覺し、七月二十五日、品川で磔刑に處せられた。又同じ年の春、お玉ケ池の福島屋清右衛門といふ魚屋の猫が、主人の貧窮を思つて、兩替屋から小判を咬へ出したといふ珍らしい事件があつた。この二件を組み合せ、おさん茂兵衛と昔八丈の世界に作り込んだので、亭主殺しをお駒に嵌めたのは、原作の「戀娘昔八丈」（別項）が亭主殺しの狂言だからである。

【梗概】〔序幕〕（神田料理茶屋）お駒と才三が密會。才三、香箱を隱し持つてゐる。〔二幕〕（隅田川鞘堤）秋月角太郎は、尾花六郎右衛門が預つてゐる姫百合の香箱を才三に盗ませたが、才三は城木屋庄兵衛に預ける。庄兵衛は梅柳に毒藥を調合さす。大黑屋茂兵衛は鎗田勇藏より借銀に預かつた曼陀羅を才三に奪はれる。〔同夜座敷〕茂兵衛は深い仲の藝者櫂のおさんを使つて、番頭丈八から、巧く二百兩捲き上げる。と思つたは却つて丈八の計略で、おさんは角太郎に取られてしまふ。（白銀内場）曼陀羅の紛失。女房お玉の心配。茂兵衛は角太郎を追つて來て、誤つて中間那助を殺す。〔三幕〕（城木屋）丈八、お駒を口説く。佃屋喜藏、お駒の許へ二百兩の持參で聟入り、才三の嫉妬。喜藏は弟喜三郎へ茂兵衛の二百兩償ひの金を遣りたいため、庄兵衛から材木代金として勇藏へ納める二百兩を借りる筈だつたが、双方とも酩酊なので失敗。梅柳はそのため惡事が顯はれて勇藏に縛られる。丈八は、實意を明かして庄兵衛を諫言。才三・庄兵衛は喜藏を毒殺する相談、お駒立ち聞く。喜藏毒酒を飲まんとするを茂兵衛が助ける。（才三郎内）喜藏忍び込んで、才三が庄兵衛から受取つた香箱を盗んだが、お駒が才三に飲ませようとした毒を呑んで苦しむ。お駒は才三と思ひ殺す。お駒の妹お常の飼つてゐた猫が香箱を咬へ出す。〔四幕〕（鈴ケ森）亭主殺しで磔刑になつたお駒の靈が、お玉を害せんとする才三郎を妨げる。（お玉ケ池魚屋）腕の喜三郎と妹お玉が見た夢。匿まつてあるおさんへお玉の恨み。おさんの伯父尾花六郎右衛門が來て許嫁の角太郎を嫌ひ、家出したおさんの首を打たうとする所へ、猫が香箱を咬へて駈け込む。才三は贋の曼陀羅を喜三郎に渡して、おさんを捲き上げる。（裏手）お駒の亡靈現はれる。（喜三郎内）お玉は、身を賣つて二百兩屆ける。お駒の亡靈、香箱の鑑定書を喜三郎に渡す。〔大切〕（櫻の馬場）おさん茂兵衛の道行。清元「由縁の暦歌」。（明神坂）茂兵衛は才三を捕へて曼陀羅を取返す。

【解說】お駒とおさん茂兵衛の二派に本筋が分れてゐるが、これは當時の作者の常套で、菊五郎に男女二役を勤めさせたいためである。三面記事をうまく取込んだ手際は巧である。全體としては散漫に流れてゐるが、お駒を淫奔な女のやうに書いたのは面白い。香箱を取るためといふのは、俳優への言ひ譯である。序幕の料理茶屋も、當時のスケッチとしての興味がある。（渥美）

妻木（つまき）　句集　四册【著者】松瀨青々

【本稱】青々句集　妻木【刊行】明治三十七年十一月より三十九年一月に至る。【解說】明治期に於て作者が生前に自選句集を發表した先驅といふべく、古來可なり問題とされたことだけに、この句集の刊行は當時の俳壇に物議の種とすらなつた。著者自らもそれを豫期してゐることを自序に告白し、更に「我それ穀の事は遠矣。唯我句を一册に集めて我見たき計り。數星霜の拾ひ捨をこゝに搔き集めたる爪木云々」といつてゐる。春夏秋冬それ〴〵乾坤・草木・生類・衣食・祭祀に分類し、秋之部の卷末には、同號句の辯、題註等を附載してある。生前句集發表のことなどは兎に角、青々の句作旺盛の時代の作風の全容を窺ひ得る點に於て、本集の價値は大である。（白田）

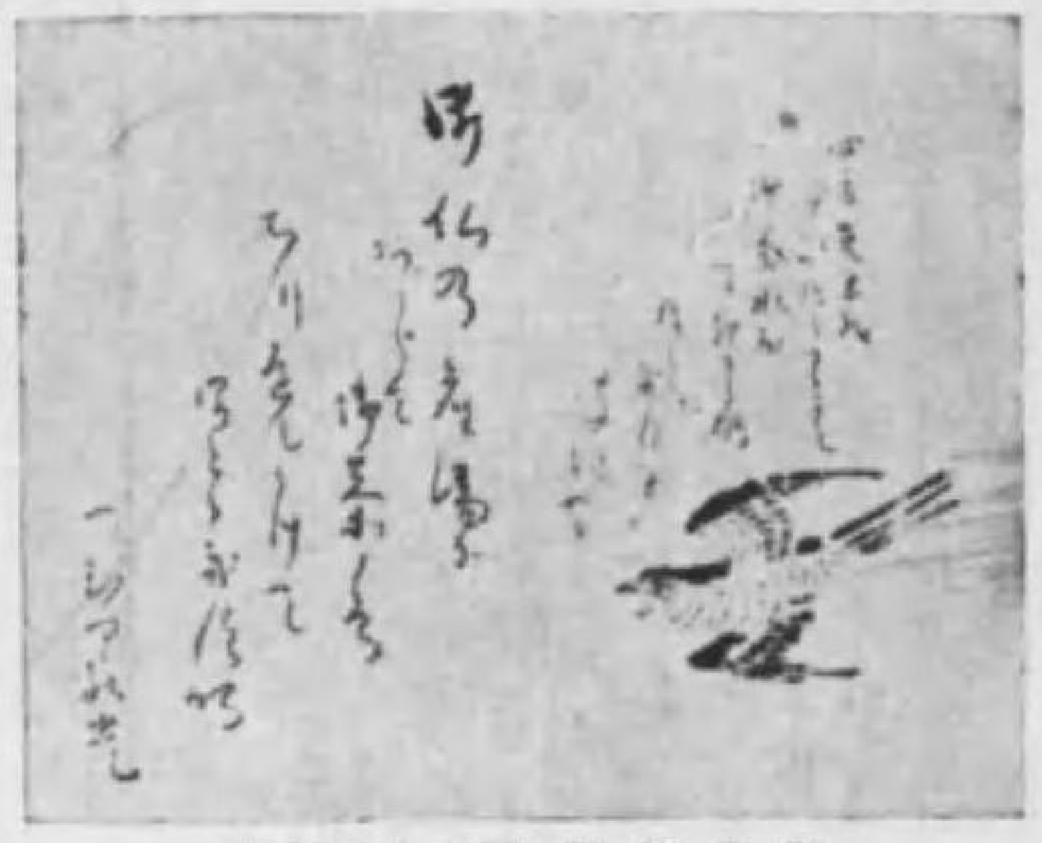
褄模樣沖津白浪（つまもやうおきつしらなみ）　合卷　四編【作者】鶴屋南北【畫工】五渡亭國貞

【名稱】女性の盗賊をほのめかしたのである。【刊行】文政十一年【讀本】大南北全集第十七卷所收。【題材】因幡小僧新助、日本左衛門（濱島庄兵衛）と云ふ江戸巷說で有名な二盗を題材にしたもの。神劍鳴丸が酉年の人の血に染まれば、忽ち鵜聲を發し、眼病が治すると云ふ小說話は、脚本草雙紙に散見する趣向であるが、既に同形式の說話が京傳作「敵討兩輪車」（文化三年）、馬琴作「墨田川梅柳新書」（文化四年）、栗杖亭鬼卵作「今昔庚申譚」（文化九年）等に見えてゐる。

【梗概】全篇芝居の臺帳に擬せるもので、四幕六場より成つてゐる。東山義政の時、遠州月本藩の家中に濱島幸兵衛と云ふ侍があつた。大阪藏屋敷勤番の折、島の内の藝子小萬と深く契り、懷妊するに至つた。然るに主命で主家の重寶峰藥師の尊像、鳴丸の劍を東山殿へ獻上のため二品を守護して遠州から京都へ急ぐ途中、荒井宿で盗まれた。一時切腹せんとしたが許嫁菊川の兄中村左膳の忠告に由り、日延べを願ひ父逸當の身の上を依賴し、寶物探索に出かけた。小萬は大に驚き奉公の暇を貰ひ遠州さして來る途中、伊勢路で因幡幸藏と云ふ賊に捉へられた。子を產むまで許してくれと同棲するうち男兒が產れた。約束通り妻になれと迫る幸藏を或る夜殺害し、子分等に仔細を語り、遂に賊の首領となつた。或る日月本家の侍篠原一學、遠州岸ケ崖金佛寺に來り、住職雛石和尚に無銘の刀の一杯入つた長持を預けた。これは百姓所持の刀から重寶鳴丸をさがすためである。實はかの重寶は一學が法印今鋒慶天狗坊に盗ましめ、武藝の仕合に怨みある幸兵衛を失敗せしめんとしたのである。併し天狗坊は褒美が少いので寶劍のみ渡し、藥師の尊像は渡さない。そこで五十兩を與へ改めてこの二品を揃へ、和尚へ預けた。小萬、女形姫之助と名乘り、旅役者の拵へで寺に泊らして貰ふ。和尚、その美しさに迷ひ酒宴を催す。餘興に繩ぬけを敎へると言ひて和尚等を縛り、小萬は因幡幸藏と名乘り子分の面々も來て寶物を捜し、僞物を摑まされる。盲目になつた幸兵衛も來合せたが、目が見えぬので眞僞を調べる事も出來ず、而も小萬と出會つた事も双方心づかぬ。その後、琴三味線の師匠となつてゐる小萬の處に幸兵衛は盲目の浪人體で來て門口に袖乞をする。小萬見つけて再會の歡びをなす所へ、許嫁菊川、下郎軍平も來り合し、兩婦幸兵衛を中に爭うたが和解した。菊川は金で尊像が買へると聞き、賺かるゝとは知らず、身を賣る決心をして連れ行かれたが、實は法印の惡計であるとわかり、天龍川に投身して死んだ。その夜希望も失せて切腹せんとする幸兵衛の側にその幽靈が現はれて留める。菊川の懷にあつた尊像は眞物であり、寶劍は小萬が偶然持つて居り、父逸當はその寶劍で小萬の子を斬れば酉年產れの血に染みて眼病治すとの傳說通り、幸兵衛の兩眼が癒え、その刀が寶劍なる事明瞭となる。一學の姦計も密書により露見して囚はれる。因幡幸藏の姿で斬られた小萬も、女姿を現はし、子と共に幸兵衛父子に名殘を惜しみつつ絕え入る。

【解說】南北が劇作の傍ら、草雙紙を發表し始めたのは文政五年頃からで、多くは脚本に似通ふものである。本書も全く臺帳になつてゐるが、この形式は烏亭焉馬・柳亭種彦に依りて既に試みられてゐる。書中、幽靈の現はれる構想は、南北としては寧ろ平凡な方で、その陰慘怪奇なものとしては、同じ草雙紙の「怪談磐倉萬之丞」（文政十一年―天保二年）をあげねばならぬ。本書の趣向の一部は、既に文政九年秋、中村座書卸し「曾我中村穪取込」に發表したものであり、三代櫻田治助作「新板越白浪」（鬼神のお松）は、この書の人名を變更したに過ぎない。なほ本書は每丁必ずしも挿繪を入れず、本文の多い點は草雙紙の型を脫してゐる。蓬萊山人校合とあるのは、二世烏亭焉馬であらう。（山崎）

頭光（つむりひかる）　狂歌師【本名】岸誠之。通稱宇右衛門【別號】文笑・桑揚庵・巴人亭【生歿】寶曆三年江戸に生れ、寛政八年（二四五六）四月十二日歿す。享年四十三【法名】聰賢齋佛響素光居士【墓所】駒込瑞泰寺【閲歷】父は豐岡侯に仕へてゐた。光は龜井町の町代を勤め、傍ら一筆齋文調に就いて浮世繪を習ひ、齋名を文笑と號した。世間流布の浮世繪師傳に、光を七十歳で歿したとしてあるのは、この師文調の享年と混同した誤りである。天明初年よりまた狂歌に遊んで、狂歌四天王の一人と呼ばれ、その社中を伯樂側と稱し、初めは宿屋飯盛・淺草市人・尙左堂俊滿・酒月米人等も皆この社中に屬してゐた程に勢力があつた。名吟も少からぬ中に、「時鳥自由自在に聞く里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里」の一首が殊に人口に膾炙してゐる。この歌は門人等が石に刻し、その碑を日暮里の妙隆寺に建てて置いたが、同寺域が一市人の有に歸すると共に、碑石は他に移されて所在不明となつた。寛政五年には蜀山人（四方先生）より巴人亭の號を讓られ、享和二年には桑揚庵の號を門人眞砂庵千則に授與し、後、專ら巴人亭と號してゐたが、その歿後巴人亭は淺草市人が受け繼いだ。辭世は、「ひと聲は丸では聞かぬほとゝぎす半分參の曉のころ」といふので、瑞泰寺地内の八角形の碑面に、この歌が刻してある。【著書】○狂歌桑の弓一册（寛政元年刊）○狂歌上段集二册（寛政五年刊）○繪本譬喩節一册（寛政四年刊）○狂歌太郎殿犬百首二册（同上刊）○狂歌春の色一册（寛政六年刊）○晴天闘歌集二册（寛政八年刊）○莵道園（隨筆）五册（寛政年間刊）（野崎）



頭光筆蹟（蜀山人判取帳）

積戀雪關扉（つもるこひゆきのせきのと）「關の扉」を見よ。

通夜物語（つやものがたり）　小說【作者】泉鏡花

【發表】明治三十一年九月大阪毎日新聞連載【刊行】明治三十四年四月、春陽堂。鏡花全集三卷・明治大正文學全集（泉鏡花篇）所收。

【梗概】畫師玉川清は、從妹のお澄と互に末は一緒になるものと心に許してゐたが、お澄が兩親に强ひられて、心弱くも陸軍大佐篠山六平太夫人となつてからは、身を持崩して吉原のおいらん丁山と捩所帶を張る。お澄の親久世友房の家は茶の湯の師匠で、名家に出入してゐる事を、この上もない誇りとしてゐるのであるから、素寒貧の清を一族の恥として罵つて止まない。恰も清を可愛がつてくれた伯父の死に際し、駈け附けた清と丁山を、友房は座に堪へられぬまでに侮辱したので、清はその時の事を言ひがかりにして、丁山と連立つて友房の家に强請に行く。お澄が居合せて清を宥める。その間に不在の友房は歸宅したが急死したと云つて奥に隱れ、僕に通夜の趣向をして伯母や六平太、家僕の者共が寄つて酒盛を始める。この意外な計畫に折角仕組んだ芝居のうらをかゝれ、一言もなくなつた二人を散々に罵詈した揚句、六平太は立ちかゝる清の左腕を挫折せしめたので、堪へ兼ねた丁山は、隱し持つた出刄庖丁で六平太の脇腹を抉る。丁山は清に畫を描く事をすゝめて、自ら乳房の下を搔き切つた。清はその褊袢の片袖を引きちぎり、血潮に浸して一氣に襖一杯に丁山の姿を描いた。隻腕の畫家玉川清の名は有名になつた。

【解說】作者の女性讃美の最も露骨に現れた作品の一つである。鏡花の世界では必ず美しい女が主要な人物となつて活躍する。作者理想の女は思ふ男のためには一切を擲げて捧げき、命を捨てて惜しまない。浪漫派の思想は常に自由を欲し、束縛を嫌ふ心持が强い。從つて血の通はぬ道德は潔く踏み躙る。强權や地位や名譽や一切の形式主義に對しては、極力反撥し蹂躪する。清は丁山の意氣によつて更生する事が出來た。「辰巳巷談」（別項）が纖細な線で鋭く描かれてゐる作品とすれば、これは寧ろ初期に見る感情の太い線で熾烈な熱情に燃え上つてゐる作品である。（水上・平松）

【上演】この作は、夙く大阪で岩崎蕣花脚色で上演され、東京でも上演されたが、明治四十年一月東京新富座で、伊井・河合の一座で演じたのが、やゝ整つた形のものであつた（七幕十一場）。伊井の清、河合の丁山、井上の六平太、藤島の友房、木村のお澄の配役であつた。この劇はその後再三上演され、常に河合の丁山、伊井の清であつた。然るに昭和四年三月喜多村の丁山初役で市村座で上演された時には、原作者補筆で小村雪岱が厚い信賴の下に、舞臺

裝置は勿論、隅々の小道具まで指導して初めて原作らしい味と趣を見せた。（以上久保田）

露がはなし（つゆがはなし） 噺本　五册【作者】露五郎兵衞【名稱】角書に（御存知輕口）とあり、題僉に「きしあひなし」とある。輕口は當時用ひられた笑話の義、「きしあひなし」は連歌の術語で、轉じて當り障りのない義。【刊行】元祿四年【諸本】近世文藝叢書第六笑話・落語滑稽本集（近代日本文學大系所收）【內容】露五郎兵衞は專門の落語家であつて、落語の作家としては必ずしも勝れた才能を持たなかつたらしい。本書中「醒睡笑」（別項）より材料を取つたもの約二十篇、「昨日は今日の物語」（別項）より取つたもの二篇がある。大體他書より取材したものは、表現を平易にし、當時の風俗に適するやう改作してある。その他の自作と覺ゆるものは、興行地たりし京都を中心とし、當時の見聞から材を取つたらしく見える。「淚は人も時ぬるたね」（卷二第九）に、「あれあれあそこに衣を著て、あみ笠めしたる人は、都にかくれなき歡念佛說經ときの林清といふ人なり」と云つてゐるのは、當時四條河原で歡念佛を語つて、露五郎兵衞と竝び稱せられた人氣者林清である。「大齒と太鼓の謂れの事」（卷一第七）、「鎭の丸がかうやく」（卷二第三）、「野郎の金剛念佛講」（卷四第二）で金剛（役者の男色）を說明してゐる等、皆當時の流行物を取材して聽衆に場當りしたものと考へられる。本書八十八項の笑話中、三十項が言語の遊戲に興味の中心を置いた滑稽であり、他の五十五項は內容が滑稽となつてゐる。辻咄として京都の聽衆を對照とした落語であるから、多くは京都に背景を置いて居り、當時の世相流行に銳敏な感覺が動いてゐる。例へば、「物のあはれは人の行末」（卷四第六）や、「始めてよばれし祇園會の客」（卷四第一）は當に浮世草子中に見出さるべき疎柄人物である。【影響】本書は當時有名な落語家露五郎兵衞（別項）の發表した噺本の嚆矢であるだけ、永く後世にまでその材料が影響してゐる。前述の「物のあはれは人の行末」は、「輕口浮瓢簞」（寬延元年）卷二に「非人の借上」として出て居り、本書卷二第十六「ひけふ者の喧嘩」は、「新話笑眉」（正德二年）に「かはつた相撲」、「今歳花時」（安永二年）に「立あひ」と題して飜案してある。本書卷一第二「京の何がし丹波へ聟入する事」は、「壽々葉羅井」（安永八年）に「干鯛」と題して飜案してある。卷五第六「此碁は手みせ禁」は、現今でも行はるゝ落語「碁どろ」の枕に用ひてある。（山崎）

梅雨小袖昔八丈（つゆこそでむかしはちじやう） 脚本　四幕　世話物【作者】二代河竹新七（默阿彌）【通稱】髮結新三【別名題】「二度晴着昔八丈」「昔編綾本場八丈」「囀小袖昔八丈」【諸本】默阿彌全集第十一卷所收【初演】明治六年六月、東京中村座。

【役割】髮結新三（五代尾上菊五郎）、白子屋お熊（岩井半四郎）、彌太五郎源七・家主長兵衞（中村仲藏）、手代忠七（坂東家橘）等。

【題材】噺家の春錦亭柳櫻が得意とした白子屋政談を脚色したもの。

【梗概】（序幕）白子屋の後家お常は、主人の死後、立ち行き難くなつた家運を立て直さうと、車力の善八の橋渡しで娘のお熊に五百兩の持參金附きの聟を迎へようとし、お熊の心も聞かずに結納まで取交して決める。處がお熊は手代の忠七と深い仲になつてゐたので、忠七に連れて逃げて呉れと賴むが、忠七は幼少から恩を受けた主家への義理立てから逃げ兼ねる。それを立ち聞きした髮結の新三は、親切ごかしに忠七を唆かしてお熊を連れ出させ、途中で忠七を蹴倒してお熊を奪ふ。忠七は申譯に命を捨てようとするが、そこへ來合せた博徒の親分彌太五郎源七に留められる。【二幕】彌太五郎源七は、善八に無理に賴まれて新三の家へお熊を取戻しに出掛けるが、もともと大金を取らうといふ下心があつてやつた事なので、新三は源七の出した十兩を叩き返して恥をかゝせる。けれどもその後で家主の長兵衞に訴へると脅されるので、三十兩の金で承知し、お熊を返してやる。【三幕】お熊は聟の又四郎を嫌つてゐたが、お常は又四郎の持參金五百兩をせつぱ詰つた催促で借財返濟へ廻してしまつた爲め、お熊にその譯を言ひ聞かせて得心させようとする。そこでお熊は覺悟を決めて死なうとし、それを又四郎に留められるが、白刄を爭ふはずみに誤つて又四郎の脇腹へ突き差す。永の年月恩顧を蒙つた下女のお菊は、これを見て主に代つて命を捨て、お熊の科をその身に引受ける。一方彌太五郎源七は新三に意氣地なしと言ひ觸らされ、而も子分の者まで恥しめられたので、深川閻魔堂橋に待伏せて新三を殺し、遺恨を晴らす。【四幕】彌太五郎源七は、大岡越前守の吟味を受け、後に殘る妻子の難儀を案じて覺えがないと言ひ張る。源七の世話になつてゐた忠七は一目なりと源七に逢はうと、奉行所の前まで來て善八に逢ひ、源七の妻子の哀れな有様やお熊が亭主殺しの仕置を受けるかも知れないと聞き、源七の罪を背負はうと御番所へ驅け込むが、越前守のために直ちに看破される。お熊はお菊を憐れんで白狀するが、越前守の寬仁な裁きで無事に濟む。源七はお熊の健氣な態度に恥ぢ入つて總てを白狀し、お常はその跡々を引受けると云つて、源七を安心させる。

【解說】大詰に、大岡越前守の裁決を附したのは、書卸しの時髮結新三に扮した五代菊五郎が、閻魔堂橋で殺されたきりでは心持が惡いといふので、加へられたものであるといふ。新三內の場に於けるすつきりとした江戶情調とも謂ふべき場面は、この作に於ける特色であつて、世話物中出色の情景と稱されてゐる。五代菊五郎の扮した新三が好評であつたことは言ふまでもないが、仲藏の扮した家主長兵衞が至藝を發揮し、新三の買つた初鰹の片身を貰つたのと、お熊の身の代金三十兩の半額十五兩を貰ふのとを掛けて、新三を鼻であしらふ件の如きは好劇家の間に稱揚され、そのためこの狂言が時として劇場內部の人によつて、「鰹片身」と呼ばれることさへある。

【參考】尾上菊五郎自傳○河竹默阿彌○續々歌舞伎年代記　（河竹）

露子姬（つゆこひめ） 小說【作者】石橋忍月【刊行】明治二十二年十一月、春陽堂。

【梗概】柳川男爵の愛孃露子は、小村井の摘草で學友達が岸村といふ俊秀美貌の青年紳士の噂するのを聞き、何となく懷しく思ふ。その歸途、露子の馬車が奇禍に遭つて水中に落ちたのを通り掛つた若い紳士が助ける。落していつた卷烟草入の中の名刺によつてその紳士が岸村だと分り、露子は岸村に戀心を燃える。或る日、新聞を見ると岸村錦三といふ美貌の大學生が、何者かに慘殺されて金品を奪はれたといふ記事がある。紳士の名は錦藏であつたが、だが戀に迷つた露子は、この學生を意中の人だと思ひ誤り、墓へ縋り悲しみに泣く。さうして根岸の別莊に籠つて有髮の尼のやうな生活に入る。或る日餘りの遣瀨なさに岸村を想ふ歌を吟みつつ琴を彈じてゐると、散步歸りの乘馬の紳士が馬を駐めて、その爪音に聞き惚れる。露子がふと二階から見下すと、門外の紳士が岸村そつくりなので、思はず岸村樣と呼ぶ。だが死んだ筈の岸村樣がと躊躇してゐるうち紳士は去つてしまふ。去る時に戀歌を二首殘して行く。岸村も人知れず露子を戀つてゐたのである。岸村は鬱晴しに妹をつれて日暮里に螢見に行き、露子と逢つたが、人目があるので名乘りあふ機會がないばかりか、露子の方で、誤解して妹を細君だと思ひ込む。だが露子の母の機轉から岸村の身許も人となりもよく分り、露子の誤解もとけて、浮木某とか氣取某とかいふ自稱戀人連の妨害も效なく、二人は結婚する。

【批評】忍月の代表作とされてゐるものだが、ありふれた型の才子佳人小說で、新人の作とは思へぬ程古いプロットであり、性格も描かれてゐず、心理解剖も淺薄、會話も生硬である。ただ行文に幾分の新味はある。この頃の世相の一端を見せるものとして讀めば頷けるが、有名な割に成功した作でない。（稻田（泉））

露新輕口はなし（つゆしんかるくちばなし） 噺本　五册【作者】露五郎兵衞【名稱】「露がはなし」（別項）の續編の意である。【刊行】元祿十一年【諸本】近世文藝叢書第六笑話所收【內容】八十七篇の笑話から成つてゐる。卷二の「入ぼくろの事」は、當時人氣のあつた所作事の名手若女方水木辰之助に取材し、卷五の「犬のまじなひ」は、「醒睡笑」（別項）卷一「鈍副子」中に出てゐる。卷四「利口すぎた話」は、「昨日は今日の物語」に大阪浪人の子の話として出てゐるのと全く同じ筋であり、既に「露がはなし」卷二「小僧が利口で却つてめいわくといふ事」にも取られてゐる。又本書と同年刊行の「初音草噺大鑑」（別項）にも、卷一に「九分十分日の欲」と題して出てゐる。本書卷一「八百屋のぐはんだて」と卷四「字の書やう」とは、全く同じ話である。卷五「かたきうちの仕出し」は「露がはなし」卷四の「物のあはれは人の行末」と類似の話である。一體に「露がはなし」より可笑味が足らず、材料が落ちるやうに思はれる。併し流石に落語の實際家であるから活きた材料を用ひて場當りに注意したらしく、卷二「一息に備前へついた」に「當六月發氣の頃」と書いてあるなど、實話を取扱つたものらしい。「入ぼくろの事」の話も京人には周知の事とて興味を惹いたに違ひない。【影響】卷一「八百屋のぐはんだて」及び卷四「字の書やう」は、更に「聞上手」（別項）、第二編に「書の字」と題して出で、式亭三馬の「浮世床」（別項）、初編卷中に聚吉賢藏の對話となつて用ひられてゐる。卷二「上戶のこたつ」は、現存の落語「あんまの炬燵」に採られてゐる。卷二「たなつるやどがへ」は、「鳥の町」（安永五年）に「釣棚」と題して、そのまゝ用ひてある。卷三「綸心ある人批難をいふ」は、「高笑」（安永五年）に「綸師」と題して取つてある。卷四「夜食のめしばち」を飜案して、「鼬の子餅」（別項）に「野等息子」と題し出してある。卷四「主にかゝりの事」は、「輕口編藏主」卷三に「親がかり」と題して出てゐる。謠曲を上がかりか下がかりかと尋ねられ、「主にかかり」と答へたのを、「親がかり」と直してある。（山崎）

露五郎兵衞（つゆのごろべゑ） 落語家【號】露休・雨洛【生歿】寬永二十年に生れ、元祿十六年（一三六三）の秋に歿した。享年六十一。又柳亭種彥は「足薪翁記」に、「露の五郎兵衞新ばなし」の享年六十九歲說を否定し、寶永四年の印本「輕口露土產」の序、「都の名物入道露休、過にし元祿の末の秋、闘浮を去りし追善に云々」の句を證とし、元祿の末の秋、即ち元祿十六年を歿年とした。なほ近世文藝叢書第六の解題に五月九日歿とある。【閱歷】幼年時代や青年時代のことは知る由もないが、「近世奇跡考」には、延寶・天和の頃より既に辻ばなしの祖として落語を語つたことを記してあれば、三十歲臺から有名になつたと思はれる。延寶五年板本「かくれ笠」に、「尼かゝが耳におちくる初嵐　未昌」、「眞葛の露や質におくらん　似船」の俳諧から見ても、うなづかれる。即ち祇園眞葛が原や北野に出でて辻ばなしをしたのである。北野に出てゐたことも、享保十三年刊の「徹雨の梅」に、人を集めて落語を語つてゐる圖を入れ、「人草や來た野は露の五郎兵衞」の句を記してあるによつても知られる。「產毛」に四條河原のことを記し、「林清が歡念佛、肩を褪よとむすびたる能芝居、太平記よみ、諸の講釋、露の五郎兵衞が夜談義、大的小的楊弓の射場、からくり的に鬼の出るところ云々」とあり、かうしたことから見れば、五郎兵衞の生活も放下師の仲間であり、閱歷も純然たる町人の出であつたと思はれる。併し數萬の聽衆に腹筋をよらす都の名物入道露休と稱せられ、支考の「本朝文鑑」や、芭蕉其角の句にも、「命にかゝる五郎兵衞の露」と吟ぜしめたことを思へば、如何に當時京洛に於て有名であつたかが窺はれる。彼は落語をして街頭に進出せしめた祖である。安樂庵策傳（別項）は、座興として笑話を語つたものであるが、五郎兵衞は純然たる落語家として語つたのである。從つて彼の落語は可笑味で一貫してゐる。言語的洒落や動作的滑稽もあり、彼の話稿がかなりの數に上つてゐるのを見れば、彼も落語史上、重要なる地步を占めたものと言はねばならぬ。【著作】露がはなし○露新輕口ばなし○露の五郎兵衞新ばなし○露休ばなし○露休置土產（各別項）　（山崎）

貫之（つらゆき） 歌人（三十六歌仙の一）【姓】紀氏【歿年】天慶九年（一六〇六）【閱歷】寬平五年、勅撰集撰進の詔を受け、友則・躬恒・忠岑

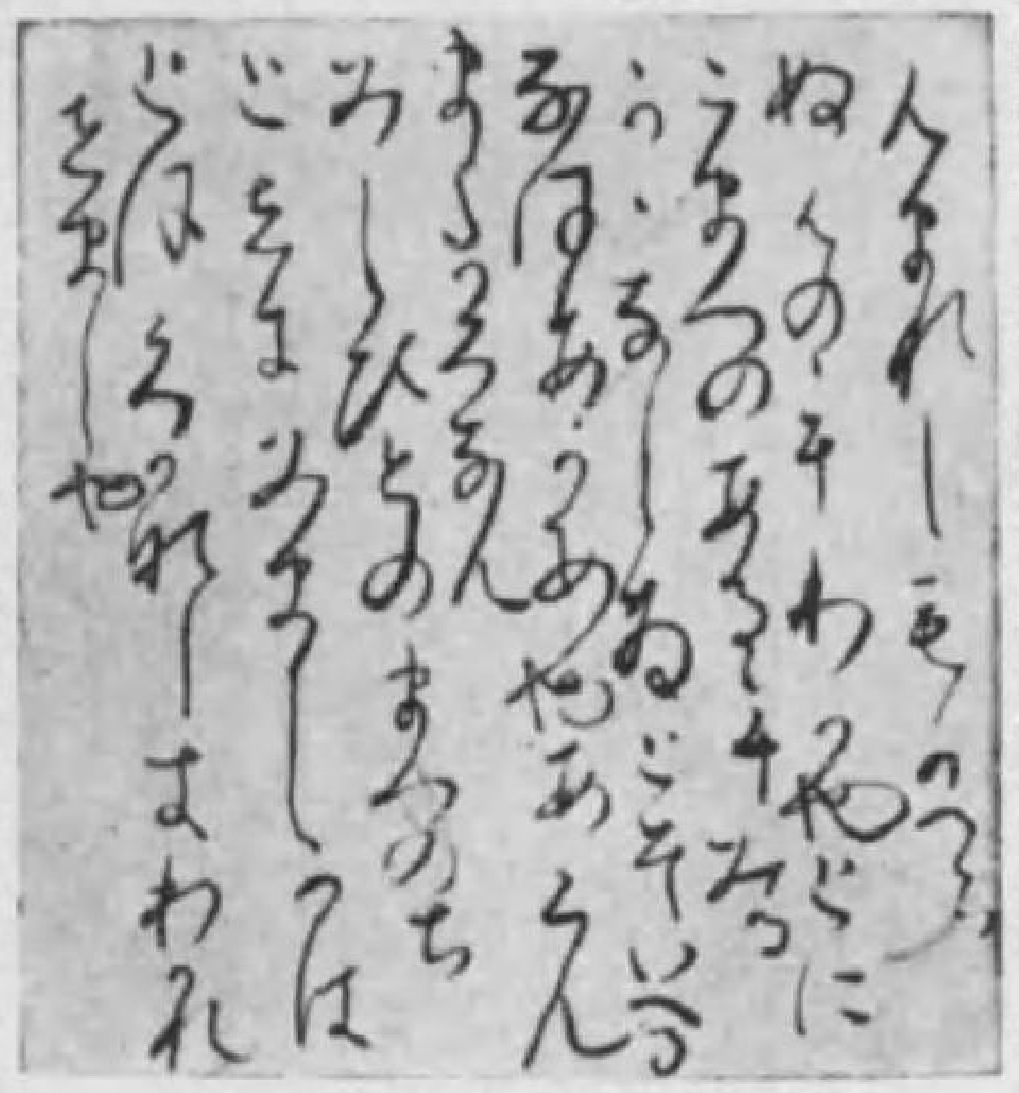
武內宿禰…國長—興道—本道—望行—貫之—時文
名虎—有常—有友—友則—女

等と共に編纂に從事し、友則歿後は專ら棟梁として經營し、「古今集」二十卷を撰し、自ら彼の有名なる序をも附して奏上した。彼等は撰官の身を以てこの大任を成就したのみでなく、撰者の歌を加へることも多く、貫之の如きは百首の多きに及び、大にその自信と意氣とを示した。次いで彼は延喜七年九月十日宇多法皇の大井河行幸に供奉して九題九首の歌を上り、その序を書いた。歌は散佚したが、歌人が七人で六十三首であつたことが分る。序は現存し、署名に內膳典膳正六位上紀朝臣貫之上とある。彼が當時歌人として認められ

延喜五年	古今集撰進。御書所預
同　七年	內膳典膳。大井河行幸歌
同　十年	少內記
同十三年	大內記。亭子院歌合
同十七年	從五位下。加賀介（家集）
同十八年	美濃介
延長元年	大監物

延長七年	右京亮
同　八年	土佐守。新撰和歌
承平五年	土佐日記
天慶三年	玄蕃頭
同　六年	従五位上。師輔の代作
同　八年	木工權頭

てゐたことは、天慶六年師輔が忠平から借りた魚袋を返す時の歌を、わざ／＼貫之の家に赴いて頼んだといふのによつても分る（大鏡・貫之集）。先に撰した「古今集」から特に秀作を拔き出し、これを別の組織によつて編纂すべき勅は、兼輔を通して下されたが、偶々土佐守に任じたので任地に於て編纂した。即ち「新撰和歌」四巻である。任が果てて承平五年都に歸る時の日記が、「土佐日記」である。京では既に天皇・法皇、共に崩御せられ、兼輔も亦薨去してゐたので、「新撰和歌」は奏上する由もなかつた。兼輔は初め躬恒と交りがあり、貫之は躬恒の紹介に依つて兼輔を知るに至つた（後撰集）。「貫之集」には宮廷並びに權門のために詠み奉つた屏風歌や賀の歌が多く、交際上の贈答歌も多く、身の不遇を歎いて要路の大官に訴へたものもある。歿する直前には源公忠朝臣の許に、「手に結ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にぞ有りける」と詠んで贈つたが、間もなく歿した。嘗て紀伊國に下り蟻通の神前にて、馬が「死ぬべくわづらう」たので、一首の歌を手向けて無事に通る事ができたといふ傳へもある。代表作「櫻ちる木の下かげは寒からで空にしられぬ雪ぞふりける」は「古今」にも「後撰」にも入集せず、「拾遺集」に於て始めて入集したのは撰者五人の失策であるといはれてゐる（袋草紙）。「結ぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人にわかれぬるかな」は、存命中既に有名であつたことが家集に見える。【著作】勅撰集に入る歌は、古今集短歌九十九首、長歌一首、旋頭歌一首（異本は多少の相違あり）、合計百一首にて集中最も多い。後撰集七十七首（最多）、拾遺集百三首（人丸と共に最多）、新古今集三十二首、新勅撰集以下凡そ百二十九首、總計凡そ四百四十二首。多少の重出はあらうが貫之集七百餘首の過半である。私撰集に入るものは新撰和歌四十五首、金玉集八首。○土佐日記（別項）○古今集序○新撰和歌（別項）四巻 ○大井河行幸和歌序 ○家集「貫之集」（別項）十巻。その他「萬葉集抄」五巻（八雲御抄）、貫之自筆の「古今集」と稱するものが平安朝中期以後傳來されてゐたが現存しない。今日なほ高野切が傳貫之筆といはれてゐる。



定家摸寫貫之筆跡（前田家本土佐日記）

【批評】彼は情熱的でなくて、學者的である。奔放でなくて穩健である。感覺的でなくて思索的である。友則・忠岑に比較すれば、藝術に對する理解をもつてゐたが、敏行の如き強調的な表現を用ひず、躬恒の如き弾力のある表現を用ひず、遍昭の如き客觀描寫を行はず、業平の如き力強い表現を用ひず、兼輔の如き餘裕ある態度をもつてゐない。如何なる特色もなく中庸を歩いた。後人は貫之の態度を如何やうにも解釋する事ができ、何人も或る程度の共通點を見出すことができる。「古今集」に於ける貫之の歌には、理性と意志とに鼓舞されながら合理的な表現によつて押し通さうとする傾向が見え、「後撰集」に採られた貫之の歌は主觀的傾向を加へ、内省と精進とによつて境地を深めようとした態度が見える。「拾遺集」中の貫之の歌は、大部分が屏風歌であるので人格の反映を見ることができない。「土佐日記」を通して見る彼は、現實生活に對して冷淡である。愛兒の死を悲しみながらその態度は觀念的であつて悲しみに對する實感の描寫を試みようとしてゐない。或は悲しみを色に示さない「たしなみ」であつたとも、感情の直接的な表現を以て文學とする小説意識が時代的に生れてゐなかつたとも考へられるが、彼は寧ろ死を不可抗力として諦めの内に悲しんでゐるかの如く見える。彼はただ殼に包まれた堅い心で現實を眺めるのみで、決して生活そのものの再現を試みようなどとは考へてゐなかつたと思はれる。

【和歌觀】彼は古今集序に於て「大和歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける」と言つてゐる。この言は文學發生の心理的過程を説明したものと考へられるが、その態度には唯心的なものがある。彼は行爲又は現象の直接的表現を以て文學と見ないのみならず、文學に感覺的要素を加味する事をも考へなかつたであらう。即ち彼は統一精神の論理的發現を以て文學とし、思惟の世界から和歌の世界を導き出さうとしたやうである。かくて彼は「世中にある人、事わざしげきものなれば、心に思ふものを見るもの聞くものにつけていひ出せるなり」と言つて、現象又は個物に對する精神の發動を説いてゐる。次に彼は和歌の效果を説き、唯心的な感動は天地に遍在するが故に、相互に感應するものと考へたやうである。「新撰和歌」の序に於ては歌の成立要素を文と義（又は花と實）の二元とし、上代の歌は義は幽であるが文は質であり、近代の歌は文は巧であるが、義は疎であるとし、兩者の適當なる調和を以て理想としてゐる。蓋し文は詞を意味し、義は心の發動を意味するやうであるから、古今集序に於て心と詞とを立てた考と一致し、ただ古今集序に於ては文學の發生的な見方から唯心論を立て、新撰和歌序に於ては文學の論理的な見方から二元論を立てたものである。この種の文學觀は菅家萬葉集序に於ても同樣なものを見出すことができるから、かゝる思想は貫之の獨創ではなくて一般的風潮であつたと考へられ、或は貫之が道眞から影響された場合も想像される。併し貫之がこれに依つて新興國文學に理論的根據を附與しようとしたとも思はれ、その功績は偉大であり、たとひ文學觀は平凡で初歩的であらうとも稱さるべきものである。而して貫之がどの程度に於て漢詩の詩學の影響を受けてゐるかは、甚だ興味ある問題である。

【影響】「後撰集」の撰者は貫之・伊勢を宗として撰修の方針を進めてゐるやうである。當時既に「貫之集」は成立してゐたのみならず流布愛讀せられてをり、時文の如きは貫之の子といふのみで梨壺五人に加へられたのである。公任は貫之の崇拜者であり、能因は「新撰和歌」に倣つて「玄々集」（別項）を撰した。俊頼は貫之・躬恒の優劣論に於て「躬恒を侮るな」と言つた。この言は單に躬恒の歌には人々の看過してゐる表現上の特色がある事を指摘したものとも、遙に貫之以上の躬恒を貫之と比較するのは躬恒を輕蔑したものであるとの意とも解釋されるが、偶像の如く崇拜されてゐた貫之と、歌そのものに藝術的天分を十分に發揮してゐると理解された躬恒との比較論は興味が多い。俊成は復古主義の立場から貫之の歌に觀念的な深みを見出したものの如く、業平の「月やあらぬ」と共に、貫之の「結ぶ手の」を以て幽玄體の説明の標準としてゐる。併し彼は貫之の歌を「千載集」に入れる事はしなかつた。定家は復古の標準を貫之以前の六歌仙におき、歌を作る實際上の標準は經信以下に求めた。「八雲御抄」に、「貫之さしもなしなどいふ事少々聞ゆ。歌の魔の第一也」と記させ給うてゐるのは、新時代の精神を自覺した當時の人々が貫之の歌の藝術的價値を認めなくなつた爲めであらう。而して崇拜の中心が定家に移動した後の貫之は單なる歴史的な存在に過ぎなくなり、たとひ景樹が貫之を祖述したとしても、時代の大勢は萬葉復古の精神にあつた。

【参考】古今集目録○歌仙傳○紀氏系圖○大日本史卷二一九 ○百人一首一夕話 ○國文學全史平安朝篇○日本歌學史○大井河行幸和歌考證井上文雄 ○歌論家としての紀貫之 久松潜一（國語教育大正一五ノ一一）○文學論としての古今和歌集序 荒木良雄（國語と國文學昭和三ノ四）○貫之の文學論 大井廣（國語國文の研究昭和三ノ四）○貫之の考へてゐた和歌の本質について 吉澤義則（改造昭和四ノ一）（西下）

貫之集 つらゆきしふ　歌集　十卷二冊　【作者】紀貫之【成立】「後拾遺集」卷十九に、「貫之が集を借りて返すとてよみ侍りける、惠慶法師、一卷にちゞの黄金をこめたれば人こそなけれ聲は殘れり、かへし、紀時文、古のちゞの黄金は限りあるをあふ許りなき君が玉章」とあり、その次に「紀時文が許につかはしける、清原元輔、かへしけん昔の人の玉章を聞きてぞそゝぐ老の涙は」とある。元輔の歌は「元輔集」に「貫之集を人の借りて返し侍るにつかはしゝ」（類從本）、「貫之が集を人の借りて返し侍りけるをりにときふ（時文か）がもとにつかはしゝ」（歌仙歌集本）とある。これ等に依つて惠慶が時文から「貫之集」を借りた事、元輔も「貫之集」をもつてゐた事がわかり、「貫之集」は既に「後撰集」撰修の頃、即ち貫之歿後間もなく成立してゐた事になる。「拾遺集」は既に纏まつてゐる「貫之集」から歌を採つたと考へられる點が多く、卷二十に貫之臨終の歌「手に結ぶ水に宿れる」を載せて「この歌よみ侍りて程なくなくなりにけるとなむ家の集にかきて侍る」と左註のあるのは、その加筆年代は不明であるが現存本「貫之集」にも見える註の文を要約したものであらう。【諸本】（一）群書類從二四八所載本（二）歌仙歌集本とがある。「繪入本紀貫之集」（四冊、元祿十三年刊）は歌仙歌集本に依つたもの、日本歌學全書所載本、増田于信編の「紀貫之歌集」（二冊、明治三十七年刊）は類從本に依つたものである。類從本は肥後守經亮本を以て底本とし一古寫本を得て校合すとある。歌仙歌集本は上冊の終りに「以相傳之本書寫校合了、消字等如本也、建長元年八月日、藤原朝臣在判」とあり、單獨出版したものもある。この二本は卷の順序に小異があり、字句にも相違があるが、根本に於て同系統のものであらう。繪入本は上下二冊を更に二冊づつに分つたもので、上冊の終りにある奧書を最後にも掲げてゐる。半紙判にて卷頭に系圖を載せ、四冊に亙つて九葉十八面の繪がある。歌學全書本は、勅撰集から拾つた補遺を附してゐる。【解説】十卷の内卷五までは部類がなくて屏風歌を載せ、卷六以下は戀・賀・別・哀傷・雜に分けてゐる。歌仙歌集本は全體を九卷に分ち、類從本に比較して卷の順序を異にしてゐるのみならず、卷四の歌は類從本に全くなく、天慶年中の屏風歌を収めてゐる。歌數は類從本七二六首にて内二三首は歌仙歌集本になく、歌仙歌集本は八九一首にて内一八八首は類從本になく、更にその内一六七首は卷四の歌である。なほ本集の詞書中注目すべきものは、天慶六年正月師輔が忠平に借りた魚袋を返す時のもの、紀の國蟻通の神前を通る時のもの、延喜五年四月六日承香殿の東にて「古今集」を撰する時のもの等である。（西下）

釣女 つりをんな　能狂言【別名】釣針【格式】小習（和泉流）。

【梗概】殿が冠者を伴つて、西の宮の福の神えびす三郎殿に妻乞ひの祈禱をこめ、御通夜をする。暫くあつて殿は、汝の妻になる者が西門の一の階にゐようから、連れて歸れと告げられたと語れば、冠者も自分の御告も寸分違はぬと答へて共にそこへ行く。途中に釣針を拾ひ、神慮であらうと冠者をして釣らせる。やがて殿も冠者も女を釣り、冠者は一足先に喜んで歸り、殿は女の被衣を無理に取らせて對面すると、これはしたり稀代の醜婦。殿は、太郎冠者、おかつさまが違つた。そちのを返せと呼ぶ。上﨟、やるまいぞ／＼で殿を追込む。【解説】曲中の挿話としての「えびす」「きびす」の辨は、元來民間童話であつて、狂言に採られたのであらうが、安樂庵策傳の「醒睡笑」（別項）の笑話にも見える。又明治三年杵屋勘五郎がこれを「戎詣戀釣針」（明治三十四年七月東京座初演）といふ長唄に作り、常磐津林中も「釣女」（明治十六年初演）として常磐津物にした。なほ明治二十九年六月歌舞伎座で上演した福地櫻痴作の「吹取妻」は釣女と殆ど同じ型の物である。（野村）

釣狐 つりぎつね　狂言「吼噦」を見よ。

釣狐 つりぎつね　所作事　常磐津物【別名】「朝比奈の釣狐」「二ツおかめ」【本名題】寄罠娼釣髭（幣と袴の名にし負ふ虎少將が今樣姿）【初演】文政八年正月十三日初日江戸市村座「早富士曾我初夢」第一番目大詰【曲節】常磐津【作詞】二代櫻田治助【作曲】岸澤仲助（後の五代式佐）【太夫】三代常磐津小文字太夫（後の四代文字太夫）【振附】松本五郎市【傳承】曲・振とも傳存。【諸本】正本の外、日本歌謠集成卷十・歌謠音曲集（日本名著全集）・日本音曲全集第八卷等所收。【題材】間狂言の「釣狐」（こんくわい）に據つたものであるが、謠曲の「望月」と太神樂のおかめとを取入れてある。【沿革】「釣狐」の趣向は、山本土佐掾の淨瑠璃「信田妻」（別項）以來、淨瑠璃にも歌舞伎にも攝取せられて、屢々演じられたが、所作事としては一中節の「奕菊釣香爐」（享保二十年十一月江戸中村座）などが古く、長唄では「今樣こんくわい信田妻」（寛保二年十一月市

村座）が古い。ついで「後面」（別項）の流行もこれに伴つて遂に曾我物にも取入れられ、長唄の「釣狐よろひの亂曲」（延享二年五月市村座）や「釣狐春亂菊」（通稱釣狐・工藤の釣狐・釣狐の對面。明和七年正月市村座）等が生れ、殊に「工藤の釣狐」は名高く、後世まで幾度か反復せられると共に、その改作も出來、釣狐物に影響を與へたことは甚大で、本曲もこれを參酌したかに思はれる。爾來明治に至るまで、曾我物以外にも多種多様の釣狐物が生れ、歌曲も諸流に亙り、各々その特色を有つことになつたが、今日に傳存するのは極めて僅少で、本曲の外に長唄の「今様釣狐」（新歌舞伎十八番の釣狐。狂言の釣狐をその儘脚色したもの。古河默阿彌作。明治十五年三月春木座）や、常磐津の「釣狐廓掛罠」（狂言の釣狐。作詞右田寅彦で三代河竹新七加筆。明治二十五年十月歌舞伎座）等、數種に過ぎない。【内容】工藤祐經の館へ賴朝の息女の大姫君が來るので、その御馳走の餘興に踊る趣向で、朝比奈（三代坂東三津五郎）と虎（五代瀬川菊之丞）と少將（岩井紫若）と共にせり出して、釣狐の今様の踊りから、禿千鳥（瀬川玉三郎）を加へて望月の鞨鼓をやらせ、朝比奈がおかめの面を附けて可笑味の振りがあつて、終に獅子の狂ひになる。滑稽で賑やかな廓氣分を漂はしたもので、現に行はれてゐる。

【參考】劇代集（二代櫻田左交）○近世邦樂年表○今様釣狐（歌舞伎新報一二〇六號下）○釣狐廓掛罠（同上一四二一三三號下）　【秋葉】

鶴岡矢筈大紋（つるがおかやはずだいもん）　「鶴本鎌倉新話」を見よ。

鶴賀新内（つるがしんない）　「新内節」を見よ。

鶴龜（つるかめ）　「鳥獸物の謠曲」を見よ。

鶴賀若狹掾（つるがわかさのじょう）　新内節の元祖【本名】高井氏。通稱庄兵衞【別號】大木戸黑牛（狂名）・鶴翁【生歿】正德二年越前敦賀に生れ、天明六年（二四四六）三月二十二日江戸に病歿、享年七十五（一說七十）。【法名】寶相院鶴月日如信士【墓所】淺草田甫幸龍寺【閱歷】幼時江戸に出で、宮古路加賀太夫の門に入り、敦賀太夫といつたが、師が富士松薩摩掾（別項）と改名と同時に、富士松に改姓。寬延三年故あつて師と斷ち、一派を成して朝日若狹掾と名乘り、主に森田座に出勤したが、朝日の苗字を公より差止められ、寶曆八年鶴賀と改稱した。かくて相弟子の逸才鶴賀加賀八太夫事鶴賀新内（新内節參照）を自派に迎へて協力するに及び、大に世に持て囃された。併し彼と新内との關係は初代限りで、各々二代以後殆ど絕たれて互ひに別行動をとつて活躍し、明治に至つて再度接近した觀がある。彼は文才に長じ、「語る所の淨瑠璃みな自作なり」（嬉遊笑覽）といはれた如く、「明烏」「蘭蝶」以下傳存する名曲の大部分は自作自曲といつてよい。また狂歌を滿逸泉人の門に學んで、その名聞え、當時芝高輪に住んでゐた。その狂歌集には、「腰かけ狼」（腰の腰かけ）などがある。なほその妻は鶴老といひ、新流を能くしたといふ。【門系】（初代鶴吉）本名おこん。若狹掾の長女。文政十年四月二十六日歿。享年七十一。父の歿後二代を相續。後に和國と改む。女ながらも名人の聲譽を得たといふ。（二代鶴吉）本名おつち。初代鶴吉の娘（一說に初代鶴吉の妹おぎん二代鶴吉を繼ぐといふ）、存生中三代家元を繼承したと傳へる。「二枚續吾妻錦繪」（文化十年刊式亭三馬著）の鶴賀系圖には、初代鶴吉の跡を鶴賀鶴藏が繼承したものの如く揭げてゐる。（鶴賀若狹太夫）今日の新内系譜によれば、四代の家元を繼いだとしてゐるが、もし初代の若狹太夫（若狹掾の門下）とすれば、年代に疑はしい所があるが、他に明確な傳統の記錄がないので、今はこの說に從ひ四代としておく。傳二代鶴吉門下。初名貞之助。芝居番附・正本等に見える若狹太夫はこの人を指すや否や明確でない。（二代若狹太夫）傳初代若狹太夫の長男。初名貞次郎。父の歿後五代家元を相續したと傳へる。（紙元）本名鈴木重次郎。俗稱築地の三蔵。明治四十年歿。京橋南小田原町の魚屋の親方。鶴賀若紙賀の門下。明治三十年中絕した鶴賀派の家元を再興して六代を相續し、鶴賀新内（五代）から紙元と改めた。（三代鶴吉）紙元の妻女。大正九年十二月一日に歿す。良人の歿後七代家元を繼いだ。（二代若狹掾）本名鈴木壽。幼名榮次郎。明治三十八年三月東京に生る。紙元の長男。初め鶴賀新内（六代）を襲いで、母及び鶴賀齋に就き修業し、大正六年二代若狹掾を襲名して八代家元となり今日に至る。（新内節參照）　【秋葉】

【參考】聲曲類纂卷之三○狂歌人物誌（持馬屋編輯）（江戸文學類要）○江戸時代音樂通解（町田博三）○新内節の歷史（日本音曲全集第九）

劔讃歎（つるぎさんだん）　幸若舞曲（三十六番の一。廣益書籍目錄には數へず）一卷【成立】室町期【作者】不詳【讀本】古板本は寬永十二年板（十行本）。新群書類從第八舞曲部所收。【題材】曾我物。「曾我物語」（卷八前半）と同材。寶劔說話。「太平記」（或は平家物語）の劔の卷と同樣異傳。承應二年刊「劔の卷」（三卷）もある。この寶劔傳說に於ける劔の精靈奇蹟の本據は、恐らく干將莫耶の傳說などであらう。名刀工小鍛冶は謠曲「小鍛冶」にも取材されてゐる。【梗概】富士野に向ふ曾我兄弟が、箱根別當の御房に參ると、別當は祐成に黑鞘卷の刀、時致に兵庫鎖の太刀を贈り、且つ後者の由來を說いた。それは、天竺のしやりふんがよたうさんのれうらうんの讃の鐵で作つた八尺の薙刀をかうらんが盜み、唐土を經て日本に渡したのを、平城帝の時おくのまうふさ、三條小鍛冶兩人に太刀に打たせると、まうふさは三尺に打つて、枕上と名付けて一段上に立てられ、小鍛冶は二尺七寸に打つて、すなしと呼ばれ、兩も鐵を盜んだ疑を受けて土牢に入れられたので、鍛冶の神九萬八千に冤罪を晴らすべく祈誓を籠めた。神明の納受あつてか、すなしは鞘を外れて枕上に立ち向ひ、切尖三寸を斬り落したので、帝は友切と改稱させられた。後にこの二刀は多田滿仲・賴光・義家を經、爲義から一は嫡子義朝に一は女婿熊野別當けうしゆん（教眞か）房に傳はり、後者を受けた義經が兄弟和合を祈つて箱根權現に寄進したのが、今時致に授けられたものであつた。曾我兄弟は暇乞して出で、叢の宿で垢離を取り、やしはの宮に七番づつの笠懸をして本望成就を願ひ、相澤の原に出た。　（島津）

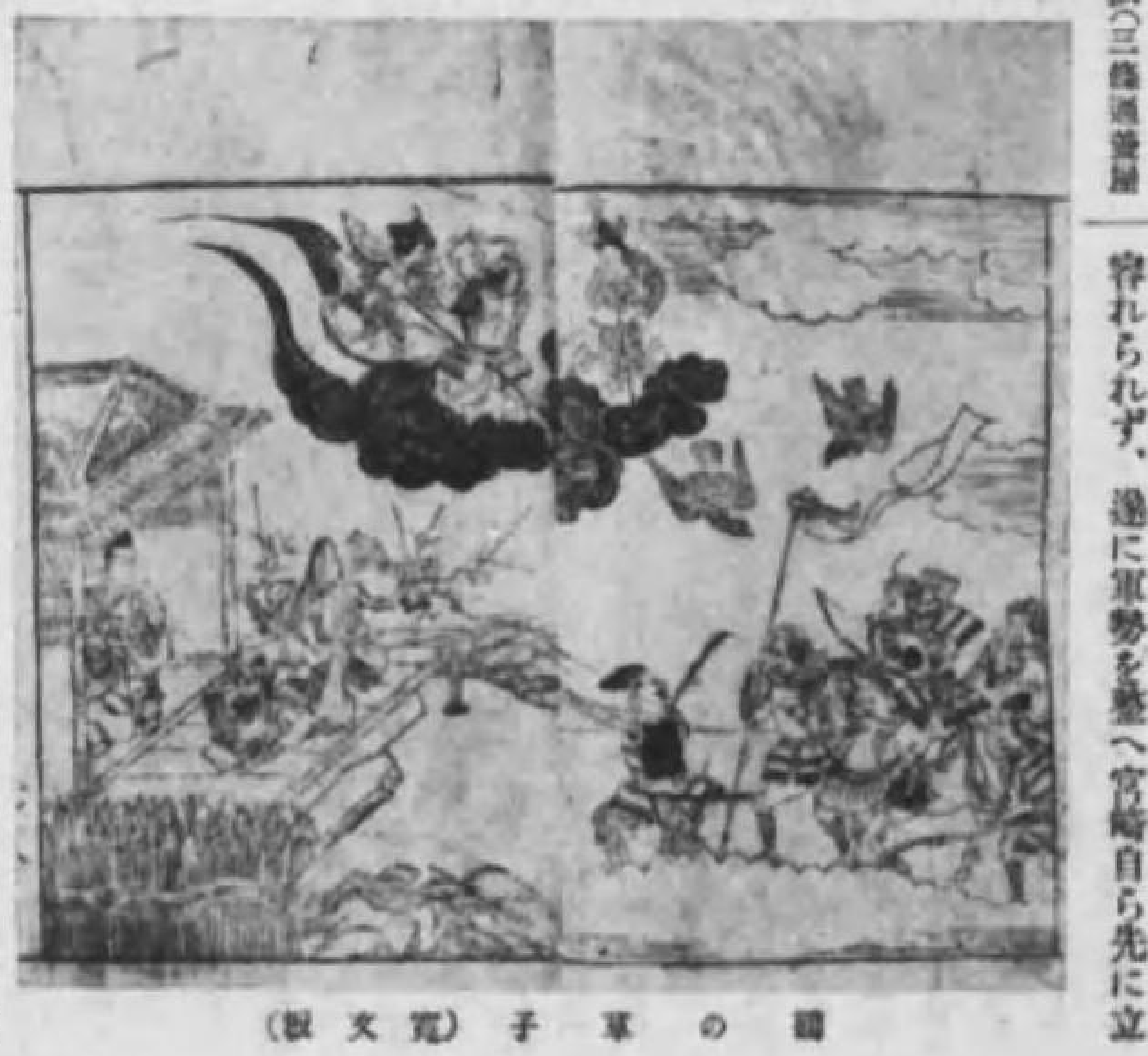
鶴澤清七（つるざわせいしち）　淨瑠璃三味線方【本名】松谷清七。幼名清二郎。通稱は松屋清七【生歿】大阪に生れ、文政九年（二四八六）七月二十二日、高麗橋二丁目自宅に歿す。享年七十歳を越えたとの傳がある。【法名】德譽教清禪定門【墓所】大阪中寺町地藏坂附近と傳へる。【系統】義太夫節の最初の三味線竹澤權右衞門の門弟で、貞享の初めから竹本座の脇座を彈いた盲人鶴澤三二は三二檢校とも呼ばれ、「鶴澤」を氏とした一派の元祖である。竹本筑後掾歿後、權右衞門は立三味線を三二に讓つて引退したが、その後三二は益々名聲を揚げて、享保五年「國姓爺合戰」九仙山の時、元祖鶴澤友二郎を名乘つた。この弟子の鶴澤文藏（兒島屋）が初代文藏で、明和元年五月三味線惣立者となる。「妹背山」は文藏の名作曲である。別に初代の高弟三二が豐竹座で友二郎をついだが、鶴澤派ではこれを認めない。【閱歷】初代文藏の高弟で明和五年（？）初代鶴澤清七を名乘り、後、師匠二代友二郎の遺言によつて三代鶴澤友二郎を相續した。蒲柳の質なので、文化八・九年の切舞臺を引いて、專ら子弟を養成した。大正十四年七月百年忌に際し、日本因會の手で、大阪天王寺西門布袋堂裏へ「三絃符章創始者初代鶴澤清七一百年忌之墓」を建立した。【業績】淨瑠璃三味線の不世出の天才で、前にこの清七あり、後に豐澤團平（別項）がある。この二者が義太夫節界の三味線彈として嶄然群を拔いてゐる。清七の功績は優れた作曲を殘したとか、立派な技倆であつたとかよりも三絃の符章の發明にある。清七は「いろは」の記號を以て三味線の手數節廻しを記錄に殘した。この記號を清七が創始工夫したのが十三歲の時であると傳へる。この記號を「符章」或は斯道の仲間では朱章（ふしやう）といつてゐる。この朱章の發明は、師弟傳統の備忘記錄となると共に、貞享の竹本座、元祿の豐竹座の櫓揚當時から殘つてゐる作曲の殆ど全部の記錄を保存する事が出來た。今日古曲の複雜なる三味線の手がなほ正しく傳承さるゝのは、全く清七の符章の恩澤によるものである。　（石割）

鶴芝（つるしば）　俳諧紀行　半紙本五冊【編者】第一冊濱義、第二冊信州上田の成澤雲帶、第三・四冊信州諏訪の久保島若人、第五冊信州飯田の櫻井蕉雨。【刊行】第一冊は江戸で、第二冊は善光寺、第三冊は松本、第四冊は諏訪、第五冊は飯田で、いづれも享和元年に刊行、後に名古屋の永樂堂東四郎が一つに纏めて原本通り半紙本五冊のものとして刊行したのが今行はるゝところのものである。また第一冊は「鶴芝」として「道彦七部集」に編入されてゐる。【内容】享和元年二月、士朗（別項）が門人松兒・卓池の二人を伴つて旅立つた。富士の鶴芝とは陽春二・三月の交、駿州龍華寺方面から見る富士の中腹に、消え殘る雪の間に青々と萌えでた若芝が、鶴の舞ふ姿をなして見ゆるのをいふのである（今は、植林等の關係で見られなくなつた。その事は丹鶴叢書に出てゐる）。故にこの紀行の書名とした。第一冊から第五冊まで士朗の行程に從つてある。第一冊は、士朗等が東海道を下り、鶴芝を見て江戸に入り、道彥（みちひこ）の金令舍の客となつて、道彥を初め成美・巢兆（各別項）などと交つた記錄で、道彥が士朗の心になつて記したものである。第二冊は、士朗一行が江戸を立つて中仙道に出で、本庄に長聚を訪ひ、碓氷峠を越えて上田に入り、雲帶・如毛等と會し、矢代を經て善光寺に詣で柳荘等と交つた記錄である。第三冊は、姨捨山・猿が馬場などを經て松本を經て、淺間・松本にて素檗・嵐外等と會した記錄に、諸國俳人の發句を附載したものである。第四冊は、諏訪に入つて、素檗・若人等及び甲斐の可都里が士朗の旅宿を慰むべく來訪せしめた鯛守などとの風交記錄である。第五冊は、八巢・蕉雨をあるじとした飯田風交の記錄で、折柄そこに滯在してゐた巢兆、名古屋からその師一行を迎へに來た岳輅なども加はつてゐる。巢兆の筆に成る飯田人が篁食壺漿して士朗一行を歡迎する二枚續きの圖は、この書に掉尾の精彩を加へるものである。　（賀川）

鶴の歩（つるのあゆみ）　「初懐紙」を見よ。

鶴の草子（つるのさうし）　御伽草子　二卷【成立】室町期。「倭錦」「古葉目錄」等に土佐光信の筆と見えてゐる（考古畫譜卷八）のを信ずれば、ほぼ同時、若しくはそれ以前の作とすべきであらう。【讀本】古板本は寬文二年板（三條通菱屋町ム屋仁兵衞）、後、鱗形屋より再板した中本がある。御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷に收む。

【梗概】中頃、宰相で右兵衞督を兼ねてゐた人があつた。父の左大將むねまさは世に時めいてゐたが、この宰相は殊更慈悲の心深く、それがため遂には自らその日の糧にも困り、人との交も薄らぎ、親しい者も遠ざかつたので、隱家を求めて靜かな餘生を送らうと、あても無くさまよひ出で、或る山蔭に草の庵を見付けて一夜の宿とした。翌朝來た里人に一度は咎められたが、漸く賴んで、夜襲來ては田畑を荒す鳥や獸を追ふ事を役にして養はれる事になり、勸める念佛の功德によつて作物は何の被害も無いので、里人は非常に喜んでゐた。或る日宰相は散歩の歸途、澤邊の小田に雌鶴を見出したが、折しも一人の獵師に捕へられたのを見るに忍びず、肌身離さず持つてゐた重代の黃金作の刀を與へ、請ひ受けて放つたところ、翌日召使を伴つた美しい女房が一夜の宿を求め、その請ふに任せて契りを結び、差出された千金を家主の里人に渡して宏大な邸宅を建て、召使を揃へ、俄に大長者となつた。次の春、その國の守護宮崎左衞門督は、鷹狩に出て俄雨に逢ひ、この宰相の邸宅を見付け、何心なく垣覗いた折柄、人ありとも知らず夫と共に廣緣に出てゐた北の方の美しさに魅せられて病となり、家來の田邊七良の策を賴つて文を遣はしたが容れられず、遂に軍勢を整へ宮崎自ら先に立つて押寄せた。北の方は夫を勵ましつつ皆紅の扇で虛空を仰ぐと、俄に山風烈しく吹き來つて黑雲館を覆ひ、雲の中から異類異形のもの數多現れて敵に向つた。七良の勸めで讀んだ經文により空は晴れ、變化は退散したが宮崎はこれを結緣に出家した。不思議に難を遁れた宰相に、素性を問はれた北の方は、夫を父母の家へと案内した。深山の奧洞穴の中の別

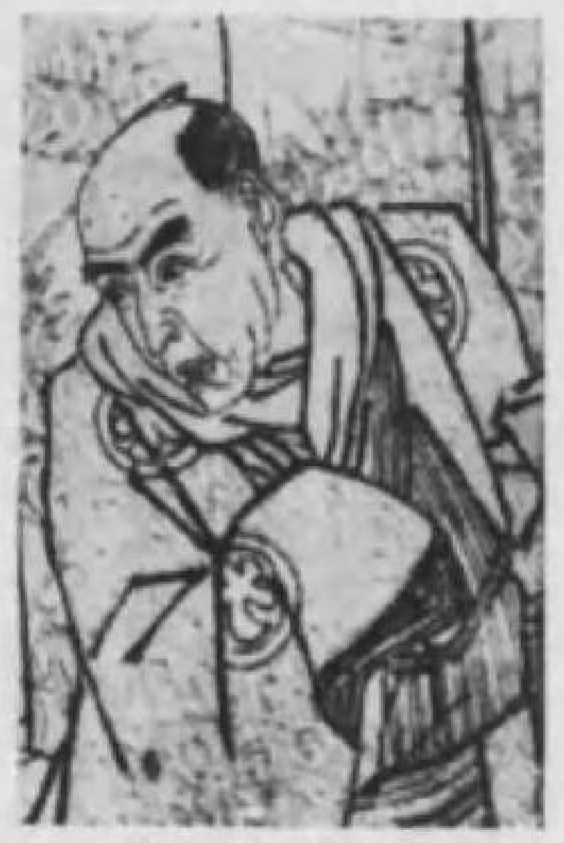


鶴の草子（寛文版）

世界、宮殿樓閣、月卿雲客、歡待の限りを盡した一夜が明ける頃、二人は虛空を翔ける車に引出物を山と添へて送り歸された。後、北の方は父母の許へ歸るべき時が來たと言ふ。驚き悲しむ宰相に、生を變へての再會を約し、形見の一筆をと乞ひ、自分はかの助命の恩を受けた鶺鴒なる由を打明けて大空高く飛び去つた。その頃、君の御伯父として權勢比なき三條の內大臣は、天の申子に美しい姬を得られ、玉鶴姬と名付けて傅づいて居られたが、左の腕が肘まで身に着いた儘離れず、長じてなほ養生の甲斐もないので、女御にもと將來を樂しんでゐた父母の失望は一通りでなかつた。數多の求婚者をも退けて十四の春を迎へた或る日、櫻の枝に短册を結び付けようとした刹那、姬の手が延び、腕に「僞らぬ言葉の末を賴みにて」と記した玉章があつた。內大臣奏聞すれば、それは宰相の手蹟なるを知る者あり、日本六十餘州に宣旨が下つて、漸くかの宰相を尋ね出された。御言葉を頂いて總てを申上げた宰相が、「再び生れあはんとぞ思ふ」と書いた肌の守を取出されると、紙も同じ紙。君を始め奉り御前の人々は驚嘆措く所を知らなかつた。その後、玉鶴姬の御輿入あり、御子も多く、一家は富貴繁昌した。

【解說】怪(鳥)婚說話、動物報恩譚。葛葉傳說の女狐に當るのがこの鶺鴒であるが、子別れの悲劇はなくて、人間に再生して契を全うする喜びがある。且つ普通の異類との戀愛だけでなく、戰爭譚や佛教思想、支那神仙譚の影響と見るべき仙境物語が織り込まれてゐる。なほ御伽草子中の怪婚說話並びに類話としては「狐の草子」「鼠の草子」「化物草子」「かざしの姬君」「玉水物語」（各別項）等がある。（島津）

鶴屋南北（四代）つるやなんぼく　脚本作者・合卷作者【本名】伊之助。幼名源藏【別號】姥尉輔【生歿】寶曆五年生れ、文政十二年（一八二九）十一月二十七日、深川黑船稻荷地內自宅で歿す。享年七十五【墓所】本所押上春慶寺【閱歷】初め父伊三郎と共に、江戶乘物町で紺屋職をしてゐたが、生來の芝居好きと文筆の才は、彼を驅つて當時の名作者金井三笑（別項）に入門せしめ、安永四年十一月、二十一歲の時に中村座へ出勤、翌五年の顏見世から勝俵藏の名を以て番附に載せられ、見習ひの雜役から五枚目・四枚目の末班に十餘年を過したが、その間にも、下級作者の受持ちたる「序開き」「二建目」の新作に奇才を認められはした。安永九年頃、三代鶴屋南北（道化方役者）の娘お吉を妻に迎へた。享和元年四十七歲の折、初めて二枚目（次席）作者の位置は得たが、初代櫻田治助初め、先輩に隨つて受持ちの一幕を書くうちにも、生世話物に妙を得てゐる事が知れ渡つた。文化元年七月、河原崎座の夏興行に、はじめて初代尾上松助に懇望されて執筆した「天竺德兵衞韓噺」（別項）が未曾有の當りを得、しかも宣傳術に特殊の技倆ある事すら劇場人に知られたので、同年十一月河原崎座「四天王楓江戶粧」に初めて立作者（主席）の位置を得たのが丁度五十歲であつた。この時座頭の市川男女藏は、南北を忌避して自分のために立川焉馬・木村園夫の兩名を招聘した事から、彼の位置は再び危く、度々寄座等に廻されたが、初代櫻田治助、初代並木五瓶が相次いで歿するに及び、文化五年以後名實備はつた立作者たる事を得た。後援者の松助は間もなく死去したが、次代の中堅俳優が盛んに活躍を始めたので、彼はその手腕を認められ、文化八年十一月の市村座「嚴島雪官幣」に俵藏改め四代鶴屋南北となり、以後本所龜戶村植木屋清五郎の隣地に居をトし、六十餘歲まで住んで龜戶の師匠と稱されたが、後に深川黑船新道へ、また黑船稻荷へ轉じたのである。文政末年に歿するまでは、江戶劇壇は殆ど彼の獨擅場で、傑作も夥しく、長老と敬はれた。晚年草双紙執筆などで多少の餘裕を得た外、生涯を貧困で終つた。その中にも、質屋の庫へ蚊帳を運ぶ事すら、「謎帶一寸德兵衞」（別項）へ利用して舞臺效果を擧げるだけの用意は忘れなかつた。文政十二年中村座顏見世興行の番附に、一世一代の名を署して間もなく歿した。


鶴屋南北

【著作】現存のもの百數十篇に及ぶ。大南北全集十七卷（春陽堂）がある。（脚本）天竺德兵衞韓噺（別項）〇彩入御伽草（文化五年六月市村座）〇時桔梗出世請狀（別項）〇阿國御前化粧鏡（別項）〇心謎解色絲（別項）〇勝相撲浮名花觸（別項）〇繪本合法衢（別項）〇當穗八幡祭（別項）〇謎帶一寸德兵衞（別項）〇於染久松色讀販（別項）〇隅田川花御所染（別項）〇杜若艷色紫（別項）〇櫻姬東文章（別項）〇四天王產湯玉川〇梅柳若葉加賀染〇三楠莊曾我島臺〇玉藻前御園公服〇靈驗龜山鉾〇浮世柄比翼稻妻（別項）〇東海道四谷怪談（別項）〇盟三五大切〇獨道中五十三驛（別項）〇金幣猿島郡（草双紙）敵討乘合噺（文化五年金毘羅利生記）〇敵討安高沙（文化六年）〇戀女房讐討雙六（文化九年）〇勝角力橋場雁崎（文政九年）〇四十七手本裏張（文政九年）〇女房忠臣藏（文政九年）〇いろは演義（文政十年）〇昔模樣沖津白浪（別項）（文政十一年）〇怪談岩倉萬之丞（文政十一年）〇昔同今物語（文政十二年）〇小町紅牡丹晚取（天保二年）

【作風】學識はなかつたが、偉大な戲曲作家であつた。初代櫻田治助から初代並木五瓶（各別項）に傳はつた寫實劇は、彼に至つて全く完成された。市井風俗の描寫に於ては前後に敵なしと稱してよい。それを纏める大膽奇拔な趣向、化政度特有の茶番趣味、いづれも彼の長所である。怪談狂言の鼻祖といはれる事も見逃してはならない。それ等が餘りに進んだ結果、變化本位、筋路中心に陷つたのは、同時に短所ともいへよう。複雜な構想を弄した事も一面には當年の流行と見られる。時代物に佳作は少いが、特殊な顏見世狂言には妙作もある。

【合卷作者として】高砂町に住んだところから、初め姥尉輔と號したが、文政五年以後、狂言作者名鶴屋南北を併用してゐる。尤も文化五・六・七・八年の作には鶴屋南北口授、門人龜東筆錄といふことになつてゐる。自作としての署名は同九年以後天保元年に至り、同二年には、遺稿の出版があつた。姥尉輔以來十數部の作であるが、作風はすべて一貫してゐる。妖怪の事件に凄慘の氣分を盛つたもの、大體その狂言と同一傾向を有つてゐる。勿論筋の運びその他に、歌舞伎がかれるものが多く、殊に文政十一年の「昔模樣沖津白浪」（別項）の如き、南北自作の脚本を草雙紙化したとはいふものの、すべて正本仕立であり、每丁に繪があるといふ原則を破つた變態的のものをさへ生じた。更に又これ等の作が後人によつて直に脚本化されたものもあつた。又遺稿の「怪談鳴見絞」はその前編「怪談岩倉萬之丞」と共に古俳優に因める事件を扱ひ、彼の好尙を見る事が出來る。〔この項山口補〕

【參考】鶴屋南北傳（坪內逍遙）（大南北全集第一卷）〇歌舞伎研究（二五・六）〇南北研究（渥美清太郎）（日本文學講座）〇南北と默阿彌（早稻田文學昭和二ノ七）〇近世日本演劇史（伊原敏郎）〇戲曲小說通志（雙木園主人）〇狂言作者概略〇作者店おろし（三枚目三治）〇名人忌辰錄　（渥美）

鶴屋南北（五代）つるやなんぼく　脚本作者【別號】可祐【生歿】寬政九年、江戶に生れ、嘉永五年（一八五二）正月二十一日、江戶で死んだ。享年五十七【墓所】深川寺町信行寺【閱歷】二代勝俵藏（別項）の子で、四代鶴屋南北の孫に當る。初め鶴屋孫太郎。天保七年、五代南北を襲ひ、同九年正月、河原崎座で初めて立作者に昇進した。彼の作に有名な物はないが、門下に三代瀨川如皐及び古河默阿彌（各別項）の二名作家を出してゐる。【著作】筆書始交張曾我〇高岡南鉢木〇一世一代功力納法字〇鶴ケ岡根元曾我〇東鑑怪談噺〇梗平家劇場軍配〇鈴海老曾我門松〇其三味線樂高調〇世善知鳥東內裡（以上脚本）〇晦月深仲町〇當福八幡祭〇東海道五十三驛〇姥池因緣物語〇神靈矢仲黑（以上合卷）　（渥美）

徒然時勢粧 つれづれいまやうすがた　浮世草子　七冊【作者】錦文流【刊行】享保六年【名義】兼好の「徒然草」に倣つた隨筆の義。序に「徒然なるまゝに日暮硯の片ほとりをはらひ、もてる調度の置所もそこ〳〵に入直しぬるに、受かしこにて聞きはつりぬる徒え書とて、反古の片裏紙のはしくれにかき置ける物あり。取りひろげて見けるに、貫とげ成る事、をかしき事、あはれ成る事、心地よき事、無用なる事、尤も成る事共取り集むるに、凡そ二百四十三品、おのづと徒然の文段に通ぜり」よつてこの題號にすがつて、徒然時勢粧と謂云」とある。【諸本】浮世草紙第四卷（浮世草紙刊行會）所收。

【梗概】卷一は、隨筆風の當世習俗に關する短文六章より成る。卷二は、「茶湯根元記」「數寄屋付け園の紙形」の二章は、茶の湯に關する諸事を、「閑書重寶記」は、雜事十五・六條を記してある。中に「江都著聞集」にも記せる或る妾女の上廁の度に、愛猫が伴うて行くのを、邪推の心と察して首を擊つて殺した所が、その首飛んで廁の向側に行き、そこに潛んでゐた蛇を食ひ殺した話がある。卷三・四は、續き物語で、島の內の白人お紋、自前で勤めてゐたが、八兵衞といふ男と謀り、富有の客長七を或る夜今宮邊の野邊に誘ひ出し、心中のための誘拐と騷がせた。長七の番頭狀僞の手段とは知りつつ百兩出して內濟にし、詫狀一札取つて置いた。その後お紋は長堀邊の富重といふ粹自慢の男に圍はれて、半歲ばかりの後、亡父がしば〳〵夢枕に立つて、地獄に墮ちた苦を訴ふると言ひ出し、遂に病となり、出家の希望を申出た。富重もその請を容れて、祠堂銀三貫目、庵の普請料三十兩を與へて、京の親許に歸らせた。然るに供の者、お紋が親里には祝言の準備のあるを見て怪しみ、身を乞食に窶して婚禮の樣子を見屆け、且つお紋は大阪で豫て萬太夫座の俳優花右衞門と馴染みをり、今夜百兩の持參金を持つて嫁したといふ話をも聽いて歸つて主人に報告した。富重、人を京に遣はして所司に訴へたので、二人は銀を返した上、町追放に處せられた。その上お紋は惡狀に罹つて腰立たずになり、終に餓死した。近所の者の惠みで、花右衞門はその骸を葬り、彼も翌年死んだといふ。卷五の「九條島延島」は、大阪城外九條島の長作といへる蜆賣が死に、天滿に奉公に出でし姉娘が漸く葬式を濟ました。その後、近所の助九郎といふ者の姨綠延べの女おつたに、その死靈がつきて、生前二重底の枡を用ひて惡事を働きたるため、今地獄の苦を受くることを訴へた。姉娘卽ち衣裳を賣つて布施となし、作善供養をしたので、おつたは回復し、つたの母の夢に長作は佛果を得たことを告げた。「十界胸中記」は、京の吳服屋が白雨に逢うて八坂の塔に雨宿りしてゐると、向ふの茶妙林の宅で病人の死んだ樣子であつたが、くぐり戶の明いた所から白い玉が飛び出した。すると前にゐた犬がそれを食つた。白雨晴れて立ち寄つた家の萠門にその話をすると、萠門はそれは妙林は大惡人であつたから、死んで畜生になつたのだと話して聞かせた。卷六の「書寫性空俗姓傳」は性空が遙に大唐金山寺の火事を感じ、手水鉢の水を灑ぎてこれを消した話。「雛跡根なしかづら」は、翠海上人が子供の惡戲に神前の獅子狛犬を後向きにしたのを見て、徒に感ぜし話。爪を火に入るまじきこと。子供に月を指さして見せぬこと、犬蝙のこと等。隨筆風に書いてある。「男色百物がたり」町人の子に優れた美少年があつた。言ひ寄るもの多い中から縣屋小八を選んで、親より兄分に賴み込み、宿老も口きいて天下晴れての兄弟分となつた。この少年の名殘りの宴をしようと友人多く集り、百物語に擬して料理の百物語して灯を消すと、挾箱に入れた料理が出たので、一同食ひ散した。するとこれは惡者が百物語を立ち聞いて屆けさせたもので、その代金として大金を取られた。卷七は文珠の順平四人の子供を夫々に片付けて樂に暮してゐた。隣町の富有なる町人、美人の女中に關係して姙ませ男子を產ませたので、金錢を與へ、後のために證文を書かせて家へ返した。主人はやがて死んだので、家婦は亡夫の甥とわが姪を迎へ夫婦として家を嗣がせた。すると下女の親は、順平の智慧を借りて訴訟を起した。役人は家婦の處置に誤りはないが、實子を全く顧みないのは善くない、實子でないといふ證文のあるのが實子たる證據であるから、財產の半分を實子の方へゆづれと申渡した。「御所模樣香取の衣」或る中納言の後妻、先妻の子に戀慕して文を度々贈つたが顧みないので憎み出し、これを亡き者にせんと思ひ、戶根川といふ臣と謀り、花野遊びの折、己が衣に蜜を塗り集まる蜂を若君の寄りて拂ふを夫君に見せて、戀慕と誤認させ怒らせた。これを老臣帶之丞が知つて、中納言を諫めてこと無きを得させた。　（藤村）

徒然草 つれづれぐさ　隨筆【作者】兼好法師【名稱】卷頭の「つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯にむかひて云々」とあるによる。【卷數】季吟の「文段抄」には、上下卷二百四十四段としてゐる。【成立】土肥經平の「春湊浪話」に、上卷は建武三年以前に吉田並びに雙の岡で執筆し、下卷は同年夏以後に伊賀で書いたものとあるが、藤岡作太郎は大約元德二年以後、建武三年以前の數年間に亙つて出來たものとした。「類聚名物考」書籍部第七に、「第一段よ

り二百餘段までつらねて書る物とは見えず。夫につきて、崑玉集の說とて、吉田の草庵の壁張おきし反古をとりあつめしと云ふ。是は左もやと思はる。次第は後に人の見計らひて次たるもの成べし」と。今見る如くに編んだのは、後人だと云ふのである。【諸本】壽命院の抄に、數本を以て校合したが、條段の多少・次第が同じくないと云つてあるが、實は格別異本と見るべき物は無いやうである。多く季吟の「徒然草文段抄」の本文を底本としたものである。「文段抄」に、「本書は道遊軒の本をもととし、且つ壽抄・野槌の本をもまじへ合せて用捨する所也」とあるから、貞德の本が流布本の原據となつてゐるわけである。寫本には、桂宮本（圖書寮藏）・靜嘉堂文庫本・屋代弘賢校本があり、刊本には嵯峨本・慶長本・正徹本等數種がある。有朋堂文庫・國文大觀・國民文庫・日本文學全書・日本文學大系・日本古典全集（前物本）等に所收。

【解說】前後連絡もないやうな種々の文章が相次いでゐるのが、「枕草子」を初めこの種の文學の本來の面目であるが、一つ〳〵吟味すると形態・樣式に於て必ずしも同樣ではない。それ單にエッセイと見ることも適切ではない。その各段を文體から考へると、記事文があり、敍事文があり、若しくは說明文があり、議論文がある。一體この書は古來名文として喧傳せられるが、それは作者の記述・描寫・論理の上に、非凡な手腕が存したからである。その全體の文章を整理してみると大體二つのスタイルが認められる。一は擬古體で他は當時の新文體（卽ち、方丈記に於て見るやうな近古時代新發展の文體）である。この二樣のスタイルがこの一書中に兩立してゐる事は、文章史上閑却してはならぬ。これは作者の思想に、古代憧憬と時代的又世間的と兩方の影が認められるのと同樣の現象である。又作者兼好は、我が中古文學に通じてゐたと共に、支那文學では、儒書を學び老莊をも釋ねて居り、又更に佛典にも通曉してゐたと想はれ、博覽多識の結果、その記述は多岐に亙つてゐる。人物も才子であり通人であり、一般の人と反りの合はぬ一種の出世間家でもあり、實に多面的な氣質の人と思はれる。本書に現れてゐる思想は、先づ古代憧憬がその一である。而もそれは風俗の優雅な平安朝である。九重の神さびたのを偲び野宮を優しいと興じたのも、皆この結果である。次にこの古代憧憬が基となつた風雅思想は、或は自然觀となり、人事觀となり、文學觀となつて示されてゐる。四季の評や花月の評の如き、作者獨得の主觀が著しく働いてゐるが、要するに古典的趣味が根柢を成してゐる。又一面には甚しく實際的な世間的な人生觀照をしてゐるのが第三に注目すべき點である。說く所の敎訓も、著しく實踐道德に因著し、儉約を說き（第十八段）、慈悲を勸め（第百二十一段）てゐる類、皆それである。而してその行き方は、積極的と云ふよりも消極的である。鎌倉時代文學には、「十訓抄」や「沙石集」（各別項）のやうに、談義風の作品が少からず存するが、この書も一面には、さういふ系統を引いてゐる。この談義式の條々が、譬喩・寓話を拉し來つて、論理に肉を附けるのも亦、常套手段であるが、作者は、どうも無住法師（沙石集の著者）の筆法に倣つてゐるものの如く、例話の出し方が巧妙で、著しく滑稽味さへ加へてゐる。詮ずる所、作者の理想鄕は、簡素・孤獨・閑寂・風雅（物のあはれ）の境地で、念頭常に有爲轉變、無常迅速を忘れないと云ふのにある。併しそれは作者の個性の著しい顯現であるけれども、近古時代の有識階級一般の通有性でもある。【價値】古來名文の一として定評がある。その然る所以は前述の如く各體の文章が交錯してゐるが、殊に記事・敍事の手腕が勝れ、議論に條理の整然たるを見、修辭の妙を得たものがあるに因る。加ふるに從前の文學には、思索的のものが洵に乏しいが、本書に於て思想家の文章として卓立するに至つた。されば江戶時代の初頭からこの書の研究が頻出し、又一方には、續作者流がこの書や「方丈記」の如きを耽讀して、創作の資としたので、何々つれ〴〵草などと題する書がいろ〳〵出來た。

嵯峨本徒然草（實好嘉司氏藏）

【研究史】正徹の「清巖茶話」に、「つれ〴〵草は枕草子をつぎて書たる物なり云々」と云ふやうな斷片的な言が早くも見えてゐるが、「徒然草」に對する眞の研究は、江戶初期からである。今註釋書成立の過程を辿れば、先づ壽命院立安法印の「徒然草抄」二卷（古活字本四册）を最初とする。立安（二二〇九—二二六七）は秦宗巴といふ醫者で（安齋隨筆・京都名家墳墓錄）、松永貞德の言（慰草の跋）によると、壽命院が要法寺の本地院などに詳しい事を尋ねて書いたものだとある。兼好の思想を儒釋道の兼備と考へたり、文體を「枕草子」の摸倣と見たり、殊に作意を、「老佛を本として無常を觀じ、名聞を離れ、專ら無爲を樂しまん事を勸め、傍、節序の風景を敍び、物の情を知らしむるもの」としてゐるが、その見解たるや概ね妥當で、後人の註疏の根據となつてゐる。抄する所は要語の摘註である。次に林羅山の「徒然草野槌」二卷十四册（刊本）が出た。元和七年の著作で、卷頭に卜部系圖を載せ、諸集に入つてゐる兼好の歌を出し、又兼好の略歷をも記してゐるが、「徒然草」の總評に至つては、壽命院の抄の說を承けてゐる。語句の註解をすると共に、各段の要旨を述べ、感想を附加し、又批評にも及んでゐる。言ふ所著しくその博覽多識が認められ、隨つて趣味の津々たるを覺える。この書を踏襲したものに、青木宗胡の「鐵槌」四卷（慶安二年刊）がある。「野槌」の要領をそのまゝ頭註としたのである。また松永貞德も「徒然草」を研究してゐる。その說を傳へたものが「南倶左見草」（慰草）八卷（寫本刊本）である。本文を二百四十四段に分ち、頭註を加へ、毎段の後に大意を敍してゐる。この大意に貞德の意見が認められる。「群書一覽」には、なほ「つれ〴〵長頭丸抄」二卷を舉げて、これを貞德自身の註釋であるとしてゐる。なほ撰者未詳の「徒然草古今大意」二卷四册（萬治元年刊）は、立安・道春・貞德三家の論評を拔萃したものである。又西道智の「徒然草全解」といふものもある。又貞德の門下の加藤磐齋の「徒然草抄」（別項）と北村季吟の「徒然草文段抄」（別項）とがある。この「文段抄」が、壽命院抄以來の諸註を一先づ集成したのであるが、その後も續々諸抄が現れてゐる。高階楊順の「徒然草句解」七卷（寛文五年刊）は「野槌」と「慰草」とに負ふ所が多く、著者が漢學の素養を有する人である事が特色である。南部草壽（元祿二年歿）の「徒然草諺解」五卷（延寶五年刊）も、儒者たる著者の傾の反映せられてゐるもので、亦出色の註書である。高田宗賢の「徒然草大全」十三卷七册（延寶五年刊）は、細川幽齋の說を紹介してゐるのが注目せられる。又、惠空の「徒然草參考」八卷（延寶六年刊）は、釋家の見に偏した點はあるが、最も見るべきものである。岡西惟中の「徒然草直解」十卷五册（貞享三年刊）は中院通勝の傳本によつて居り、無用の引證が少く簡便な抄である。末卷に書中の人物百九十八人の系譜と器物圖とを收めてゐる。それから加賀の淺香久敬（山井と號する）も「徒然草諸抄大成」（別項）二十卷（貞享五年刊）を出した。これに由つてその名の如く諸註が集大成せられた。明治以後では、「校註徒然草」（佐佐木信綱）、「徒然草講義」（井上賴文註）、「訂正增補文段抄」（鈴木弘恭）などがあるが、評釋の體を得たものは、內海弘藏氏の「徒然草評釋」と「徒然草詳解」からである。又沼波瓊音の「徒然草講話」はその文學批評の優れてゐることを以て有名である。その他知名の諸家の類書が尠くない。

【歐文譯】本書は、國文學の一名著であるだけに、外人間に喧傳し、ために飜譯が企てられてゐる。その主な物を舉げると、一九一一年（明治四十四年）の Transactions of the Asiatic society of Japan. (Vol. XXXIX) に收められてゐる G. B. Sansom の英譯 "The Tsurezure Gusa of Yoshida no Kaneyoshi." はその一である。全文を譯し、ノートを附け、挿繪を入れ、首に序說を加へ、終に附錄として姉崎正治氏の "Religious conditions of Japan in the fourteenth century." と題する一篇が添へてある。次に一九一四年倫敦版の W. N. Porter. の英譯 "The miscellany of a Japanese priest being a translation of Tsure-Zure Gusa." はその二である。これも全文を譯し、卷末にノートを一括して載せ、文段の事實によつて分類した索引を附し、更に挿繪を入れた書である。又卷首の序說は、折から滯英中であつた市河三喜氏が執筆せられたものである。

【附記】江戶時代の初期、古今傳授に倣つて「徒然草」の三祕事を立てた。一、布のもかう。二、白うるり。三、祭の日の放免。「磐齋抄」には「布のもかうの事、予聞きし比までは左樣にはあらざりしが、後に三ケの大事とて祕事の說とやらん貞德の定め給ひしとて祕する事になれば記さず云々」とある。松永貞德の定めたものと見える。「一條家祕抄」「歌道心假集」「古今集傳」等に載せて一條禪閤の說の如く云つてあるのは假託である。（歌道傳授參照）

【參考】徒然草研究 中村直勝（日本文學講座）○徒然草鑑賞 生田春月（同上）○徒然草研究史 重松信弘（國語と國文學六ノ六・七）○徒然草に就く 齋藤清衞（同七ノ一〇）○兼好素描 筑土鈴寬（同九ノ八）○道念を中心として見た徒然草 西尾實（國文教育昭和三ノ一二）○徒然草の論 見山[illegible]一（東亞の光二三ノ九）○徒然草の思想を論ず 齋藤勇（同上一ノ六）○日本古典全集本解說 正宗敦夫 〔野村〕

つれ〴〵草 つれ〴〵ぐさ

浄瑠璃 五段 時代物 【作者】「聲曲類纂」に近松作とあるが確かな根據はない。宇治加賀掾正本。【諸本】八行四十一丁本（延寶九年五月、山本九兵衞刊）。近松門左衛門全集第一卷・近松全集第一卷・巢林子評釋（藤井乙男）に收む。【題材】兼好の「徒然草」中の文章や說話を點綴し、謠曲の「鐵輪」や「葵上」の詞句を取入れたもの。【梗概】（一段）後宇多院の皇女菅の宮の徒然を慰めまゐらせるため、北面の侍卜部兼好が吉田山に案内し奉る。御出發に際し、御車の牛が濱床に上り鼾打喰んで臥した爲め、淺原判官爲頼が牛飼童王丸を責めるが、兼好が宥める。途中賀茂山が遠く見える邊で初時鳥の音を聞き、兼好が名歌を詠むと、そのために宮の心が動くが、強て兼好に心を寄せてゐた侍從の局は心中穩かでない。やがて吉田の社では、禰宜親達が花實の鐘の女に身をしつらへて、花盡しの神樂を奏してお目にかける。（二段）宮は兼好への文の媒を侍從に賴むが、嫉妬に燃える侍從は、御文を破つて棄てる。かくて侍從は竊かに兼好の許に到り、我が戀を打明けてかき口說く所を宮に發見され、勘當をうける。侍從は宮を呪つて貴船の宮に丑の時詣をするが、滿願の夜途に蛇身となり、雷電風雨の中に消え失せる。（三段）宮は毎夜[illegible]に惱まされるので、爲頼の弟具覺坊を召して祈らせると、吉田の御社參が赤舌日に當つた爲めと言ふ。兼好がそれを反駁すると、具覺坊は怒つて、然らば己が加持の奇特を見せんと數珠を揉めば、忽ち數珠が小蛇となつて宮の御床に入り、宮を苦しめる。兼好は笑つて某が御平癒なさしめんと、その場を立つと、間も無く御幃の內より小蛇這ひ出でて、宮の御惱は去る。そこへ隨身近友が遽しく參上し、兼好の出家を告げるので、院を初め皆これを惜しむ。宮は兼好を忘れかね、乳母眞葉を連れて忍び出て道行。（四段）宮は雙の岡に兼好の庵を訪れ、弟子とならんと請ひ、兼好より「徒然草」の傳授を受け、初めて夢から覺めたやうに悟る。そこへ突然侍從が姿を現し、自らは幽長の切伊勢國より現れたる鬼女なるが、只今の示にて悟開けたりと告げ、慈悲忍辱の姿となつて雲居に上る。そこで兼好は宮に女の執着の罪深き事を說く。所へ爲頼兄弟が先度の意趣を晴さんため、奈良法師を數多催して押寄せるが、何處よりともなく現れた二人の武者に斬り立てられて逃げてしまふ。この二人の武者は、かの筑紫の土大根の精であるが、文に書かれし恩に報いるため駈付けたのであつた。そこへ堀川の內府が勅使として宮のお迎に來り、また兼好にも院參あるべしと告げる。（五段）宮は四季折々の民の業を見度しと院に御訴へあれば、院はさらば龜山の池に大井の水をまかせ、泉を流へ、木草を植ゑ四季を作らせ申すべしと、卽ち兼好が指圖で四季の景色を移される。これより龜山池四季摘。

【構想】「徒然草」中の文章や說話を、強ひて織り込まうとした爲め、木に竹をついだやうな箇所が隨所に見受けられ、又場面も劇的に纏められてゐるのが尠い。【影響】近松作「兼好法師物見車」（別項）は、その文章や趣向に於て、本作と共通の點が多い。

【參考】聲曲類纂 ○近世邦樂年表（義太夫節之

部〇近松全集解題（藤井乙男）　〔高野（正）〕

徒然草抄（つれづれぐさせう）　註釋書十二卷（「群書一覽」等に十三卷とある。首卷を別冊としたものか）【著者】加藤磐齋【刊行】寛文元年【解説】內容は、第一兼好の傳記、第二その時代、第三徒然草の題號、第四その大略、第五本文の五部から成つてゐる。即ち第四までが總說であつて、第五が各段の釋義である。第四大略は、これを十條に分つて說いてゐるが、その第一なる一部趣向の條は、磐齋の見解を明示したもので、「一に一部の趣向とは、兼好がつれづれ草をかける心のおもむきむかふ事也。天台摩訶止觀をやはらげてかける也。止觀といふも、心要といふも、妙法と云も名別義通也。今はつれづれ草といふも、名別義通也。日本國の人の止觀のみちをしり、よきやうにこの草子にかけると見るべし」とて、佛教的解釋が濃厚である。本文の釋義に於ては、先づ一段々々の大綱を提示してゐる。而して元來隨筆ではあるが、磐齋の考では、各段に脈絡相通ずる所のあるのを看取して、後段を前段の總論若しくは餘論として取扱つてゐるところが中々多い。併しそれには穿鑿に過ぎた說もあつて、悉くは從ひ難い。語句の註釋には、所謂文法に注目して、或は眼字を認め、或は抑揚を言ひ、或は決前生後の詞を註し、或は問答體を吟味してゐる。前註としては、最も多く道春の「野槌」を出してゐる。一體に佛典の引證が夥しくあつて、ために註の量が著しく嵩んでゐるのは、長所であると同時に、短所である。古來兩說に亙つた所には、流石に自見を明言してゐるものがあつて、態度は曖昧でない。　〔野村〕

徒然草諸抄大成（つれづれぐさしよせうたいせい）　註釋書二十卷【著者】淺香久敬（山井と號す。加賀の人）【刊行】貞享五年【諸本】國文註釋全書所收【解説】これはその題名の如く、壽命院の「徒然草抄」以下、「徒然草大全」「徒然草參考」に至る數抄を總括して、以て一覽に便しようとするところから纂せられたものである。その體裁は、正說を以て本文に次ぎ、更に異說及び引文等を「頭書云」として出し、「山案」として著者の自見を交へ、段末に、「一段之總論」と稱して、大意を叙べてゐるのである。量としては、「徒然草」に關する空前の大著ではあるが、併しそれだけにまた雜駁の嫌ひがある。　〔野村〕

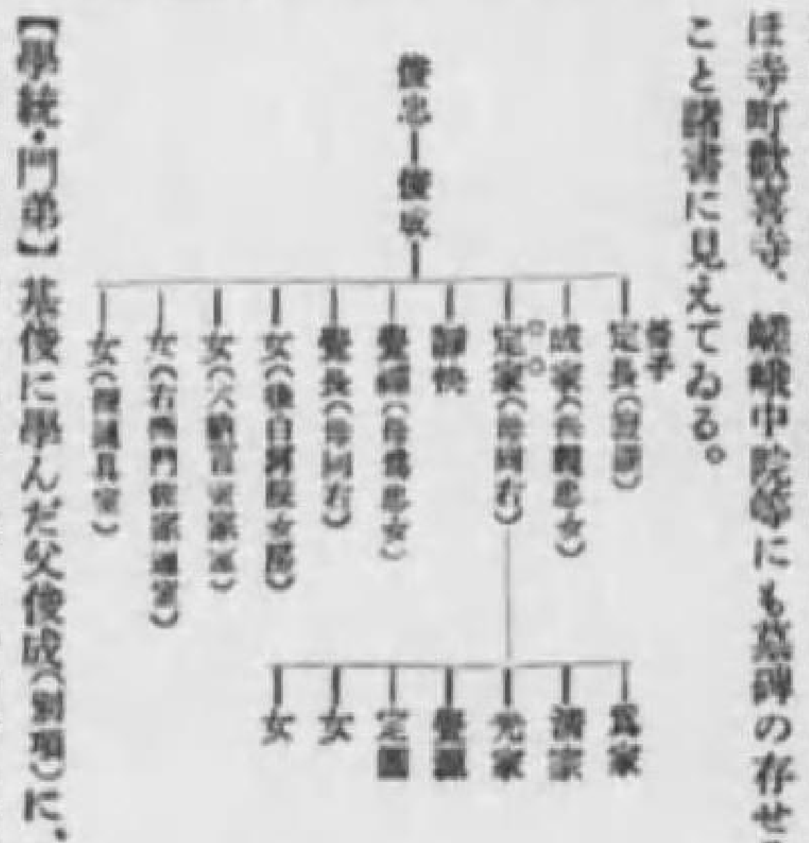
徒然草文段抄（つれづれぐさもんだんせう）　註釋書七卷十四冊【著者】北村季吟【刊行】寛文七年【諸本】鈴木弘恭の訂正增補に成るものが、寧ろ世に行はれてゐる。【解説】卷頭先づ兼好の傳歷を述べ「徒然草」の題號及び一部の體に就いて說く所があり、次にこの抄の出來た次第を記す。而して本文及び段數（二百四十四段とする）は、師貞德の說に據つたこと、諸說の後に自見を示したのは、「季吟云」と特記したこと、舊抄の兩說に跨つてゐるのは、自問自答して自說を述べたこと、並に各段を更に數節に小分けして、その本意を明めたことを斷つてゐる。この最後の一條は、特色の一つであつて、抄名の由つて出た所である。さて註釋の部を見ると、先づ段落を區分した狀は、例へば第二十一段の「よろづの事は云々」の條は、これを三節に分ち、各節の大意を挿んで、第一節は發端で、月を提示し、第二節は月から露、風、水のあはれに及んでゐるとし、第三節は閑に山水をもてあそぶことを述べて、一段を決してゐるとした類である。なほ第十九段の「折ふしのうつりかはるこそ云々」は五節とし、第百三十七段の「花はさかりに云々」は八節としてゐる。併し何れもかく一律の方法によるのではなく、第百三十九段の「家にありたき木は」の條の如きは、かやうに分けてゐない。語釋は、前註としては、最も多く壽命院の「徒然草抄」と「野槌」とを採用し、往々師說をも加へて居り、又時に諸抄（磐齋）のにも及んでゐる。古語を解くのに、「源氏物語」の抄物たる「花鳥餘情」や「孟津抄」の如きから引いてゐるのは、當時の一大註釋家たる彼として、さもあるべき事と想はせる。彼の私按を特記してゐる個所を見るに、前人の註疏に一步を進めてゐる點は確に肯かれる。又一體に事實の考證が委しくなつて居り、有職故實に關するものも詳細であつて、洵に他抄の闕を補ふに足るものが存する。概して妥當な註であつて、衒奇の所もない。古來普及した所以も、それ等の點に基ゐしてゐる。　〔野村〕

兵根元曾我（つはものこんげんそが）　脚本　四幕九場　曾我物【作者】中村清三郎・初代市川團十郎【名稱】角書の「淺黃袷、黑小袖」は、三幕目曾我の里の場で、虎が貧にやつれた十郎の黑小袖を脫がせて、わが身の淺黃袷を着せる所からついたもの。本名題はそれから續いて兄弟を兵の根元と記した。【諸本】狂言本として、二卷二册本が元祿十年五月、堺町かいふ屋から刊行されたものが現在傳はり、複刻されて元祿歌舞伎傑作集上卷に收められてゐる。挿繪畫家は鳥居清信か。團十郎と傳九郎との草摺引の場面は、特に凄じく躍動するかの感がある。二卷二册本にした事は上本と稱するものの案と思ふ。【興行】元祿十年五月、江戶中村座上演、四番續。【役割】和田義盛（あぶら勘六）、北條時政（大都字太右衞門）、江馬の小四郎（生島大吉）、梶原平三（田村平八）、梶原源太（中島勘左衞門）、工藤祐經（山中平九郎）、そとめの前（桐山政之介）、八幡（杉山勘右衞門）、近江（山本源左衞門）、御所の五郎丸（中村清五郎）、大磯虎（袖岡政之介）、化粧坂少將（藤本門之丞）、鬼王（中村勘三郎）、團三郎（市川團之丞）、二の宮姉（荻野澤之丞）、曾我十郎（村山四郎次）、曾我五郎（市川團十郎）等。なほ山伏通力坊役の九藏（後の二代目團十郎）は初舞臺。【梗概】（序幕）（鶴岡前）賴朝が北條四郎を招き相撲を催す。席上、五郎丸と鬼王、命ぜられて曾我兄弟の討手に向つたが、朝比奈に引立てられて歸り、朝比奈の威勢によつて、討手は赦免せられる。（明神社前）敵討祈願の十郎は兼て戀する江馬小四郎にあひ、衆道の契を交す事ができた。偶々詣でた少女前も小四郎と夫婦の契約を交したが、梶原の弟景季が來て、小四郎に戀を求めたが斷られた所から、一族を率ゐて攻め寄せる。小四郎は女中達を下知し、薙刀をさして戰ひ、敵を逐ひ散らす。【二幕】（峠多村）曾我から箱王のもとへ急ぐ途中、團三郎は祐經の眼に觸れて危く見えたが、鬼王が來て言ひ繕つたので、無事なるを得た。（箱根別當館）箱王は北條が烏帽子親となつて元服せしめ、介五郎時致と名乘らせたが、折しも賴朝から權現造營の上使として祐經が來た。祐經から見參の證として小太刀を與へられた時致は、その刀を摑みながら、祐成のゐぬため敵を討てぬ無念さに泣く。祐經の歸つた後、時致は不動を念じつつ泣寢入りに臥した間に顏色は赤く變つた。（權現）時致は大童となつて荒行を積み、初七日に新鍬七挺を裂き、二七日に大竹を拔き、三七日に五輪を碎いた。（相模川）朝比奈が樊噲黑を引かせて酒を飲むところに、時致が下つて垢離物を汚す所業を難じ、互に爭ふ。時に不動が現はれて兩人を鎭める（以上上卷）。（三幕）（曾我の里）端午の節句を祝ひに虎が十郎を訪れ、襲を機き、わが帷子を男に着せる。五郎の許には少將が來た。母が北條の館に行くと聞いて、兄は弟の勘當の詫にと連れ立つ。（北條館）十郎は祝儀の品とて五郎に鎧を着せて石山源太の人形を見せ、操の仕掛があるとて、母の前を欺かせた。十郎は小四郎へ、小四郎の姉まんよ與は團三郎に濡れる。この時、北條が兄弟を匿まふためとて秩父本田の勢が寄せた。十郎が危くなつて、遂に五郎の勘當が許り、五郎の奮戰で敵は退いた。これ等は母への策であつた。（四幕）（山下宿河原長者屋敷）和田一門九十三騎の酒宴に、義盛に呼ばれた虎は泣く泣く座を勸める。やがて十郎も呼ばれて虎の思ひざしがある。ここに朝比奈の招きに應じて障子を破つて現はれた五郎は、手盤に乘り、朝比奈がその草摺を曳いて遂に引切り、武勇を示した。その武勇を稱へ、揚々鎌倉に引上げる（以上下卷）。【脚色】古く流行する曾我の狂言であるが、團十郎の五郎が中心になつてゐるので、荒事の見せ場が相當多い。中に三幕目の初めの場は世話場であり、濡れ場でもあつて、荒事の間に挾まつてゐるだけ、頗る效果的である。「參會名護屋」（別項）等と同じく後世へ繼承させた荒事の型は中々多い。二幕目から「對面の五郎」（五郎參照）「不動」（別項）「竹拔五郎」（五郎參照）「五輪碎」、四幕目から「草摺曳」（別項）等が算へられる。「愛拔」「をとめ踊」「馬爭ひ踊」等も注目すべきである。特に三幕目に入れられた五郎の人形振りは、南京操との關係もあり、歌舞伎の演出史上、忽せにならぬものがある。（中村清三郎・三升屋兵庫參照）　〔守隨〕

て

帝王編年記（ていわうへんねんき）　歷史書二十七卷【編者】釋永祐と傳へる。【名稱】「歷代編年集成」「帝王編年集成」等色々の異稱がある。【諸本】寫本は多いが、特に有名なるものは知られてゐない。井上賴圀が吹上文庫本及び柳原家藏本を以て校訂し、存採叢書の中に收めて刊行。別に新訂國史大系本もある。【內容】神代の昔より後伏見天皇に至るまでの編年體の歷史である。その體裁、御歷代每に先づ御位前の記を揭げ、御宇年數と都とを記し、次いで御在位中の主なる事件に及び、崩御後のことを終つてから、その御代の上皇・皇子・皇女・後宮等の御名より、大納言以上の公卿、主なる僧官、將軍・執權等の補任を詳叙してゐる。而もその前半にあつては佛教及び支那に關する記事頗る多く、第一卷より第二卷の全部にかけては、三皇・五帝より周歷代の事蹟を載せ、釋迦降誕の時に關聯しては、釋迦在世經行歲を示す如き熱心さである。この傾向は大體奈良朝頃まで持續され、記事の少い上代にあつては、獨り支那に於ける譯經目錄や、支那・印度との年代の對照などが、多くの場所を占めてゐる。後半は當時の記錄の抄錄らしく、一言にして言へば、本書前半は、「扶桑略記」（別項）の範に倣ひ、後半は「百鍊抄」（別項）に類してゐるのである。【價值】古書・記錄の抄錄であるから、根本の史料にはなしがたいにしても、簡明に事件を知るためには便利である。且つ今日では本書のみに傳へられる記事、例へば宇治橋碑銘文の如きも、まま見出される。　〔坂本〕

定家（ていか）　歌人・歌學者【姓名】藤原氏。定家はサダイヘとも讀む。幼名を光季、後に季光と改めた。長じてその第、二條北京極西にあつた爲め、京極中納言・京極黃門等と稱され、その役名民部卿であつた關係上、戶部尙書などとも呼ばれた。【法號】明靜【生歿】應保二年生れ、仁治二年（一九〇一）八月二十日歿。享年八十。【墓所】京都妙覺寺（相國寺塔頭）。なほ寺町歡喜寺、嵯峨中院等にも墓碑の存せること諸書に見えてゐる。



【學統・門弟】基俊に學んだ父俊成（別項）に、その家學を受け、子爲家に授けた。門下には猶子定長（寂蓮）・東重胤・源實朝などがある。

年號	年齡	事項（○の欄あるは關係事項）
仁安元	五	幼名光季を季光と改める。
同二	六	季光を定家に改める。○淸盛、太政大臣となる。
安元元	一四	俊成、右京大夫を辭して定家を侍從に推す。
治承二	一七	三月十五日「加茂別雷社歌合」に自歌三首入る。
同三	一八	「明月記」の筆を執り始む（嘉禎元年に及ぶ）。○この頃三代集證傳をうくと云ふ。○重盛歿去。
養和元	二〇	「初學百首」○高倉上皇崩御○淸盛薨去○興盛出家。
壽永元	二一	「堀川百首」、俊成勅撰集撰定の命をうく。○顯昭「古今集序註」
文治元	二四	殿上に雅行と爭ひ除籍さる。○平家壇浦に滅亡。○後鳥羽院即位。
同四	二七	四月「千載集」を奏覽あり、定家の歌八首入選。
同五	二八	宜秋門院入內、御屛風歌作者に加はる。
建久元	二九	「花月百首」○西行寂○賴朝鎌倉より上洛。
同二	三〇	左大將家（良經）十題百首、良經と交あり。
同四	三二	母歿去○顯昭「六百番陳狀」奉進す。
同六	三三	民部卿家歌合出詠。
正治二	三九	初度後鳥羽院百首、大臣殿撰歌合、仙洞十人歌合等に加入（仙洞殿上許可）。
建仁元	四〇	院五十首和歌、千五百番歌合（此頃より歌合盛行の傾向に殆ど出詠す）。和歌所寄人、新古今撰定の命をうく。
同二	四一	この頃より漸次父の後繼として歌壇の領袖となる。○寂蓮・通親死。
同三	四二	父俊成「九十賀屛風歌」成る。○實朝將軍となる。
元久元	四三	十一月俊成歿（九十一歲）、勅撰集の撰集行き惱む。
同二	四四	四月「新古今集」竟宴、後實に召され「源氏物語」を講じた。
建永元	四五	院宮にて城南寺に連歌判をする。○良經薨去。
承元元	四六	最勝四天王院障子歌、小倉山莊を營む。
同三	四八	「近代秀歌」成る。次子爲家侍從となる。實朝の歌に合點す。
同四	四九	左近衞中將を辭し爲家を少將に推す。
建曆元	五〇	この頃より連歌を好んで多く詠む（從三位侍從）
建保元	五二	家傳の「萬葉集」を實朝に獻ず。仙洞歌合を判ず。○道元出家。
同二	五三	「七十五番歌合判詞」成る。この頃禁裏歌合多く定家の判のはいるものも多い。參議に任ず。
同三	五四	禁裏御連歌後に狂歌合に出會。
同四	五五	「拾遺愚草」を編し自作の總勘定を示した。○長明寂（?）
同五	五六	臨時詩歌、この頃より詠歌に對する興味が減退したらしい。
同六	五七	八月中殿御會、民部卿に任ぜらる。

承久元	五八	「毎月抄」成る。○實朝弑さる。
同　二	五九	この頃より好尚的趣味的性情顯著となる。○慈圓の「愚管抄」成る。
同　三	六〇	「顯註密勘」成る。○承久の役、後鳥羽院二上皇遷御。○雅經歿。
貞應元	六一	參議を辭す。
同　二	六二	「古今集定本」「三代集間事」成る。「二條家本」を書いたと云ふ。古今集書寫。道元入宋。
嘉祿元	六四	この頃より公の歌合に爲家を出會せしむ。○慈圓寂。
同　二	六五	「僻案抄」成る。
寛喜元	六八	女御入内屏風歌に七首入選。
同　三	七〇	伊勢物語臨寫畢。○爲家叙正三位。
貞永元	七一	關白左大臣家百首。光明峯寺攝政家歌合。「長歌短歌古今相違之事」を著す。新勅撰集撰進の命を受く。權中納言に任ぜらる。
天福元	七二	出家（法號明靜）。時に[illegible]はる。致仕。
文暦元	七三	新勅撰集內々奏覽、後堀河院の崩御のためその草稿を燒却。
嘉禎元	七四	中風を病む。明月記終筆。小倉色紙百枚をかくと云ふ。
同　三	七六	「順德院御百首判」○家隆歿去。
仁治二	八〇	八月二十日歿去。
建治三		定家卿追福この年より始めらる。

【閲歴・人物】 母は初め美福門院女房加賀と呼ばれ、若狹守藤原親忠の女である。初め寂超の許に嫁し、後、俊成に再嫁した。俊成は先妻に男子がなかつたので、弟の俊海の子定長を養子としてゐたのであるが、成家・定家相ついで出生のため、定長は家を出て僧となり、寂蓮と稱した。定家長ずるに及び、父の寵愛を集め、十四歳にして侍從となり、禁裏に出入する身となつたのも、父がその極官であつた右京大夫を辭し、定家に侍從を申請した爲めであつた。俊成を父としてこの環境に生ひ立つた彼は、他面、地下に於ける賴政や忠度、西行や俊惠などの風流に動かさるゝことも多かつた。彼は天性多才多能で、恒にその立場を失はず、行くところに自家の世界を拓いたもののやうに思はれる。歌道は彼がその一生を委ねたところでもあつたが、先づ養和元年「初學百首」、壽永元年「堀川百首」を發表するに及び、一躍大家の列に伍し得（拾遺愚草の詞書）、父の撰定によるとは云へ新集の「千載集」に八首の入選を見た。西行が、自歌合「宮河歌合」を以て定家の判を乞うたことは、單に俊成の子であつたがためのみでなく、「千載集」の詠に、未だ二十幾歳の青年ながら、非凡の歌才あることを見透したからであつたらう。而も當時の世態は三百年間の基礎を有する王朝文化の總崩れとなる一大轉機に際會してゐる。この時代の波風に、よくその進路を失はなかつたのは、自らの聰明によるとは云へ、苦惱の跡は深いのであつた。歌道に於て彼の詠み口が新しすぎるとか、達磨歌であるとか云ふ非難は良經とか家隆とか云ふ新人の理解を得て、安んずるところあつたとしても、藤氏の中でも血統の關係上低い官職で甘んじなければならない宿命の如き、彼を深く惱ましめたやうである。彼は弓道や馬術に於てすら、なほ能く人並以上の技を發揮し得たと云ふ。而もこの絢爛たる才幹が却つて彼から純なるものを奪ひとつたやうにも思へる。彼が殊更武家並に武家親善の公家と關係多い事實の如きも一つの懸案となるであらう。榮達を希うて與へられない彼は、「位山麓の雪に埋れて」などと負け嫌ひな反逆性を事毎に示してゐる。併し歌壇の大元老としての父の地位を繼承してゆくものは、當時、彼を措いて他になかつた。正治二年、彼は既に三十九歳であつたが、仙洞の殿上を許され、「院百首」と云ひ、「仙洞十人歌合」と云ひ、すべて重要な歌合に加名する榮譽を得た。その翌年和歌所が再興され、藤原通具等四人と共に上皇の大抱負であつた次代勅撰集撰定の大命を蒙ることになつたのである。その撰定半ばに父俊成は九十一歳で歿した。寂蓮や攝政良經、また俊成の死と相前後して他界した。定家がその後の十ケ年は、小倉山に山莊を營むとか、長子爲家を少將に推擧するとか、諸方の歌合の判詞を書くとか、自作の整理をするとか、すべて專ら内面的活動に當てられることが多くなつた。連歌に興味を有して來たのも五十歳時代からであるが、彼には天性的に連歌愛好の傾向が存してゐたと云つてよい。彼はそこに機智と洒脱の性格を思ふ存分活かすことを得たやうである。その後七十一歳致仕に至る十數年間は、歌人と云ふより、寧ろ著述家とか學究とか云ふ名にふさはしい餘生であつた。彼の著として傳へられてゐる大部の歌學書が、その間に編まれたばかりでなく、古典の校合と云ふ如き大事業をすら多く遺してゐる。而も貞永元年、新に勅撰集撰進の大命をうけたことは、古稀の齡を越えた彼として、その最後を飾るに足る大任であつた。「新古今集」奏覽に際しての不滿は、玆に充足さるべき絶好の機會を得たのである。文暦元年内々の奏覽のみでその最後の御裁可を受けない前に、後堀河院の崩御に際會し、定家の遺憾やるかたなく、所持の原稿を庭上で燒却したと云ふ「明月記」の記事もその心中を想像するに足るのである。定家は神經衰弱の持病があつたやうである。日記中に屢々「心神殊惱」と云ふ類の句を書き遺してゐる如く、彼の體力は餘り强健でなく、胃腸も弱い方であつた。七十二歳に法體になつてからは、多く小倉山莊に住まつてゐたものらしい。かくて詠歌と云ふ興味からすらも漸次離れていつた。そして家隆卿や後鳥羽上皇の御他界をも耳にして、仁治二年八十歳で薨去した。

【著作】（一、歌學に關したもの）近代秀歌（「和歌式」「定家卿和歌式」「愚見抄」等の別稱がある）○毎月抄（「和歌庭訓」「定家卿消息」の別稱がある）○詠歌大概（別稱[illegible]）（以上各別項）○明月記和歌部類一卷（定家の漢文體日記「明月記」の中から、歌道に關した主要な部分を抄錄したもの。文治四年より建保四年に亙り、和歌所や和歌御會場の圖なども採られてゐる。一條兼良の抄出と云ふ。續類從第四七〇）○歌道事類二卷（兼良の抄錄を源貞德が更に文化七年增補したもの）○定家卿長歌短歌說一卷（續類從第四五〇に收載す。貞永元年の述作で、當時、長歌短歌の定義混亂して不明であつたのを考證して原義に歸した論著。「長歌短歌之式」とも別名される。古寫本。帝國圖書館藏）○顯註密勘三卷（別項）○僻案抄三卷（別項）○三代集間事一卷（別項）○三部抄四卷（定家の歌著の中、「詠歌大概」「秀歌之體大略」「百人一首」の三書を總括した名で、二條派ではこの三書を極重視し、註釋書なども色々出されてゐる。附錄として「未來記」と「雨中吟」の二書のついてゐるのが多い）○定家物語一卷（寫本が圖書寮に傳はつてゐるが、内容は安積沼事、古今與風事、埋木と云ふ類の項目十四種に亘り、「萬葉集」その他を引いて考證解說したもので、自らのことを明靜と書いてゐるのに據れば、出家後、さる歌會に論じたものを門下の某が手記しておいたものかと察せられる）○和歌書樣並定家卿相語○和歌書樣並會之次第（以上の二書は、何れも定家の著として傳へられた寫本であるが、斷片的のものである）。なほ定家の著に假託されたものと論ぜられてゐる書の主なるものの名を附しておく。これ等の中に定家の說の混じてゐることは否み難い。その推定される製作時代もすべて中世に屬する。○桐火桶二卷（寛永版、類從第三〇〇所收）○三五記二卷（鷺の本末とも。寛永版、類從第三〇二所收）○愚秘抄二卷（鵜の本末とも。神宮文庫に永正六年の寫本あり。類從第三〇一に收載された以外、年代不明の古寫本あり）○未來記一卷（慶安版の外、圖書寮に慶長二年の寫本がある）○雨中吟一卷（同上）○和歌伊呂波寫本一卷○古今六義定家注辨寫本一卷（「桐火桶」以下の諸書は二條家としては重視され、中には抄本や解註などの出てゐるものすら存する）。

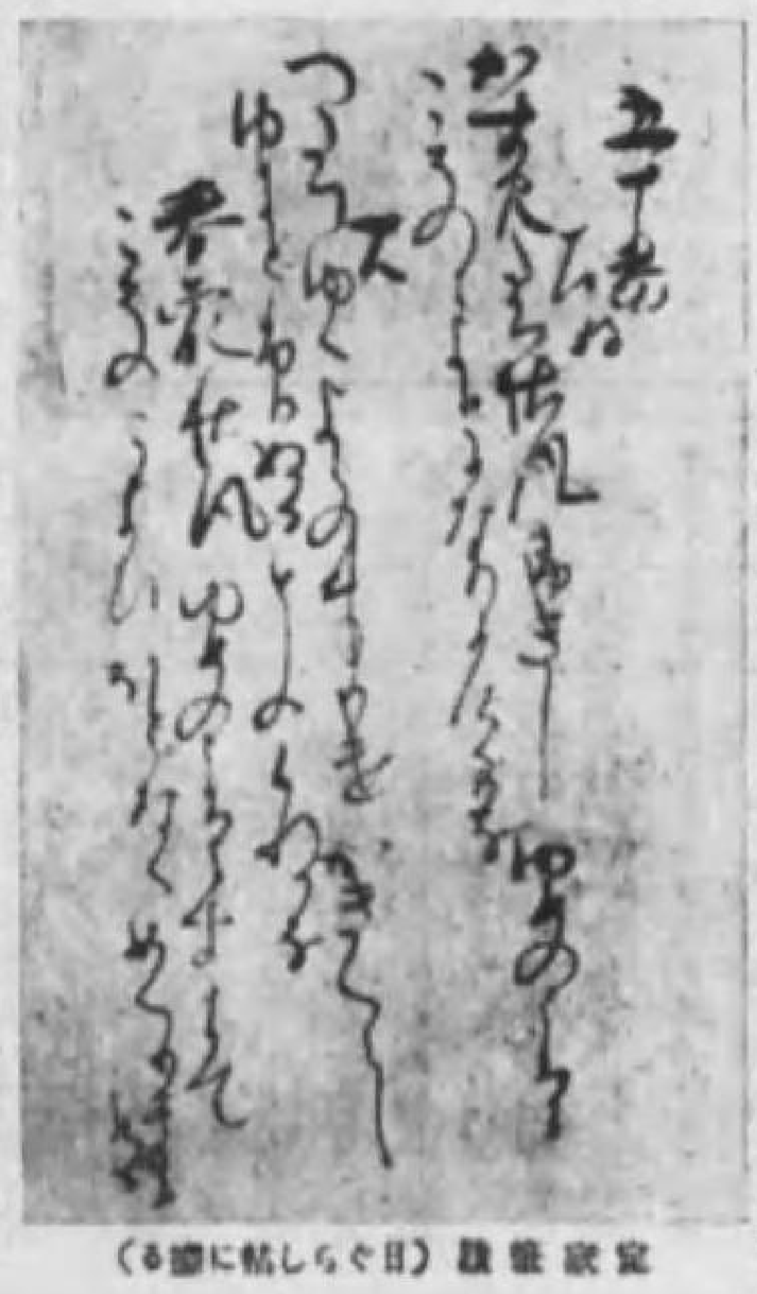
（二、判者となつた主なる歌合）宮河歌合（西行自歌合、文治年間のもの）○正治仙洞十人歌合（作者は後鳥羽院その他、定家も加はる。正治二年。類從第一九〇）○建曆仙洞歌合（作者順德院等十二人。建曆三年。類從第一九四。判詞あり）○建保歌合（作者は順德院等十人。建保二年。秋十五番戲歌合とも。判詞あり）○建保百番歌合（作者は順德院等十八人。建保四年。類從第一九六。衆議判ともいふ）○建保五年歌合（作者は順德院初め十六人。類從第一九七。もと衆議判であつたのを、更に定家の判詞を乞うて出來上つたもの）○寛喜石清水若宮歌合（作者は、定家外家隆・基家等三十四人。寛喜四年。類從第一九八。判詞あり）○貞永關白家歌合（作者は基家・家隆等二十二人。貞永元年。類從第一九八。判詞あり）○貞永名所月歌合（作者は後堀河院・定家・家隆等二十二人。貞永元年。類從第一九八。判詞あり）○知家卿廿一番百歌合（日吉社法樂歌合。嘉禎元年。類從第二一八。判詞あり）

（三、選歌の主なるもの）新古今和歌集○新勅撰和歌集○小倉百人一首（各別項）○秀歌之體大略寫本二卷（歌學文庫第三に收む。選歌の範、範圍は上古より當時に至る全部に亘り、歌數は百四首。手ごろである爲めに、二條派の歌家等の如く重視され、多種の註釋書が出てゐる）。

（四、家集、百首、自歌合等）拾遺愚草（別項）○定家百首寫本一卷（養和元年の初學百首より貞永元年の關白左大臣家百首に至る五十年間中の百首歌十五ケ度分を含む）○正治院百首（後鳥羽院外二十三人がそれぞれ正治二年百首を作り、合してこれを正治百首と呼んでゐるのであるが、定家もその一人に加へられた。三卷。續類從第三八二）○建保名所百首（順德院外十二人のものが、百ケ所の名所を四季・戀・雜に配し、百首として錄出したもの。定家もその一人に加はる。類從第一七一。「建保名所三百首」は、その中より院・定家・家隆の歌のみ抄出したもので、寛文十年の板本も出てゐる）○定家卿藤河題百首（藤河百首とも四文字題百首とも云ふ。定家が内大臣基家のために、特に四文字題の歌を百首纏めたもの。藤河と云ふ名は卷頭の歌詞にちなんで附せられたものであり、寛文七年及び天和三年の板本がある。續類從第三九〇）○定家卿獨三百首（類從第三五七に收載、但し作者を定家に假託した說も行はれてゐる）○定家卿自歌合（序によれば、洛郊庄御のために、自詠四十八首（圖繪の本圖に准へて）を選び、二十四番の歌合としたもの。梅松の如き題にちなんだ圖も描かれて左右に分けてある。類從第二二〇）○定家卿百番自歌合（建保四年撰したものを、後後か改訂し、同七年新判を申請したもの。續類從第四一三）○定家卿獨吟詩歌（建保五年、和歌六十四首詩三十二首を收む。續類從第四二一）。

（五、歌道以外の編著）定家小倉問答寫本一卷（鞠の故實に關し、定家と爲家との問答を錄したもの）○定家卿御鞠口訣一卷（蹴鞠に關した定家の說を錄した書。續類從第九一四）○大將裝束抄（定家裝束抄、次將裝束抄とも）○釋奠次第（何れも有職書で、前者は類從第一一七、後者は類從第八九）○後鳥羽院熊野御幸記一卷（建仁元年十月の記で「明月記」の一部である。類從第三二九）○明月記（別項）

【作風】「甲子夜話」（六）に、定家の二十歳の時の詠「苔の下に埋れぬ名を殘すともはかなの事や敷島の道」をあげて、和歌は初め一生の志でなかつたことを指摘してゐる。如何にも彼には、父俊成の志を繼ぐがため、或は六條派歌學に對抗するがため、殊更志を曲げて歌人となつた一面がないではない。彼は幼時、「簀笠を着たる男が馬に乗り川の向ふを通るなりけり」と即詠したほど、天才的だとも讃へられてゐるが、「初學百首」などで臆測される如く、その歌道への進出は、決して早熟的天才的ではない。彼の成功が企業的組織的である點より見ても、多くは明敏な卓識と眞摯な精進とに俟つてゐた。古來「定家家隆優劣辨」など存するやうに、抒情的純眞とか自然的發想とか云ふ方面から見れば、定家は必ずしも推賞され難い。而も中正を得、雅趣を失はない態度に於て、かれ程、師範として、はた二條派の建設者として申分ない歌人は他に稀れであらう。その作風は、態度の上より見て、（一）新情趣美本位のもの（有心的）と、（二）古典美特に風雅的艶冶美を本位とするもの（染心於古風）と、（三）輕妙洒脱の趣を愛し連吟的のもの（百句五時歌之）とがある。（一）のうち、（イ）寫實的發想（麗體・濃樣等）の作に、「霜まよふ空にしをれし雁がねの歸るつばさに春雨ぞふる」「ゆふだちの雲間の日かげ晴れそめて山のこなたをわたる白鷺」などがあり、（ロ）象徵的發想（幽玄樣）の作に、「春の夜の夢のうきはしとだえして嶺に分るゝ横雲の空」「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ」などがある。又、（二）の作例には、「時こそあれさらではかゝる句かは櫻も如何に春を待ちけむ」「いかにしていかに知らせんともかくも言はばなべての言のはぞうき」などが擧げられる。なほ又、表現の上より見れば、（一）古語の活用優れ（習詞於先達）、特に韻律的配意の凝らされてあるもの（[illegible]）に、「袖に吹けさぞな旅寢の夢もみじ思ふ方よりかよふ浦風」「面かげのひかふる方にかへりみる都の山は月纖くして」などがあり、（二）本歌取、秀句的技巧に於て特に優れたものに、「駒とめて袖うち拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」「とればけぬわくればこぼる枝ながらよしみやぎ野の萩の下露」など、又（三）技巧瑣末にすぎ、却つて意味晦澁の嫌あるものに、「秋風よそよや荻の葉こたふとも忘れぬ心わが身やすめて」の如きがある。以上の諸特色に亙つて最も珍重さるべき點は、氣分の象徵的表現歌である。彼が歌を詠むに際し、衣紋をつくろひ、家の南面を開放し、室の中央に坐して遙かの空を眺めつつ案じたと云ふ


定家筆蹟（日ぐらし帖に據る）

が如き逸話は、よくこの消息を語るもので、象徴歌人としてのみ彼の理念が完全に創造化されてゐるさまを認め得るのである。

【業績】（歌學者として）歌學に就いては、貫之が歌論家として秀でてゐた以上に、定家が單なる歌人の域に止まらず、評論史上に一つの體系を建設したと云ふ功績は、特筆すべきである。勿論、その古語尊重に發する規式が黃金律視され、果ては制詞禁句を生み來すに至つたことも事實である。「定家をなみせん輩は冥加もあるべからず」（耕雲記物語）とか、「定家の說を離れては頗る傍若無人なり」（蜜渠抄）と云ふ類の保守偏見性を子孫後裔に抱かしめるに至つたにつき、多少の責が彼にないとは云へない。しかし、これ等も、芭蕉と蕉風との關係に於けるが如く、寧ろ末流の奮誤的心理による勝手の解釋である場合が多く、制禁に就いても、定家自ら「天性病に侵されぬほどの歌になりぬれば何れの病もいたづら事なり」と論じてゐる如く、別に強制的範疇を設けた譯ではない。「その人の詠めらむ歌をよくよく認めて後に風體を拔くべき」と云つてゐるが如きに至つては、歌聖としての面目躍如たるものがある。なほその歌は西行の吟詠の如く、個性的の深さには物足らないとしても、象徴的歌風（所謂幽玄體）を創立した點に功績の歸すべきものがあり、近世に於て反動的復古運動の興つた後と雖も、よく歌壇の一角を占め續け得た魅力は、沒すべからざるものが多い。

【連歌史に於ける遺績】「筑波問答」に、近來體の連歌を、家隆・定家時代に起る如く述べてゐるが、定家の功績は特に大きい。等しく歌人にあつても、連歌歌人としての傾向あるものと然らざるものとあるが、定家の如きはその前者の典型と云つてよい。「菟玖波集」中、同時代の人々の中、定家の句最も多く二十三句に亙つてゐるのは必ずしも偶然でない。一例

むすぶ契りのさきの世も憂し
夕顔の花なき宿の露のまに

彼は若く文治二年（二十五歳）の頃より、連歌の座に列なる經驗をかさねた。文治四年秋には、雞鳴まで連歌に耽つたと云ふ類の記事をも留めてゐる。但し深い興味を感じ初めたのは、後鳥羽院の仰せで、有心無心（別項）の連歌の遊ばれ始めた建永時代からで、建暦・建保にかけ連歌の張行日に增し多く、定家の加はる席も多くなつた。

（古典書寫並に校勘に於ける業績）定家の眞蹟は甚だ珍重されてゐるが、彼が所謂能書家でなかつたことは、「海人藻芥」や「甲子夜話」の說を俟つまでもない。しかし正確であることが、校合と云ふ仕事から見て第一の強味と云つてよい。而も速筆でもあつたらしい。この點、青表紙本等と珍重されるのは當然で、諸種の古典につき定本を作つた功績は、歌道の業績に匹敵するといふも過賞ではない。今「明月記」に記された主なる筆寫本の名を列擧すると、「實房卿記」「官職御即位指圖」「新古今御點取」「狹衣物語和歌」「古今集」「後撰集」「伊勢物語」「源氏物語」「大和物語」「部類萬葉集」「和漢朗詠集」「源氏物語和歌」「拾遺集」「千載集」「土佐日記」「更級日記」「みつの濱松」「夜半のねざめ」「小倉百人一首」等、その他、錄文の書寫の記事は特に多い。この中には、「土佐日記」の如く、眞蹟の前田侯爵家にその儘保存されてゐる物もあり、特にその奥に「不讀得所々多只任本書也」といふ類の眞摯な態度の現はれた註書あるを見れば、一層敬服せしめられる。その他眞蹟の現傳されてゐるものに「明月記」（一部）「近代秀歌」「西行歌集」（一部分）「更級日記」（御物）等がある。文暦二年四月七日の日記に「今日以中風手書寫草子二帖」ともある。

【參考】源平盛衰記○古今著聞集○十訓抄○東野州聞書○藤原記○本朝通鑑○玉かつま（公卿家傳）○扶桑名畫傳○百人一首一夕話○藤原定家歌集（岩波文庫）附錄○大日本史○類聚名物考○甲子夜話○遠碧軒記○北窓瑣談○海人藻芥○卯花園漫錄○理齋隨筆○臆尻 （齋藤（淸））

定家 ていか 「夫婦物の謠曲」を見よ。

鼎峨 ていが 黃表紙作者【姓】米山氏【別號】文溪堂【生歿】未詳【閲歷】江戸の人で筆耕を業とした古い作者である。署名のある作品は安永五年の物が最も古いが、それ以前から創作してゐたらしい。天明四年以後の作は見當らないが、恐らくその頃に歿したであらう。【作品】奧州古戰物語（鳥居淸經畫安永五年刊）○浮世風俗女敵討（鳥居淸經畫安永五年刊）○後三年松島八景（鳥居淸經畫安永五年刊）○萬福長者玉（鳥居淸經畫安永六年刊）○二人義經堀川合戰（鳥居淸經畫安永七年刊）○三寶利生初竹（鳥居淸經畫安永七年刊）○彈的東風俗（鳥居淸經畫安永八年刊）○怪談豆人形（鳥居淸經畫安永八年刊）○狂唄雄御山（鳥居淸經畫安永八年刊）○敵討膝天狗（鳥居淸經畫安永八年刊）○曲輪雀大通先生（鳥居淸經畫安永八年刊）○大中黑名香勝負（鳥居淸經畫安永八年刊）○七福人親方（女、秋花作。文溪堂兼題。鳥居淸經畫。安永八年刊）○鎌倉山紅葉浮名（鳥居淸長畫安永九年版）○十二支鼠桃太郎（北尾三二郎畫安永九年刊）○野暮大臣南郭遊（鳥居淸長畫天明四年刊）

【批評】作者はその生活環境から、興味あり、社會に強い印象を與へた事柄を拉し來り、それに過去の作品・傳說等を混じて、一篇を構成する。謠曲なども屢々取り入れてゐる。初期の作品は對手を子供とし、說明もくどいが穩かな物で、「萬福長者玉」の如きは「金々先生榮花夢」（別項）から脫胎してゐるらしい。安永八年頃は、作者として最も脂が乘つて來た時で、市場通笑（別項）について創作の數は第二位である。主に大人を讀者に豫想した作品で、「彈的東風俗」「曲輪雀大通先生」のやうな洒落本に接近した作品を出し、最も變化に富んだ時である。而も洒落本的傾向は、進んで「野暮大臣南郭遊」となり、洒落本「婦美東雜題子」の剽竊と非難さるべき作品をも殘してゐる。他方には「鎌倉山紅葉浮名」「十二支鼠桃太郎」の如き子供向の作品もあり、これ等の中に却つて良いものがある。作柄も文章も中位である。對話は巧であるが極めて僅かの作品を除いては、地の文中に區切らずに挿入してあつて、紛らはしい。一般に物語的で洒落がなく、重い感じのする作品である。 （小池）

低徊趣味 ていくわいしゆみ 文學的術語【解說】夏目漱石が高濱虛子の小說の作風を論ずるに當つて創始した言葉で、當時の文壇を風靡した自然主義作家の趣味と正反對な趣味を意味する。卽ち虛子の小說「鷄頭」の漱石の序文に於て、小說を二種に區別して餘裕のある文學と餘裕のない文學とし、その餘裕のある文學の持つものを低徊趣味と名づけ、且つ

先づ一と口に云ふと一事を卽し一物を卽して、獨特もしくは連想の興味を起して、左から眺めたり右から眺めたりして容易に去り難いと云ふ風な趣味を指すのである。だから低徊趣味と云はないでも、依々趣味・戀々趣味と云つてもよい。所が此趣味は、名前のあらはす如く出來る丈長く一つ所に佇立する趣味であるから、一方から云へば容易に進行せぬ趣味である。換言すれば餘裕がある人でなければ出來ない趣味である。（中略）そこで低徊趣味も、客觀的とか主觀的とか區別すれば色々になるが、虛子の小說には此餘裕から生ずる低徊趣味が多いかと思ふ。

とある。この趣味は實は虛子に限らずホトトギス一派の人々の作風に共通するものでもあつたので、漱石は虛子に就いて語ると共に、又自らに就いて語つたものでもあつた。故に世間からは虛子及び漱石初め、兩人に關係を持つホトトギス關係の小說作家の作風として認め、これを餘裕派又は俳諧派と稱した。 （吉田）

定家假名遣 ていかかなづかひ 「假名遣」を見よ。

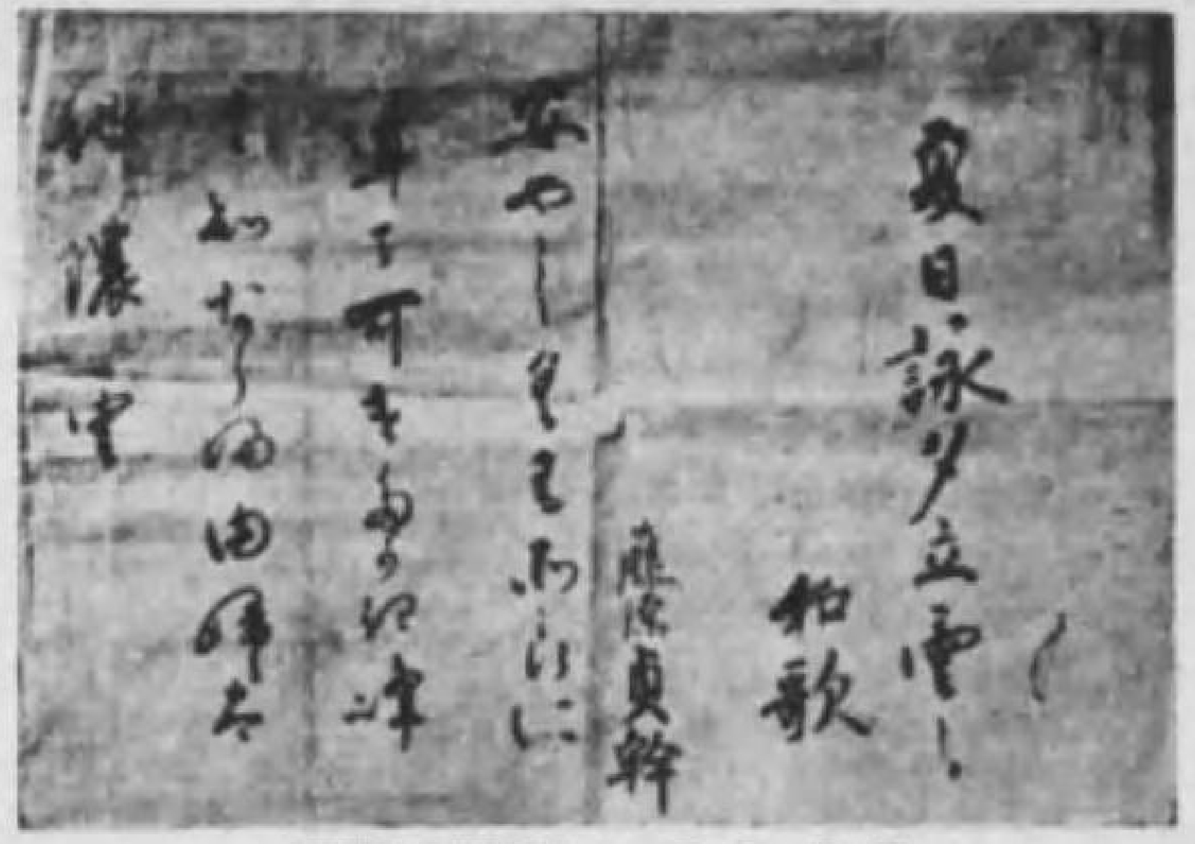
定家卿消息 ていかきやうせうそく 「每月抄」を見よ。

定家卿和歌式 ていかきやうわかしき 「近代秀歌」を見よ。

定家流 ていかりう 「書道」を見よ。

貞幹 ていかん 國學者【姓名】藤氏、本姓藤原。藤井と稱するは誤。通稱は叔蔵、字は子冬【號】無佛齋・好古【生歿】享保七年京都佛光寺中の久遠院に生れ、寬政元年（二四四九）八月十九日歿す。享年六十八【墓所】京都眞如堂【閲歷】壯年放蕩三昧をなし、後、寺を出て還俗して世を遁つた。國學考古の道に深く、考證に長じ、往々奇矯の言をなして人を驚かしたが、奇矯中また人を啓發せしむるものがあつた。

【著書】衝口發○好古小錄○好古日錄（各別項）○好古雜錄○古瓦譜○逸號年表等。 （石村）



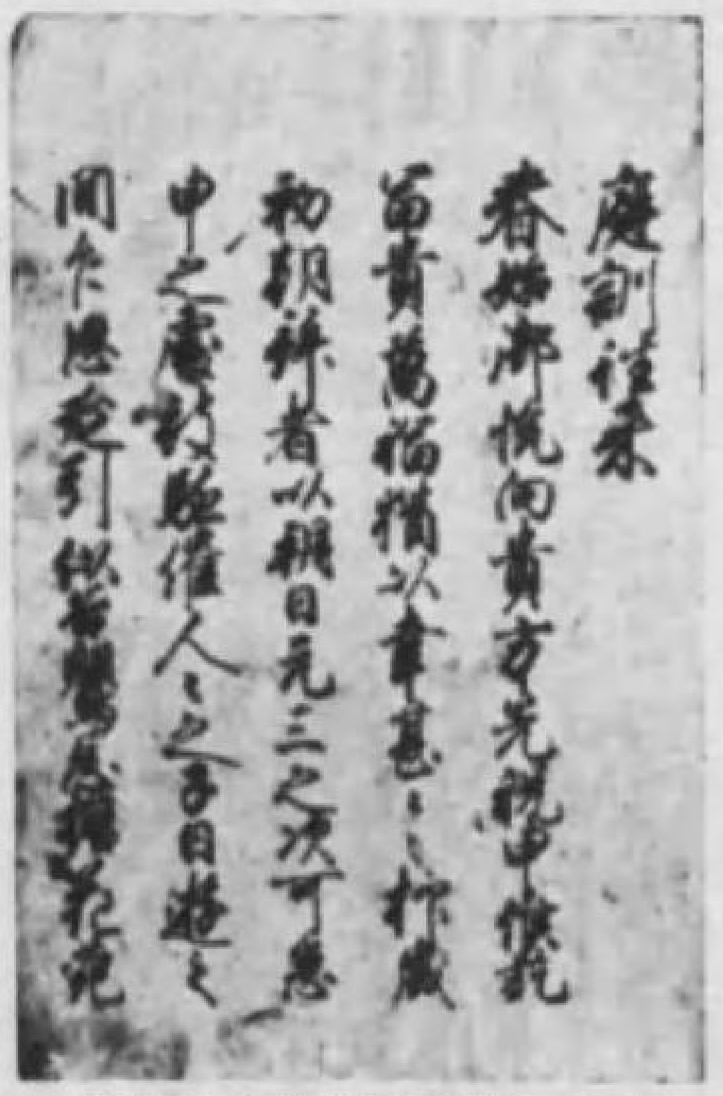
夏日詠夕立雲和歌

藤原貞幹

藤貞幹讚詠（黑川眞之助氏藏）

低級感覺 ていきふかんかく 美學【解說】視覺・聽覺を高級とするに對し、觸覺・嗅覺・味覺・運動感覺等を低級と稱して一般に美的意義を拒まれ易い傾きがあるが、藝術美との關係に於てはなほ考慮すべき點がある。その主なるものについて見れば（一）觸覺。皮膚面が外物と觸れることから生ずる感覺を總稱するが、外物の粗滑硬軟等の物質性の感覺に關する限りは、その外物との順應分化の程度に於て視聽覺に劣る。しかし空間的形體を知覺する際に視覺と融合してより精確な空間知覺を可能ならしめるのみでなく、獨立に物質性を知覺せしめるから、この感覺の再現的要素は空間藝術の理解をより具體的ならしめるといふ點で美的意義があたへられる。特に彫刻の本質理解に就いて著しい。觸覺が異常に發達し、順應作用の分化が著しく高まり、且つ純化するならば、この官能の美的意義は益々加へられることとなる。（二）嗅覺・味覺。共に觸覺に對する肉體的反應が著しく將來されるが、對象が情感的に印象される場合、これ等の官能的要素が美的印象を成立せしめるに役立つ。特に自然の情趣的受用に於て。東洋の詩歌について見れば、嗅覺的要素を拒否し得ない場合が多い。（三）運動感覺。觸覺的順應に伴うて吾々の身體の運動がそれに順應して起る。このことは聽覺に就いて著しいが、要するに律動的感覺が美的形式を知覺する場合の要素となつてゐることの多いのは明かである。 （村田）

庭訓往來 ていきんわうらい 往來物 一卷【作者・成立】古くから僧玄惠の作と傳へられてゐる（[illegible]、寬永八年版庭訓往來の序など）。併し記載の內容が玄惠歿後の事に及び、足利義滿の驕奢を語るところがあるので、この說は成立し難い。永井如瓶は、その義滿將軍以後のものなることを主張し（元祿十五年版庭訓往來諸抄大成）、近年に至つては四代義持の頃のものとする說や、八代義政の頃とする說なども出た。要するに足利時代前期の作と見てよからう。【內容】消狀・返狀の一對づつを一ヶ年の各月に配し、その上に閏八月の遊狀一篇を添へ、凡て二十五通から成つてゐる。その記載內容は上流武家の階級を標準とする社會生活上の雜事である。一月と二月との書狀で、射御のことから詩歌連俳に至るまでの辨藝上の教養について述べ、三・四月の書狀で農工商に關する知識を集め、五月と七月との所で家財諸器具、諸料理のことから衣服調度の名を揭げて衣食住に關する一通りの文字を集め、六月の書狀では出陣に關する手配りと武具名とを擧げて戰陣關係のことを說き、九月・十月の所で佛事僧官のことを敍し、十一月には病氣と醫藥、十二月には地方行政の狀態について述べてゐる。指導階級の地位に立つ當年の上流武士が、心得て置かねばならなかつた一通りの知識が網羅されてゐる。【解說】この書は往來物發達史上に高き地位を占めるものであるが、それは、その記載內容よりも寧ろ文體の上から來てゐる。以前の往來物に於て全く統一のない雜多な形式をとつてゐた文體が、庭訓往來によつて初めて統一の傾向を生じた。正月狀だけについても、鎌倉時代までの古往來には、書き出しについて一定の型なく、「三春迎節、一天多樂」「陽光條後、春色多端」「年光云改、春景漸閑」など、思ひのまゝに書き出してゐる。強ひて言へば、新春の長閑さに自他共に陶醉するの喜びを敍して、特に相手方を祝福するの風なき點が一致してゐる。室町に入つて、正月狀の冒頭言は統一の曙光を洩らし始めた。庭訓往來の出現が、古往來の混沌たる樣式を纏めて、統一した鑄型を示したのである。書き出しに於ても、「春始御悅、向」



庭訓往來

春始御悅向貴方先祝申候訖

天正十一年寫庭訓往來（橋本進吉氏藏）

貴方二先祝申候畢。富貴萬福猶以幸甚々々」とか、「祝言於二于今一雖レ事舊候、猶以珍重々々。慶賀追レ日重疊、家門迎レ年繁昌、自他不レ可レ有二際限一」とか、相手方の祝福に心を籠めた書き方は、庭訓往來を以て初めとし、それ以後の往來には、多少の變形を以て常に襲用せられ、自ら一種の型となつたものである。かくて庭訓往來を基點として往來文體の劃一的傾向が發展したのである。而して本書の流布は室町前期から江戸末期に至る四百年間に亙つてゐる。「下學集」の序（文安元年）にも往來物の代表として掲げられ、朝鮮の「經國大典」（我が文明元年成）にも、初步教科書の一として數へられてゐる。天文年間の書寫本が幾通りも現存してゐる事は、室町後期に於けるこの書の流布を語るものであるが、天正八年には、早くも手習手本として出板せられた。江戸時代に入ると慶長九年板、寛永五年板などを先驅として續々刊行せられ、異板實に百數十種に及んだ。以てこの書の流布の如何に大であつたかを知ることが出來よう。

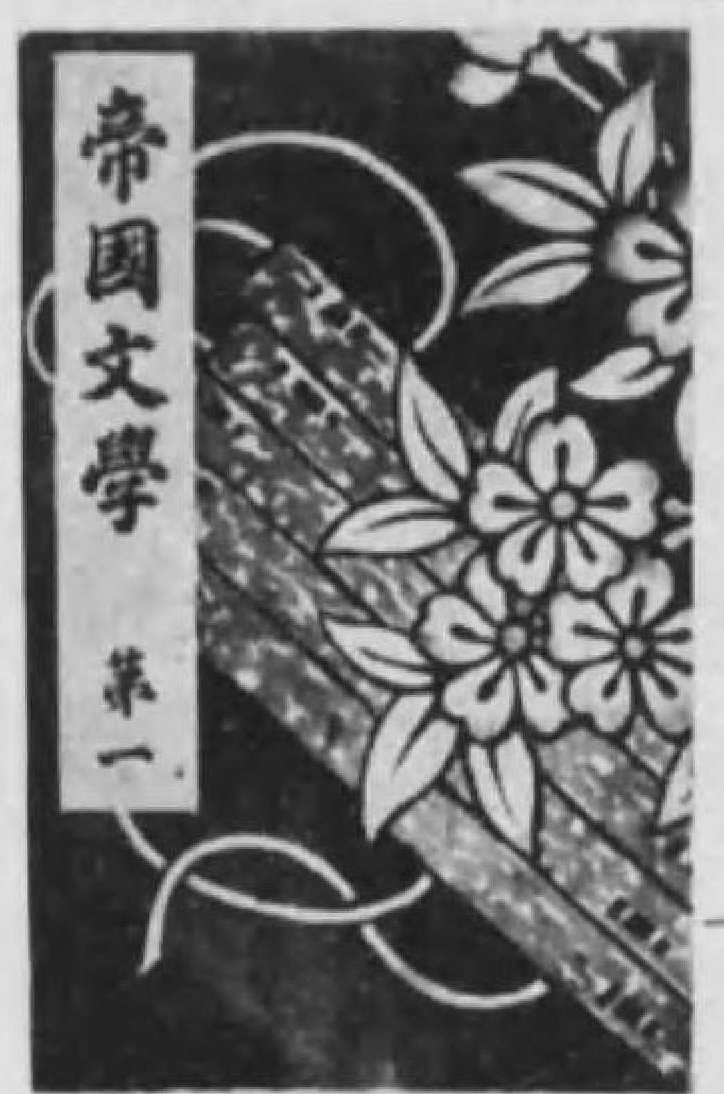
【註釋書】所說の系統に從つて分類して擧げる。（一）庭訓往來鈔（著者未詳（寛）（漢文で註したもの、室町中期以前の著作であらう））○庭訓往來諺解大成（永井如瓶子（元祿十五年刊。一「庭訓往來諺抄大成」とも云ふ。主として前者に據つてゐる））○庭訓往來諺解大成捷翼（伊勢貞丈（寛延）諺解大成に更に註を加へたもの）○庭訓往來證註大成（永井如瓶子著・山崎美成補（諺解大成と殆ど同一。體裁を多少變へてゐる））○庭訓往來諺抄大成（松井簡治校訂（明治三十六年刊。諺解大成と捷翼とを一つに收めて覆刻したもの））。（二）庭訓往來註（著者未詳（寛永八年刊。片假名交り。本書には類本が多い。貞享五年刊本は本文なく註のみである））○庭訓往來鈔（著者未詳（寛延二年刊。平假名交り。多少體裁を異にするのみで、內容は前の「庭訓往來註」と同一））。（三）前記二系統の註釋に據つて作られたと思はれるもの○庭訓往來捷註（平丘（寛政十二年刊））○庭訓往來具註鈔（[illegible]（天保五年刊））○庭訓往來精註鈔（島田子謙（天保十四年刊、具註鈔と殆ど同一））○庭訓往來諺解（山崎美成（嘉永五年刊、同上））○頭書講釋庭訓往來（高井蘭山（刊本））（四）理解を助けるために、本文のほかに繪を加へたもの。（（一）及び（二）の類にも註の外に、上欄に繪を挿んだものがある）○繪入庭訓往來（著者未詳（貞享五年刊。「庭訓往來圖讃」とも云ふ。この類の最初のものか））○庭訓往來圖抄（著者未詳（飯田版））○字註繪入庭訓往來（下河邊拾水（明和九年刊））。この外に、繪抄・繪抄解などと名付けられたものも甚だ多いが、大體に於て上記の書を襲つたものである。なほ註釋書ではないが、北齋の畫いた「繪本庭訓往來」がある。

（石川（謙）・岩淵）

【參考】中世に於ける社寺と社會との關係（平泉澄）○消息科往來物より見たる教科書觀念の發達（石川謙（教育思潮研究三ノ二））

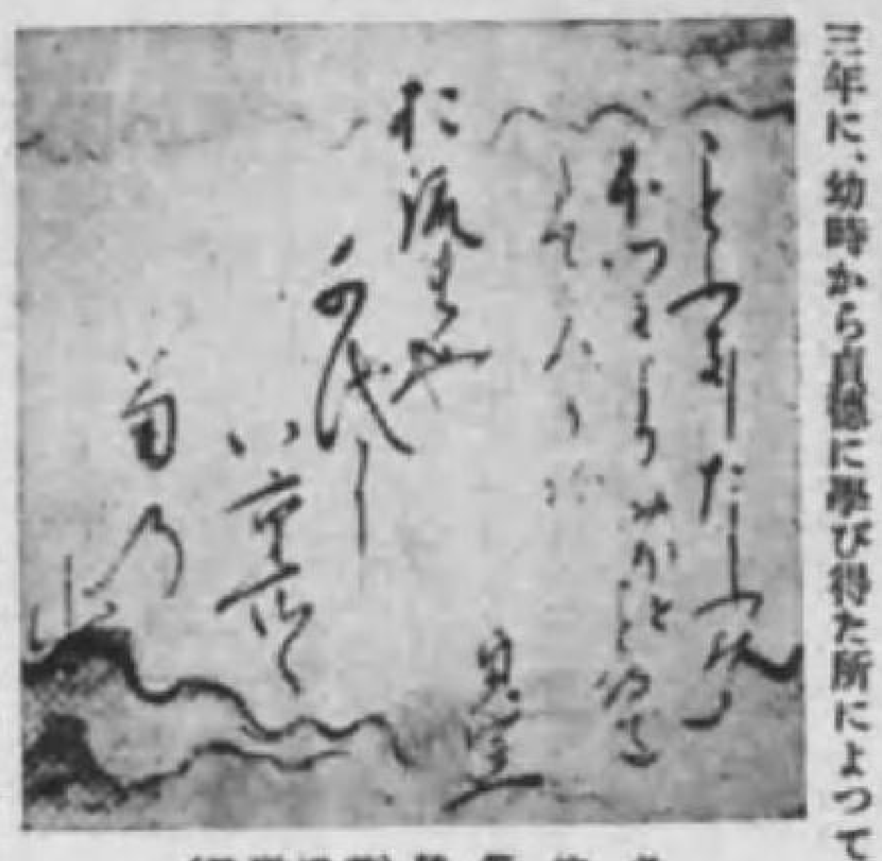
帝國文學 ていこくぶんがく　雜誌　【刊行】明治二十八年一月創刊。以後繼續として二十餘年の歷史を築いたが、大正六・七年の交、蘇武緑郎の編輯時代に及んで、蘇武の不德義問題から本誌も何時か有耶無耶に廢刊して了つた。【解說】帝國文學會の發起人は、文學博士井上哲次郎、文學士上田萬年・三上參次・高津鍬三郎・芳賀矢一、文科大學々生藤井乙男・高山林次郎・姉崎正治・島文次郎・岡田正美・內海弘藏・上田敏の十二名で、編輯委員は何れも文科大學々生の藤井乙男・狩野直喜・高山林次郎・島文次郎・岡田正美・內海弘藏・上田敏の七人から成り、會員は當時の文科大學關係の敎職員、學生の殆ど總てを網羅してゐた。會則の第十六條には、「雜誌に掲載すべき事項を定限すること左の如し」として、論說（文學・語學・美學上の議論、古今文學者の評論、古今詩歌・文章・小說・戲曲の評論等）・詞藻（詩歌・文章・小說等）・雜錄（內外文學論の敍述・翻譯等）・文學史料（本邦文學者の傳記・逸話、文學史上の考證、古書の解題）・雜報（內外文學上の彙報、並に新著の批評）の順序を以て編輯發表してゐた。本誌が內容的に文壇との最も交涉の在つたのは、高山樗牛の編輯時代であつたが、樗牛は間もなく「太陽」（別項）に去つた。土井晚翠の新體詩、夏目漱石の「倫敦塔」その他の作品も本誌上を飾つた一部であつた。

（豐田（昌））



帝國文學（創刊號）

貞室 ていしつ　俳人　【姓名】安原氏。名は正章（まさあきら）。通稱鍋屋彥左衞門【號】一嚢子・一嚢軒・貞室（初發養の號）・腐瑚子（この號を重頼の號とするものあるは誤である。「貞德誹諧記」「氷室守」その他によつて貞室の號であることは確かである）。【墓所】京都上鳥羽實相寺。墓面には一嚢軒貞室。【生歿】慶長十五年生れ、延寶元年（二三三三）二月七日歿（「俳家奇人談」に據る。「花見車」に寬文十一年、「誹諧家譜」に延寶二年とするは共に誤であらう）。享年六十四【辭世】今までは目見えせねども主人公八八といひし年もあきけり【師傳】松永貞德門【閱歷】京都の人で、紙商であつた（類船物序）。貞室の家は彼の幼時から貞德と知合ひで、彼は十六歲の時から貞德に就いて學び、十九歲から俳諧を始めた。その門人としては若輩の方であつたにも拘らず、その俳才を認められてか貞德に愛せられ、これ等の關係から故參の同門から忌まれる傾きがあつた。寬永十九年二月二十日、貞室が母妙宥禪尼の二十五回忌に當るので追善の獨吟百韻を賦し、これに自註を施して出版したのが「俳諧之註」（別項）であり、豫て不和の間柄であつた重頼（しげより）（別項）が、これを僭慢であるとして非難書を出版し、貞室亦その返答書を出版して反駁した（この二書は現存しないやうであるが、重頼の非難書は或は後に引く「闘諍」であるかも知れぬ）。これが俳諧史上に於ける論戰の嚆矢である。然るに重頼が正保二年二月、「毛吹草」（別項）を出版するや、當時貞室の門人であつた大和郡山の池田正式（まさのり）が、重頼が同書に句を採るに約に違ふ所があつたので、翌三年春、「郡山」を出版して同書を非難し、貞室亦直にこれに續いて「氷室守」を出版して同書を難じた。これは貞室が重頼の前の非難に含む所があつて、正式と共同作戰に出でたものらしい。又貞室は貞德に判詞を乞うた「正章千句」（別項）を慶安元年に出版したが、貞德歿後の寬文三年八月に至つて、同門の故參の一人棕栗一雪が、「誹諧茶杓竹」を出版してこれを非難し、貞室の方は門人貞恕（別項）の名で、翌四年六月「蠅打」を出版して反駁した。慶安四年八月、貞德は貞室に點業を許し、その翌々年に歿したのであるが、貞室はその翌年の歲旦三ツ物で、これを俳統相續者とされたものの如く吹聽してゐるけれども、「馬鹿集追加」（明曆二年刊）に引く「獨言」にも、これを「誠にゆるされもなきを僞て申せし事なれば」と云つてゐるが如く、貞室の虛構らしく、又貞德が花の本（別項）を許され、貞室がその二世を繼いだ如く傳へられるが、二人共に花の本となつた確證がない。貞室は慶安三年に、幼時から貞德に學び得た所によつて、一子元矢の片言を矯正する意味で「かた言」を著し、貞德の歿時には終焉記を記し、貞德歿後その遺書「玉海集」（別項）を追補出版した。屢々旅行し、一とせ吉野に遊んでの吟「これはこれはとばかり花のよしの山」は、後世に喧稱され、東に下つては所々に吟詠があり、隅田川では「いざのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥」の吟を遺し、又須磨に遊んでは、行平の月見の松で「松にすめ月も三五夜中納言」の吟があつた。但し若輩の昔、加賀山中溫泉に下り、風雅に辱しめられて、歸洛後貞德の門に入つたとの傳へは（奧の細道）、俳歷に合はないので何か誤りがあるらしい。或る年の秋、女院から召された時、探幽筆の曙の山水の襖を拜領し來り、「曙の紅葉しづけし秋の山」を發句に、曙の餘り、獨吟百韻を賦したが、この事實及び發句共に後世に喧傳されてゐる。狂歌をも詠み、又平家琵琶はその好む所であつた。晚年その筆蹟を燒き捨てたとも傳へられる。【著作】俳諧之註（別項）（註記に「俳諧百韻之抄」。別名「百韻自註」）○氷室守四册（正保三年刊）○正章千句（別項）○かた言五册（慶安三年刊）○貞德終焉記一册（承應二年成）○玉海集（ぎょくかい）（別項）○同追加（別項）○附合大全（德田是誠の「玉くしげ」に見える）○五條百句一册（寬文三年刊。貞室の著と疑へるが不詳）。


貞室筆蹟（眞鍋所藏）

【人物・作風】「貞德永代記」に「生れ付一物有て、諸道に器量風流を好めり。文才も達者にて、古事來歷をよく覺て、誹諧一方ノ大將といはれし」と云つてゐるが、一種の才物であつたらしく、早くから貞德に學んだので、學識も博かつたことは、その作や、特に「かた言」によつて窺はれる。「かた言」の如きは方言訛音の研究書として嚆矢と云ふべきものであらう。併し又故參の同門と合はず、重頼との間に前述の論爭の外、揶揄の句の應酬された事實も傳へられ（貞德永代記）、貞德の歿した翌年の歲旦に三ツ物を出して憚らず、而もそれは俳統相續者となつたと虛構するためのものであつたらしく、もと門人であつた季吟（別項）と後に不和となつた點などから見て、不遜又不信の性癖もあつたかに思はれる。文學的素質は優れてゐたらしく、その作は、貞門中でも出色のもので、蕉風に近い一面さへある。それ故蕉風では頗る重んぜられ、芭蕉がその紀行中屢々彼に關心すると共に「これはこれは」の句を推重し「曠野」に「これはこれは」の句外三句採られ、其角・去來・許六・支考いづれも先達視し、「正風論」の如きは、貞門中「貞室一人正風體を探り當てて、姿情の二つに心付けるにや」と云ひ、「古選」も亦ほぼ同樣の見所に立つなど、依然高く評價されてゐる。

（志田）

【參考】○貞德永代記（中島隨流）○句兄弟（寶井其角）○類柑子（同上）○花實集（向井去來）○歷代滑稽傳（森川許六）○俳諧十論（各務支考）○滑稽太平記（北藤浮生）○綾錦（菊岡沾涼）○正風論（加藤原松）○誹諧家譜（早川丈石）○獺隨筆（岡田米仲）○俳諧古選（三宅嘯山）○俳諧水滸傳（空阿）○俳諧袋（大伴大江丸）○俳家奇人談（竹內玄々一）○誹家大系圖（生川春明）○俳人百家撰（緑亭川柳）○俳林小傳（中村光久）○聽蛙亭雜筆（木村架空）二編○俳諧論戰史（潁原退藏（國語國文の研究昭和四ノ八・一〇・一一））○花の本と貞室及び宮廷俳諧（靑風（黃鳩昭和六ノ一〇））○馬鹿集（櫻井武影（懸葵昭和七ノ七・八））

亭主 ていしゅ　脚本　一幕　【作者】小山內薰【發表】大正十四年五月「新小說」臨時增刊「天才泉鏡花」號。【刊行】小山內薰全集第三卷・日本戲曲全集第四十卷に所收【初演】大正十四年九月、新橋演舞場。

【役割】三吉（尾上菊五郎）、源次（坂東彥三郎）、源次の女房お縁（尾上多賀之丞）等。

【梗概】舞臺は震災後の吉原附近のバラック、初夏の夕暮から夜。三四疊ほどの狹い小屋に汚い薄緣が二枚だけ敷いてある。お縁がマニラ麻をつないでゐる傍で娘のお君が算術の復習をしてゐたが、電燈が點ると共に辻占賣に出かける。同居人の自由勞働者三吉が、今日の稼ぎを持つて歸つて來て屋根代と賄料と一合の酒代を渡すので、お縁はすぐ用達しに出て行く。熊谷に行つてゐる源次からの葉書が來る。お鉢を質から出し、酒と油揚を買つてお縁は戾つて來るが、久し振りに二人で酒を飲み合ひながら、お縁は三・四月家をあけて一文も送金しない亭主の惡口を始める。三吉も戲談半分に、ぢやあおれとでも一緒になるかと云つたが、だがそれはおれの方でお斷りだと笑ふ。そこへ、仕事にあぶれた源次が突然歸つて來て、いきなり二人の間の膳を蹴返して、ふざけた眞似をするなと怒鳴り出す。三吉が抗辯して組打ちになると、お縁は三吉に加勢して源次をなぐつた揚句、たうとう源次を表へ引きずり出して了ふ。その後で、改めて三吉に亭主になつてくれと云ふと、三吉は俺だつて何時仕事がなくなるかわからないからいやだと斷る。これから源次を追つかけて明日區役所の仕事に一緒に連れて行つてやらうと荷物を纏めて行きかける。お縁が男つて變なものだねえといふのに、變なものだよと答へて出て行つて了ふ。お縁が暫くぼんやり考へこんでゐるところへお君が歸つて來て飯を食ひ初める。その樣子を見てゐるうちにお縁は次第に賴りなさに襲はれて、遂にわつと泣き出す。

【批評】夫婦といふ關係に唯物史觀的な銳いメスを入れた戲曲である。而も概念に墮することがないと同時に、徒らな感傷をも交へず、寫實的な手法と簡潔な臺詞とでぐいぐい生活の底を抉つて見せてゐる。震災後のバラック生活を捉へて來て、夫婦間の經濟關係を端的に描いて強い感銘を與へてゐる。彼の遺作中屈指の佳作に數へらるべき作である。

（水木）

程朱學派 ていしゅがくは　「漢學」を見よ。

貞恕 ていじょ　俳人　【姓名】犬井（乾とも）重

夾。通稱三郎兵衞（寛山卷）【號】一囊軒・貞恕（判鑑卷）【生歿】元和六年生れ、元祿十五年（一三六二）三月四日歿（「誹諧家譜」に寶永二年とあれど、「誹家大系圖」に元祿十五年と正してゐるのに從ふ）。享年八十三（「誹諧家譜」以來七十歲とするものあれど「貞德永代記」に「七十の老傳」とあり、貞恕自身の書簡に「八十に候故」とあるものがあるから、元祿十五年の「花見車」の說に從ふ）。【墓所】京都上鳥羽實相寺、墓面に一囊軒貞恕居士【師傳】安原貞室門【閲歷】京都東洞院通四條上ル町に住した（「誹諧京羽二重」）。もと越前敦賀の人であるが（天寧卷）、明曆二年以後、近江大津に寓居し、寛文三年椋梨一雪が「誹諧茶杓竹」を出版して貞室の「正章千句」を非難するや、翌年「蠅打」を出版してこれを反駁した。大凡その頃、「いまだ嬉くはのびじ蔣人」といふ前句に「道ばたにいきりこそたて馬の糞」といふ句を附けたので、大津の馬の糞といふ異名を取るに至つた。しかし貞室の門人中では勝れた方であつたので、その俳統相續者とされた（「貞德永代記」）。これを貞德・貞室に繼いで、花の本三世を嗣いだ如く傳へるが、花の本を允された事實が貞德になく、從つて花の本繼承とする事は誤傳らしい。貞恕は學識も相當にあつて俳書の外に「謠曲拾葉抄」を著作した。完成に至らず、死に臨んで門人忍鎧に遺囑し、忍鎧によつて完成されたけれども、その如何に努力したかは、同抄の凡例及び木畑定直宛書簡（江戸文學叢說）によつて窺はれる。【著作】蠅打五冊（寛文四年刊）○阿太知千句一冊○新玉海集七冊（延寶七年刊）○謠曲拾葉抄二十卷（寛保元年成）。

【作風】「貞德永代記」に、「誹諧京羽二重」に擧げられた「水草にいきた花とぶ螢かな」の句を評して、「古風の石部金吉也。それ故一句はよくきこへたり。然れども生た花とぶの誹諧わかわかしく位なし。いはば老て二度見に成たるがごとし」と云つてゐる。潁原退藏氏紹介の同時頃の書簡で見ても、この評は大體當つてゐる。「花見車」に擧げてゐる代表句も、「にくからぬ人の正月こと葉哉」といふ句である。才分に於て師貞室に劣り、蕉風の全盛期を過ぎながら遂に古風を脫しなかつた人らしい。

【參考】貞德永代記 中島隨流 ○歷代滑稽傳 森川許六 ○誹諧家譜 早川丈石 ○續俳家奇人談 竹內玄々一 ○誹家大系圖 生川春明 ○俳人百家撰 水谷川柳 ○俳林小傳 中村光久 ○江戸文學叢說 藤井乙男 ○貞直と貞恕 潁原退藏（俳諧子昭和六ノ二）

（志田）

庭鐘 ていしよう 「近路行者」を見よ。

貞丈 ていぢやう 「さだたけ」を見よ。

貞丈雜記 ていぢやうざつき 有職故實 十六卷三十二冊【著者】伊勢貞丈【刊行】天保十四年【成立・由來】寶曆十三年正月十一日より書き起し、その死に至るまで二十二年間書き續けたもので、爾來草稿のまゝ保存され、時に門人間に傳寫される位のことに過ぎなかつたが、歿後六十年を經て、岡田光大が千賀春城よりこの書を傳へ、貞丈の玄孫貞友の許可を得て貞丈親寫本と校合し、天保十四年伊勢貞友、門人千賀春城・岡田光大の三人が、同校として刊行した。同年六月の貞友の序及び光大の序がよくその間の事情を盡してゐる。その光大の序の中に引いてある貞丈の奥書に、「此雜記は子孫が家傳の古書を見る便にもなれかし、又人に故實問はれたらん時に返答のたすけにもなれかしと書あつめ置なり」とあつて、この雜記を書き續けた一つの目的がこゝにあつたことを知ることが出來る。【諸本】天保十四年板の外に弘化三年板があるが、版式その他全然同じものである。故實叢書所收。

【內容】本書は、武家故實を明かにする事を主目的として一般の有職故實に關する事を網羅し、部類を分つて記したもので、

（卷一）禮法之部・祝儀之部。（卷二）人品之部・人物之部・人名之部。（卷三）小袖之部・烏帽子之部。（卷四）役名之部・官位之部。（卷五）裝束之部。（卷六）飮食之部。（卷七）膳部之部・酒盃之部・輿之部。（卷八）調度之部。（卷九）書札之部・進物之部。（卷十）弓矢之部。（卷十一）武具之部。（卷十二）刀劒之部・武藝之部。（卷十三）馬之部・馬具之部。（卷十四）家作之部・座敷飾之部・紙類之部・皮類之部。（卷十五）鳥目之部・鷹之部・物數之部・言語之部。（卷十六）神佛之部・喪禮之部・凶事之部・雜事之部・書籍之部。

以上通計十六卷三十六部二千三百五十項から成り、一々考證解說を施し、時には圖解をも施してある。岡田光大の序に引いてある貞丈の奥書の中に、「所々に頭書を加へたるはあとより追々に書入し也。子孫もし清書しうつし改めば、頭書をも本文の中にかき入るべし」又、「一事を所々に記置く事多し。其類をよせあつめて、一所にかきつらぬべし」とあるが、光大の序の中には、「一事を所々に記され、又は種々に書入どもありて見るに便ならず。故に部類をあつめ、少しく補正をもくはへて書改ぬ。頭書に至りては悉く本文に直し入ることあたはず。いかにとなれば追考の說なる故、其まゝ頭書にあるかた解し安きが故なり」とあつて、現在の雜記は貞丈生前の志のまゝでもなく、又遺稿のまゝでもなく、多少の改削を加へなどして校訂者岡田光大の意志がかなり多く加はつてゐる。卽ち小袖之部赤鳥の條には榊原長俊の赤鳥考を、武具之部靭の條には貞丈の靭考を拔萃補入し、裝束之部行騰の條には犬追物圖說の圖を挿入し、馬具之部五六掛鐙の條では、この雜記に載せてある考は貞丈がまだ正說を得なかつた以前の推量說であるからとて、これを削つて、貞丈著「五六掛鐙考」の全文を揭げ、弓矢之部蟇目の條では、その圖が縮圖で解し難いからとて更に二圖を挿入し、武具之部母衣の條では、貞丈の家に傳はつた保侶の制を書いたものを引いたりして、中にも武具之部いか物作りの太刀の條などでは、頭書に貞丈の說を否定して自說を述べさへもし、馬之部では庭乘之事、四本懸りの乘り樣の事の二項を挿入してゐる。尤もこれ等の條々には、「光大曰」「光大補入」とあり、又その旨が特別に記してある。又貞丈の祖先が代々室町幕府に仕へて殿中の禮儀作法を掌つてゐたので、假令その家の記錄が應仁以降の戰亂に多く失はれたとしても、なほその後の記錄を傳へてゐたので、この雜記に載する所は、主として貞丈の家の流である伊勢流の禮法を祖述したものだといつても差支あるまい。【價値】貞丈の考說は、その數夥しい上にその取扱つた範圍が廣く、その記述も多端で自ら重複出入して、これが一般を知るのは困難であるが、本書はこれ等考說の大要を網羅し分類し系統を立てて、貞丈の學說を窺ふには最も便利で且つ十分なものがある。その專門とする武家故實に關するものは勿論、その他有職故實に關する一般的知識に於ても一應は悉記されてあつて、單に初學者に益あるばかりでなく、更に深く進まうとする人にも、頗る暗示的な點があり、苟も有職故實に就いて考へる人は、必ず先づ第一にこの書を繙いて見るの要がある程のものである。【史的地位】有職故實を說く書が、そのいづれも官職とか甲冑とか、多くその一局部に止まつてゐた際に、一切を網羅し部類を立てて斯學の範圍を指示したといふ點に於て、この書は前後兩代に明白に一線を劃したもので、後人が一般にこの書を權威として、有職故實の疑義をこれに依つて定めんとするのも理由のあることである。

【參考】貞丈雜記辨考（故實叢書貞丈雜記附錄）

（石村）

貞信公記 ていしんこうき 日記 十一冊【著者】藤原忠平（貞信公）【諸本】原本は九條家に所藏せられ、これを謄寫した修史局本、又內閣文庫本がある。續々群書類從（第五）本は、內閣本を底本として、修史局本で校訂したものである。【解說】本記は殘闕で、今なほ存するものは、卷一延喜七年から十年まで、卷二延喜十一年から十四年まで、卷三延喜十八年から二十年まで、卷四延長二・三年、卷五延長四・五年、卷六延長九年から承平二年まで、卷七承平八年、卷八天慶二・三年、卷九天慶八年、卷十天慶九年、卷十一天慶十年・天曆二年の日錄で、前後凡そ二十四年に亙つてゐる。唯その記事が簡單な上に、文字の誤脫も多いので、頗る讀み難いが、他書に載せてない記事があるので重んぜられてゐる。星野恒博士は、「扶桑略記」「日本紀略」等は、皆この書を以て藍本としたもので、「略記」の方は直に原文を引用してゐるので誤がなく、「紀略」の方はやゝ修飾が加へてあるために、却つて錯誤に陷つてゐる所がある事を指摘されてゐる。

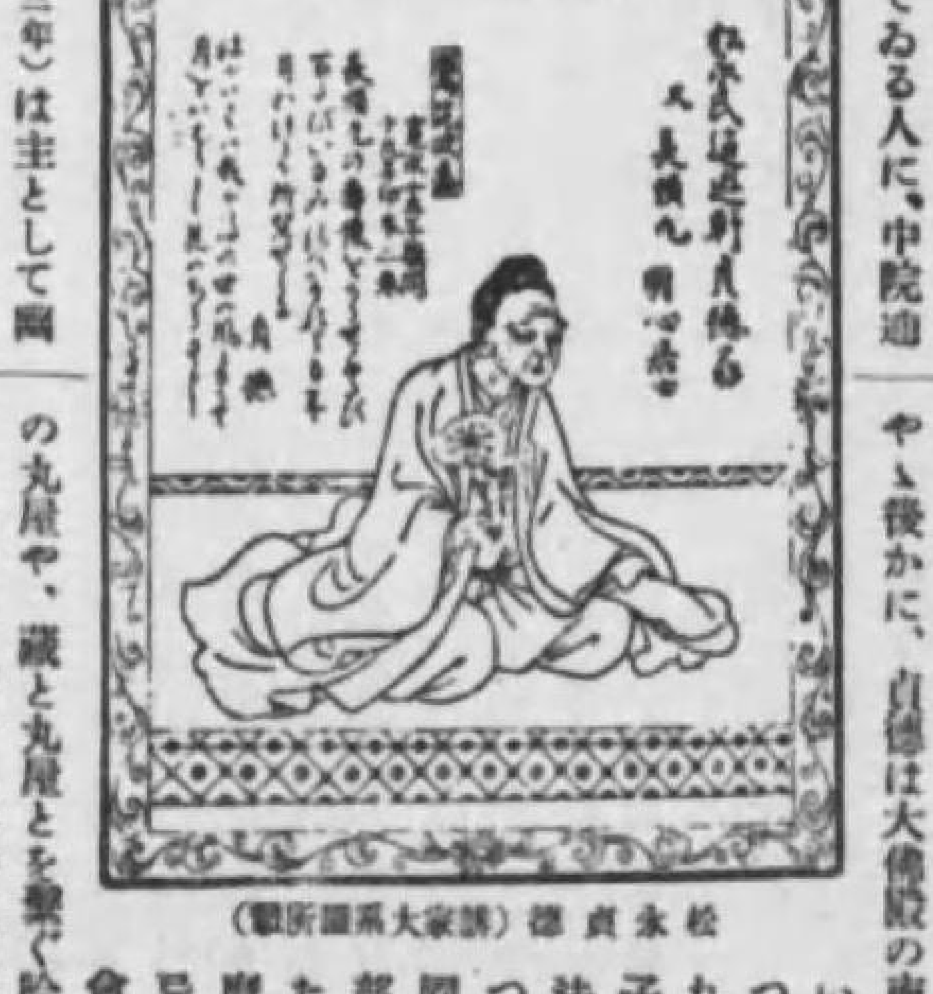
【參考】歷世記錄考 星野恒（史學叢說第一集）

（石村）

提醒紀談 ていせいきだん 隨筆 五卷【著者】山崎美成【刊行】嘉永三年【解說】主として江戸開府以來の、武士・文人の嘉言善行や奇事異聞、さては見聞談等、その他何くれとなく書き集めた興味本位の漫錄である。中には怪談鬼話も交つてゐる。佐竹永海筆の挿畫が興を添へてゐる。嘉永三年朧弘道（鷲江）の序がある。

（和田）

貞德 ていとく 俳人・和學者【姓名】松永氏。幼名、勝熊【號】逍遊軒・長頭丸・延陀丸・保童坊・松友・明心居士（翁十號）。また五條の翁・花咲の翁とも云はれるが、これは晚年五條稻荷町の花咲の宿と稱せられる家に住んだからである。【生歿】元龜二年京に生れ、承應二年（一二三一一三）十一月十五日歿。享年八十三。【辭世】露の命きゆる衣の玉くしげふたゝびうけぬ御法ならなむ【墓所】洛南上鳥羽實相寺。墓面に逍遊軒貞德居士とある。【家系】曾祖父入江九郎盛重は攝州高槻城主で、その先は駿州入江郡の住であつたといふ。祖父は入江五郎（九郎兵衞）政重、父は永種。永種が姓を松永と改めた。永種は幼にして聰穎、七歲の時東福寺の喝食となり、二十日にして法華經一部を讀み覺え、文殊喝食と稱せられた。併し後に還俗した。連歌を宗養（別項）に學び、紹巴（別項）とは同友であり、安法法師等連歌の門人もあつた。又由己法橋とは相國寺仁如和尙の下で同學した親友であり、九條玖山公等の知遇も得てゐた。貞德の生れる時、「をのこ子の懷かき流すあくた川」といふ夢想の句を得、貞德が十二歲の時、玖山公から「源氏物語」の祕事を拜傳した時、永種が上京妙蓮寺でその竟宴を催し、玖山公の「花に猶道分けそへん行衞哉」を發句、聯旛の「春は霞にひかれぬる袖」を脇とする連歌があつた。松永彈正久秀の姉妹の誰かが政重の妻であるので、永種の改姓はそれに關聯するものらしく、又政重の姉妹の誰かが下冷泉爲豐の妻であるので、爲豐の子の爲純と永種とは從兄弟に當り、久秀の松永家及び下冷泉家（爲純の子は惺窩である）と貞德の松永家とはかゝる關係を持つてゐる。【學統】貞德自身その「戴恩記」に「師の數五十餘人」と云つてゐるが、これは所謂一字の師をも數へてである。特に師承の深い關係は、玖山公九條稙通・玄旨細川幽齋から和學・和歌を學び、里村紹巴から連歌を學んだことである。この外、彼の擧げてゐる人に、中院通勝・菊亭晴季・飛鳥井雅綱・同雅敦・清水宗我・古田織部・安法法師等がある。【閲歷】幼時から永種の庭訓を受けた譯であるが、天正十年十二歲の時玖山公から源氏の祕事を拜傳したなどから見ると、やはり父に似て早熟聰穎の人であつたらしい。かくて、玖山公に和學・和歌を學び、同公薨後（文祿三年）は主として幽齋に就き、幽齋の行く先々までも附いて步いたりして學び、最も知遇を得た。又紹巴からは頗る愛せられ、月次の連歌會に連れられ、一かどある晴れの會には、必ず連衆に加へられ、執筆などもさせられたりした。その他、彼は此の堂上家その他から和學・和歌・連歌を學んだので、廣く和學者たる風格を持つてゐるが、就中、貞門（別項）の俳諧の鼻祖としてより多く知られてゐる。卽ち和學・和歌の研究家・註釋家でもあれば、歌人・狂歌作者でもあり、連歌作者・俳人でもあつたのである。家は、父の永種以來、三條衣の棚に住んでゐたが、正保三年（貞德七十六歲）五條稻荷町の花咲の宿へ移つた。彼が衣の棚の家で「徒然草」を講じてゐた時、その聽講者の一人の或る富豪が謝禮として花咲の地を提供したと云ふが、この地に稻荷社の跡があり、その神託によつてこの地が昔花咲と云つたらしい事を知り、地內に稻荷祠を建てて花咲の稻荷と云ひ、家をも花咲の宿と云ふに至つたのである、又大凡この頃かやゝ後かに、貞德は大佛殿の南の地に柿園といふ別莊地を持つに至つた。これは歌道の御弟子の妙法院堯然法親王から賜はつたのであるが園內に法華經千部を刷つて納めた和泉藏や、人麿・定家・幽齋の忌日の和歌會の會所に當てた藏の丸屋や、藏と丸屋とを繋ぐ吟花廊などを建てたのである。なほ年時は判然せぬが、貞德は晚年に眼病を煩ひ祈禱の和歌會が催されたりしてゐるが、眼病は平癒してゐる（逍遊集）。貞德の老後、失明を傳へる說は誤傳らしい。兎に角貞德は、老年に至るほど相當富裕な生活をし、幾人かの小姓をも使つてゐた。さて貞德は初めは和學・和歌・連歌等の方が主で、その俳諧上の活動は比較的後れてゐる。貞門の作に關する年時の知られる最も早い時が貞德の四十歲頃である。貞德五十九歲の寛永六


松永氏逍遊軒貞德
又長頭丸
明心居士

松永貞德（誹家大系圖所載）